

下平塚蕪木台遺跡 2

葛城一体型特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成 24 年 3 月

独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部
茨城地域事業本部
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第363集

しもひらつかかぶきだい
下平塚蕪木台遺跡 2

葛城一体型特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成 24 年 3 月

独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部
茨城地域事業本部
財団法人茨城県教育財団



大形住居跡とともに整然と配された掘立柱建物跡（調査区中央部）



出土遺物集合

序

茨城県では、つくば市を日本における科学技術の研究開発の中核として、さらに国際交流の拠点としてふさわしい街にすべく整備を進めております。

この新しい街づくりの一環として、つくば市と独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部は市と首都圏を直結する「つくばエクスプレス」の沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である下平塚蕪木台遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部から開発区域内における埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け、平成18・19・21・22年度にこれを実施しました。平成18・19年度の調査成果は既に当財団の『文化財調査報告』第326集で刊行しているところであります。

本書は、第326集に続き、下平塚蕪木台遺跡の平成21・22年度の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成24年 3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社（現独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部）の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成 21・22 年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字下平塚字蕪木 886 番地の 2 ほか^{しもひらつかかぶき だい}に所在する下平塚蕪木台遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成 21 年 11 月 1 日～平成 22 年 6 月 30 日
整理 平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。
平成 21 年度
首席調査員兼班長 白田正子
首席調査員 皆川 修
調査員 近江屋成陽
平成 22 年度
首席調査員兼班長 皆川 修
主任調査員 齋藤貴史
調査員 鹿島直樹
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、以下の者が担当した。
首席調査員 小林和彦 平成 23 年 4 月 1 日～5 月 31 日
主任調査員 齋藤貴史 平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日
- 5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。
小林和彦 第 1 章～第 3 章第 2 節，第 3 節 1，2(3)・(4)
齋藤貴史 概要，第 3 章第 3 節 2(1)・(2)，3(1)～第 4 節
- 6 本書の作成にあたり、第 2 号鍛冶工房跡及び第 251 号土坑から出土した鍛冶関連遺物の分類については、たたら研究会委員・製鉄遺跡研究会代表穴澤義功氏に御指導いただいた。当遺跡内から出土した鉄製品の保存処理等については、筑波大学准教授松井敏也氏に御協力，御指導いただいた。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 10,440 \text{ m}$ 、 $Y = + 23,160 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3…とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」、「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット PG - ピット群 SA - 柱列跡 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡 SE - 井戸跡
SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑 TP - 陥し穴
遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 T - 瓦 TP - 拓本記録土器 Y - 炉壁
土層 K - 攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・施釉・鍛冶炉		炉床・火床面								
	竈部材・炭化物・粘土・黒色処理・漆		柱痕跡・柱あたり・油煙								
●	土器	○	土製品	□	石器・石製品	△	金属製品	■	瓦	☆	炉壁
-----	硬化面	---	焼土・炭化物・粘土の範囲								

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 現存値は () を、推定値は [] を付して示した。計測値の単位は m, cm, kg, g で示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(4) 磁着度の欄は、磁着の弱い順に 1, 2, 3 … と記した。

(5) メタル度の欄は、メタル度の高い順に特 L (☆), L (●), M (◎), H (○), 銹化 (△), なし、と記した。

6 竪穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

目 次

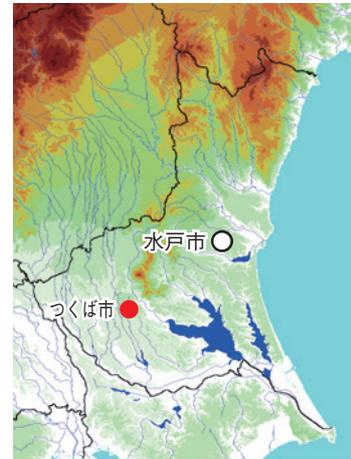
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査経過	6
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の成果	13
第1節 調査の概要	13
第2節 基本層序	13
第3節 遺構と遺物	14
1 縄文時代の遺構と遺物	14
(1) 竪穴住居跡	14
(2) 陥し穴	15
(3) 土坑	16
2 奈良時代の遺構と遺物	17
(1) 竪穴住居跡	17
(2) 掘立柱建物跡	78
(3) 溝跡	95
(4) 土坑	96
3 平安時代の遺構と遺物	110
(1) 竪穴住居跡	110
(2) 掘立柱建物跡	212
(3) 鍛冶工房跡	218
(4) 土坑	224
4 中世の遺構と遺物	228
(1) 溝跡	228
(2) 井戸跡	230

5	その他の遺構と遺物	231
(1)	掘立柱建物跡	231
(2)	柱列跡	240
(3)	溝跡	242
(4)	土坑	245
(5)	ピット群	252
(6)	遺構外出土遺物	266
第4節	まとめ	268
写真図版		PL 1～PL52
抄録		
付図		

しもひらつかかぶきだい 下平塚蕪木台遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

下平塚蕪木台遺跡は、つくば市の中央部に位置し、^{はす}蓮沼川^{ぬまがわ}右岸の標高 24 m ほどの台地上に立地しています。今回の調査は、つくばエクスプレス沿線開発関連の土地区画整理事業に先立って行いました。この事業地内に当遺跡があることから、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するために、^{いばらきけんきょういくざいだん}茨城県教育財団が平成 21・22 年度に約 3,800㎡について発掘調査を実施しました。



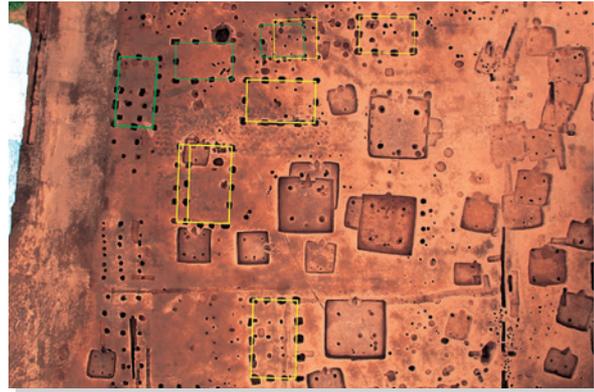
調査の内容

今回の調査区は、当遺跡全体から見ると東部の一部分にあたります。調査の結果、^{じょうもん}縄文時代、^{なら}奈良・^{へいあん}平安時代、^{ちゅうせい}中世・^{きんせい}近世の遺構や遺物を確認し、断続的ではあるが長期間にわたる土地利用の状況が明らかになりました。ここでは、遺跡の中心的な時代となる奈良時代と平安時代の集落跡の概要を紹介します。



調査区遠景

奈良時代（約 1,300 年前）になると律令制の成立とともに、当地域にも人々が移り住むようになり、^{たてあなじゅう} 竪穴住居跡 21 軒、^{ほったてばしらたてものあと} 掘立柱建物跡 10 棟、^{おおがたえんけい どうこう} 大形円形土坑 1 基などが確認できました。一辺 6～7 m の大形住居跡は 5 軒を数え、^{かまど} 竈を通る軸線はいずれも北方^{けたゆき} 向に統一されています。また、桁行が 4 間以上の掘立柱建物跡は、これら大形住居と桁行方向が平行あるいは直交するように配置され、「大形住居 + 大形掘立柱建物」を中心に、計画的に作られた集落の様子が分かります。



大形住居跡とともに整然と配された掘立柱建物跡群（中央部）



<第 171 号住居跡>

一辺が 7 m を超える大形住居跡で、当遺跡の中で最も大きいものです。規模や出土遺物から有力者層の居宅と考えられます。



第 171 号住居跡から^{すきさき} 鋤先などの鉄器が出土しました。鋤先は、鋤の先につけるものです。刃先が痛むと簡単に取り替えることができます。鉄製なので固い土でも掘ったり削ったりできるため、作業効率が向上しました。



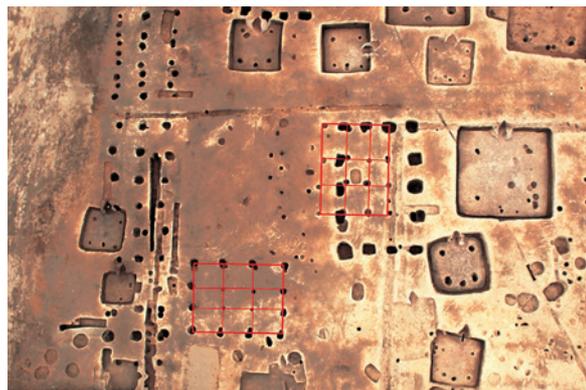
住居跡から^{かま} 鋤先や^{とうす} 鎌、^{のみ} 刀子や^{ぼうすいしゃ} 鑿、紡錘車などの鉄器が多数出土しました。これらを使って、当遺跡の東側に位置する蓮沼川流域の開墾にあたったものと考えられます。



<第 50 号掘立柱建物跡>

4 間 × 3 間の^{がわばしらたてものあと} 側柱建物跡で、床面積 46m² の大形建物です。

平安時代（約 1,200 ～ 1,000 年前）になると集落が拡大していき，^{かじ} 竪穴住居跡 46 軒，^{かじ} 掘立柱建物跡 4 棟，^{かじ} 鍛冶^{こうぼうあと} 工房跡 1 基などが確認できました。



規則的に配された掘立柱建物跡と小形住居跡（南西部）

9 世紀には，住居跡が増加しますが，大形住居は見られなくなり，一辺 3 ～ 4 m の住居が主体で全体的に小形

化し，「中形住居 1 軒 + 小形住居数軒」で構成された小集団が見られます。9 世紀の後半には，3 間 × 3 間の^{そうばしらたてもものあと} 総柱建物跡 2 棟が確認され，いずれも倉庫として機能していました。南西部では，「掘立柱建物 + 小形住居」で構成された小集団が見られ，当地は物資の収蔵域へと変わっていく様子が分かります。

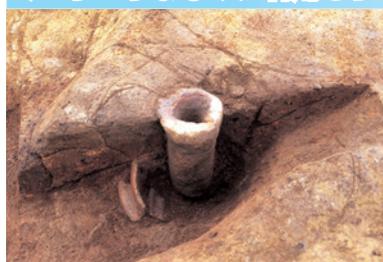


3 軒が重なり合う住居跡



住居跡から出土した土師器や須恵器

<いろいろなものが利用された支脚>



第 184 号住居跡「^{はぐち}羽口」



第 183 号住居跡「土器片」



第 178 号住居跡「石 + 土器片」

10 世紀には住居が減少しますが，新たに鍛冶工房跡が確認できました。出土した^{わんがた かじさい たんぞうはくへん} 椀形鍛冶滓や鍛造剥片，^{かじかんれんいぶつ} 羽口など鍛冶関連遺物の規模や形状から，当工房では^{せいれん} 精錬段階から^{たんれん} 鍛錬段階までの工程を行っていたことが分かりました。集落が衰退しても鉄製品づくりが盛んに行われていたことが明らかになりました。



第2号鍛冶工房跡



炉跡土層断面



<鍛冶炉完掘状況>

鍛冶炉の底面をよく見ると、赤く焼け、中央部は還元により青灰色化しているのが分かります。特に西部（画面右側）がよく焼けていることから、西側に羽口が据えられていたと思われます。炉床の様子から当工房は、長期間操業されていたものと考えられます。



工房跡からは、多量の鍛冶関連遺物が出土しました。椀形鍛冶滓は大形のものから小形のものまで見られます。



鍛冶工房跡から出土した
灰釉陶器浄瓶

集落内に仏教思想が浸透していたことを物語る好資料となります。

調査の結果

当遺跡は、奈良時代から本格的に営まれ、律令体制のもと新たに蓮沼川流域の開発を担った集落であり、今回の調査区である東部の集団が中心となって開発が始まったことが分かりました。また、集落内で農耕具などの鉄製品を製作し、それらを使って未開の地を開墾し、村が拡大していった開発拠点の一つの状況が明らかになりました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

つくば市は、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりを進めている。その一環として取り組んでいるのが、2005年8月に開業した「つくばエクスプレス」沿線の開発である。葛城地区については、平成10年度から事業主体が茨城県から住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に、平成23年7月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に名称を変更）に変更されて、土地区画整理事業を進めている。

平成6年8月18日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、葛城地区土地区画整理事業地内（加吹地区）における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成6・7年度に現地踏査を実施した。また平成9年3月17日、住宅・都市整備公団つくば開発局長は、茨城県教育委員会教育長に対して、葛城一体型特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成10年11月18～20日、12月17日、及び平成17年10月18日に試掘調査を実施し、下平塚蕪木台遺跡の所在を確認した。平成17年11月8日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、事業地内に下平塚蕪木台遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成18年1月31日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社葛城開発事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更による現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成18年2月14日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社葛城開発事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成18年2月24日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は、茨城県教育委員会教育長に対して、葛城一体型特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成18年2月24日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、下平塚蕪木台遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から下平塚蕪木台遺跡埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成18年4月1日から5月31日まで第1次調査を実施した。

平成19年5月18日・21日、8月27日に茨城県教育委員会は下平塚蕪木台遺跡の試掘調査を再度実施した。平成19年5月22日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、事業地内に下平塚蕪木台遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成19年5月23日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は、茨城県教育委員会教育長に対して、葛城一体型特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財の発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成19年5月28日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに下平塚蕪木台遺跡

について、発掘調査の範囲及び面積について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から下平塚蕪木台遺跡埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成19年6月1日から平成20年3月31日まで第2次調査を実施した。

平成20年7月22日に茨城県教育委員会は下平塚蕪木台遺跡の試掘調査を再度実施した。平成20年7月31日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、事業地内に下平塚蕪木台遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成21年2月19日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は、茨城県教育委員会教育長に対して、葛城一体型特定土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成21年3月11日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、下平塚蕪木台遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から下平塚蕪木台遺跡埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成21年11月1日から平成22年3月31日まで第3次調査を実施した。

平成22年3月4日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は、茨城県教育委員会教育長に対して、葛城一体型特定土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年3月4日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、下平塚蕪木台遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から下平塚蕪木台遺跡埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成22年4月1日から6月30日まで第4次調査を実施した。

第2節 調査経過

下平塚蕪木台遺跡の第3・4次調査は、平成21年11月1日から平成22年6月30日までの8か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
調査準備 表土除去 遺構確認	■							
遺構調査		■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 注記 写真整理		■	■	■	■	■	■	■
補足調査 撤収								■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

下平塚蕪木台遺跡は、茨城県つくば市大字下平塚字蕪木 886 番地の 2 ほかに所在している。

つくば市は茨城県の南西部に位置し、東方約 5 km には霞ヶ浦、北端には筑波山がある。当遺跡付近の地勢は、筑波山の南西麓を南下する桜川の低地と、当市の西側を南流する小貝川に挟まれた標高 25 ～ 26 m でほぼ平坦な筑波・稲敷台地からなっている。この台地には、花室川、蓮沼川、東谷田川、西谷田川など中小河川が南流して、台地縁辺部を樹枝状に開析している。そのため、谷津や低地が南北に細長く発達し、北から南に細長く延びる舌状台地が形成されている。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であり、地質的には、新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積している。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上部に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、さらにその上部に関東ローム層が堆積し、最上部は腐植土層となっている¹⁾。関東ローム層は、新期ロームに属し、武蔵野ローム、立川ロームに比定され、軽石層の分布から、富士・箱根火山群の活動に由来するものと考えられる。

当遺跡は、つくば市の中央部、東谷田川と合流して牛久沼へ注ぐ蓮沼川右岸の標高 24 m の台地上に立地している。台地の北側には東側から亜支谷が入り込んでいる。台地と蓮沼川低位面との比高は約 6 m である。

第2節 歴史的環境

下平塚蕪木台遺跡は、縄文時代と古墳・奈良・平安時代の複合遺跡である。ここでは蓮沼川と周辺の花室川・東谷田川・小野川流域における遺跡を中心に、その分布の概要について述べる。

旧石器時代の遺跡数は他の時代と比べて極めて少ない。蓮沼川左岸の^{かりまじんてん}苧間神田遺跡²⁾〈33〉、3 か所の石器集中地点からナイフ形石器、搔器、楔形石器、尖頭器、石核、石刃、剥片などが多数出土した花室川左岸の^{ひがし}東岡中原遺跡³⁾〈26〉、ナイフ形石器や尖頭器が出土した花室川左岸の^{しばさき}柴崎遺跡⁴⁾〈20〉などがみられる程度である。

縄文時代の遺跡は、多数確認されている。蓮沼川右岸では西平塚梨ノ木遺跡⁵⁾〈4〉、蓮沼川左岸では苧間神田遺跡、^{かりまろくじゅうめ}苧間六十目遺跡⁶⁾〈36〉、花室川左岸では、柴崎遺跡(早期～前期、後期)、桜川右岸では^{うえのじんば}上野陣馬遺跡(早期～中期)⁷⁾〈17〉、^{うえのふるやしき}上野古屋敷遺跡(早期～中期)⁸⁾〈19〉、^{かみざかいあびだ}上境旭台貝塚(後期～晩期)、^{なかねなかや}中根中谷津遺跡(後期～晩期)⁹⁾、東谷田川流域では^{さかまる}酒丸遺跡、^{さかまるやかしろ}酒丸八ヶ代遺跡、^{しまなさかまつ}島名境松遺跡、^{やたべふくだ}谷田部福田遺跡、^や谷田部台成井遺跡などが確認されている。

弥生時代の遺跡も少なく、蓮沼川左岸では、苧間神田遺跡、苧間六十目遺跡が確認されているほか、桜川右岸の上野陣馬遺跡と上野古屋敷遺跡では後期の集落跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は多数見られ、集落跡と古墳が確認されている。蓮沼川流域では苧間神田遺跡・苧間六十目遺跡で前期の集落跡が確認されているほか、^{かりま}苧間遺跡〈2〉、^{かなめしゅうじんぼ}要精進場遺跡〈7〉、^{はすぬまやざき}蓮沼矢崎遺跡〈9〉が存在している。花室川流域では柴崎遺跡で後期、東岡中原遺跡で中期から後期にかけての集落跡が確認されているほか、^{しばさきかたおかじょうかん}柴崎片岡上館跡〈22〉、^{しばさきみな}柴崎南遺跡〈24〉がある。桜川右岸では、上野陣馬遺跡と上野古屋敷遺跡で前期から後期の集落跡が確認されているほか、^{くりはらおおやま}栗原大山遺跡〈15〉がある。古墳は、蓮沼川流域では^{かなめなかね}要中根古墳〈10〉、

にしおほしなかうちだいで
西大橋中内台古墳群〈31〉、にしおほしつかやま
西大橋塚山古墳〈32〉、桜川右岸では当地域最大の全長80mの前方後円墳である
うえの てんじんつか うえの ていし くりはらあた こつか くりはらとおかつか
上野天神塚古墳や上野定使古墳群のほか、栗原愛宕塚古墳〈13〉、栗原十日塚古墳〈14〉などが確認されている。
様相が判明している古墳の時期は、いずれも後期である。

奈良・平安時代の当該地は、河内郡菅田郷に属し、北は筑波郡に接している。12世紀には大井庄、さらに田中庄に属していた。菅田郷の郷域は、『新編常陸国誌』によれば、現在のつくば市松塚を東端とし、横町、中根、金田、上野、上境、柴崎、東岡、妻木、さらに花室川を越えて学園都市の中央部である吾妻、天久保を経て、苅間、大橋、新井、柳橋と蓮沼川に沿って南西へ広がり、大白谿、小白谿を西限とした地域に比定している¹⁰⁾。この地域における奈良・平安時代の遺跡は41か所確認されているが、当遺跡が存在する蓮沼川流域における遺跡は希薄で、桜川と花室川に挟まれた中根、金田を中心とする台地上に集中している。すなわち、当遺跡の東約3.5kmに位置し、国指定史跡である金田官衙遺跡（金田西遺跡・金田西坪A遺跡・金田西坪B遺跡）、九重東岡廃寺を中心として、約4km四方に密集している。金田西坪A遺跡は従来から河内郡家の正倉跡と推定されていたが、2002年に金田西・金田西坪B遺跡及び九重東岡廃寺の確認調査を実施したところ、多数の掘立柱建物跡等が確認され、河内郡家の郡庁院、正倉院及び関連建物群であることが明らかになった¹¹⁾。九重東岡廃寺は、礎石、瓦塔、瓦、蔵骨器などが出土しており、確認調査で基壇の一部と溝、堂宇と想定される掘立柱建物跡が検出されているが、寺域や伽藍配置等については不明である¹²⁾。河内郡家の周辺には、西側に隣接し、金田官衙遺跡とほぼ同時期に展開し密接に関係する集落跡と考えられている東岡中原遺跡、北西約2kmにあり160軒以上の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認された柴崎遺跡などが存在している。蓮沼川流域では、左岸に竪穴住居跡41軒、掘立柱建物跡6棟などが確認された苅間六十目遺跡、竪穴住居跡142軒、大形竪穴遺構3基などが確認された苅間神田遺跡のほか、苅間西ノ下遺跡〈34〉、下平塚堂所遺跡〈38〉などが所在している。また、右岸には前回の調査で、竪穴住居跡118軒、掘立柱建物跡33棟、鍛冶工房跡1基が確認された当遺跡である下平塚蕪木台遺跡¹³⁾や竪穴住居跡1軒が確認された西平塚梨ノ木遺跡のほか、西平塚シタ遺跡〈3〉、要精進場遺跡、下平塚堂ノ下遺跡〈39〉などが所在している。当遺跡や隣接する苅間六十目遺跡、苅間神田遺跡では、一気に住居軒数が増し、本格的に集落が展開する時期である。東谷田川右岸には、県内最大規模の集落跡である島名熊の山遺跡が存在している。

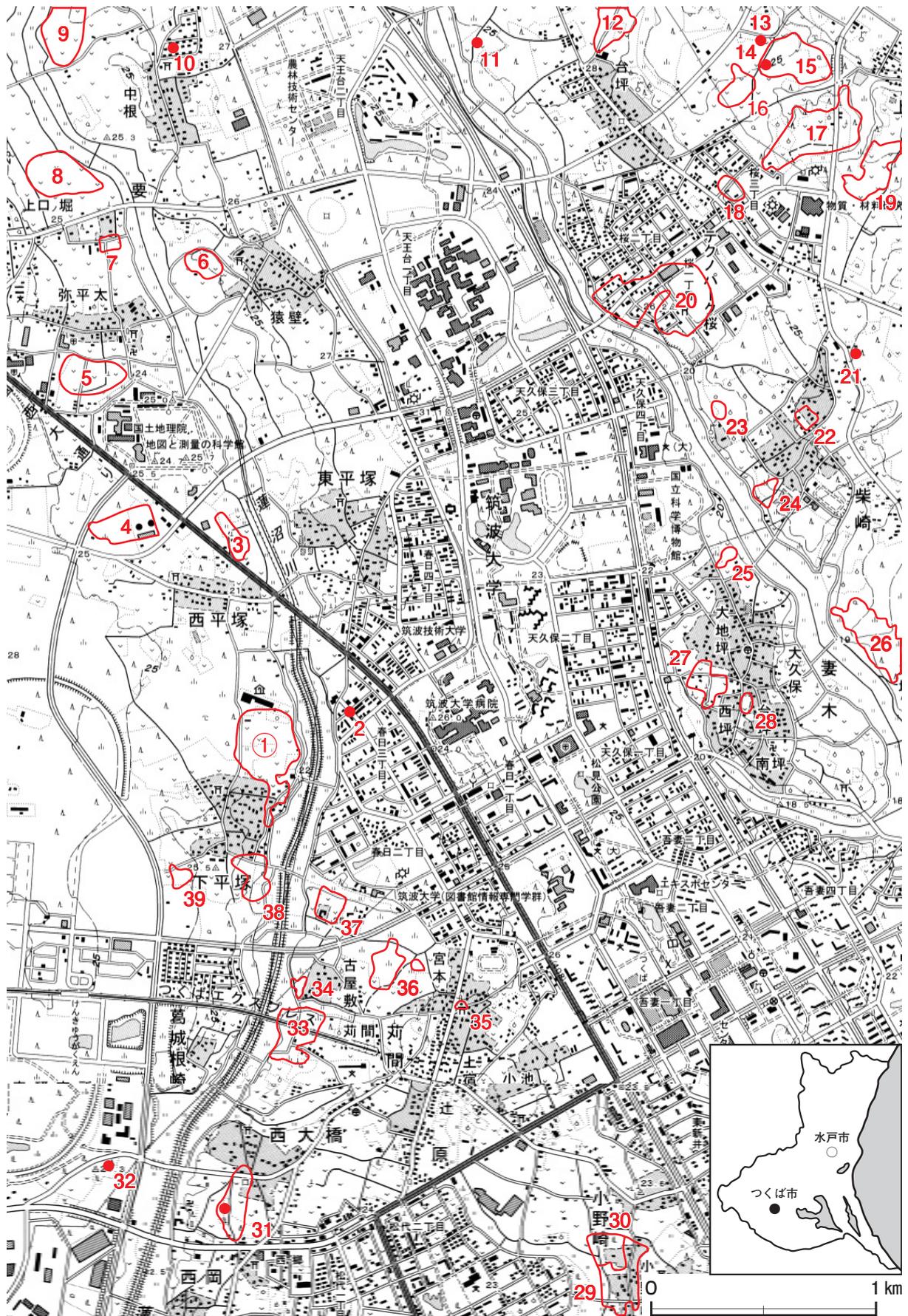
中世・近世以降の遺跡は数多く確認され、中世は54遺跡、近世は50遺跡に及んでいる¹⁴⁾。蓮沼川流域では、中世・近世の地下式坑、井戸跡、墓坑などが確認された西平塚梨ノ木遺跡、中世の掘立柱建物跡、方形竪穴遺構、井戸跡、墓坑などが確認された苅間神田遺跡、中世・近世の火葬施設や地下式坑などが確認された苅間六十目遺跡のほか、西平塚シタ遺跡、要弥平太遺跡〈5〉、要猿壁遺跡〈6〉、要本屋敷遺跡〈8〉、苅間西ノ下遺跡、苅間屋敷塚、下平塚堂所遺跡、下平塚堂ノ下遺跡などが存在している。また、城館跡も多く、蓮沼川流域には苅間城跡〈37〉、小野川流域には小野崎館跡〈30〉、桜川右岸には方穂故城跡、柴崎片岡上館跡、金田城跡、花室城跡、上ノ室城跡など、小田氏関係の城館跡がある。当地域は鎌倉時代から室町時代にかけては小田氏、戦国時代においては小田氏と佐竹氏の支配下となり、佐竹氏が秋田へ移封後は土浦藩に属することになり、明治4年（1871年）の廃藩置県に至っている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1中の該当番号と同じである。なお、本章は、財団報告第326集を基にし、若干加筆したものである。

註

1) 大森昌衛・蜂須紀夫「茨城の地質をめぐって」『日曜の地学』8 築地書館 1979年9月

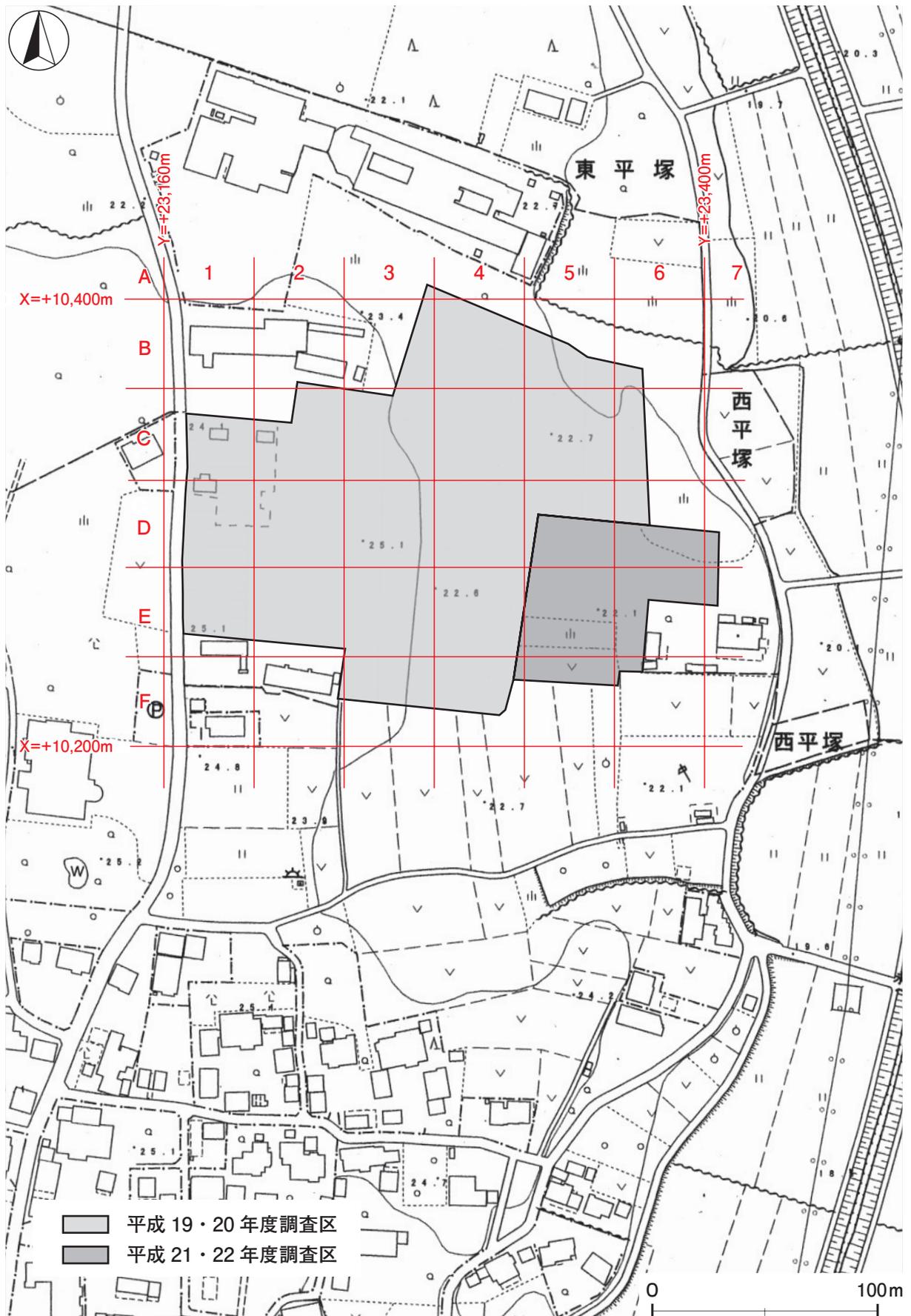
- 2) a 成島一也「(仮称) 葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第121集 1997年3月
 b 長岡正雄「(仮称) 葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第134集 1998年3月
 c 飯島一生「神田遺跡3 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第183集 2002年3月
- 3) a 成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集 2000年3月
 b 成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－中原遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集 2000年3月
 c 白田正子・高野節夫・仲村浩一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－中原遺跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
 d 駒澤悦郎「東岡中原遺跡4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第252集 2004年3月
- 4) a 高村勇「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) 柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ－1区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第54集 1990年3月
 b 佐藤正好・松浦敏「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 柴崎遺跡Ⅱ・中塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第63集 1991年3月
 c 土生朗治「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 柴崎遺跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第72集 1992年3月
 d 萩野谷悟「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集 1994年9月
- 5) 高野節夫「西平塚梨ノ木遺跡 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第196集 2002年3月
- 6) 小澤重雄「葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－六十目遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第160集 2000年3月
- 7) 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第182集 2002年3月
- 8) a 三谷正・桑村裕「上野古屋敷遺跡1 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第285集 2007年3月
 b 川井正一「上野古屋敷遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第307集 2008年3月
- 9) 川村満博「(仮称) 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－中根中谷津遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集 1998年9月
- 10) 中山信名著 栗田寛補訂『新編常陸国誌』宮崎報恩会版 崙書房 1978年12月
- 11) 白田正子「金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東岡廃寺 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集 2003年3月
- 12) a 九重廃寺遺跡調査団『東岡遺跡－九重廃寺調査報告－』桜村教育委員会 1984年3月
 b 白田正子『九重東岡廃寺確認調査報告書1』茨城県教育財団 2001年3月
- 13) 白田正子・飯田浩彦・本橋弘巳・齋藤和浩・川井正一・江原美奈子「下平塚蕪木台遺跡 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第326集 2009年3月
- 14) a つくば市教育委員会『つくば市遺跡分布調査報告書－谷田部地区・桜地区－』2001年3月
 b つくば市教育委員会『つくば市遺跡地図』2001年7月



第1図 下平塚蕪木台遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1 「上郷」「谷田部」）

表1 下平塚蕪木台遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	下平塚蕪木台遺跡		○		○	○	○	○	21	柴崎大日古墳				○			
2	荻間遺跡				○				22	柴崎片岡上館跡				○	○	○	○
3	西平塚シタ遺跡					○		○	23	柴崎ボツケ遺跡					○		
4	西平塚梨ノ木遺跡		○			○	○	○	24	柴崎南遺跡		○		○	○	○	○
5	要弥平太遺跡	○						○	25	妻木鴻ノ巢遺跡				○	○		
6	要猿壁遺跡							○	26	東岡中原遺跡	○	○		○	○	○	○
7	要精進場遺跡				○	○			27	妻木坪内遺跡					○	○	○
8	要本屋敷遺跡							○	28	妻木宮前遺跡					○	○	○
9	蓮沼矢崎遺跡				○	○			29	小野崎宿遺跡						○	○
10	要中根古墳				○				30	小野崎館跡						○	○
11	栗原白旗遺跡						○	○	31	西大橋中内台古墳群				○			
12	栗原才十郎遺跡		○						32	西大橋塚山古墳				○			
13	栗原愛宕塚古墳				○				33	荻間神田遺跡	○	○	○	○	○	○	○
14	栗原十日塚古墳				○				34	荻間西ノ下遺跡					○	○	○
15	栗原大山遺跡				○	○			35	荻間屋敷塚						○	○
16	栗原大山西遺跡					○			36	荻間六十目遺跡		○	○	○	○	○	○
17	上野陣馬遺跡		○	○	○	○	○	○	37	荻間城跡						○	○
18	上野中塚遺跡		○			○			38	下平塚堂所遺跡				○	○		○
19	上野古屋敷遺跡		○	○	○	○	○	○	39	下平塚堂ノ下遺跡				○	○		○
20	柴崎遺跡	○	○		○	○	○	○									



第2図 下平塚蕪木台遺跡調査区設定図（つくば市都市計画基本図 2,500 分の 1）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

下平塚蕪木台遺跡は、つくば市の中央部に位置し、蓮沼川右岸の標高約24mの舌状台地上に立地している。遺跡の範囲は東西300m、南北500mと広大なものであるが、平成18・19年度の調査では、遺跡の北部、調査面積25,599㎡を行った。今回の調査区は、前回調査された調査区の東側で、遺跡の東部にあたる。調査面積は3,831㎡で、調査前の現況は畑地である。

当遺跡は、平成18・19年度の調査で、古墳時代後期から平安時代を中心とする複合遺跡であることが判明している。今回の調査では、竪穴住居跡68軒（縄文時代1・奈良時代21・平安時代46）、掘立柱建物跡22棟（奈良時代10・平安時代4・時期不明8）、柱列跡3列（時期不明）、鍛冶工房跡1基（平安時代）、溝跡5条（奈良時代1・中世2・時期不明2）、井戸跡1基（中世）、陥し穴1基（縄文時代）、土坑136基（縄文時代2・奈良時代13・平安時代16・時期不明105）、ピット群9か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に105箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・高台付椀・高台付皿・甕・甑）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・高盤・横瓶・鉢・甕・甑）、灰釉陶器（椀・長頸瓶・浄瓶）、陶器（碗・播鉢）、磁器（碗）、土製品（支脚・土玉・紡錘車）、石器・石製品（鏃・砥石・紡錘車）、金属製品（鏃・刀子・鎌・鋤先・鑿・紡錘車・釘・煙管）、鍛冶関連遺物（鑿・椀形鍛冶滓・粒状滓・鍛造剥片・土製羽口）などである。

第2節 基本層序

調査区南西部の台地上の平坦面（F5c1区）に設定し、基本土層の観察を行った（第3図）。

第1層は、黒褐色を呈する現耕作土である。粘性・締まりともに弱く、層厚は14～32cmである。

第2層は、黄褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりとも普通で、層厚は6～19cmである。

第3層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりが強く、層厚は23～38cmである。

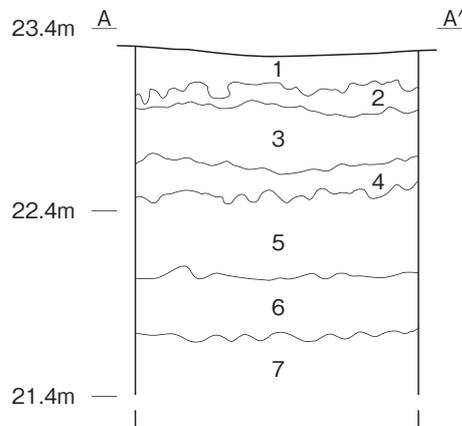
第4層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く、締まりが普通で、層厚は11～28cmである。第1黒色帯（BBⅠ）に相当する。

第5層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は39～51cmである。

第6層は、黒色粒子を微量に含み、暗褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く、締まりが普通で、層厚は30～41cmである。第2黒色帯（BBⅡ）に相当する。

第7層は、にぶい黄褐色を呈する粘土層である。粘性・締まりともに強く、層厚は28cmまで確認したが、下層が未掘のため不明である。

遺構は、第2層の上面で確認できた。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

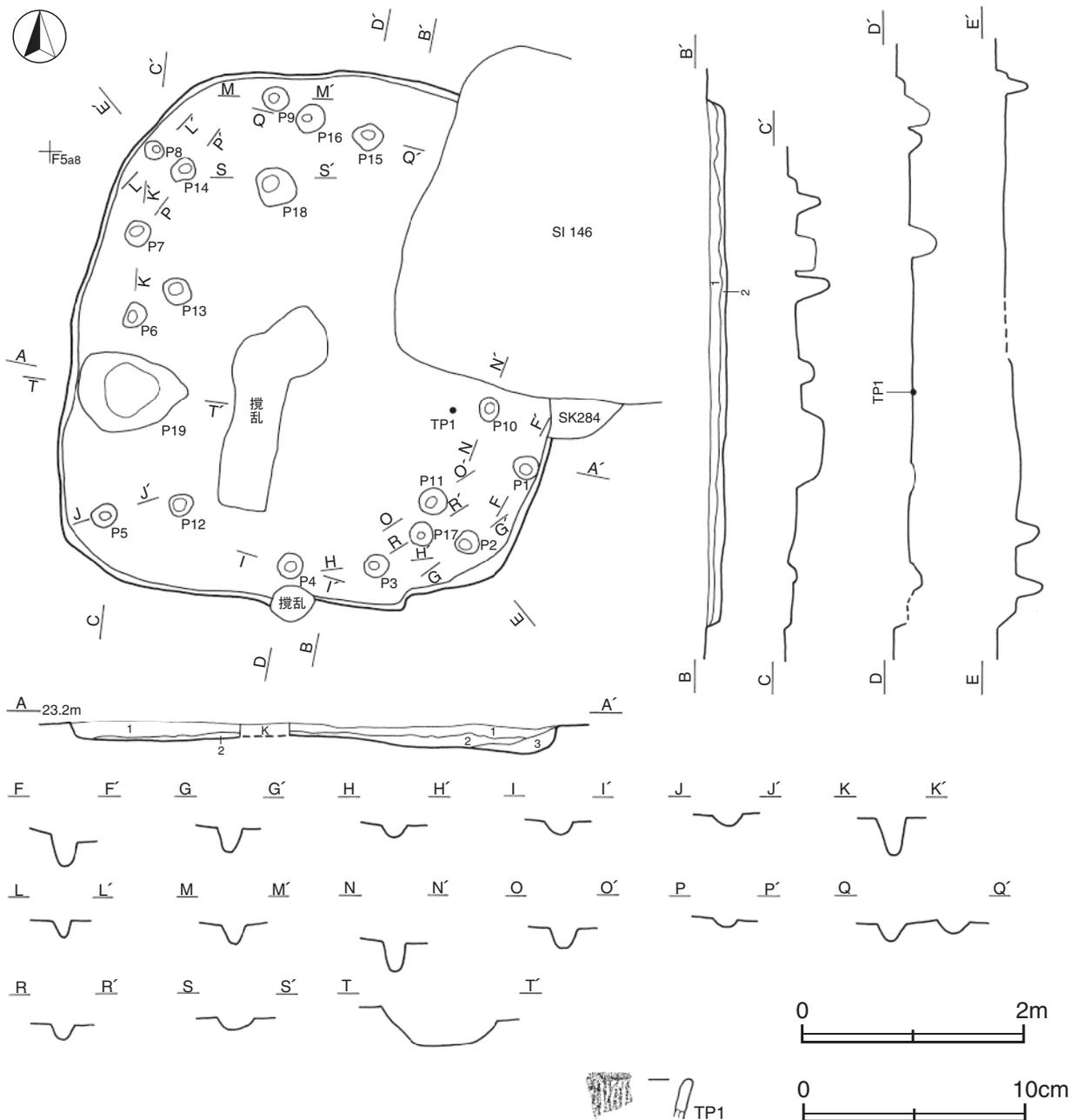
1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒，陥し穴1基，土坑2基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第168号住居跡（第4図）

位置 調査区南部のF 5a8区，標高23mの平坦な台地上に位置している。



第4図 第168号住居跡・出土遺物実測図

重複関係 第146号住居，第44号掘立柱建物，第284号土坑，第14号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.51m，短軸4.40mの隅丸方形で，主軸方向はN-13°-Eである。壁高は7～16cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 19か所。P1～P9は深さ9～33cmで，壁際に沿って配置されていることから柱穴と考えられる。P10～P16は深さ8～29cmで，P1～P9の内側にそれぞれ配置されており，柱穴の可能性が考えられる。P17～P19は深さ15～24cmで，いずれも性格不明である。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片3点（深鉢）が出土しており，いずれも細片である。TP1は，東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は，出土土器から早期前半に比定できる。

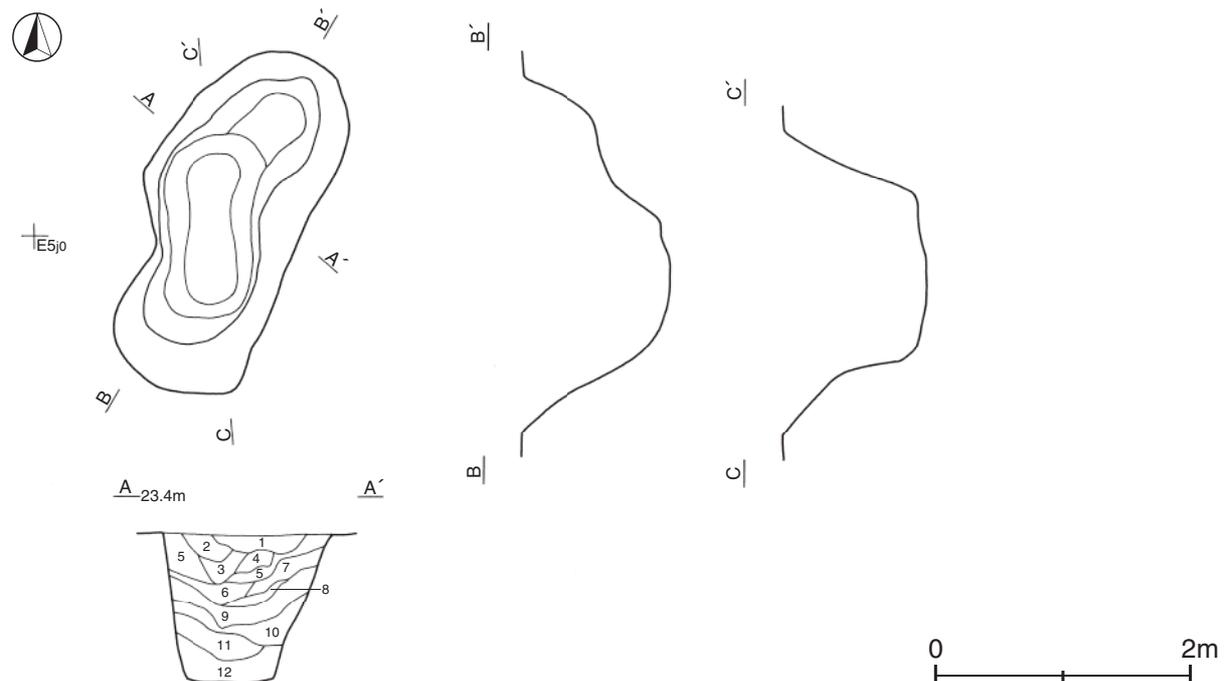
第168号住居跡出土遺物観察表(第4図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	撚り糸文	覆土下層	

(2) 陥し穴

第1号陥し穴 (第5図)

位置 調査区南部のE5i0区，標高23mの平坦な台地上に位置している。



第5図 第1号陥し穴実測図

規模と形状 長径 2.86 m, 短径 1.33 m の不整楕円形で, 長径方向は N - 23° - E である。深さは 118cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 12 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

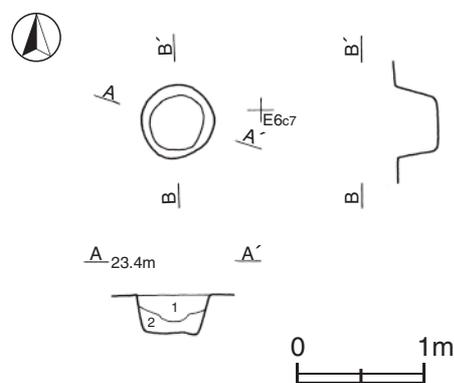
1 黒 褐 色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量	7 褐 色	ロームブロック多量
2 黒 褐 色	ロームブロック中量	8 褐 色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量
3 黒 褐 色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗 褐 色	ロームブロック少量
4 褐 色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	10 暗 褐 色	ロームブロック微量
5 暗 褐 色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量	11 暗 褐 色	ロームブロック多量
6 暗 褐 色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	12 暗 褐 色	ロームブロック中量

所見 規模や形状から陥し穴と考えられる。遺物が出土していないため, 時期は特定できない。

(3) 土坑

第 292 号土坑 (第 6 図)

位置 調査区北東部の E 6 c6 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。



規模と形状 長径 0.60 m, 短径 0.55 m の円形である。深さは 33cm, 底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック多量

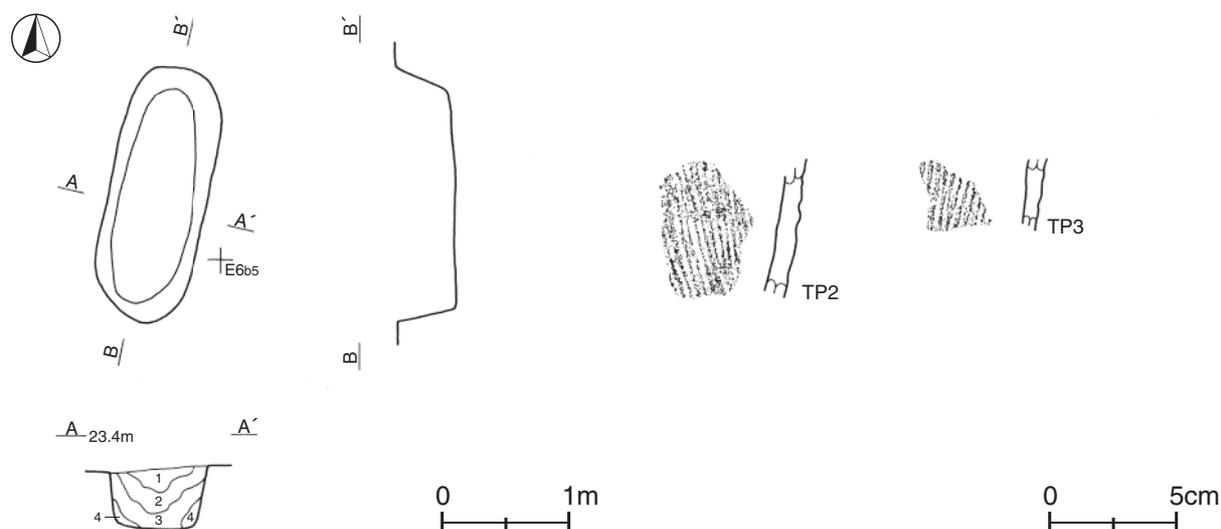
遺物出土状況 縄文土器片 1 点 (深鉢) が出土している。細片のため図示できないが, 撚り糸文が施されている。

所見 時期は, 出土土器から早期前半に比定できる。

第 6 図 第 292 号土坑実測図

第 297 号土坑 (第 7 図)

位置 調査区北東部の E 6 a4 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。



第 7 図 第 297 号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径 2.04 m, 短径 0.80 m の楕円形で, 長径方向は N - 12° - E である。深さは 45cm, 底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黄褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 縄文土器片 3点 (深鉢) が出土している。TP 2・TP 3は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から早期前半に比定できる。

第 297 号土坑出土遺物観察表 (第 7 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	黄褐	撚り糸文	覆土中	
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	撚り糸文	覆土中	

2 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は, 竪穴住居跡 21 軒, 掘立柱建物跡 10 棟, 溝跡 1 条, 土坑 13 基を確認した。以下, 遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第 132 号住居跡 (第 8 図)

位置 調査区東部の E 6 d6 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 151 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため, 東西軸は 2.75 m で, 南北軸は 2.34 m しか確認できなかった。平面形は P 1 の配置から方形と推定でき, 主軸方向は N - 8° - E である。壁高は 37 ~ 41cm で, ほぼ直立している。

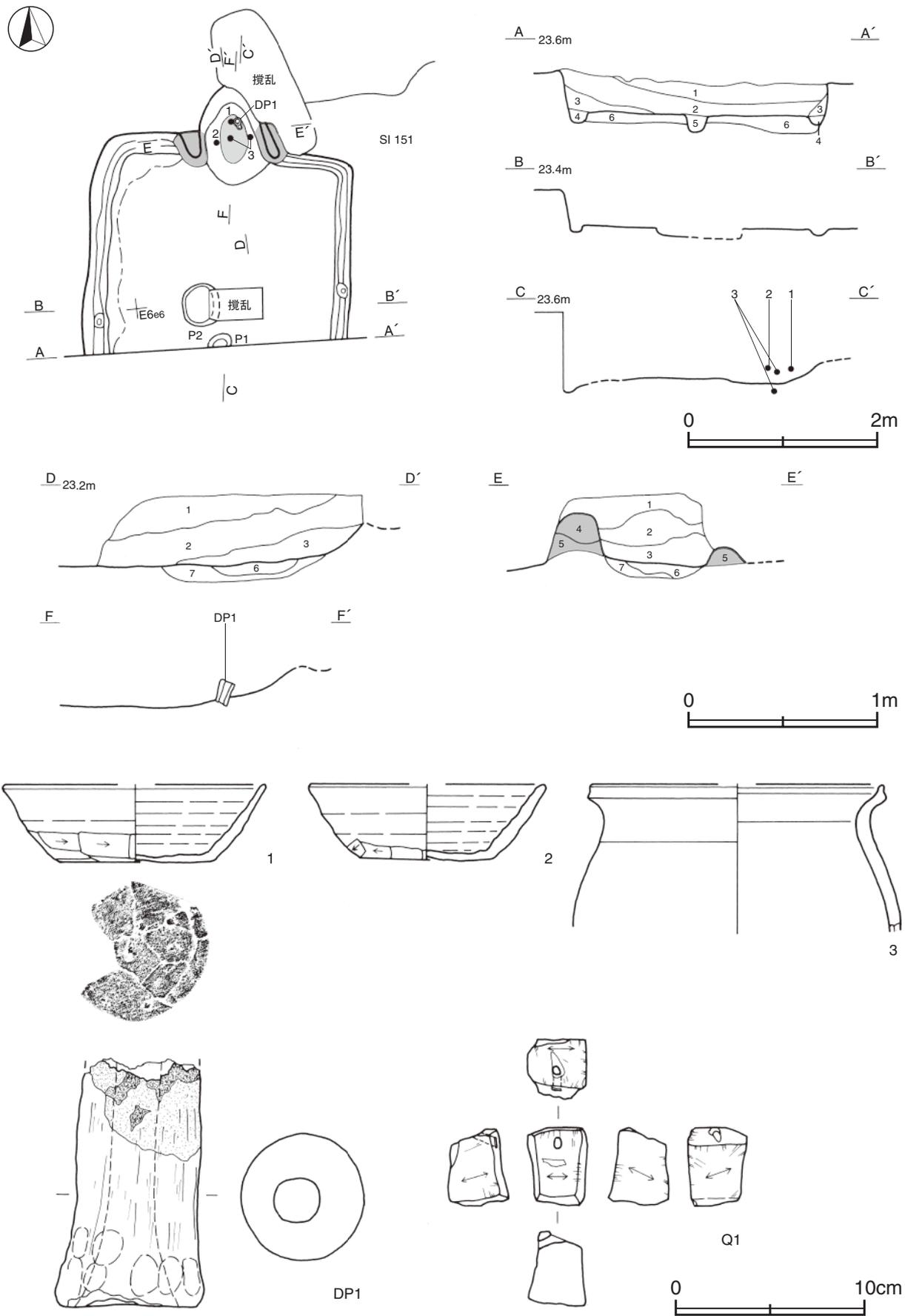
床 ほぼ平坦な貼床で, 壁際まで踏み固められている。貼床は, ロームブロックを多く含んだ暗褐色土の第 6 層を埋土して構築されている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。煙道部が攪乱を受けているため, 規模は焚口部から煙道部までの 107cm しか確認できなかった。燃焼部幅は 58cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし, その上に黒色土ブロック混じりのロームブロックを主体とした第 4・5 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 10cm 掘りくぼめた部分に, 焼土ブロックを多く含んだ第 6・7 層が埋土されており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。火床部の北部には羽口を転用した支脚が据えられており, 焚き口からの距離は 65cm である。煙道部は壁外に 60cm 掘り込まれ, 火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------------|--------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子少量 | 6 明赤褐色 | 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック微量 | 7 明黄褐色 | 焼土ブロック多量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック多量, 黒色土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 2か所。P 1 は深さ 18cm で, 南部の中央に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2 は深さ 10cm で, 中央部南寄りに位置しているが性格不明である。



第8図 第132号住居跡・出土遺物実測図

覆土 5層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。第5層はP1の覆土である。第6層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片 92点 (坏2, 甕類90), 須恵器片 38点 (坏25, 蓋2, 盤1, 甕類10), 土製品1点 (羽口), 石器1点 (砥石) のほか, 流れ込んだ縄文土器片2点 (深鉢), 混入した灰釉陶器片1点 (瓶類) が出土している。1~3は竈の覆土中層から下層にかけてそれぞれ出土している。DP1は竈の火床面から立位の状態で出土しており, 支脚として使用されたものである。Q1は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後葉に比定できる。

第132号住居跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.8]	4.2	[7.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	竈覆土中層	50%
2	須恵器	坏	[12.4]	4.0	[7.2]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈覆土中層	20%
3	土師器	甕	[15.6]	(8.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	竈覆土中層・下層	10%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	羽口	(62~80)	(24~56)	8.4	(625)	長石・石英	先端部欠損 ヘラナデ 指頭痕	竈火床面	PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	4.2	3.2	3.2	51	凝灰岩	砥面5面 穿孔1か所 孔径0.5~0.6cm	覆土中	PL49

第140号住居跡 (第9・10図)

位置 調査区中央部のE6c4区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

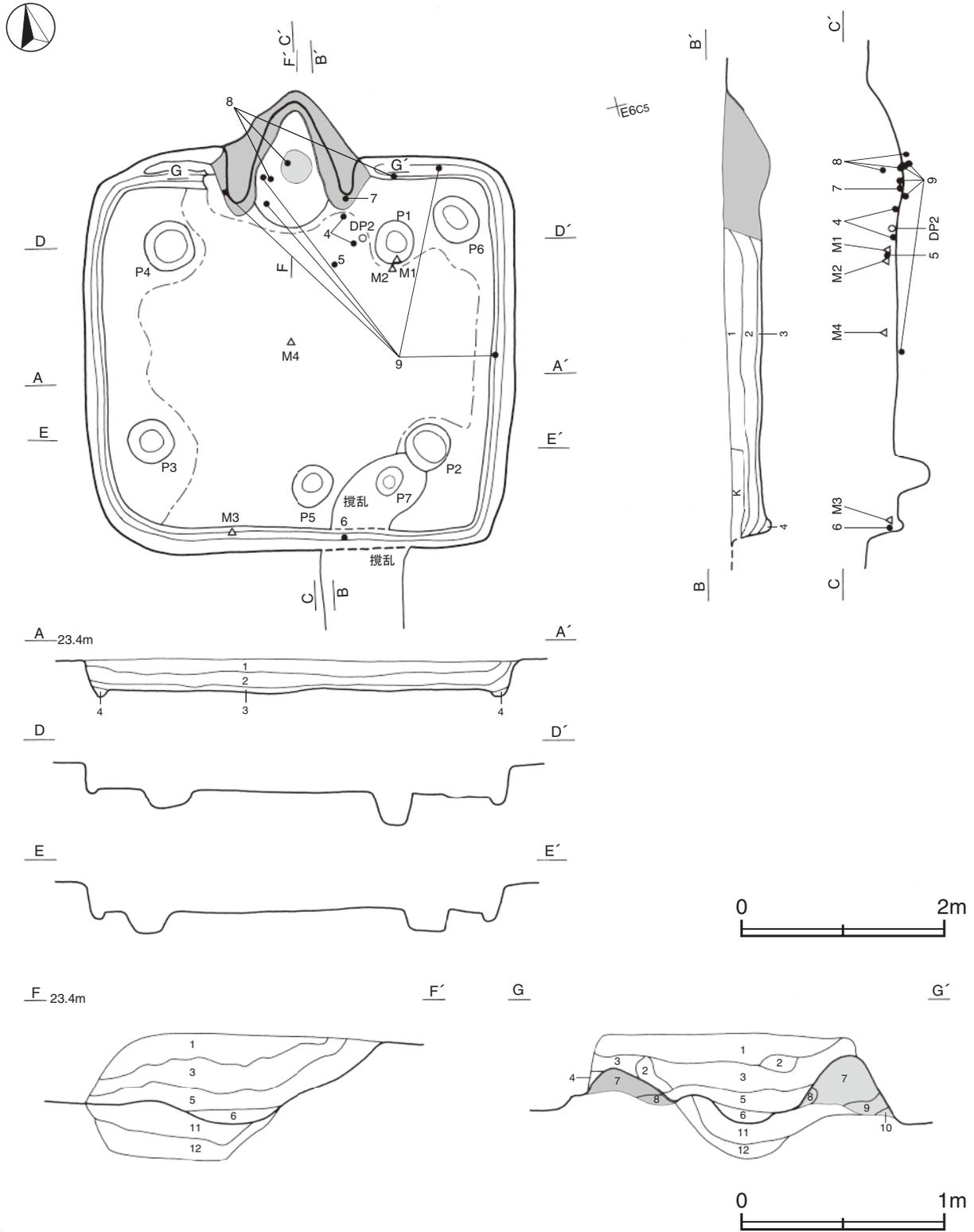
規模と形状 長軸4.28m, 短軸4.04mの隅丸方形で, 主軸方向はN-10°-Eである。壁高は25~30cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで137cmで, 燃焼部幅は66cmである。袖部は, 床面を30cm掘りくぼめた部分にロームブロックや焼土粒子, 炭化粒子を多く含んだ第11・12層を埋土し, その上に黄灰色粘土混じりのロームを主体とした第7~10層を積み上げて構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面から12cmくぼんでおり, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に61cm掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。

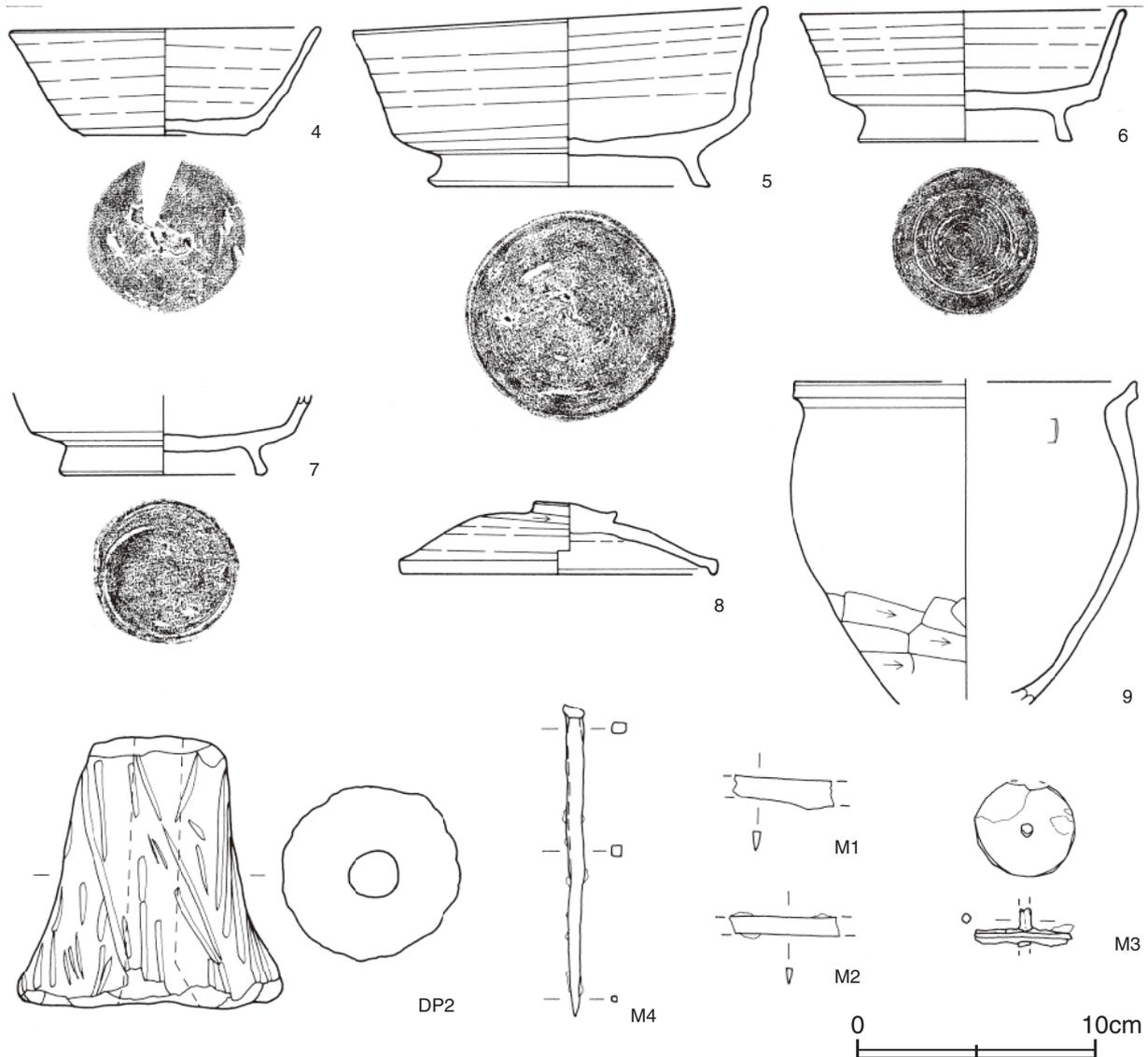
竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子多量, 炭化粒子微量 | 7 黄灰色 | ローム粒子多量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・黄灰色粘土粒子少量 | 8 明赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子多量, 炭化粒子微量 | 9 明黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック多量, 黄灰色粘土ブロック・焼土粒子多量 |
| 5 明赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック多量, 炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子多量 |
| 6 明赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 12 明黄褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |



第9図 第140号住居跡実測図

ピット 7か所。P1～P4は深さ20～32cmで、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P5は深さ34cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ20cm・22cmで、いずれも性格不明である。



第10図 第140号住居跡出土遺物実測図

覆土 4層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック少量, 炭化物微量 | 3 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック・黄灰色粘土粒子少量 | 4 暗褐色 ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片 344点 (坏 16, 甕類 327, 小形甕 1), 須恵器片 136点 (坏 104, 高台付坏 7, 蓋 6, 甕類 18, 甗 1), 土製品 9点 (支脚 1, 羽口 8), 鉄製品 4点 (刀子 2, 紡錘車 1, 釘 1) のほか, 鉄滓 4点 (36.9g) が, 全面の覆土上層から下層にかけて出土している。また, 混入した磁器片 1点 (瓶類) も出土している。4・5・DP 2は竈前, 6・M 3は南部壁際, 7は竈, M 1・M 2は北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。8は竈と北東部壁際の覆土中層から下層にかけて出土した破片, 9は竈と北東部・東部壁溝の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。M 4は中央部の覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後葉に比定できる。

第 140 号住居跡出土遺物観察表（第 10 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	須恵器	坏	13.0	4.6	6.9	長石	灰白	普通	底部ヘラ切り痕を残すナデ	覆土下層	90% PL36
5	須恵器	高台付坏	17.5	7.7	12.0	長石・石英	褐灰	良好	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	80% PL36
6	須恵器	高台付坏	13.8	5.6	8.9	長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	90% PL36
7	須恵器	高台付坏	-	(3.4)	8.4	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	竈覆土下層	40%
8	須恵器	蓋	13.3	3.1		長石・石英・雲母	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	竈覆土下層 覆土中層	80% PL36
9	土師器	小形甕	[14.3]	(13.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下位ヘラ削り 内面ヘラナデ	竈覆土下層 覆土下層	60%

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 2	支脚	5.0	11.2	11.6	697	長石・石英・雲母・赤色粒子・細礫・針状鉱物	表面にかや等の植物の巻き付け痕有り 穿孔 孔径 1.8～3.6cm	覆土下層	PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	刀子	(4.3)	1.3	0.3	(4.0)	鉄	刃部一部欠損 断面三角形 茎部欠損	覆土下層	
M 2	刀子	(4.8)	0.9	0.3	(2.9)	鉄	刃部一部欠損 断面三角形 茎部欠損	覆土下層	
M 4	釘	13.3	0.8	0.5	14.2	鉄	完形 断面方形	覆土中層	PL51

番号	器種	長さ	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	紡錘車	(1.6)	4.3	0.3	(12.6)	鉄	紡錘車一部欠損 軸一部遺存 断面方形	覆土下層	PL51

第 143 号住居跡（第 11・12 図）

位置 調査区中央部の E 6 e1 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 144 号住居跡を掘り込み、第 26 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.92 m、短軸 3.83 m の方形で、主軸方向は N - 10° - E である。壁高は 34～48cm で、直立している。

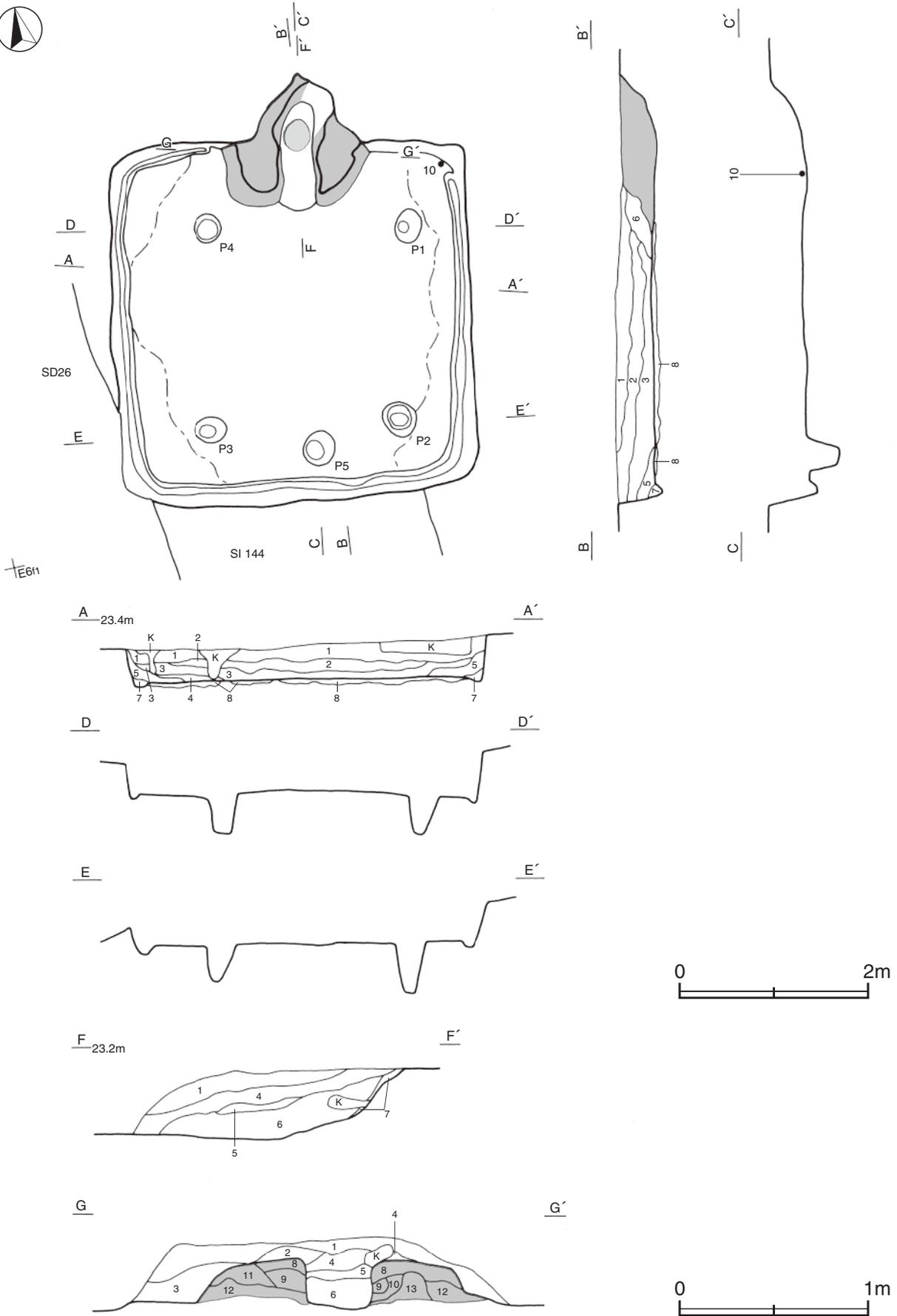
床 ほぼ平坦な貼床で、コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。貼床は、ロームブロックを多く含んだ褐色土の第 8 層を埋土して構築されている。北東コーナー部を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 141cm で、燃烧部幅は 40cm である。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土を主体とした第 8～13 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 72cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第 2～6 層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

1 灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子微量
2 灰黄褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	8 にぶい黄褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	9 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量
4 にぶい赤褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	10 にぶい黄褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
5 暗赤褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量	11 にぶい黄褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物微量	12 灰黄褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
		13 暗褐色	砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量

ピット 5 か所。P 1～P 4 は深さ 38～53cm で、規模や配置から主柱穴である。P 5 は深さ 36cm で、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第 11 图 第 143 号住居迹实测图

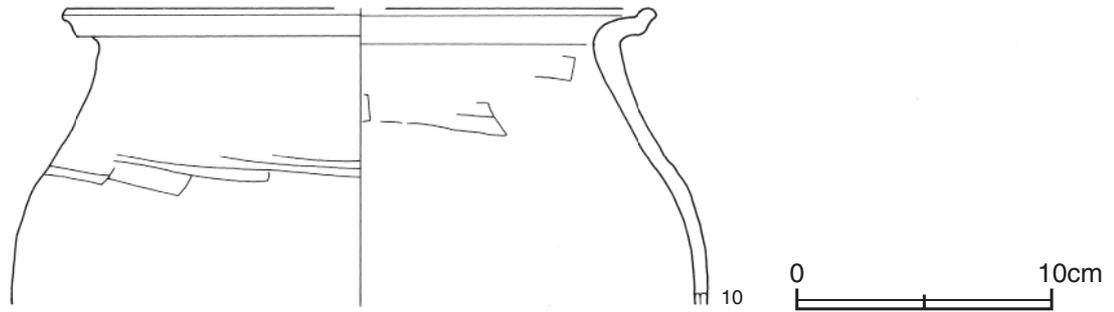
覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第8層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片 233点 (坏 16, 椀 2, 甕類 215), 須恵器片 66点 (坏 21, 蓋 5, 壺類 4, 甕類 36), 鉄製品 3点 (刀子 1, 釘 2) のほか, 鉄滓 1点 (8.5 g) が, 全面の覆土上層から下層にかけて出土している。10は北東コーナー部の覆土下層から出土している。細片で図示できないが, 須恵器坏の底部は平底で, 箱形のもものが主体である。

所見 時期は, 8世紀前葉に比定できる第144号住居跡を掘り込んでいることや, 出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第12図 第143号住居跡出土遺物実測図

第143号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	土師器	甕	[23.4]	(12.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	10%

第144号住居跡 (第13・14図)

位置 調査区中央部のE 6 f1区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第143号住居, 第26号溝に掘り込まれている。

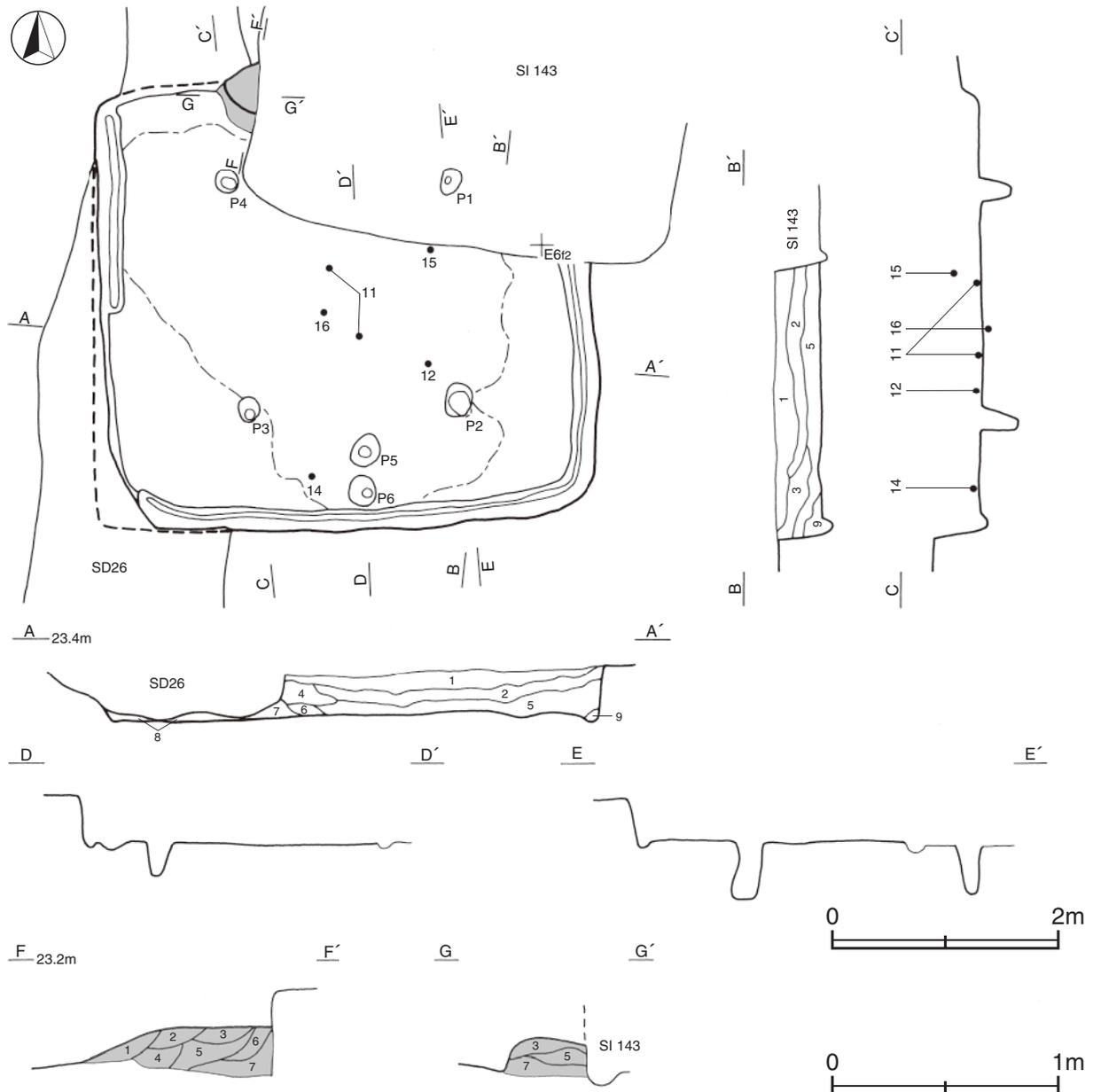
規模と形状 第143号住居, 第26号溝に掘り込まれているため, 規模は東西軸4.37m, 南北軸3.98mしか確認できなかった。平面形はピットの配置から方形と推定でき, 主軸方向はN-2°-Wである。壁高は37~41cmで, 直立している。

床 ほぼ平坦で, 東壁や南西コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。西壁の一部を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 北部を第143号住居に掘り込まれているため, 左袖部の一部が遺存しているだけである。袖部の位置から北壁中央部に付設されていたものと考えられる。規模は不明である。袖部は砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第1~7層を積み上げて構築されている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------|---------|--------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 5 にぶい褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量 | 6 褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量, 砂質粘土粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 4 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 | | |



第13図 第144号住居跡実測図

ピット 6か所。P1～P4は深さ28～49cmで、規模や配置から主柱穴である。P5・P6は深さ31cm・7cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

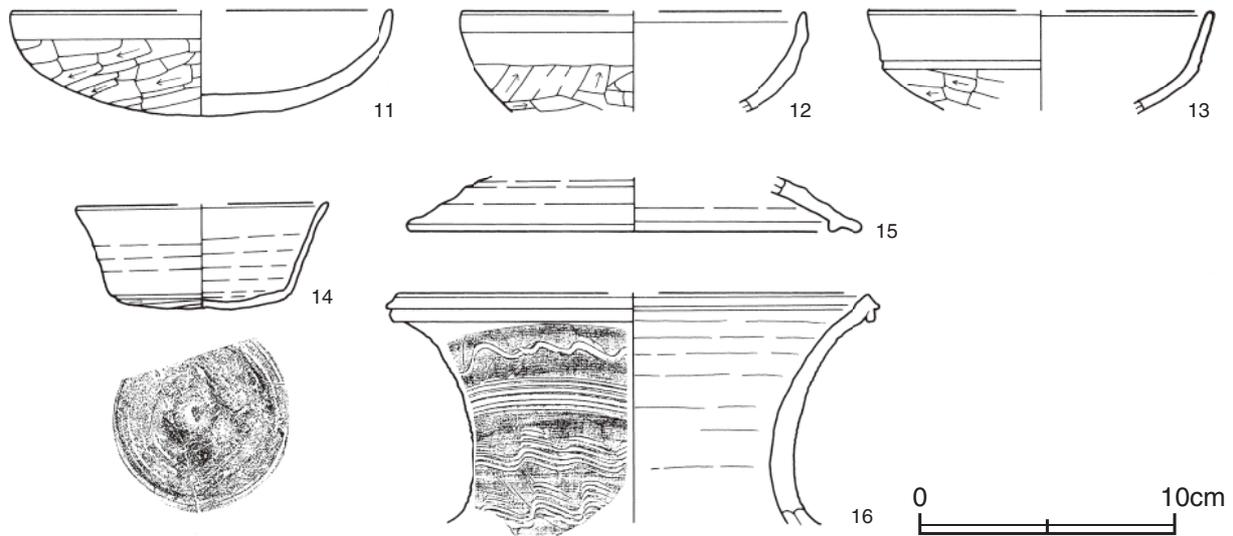
覆土 9層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片79点(坏12, 甕類67), 須恵器片12点(坏7, 蓋1, 甕類4)が出土している。16は中央部の床面, 11は中央部, 12は南東部, 14は南部の覆土下層, 13はP4覆土中からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。15は中央部の覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第14図 第144号住居跡出土遺物実測図

第144号住居跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	土師器	坏	[15.0]	4.2		長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へら削り 内面ナデ	覆土下層	55%
12	土師器	坏	[13.6]	(4.0)		長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面へら削り 内面ナデ	覆土下層	55%
13	土師器	坏	[13.6]	(4.1)		長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へら削り 内面ナデ	P4 覆土中	10%
14	須恵器	坏	[9.9]	4.2	6.7	長石・雲母	灰	普通	底部多方向のへら削り	覆土下層	60% PL36
15	須恵器	蓋	[17.8]	(2.2)		長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ後、かえり貼り付け	覆土中層	10%
16	須恵器	甕	[18.5]	(9.1)	-	長石・雲母	灰白	普通	頸部外面6本の櫛歯状工具による波状文 内面ナデ	床面	10%

第145号住居跡 (第15・16図)

位置 調査区南部のF5b0区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第12号ピット群P1・P2に掘り込まれている。

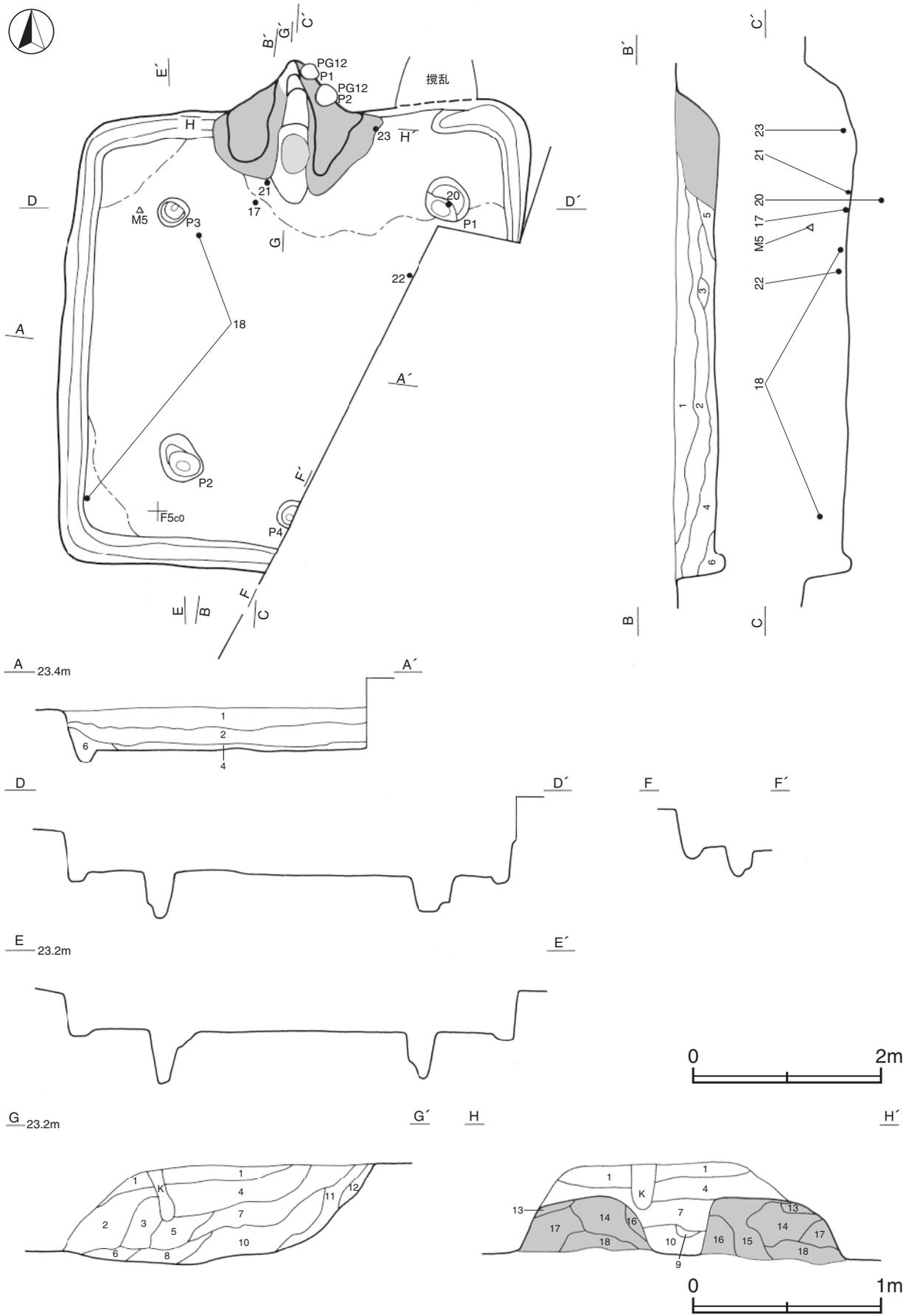
規模と形状 南東部が調査区域外へ延びているが、長軸4.97m、短軸4.85mの方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は38~43cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで154cmで、燃焼部幅は35cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土を主体とした第13~18層を積み上げて構築されている。火床部は床面から6cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に56cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第1~10層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7	暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化物・砂質粘土粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量	8	暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
3	暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	9	にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、砂質粘土粒子微量
4	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	10	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物・砂質粘土粒子微量
5	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11	暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量
6	暗褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	12	暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
			13	灰黄褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量



第 15 图 第 145 号住居迹实测图

- | | | | |
|----------|------------------------------|----------|---------------------------------|
| 14 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 17 にぶい褐色 | ローム粒子中量, 砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 15 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 18 にぶい褐色 | ロームブロック少量, 砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 16 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量 | | |

ピット 4か所。P 1～P 3は深さ44～63cmで、規模や配置から主柱穴である。P 4は深さ27cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

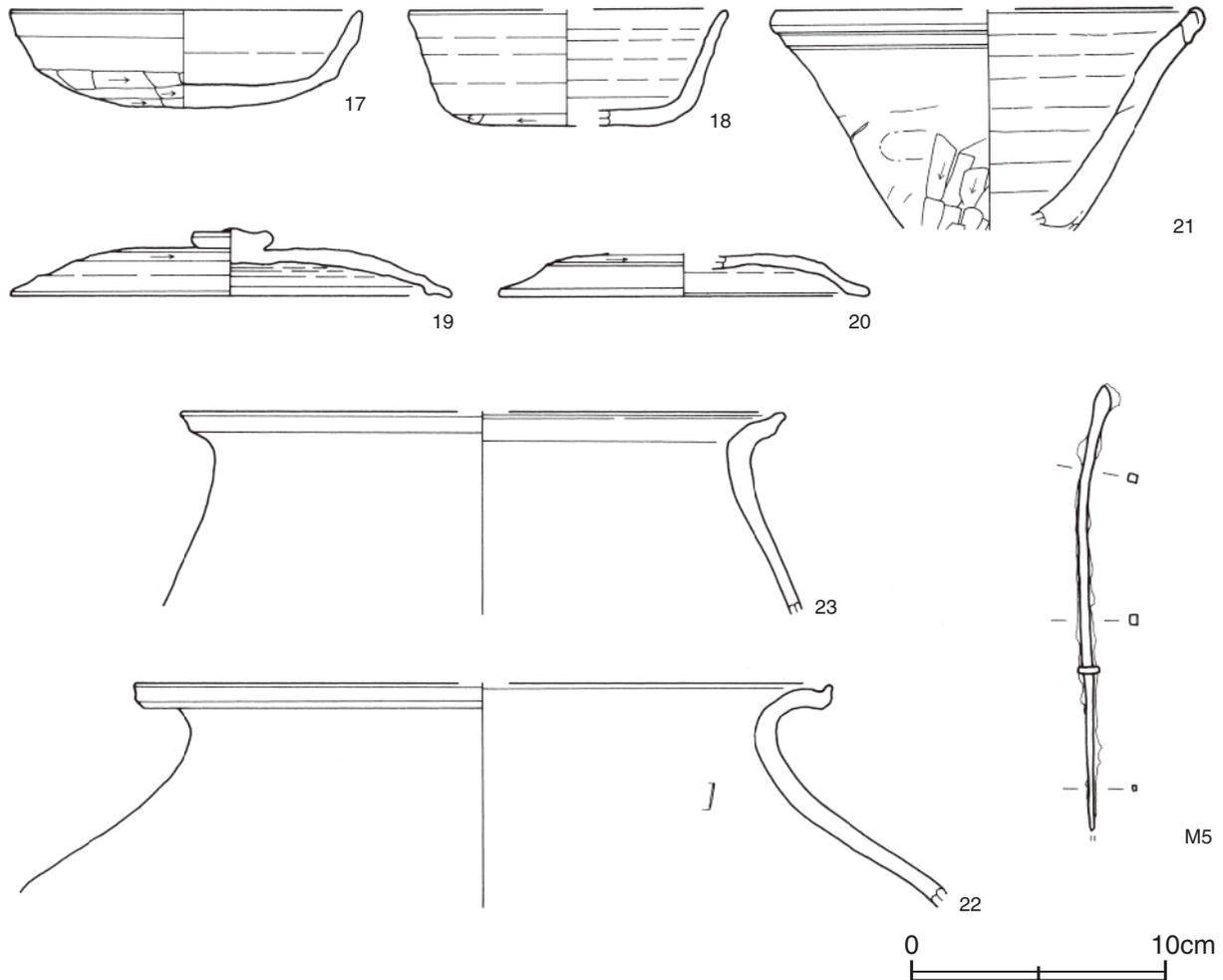
覆土 6層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片650点(坏65, 甕類585), 須恵器片101点(坏55, 蓋23, 捏鉢1, 瓶類1, 甕類21), 鉄製品3点(鎌・釘・不明鉄製品)のほか, 鉄滓2点(6.6g)が, 全面の覆土中層から下層にかけて出土している。20はP 1の底面から出土している。17・21は竈前, 22は東部, 23は北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。18は北西部の覆土下層と南西部壁際の覆土中層から出土した破片が接合したものである。19は覆土中, M5は北西部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第16図 第145号住居跡出土遺物実測図

第 145 号住居跡出土遺物観察表（第 16 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
17	土師器	坏	13.8	3.8		長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	70% PL36
18	須恵器	坏	[12.6]	4.1	[7.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層・下層	30%
19	須恵器	蓋	[17.4]	2.6		長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土中	20%
20	須恵器	蓋	[14.6]	(1.7)		長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	P 1 底面	20%
21	須恵器	捏鉢	[16.8]	(8.7)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面輪積痕を残すナデ 下端ヘラ削り	覆土下層	20%
22	土師器	甕	[27.4]	(8.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	10%
23	土師器	甕	[23.8]	(8.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	鉢	(17.8)	1.3	0.2~0.4	(9.9)	鉄	鉢身部柳葉状 断面長方形 茎端部欠損 断面方形	覆土上層	PL51

第 148 号住居跡（第 17 ~ 19 図）

位置 調査区北東部の E 6 b5 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 142 号住居，第 254・296 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺 3.93 m の方形で，主軸方向は N - 5° - W である。壁高は 32 ~ 42 cm で，直立している。

床 ほほ平坦で，竈前面から南壁際にかけて踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。煙道部を第 142 号住居に掘り込まれているため，規模は焚口部から煙道部までの 85 cm しか確認できなかった。燃焼部幅は 62 cm である。袖部は，床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第 7 ~ 9 層を積み上げて構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面を 10 cm 掘りくぼめた部分に，ロームや焼土のブロックを多く含んだ第 10・11 層が埋土されており，火床面は火を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------------|---------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子多量，炭化粒子微量 | 7 黄灰色 | 砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 8 明赤褐色 | 焼土ブロック多量，炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子多量，黄灰色粘土ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 9 黄灰色 | ロームブロック多量，焼土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 10 明赤褐色 | 焼土ブロック多量，炭化粒子少量 |
| 5 黄灰色 | ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 11 明黄褐色 | ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 明赤褐色 | 焼土ブロック多量，炭化物・ローム粒子微量 | | |

ピット 10 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 12 ~ 38 cm で，硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 5 は深さ 28 cm で，南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7 は深さ 8 cm・5 cm，P 8 ~ P 10 は深さ 12 ~ 38 cm で，いずれも性格不明である。

覆土 3 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

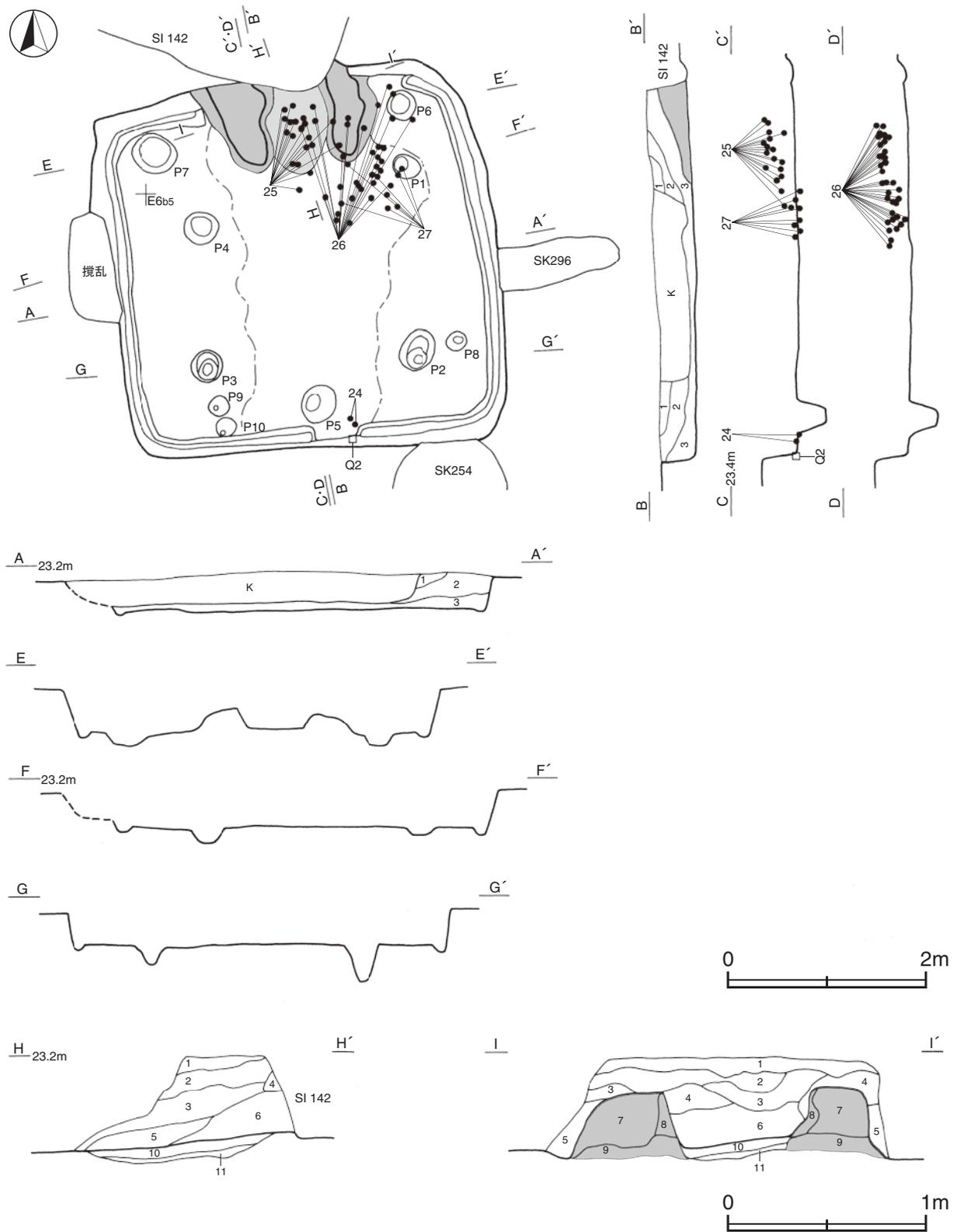
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

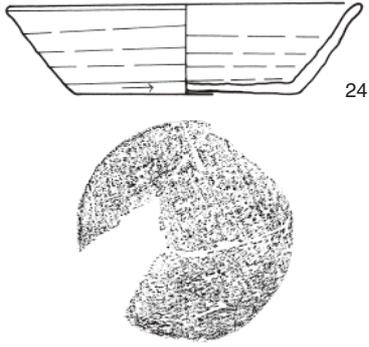
遺物出土状況 土師器片 316 点（坏 35，甕類 281），須恵器片 79 点（坏 47，蓋 8，壺類 1，甕類 23），石器 1 点（敲石）のほか，鉄滓 6 点（87.1 g）が，全面の覆土上層から下層にかけて出土している。また，混入した縄文土器片 6 点（深鉢），平安時代の土師器片 1 点（高台付椀）も出土している。24・Q 2 は南部の床面からそれぞれ出土している。27 は竈前の床面から出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶時に遺棄された

ものと考えられる。25・26は竈から竈前にかけての覆土上層から下層にかけてそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

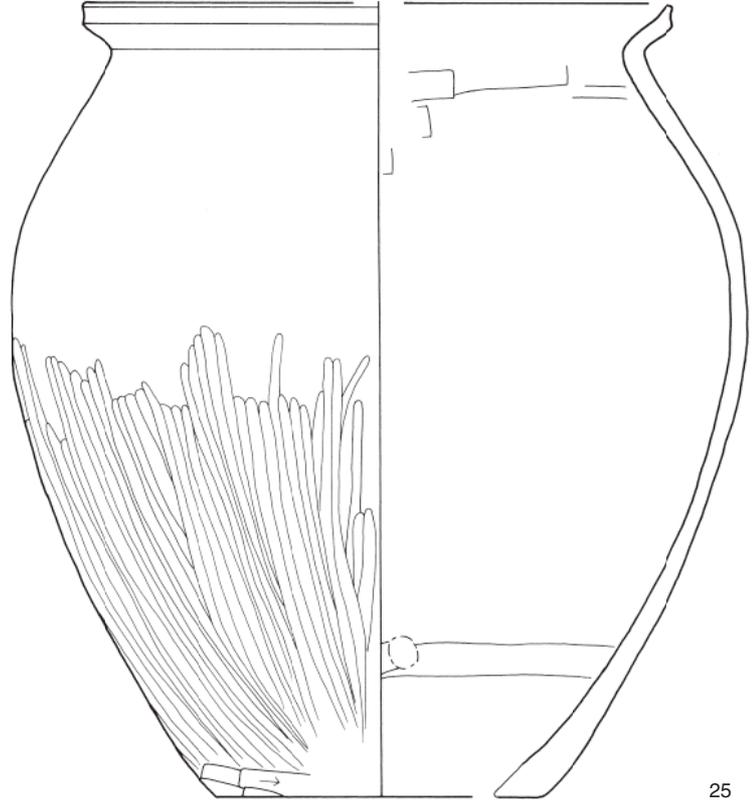
所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



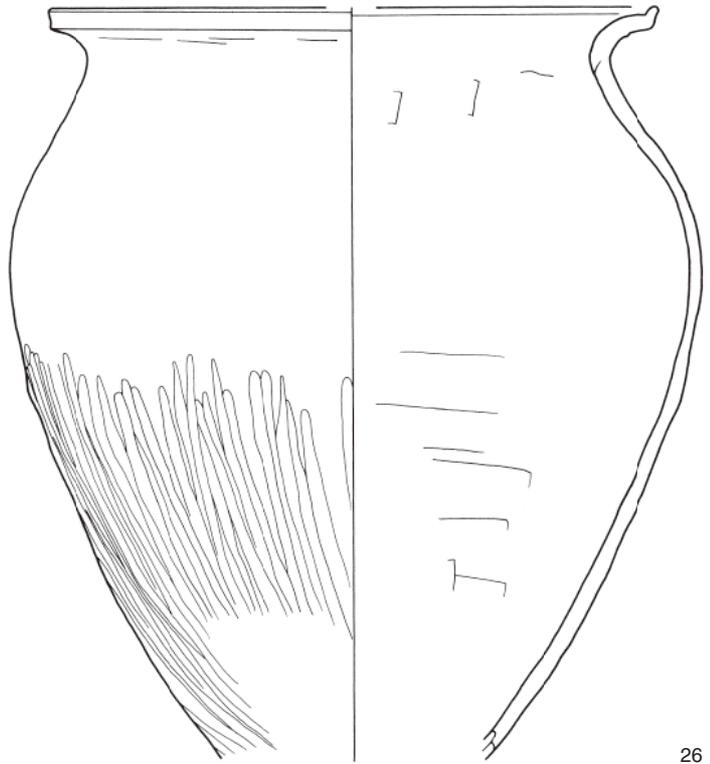
第17図 第148号住居跡実測図



24



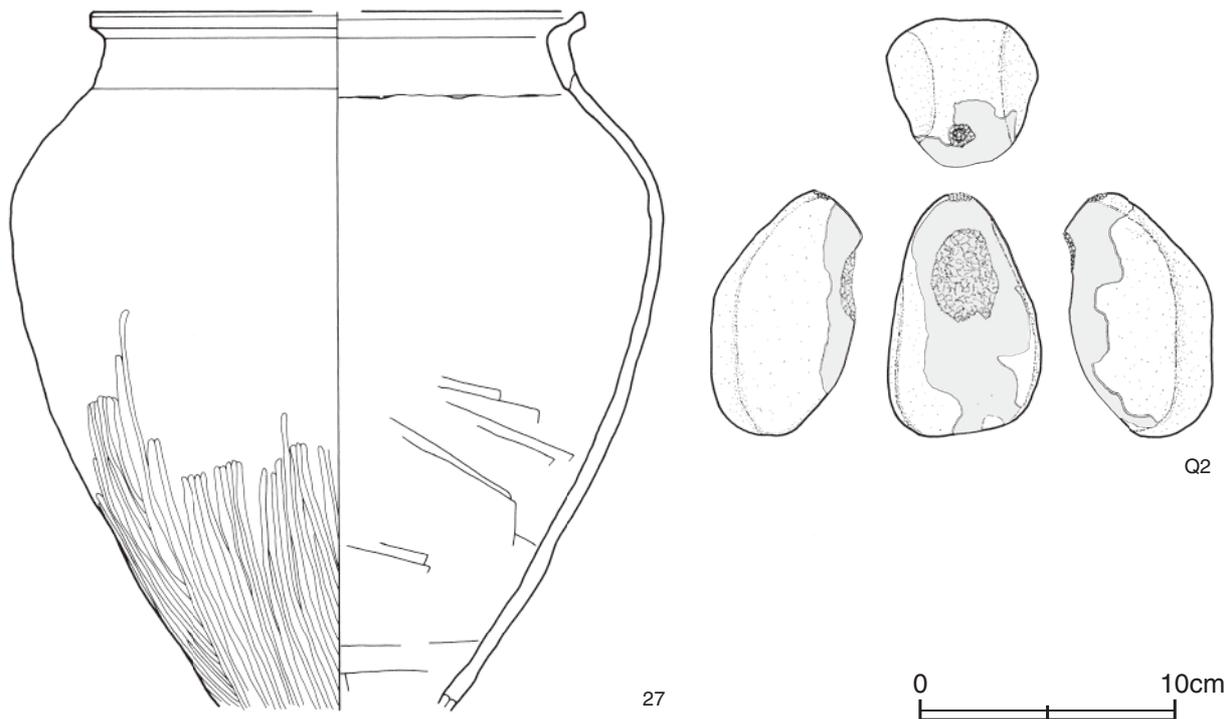
25



26



第 18 图 第 148 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 19 図 第 148 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 148 号住居跡出土遺物観察表 (第 18・19 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
24	須恵器	坏	13.8	3.6	8.8	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	床面	70% PL36
25	土師器	甕	[23.2]	31.5	[12.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 下端ヘラ削り 内面ヘラナデ 下位ナデ 指頭痕	竈覆土上層・中層 覆土中層	40%
26	土師器	甕	[24.0]	(29.9)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪積痕	竈覆土上層 覆土中層・下層	60%
27	土師器	甕	[19.4]	(27.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下位ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	敲石	9.7	5.9	5.9	434	礫岩	敲打痕2か所 火を受けている	床面	PL49

第 150 号住居跡 (第 20・21 図)

位置 調査区北部の D 6 i2 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 155 号住居, 第 26 号溝, 第 15 号ピット群 P 23・P 24 に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.82 m, 短軸 3.49 m の方形で, 主軸方向は N - 6° - E である。壁高は 30 ~ 36cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。西壁を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。煙道部を第 155 号住居に掘り込まれているため, 規模は焚口部から煙道部までの 89cm しか確認できなかった。燃焼部幅は 47cm である。袖部は, 床面を 13cm 掘りくぼめた部分にロームや焼土のブロックを多く含んだ第 5・6 層を埋土し, その上にロームブロックを主体とした第 3・4 層を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さを使用しており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 40cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

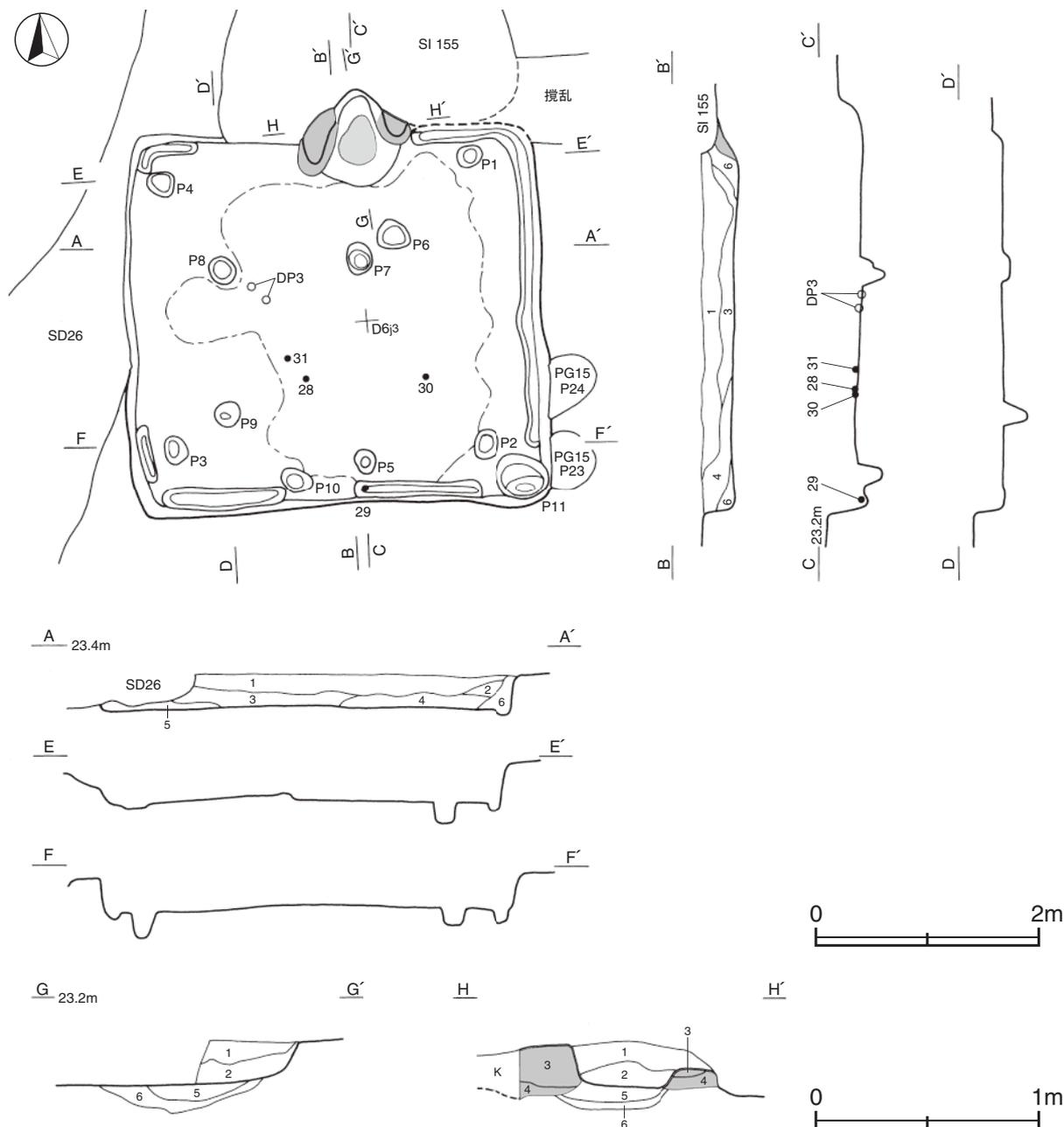
- | | | | |
|--------|-----------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子多量, 炭化粒子微量 | 5 赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黄灰色 | ローム粒子・焼土粒子多量, 炭化粒子微量 | | |
| 4 明黄褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

ピット 11か所。P1～P4は深さ15～28cmで、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P5は深さ20cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P11は深さ10～22cmで、いずれも性格不明である。

覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

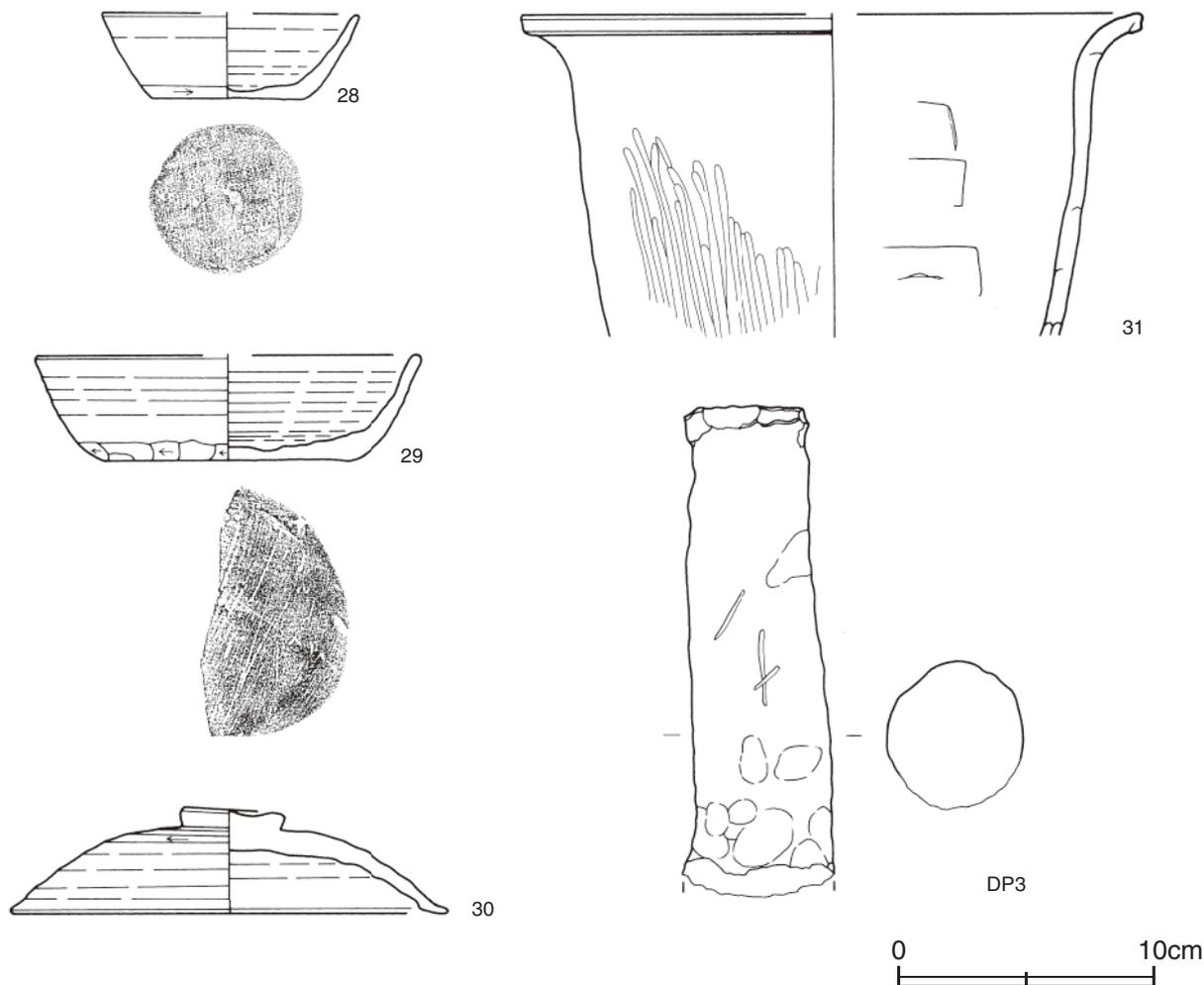
- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |



第20図 第150号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 113 点（坏 9，甕類 103，甑 1），須恵器片 31 点（坏 17，蓋 9，甕類 5），土製品 1 点（支脚）が，北東部から中央部にかけての覆土中層・下層を中心に出土している。また，混入した平安時代の土師器片 1 点（高台付椀）も出土している。28・31・DP 3 は中央部の床面から，29 は南部壁溝の覆土上層，30 は東部の覆土下層から逆位の状態でそれぞれ出土しており，いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 21 図 第 150 号住居跡出土遺物実測図

第 150 号住居跡出土遺物観察表（第 21 図）

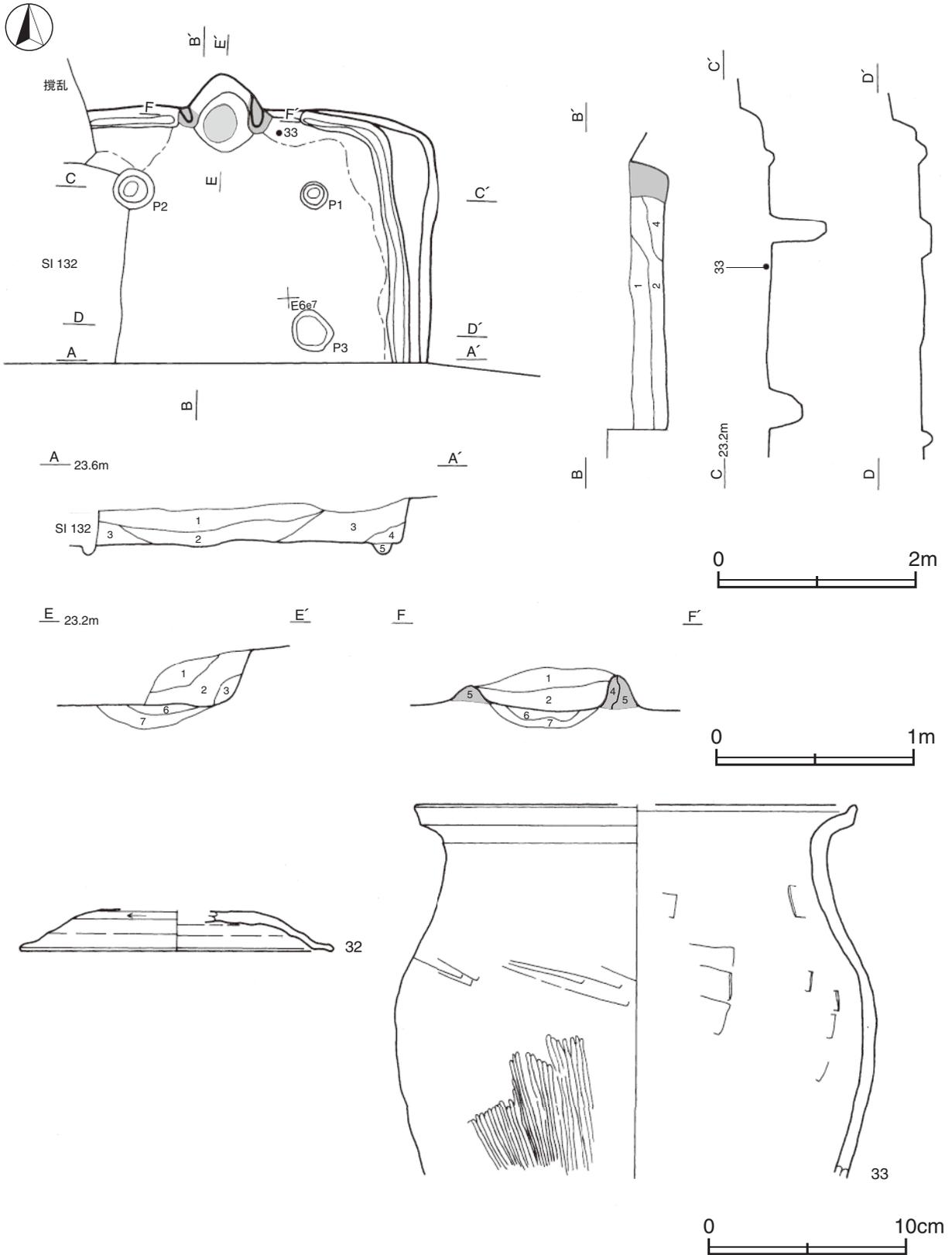
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
28	須恵器	坏	[10.0]	3.4	6.0	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	90% PL36
29	須恵器	坏	[15.0]	4.2	9.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	壁溝覆土上層	45%
30	須恵器	蓋	17.1	4.2		長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り後，つまみ貼り付け	覆土下層	70% PL36
31	土師器	甑	[24.4]	(12.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面輪積痕を残すヘラナデ	床面	10%

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 3	支脚	(4.5)	(5.9)	(19.5)	(655)	長石・石英	ナデ 指頭痕 火を受けている	床面	PL48

第 151 号住居跡 (第 22 図)

位置 調査区東部の E 6 d6 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 132 号住居に掘り込まれている。



第 22 図 第 151 号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状 南半部は調査区域外へ延びており、西部は第132号住居に掘り込まれているため、東西軸は3.50 m、南北軸は2.57 mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は29～47cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 主柱穴の配置から北壁中央部に付設されていると推定できる。規模は焚口部から煙道部まで78cmで、燃焼部幅は53cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に焼土混じりのロームブロックを主体とした第4・5層を積み上げて構築されている。火床部は床面を9cm掘りくぼめた部分に、ロームや焼土のブロックを含んだ第6・7層が埋土されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に34cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子微量 | 6 赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 3 褐色 ロームブロック多量 | 7 暗褐色 ロームブロック多量 |
| 4 黄灰色 焼土粒子多量, 炭化粒子微量 | |

ピット 3か所。P1・P2は深さ55cm・32cmで、規模や配置から主柱穴である。P3は深さ10cmで、南東部に位置しているが、掘り込みが浅いため主柱穴と考えられず、性格不明である。

覆土 5層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|---------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片74点(坏4, 鉢1, 甕類69), 須恵器片17点(坏7, 蓋3, 盤4, 甕類3)が出土している。33は北東部壁際の覆土下層から出土しており、廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。32は覆土中から出土している。

所見 時期は、8世紀後葉に比定できる第132号住居に掘り込まれていることや、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第151号住居跡出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
32	須恵器	蓋	[15.8]	(2.1)		長石・雲母・砂粒	灰白	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り	覆土中	10%
33	土師器	甕	[22.4]	(19.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ヘラナデ 中位から下位ヘラ磨き 内面ヘラナデ	覆土下層	10%

第152号住居跡(第23・24図)

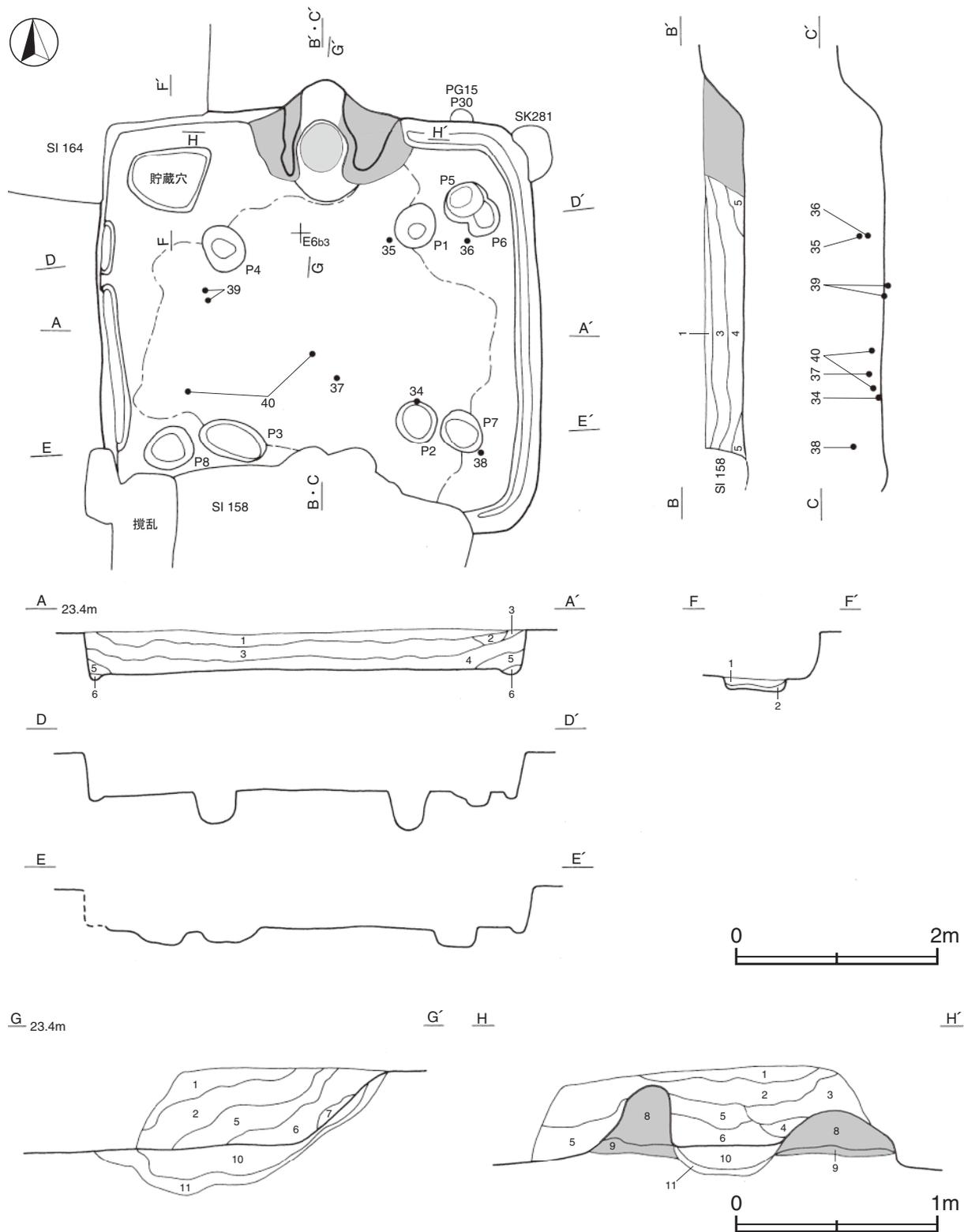
位置 調査区北部のE6b2区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第15号ピット群P30を掘り込み、第158・164号住居、第281号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.40 m、短軸4.14 mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は39～44cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。北西コーナー部を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで125cmで、燃焼部幅は54cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に黄灰色粘土を主体とした第8・9層を積み上げて構築されている。火床部は床面を24cm掘りくぼめた部分に、ロームや焼土のブロックを含んだ第10・11層が埋土されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に29cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。



第 23 図 第 152 号住居跡実測図

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 黄灰色 焼土ブロック・黄灰色粘土ブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子多量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 10 赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 5 黄灰色 焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 6 明赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子微量 | |

ピット 8か所。P1～P4は深さ15～40cmで、配置から支柱穴である。P5～P8は深さ14～27cmで、いずれも性格不明である。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置し、長軸75cm、短軸65cmの不整長方形で、深さ15cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・黄灰色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
 2 黄褐色 ロームブロック多量

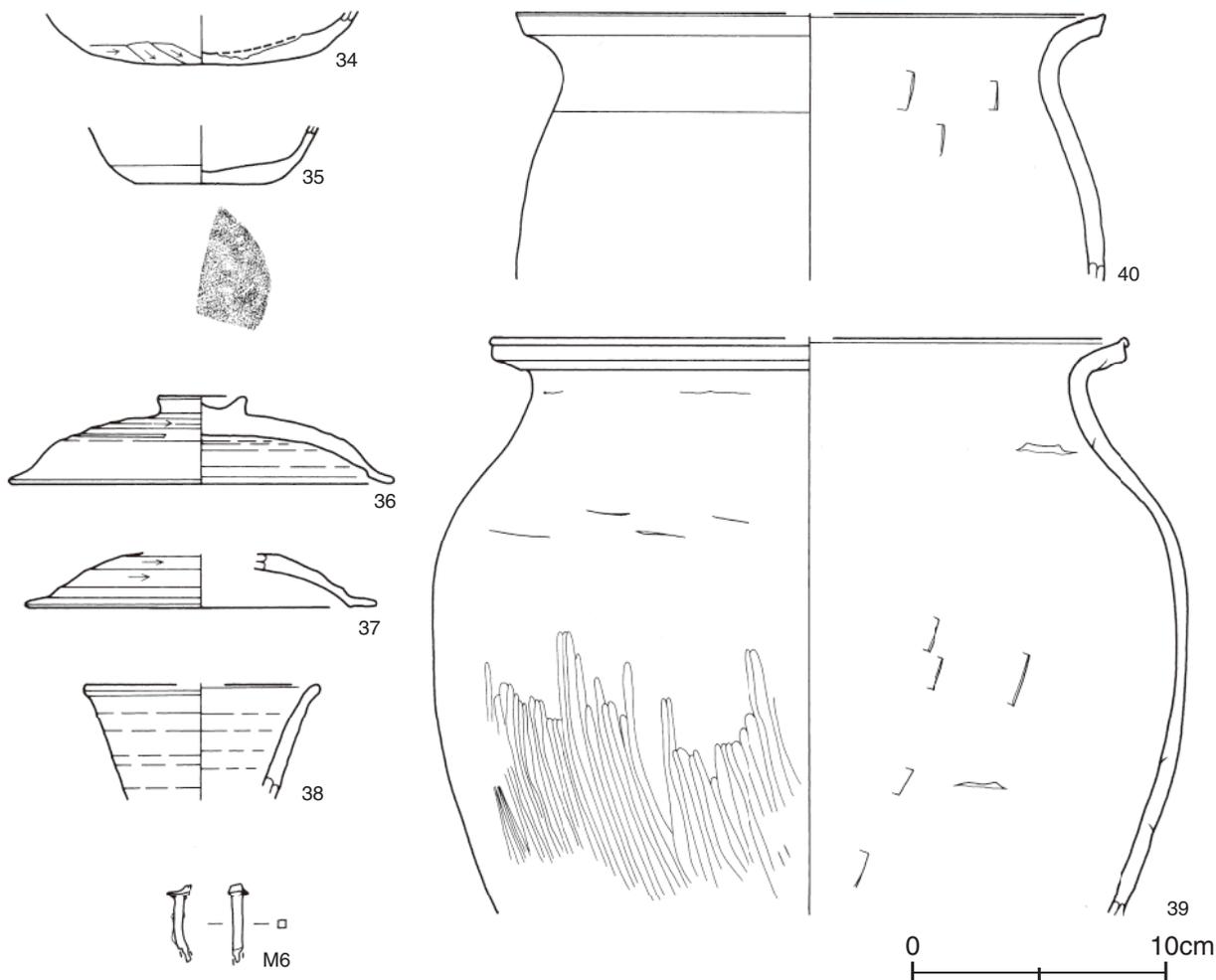
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
 2 黄褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
 5 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
 6 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片397点（坏30、甕類367）、須恵器片65点（坏34、蓋12、壺類1、瓶カ1、甕類17）、石器2点（砥石）、鉄製品1点（釘）のほか、鉄滓1点（31.0g）が、中央部の覆土下層を中心に出土している。また、混入した縄文土器片1点（深鉢）も出土している。39は西部の床面、34は南東部の覆土下層からそれぞれ出土しており、いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。40は中央部と南西部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。35・36は北東部、37は中央部の覆土中層、38は南東部の覆土上層、M6は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第24図 第152号住居跡出土遺物実測図

第 152 号住居跡出土遺物観察表（第 24 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	須恵器	坏	-	(2.1)	-	長石・雲母・砂粒	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	10%
35	須恵器	坏	-	(2.3)	[5.4]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部一方向のヘラ削り	覆土中層	10%
36	須恵器	蓋	[15.0]	3.5		長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土中層	50%
37	須恵器	蓋	[14.0]	(2.1)		長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	覆土中層	25%
38	須恵器	瓶カ	[9.0]	(4.6)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	口縁部内面自然釉付着	覆土上層	10%
39	土師器	甕	[25.8]	(23.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面上位ヘラナデ 中位から下位ヘラ磨き 内面輪積痕を残すヘラナデ	床面	25%
40	土師器	甕	[23.4]	(10.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土中層	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	釘	(3.2)	0.8	0.3	(1.5)	鉄	先端部一部欠損 断面方形	覆土中	

第 153 号住居跡（第 25 ～ 28 図）

位置 調査区中央部の E 5 f7 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 154 号住居，第 45 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 6.40 m，短軸 6.24 m の方形で，主軸方向は N - 6° - E である。壁高は 43 ～ 50cm で，直立している。

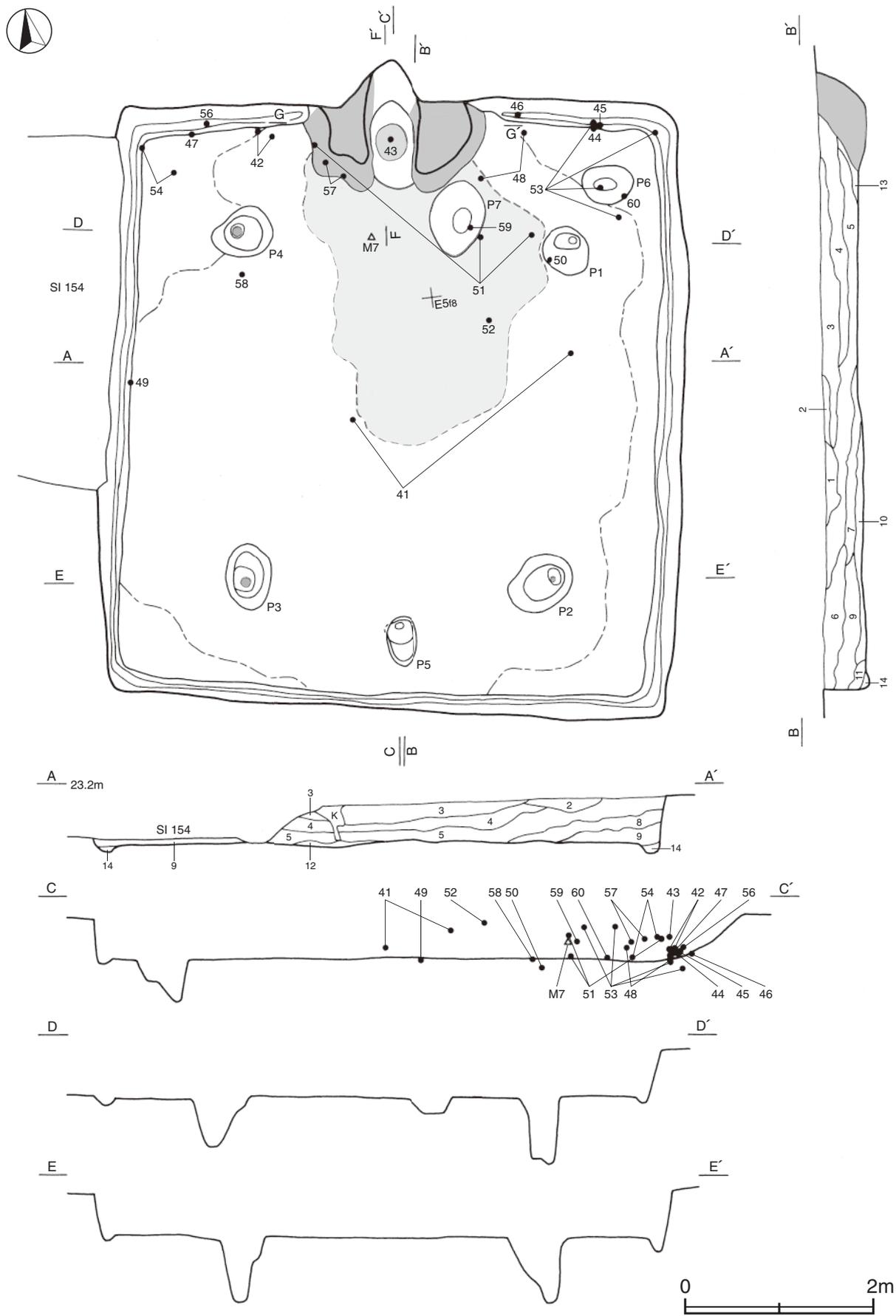
床 ほほ平坦な貼床で，コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。貼床は，ロームブロックを多く含んだ第 15 ～ 20 層を埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。竈前面には焼土の広がりを確認した。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 138cm で，燃焼部幅は 48cm である。袖部は，床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土を主体とした第 7 ～ 11 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 10cm くぼんでおり，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 47cm 掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。第 2 ～ 4 層は，袖部及び天井部の崩落土である。

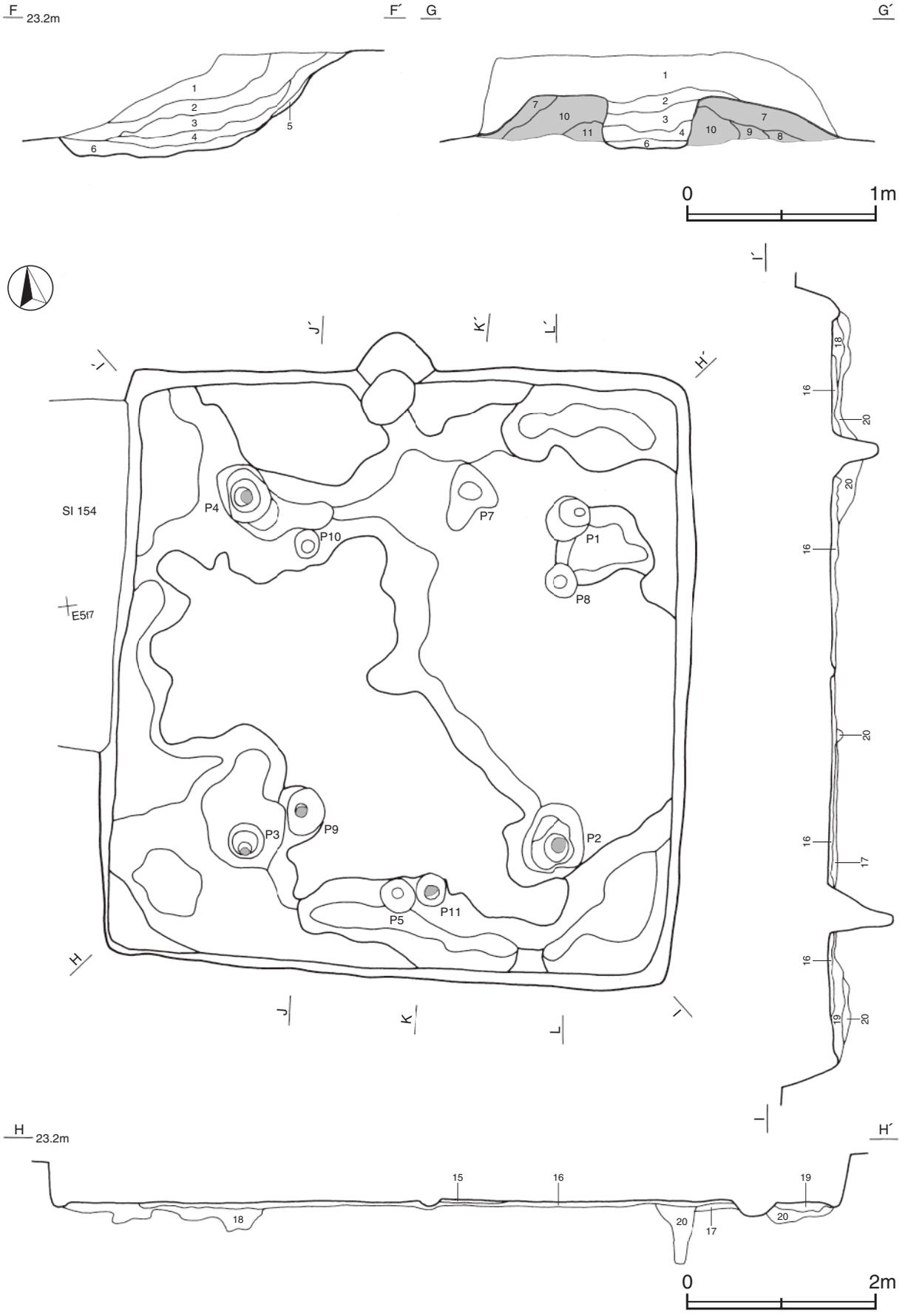
竈土層解説

1	暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	8	灰黄褐色	砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
2	暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量	9	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
3	灰褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量，炭化粒子微量	10	灰褐色	焼土ブロック中量，砂質粘土ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
4	暗赤褐色	焼土ブロック中量，炭化物・砂質粘土粒子微量	11	灰褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
5	暗赤褐色	焼土粒子中量，ロームブロック微量			
6	暗赤褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子微量			
7	暗褐色	砂質粘土粒子中量，炭化粒子少量，ロームブロック・焼土ブロック微量			

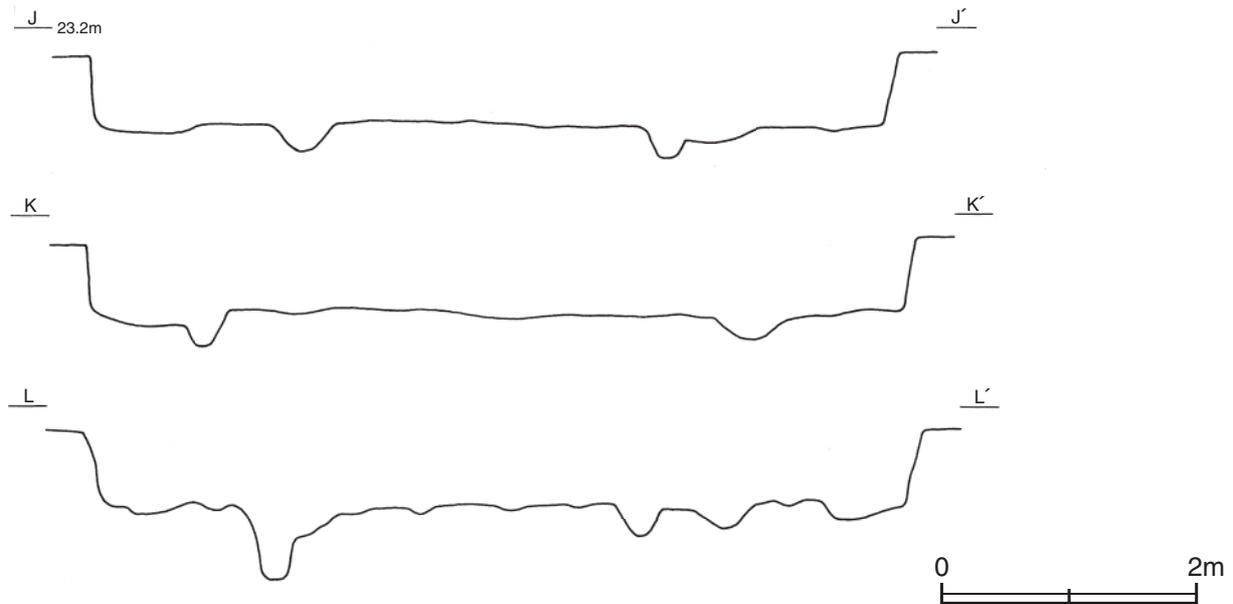
ピット 11 か所。P 1 ～ P 4 は深さ 53 ～ 71cm で，規模や配置から主柱穴である。P 5 は深さ 45cm で，南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6 は深さ 13cm で，北東コーナー部，P 7 は深さ 17cm で，竈右袖部前面にそれぞれ位置している。いずれも覆土中には焼土や炭化物が多く含まれていることから，竈から掻き出した灰を入れたピットと考えられる。P 8 ～ P 11 は貼床の下から確認できた。P 8 ～ P 10 は深さ 30 ～ 35cm で，P 1 ・ P 3 ・ P 4 の内側にそれぞれ位置しており，規模や配置から主柱穴である。また，P 11 は深さ 31cm で，P 5 の東側に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2 ～ P 4 ・ P 9 ・ P 11 の底面には，柱のあたりとみられる円形の硬化範囲が認められる。



第 25 图 第 153 号住居迹实测图 (1)



第 26 图 第 153 号住居跡実測图 (2)



第 27 図 第 153 号住居跡実測図 (3)

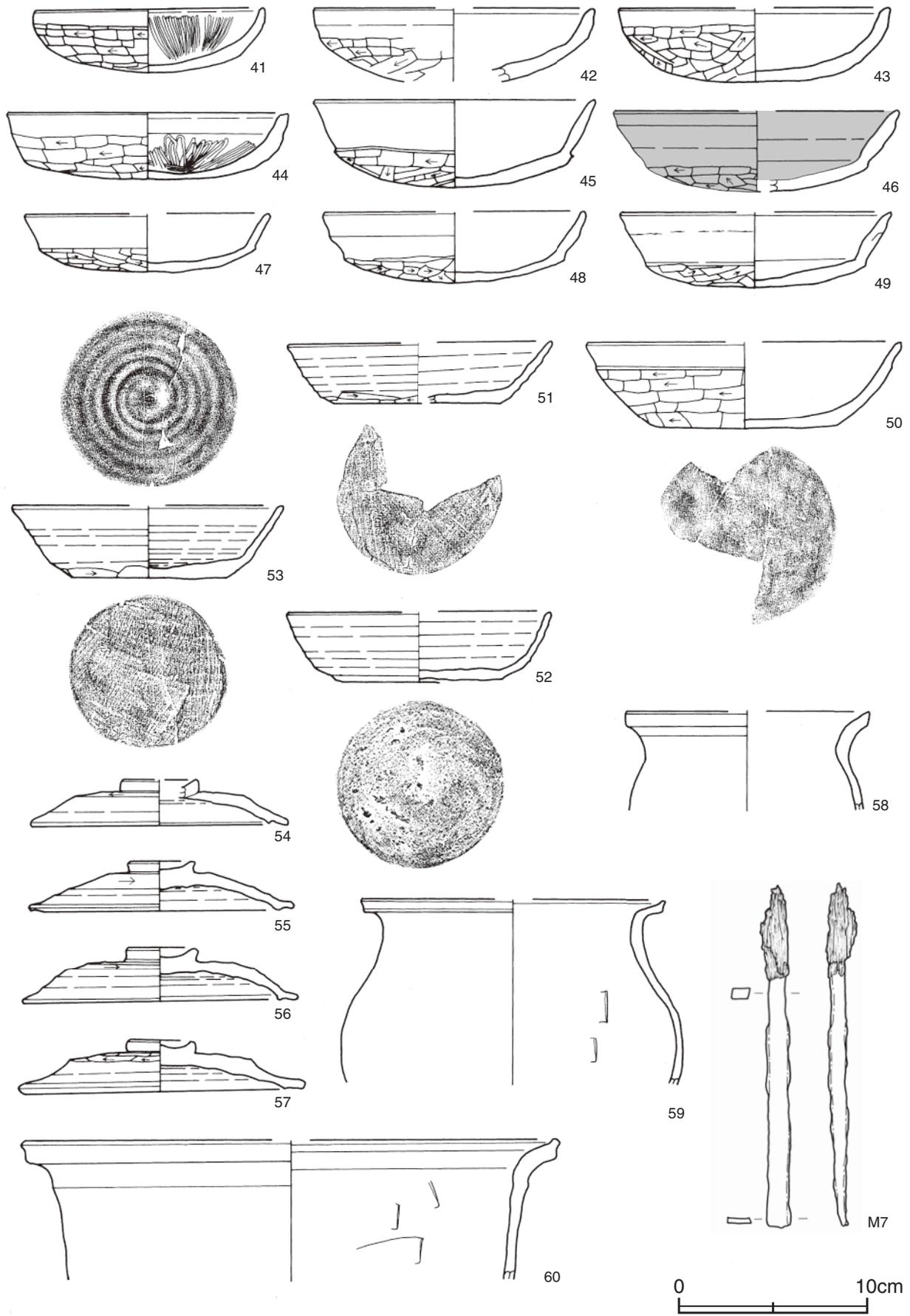
覆土 14 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、ブロック状に堆積していることから埋め戻されている。第 15～20 層は貼床の構築土である。

土層解説

1 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	13 暗褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗褐色	ロームブロック少量	16 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	17 褐色	ロームブロック多量
7 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	18 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	19 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	20 暗褐色	ロームブロック中量
10 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		
11 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片 1279 点 (坏 241, 鉢 3, 甕類 1024, 小形甕 2, 甑 9), 須恵器片 252 点 (坏 151, 蓋 53, 鉢 2, 瓶類 1, 甕類 44, 甑 1), 土製品 5 点 (支脚), 鉄製品 1 点 (鑿) が、北半部の覆土中層から下層にかけて出土している。また、混入した平安時代の土師器片 3 点 (高台付碗 2, 小皿 1) も出土している。58 は北西部, 60 は北東部の床面からそれぞれ出土している。44・45 は北東部壁際の覆土下層から斜位の状態で出土しており、ほぼ完形である。いずれも廃絶時に遺棄されたものと考えられる。46 は北東部壁際, 48 は北東部, 49 は西部壁際, 42・47・56 は北西部壁際, 50 は P 1 の覆土上層からそれぞれ出土しており、いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。41 は中央部と東部, 53 は北東部, 51 は北東部と竈, 54 は北西部壁際の覆土上層から下層にかけてそれぞれ出土した破片が接合したものである。43・57 は竈, 59・M 7 は竈前の覆土中層, 52 は中央部の覆土上層, 55 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 竈前面の焼土の広がりや覆土中に焼土や炭化物が含まれていることから焼失住居の可能性がある。掘方で確認できたピットの配置から、本跡は西側へ拡張されたものと考えられる。拡張前の床は確認できないが、規模や形状は柱穴の配置から、一辺が 5.4 m の方形と推定できる。掘方から出土した土器は、いずれも細片であるが、丸底の須恵器坏片や横位の平行叩きが施された須恵器甕片が主体である。時期は、出土土器から拡張前、拡張後ともに 8 世紀前葉に比定できる。



第 28 图 第 153 号住居跡出土遺物実測図

第 153 号住居跡出土遺物観察表（第 28 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師器	坏	12.2	3.5		長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中層・下層	60%
42	土師器	坏	[15.0]	(3.9)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	30%
43	土師器	坏	[14.6]	4.0		長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	竈覆土中層	45%
44	土師器	坏	14.9	3.7		長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	95% PL37
45	土師器	坏	15.0	4.7		長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	90% PL37
46	土師器	坏	[15.0]	4.3		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	65% PL37
47	土師器	坏	[12.8]	3.1		長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	35%
48	土師器	坏	[13.8]	4.8		長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	45%
49	土師器	坏	[14.4]	4.1		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	40%
50	土師器	坏	[16.8]	4.7	[9.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ 底部一方向のヘラ削り	P 1 覆土上層	50%
51	須恵器	坏	[14.0]	3.4	8.8	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	竈覆土中層 覆土中層・下層	50%
52	須恵器	坏	[13.9]	3.7	8.9	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り痕を残す	覆土上層	70% PL37
53	須恵器	坏	[14.3]	4.0	8.2	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り 内面・底面にヘラ書き「×」	覆土上層～下層	60% PL37
54	須恵器	蓋	[13.6]	2.4		長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土中層・下層	40%
55	須恵器	蓋	[14.2]	2.6		長石・雲母	灰白	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土中	30%
56	須恵器	蓋	[14.6]	2.9		長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土下層	40%
57	須恵器	蓋	[15.1]	3.8		長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	天井部手持ちヘラ削り後、つまみ貼り付け	竈覆土中層	60% PL37
58	土師器	小形甕	[13.0]	(5.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	床面	10%
59	土師器	小形甕	[16.4]	(9.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土中層	15%
60	土師器	甌	[28.4]	(7.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 7	鑿	18.5	1.5	0.2～0.6	62.9	鉄	完形 先端部断面三角形 他は断面長方形	覆土中層	PL51

第 163 号住居跡（第 29 図）

位置 調査区中央部の E 6 d2 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 156・162 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は 3.53 m で、東西軸は主柱穴の配置や北西と南西のコーナー部から 3.65 m と推定でき、平面形は方形である。主軸方向は N - 5° - W である。壁高は 27 ～ 35 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁西寄りに付設されている。竈の東半部を第 162 号住居に掘り込まれているため、焚口部から煙道部まで 35 cm、燃焼部幅 20 cm しか確認できなかった。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土を主体とした第 6 ～ 8 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。第 4 層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------------|----------|--------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子少量 | 6 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 7 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 8 にぶい黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 4 灰褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | | |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | | |

ピット 5 か所。P 1 ～ P 4 は深さ 43 ～ 48 cm で、規模や配置から主柱穴である。P 5 は深さ 17 cm で、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

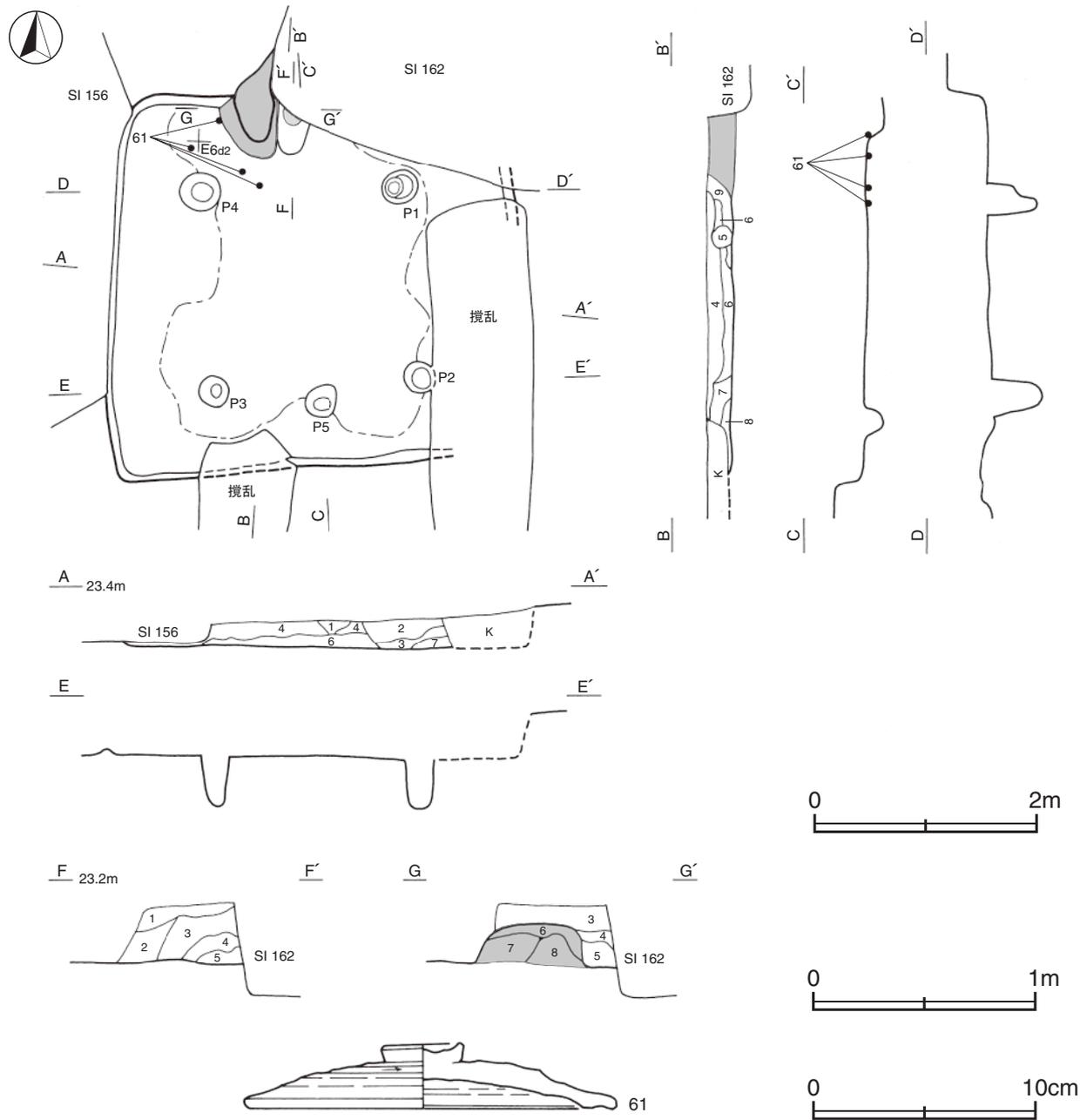
覆土 9層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 炭化物・ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 87 点 (坏 10, 甕類 75, 甑 1, 手捏 1), 須恵器片 21 点 (坏 10, 蓋 2, 甕類 9) が出土している。また, 混入した平安時代の土師器片 1 点 (小皿) も出土している。61 は竈左袖部周辺の床面から出土した破片が接合したものであり, 廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉に比定できる。



第 29 図 第 163 号住居跡・出土遺物実測図

第 163 号住居跡出土遺物観察表 (第 29 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
61	須恵器	蓋	16.5	2.9		長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	床面	95% PL36

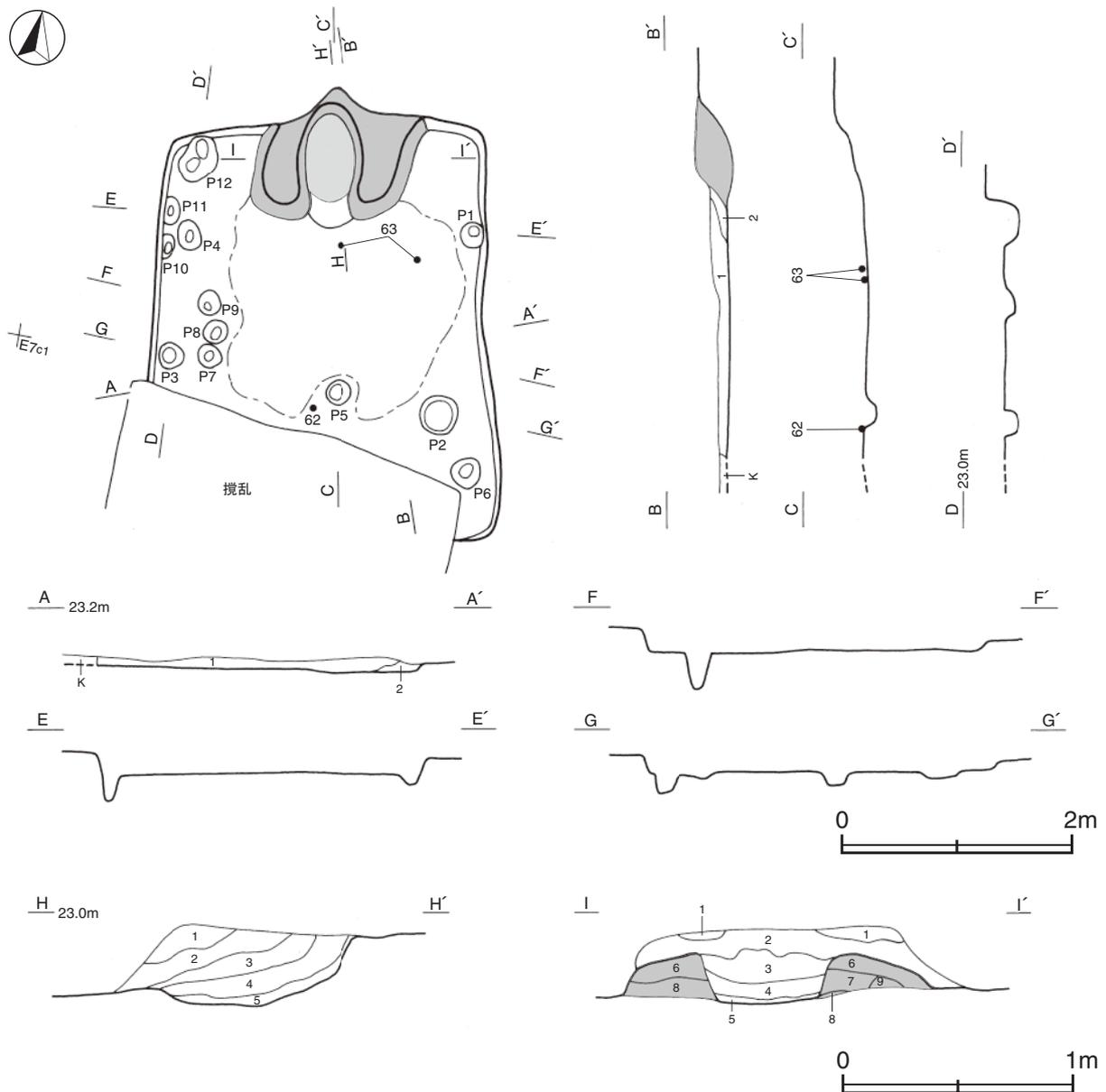
第 166 号住居跡 (第 30・31 図)

位置 調査区東部の E 7 b1 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 13 号ピット群 P 19 に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.69 m, 短軸 2.88 m の長方形で, 主軸方向は N - 8° - W である。壁高は 8 ~ 20 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。



第 30 図 第 166 号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで126cmで、燃焼部幅は44cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に黄灰色砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第6～9層を積み上げて構築されている。火床部は床面から6cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に31cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック・黄灰色砂質粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子多量、炭化粒子少量 | 7 赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子多量 |
| 3 赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 黄褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子多量、ロームブロック少量 | 9 黄灰色 | 黄灰色砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 12か所。P1～P4は深さ6～18cmで、配置から主柱穴である。P5～P12は深さ10～34cmで、いずれも性格不明である。

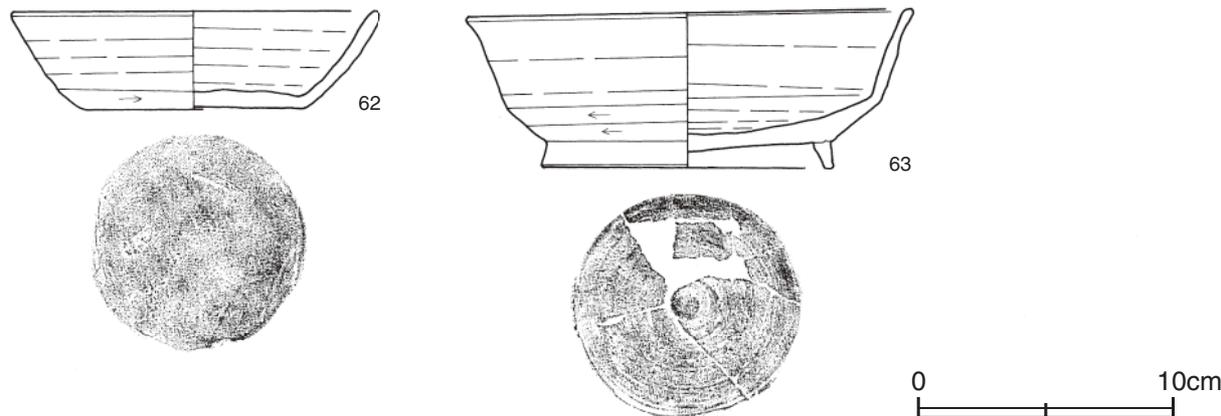
覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 2 暗褐色 | ロームブロック多量 |
|-------|-----------|-------|-----------|

遺物出土状況 土師器片44点（甕類）、須恵器片15点（坏8、高台付坏1、蓋1、甕類5）、鉄製品1点（釘）が出土している。62は南部の覆土下層から正位の状態で出土しており、63は中央部と東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第31図 第166号住居跡出土遺物実測図

第166号住居跡出土遺物観察表（第31図）

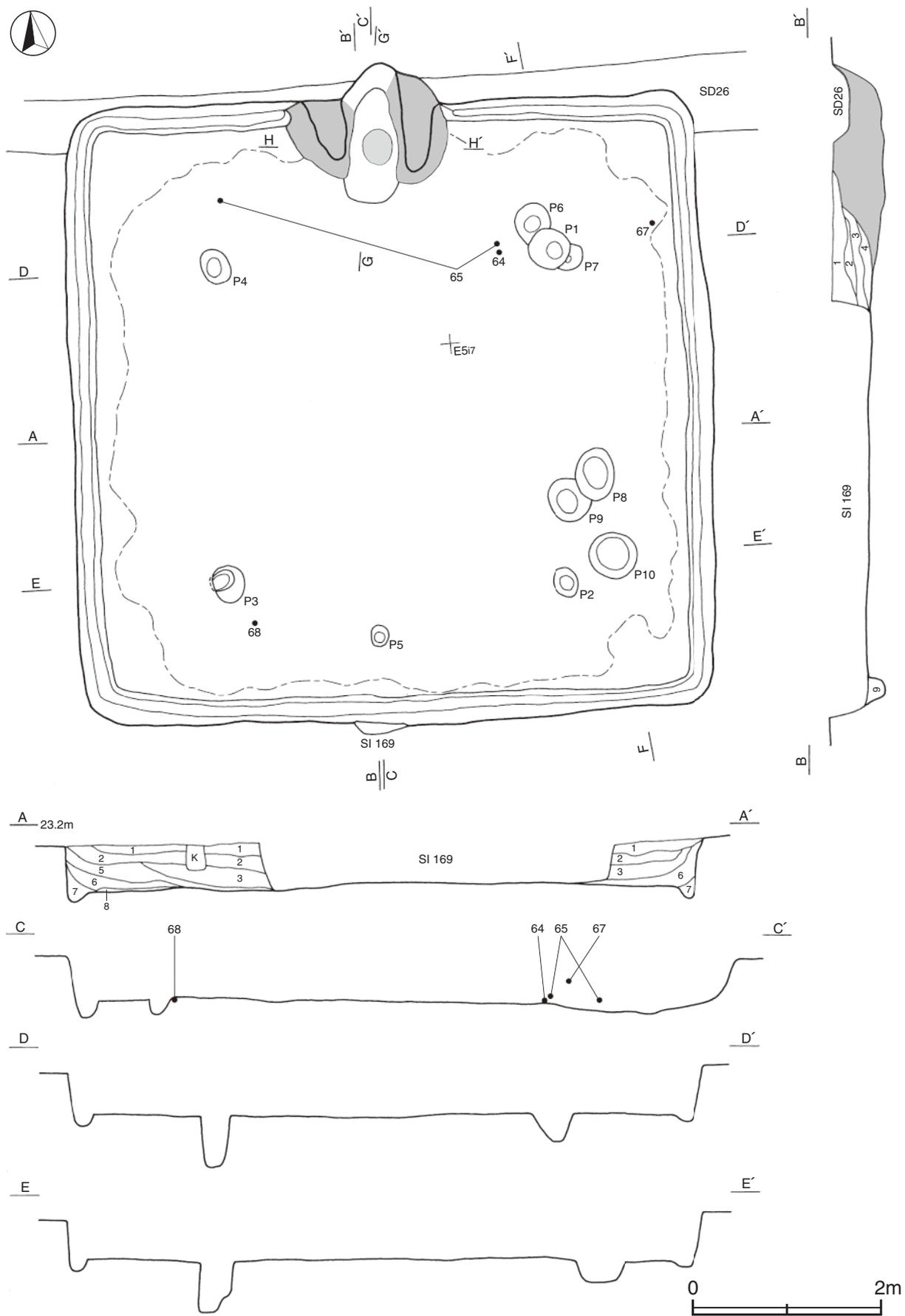
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
62	須恵器	坏	14.3	3.9	8.5	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り後、ナデ	底部多方向のヘラ削り	覆土下層	75% PL37
63	須恵器	高台付坏	17.5	6.3	[11.4]	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り後、高台貼り付け	底部回転ヘラ削り後、	覆土下層	75% PL37

第167号住居跡（第32・33図）

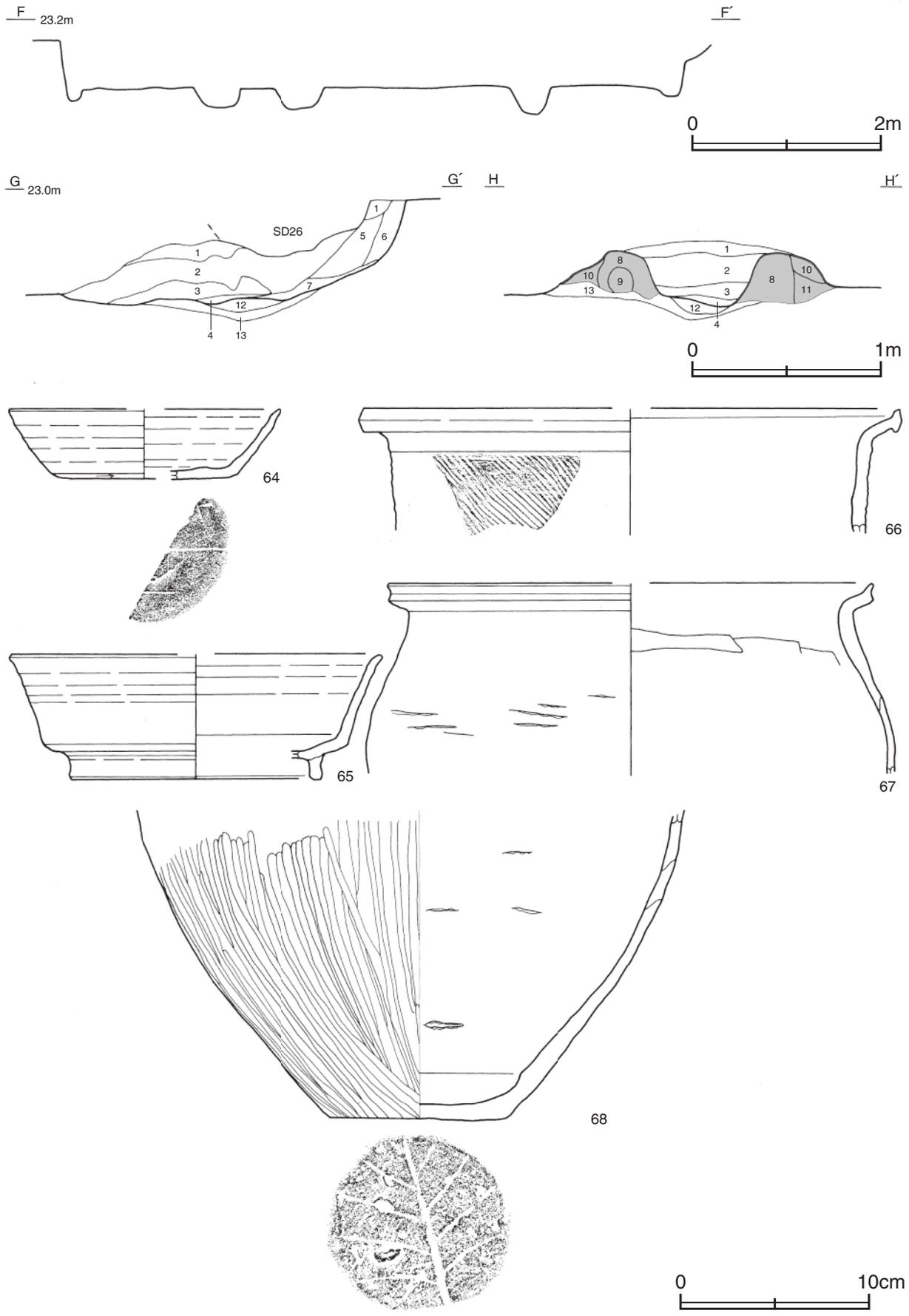
位置 調査区南部のE5i6区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第169号住居、第26号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.90m、短軸6.70mの方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は41～55cmで、直立している。



第 32 图 第 167 号住居迹实测图



第 33 图 第 167 号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 152cmで、燃焼部幅は 55cmである。袖部は、床面を 15cm掘りくぼめた部分にロームや焼土を含んだ第 12・13 層を埋土し、その上に砂質粘土を主体とした第 8～11 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 5 cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 42cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9 灰褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量
2 にぶい褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
3 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	11 暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ロームブロック微量
4 極暗赤褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック微量	12 褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
5 暗褐色	砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量	13 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量
6 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量		
7 黒褐色	砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量		
8 灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量		

ピット 10 か所。P 1～P 4 は深さ 28～58cmで、規模や配置から支柱穴である。P 5 は深さ 17cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6～P 10 は深さ 17～42cmで、いずれも性格不明である。

覆土 9 層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	5 暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	6 暗褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7 褐色	ローム粒子多量
4 灰褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	8 褐色	ロームブロック多量
		9 黒褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 829 点（坏 93, 甕類 736）、須恵器片 251 点（坏 142, 高台付坏 1, 蓋 14, 盤 5, 鉢 1, 長頸瓶 2, 甕類 86）のほか、鉄滓 1 点（63.9 g）が、全面の覆土上層から下層にかけて出土している。また、混入した平安時代の土師器片 7 点（高台付碗）も出土している。64 は北東部の覆土下層から出土している。65 は竈前、68 は南西部の床面と覆土中からそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。67 は北東部の覆土中層、66 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。

第 167 号住居跡出土遺物観察表（第 33 図）

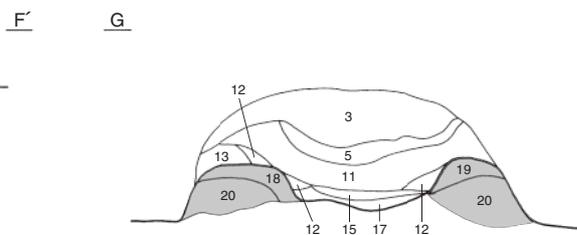
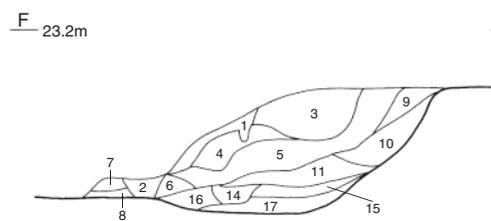
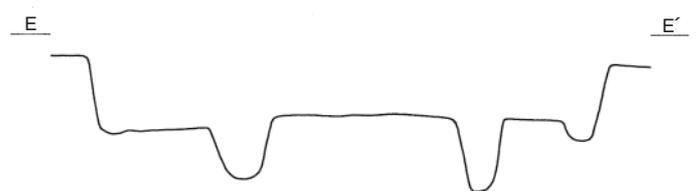
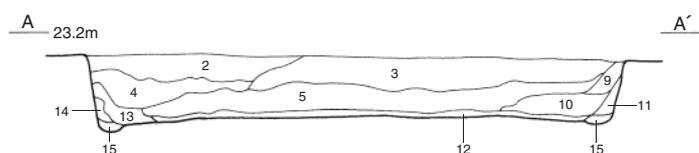
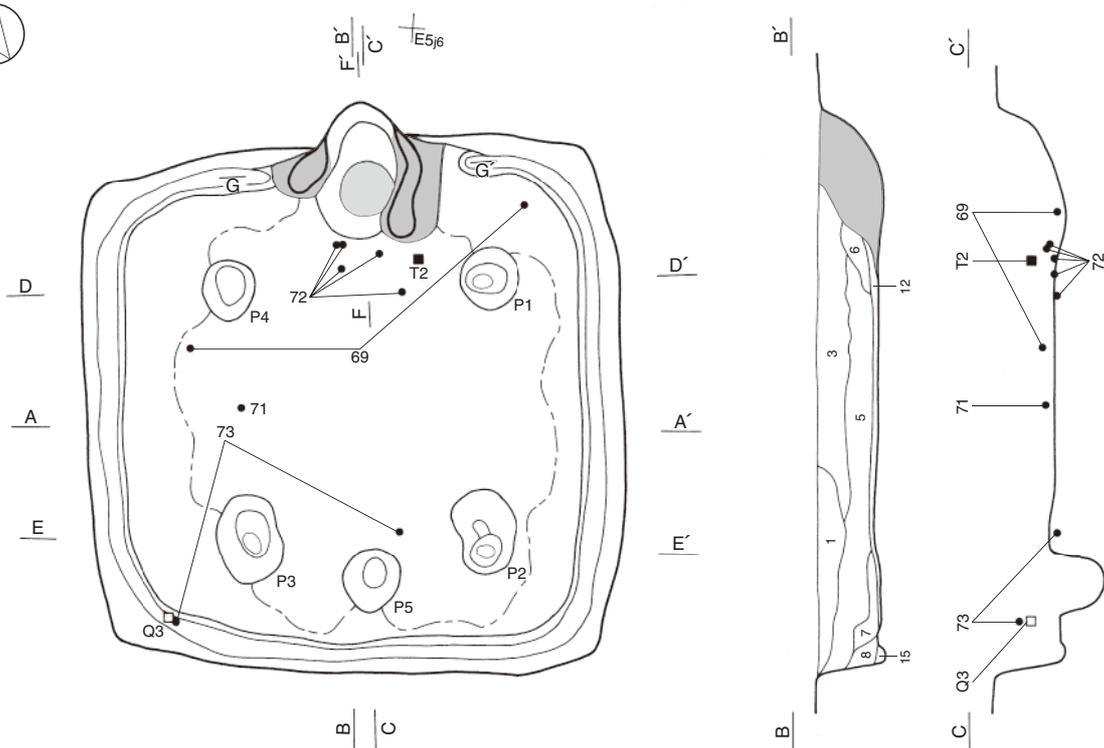
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
64	須恵器	坏	[14.4]	3.7	[9.0]	長石・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	30%
65	須恵器	高台付坏	[19.6]	6.7	[13.2]	長石・石英・赤色粒子	暗灰黄	普通	高台貼り付け	床面 覆土中	30%
66	須恵器	鉢	[28.6]	(6.7)	-	長石・雲母	灰	普通	体部斜位の平行叩き 内面ナデ	覆土中	10%
67	土師器	甕	[25.8]	(10.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ痕を残すナデ 内面ヘラナデ	覆土中層	10%
68	土師器	甕	-	(16.7)	9.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き 内面輪積痕を残すナデ 底部木葉痕	床面 覆土中	40%

第 170 号住居跡（第 34～36 図）

位置 調査区南西部の E 5 j5 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 4.29 m、短軸 4.26 m の隅丸方形で、主軸方向は N-5°-W である。壁高は 45～60cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。



第 34 图 第 170 号住居迹实测图

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで109cmで、燃焼部幅は50cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし、その上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第18～20層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に31cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第4～13層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12 灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
2 黒褐色	炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量	13 黒褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
3 暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	14 極暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	15 明赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
5 灰褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	16 赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量
6 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	17 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
7 灰褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	18 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
8 暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	19 黒褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量
9 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	20 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
10 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量		
11 暗赤色	ロームブロック多量、炭化物・ローム粒子微量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ40～57cmで、規模や配置から主柱穴である。P5は深さ41cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

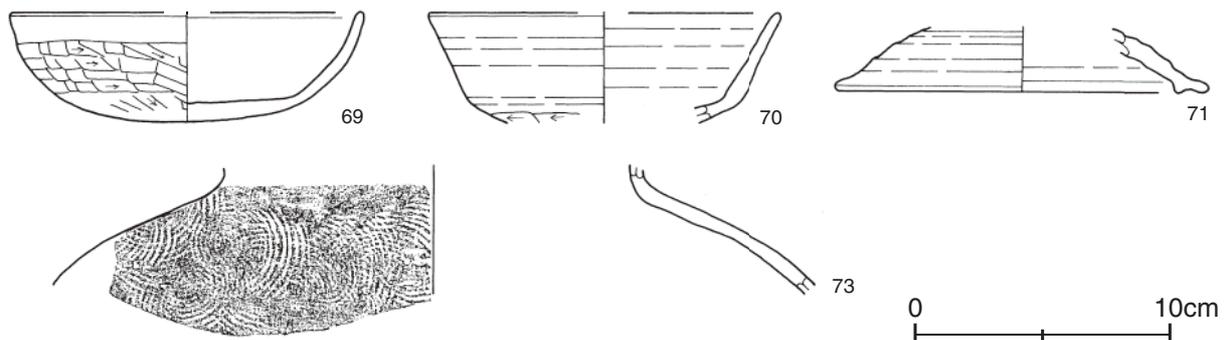
覆土 15層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

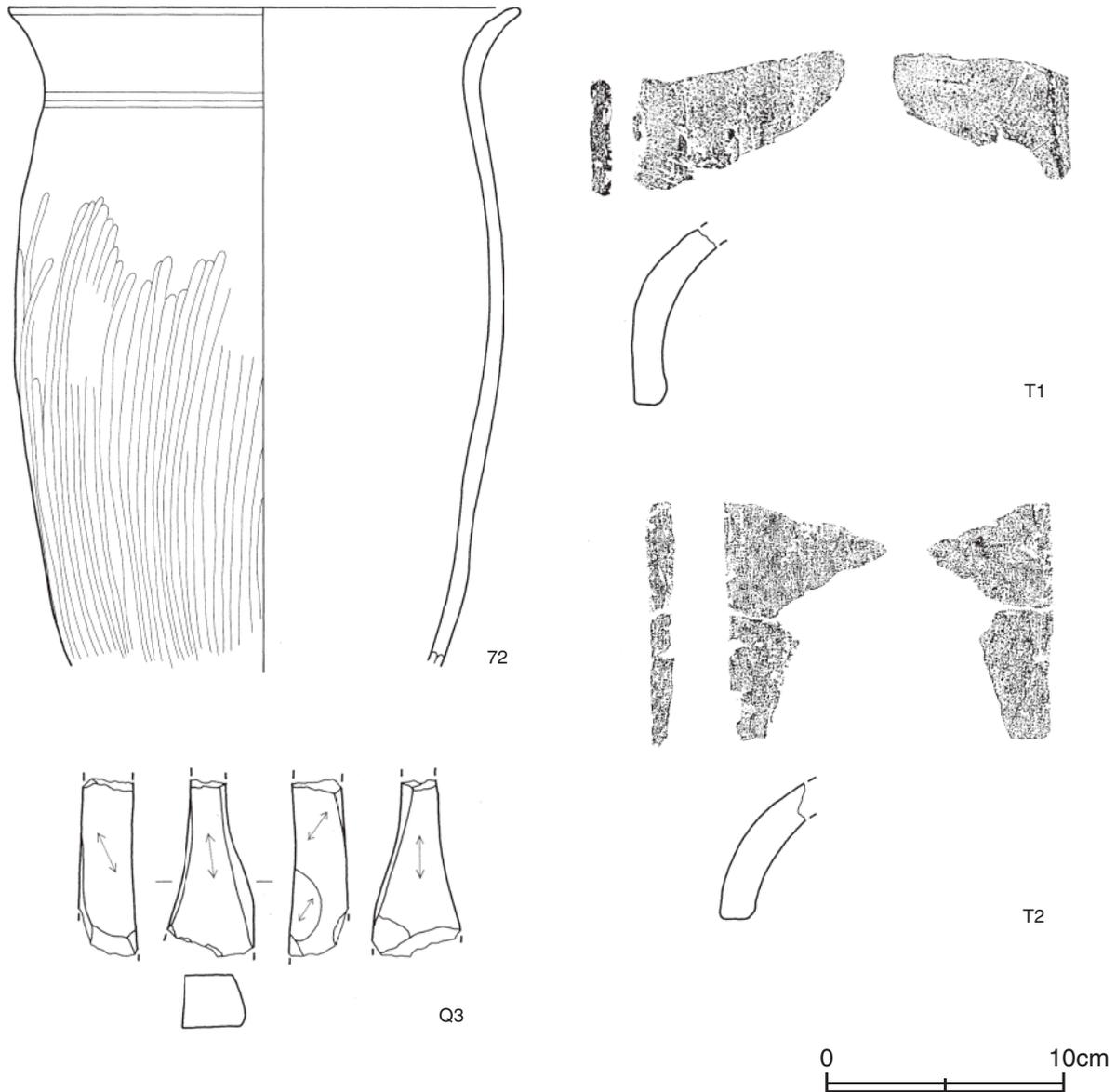
1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子中量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	10 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
4 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	11 褐色	ローム粒子多量
5 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	12 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子微量
		15 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片353点（坏24、甕類329）、須恵器片62点（坏35、蓋13、長頸壺1、甕類13）、石器1点（砥石）のほか、瓦片5点（丸瓦）、鉄滓1点（12.7g）が、全面の覆土中層から下層にかけて出土している。71は西部の覆土下層から出土している。69は北東部の床面と西部の覆土下層、72は竈前の床面と覆土下層、73は南部の床面と南西部壁際の覆土中層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。70・T1は覆土中、T2は竈前の覆土下層、Q3は南西部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第35図 第170号住居跡出土遺物実測図（1）



第36図 第170号住居跡出土遺物実測図(2)

第170号住居跡出土遺物観察表(第35・36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
69	土師器	坏	[13.8]	4.4		長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	床面 覆土下層	50%
70	須恵器	坏	[13.7]	(4.4)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	10%
71	須恵器	蓋	[14.6]	(2.6)		長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	つまみ貼り付け痕	覆土下層	10%
72	土師器	甕	21.7	(28.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ナデ	床面 覆土下層	80% PL37
73	須恵器	甕	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部同心円状の叩き 内面ナデ	床面 覆土中層	10%

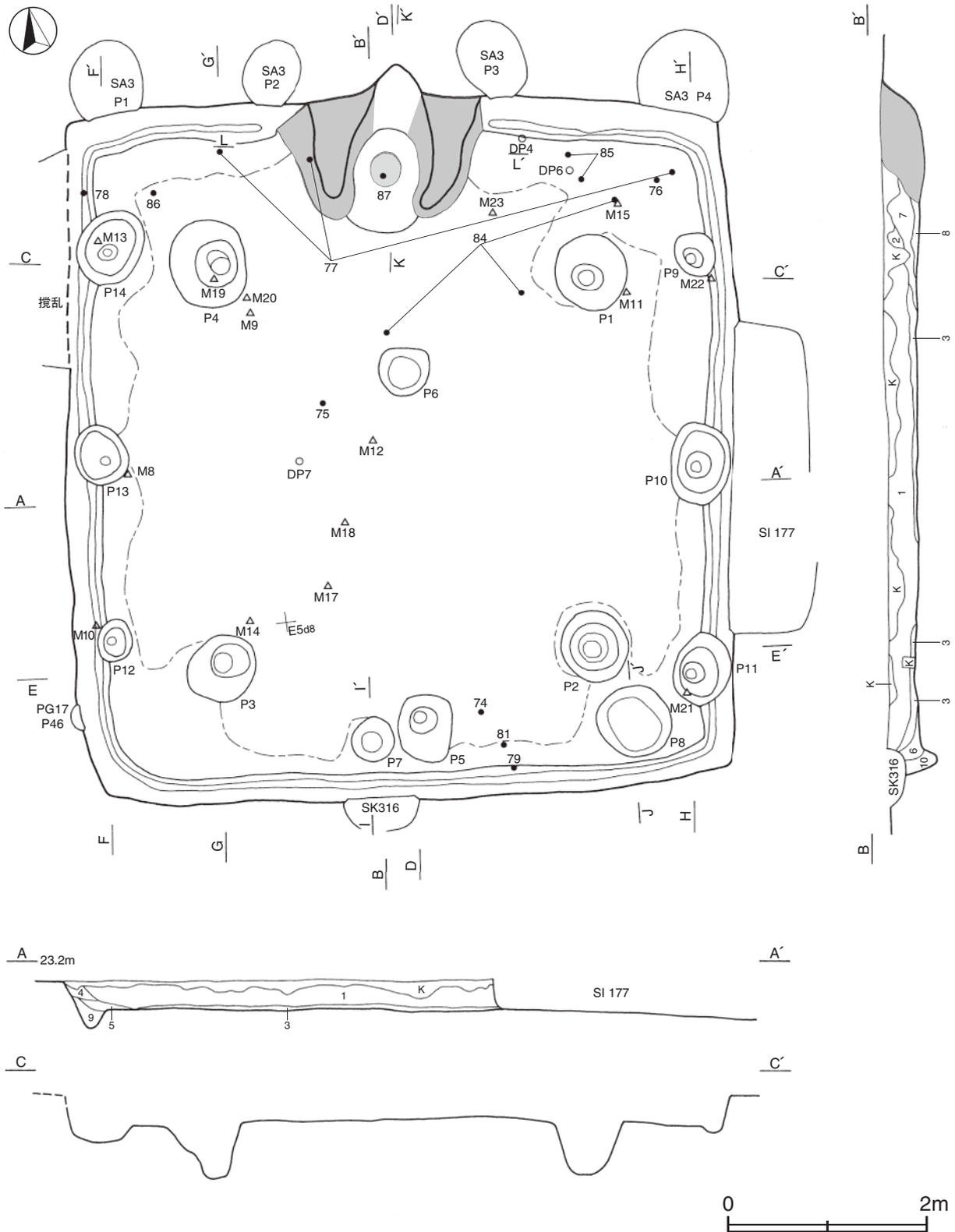
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	砥石	(7.6)	(3.7)	(2.5)	(72.2)	凝灰岩	砥面4面 他は破断面	覆土中層	PL49

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
T1	丸瓦	(6.8)	(3.6)	(12~15)	(71.5)	長石・石英・雲母	凹面ナデ 凸面ヘラ削り	覆土中	
T2	丸瓦	(10.5)	(3.6)	(13~16)	(81.5)	長石・石英・雲母	凹面・凸面ナデ	覆土下層	

第 171 号住居跡 (第 37 ~ 40 図)

位置 調査区中央部の E 5 c8 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

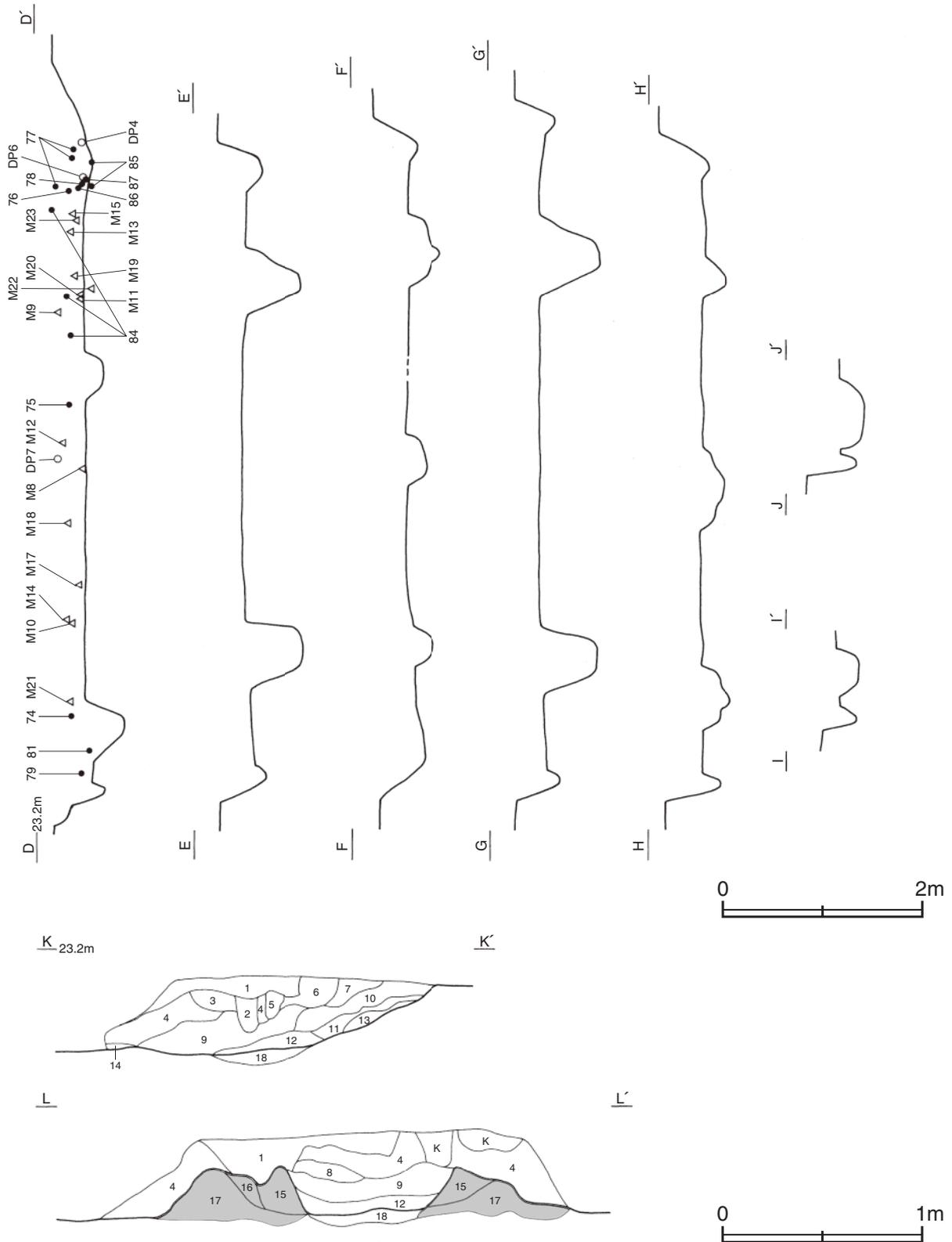
重複関係 第 177 号住居, 第 316 号土坑, 第 3 号柱列, 第 17 号ピット群 P 46 に掘り込まれている。



第 37 図 第 171 号住居跡実測図 (1)

規模と形状 長軸 7.12 m, 短軸 6.68 m の方形で, 主軸方向は $N - 10^\circ - E$ である。壁高は 29 ~ 44cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。



第 38 図 第 171 号住居跡実測図 (2)

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 175cmで、 燃焼部幅は 68cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土混じりのロームを主体とした第 15～17層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 7cm掘りくぼめた部分に、 焼土粒子を含んだ第 18層が埋土されており、 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 33cm掘り込まれ、 火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	11 暗 褐 色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	12 にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子微量
3 暗 褐 色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	13 褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗 褐 色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量	14 黒 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	15 灰 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
6 にぶい褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	16 灰 褐 色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
7 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	17 暗 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
8 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子微量	18 褐 色	焼土粒子少量、ロームブロック微量
9 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量		
10 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

ピット 14か所。P 1～P 4は深さ 54～58cmで、 規模や配置から主柱穴である。P 5は深さ 47cmで、 南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 9～P 14は深さ 22～34cmで、 東壁及び西壁に等間隔に配置されており、 柱穴の可能性が考えられる。P 6～P 8は深さ 21～31cmで、 いずれも性格不明である。

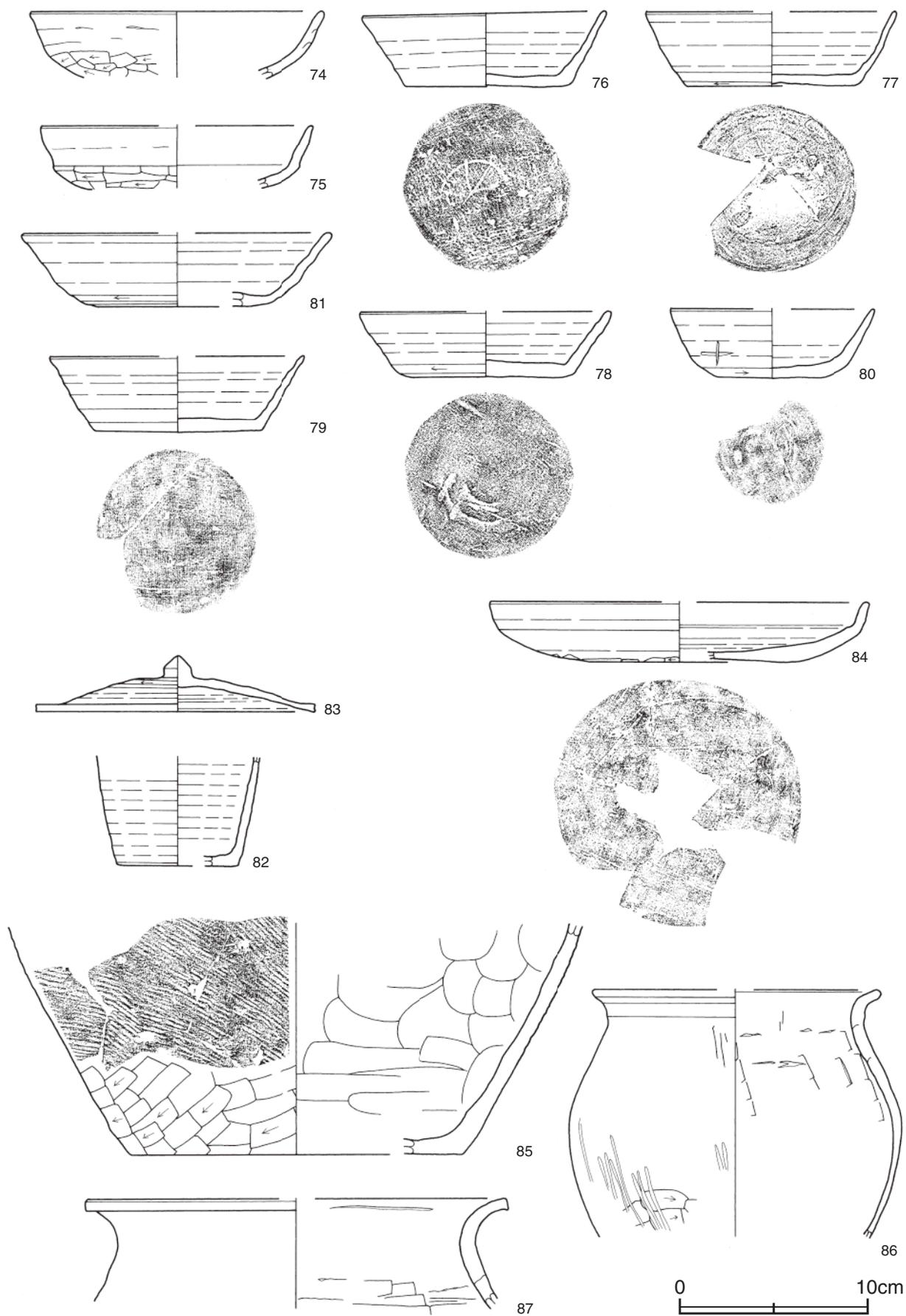
覆土 10層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

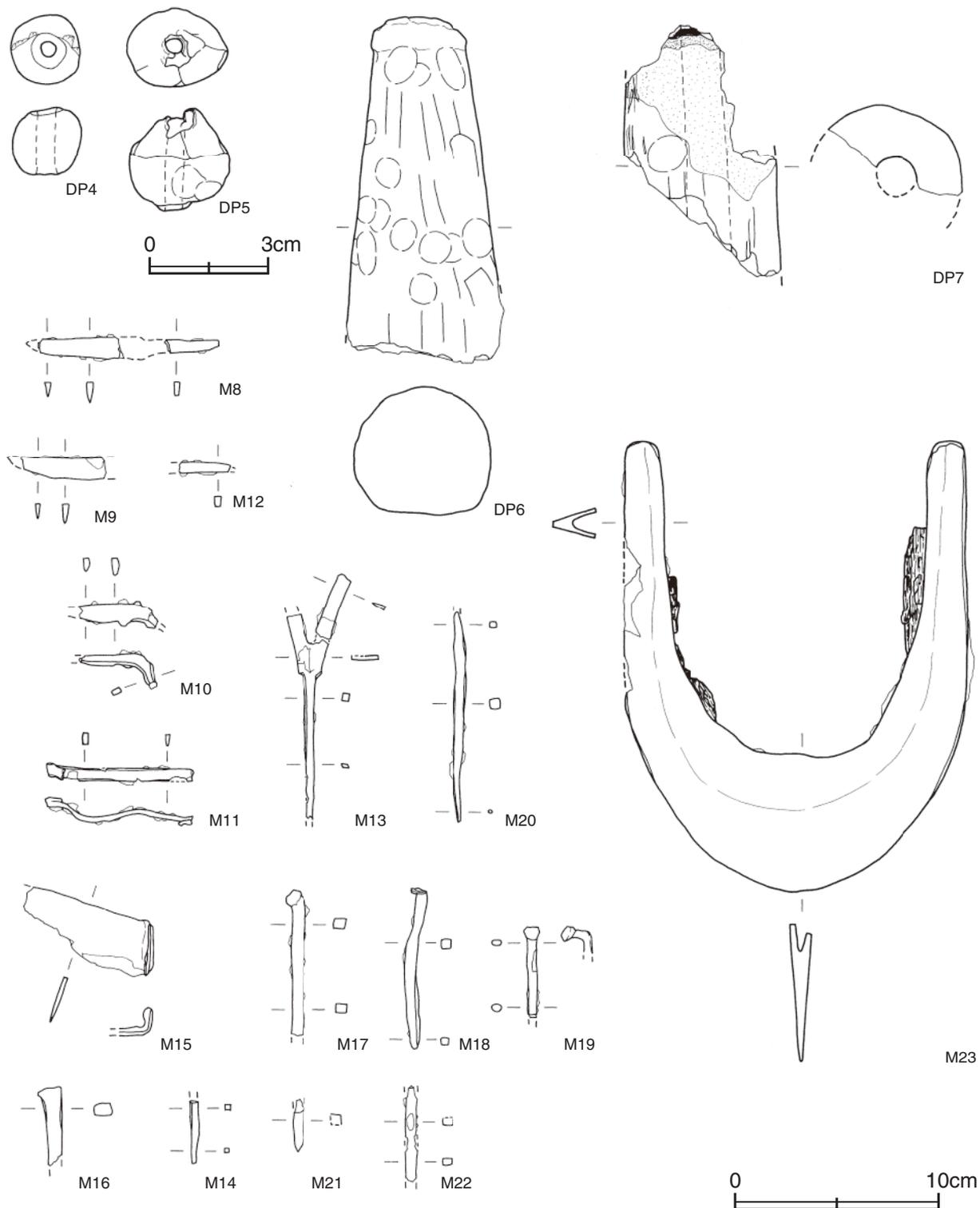
1 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	6 灰 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量	7 灰 褐 色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック微量
3 暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子微量	8 灰 褐 色	焼土ブロック中量、ローム粒子微量
4 褐 色	ロームブロック中量	9 灰 褐 色	ロームブロック中量
5 黒 褐 色	ローム粒子・焼土粒子微量	10 褐 色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 4328点（坏 332、甕類 3994、手捏 2）、須恵器片 1024点（坏 712、高台付坏 2、蓋 50、盤 2、無台盤 1、高盤 2、鉢 1、長頸瓶 6、壺類 3、甕類 235、甌 5、コップ形 5）、土製品 10点（土玉 2、支脚 5、羽口 3）、鉄製品 23点（刀子 7、鋸 2、鎌 1、釘 12、鋤先 1）のほか、鉄滓 5点（236.9g）が、 全面の覆土上層から下層にかけて出土している。また、混入した縄文土器片 1点（深鉢）、平安時代の土師器片 1点（高台付椀）、灰釉陶器片 2点（椀、長頸瓶）、陶器片 2点（播鉢、天目茶碗）、磁器片 6点（碗）も出土している。81は南部壁際、M22は北東部壁際の床面、87は竈の覆土下層から出土している。M23は北東部の覆土下層から立位の状態で出土している。いずれも廃絶時に遺棄されたものと考えられる。78は北西部壁際、79は南部壁際、85・DP 4は北東部壁際、86・M20は北西部、M 8は西部壁際、DP 6・M 11・M15は北東部、M17は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。74は南部、75・M18は中央部、76は北東コーナー部、M 13は北西部壁際、M19は北西部、M10は南西部壁際、M14は南西部、M21は南東部壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。77は北西部と北東部、84は中央部と北東部の覆土上層から中層にかけてそれぞれ出土した破片が接合したものである。DP 7、M12は中央部、M 9は北西部の覆土上層からそれぞれ出土している。80・82・83・DP 5・M 16は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 8世紀中葉に比定できる。



第 39 图 第 171 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第40図 第171号住居跡出土遺物実測図(2)

第171号住居跡出土遺物観察表(第39・40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
74	土師器	坏	15.6	(3.6)		長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面輪積痕を残す横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土中層	45%
75	土師器	坏	[14.6]	(3.4)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土中層	25%
76	須恵器	坏	13.1	3.6	8.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	底部多方向のヘラ削り ヘラ記号「↑」	覆土中層	80% PL38

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
77	須恵器	坏	[13.4]	4.0	9.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土上層・中層	70% PL38
78	須恵器	坏	[13.4]	3.6	8.8	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	65% PL38
79	須恵器	坏	[13.6]	4.1	9.0	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端ナデ 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	65% PL38
80	須恵器	坏	[10.8]	3.7	6.0	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 体部にヘラ記号「+」	覆土中	45%
81	須恵器	坏	[16.2]	4.0	[8.2]	長石・石英	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	15%
82	須恵器	コップ形	-	(5.9)	[6.6]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	10% PL38
83	須恵器	蓋	14.9	3.0		長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土中	50% PL38
84	須恵器	無台盤	[20.2]	3.3	13.1	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土上層・中層	50% PL38
85	須恵器	鉢	-	(12.9)	[17.8]	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部斜位の平行叩き 下端ヘラ削り 内面無文の当て具痕 ナデ	覆土下層	20%
86	土師器	甕	[15.2]	(13.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面上位ヘラナデ 中位から下位ヘラ削り後、ヘラ磨き 内面輪積痕を残すヘラナデ	覆土下層	20%
87	土師器	甕	[22.2]	(5.9)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面輪積痕を残すヘラナデ	竈覆土下層	10%

番号	器 種	長さ	幅	孔径	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP 4	土玉	1.7	1.7	0.4~0.5	4.16	雲母・赤色粒子	ナデ 一方向からの穿孔 火を受けている	覆土下層	PL48
DP 5	土玉	1.9	2.5	0.5	8.85	長石・石英・雲母	ナデ 指頭痕 一方向からの穿孔	覆土中	PL48

番号	器 種	最小径	最大径	高さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP 6	支脚	4.6	7.5	(17.3)	(660)	長石・石英・雲母・黒色粒子	ヘラナデ 指頭痕 火を受けている	覆土下層	PL48

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP 7	羽口	(12.4)	7.7	(6.3)	(220)	長石・石英・雲母・黒色粒子	先端部溶融物付着 ナデ 棒状の工具痕 指頭痕	覆土上層	

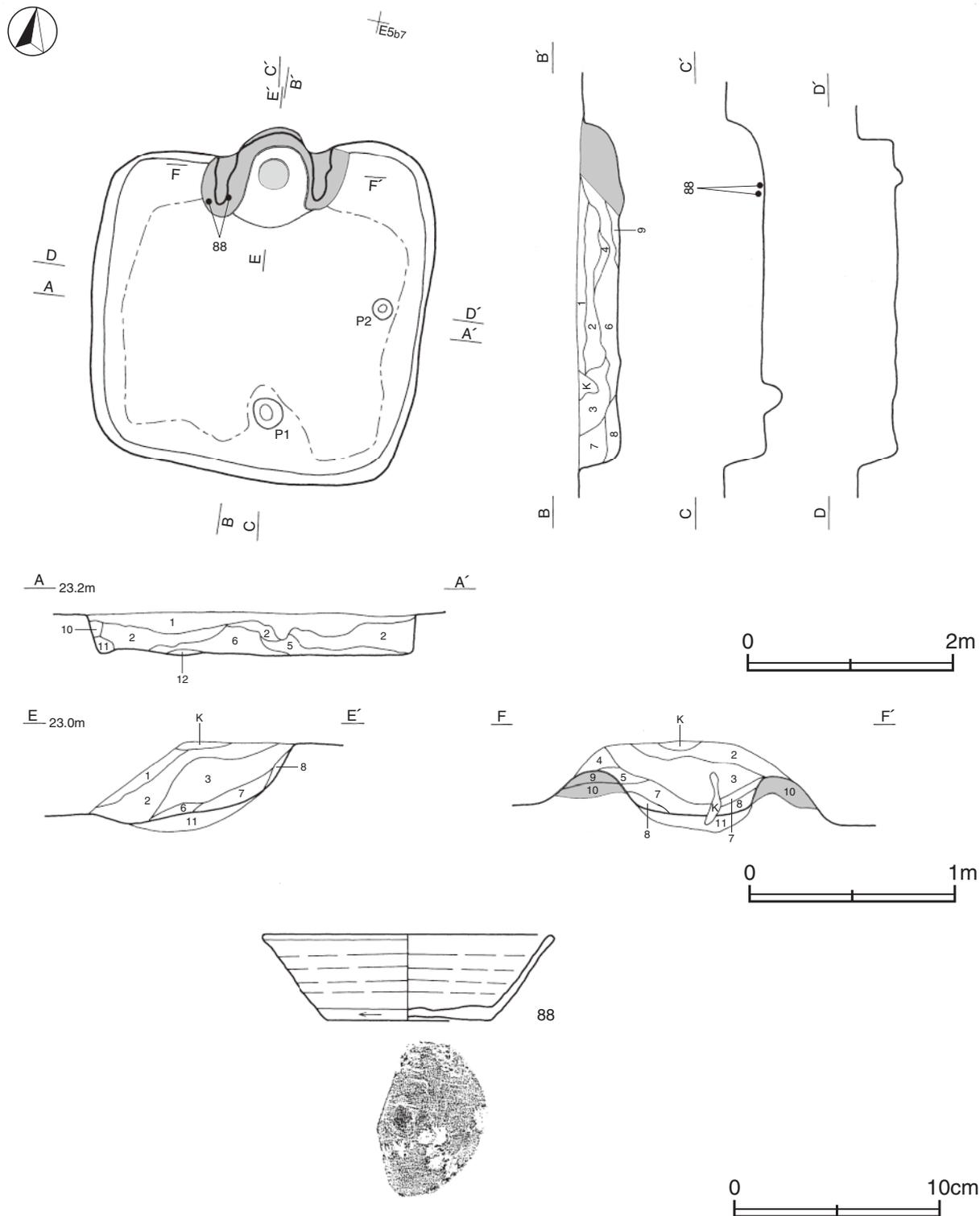
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 8	刀子	[9.0]	1.2	0.4	(4.96)	鉄	刃部先端欠損 刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土下層	
M 9	刀子	(4.2)	1.2	0.4	(4.76)	鉄	刃部のみ 先端部欠損 断面三角形	覆土上層	
M 10	刀子	(3.9)	1.2	0.5	(4.12)	鉄	刃部・茎部一部欠損 刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土中層	
M 11	刀子カ	(7.3)	0.9	0.3	(3.54)	鉄	茎部欠損 刃部S字状に屈曲 断面三角形	覆土下層	
M 12	刀子	(2.5)	0.6	0.4	(1.42)	鉄	茎部のみ 断面長方形	覆土上層	
M 13	鎌	(12.1)	(3.2)	0.2~0.4	(7.6)	鉄	雁股鎌 鎌身部一部欠損 断面方形	覆土中層	PL51
M 14	鎌	(3.1)	0.5	0.2・0.3	(1.04)	鉄	茎部のみ 断面方形	覆土中層	
M 15	鎌	(6.4)	4.3	0.3	(22.8)	鉄	切先部一部欠損 断面三角形 柄付部L字に屈曲	覆土下層	PL50
M 16	釘	(4.0)	1.2	0.6	(4.66)	鉄	頭頂部のみ 断面長方形	覆土中	
M 17	釘	(7.3)	1.0	0.6	(10.6)	鉄	先端部欠損 断面長方形	覆土下層	PL51
M 18	釘	8.1	1.0	0.5	9.05	鉄	完形 上部わずかに屈曲 断面方形	覆土中層	PL51
M 19	釘	(4.5)	0.9	0.4	(3.48)	鉄	先端部欠損 頭頂部L字に屈曲 断面長方形	覆土中層	
M 20	釘	(10.4)	0.8	0.5	(8.70)	鉄	頭頂部欠損 断面方形	覆土下層	
M 21	釘	(2.6)	(0.6)	0.5	(1.06)	鉄	先端部のみ 断面方形	覆土中層	
M 22	釘	(4.8)	0.7	0.4	(2.76)	鉄	先端部・頭頂部欠損 断面長方形	床面	
M 23	鋤先	22.6	17.0	1.1・1.5	305	鉄	ほぼ完形 断面Y字状 身(装着部)の差込式 木質付着	覆土下層	PL50

第 172 号住居跡 (第 41 図)

位置 調査区中央部の E 5 b6 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 3.40 m, 短軸 3.38 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 8° - W である。壁高は 35 ~ 40cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 北東・北西コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。



第41図 第172号住居跡・出土遺物実測図

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで93cmで、燃焼部幅は61cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし、その上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第9・10層を積み上げ、補強材として土師器甕片を使用して構築されている。火床部は床面を7cm掘りくぼめた部分に、焼土ブロックを含んだ第11層が埋土されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に20cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 8 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック中量, 炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土ブロック微量 | 9 褐 色 | ロームブロック多量 |
| 3 黒 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 10 灰 褐 色 | ロームブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量 |
| 4 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 | 11 黒 褐 色 | 焼土ブロック・炭化物少量, ロームブロック・砂質粘土ブロック微量 |
| 5 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | | |
| 6 暗 褐 色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量 | | |
| 7 灰 褐 色 | 砂質粘土ブロック中量, 炭化物・焼土粒子少量, ローム粒子微量 | | |

ピット 2か所。P 1は深さ19cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2は深さ8cmで、性格不明である。

覆土 12層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|---------|--------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 褐 色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 9 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化物少量 |
| 3 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐 色 | ローム粒子中量 |
| 4 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 褐 色 | ローム粒子多量 |
| 5 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 | 12 褐 色 | ローム粒子多量, 焼土粒子微量 |
| 6 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |
| 7 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片170点(坏17, 甕類153), 須恵器片61点(坏32, 蓋3, 盤1, 甕類24, 甌1), が出土している。88は竈の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。

第172号住居跡出土遺物観察表(第41図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備 考
88	須恵器	坏	14.1	4.3	7.9	長石・石英・雲母	灰褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈覆土下層	80% PL37

第179号住居跡(第42～44図)

位置 調査区南西部のF5c4区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第27・28号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南側の大部分が調査区域外へ延びているため、東西軸は4.02mで、南北軸は1.02mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-16°-Eである。壁高は61cmで、直立している。

床 ほほ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北壁やや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで135cmで、燃烧部幅は62cmである。袖部は、床面を10cm掘りくぼめた部分にローム粒子を多く含んだ第6・7層を埋土し、その上に砂質粘土を主体とした第5層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第2・3層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック微量 |
| | | 7 褐色 | ローム粒子多量, 焼土ブロック微量 |

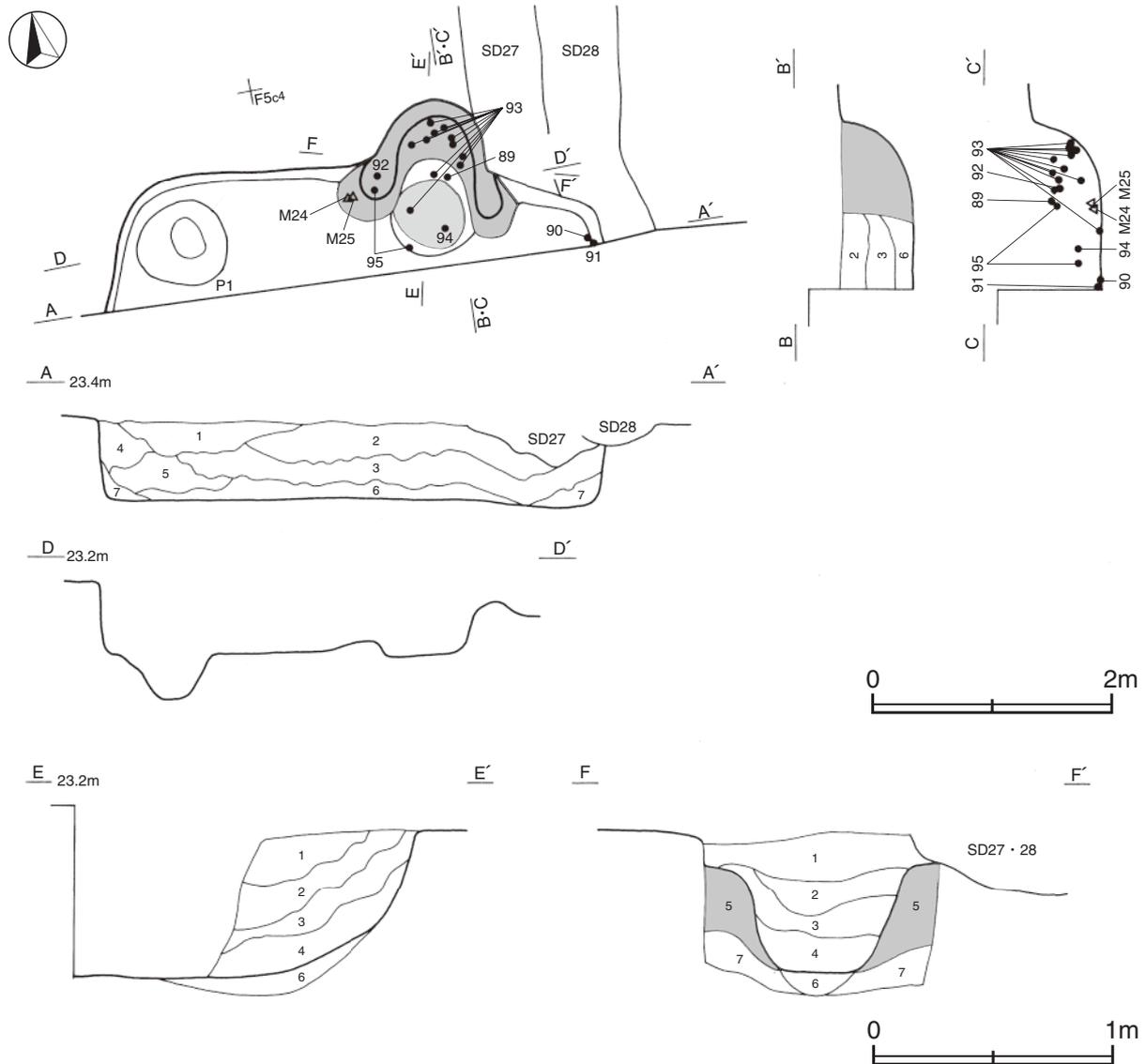
ピット 深さ44cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。

覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|---------|-----------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 にぶい褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック微量 | 7 明褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

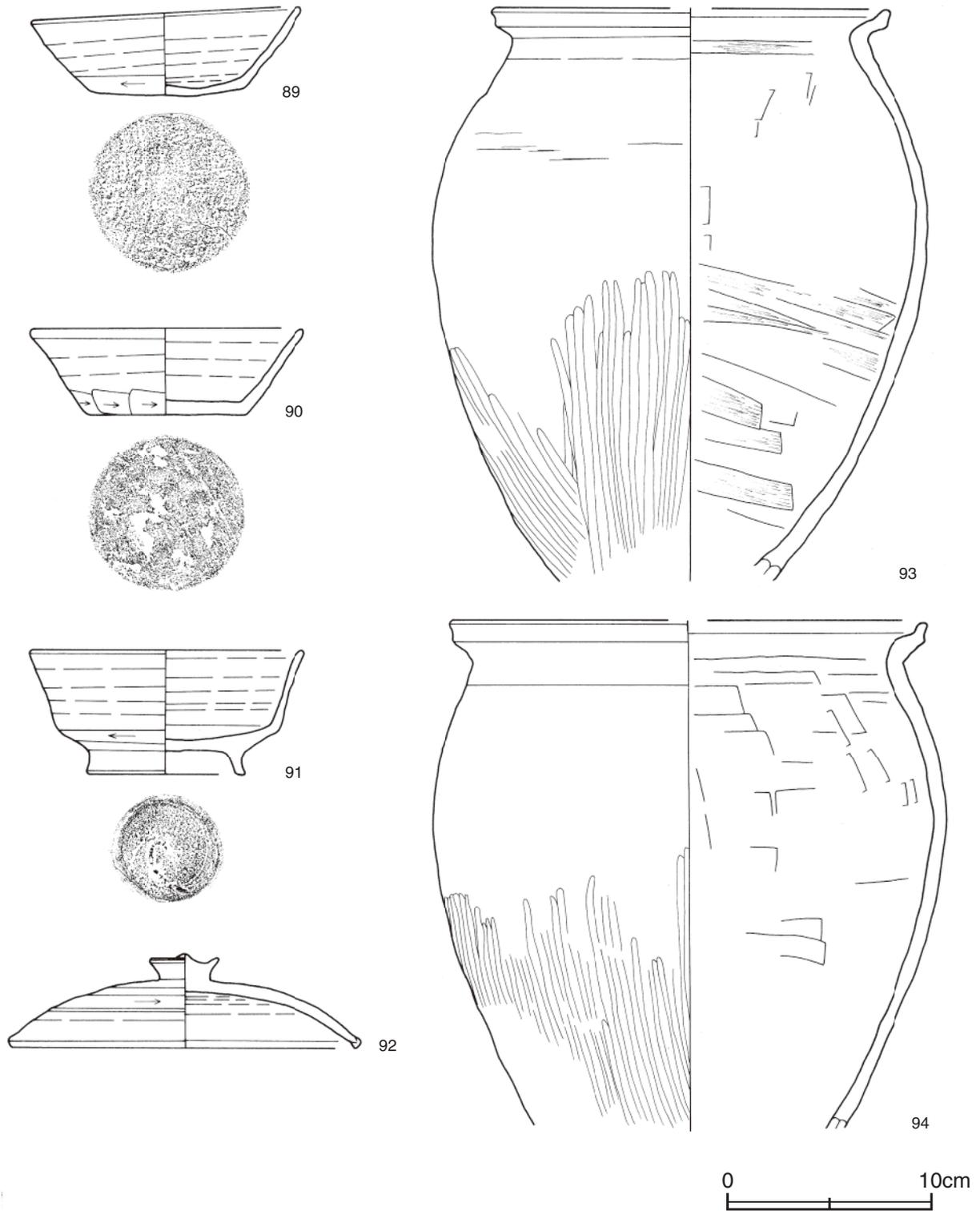
遺物出土状況 土師器片91点(坏6, 甕類85), 須恵器片47点(坏17, 高台付坏2, 蓋6, 甕類21, 甑1), 石器1点(砥石), 鉄製品2点(鎌, 釘)のほか, 瓦片2点, 鉄滓4点(129.5g)が, 竈前の覆土上層から下層にかけて出土している。また, 混入した陶器片2点(碗), 磁器片2点(碗)も出土している。90・91は



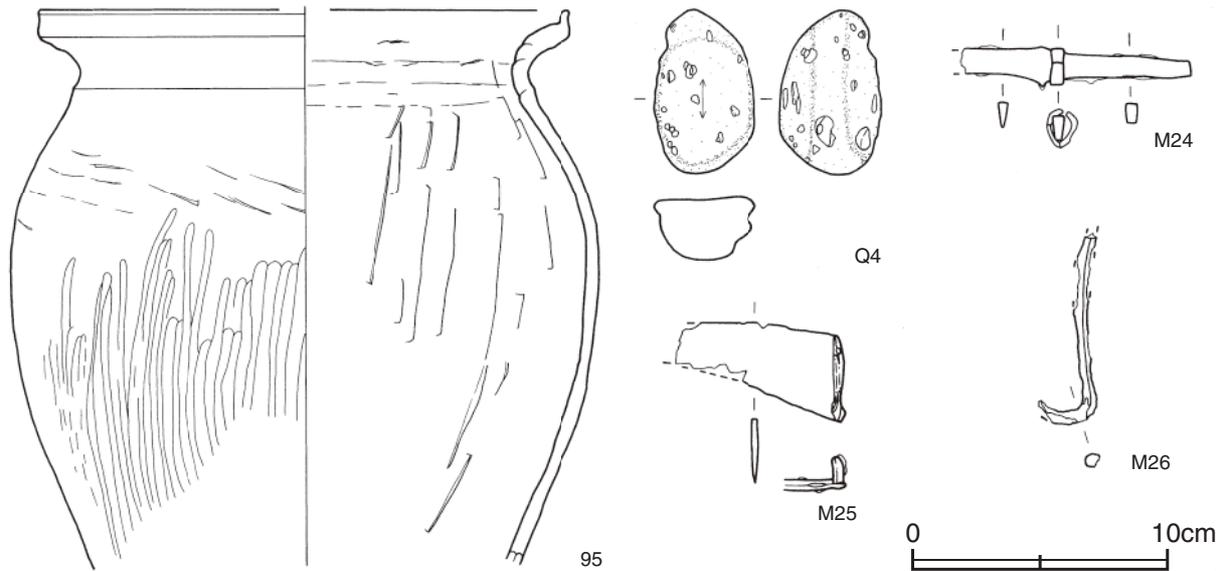
第42図 第179号住居跡実測図

北東部壁際の覆土下層からそれぞれ出土しており、いずれもほぼ完形である。94は竈の覆土中層、89・92は竈の覆土上層からそれぞれ出土している。93・95は竈の覆土上層から下層にかけてそれぞれ出土した破片が接合したものである。M 24・M 25は竈の覆土下層から出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。Q 4・M 26は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第 43 図 第 179 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 44 図 第 179 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 179 号住居跡出土遺物観察表 (第 43・44 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
89	須恵器	坏	13.2	4.4	7.7	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈覆土上層	100% PL38
90	須恵器	坏	13.3	4.3	7.8	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	80% PL38
91	須恵器	高台付坏	13.3	6.2	7.6	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	80% PL38
92	須恵器	蓋	[16.9]	4.2		長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	竈覆土上層	40%
93	土師器	甕	[19.4]	(28.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ヘラナデ 中位から下位ヘラ磨き 内面ナデ	竈覆土上層～下層	50%
94	土師器	甕	[23.4]	(25.3)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	竈覆土中層	25%
95	土師器	甕	[20.8]	(22.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	竈覆土上層・中層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	砥石	6.5	4.0	2.5	17	軽石	砥面 1 面	覆土中	PL49

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 24	刀子	(9.2)	1.6	0.5	(16.5)	鉄	刃部一部欠損 断面三角形 茎部断面長方形 黄金具遺存	竈覆土下層	PL50
M 25	鎌	(6.7)	3.9	0.3	(14.7)	鉄	切先部一部欠損 断面三角形 柄付部 L 字に屈曲	竈覆土下層	PL50
M 26	釘	(7.9)	(2.3)	不明	(6.7)	鉄	腐蝕が激しく輪郭部を残さない 先端部 J の字状に屈曲	覆土中	

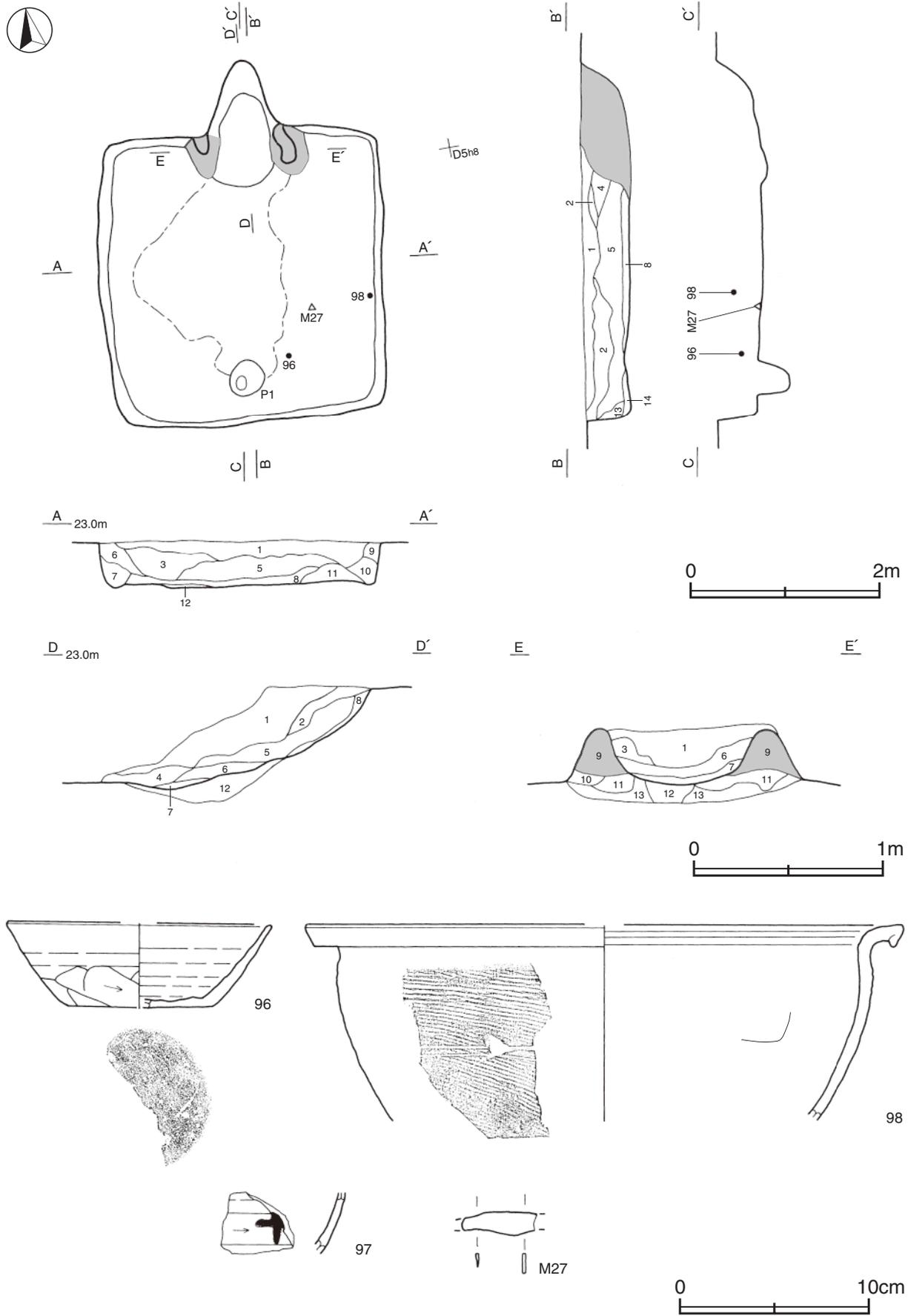
第 180 号住居跡 (第 45 図)

位置 調査区北部の D 5h7 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 3.13 m、短軸 3.06 m の方形で、主軸方向は N - 10° - E である。壁高は 42 ~ 47 cm で外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から出入り口付近にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 137 cm で、燃焼部幅は 55 cm である。袖部は、床面を 10 cm 掘りくぼめた部分にロームブロックを含んだ第 10 ~ 13 層を埋土し、その上に黄灰色粘土を主体とした第 9 層を積み上げて構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面から 5 cm くぼんでおり、火床面は赤変、硬化ともに弱い。煙道部は壁外に 74 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。



第 45 图 第 180 号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック少量, ロームブロック・黄灰色粘土ブロック・炭化物微量	8 黒褐色	ロームブロック少量, 黄灰色粘土ブロック・焼土粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	9 灰褐色	黄灰色粘土ブロック多量, 焼土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量
3 黒褐色	焼土ブロック中量, 炭化物少量	10 黒褐色	黄灰色粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック多量, 炭化物少量	12 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
6 黒褐色	焼土ブロック中量, 炭化物少量, ロームブロック微量	13 褐色	ローム粒子多量
7 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量		

ピット 深さ 35cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 14 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9 灰褐色	ローム粒子中量
3 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	10 黒褐色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック・黄灰色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック中量
6 褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量	13 黒褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	14 褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 237 点(坏 19, 甕類 218), 須恵器片 57 点(坏 33, 蓋 4, 鉢 1, 甕類 19), 鉄製品 1 点(刀子)が、竈の覆土下層を中心に出土している。また、混入した縄文土器片 3 点(深鉢)も出土している。96 は南部, 98 は東部壁際の覆土中層, M 27 は東部の覆土下層からそれぞれ出土しており、いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものである。97 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。

第 180 号住居跡出土遺物観察表 (第 45 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	須恵器	坏	[14.0]	4.5	[7.7]	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土中層	40%
97	須恵器	坏	-	(3.3)	-	長石・雲母	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 朱書「十カ」	覆土中	10%
98	須恵器	鉢	[31.8]	(10.5)	-	長石・雲母	灰	普通	体部横位の平行叩き 内面無文の当て具痕	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 27	刀子	(4.0)	1.3	0.3	(2.6)	鉄	刃部一部遺存 断面三角形 茎部一部遺存 断面長方形	覆土下層	

第 185 号住居跡 (第 46 ~ 50 図)

位置 調査区西部の E 5 e5 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 187 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 6.37 m, 短軸 6.25 m の方形で、主軸方向は N - 5° - E である。壁高は 47 ~ 57cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、ロームブロックを含んだにぶい褐色土の第 18 層を埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。コーナー部や壁際に焼土の広がりや炭化材, 炭化物の広がりを確認した。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで180cmで、燃焼部幅は55cmである。袖部は、床面を27cm掘りくぼめた部分にロームや焼土のブロックを含んだ第24～27層を埋土し、その上部に砂質粘土を主体とした第20～23層を積み上げて構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面から10cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に71cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第4～13層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

1 黒 褐 色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	14 黒 色	炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒 褐 色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	15 暗 赤 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子少量
3 黒 褐 色	焼土ブロック・ローム粒子微量	16 灰 褐 色	ローム粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
4 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・砂質粘土粒子微量	17 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
5 暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化物微量	18 黒 褐 色	焼土ブロック少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
6 黒 褐 色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	19 暗 赤 褐 色	焼土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
7 黒 褐 色	焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量	20 暗 褐 色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
8 灰 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化物微量	21 暗 赤 褐 色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化物少量
9 にぶい赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	22 暗 褐 色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量
10 灰 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	23 暗 褐 色	炭化物少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
11 褐 色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量	24 暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
12 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	25 暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
13 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	26 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
		27 暗 褐 色	焼土ブロック少量、炭化物・砂質粘土粒子微量

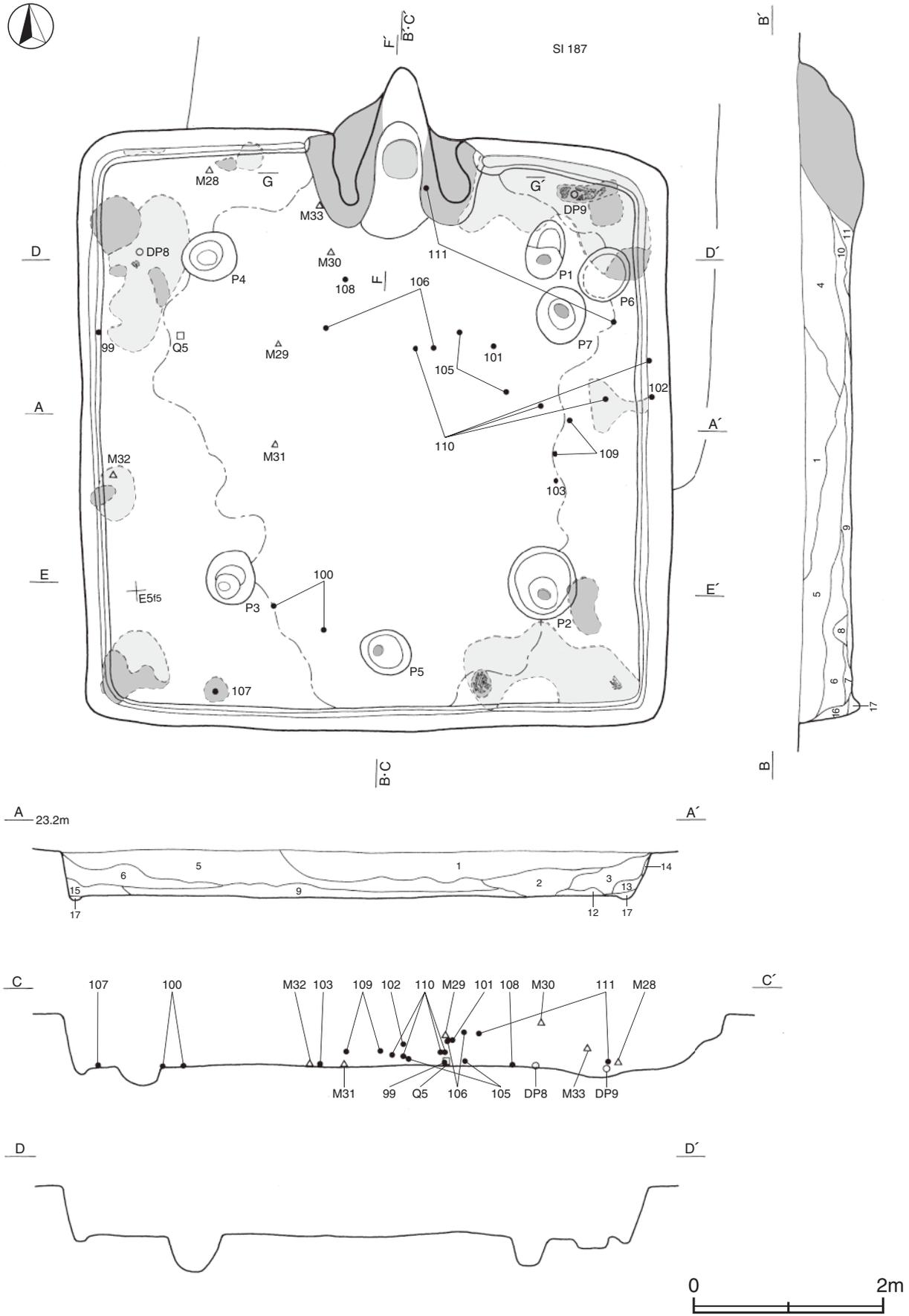
ピット 12か所。P1～P4は深さ32～56cmで、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P5は深さ21cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ13cm・23cmで、いずれも性格不明である。P1・P2・P5・P7の底面には、柱のあたりとみられる円形の硬化範囲が認められる。P8～P12は貼床の下から確認できた。P8～P11は深さ32～59cmで、P1～P4の内側にそれぞれ位置しており、規模や配置から支柱穴である。また、P12は深さ31cmで、P5の北側に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 17層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第18層は貼床の構築土である。

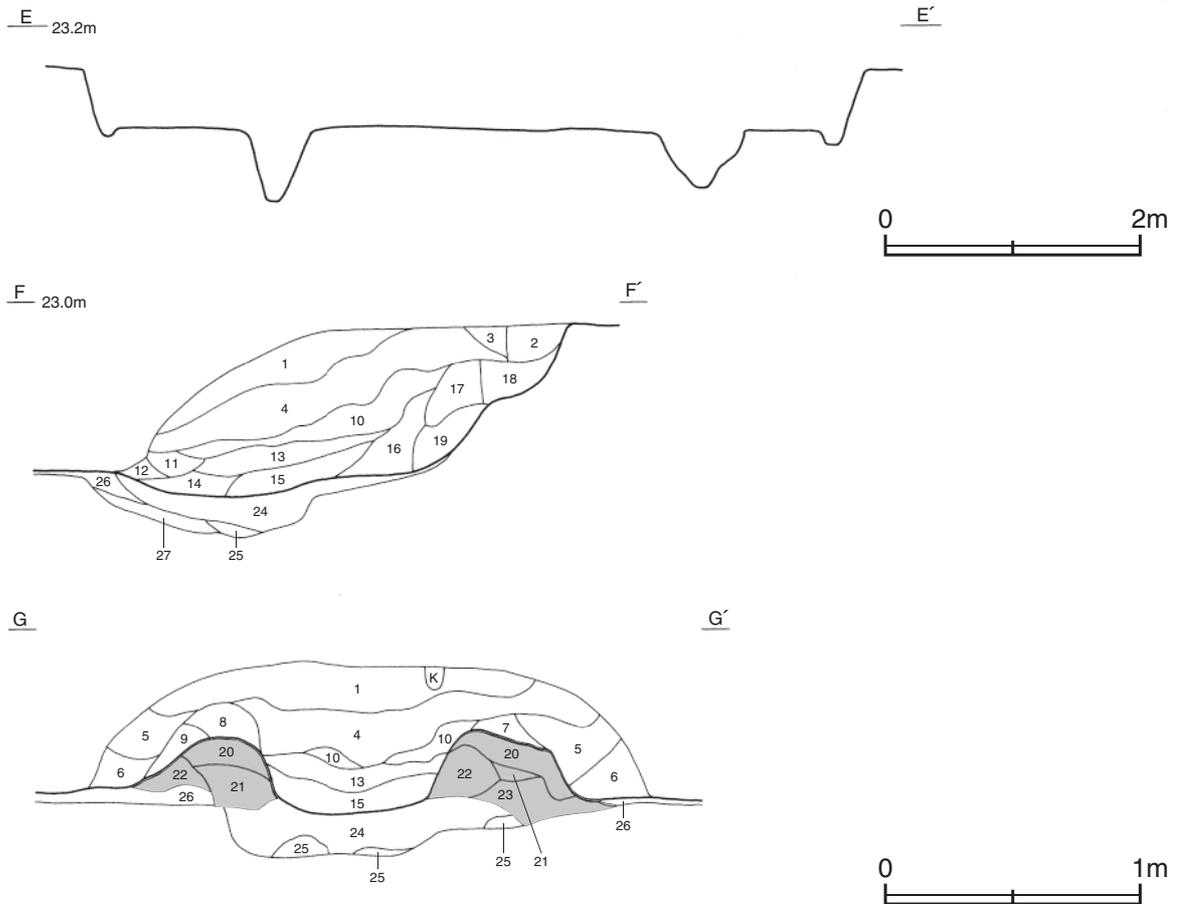
土層解説

1 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	10 黒 褐 色	焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
2 黒 褐 色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック・黒色土ブロック微量	11 黒 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
3 黒 色	炭化物・焼土粒子少量、ロームブロック微量	12 暗 褐 色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量
4 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	13 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック微量
5 灰 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・黒色土ブロック・炭化粒子微量	14 暗 褐 色	ロームブロック微量
6 黒 褐 色	ロームブロック・黒色土ブロック少量、焼土ブロック微量	15 暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
7 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	16 褐 色	ロームブロック中量
8 褐 色	ローム粒子多量、焼土ブロック微量	17 褐 色	ローム粒子多量
9 黒 褐 色	ロームブロック・焼土粒子微量	18 にぶい褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2390点（坏247、椀1、甕類2137、甌5）、須恵器片622点（坏415、高台付坏6、蓋68、皿1、高盤1、鉢7、壺類11、甕類107、甌6）、土製品2点（土玉、支脚）、石器1点（砥石）、鉄製品7点（刀子3、鎌2、釘2）のほか、鉄滓1点（3.6g）が、全面の覆土上層から下層にかけて出土している。また、混入した平安時代の土師器片2点（高台付椀）も出土している。99は西部壁際の覆土下層から斜位の状態で出土している。100は南部、107は南西部壁際、M32は西部壁際の床面からそれぞれ出土している。



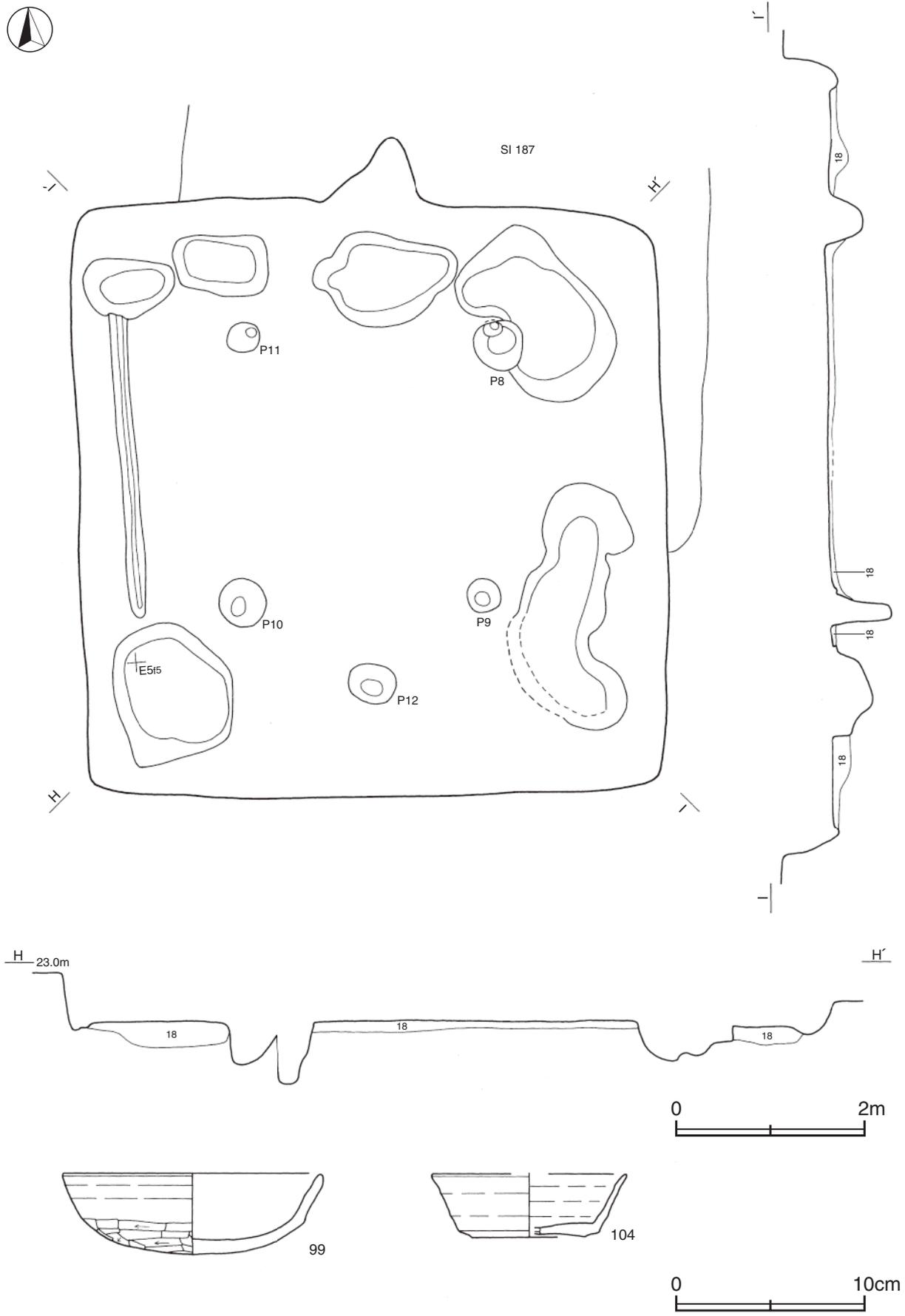
第 46 图 第 185 号住居跡実測图 (1)



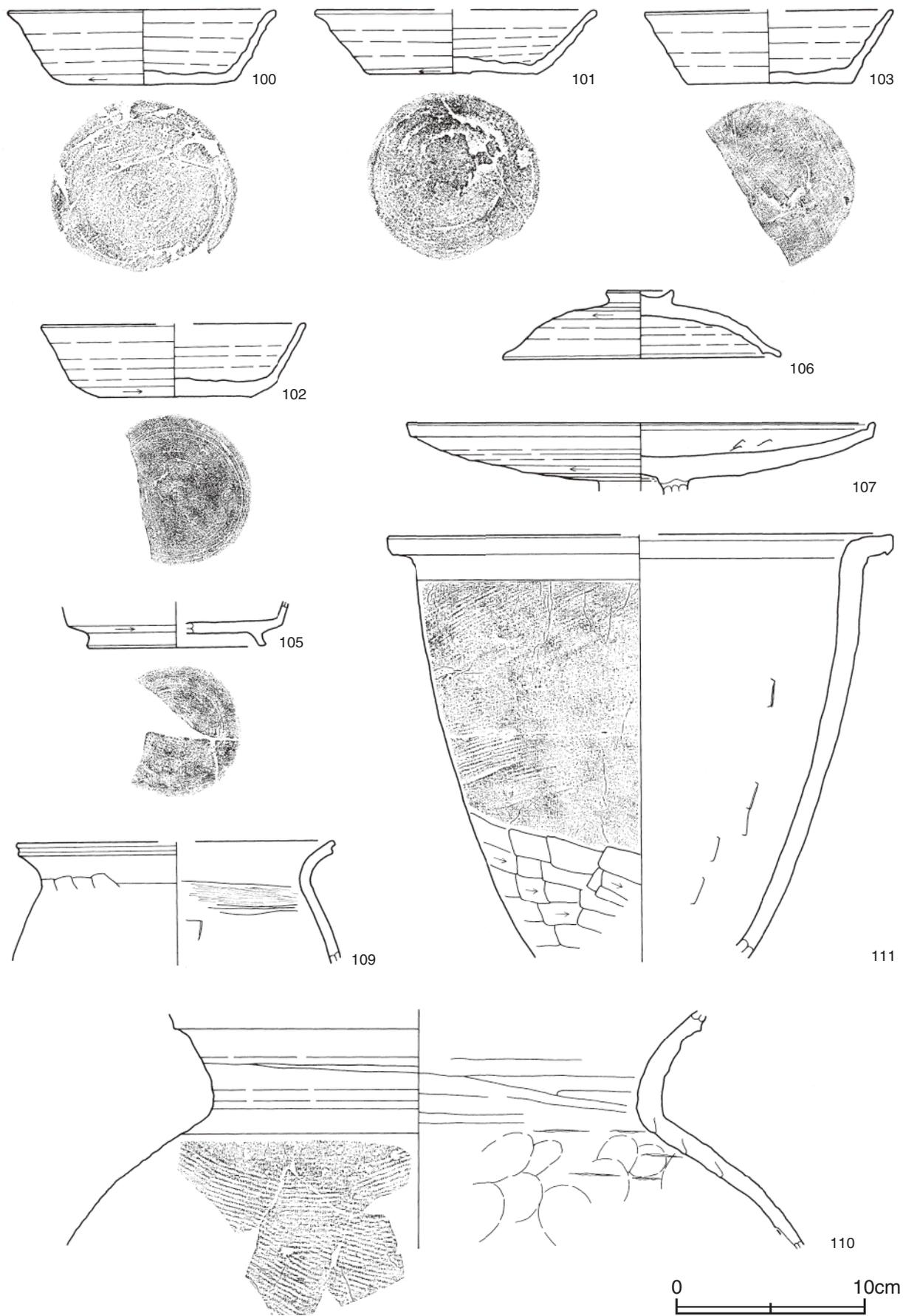
第47図 第185号住居跡実測図(2)

いずれも廃絶時に遺棄されたものと考えられる。103は東部、108は竈前、DP 8・Q 5は北西部、DP 9は北東部壁際、M 28は北西部壁際、M 31は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。105は中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。106は中央部の覆土上層、109は東部、110は中央部から東部にかけての覆土中層、111は竈の覆土下層と東部の覆土上層からそれぞれ出土した破片が接合が接合したものである。M 33は北西部の覆土中層、101は中央部、102は東部壁際、M 29は中央部、M 30は竈前の覆土上層、104は竈の覆土中からそれぞれ出土している。

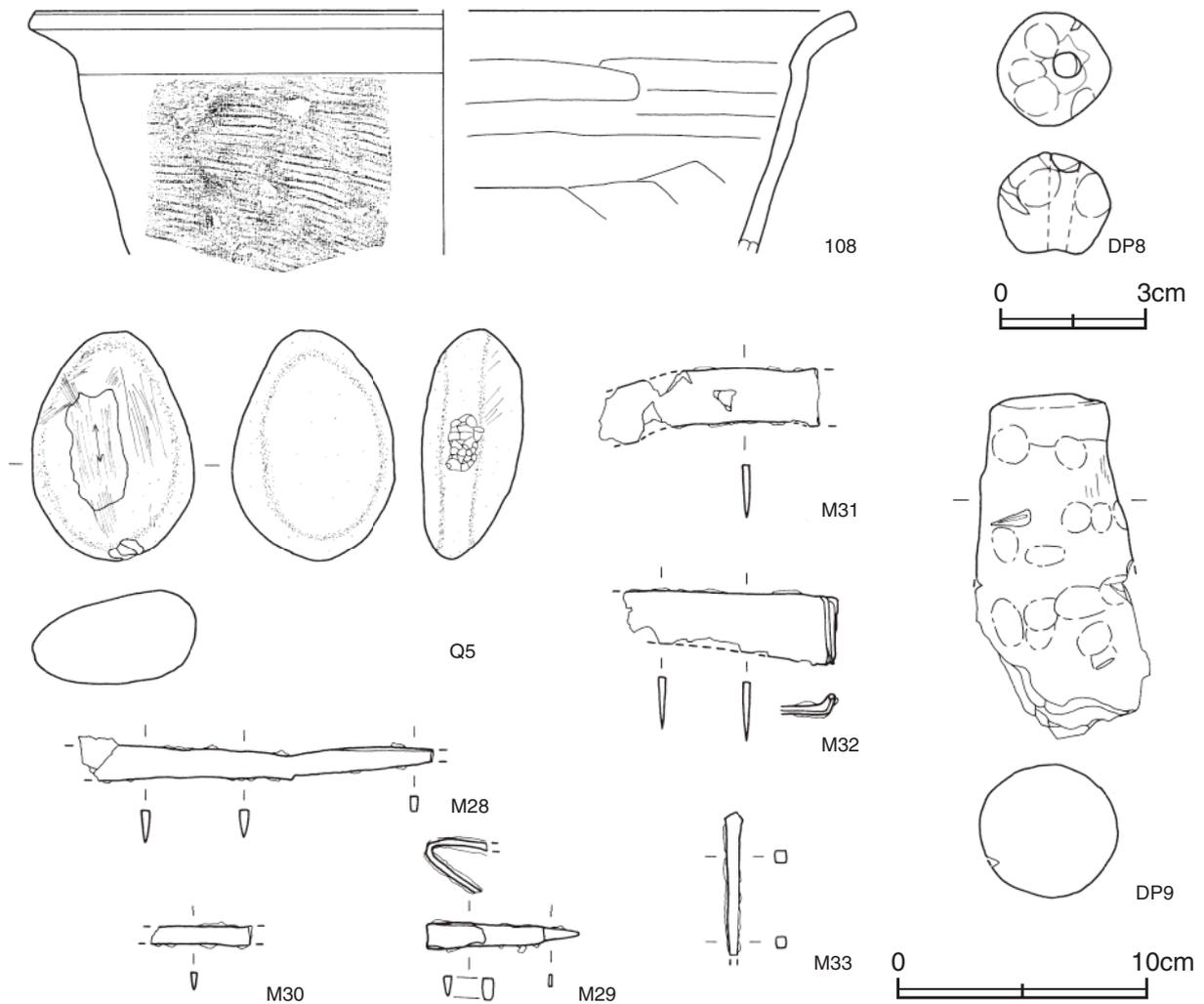
所見 壁際の焼土の広がりや炭化材、炭化物の広がり、覆土中に焼土ブロックや炭化物が含まれていることから焼失住居の可能性はある。掘方で確認できたピットの配置や壁溝から、本跡は四方に拡張されたものと考えられる。拡張前の床は確認できないが、柱穴の配置や壁溝から、規模や形状は一辺が5.1 mの方形と推定できる。掘方から出土している土器は、いずれも細片であるが、箱形の須恵器坏片やかえりの付いた須恵器蓋片、横位の平行叩きが施された須恵器甕片が主体である。時期は、出土土器から拡張前が8世紀前葉から中葉で、拡張後が8世紀中葉に比定できる。



第 48 図 第 185 号住居跡・出土遺物実測図



第 49 图 第 185 号住居迹出土遺物実測図 (1)



第 50 図 第 185 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 185 号住居跡出土遺物観察表 (第 48 ~ 50 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
99	土師器	坏	13.8	4.4		長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	100% PL38
100	須恵器	坏	14.1	4.0	7.7	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	50% PL38
101	須恵器	坏	[14.8]	3.4	9.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土上層	40%
102	須恵器	坏	[14.0]	3.9	8.2	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土上層	40%
103	須恵器	坏	[13.4]	3.9	9.0	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部多方向のヘラ削り後, ナデ	覆土下層	40%
104	須恵器	坏	[10.4]	3.4	[6.2]	長石・雲母	黄灰	普通	底部多方向のヘラ削り	竈覆土中	40%
105	須恵器	高台付坏	-	(2.4)	9.5	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け	覆土下層	40%
106	須恵器	蓋	[14.8]	3.6		長石・石英	灰	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り後, つまみ貼り付け	覆土上層	30%
107	須恵器	高盤	24.8	(3.7)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	盤部下端回転ヘラ削り 脚部欠損	床面	60% PL39
108	須恵器	鉢	[33.0]	(9.9)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部斜位の平行叩き 内面ナデ	覆土下層	10%
109	土師器	甕	[16.8]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土中層	10%
110	須恵器	甕	-	(12.9)	-	長石・石英・雲母・細礫	灰黄褐	普通	体部横位の平行叩き 内面無文の当て具痕 輪積痕	覆土中層	10%
111	須恵器	甗	[26.8]	(22.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部斜位の平行叩き 下端ヘラ削り 内面ヘラナデ	竈覆土下層 覆土上層	20%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 8	土玉	2.1	2.3	0.5	9.55	長石・石英	ナデ 指頭痕 一方向からの穿孔	覆土下層	PL48

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 9	支脚	4.9	(7.0)	(14.0)	(385)	長石・石英・赤色粒子	ナデ 指頭痕 火を受けている	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	砥石	9.4	6.6	3.8	317	礫岩	砥面1面 条線状の擦痕	覆土下層	PL49

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 28	刀子	(14.4)	1.4	0.5	(17.1)	鉄	刃部・茎部一部欠損 刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土下層	PL50
M 29	刀子	(6.2)	1.1	0.2・0.5	(6.55)	鉄	刃部一部欠損 U字状に屈曲 断面三角形 茎部断面長方形	覆土上層	
M 30	刀子	(4.1)	0.9	0.3	(2.34)	鉄	刃部のみ遺存 断面三角形	覆土上層	
M 31	鎌	(8.9)	3.1	0.3	(19.7)	鉄	切先部欠損 断面三角形	覆土下層	PL50
M 32	鎌	(8.7)	3.0	0.3・0.9	(15.7)	鉄	切先部一部欠損 断面三角形 柄付部L字に屈曲	床面	PL50
M 33	釘	(5.8)	0.8	0.7	(6.15)	鉄	先端部欠損 断面方形	覆土中層	PL51

第 187 号住居跡 (第 51・52 図)

位置 調査区西部の E 5 d6 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 185 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.66 m, 短軸 5.31 m の方形で, 主軸方向は N - 7° - E である。壁高は 26 ~ 39cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦な貼床で, 壁際を除いて踏み固められている。貼床は, ロームや焼土のブロックを含んだ暗褐色土の第 16 層を埋土して構築されている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 148cm で, 燃焼部幅は 42cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし, その上に砂質粘土混じりのロームを主体とした第 8 層を積み上げて構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面を 20cm 掘りくぼめた部分に, 焼土ブロックを含んだ第 9 層が埋土されており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 37cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量	6 暗赤褐色	焼土粒子多量, ローム粒子微量
2 灰褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量	7 暗赤褐色	焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック中量, 炭化物・ローム粒子微量	9 褐色	焼土ブロック少量, ローム粒子微量
5 暗褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量		

ピット 2 か所。P 1・P 2 は深さ 52cm・68cm で, 規模や配置から支柱穴である。

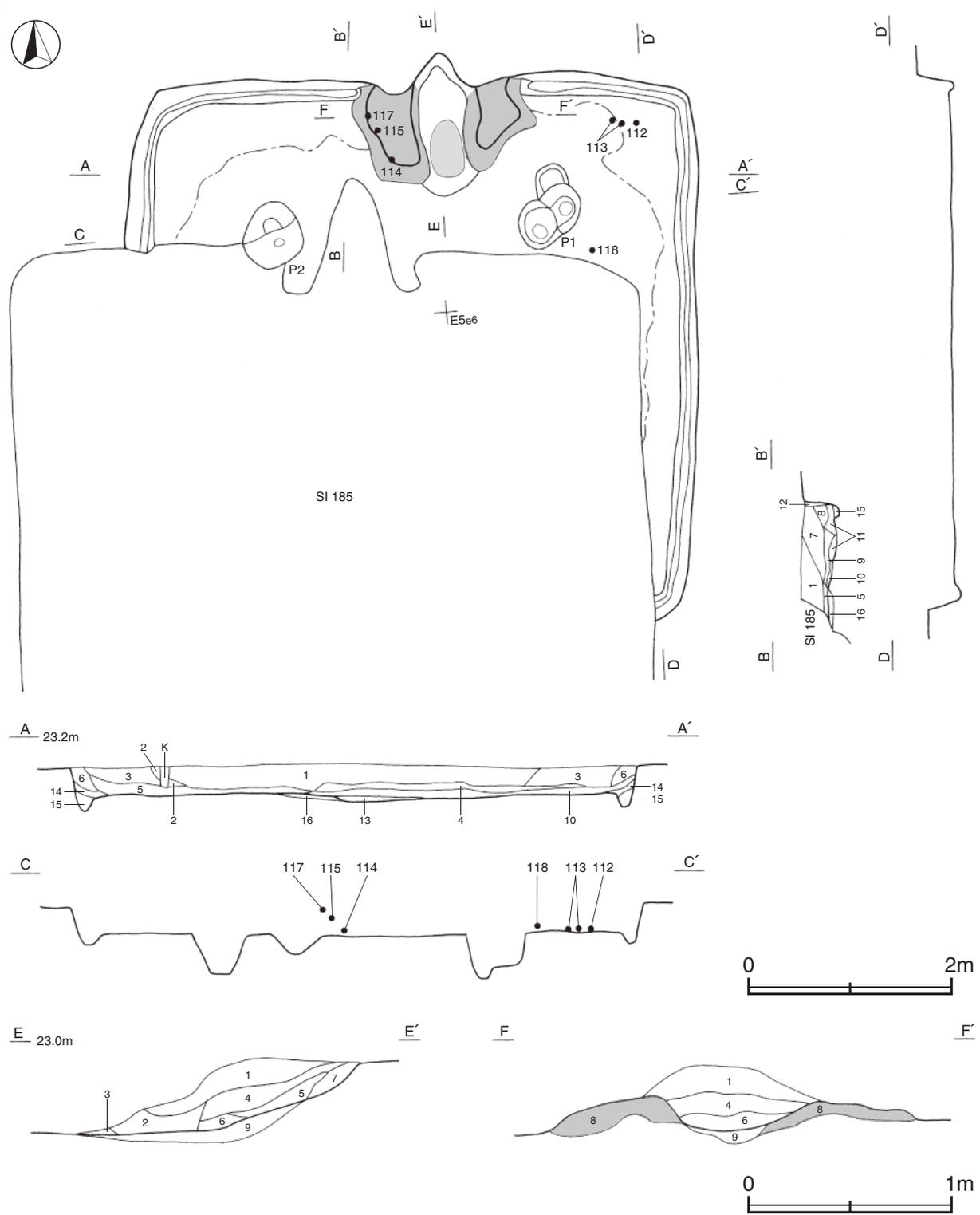
覆土 15 層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。第 16 層は貼床の構築土である。

土層解説

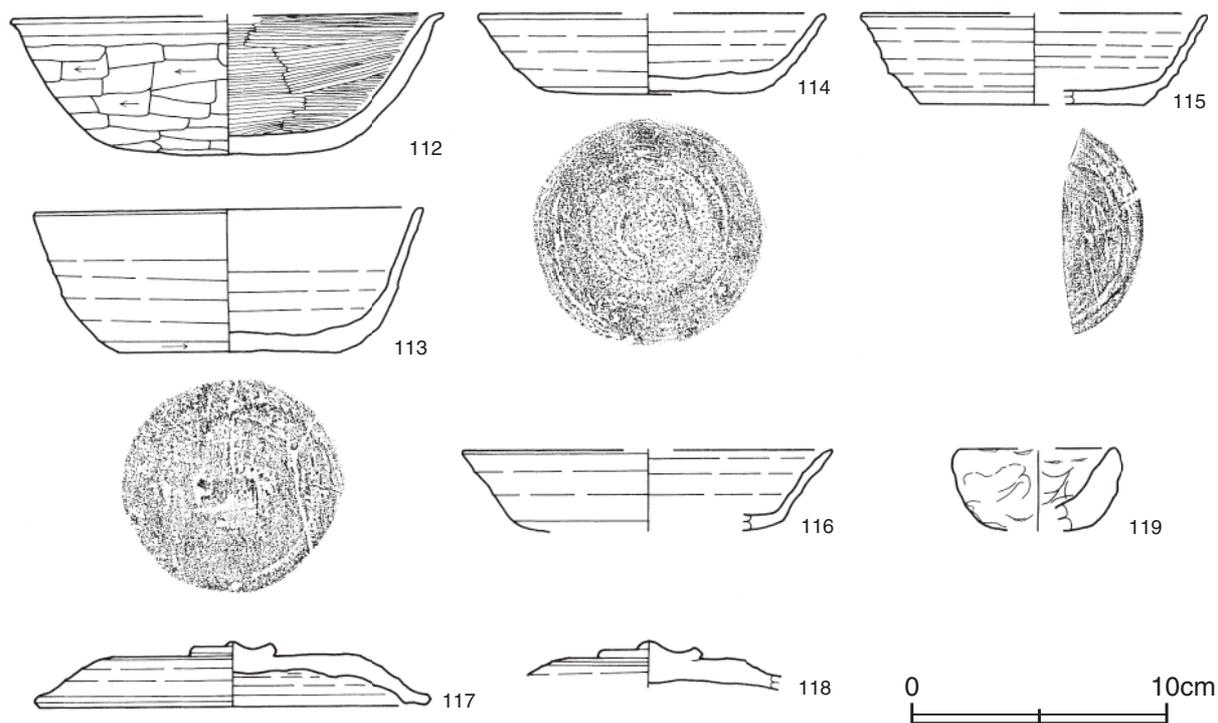
1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗赤褐色	焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量
2 暗褐色	焼土粒子少量, ロームブロック・炭化物微量	11 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	12 褐色	ロームブロック中量
4 黒褐色	焼土ブロック少量, ロームブロック・砂質粘土粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック少量	15 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量	16 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子・砂質粘土粒子微量
8 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		
9 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片 411 点 (坏 66, 椀 2, 甕類 342, 手捏 1), 須恵器片 111 点 (坏 75, 蓋 21, 甕類 15) のほか, 鉄滓 2 点 (0.36 g) が, 北東部の覆土下層を中心に出土している。112・113 は北東部の覆土下層, 114・115・117 は竈の覆土上層から下層, 116 は竈の覆土中, 119 は P 1 の覆土中からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。118 は北東部の覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉に比定できる。



第 51 図 第 187 号住居跡実測図



第 52 図 第 187 号住居跡出土遺物実測図

第 187 号住居跡出土遺物観察表 (第 52 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
112	土師器	坏	[17.0]	5.5		長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	65%
113	須恵器	坏	15.3	5.7	8.9	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	80% PL39
114	須恵器	坏	[13.6]	3.2	9.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	竈覆土下層	60% PL39
115	須恵器	坏	[13.6]	3.6	[8.8]	長石・石英・雲母	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	竈覆土中層	40%
116	須恵器	坏	[14.6]	3.2	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り	竈覆土中	15%
117	須恵器	蓋	[15.2]	2.5		長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後, つまみ貼り付け	竈覆土上層	30%
118	須恵器	蓋	-	(1.8)		長石・石英・雲母	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後, つまみ貼り付け	覆土中層	20%
119	土師器	手捏	[6.2]	3.2	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ナデ	P 1 覆土中	25%

第 188 号住居跡 (第 53・54 図)

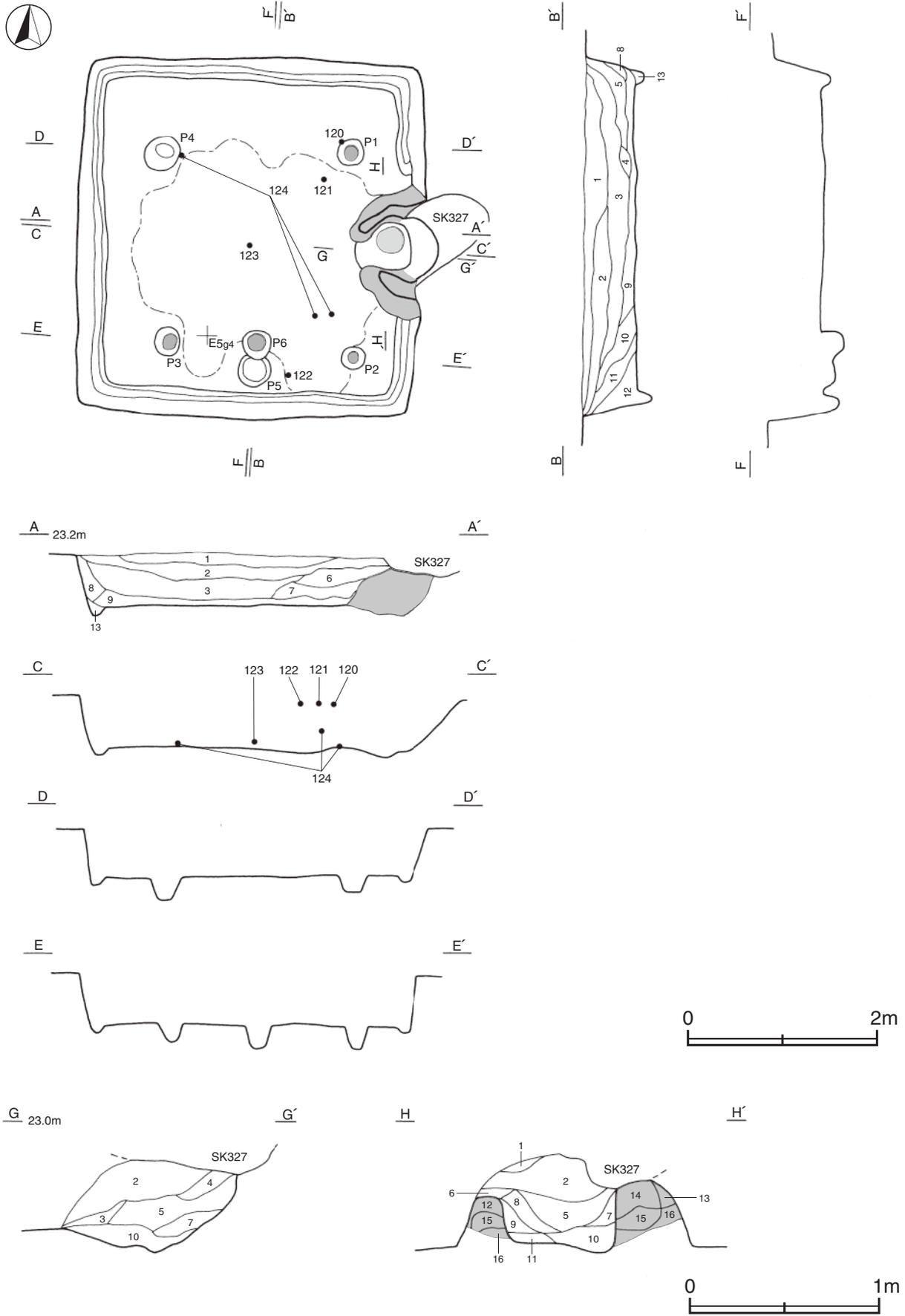
位置 調査区西部の E 5 f4 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 327 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.88 m, 短軸 3.71 m の方形で, 主軸方向は N - 90° - E である。壁高は 49 ~ 57cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 東壁中央部に付設されている。煙道部を第 327 号土坑に掘り込まれているため, 規模は焚口部から煙道部までの 89cm しか確認できなかった。燃烧部幅は 51cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし, その上に砂質粘土混じりのロームを主体とした第 12 ~ 16 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 10cm くらいあり, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 15cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。第 1 ~ 11 層は, 袖部及び天井部の崩落土である。



第 53 图 第 188 号住居跡実測図

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	9 褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	焼土粒子中量, 砂質粘土粒子微量	10 赤褐色	焼土粒子多量, 炭化物少量
3 黒褐色	焼土粒子少量, 炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量	11 にぶい黄褐色	焼土ブロック多量, 炭化物・砂質粘土粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック少量, 砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	12 暗褐色	砂質粘土ブロック少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
5 褐色	炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子少量	13 褐色	ロームブロック多量
6 褐色	砂質粘土ブロック・焼土粒子微量	14 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子微量
7 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	15 黄褐色	砂質粘土ブロック多量, ロームブロック・焼土ブロック微量
8 にぶい黄褐色	焼土粒子少量, 砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	16 暗褐色	砂質粘土ブロック少量, ロームブロック微量

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ17～26cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 5・P 6は深さ16cm・29cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。P 1～P 3・P 6の底面には、柱のあたりとみられる円形の硬化範囲が認められる。

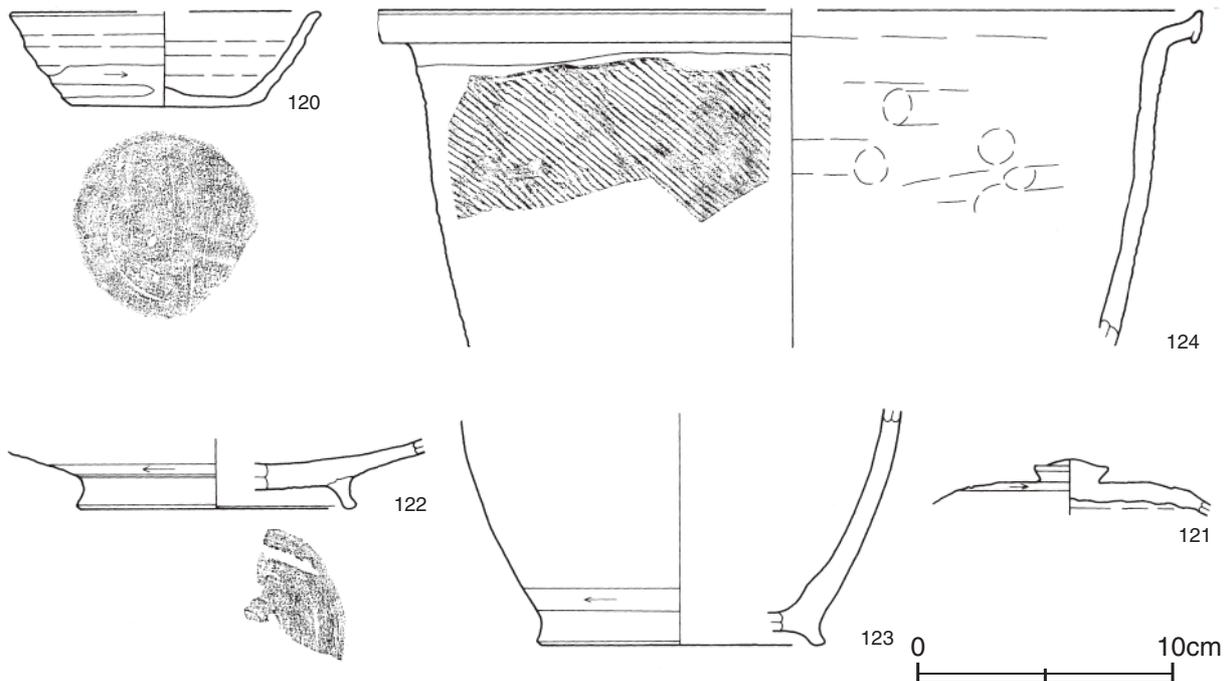
覆土 13層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	8 褐色	ロームブロック多量
2 黒褐色	焼土ブロック・炭化物少量, ロームブロック微量	9 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量	10 褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化物微量	11 黒褐色	ロームブロック微量
5 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量	12 黒褐色	ロームブロック少量
6 暗褐色	焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量	13 灰褐色	ロームブロック微量
7 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片 369点 (坏 48, 甕類 321), 須恵器片 126点 (坏 69, 蓋 19, 盤 1, 瓶類 1, 捏鉢 1, 甕類 35) が、全面の覆土上層から下層にかけて出土している。123は中央部の覆土下層, 120・121は北東部, 122は南部壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。124は北西部と南東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第 54 図 第 188 号住居跡出土遺物実測図

第 188 号住居跡出土遺物観察表 (第 54 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
120	須恵器	坏	[12.0]	3.8	7.4	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り痕を残す一方向のヘラ削り	覆土上層	45%
121	須恵器	蓋	-	(2.2)		長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土上層	25%
122	須恵器	盤	-	(2.8)	[10.6]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土上層	15%
123	須恵器	瓶	-	(9.3)	[11.4]	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 高台貼り付け	覆土下層	10%
124	須恵器	甕	[30.6]	(13.5)	-	長石・石英	灰白	普通	体部斜位の平行叩き 内面ナデ 指頭痕	覆土下層	10%

表 2 奈良時代 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)	
				長軸×短軸(m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈					貯蔵穴
132	E 6 d6	[方形]	N - 8° - E	2.75 × (2.34)	37 ~ 41	平坦	全周	-	1	1	竈 1	-	自然	土師器片, 須恵器片, 羽口, 砥石	8 世紀後葉	SI151 → 本跡
140	E 6 c4	隅丸方形	N - 10° - E	4.28 × 4.04	25 ~ 30	平坦	全周	4	1	2	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 支脚, 羽口, 刀子, 鉄製紡錘車, 釘, 鉄滓	8 世紀後葉	
143	E 6 e1	方形	N - 10° - E	3.92 × 3.83	34 ~ 48	平坦	ほぼ全周	4	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 刀子, 釘, 鉄滓	8 世紀中葉	SI144 → 本跡 → SD26
144	E 6 f1	[方形]	N - 2° - W	(4.37 × 3.98)	37 ~ 41	平坦	ほぼ全周	4	2	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	8 世紀前葉	本跡 → SI143, SD26
145	F 5 b0	方形	N - 2° - E	4.97 × 4.85	38 ~ 43	平坦	全周	3	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鎌, 釘, 鉄滓	8 世紀前葉	本跡 → PG12
148	E 6 b5	方形	N - 5° - W	3.93 × 3.93	32 ~ 42	平坦	全周	4	1	5	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 砥石, 鉄滓	8 世紀中葉	本跡 → SI142, SK254・296
150	D 6 i2	方形	N - 6° - E	3.82 × 3.49	30 ~ 36	平坦	一部	4	1	6	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 支脚	8 世紀中葉	本跡 → SI155, SD26, PG15
151	E 6 d6	[方形・長方形]	N - 9° - E	(3.50 × 2.57)	29 ~ 47	平坦	全周	2	-	1	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	8 世紀前葉	本跡 → SI132
152	E 6 b2	方形	N - 0°	4.40 × 4.14	39 ~ 44	平坦	ほぼ全周	4	-	4	竈 1	1	人為	土師器片, 須恵器片, 砥石, 釘, 鉄滓	8 世紀前葉	PG15 → 本跡 → SI158・164, SK281
153	E 5 f7	方形	N - 6° - E	6.40 × 6.24	43 ~ 50	平坦	全周	7	2	2	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 支脚, 鑿	8 世紀前葉	本跡 → SI154, SB45
163	E 6 d2	方形	N - 5° - W	[3.65] × 3.53	27 ~ 35	平坦	-	4	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	8 世紀前葉	本跡 → SI156・162
166	E 7 b1	長方形	N - 8° - W	3.69 × 2.88	8 ~ 20	平坦	-	4	-	8	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 釘	8 世紀後葉	本跡 → PG13
167	E 5 i6	方形	N - 5° - E	6.90 × 6.70	41 ~ 55	平坦	全周	4	1	5	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	8 世紀中葉	本跡 → SI169, SD26
170	E 5 j5	隅丸方形	N - 5° - W	4.29 × 4.26	45 ~ 60	平坦	全周	4	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 砥石, 瓦片, 鉄滓	8 世紀前葉	
171	E 5 c8	方形	N - 10° - E	7.12 × 6.68	29 ~ 44	平坦	全周	4	1	9	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 土玉, 支脚, 羽口, 刀子, 鎌, 鋤先, 釘, 鉄滓	8 世紀中葉	本跡 → SI177, SK316, SA3, PG17
172	E 5 b6	隅丸方形	N - 8° - W	3.40 × 3.38	35 ~ 40	平坦	-	-	1	1	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	8 世紀後葉	
179	F 5 c4	[方形・長方形]	N - 16° - E	4.02 × (1.02)	61	平坦	-	1	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 砥石, 鎌, 釘, 瓦片, 鉄滓	8 世紀後葉	本跡 → SD27・28
180	D 5 h7	方形	N - 10° - E	3.13 × 3.06	42 ~ 47	平坦	-	-	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 刀子	8 世紀後葉	
185	E 5 e5	方形	N - 5° - E	6.37 × 6.25	47 ~ 57	平坦	全周	8	2	2	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 土玉, 支脚, 砥石, 刀子, 鎌, 釘, 鉄滓	8 世紀中葉	SI187 → 本跡
187	E 5 d6	方形	N - 7° - E	5.66 × 5.31	26 ~ 39	平坦	全周	2	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	8 世紀前葉	本跡 → SI185
188	E 5 f4	方形	N - 90° - E	3.88 × 3.71	49 ~ 57	平坦	全周	4	2	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	8 世紀後葉	本跡 → SK327

(2) 掘立柱建物跡

第 49 号掘立柱建物跡 (第 55 図)

位置 調査区南部の E 5 j7 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 14 号ピット群 P 20 に掘り込まれている。第 44 号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行, 梁行ともに 1 間の側柱建物跡で, 桁行方向は N - 46° - E の東西棟である。規模は桁行 2.40 m, 梁行 1.80 m で, 面積は 4.32㎡ である。柱間寸法は, 桁行 2.4 m (8 尺), 梁行 1.8 m (6 尺) で等間隔に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

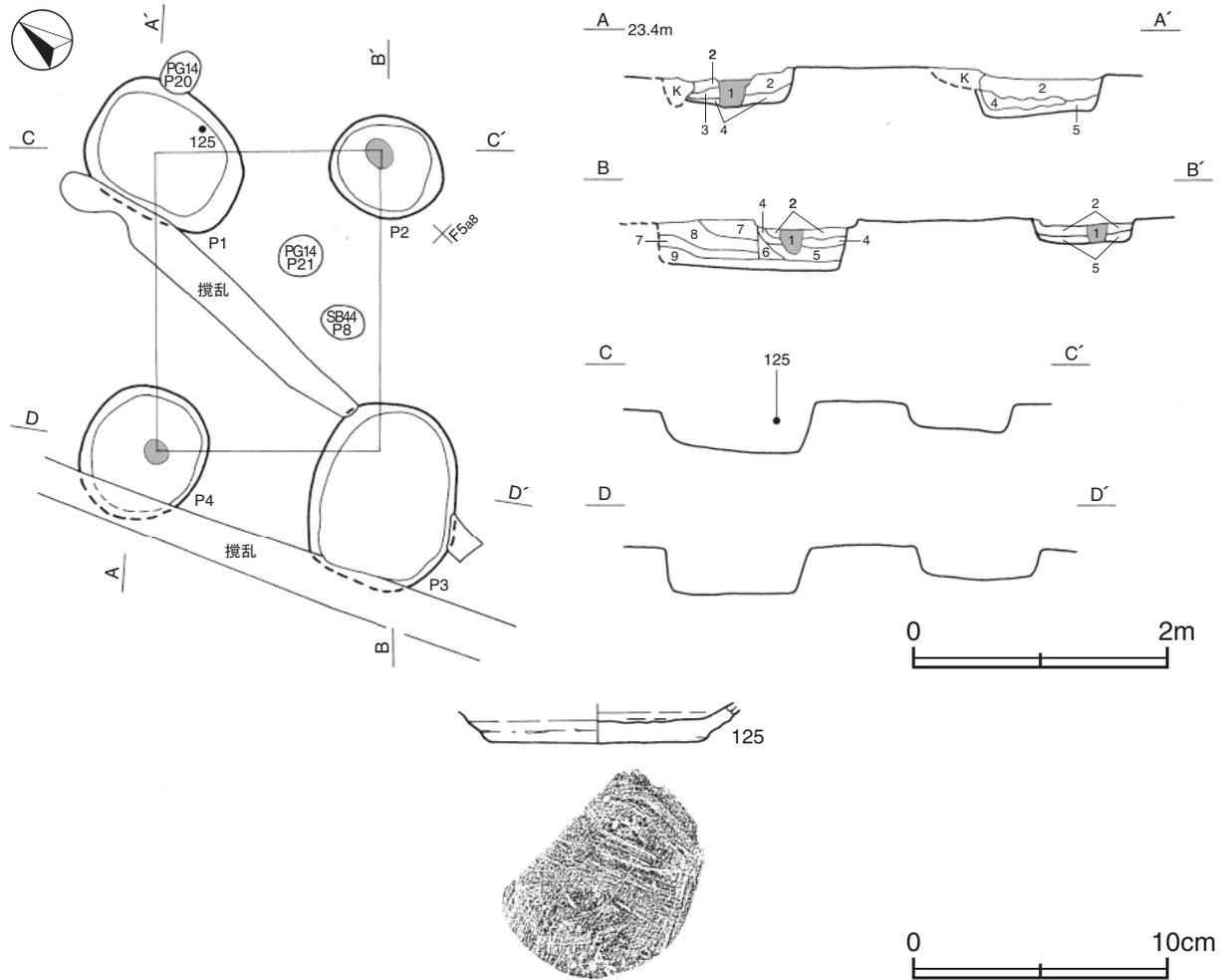
柱穴 4 か所。平面形は円形または楕円形で, 長径 93 ~ 150cm, 短径 87 ~ 117cm である。深さは 20 ~ 38cm で, 掘方の断面形は逆台形である。第 1 層は柱痕跡, 第 2 ~ 9 層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片 48 点（甕類），須恵器片 16 点（坏 10，甕類 6）が各柱穴から出土している。125 は P 1 の埋土から出土している。また，細片で図示できないが，斜位の平行叩きが施された須恵器甕片も出土している。

所見 時期は，出土土器から 8 世紀代と考えられる。



第 55 図 第 49 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

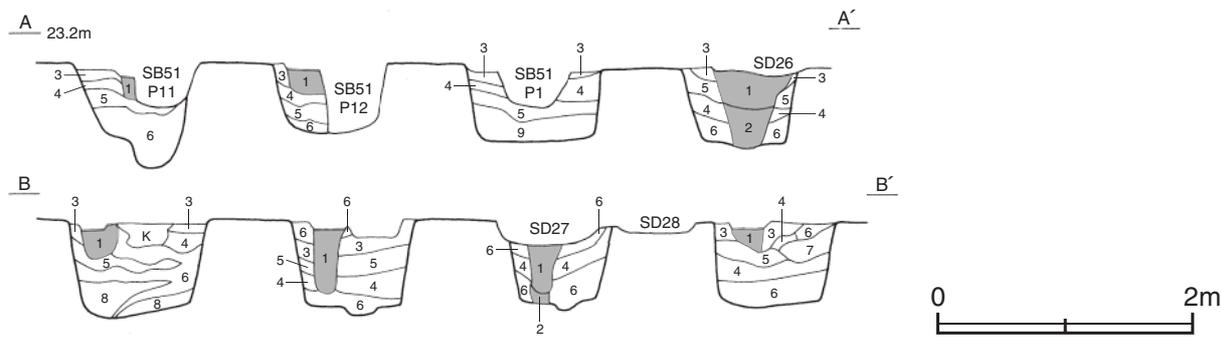
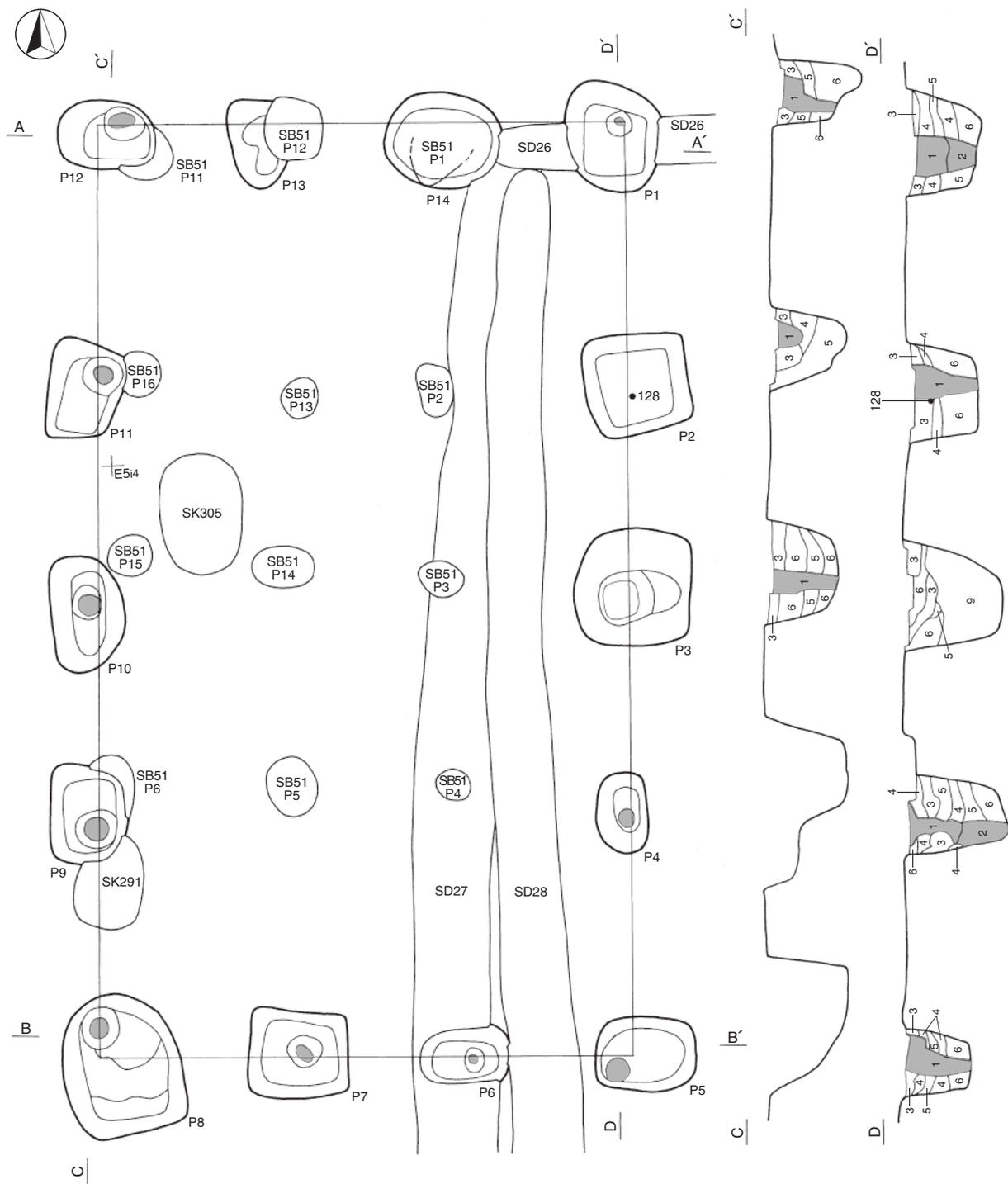
第 49 号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第 55 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
125	須恵器	坏	-	(1.6)	8.3	長石・雲母	灰白	普通	底部多方向のヘラ削り	P 1 埋土	40%

第 50 号掘立柱建物跡（第 56・57 図）

位置 調査区南西部の E 5 h4 ~ E 5 j5 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 51 号掘立柱建物，第 26 ~ 28 号溝，第 291 号土坑に掘り込まれている。第 305 号土坑と重複しているが新旧関係は不明である。



第 56 图 第 50 号掘立柱建物跡実测图

規模と構造 桁行4間、梁行3間の側柱建物跡で、桁行方向はN-3°-Eの南北棟である。規模は桁行9.00m、梁行5.10mで、面積は45.90㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.4m(8尺)・2.1m(7尺)・2.1m(7尺)・2.4m(8尺)で、梁行は西平から1.8m(6尺)・1.8m(6尺)・1.5m(5尺)で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

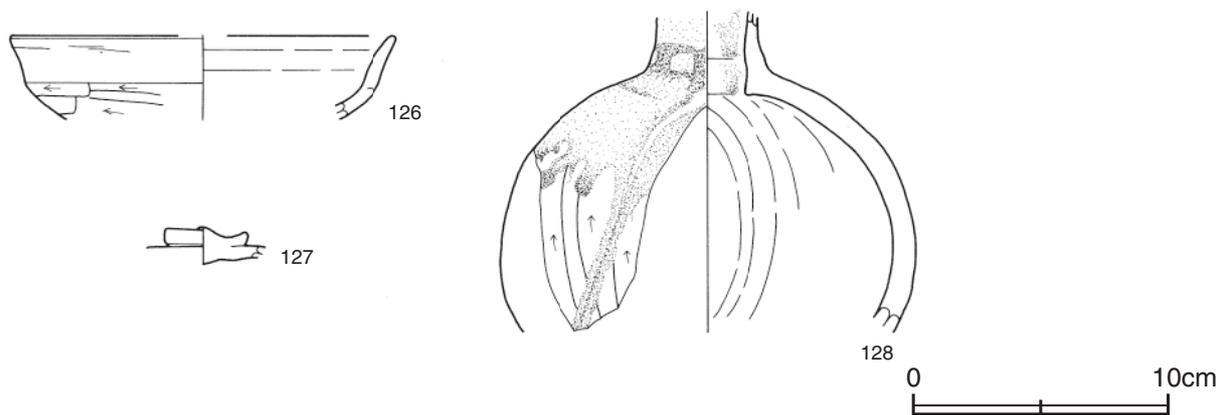
柱穴 14か所。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸77~136cm、短軸52~116cmである。深さは52~96cmで、掘方の断面形は逆台形である。第1・2層は柱痕跡、第3~8層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説(各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片153点(坏15, 甕類138), 須恵器片35点(坏23, 蓋7, フラスコ瓶1, 瓶類1, 捏鉢2, 甕類1)のほか、鉄滓2点(38.8g)がP13を除いた各柱穴から出土している。また、混入した灰釉陶器片1点(瓶類)も出土している。126はP8, 127はP6, 128はP2の埋土からそれぞれ出土している。また、細片で図示できないが、かえりが消滅し、口縁端部が屈曲して短く垂下する形態の須恵器蓋も出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第57図 第50号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第50号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第57図)

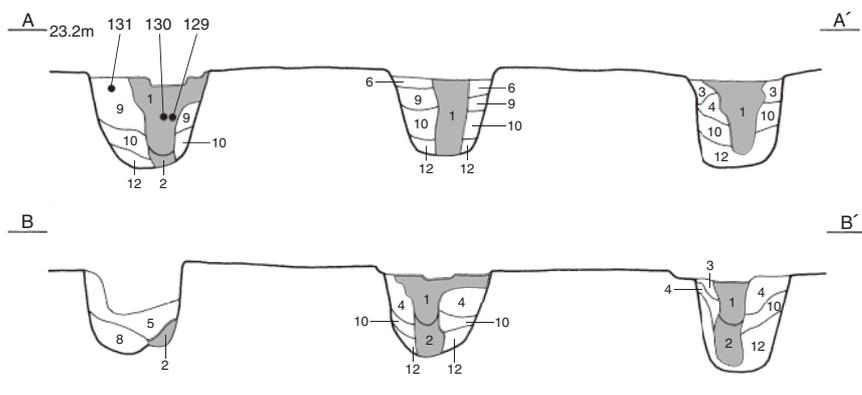
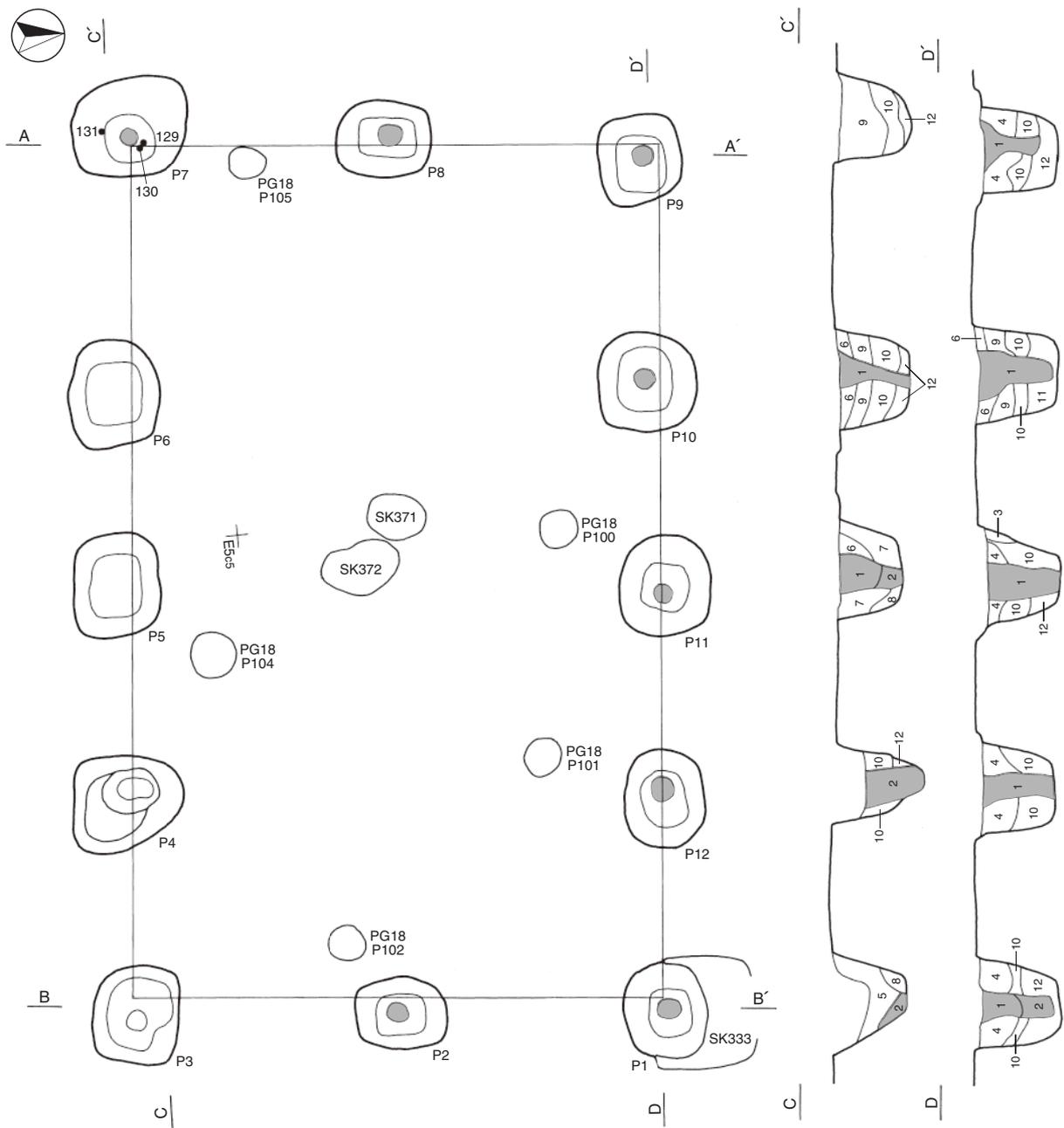
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
126	土師器	坏	[15.0]	(3.4)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り 内面ナデ	P8埋土	10%
127	須恵器	蓋	-	(1.5)		長石・石英	灰白	普通	つまみ貼り付け	P6埋土	10%
128	須恵器	横瓶	-	(12.8)		長石	褐灰	普通	体部外面・頸部内面に自然釉	P2埋土	10% PL39

第52号掘立柱建物跡(第58・59図)

位置 調査区北西部のE5b4~E5c6区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第333号土坑に掘り込まれている。第371・372号土坑、第18号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行4間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向はN-84°-Wの東西棟である。規模は桁行7.80m、梁行4.80mで、面積は37.44㎡である。柱間寸法は、桁行が西妻から2.1m(7尺)・2.1m(7尺)・1.8m(6尺)・1.8m(6尺)で、梁行は2.4m(8尺)で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。



第 58 图 第 52 号掘立柱建物跡実测图

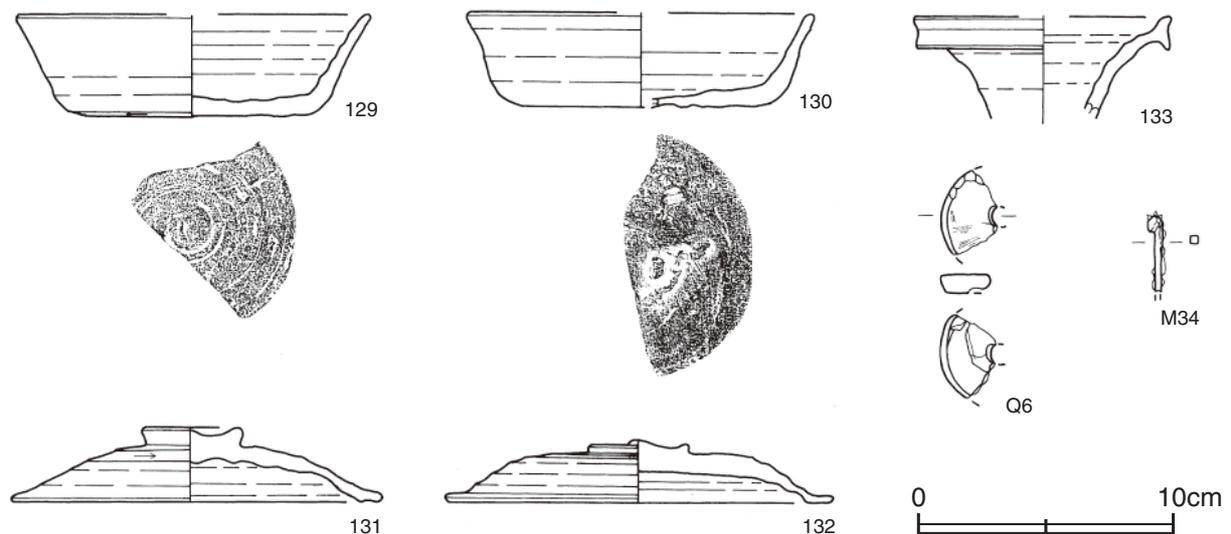
柱穴 12か所。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸82～103cm、短軸65～90cmである。深さは65～85cmで、掘方の断面形はU字形または逆台形である。第1・2層は柱痕跡、第3～12層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|-------------------------------|--------|-----------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック微量 | 8 褐色 | ロームブロック多量、炭化物微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | 9 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 10 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化物微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | 12 黒褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片323点（坏44、甕類278、甌1）、須恵器片93点（坏52、蓋22、盤1、長頸瓶1、甕類17）、石器・石製品2点（砥石、紡錘車）、鉄製品1点（釘）が各柱穴から出土している。また、混入した土師質土器片1点（内耳鍋）も出土している。129・130はP7の柱痕跡、131はP7の埋土、132はP9の埋土からそれぞれ出土している。133はP8の柱痕跡とP4の覆土中から出土した破片が接合したものである。Q6はP5、M34はP6の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第59図 第52号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第52号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
129	須恵器	坏	[13.8]	4.1	[8.4]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	P7柱痕跡	30%
130	須恵器	坏	[13.6]	3.8	[9.2]	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部ヘラ切り痕を残す、多方向のヘラ削り	P7柱痕跡	40%
131	須恵器	蓋	14.8	2.9		長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	P7埋土	90% PL39
132	須恵器	蓋	[15.2]	2.5		長石・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	P9埋土	50%
133	須恵器	長頸瓶	[10.2]	(4.2)	-	長石	灰白	普通	ロクロ整形 内面に自然釉付着	P8柱痕跡 P4覆土中	10% PL39

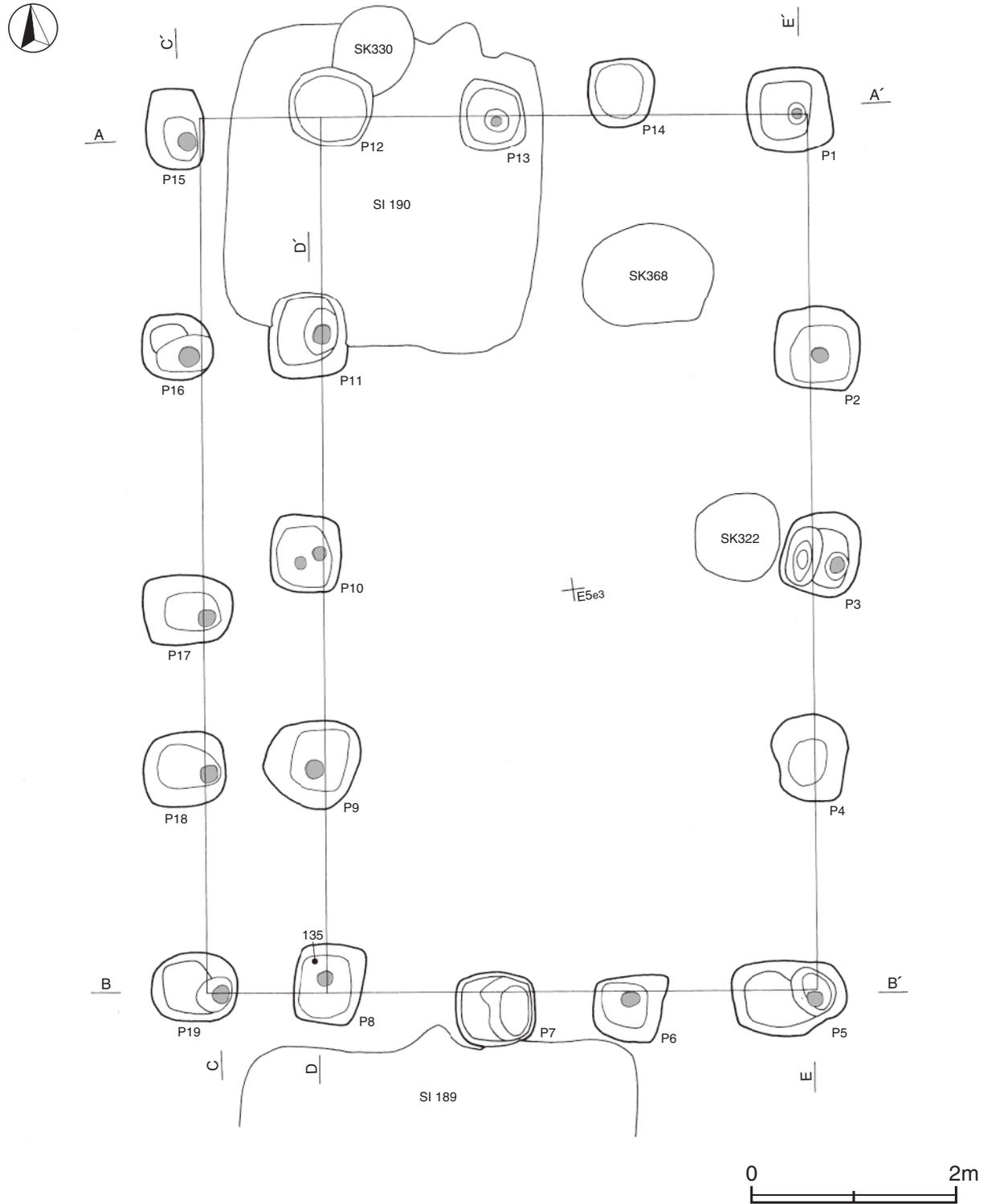
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	紡錘車	(3.3)	(2.2)	0.75	(6.7)	粘板岩	側面研磨 二方向からの穿孔 孔径 [0.8] cm	P5覆土中	PL49

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M34	釘	(3.0)	(0.7)	0.3	(1.1)	鉄	端部欠損 断面方形	P6覆土中	

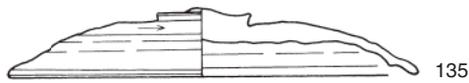
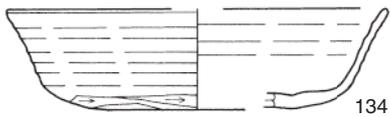
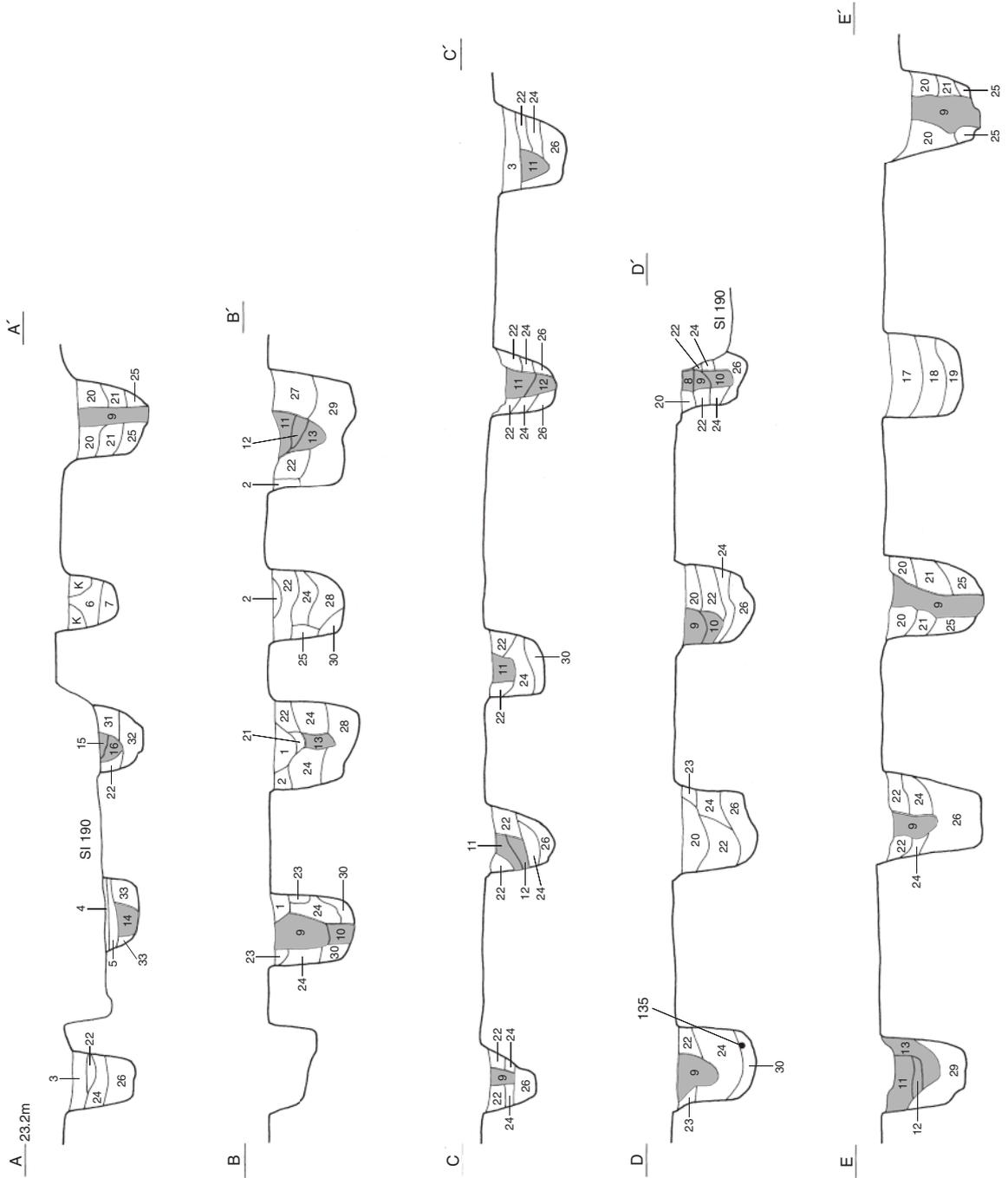
第 54 号掘立柱建物跡 (第 60・61 図)

位置 調査区西部の E 5 c2 ~ E 5 e3 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 189・190 号住居, 第 330 号土坑に掘り込まれている。第 322・368 号土坑と重複しているが新旧関係は不明である。



第 60 図 第 54 号掘立柱建物跡実測図



第 61 图 第 54 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

規模と構造 桁行4間、梁行3間の身舎に西庇が付く側柱建物跡で、桁行方向はN-7°-Eの南北棟である。身舎の規模は桁行8.70m、梁行4.80mで、面積は41.76㎡である。庇の出は1.2m（6尺）で、庇を含めた梁行は6.0mで、面積は52.20㎡である。身舎の柱間寸法は、桁行が北妻から2.4m（8尺）・2.1m（7尺）・2.1m（7尺）・2.1m（7尺）で、梁行は西平から1.8m（6尺）・1.2m（4尺）・1.8m（6尺）で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。庇の柱間寸法は、北妻から2.4m（8尺）・2.4m（8尺）・1.8m（6尺）・2.1m（7尺）と不均一ではあるが、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 19か所。P1～P14は身舎の柱穴である。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸66～110cm、短軸60～82cmである。深さは72～96cmで、掘方の断面形はU字形または逆台形である。P15～P19は庇の柱穴である。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸68～89cm、短軸58～74cmである。深さは50～64cmで、掘方の断面形は逆台形である。第1～7層は柱抜き取り後の堆積層、第8～16層は柱痕跡、第17～33層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1	灰褐色	白色粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	18	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	19	黒褐色	ローム粒子少量
3	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	20	暗褐色	ロームブロック少量
4	黒褐色	ロームブロック少量	21	暗褐色	ロームブロック微量
5	黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	22	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
6	暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	23	灰褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	24	黒褐色	ロームブロック中量
8	褐色	ローム粒子多量	25	灰褐色	ロームブロック微量
9	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	26	黒色	ロームブロック・白色粘土ブロック・炭化物微量
10	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	27	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
11	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	28	黒褐色	ロームブロック微量
12	黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	29	灰褐色	ロームブロック中量
13	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	30	灰褐色	ローム粒子中量
14	黒色	ロームブロック少量	31	褐色	ロームブロック中量
15	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	32	褐色	ロームブロック多量
16	灰褐色	ロームブロック少量	33	暗褐色	ロームブロック中量
17	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量			

遺物出土状況 土師器片176点（坏14、甕類162）、須恵器片64点（坏36、蓋16、甕類12）がP12～P14を除いた各柱穴から出土している。134はP9、135はP8の埋土からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第54号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第61図）

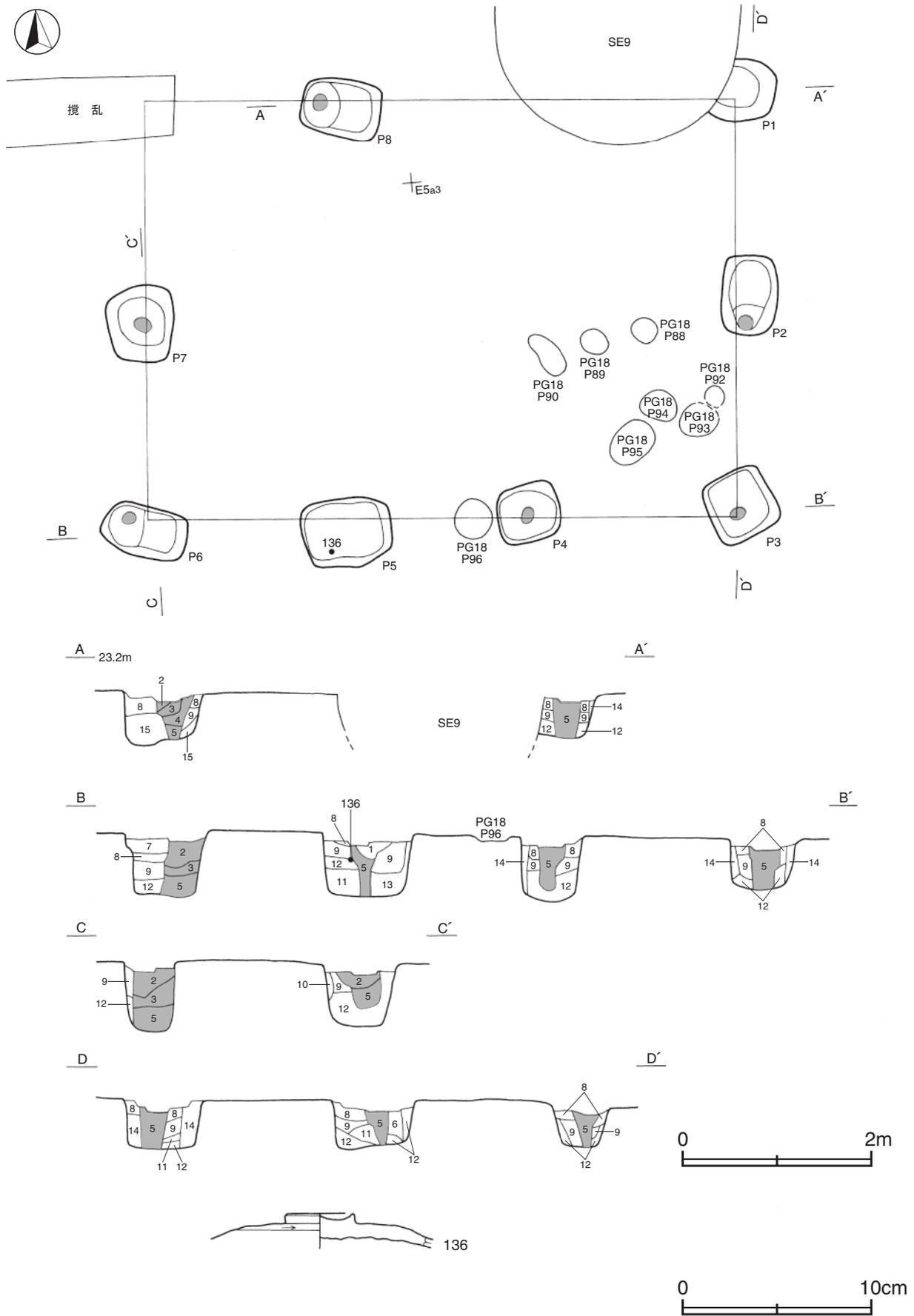
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
134	須恵器	坏	[15.0]	4.0	[8.2]	長石・石英・雲母	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	P9埋土	20%
135	須恵器	蓋	16.3	2.7		長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	P8埋土	80% PL39

第55号掘立柱建物跡（第62図）

位置 調査区北西部のD5j2～E5a3区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第9号井戸に掘り込まれている。第18号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 北東部が第9号井戸に掘り込まれ、北西部が攪乱を受けているため、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡と推定され、桁行方向はN-86°-Wの東西棟である。規模は桁行6.30m、梁行4.50mで、面積は28.35㎡である。柱間寸法は、桁行が2.1m（7尺）で、梁行は北平から2.4m（8尺）・2.1m（7尺）で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。



第 62 图 第 55 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

柱穴 8か所しか確認できなかった。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸67～94cm、短軸55～74cmである。深さは67～77cmで、掘方の断面形は逆台形である。第1層は柱抜き取り後の堆積層、第2～5層は柱痕跡、第6～15層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	9 暗褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ロームブロック少量	10 明褐色	ロームブロック多量
3 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量	11 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	12 暗褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	13 黒褐色	ロームブロック微量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック中量
7 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	15 褐色	ロームブロック中量
8 暗褐色	炭化物・ローム粒子微量		

遺物出土状況 土師器片72点（坏8、甕類63、甗1）、須恵器片17点（坏14、蓋2、甕類1）がP1～P8から出土している。136はP5の埋土から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。

第55号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
136	須恵器	蓋	-	(1.9)		長石・石英・雲母	浅黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	P5埋土	20%

第56号掘立柱建物跡（第63・64図）

位置 調査区北西部のE4a0～E5c1区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第57号掘立柱建物跡を掘り込み、第339号土坑に掘り込まれている。第63号掘立柱建物跡、第340号土坑、第18号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行4間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向はN-8°-Eの南北棟である。規模は桁行8.10m、梁行4.80mで、面積は38.88㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.1m（7尺）・1.8m（6尺）・2.1m（7尺）・2.1m（7尺）で、梁行は2.4m（8尺）で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

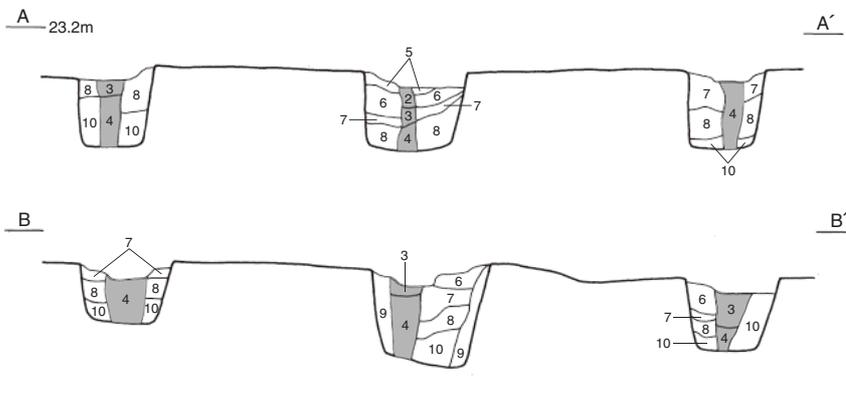
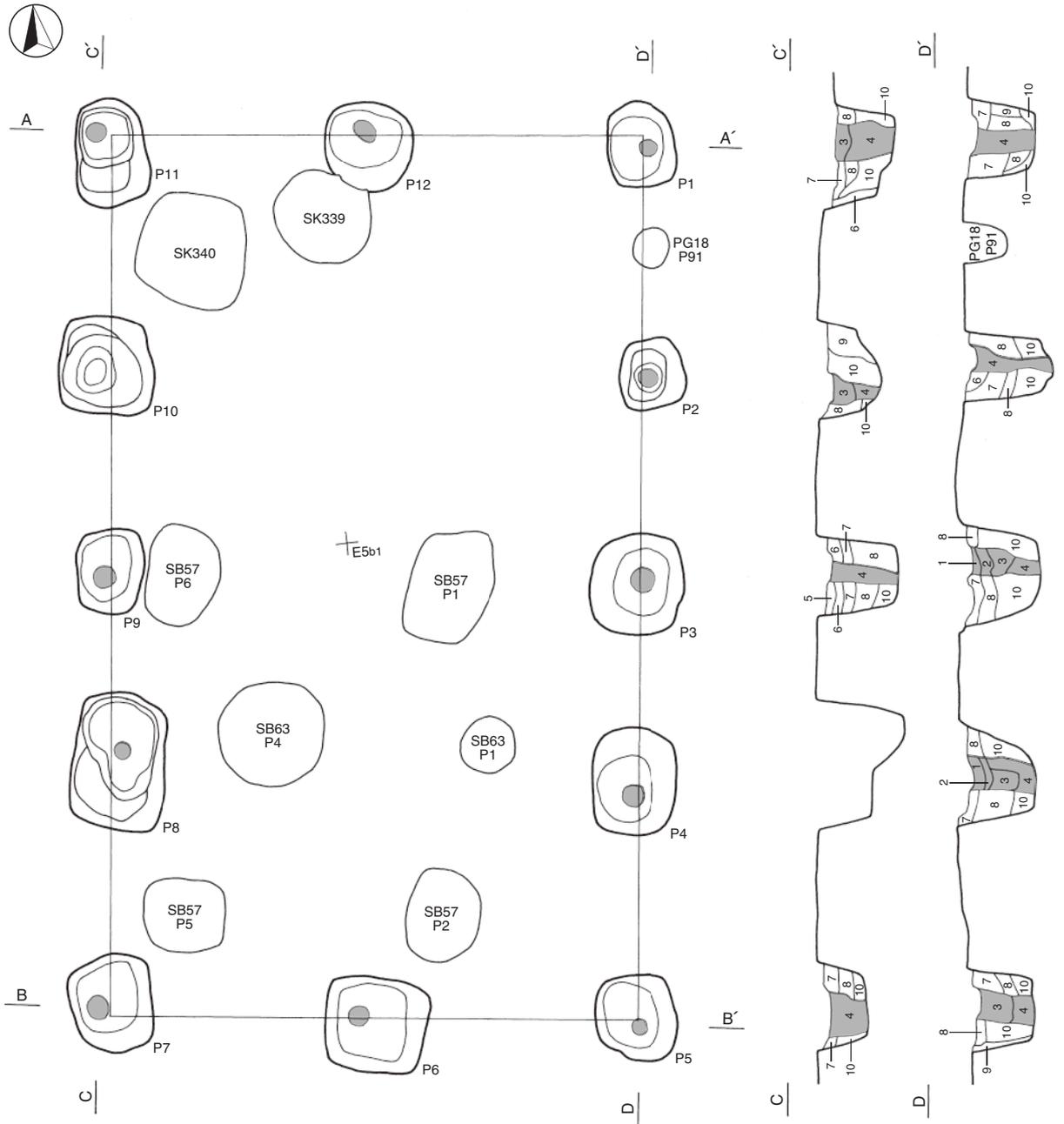
柱穴 12か所。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸63～125cm、短軸61～87cmである。深さは48～82cmで、掘方の断面形は逆台形である。第1～4層は柱痕跡、第5～10層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

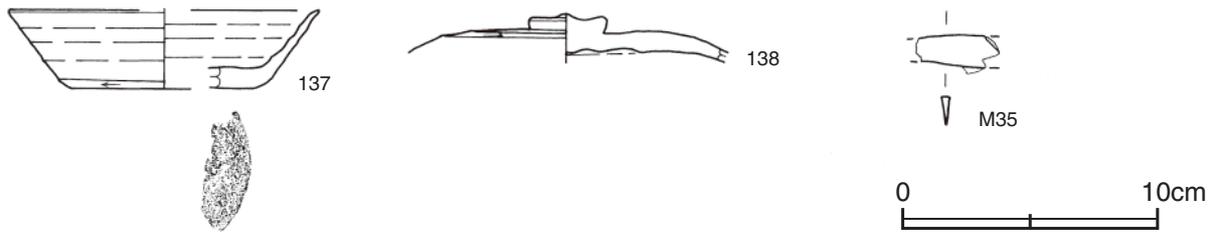
1 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック微量
2 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8 にぶい褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9 明褐色	ローム粒子中量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片32点（坏6、甕類26）、須恵器片17点（坏9、蓋1、盤2、鉢1、甕類3、甗1）、鉄製品1点（刀子）がP1～P8・P10・P12から出土している。また、混入した磁器片1点（碗）も出土している。137はP7、138はP12、M35はP11の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉に比定できる。



第 63 图 第 56 号掘立柱建物跡实测图



第64図 第56号掘立柱建物跡出土遺物実測図

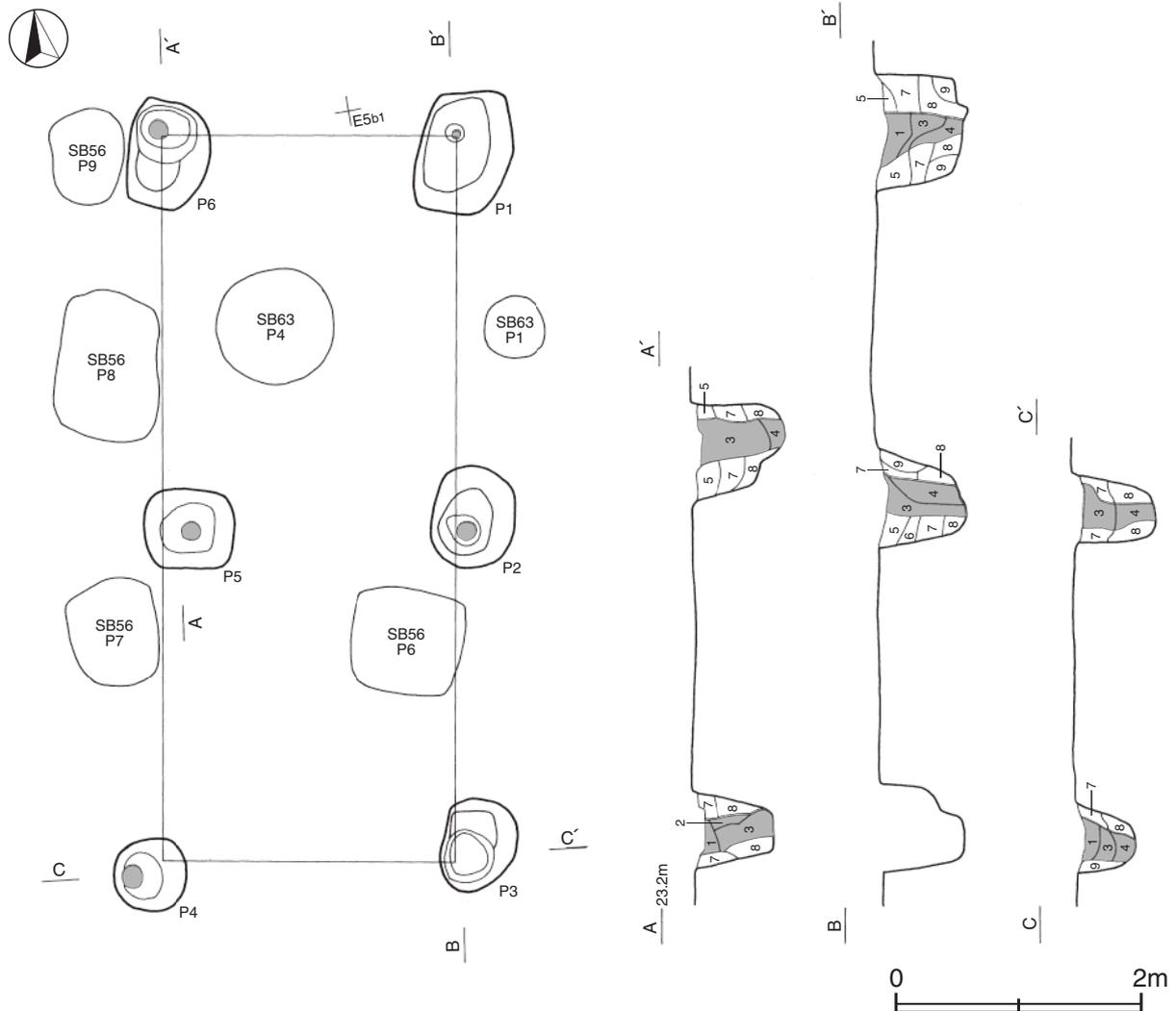
第56号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
137	須恵器	坏	[12.2]	3.1	[7.2]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	P 7 覆土中	10%
138	須恵器	蓋	-	(1.9)		長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	P 12 覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 35	刀子	(3.3)	(1.3)	(0.3)	(1.3)	鉄	刃部断面三角形	P 11 覆土中	

第57号掘立柱建物跡（第65図）

位置 調査区北西部のE 4 b0～E 5 c1区、標高23mの平坦な台地上に位置している。



第65図 第57号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第56号掘立柱建物に掘り込まれている。また、第63号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行2間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向はN-10°-Eの南北棟である。規模は桁行6.00m、梁行2.40mで、面積は14.40㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から3.3m(11尺)・2.7m(9尺)で、梁行は2.4m(8尺)で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 6か所。平面形は円形または隅丸方形、隅丸長方形で、長径(軸)60~101cm、短径(軸)60~74cmである。深さは50~80cmで、掘方の断面形はU字形または逆台形である。第1~4層は柱痕跡、第5~9層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説(各柱穴共通)

1 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子少量
2 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック微量
4 明褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	9 にぶい褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	ローム粒子微量		

遺物出土状況 土師器片19点(坏2, 甕類17), 須恵器片7点(坏2, 蓋1, 甕類4)がP4を除いた各柱穴から出土している。いずれも細片で図示できないが、丸底の須恵器坏片やかえりの付いた須恵器蓋片、横位の平行叩きが施された須恵器甕片などが出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第58号掘立柱建物跡(第66・67図)

位置 調査区北部のD5j7~E5a8区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

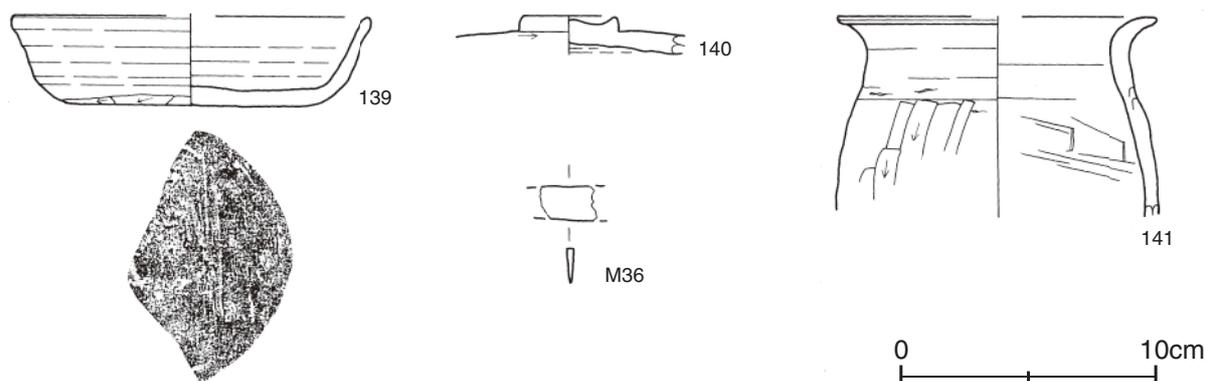
重複関係 第309号土坑、第18号ピット群に掘り込まれている。第381~384号土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向はN-85°-Wの東西棟である。規模は桁行6.30m、梁行4.20mで、面積は26.46㎡である。柱間寸法は、桁行、梁行ともに2.1m(7尺)で等間隔に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸78~105cm、短軸75~92cmである。深さは34~86cmで、掘方の断面形は逆台形である。第1・2層は柱痕跡、第3~6層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説(各柱穴共通)

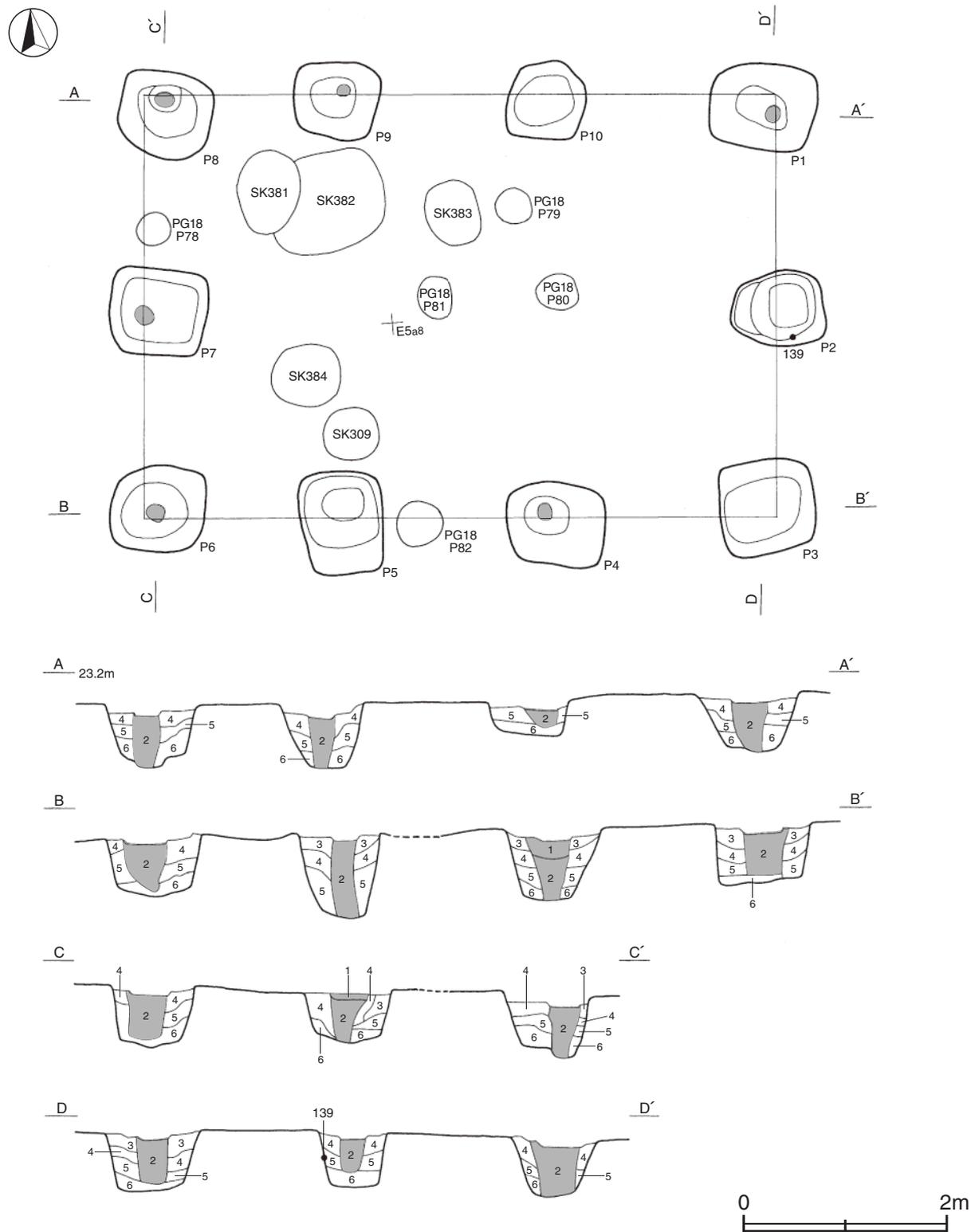
1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック微量
3 にぶい褐色	ロームブロック微量	6 明褐色	ロームブロック少量



第66図 第58号掘立柱建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 229 点（坏 12，甕類 216，小形甕 1），須恵器片 31 点（坏 25，蓋 1，甕類 5），鉄製品 1 点（刀子）が各柱穴から出土している。139・140 は P 2，141 は P 1，M 36 は P 8 の埋土からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から 8 世紀前葉に比定できる。



第 67 図 第 58 号掘立柱建物跡実測図

第58号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
139	須恵器	坏	[14.0]	3.6	[8.4]	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部多方向のヘラ削り	P 2埋土	30%
140	須恵器	蓋	-	(1.6)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	P 2埋土	10%
141	土師器	小形甕	[12.6]	(8.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	P 1埋土	10%

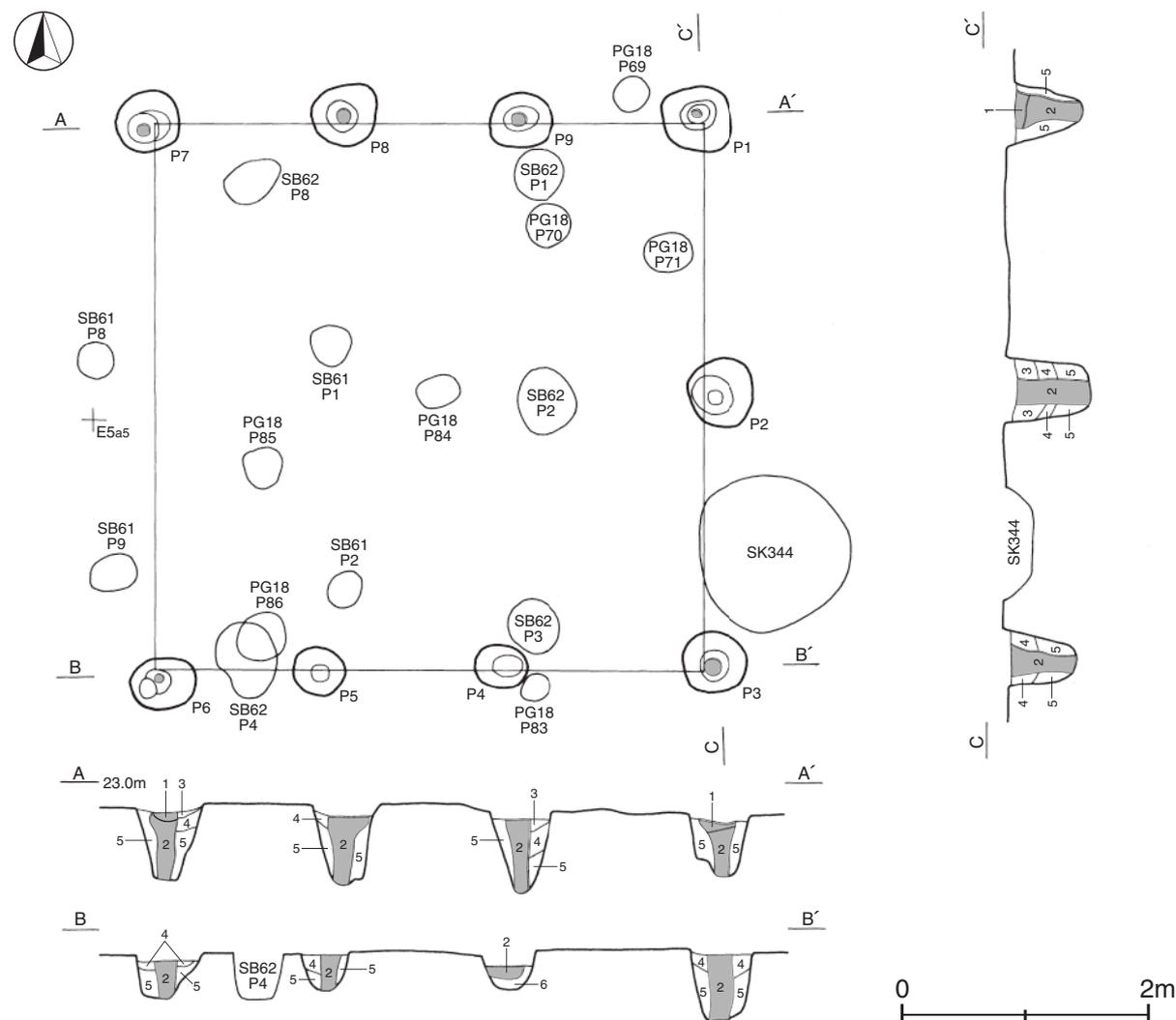
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 36	刀子	(2.3)	(1.4)	(0.2)	(1.3)	鉄	刃部断面三角形	P 8埋土	

第59号掘立柱建物跡 (第68図)

位置 調査区北西部のD 5j5 ~ E 5a6区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第61・62号掘立柱建物, 第344号土坑に掘り込まれている。第18号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 西妻中央部の柱穴が確認できなかったが, 桁行3間, 梁行2間の側柱建物跡と推定でき, 桁行方向がN-89°-Wの東西棟である。規模は桁行, 梁行ともに4.50mで, 面積は20.25㎡である。柱間寸法は, 桁行1.5m(5尺), 梁行2.25m(7.5尺)で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。



第68図 第59号掘立柱建物跡実測図

柱穴 9か所しか確認できなかった。平面形は円形または楕円形で、長径42～62cm、短径37～56cmである。深さは31～69cmで、掘方の断面形はU字形である。第1・2層は柱痕跡、第3～6層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|--------|----------------|---------|-----------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 明褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 にぶい褐色 | ロームブロック少量 |

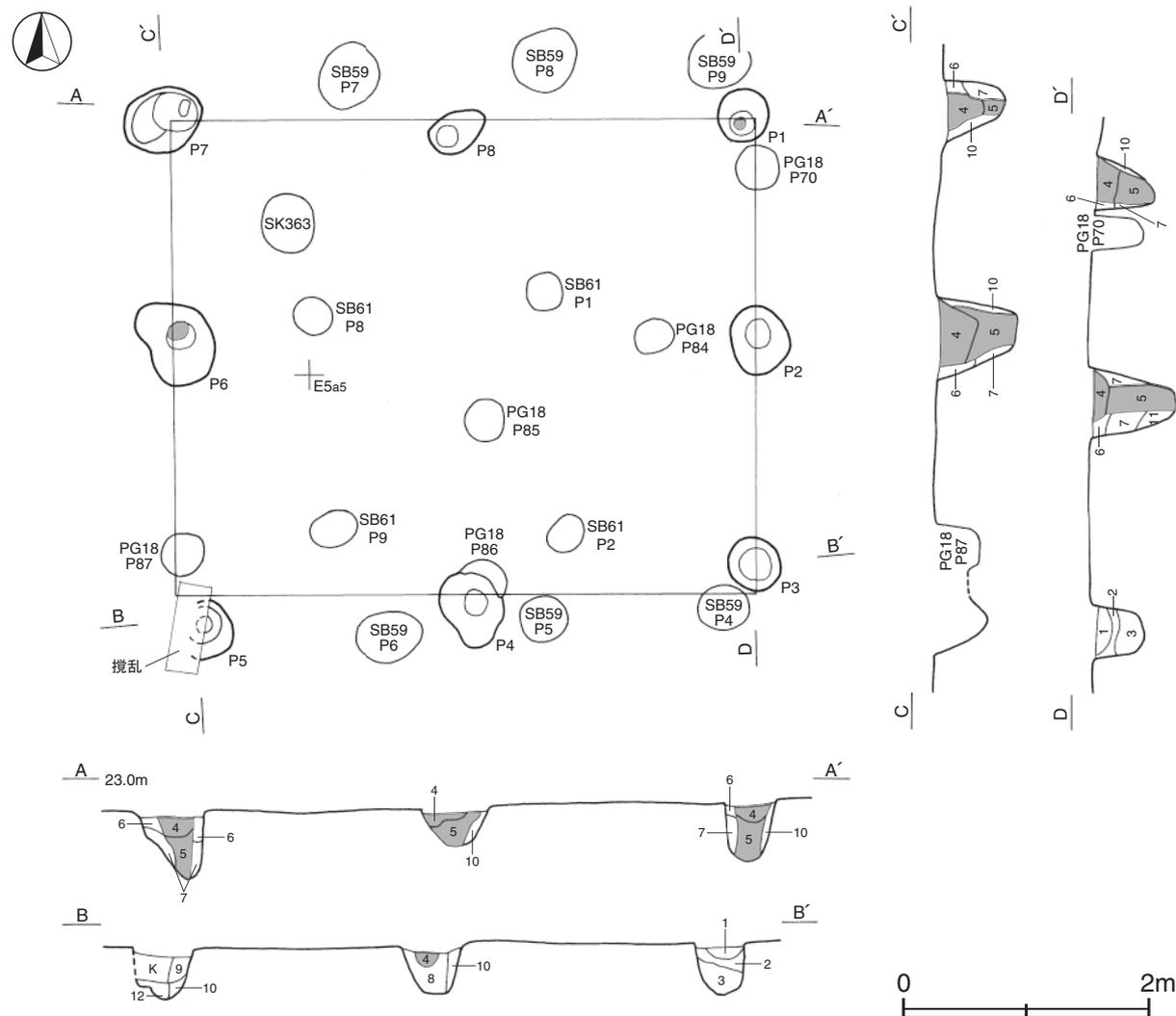
遺物出土状況 土師器片47点（坏5，甕類42），須恵器片22点（坏14，蓋6，甕類2）がP1～P4・P9から出土している。細片で図示できないが、丸底の須恵器坏片が出土している。また、須恵器蓋は、かえりが付いたものが主体である。

所見 時期は、8世紀中葉に比定できる第344号土坑に掘り込まれていることや、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第62号掘立柱建物跡（第69・70図）

位置 調査区北西部のD5j4～E5a5区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第59号掘立柱建物跡を掘り込み、第61号掘立柱建物、第18号ピット群に掘り込まれている。第363号土坑と重複しているが新旧関係は不明である。



第69図 第62号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の側柱建物跡で、桁行方向はN - 89° - Wの東西棟である。規模は桁行4.80 m、梁行3.90 mで、面積は18.72㎡である。柱間寸法は、桁行が2.4 m（8尺）で、梁行は北平から1.8 m（6尺）・2.1 m（7尺）で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径45～79cm、短径33～54cmである。深さは34～71cmで、掘方の断面形はU字形である。第1～3層は柱抜き取り後の堆積層、第4・5層は柱痕跡、第6～12層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量	8 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	10 褐色	ローム粒子中量
5 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック微量
6 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	12 褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片11点(坏1, 甕類10), 須恵器片4点(坏)

が各柱穴から出土している。142はP4の覆土中から出土している。



所見 時期は、8世紀前葉に比定できる第59号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや、出土土器から8世紀中葉に比定できる。

第70図 第62号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第62号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
142	須恵器	坏	-	(1.7)	[8.6]	長石・雲母・黒色粒子	黄灰	普通	体部下端ヘラ削り	P4覆土中	10%

表3 奈良時代 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数		面積 (㎡)	柱間寸法		柱穴			主な出土遺物	時期	備考	
			桁×梁(間)	桁×梁(m)		桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形				深さ(cm)
49	E5j7	N - 46° - E	1 × 1	2.40 × 1.80	4.32	2.4	1.8	側柱	4	円形 楕円形	20 ~ 38	土師器片, 須恵器片	8世紀代	本跡→PG14 SB44
50	E5h4~ E5j5	N - 3° - E	4 × 3	9.00 × 5.10	45.90	2.1・2.4	1.5・1.8	側柱	14	隅丸方形 隅丸長方形	52 ~ 96	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	8世紀前葉	本跡→SB51, SD26~ 28, SK291 SK305
52	E5b4~ E5c6	N - 84° - W	4 × 2	7.80 × 4.80	37.44	1.8・2.1	2.4	側柱	12	隅丸方形 隅丸長方形	65 ~ 85	土師器片, 須恵器片, 砥石, 石製紡錘車, 釘	8世紀前葉	本跡→SK333 SK371・372, PG18
54	E5c2~ E5e3	N - 7° - E	4 × 4	8.70 × 6.00	52.20	2.1・2.4	1.2 ~ 2.4	片面庇	19	隅丸方形 隅丸長方形	50 ~ 96	土師器片, 須恵器片	8世紀前葉	本跡→SI189・190, SK330 SK322・368
55	D5j2~ E5a3	N - 86° - W	3 × 2	6.30 × 4.50	28.35	2.1	2.1・2.4	側柱	8	隅丸方形 隅丸長方形	67 ~ 77	土師器片, 須恵器片	8世紀中葉	本跡→SE9 PG18
56	E4d0~ E5c1	N - 8° - E	4 × 2	8.10 × 4.80	38.88	1.8・2.1	2.4	側柱	12	隅丸方形 隅丸長方形	48 ~ 82	土師器片, 須恵器片, 刀子	8世紀中葉	SB57→本跡→SK339 SB63, SK340, PG18
57	E4b0~ E5c1	N - 10° - E	2 × 1	6.00 × 2.40	14.40	2.7・3.3	2.4	側柱	6	円形 隅丸方形 隅丸長方形	50 ~ 80	土師器片, 須恵器片	8世紀前葉	本跡→SB56 SB63
58	D5j7~ E5a8	N - 85° - W	3 × 2	6.30 × 4.20	26.46	2.1	2.1	側柱	10	隅丸方形 隅丸長方形	34 ~ 86	土師器片, 須恵器片, 刀子	8世紀前葉	本跡→SK309, PG18 SK381 ~ 384
59	D5j5~ E5a6	N - 89° - W	3 × 2	4.50 × 4.50	20.25	1.5	2.25	側柱	9	隅丸方形 隅丸長方形	31 ~ 69	土師器片, 須恵器片	8世紀前葉	本跡→SB61・62, SK344 PG18
62	D5j4~ E5a5	N - 89° - W	2 × 2	4.80 × 3.90	18.72	2.4	1.8・2.1	側柱	8	円形 楕円形	34 ~ 71	土師器片, 須恵器片	8世紀中葉	SB59→本跡→SB61, PG18 SK363

(3) 溝跡

第30号溝跡（第71図・付図）

位置 調査区南西部のE4g0～E5g5区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 東部がE5g5区内で掘り込みが立ち上がり、西部が調査区域外へ伸びているため、長さは20.44mしか確認できなかった。E5g5区から西方向(N - 83° - W)に直線的に伸びている。規模は上幅0.30～

0.62 m, 下幅 0.12 ~ 0.32 m, 深さ 8 ~ 18cmである。断面形はU字形で, 壁は外傾して立ち上がっている。

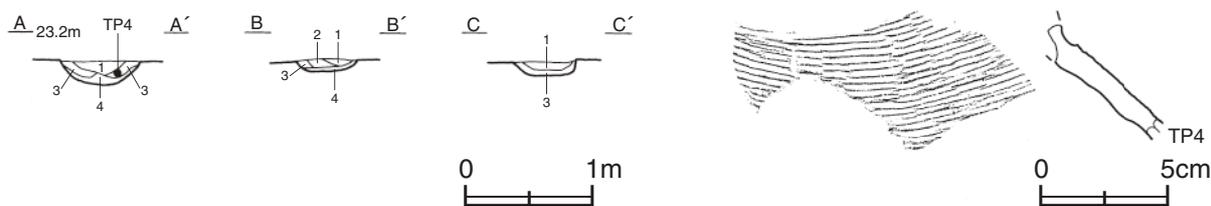
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 34 点 (坏 3, 甕類 31), 須恵器片 11 点 (坏 4, 蓋 2, 甕類 5) のほか, 鉄滓 1 点 (34 g) が出土している。TP 4 は西部の覆土中層から出土している。また, 細片で図示できないが, 須恵器蓋は端部が垂下したものや摘みが扁平なもの, 須恵器甕は横位の平行叩きが施されたものが主体である。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀代と考えられる。



第 71 図 第 30 号溝跡・出土遺物実測図

第 30 号溝跡出土遺物観察表 (第 71 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 4	須恵器	甕	長石・石英・雲母	灰黄	体部横位の平行叩き 内面無文の当て具痕	覆土中層	

(4) 土坑

第 251 号土坑 (第 72 ~ 75 図)

位置 調査区北東部の D 6 j0 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 252 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径 3.54 m, 短径 3.30 m の円形で, 底面は長径 2.26 m, 短径 1.94 m の楕円形である。深さは 147 ~ 186cm で, 壁は外傾して立ち上がっている。底面の中央部には長径 166cm, 短径 156cm の円形で, 深さ 32 ~ 43cm の穴が設けられている。底面は皿状で, 壁は外傾して立ち上がっている。

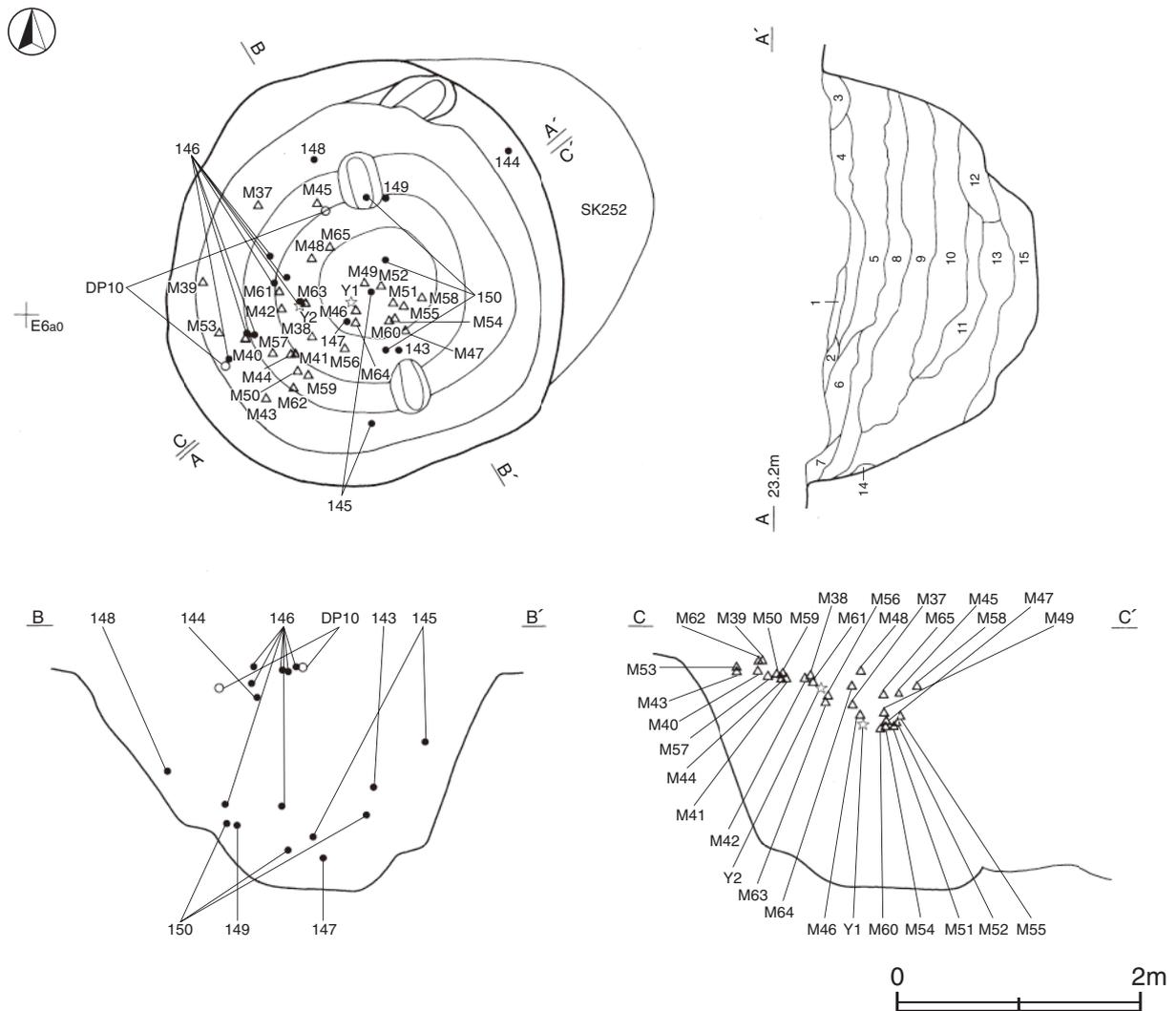
覆土 15 層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

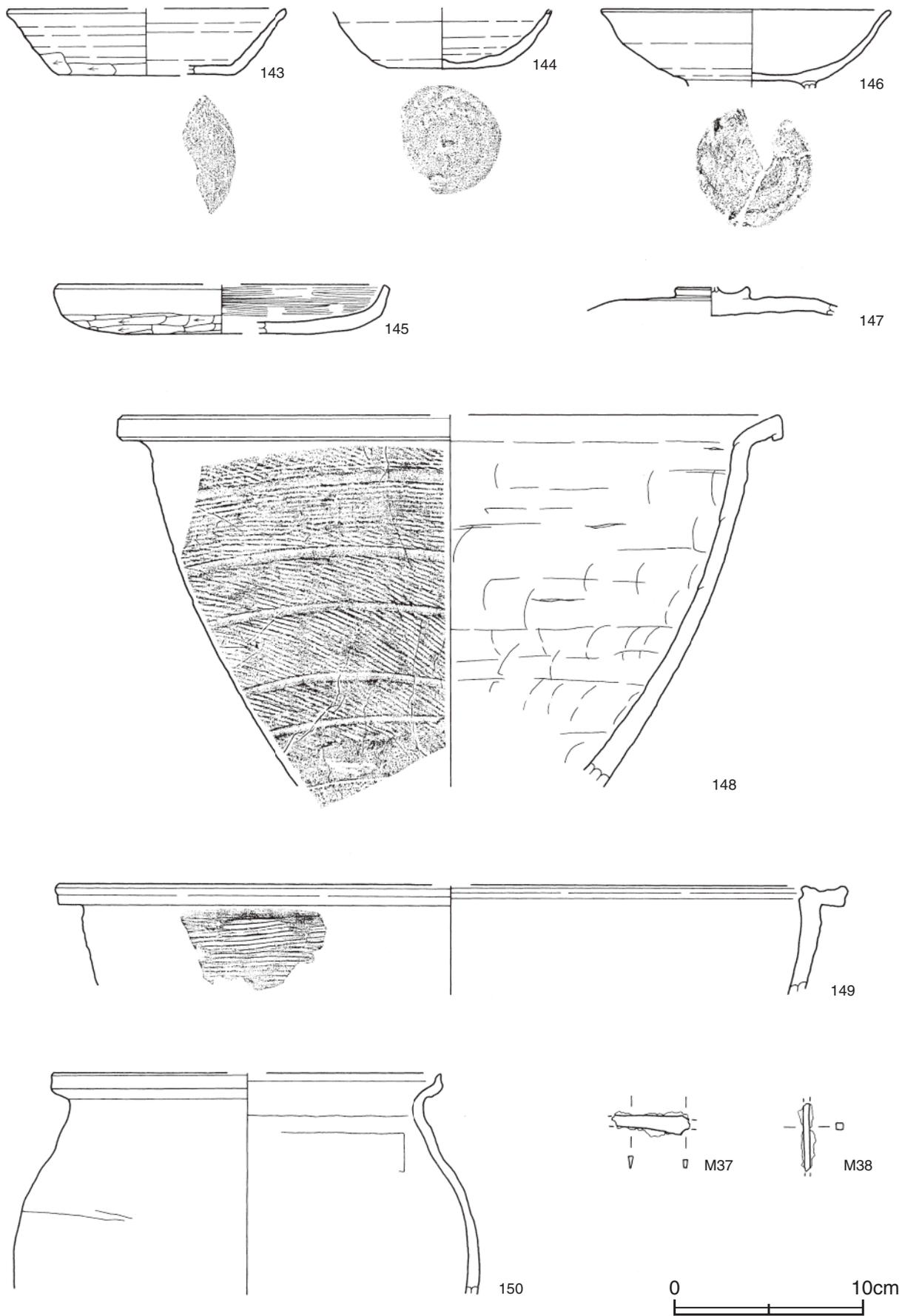
- | | | | |
|-------|-----------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 黒色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黄褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 10 黄褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | 炭化物多量, 焼土ブロック中量, 白色粘土ブロック少量 |
| 4 黄褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック少量, 白色粘土ブロック微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 6 黄褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子微量 | 14 黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 黒色 | ロームブロック少量 |
| 8 黄褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 142 点 (坏 32, 盤状坏 1, 甕類 108, 甌 1), 須恵器片 31 点 (坏 13, 蓋 7, 鉢 5, 甕類 5, 甌 1) が覆土中層から下層にかけて出土している。また, 土師器片 70 点 (坏 15, 高台付椀 2, 甕類 53), 須恵器片 28 点 (坏 17, 蓋 1, 甕類 10), 灰釉陶器片 1 点 (瓶類) のほか, 鉄塊系遺物 13 点 (125.0 g), 流動滓 1 点 (27.0 g), 粘土質溶解物 3 点 (26.4 g), 鍛冶滓 1383 点 (9374.0 g), 椀形鍛冶滓 752 点 (22720.4 g), 粒状滓 304.8 g, 鍛造剥片 2612.2 g, 羽口片 7 点, 炉壁材 9 点などの鍛冶関連遺物が, 覆土上層から中層にかけて出土している。143・145・147～150 は覆土中層から下層にかけてそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。144・146・DP10・M 37～M 65・Y 1・Y 2 は覆土上層から中層にかけて出土している。

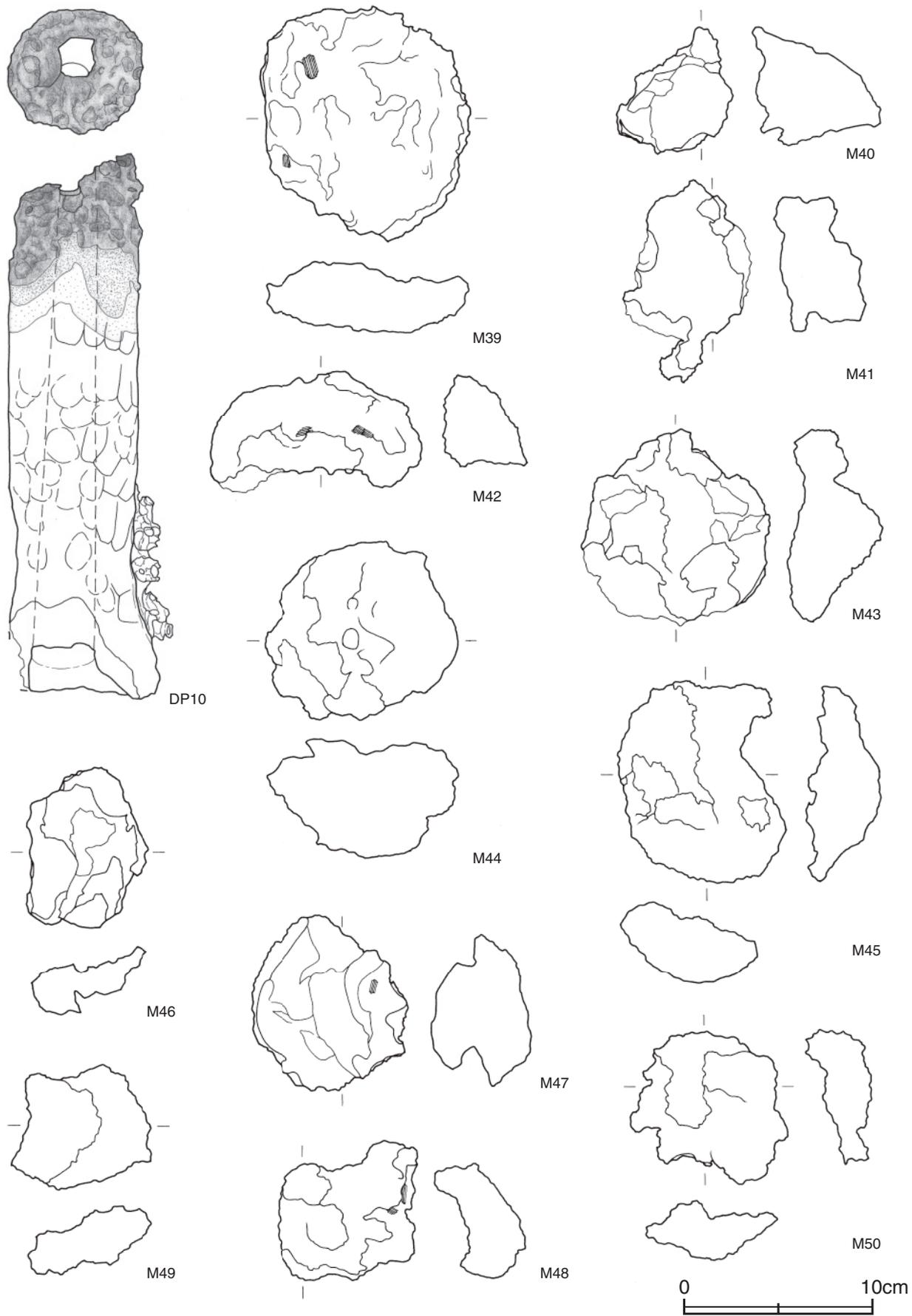
所見 搦鉢状で底面に円形の掘り込みがある形状から, 氷室状土坑と考えられているものである。時期は, 覆土中層から下層にかけて出土した土器から 8 世紀前葉に比定できる。また, 多くの鍛冶関連遺物は, 覆土上層から中層にかけて出土した土器から 10 世紀代に比定でき, 埋没後の窪地もしくは掘り返して廃棄されたものと考えられる。出土した椀形鍛冶滓や羽口の規模や形状から, 精錬から鍛錬段階の鍛冶滓とみられ, 周辺で鍛冶が行われていたものと考えられる。



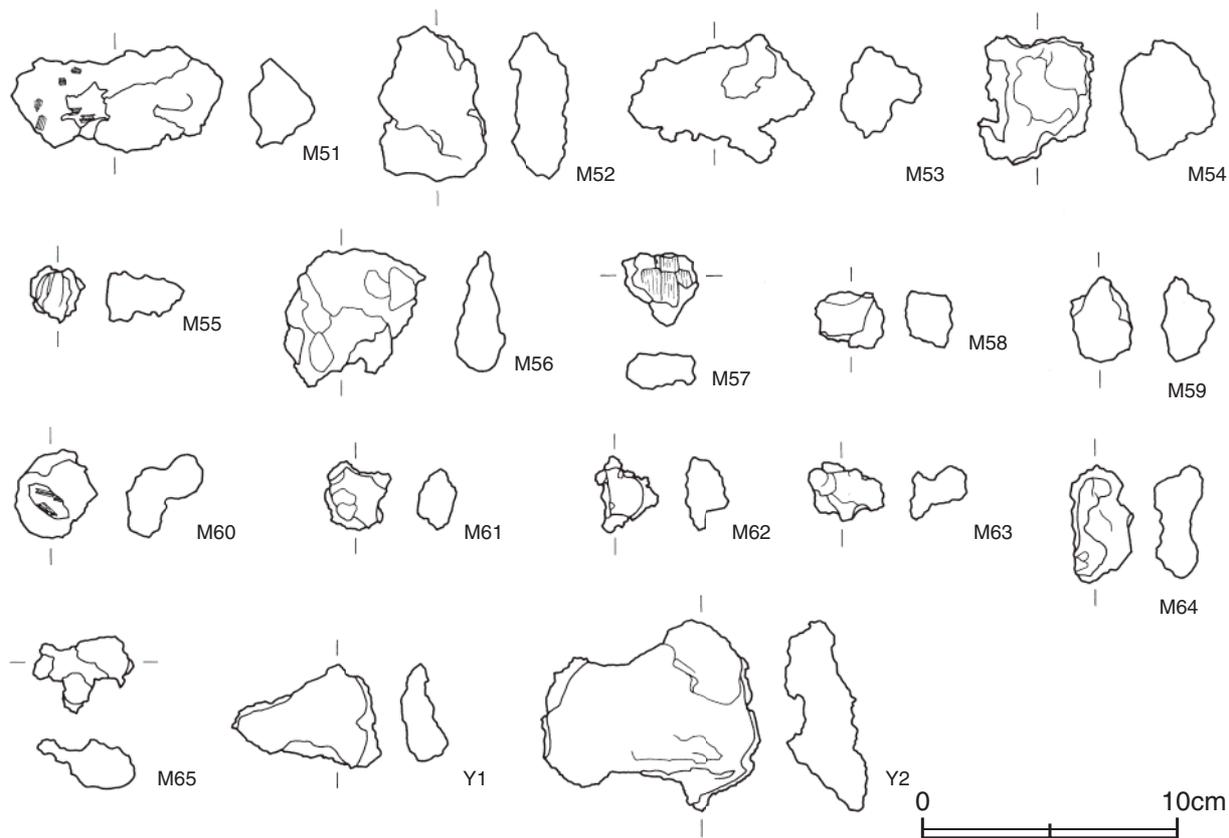
第 72 図 第 251 号土坑実測図



第73图 第251号土坑出土遗物实测图(1)



第 74 图 第 251 号土坑出土遗物实测图 (2)



第75図 第251号土坑出土遺物実測図(3)

第251号土坑出土遺物観察表(第73~75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
143	須恵器	坏	[14.8]	3.5	[9.4]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土中層	40%
144	須恵器	坏	-	(3.2)	6.0	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	底部ヘラ切り痕を残すナデ	覆土上層	40%
145	土師器	盤状坏	[17.4]	(2.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中層・下層	45%
146	土師器	高台付椀	16.1	(4.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台貼り付け 体部外・内面摩滅が激しい	覆土上層・中層	50%
147	須恵器	蓋	-	(1.5)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土下層	35%
148	須恵器	鉢	[35.1]	(20.0)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部斜位の平行叩きの後、横位の凹線 内面無文の当て具痕を残すナデ	覆土中層	20%
149	須恵器	鉢	[42.0]	(5.9)	-	長石・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	体部横位の平行叩き 内面ナデ	覆土下層	10%
150	土師器	甕	[20.6]	(11.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ痕を残すナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP10	羽口(鍛冶)先端-基部	29.4	(8.0)	(6.7)	(1310)	長石・石英・黒色粒子	長さ29.5cmを超えるほぼ完形の鍛冶羽口。やや細身で、先端部が斜め上方に向かい強く溶損する。体部径は6.5cm前後を測り、基部側がラッパ状に広がっている。基部は手前側の上半部が欠落する。通風孔部はほぼ直孔で、先端部では2.5cmを測る。頸部2方に滓が固着して肩部は2方とも溶損する。そのため、少なくとも2回は装着位置が変えられているものと判断される。それを示すように体部から基部にかけての外面に厚さ1cmほどの滓部が固着する。外面の整形はやや粗く、指頭痕や不規則な削りが混在する。胎土はスサを一定量含むやや強めの粘土質。スサ以外にも細い繊維が混じえられている。先端側の溶損が強く、ある段階ではマイナス40°近い急角度で用いられている可能性がある。	覆土上層	PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M37	刀子	(4.1)	1.0	0.2~0.3	(3.80)	鉄	刃部一部欠損 断面三角形 基部一部遺存 断面長方形	覆土上層	
M38	釘	(3.8)	0.4	0.4	(2.78)	鉄	頭部・端部欠損 断面方形	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
M 39	腕形鍛冶滓 (大)	12.7	11.3	3.9	586	2	H (○)	左側の肩部が小破面となる以外がほぼ完形の大型腕形鍛冶滓。全体に扁平で、一見、ホットケーキ状の外観を示す。上面は中央部がやや小高く、平滑な表皮には3cm大以下の木炭痕が広がっている。側部から下面は浅い腕形で、大半は炉床土の剥離面に覆われている。右上手側には小範囲で炉床土が固着する。	覆土上層	PL52
M 40	腕形鍛冶滓 (特大、炉床土付き)	6.9	6.3	6.9	299	4	なし	側部2面がシャープな破面となった特大の腕形鍛冶滓の肩部寄り破片。上面は全体的には平坦気味で、側部は立ち上がり急。破面には中・小の気孔が目立ち、一部が肥大する。含鉄部は上手側の側部上半に突出する径1cm前後大の黒錆部分。	覆土上層	
M 41	腕形鍛冶滓 (特大、含鉄、炉床土付き)	10.9	6.9	4.9	325	2	H (○)	側部3面が破面となった、特大または大型の腕形鍛冶滓の中核部から側部破片。上面は平坦気味で、全体的にイガイガしている。側部から底面は浅い腕形で、一部に炉床土が固着する。含鉄部は上半部で、短軸側の両肩部にその一部が突出する。そのため黒錆が吹き、錆膨れも確認される。	覆土上層	
M 42	腕形鍛冶滓 (大、含鉄)	6.5	11.3	4.5	364	3	錆化 (△)	下手側の側部が大破面となった大型の腕形鍛冶滓の肩部寄り破片。上面は中央部がやや小高く、2cm大以下の木炭痕が強めに残る。側部から下面はやや浅めの腕形で、炉床土が広範囲に固着する。破面は下半部も密で、表皮直下が不規則な中空部となる。含鉄部は上面表皮寄り。	覆土上層	
M 43	腕形鍛冶滓 (大、含鉄)	10.6	10.1	5.1	415	3	H (○)	下手側の肩部が欠けた腕形鍛冶滓。平・断面形はM 44と似ている。平面形は不整楕円形で、腕形の底面は中央部が突出気味。上面はほぼ平坦で、左側の肩部が外周部に沿って盛り上がっている。側部から底面の表皮は炉床土の圧痕主体。含鉄部は上面右上手側の表皮扱い。	覆土上層	PL52
M 44	腕形鍛冶滓 (大、含鉄)	9.7	10.4	6.5	657	5	H (○)	左下手側の肩部が小破面となった厚く纏まりのよい腕形鍛冶滓。断面形は深い腕形で、側部には浅い段が生じている。滓の重層あるいは操業単位による可能性大。上面は浅く窪み、ほぼ全体が流動状。含鉄部は上面表皮扱いに広く、一部は小塊状に盛り上がる。側部から底面の表皮は粉炭痕と炉床土の圧痕の両者あり。	覆土上層	PL52
M 45	腕形鍛冶滓 (中、炉床土付き)	11.0	9.1	4.4	291	1	なし	平面形が半月形となる完形の腕形鍛冶滓。左寄りが分厚く、右方向に向かって薄くなっている。また側部から底面は短軸方向に長手の不整腕形となる。下面は炉床土の剥離面主体。上面は細かい木炭痕に覆われており、重層した上半の滓が脱落した痕跡の可能性もあり。	覆土上層	PL52
M 46	腕形鍛冶滓 (中、重層)	8.6	6.5	3.7	175	1	なし	左側部3面が破面となった中型の腕形鍛冶滓破片。右側部中段に明瞭な段をもち、操業が一時途切れていることが分かる。上面は左方向に向かい窪んでおり、表皮が部分的に剥落する。側部から下面の表皮は炉床土の圧痕主体。	覆土中層	
M 47	腕形鍛冶滓 (中、含鉄、重層、炉床土付き)	9.5	8.2	5.4	280	3	H (○)	左側部下半が直線状の破面となった重層気味の腕形鍛冶滓。上下の滓には隙間があり、上面の傾斜も異なっている。滓としては上部が極小または小型の腕形鍛冶滓で、下半は一回り大きい。下半の滓の上半は1cm大前後の木炭痕主体で、密度が低い。下半の滓の側面から下面は丸味をもった腕形で、炉床土が薄皮状に貼り付く。含鉄部は上面の滓の中央寄り。	覆土中層	
M 48	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	7.5	7.4	4.8	235	3	M (◎)	右下手側の2面が破面となった、やや異形の中型の腕形鍛冶滓。上面は左右方向に長手の槌状に窪み、下面は部分的に突出部が生きている腕形となる。特に下面の左半分が短軸方向に幅2cmほど突出する。含鉄部は下半寄りの芯部か。	覆土上層	
M 49	腕形鍛冶滓 (小、錆化)	6.8	7.4	3.7	161	1	M (◎)	上面の左半分が一段窪んだ形の小型の腕形鍛冶滓。上手側の肩部2面が破面となる。上下面とも表面が木炭痕に覆われている。側部から下面は浅い腕形で、下面中央扱いが7か所ほど小さく突出する。いずれも含鉄部で、黒錆が吹き錆膨れも生じている。	覆土上層	PL52
M 50	腕形鍛冶滓 (小、粘土質溶解物付き)	8.3	8.5	3.5	182	4	錆化 (△)	短軸両側の肩部が小破面となった小型の腕形鍛冶滓。上下面は生きており、上面左上手側を中心に粘土質溶解物が乗っている。肩部は出入りがあり、側部から下面は浅い腕形を示す。下面表皮は粉炭痕と炉床土の圧痕が混在する。含鉄部は下面右寄りの芯部付近。	覆土上層	PL52
M 51	腕形鍛冶滓 (極小)	4.3	8.3	2.6	78	1	なし	左右方向に長手の腕形鍛冶滓破片。下手側の側部が破面とみられ、下面の中央部が左右方向に径1cmほどの棒状に突出する。この部分は工具痕流入滓の可能性あり。滓質はM 45と似る。	覆土中層	
M 52	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	6.2	4.2	2.4	87	2	錆化 (△)	平面、不整形をしたやや異形の腕形鍛冶滓。右側部上半が僅かに破面様で、母体となる腕形鍛冶滓の左肩部破片の可能性も残る。上面は平滑気味で、浅い皿状の側部から底面は炉床土の圧痕主体。含鉄部は極僅かで、小さな錆膨れが確認される。	覆土中層	
M 53	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	5.2	7.3	3.2	80	3	錆化 (△)	左右に長手の異形の腕形鍛冶滓。外観上は完形に見えるが、全体観からは下手側が破面の可能性をもつ。細い槌状の滓で、側部から底面が突出する。上面の中央部がやや小高く、左の肩部に粘土質溶解物が乗る。含鉄部は底面寄りの芯部。	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
M 54	腕形鍛冶滓 (極小, 含鉄)	5.2	4.6	3.8	75	2	錆化 (△)	左側部下半が小破面となった極小の腕形鍛冶滓破片。上面には流動状の滓が乗り、側部から下面は立ち上がりの急な腕形となる。表面は粉炭痕が密。含鉄部は上面表皮寄りか。	覆土中層	
M 55	腕形鍛冶滓 (含鉄, 粘土質溶解物付き)	2.2	2.1	3.0	14	2	H (○)	右側部2面が破面となった極小の腕形鍛冶滓の肩部の破片。上面左側がやや粘土質で、滓自体は3cm以上の厚みをもつ。	覆土中層	
M 56	腕形鍛冶滓 (極小, 含鉄, 粘土質溶解物付き)	5.5	5.6	1.9	58	3	H (○)	右側部が小破面となったやや変形した腕形鍛冶滓。上下逆転したような形状で、上面中央部には流動状の滓が乗る。側部から下面は平坦気味で、粉炭痕と炉壁土の部分的な固着部からなる。上下面ともに径1.5cm大の錆膨れが生じている。	覆土上層	
M 57	腕形鍛冶滓 (含鉄, 工具痕付き)	2.9	3.0	1.4	19	3	H (○)	側部3面が破面となった腕形鍛冶滓の中核部破片。上面には左右方向に伸びる幅1.5cmほどの工具痕が残されている。極小の腕形鍛冶滓の可能性と、製錬系の炉内滓の可能性の両者の要素を残す。含鉄部は下半寄りの芯部にやや広め。	覆土上層	
M 58	鍛冶滓 (炉床土付き)	2.2	2.7	1.8	12	1	H (○)	側部3面が破面となった小塊状の鍛冶滓または炉内滓破片。上面には粉炭痕が残り、破面には炉壁土または羽口の胎土様の部分が確認される。もし羽口とすれば滓部は小型の腕形鍛冶滓の一部の可能性もあり。	覆土上層	
M 59	鍛冶滓 (含鉄)	3.5	2.5	2.0	20	2	H (○)	右側部が小破面となった小塊状の鍛冶滓。上下面が平坦気味で、小型の腕形鍛冶滓の肩部破片の可能性も残る。表面には浅い木炭痕あり。下面左側には酸化土砂が確認され含鉄部を物語る。	覆土上層	
M 60	鍛冶滓 (含鉄, 鍛造剥片付き)	3.2	3.6	3.0	19	2	H (○)	表面が粉炭痕や滓片を含む再結合滓に覆われた小塊状の鍛冶滓。酸化土砂中には鍛造剥片らしき微細遺物も含まれている。左下手側の端部は酸化土砂に覆われて含鉄部を示す。	覆土中層	
M 61	鉄塊系遺物 (含鉄)	2.8	2.7	1.6	10	2	H (○)	表面各所に小さな錆膨れが目立つ鉄塊系遺物。やや扁平な塊状で、肩部3方に錆膨れあり。錆膨れ周辺は黒錆が吹き、放射割れも生じている。芯部はほぼ全体が含鉄部。	覆土上層	
M 62	鉄塊系遺物 (含鉄)	3.0	2.5	1.7	12	2	H (○)	厚さ1.5cmほどの小塊状の鉄塊系遺物。平面形は不整三角形で、表面は生きている。小さな錆膨れが各所に点々と見られる。ほぼ全体が含鉄部と推定される。	覆土上層	
M 63	鉄塊系遺物 (含鉄)	2.3	3.0	2.3	18	5	H (○)	表面の各所から錆膨れと黒錆のにじみに加えて、放射割れが生じている鉄塊系遺物。上下面が比較的平坦気味で、側部は立ち上がりが急。表面各所からの突出部はすべて錆膨れとみられる。	覆土上層	
M 64	粘土質溶解物	4.7	2.5	2.0	13	2	なし	ほぼ完形の粘土質溶解物。表裏面ともに波状で、下面は粉炭に接している。羽口先の粘土質溶解物が鍛冶炉中の木炭層に遊離したものか。	覆土上層	
M 65	粘土質溶解物	3.0	3.9	2.0	6.7	1	なし	前者と同様の滓質をもつ粘土質溶解物。小塊状の部分から左側に向かい不規則な突出部が生じている。表面の一部は黒色ガラス質から灰褐色となる。遊離した粘土質溶解物と判断される。	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
Y 1	炉壁(鍛冶炉)	4.2	6.0	1.9	16	1	なし	表面が滓化して細い垂れが生じている炉壁破片。側部3面と外面全体が破面となる。外面には胎土中に混じえられた多量のスサ痕が露出する。鍛冶炉の炉壁としては極めて希な胎土で、製鉄炉の炉壁に似る。鍛冶工人の出自が製鉄工人であった可能性もあり。	覆土中層	
Y 2	炉壁(鍛冶炉)	7.7	8.7	3.2	95	1	なし	前者と似た一回り大きい鍛冶炉の炉壁破片。内面状態は基本的に同じで、右側にはこぶ状の垂れが重層する。内面下端は溶損が進み、ヒダ状となる。側部全周と外面の大半が破面となる。胎土は多量のスサを混じえるもので、スサ痕の一部に灰化したスサが点々と確認される。	覆土上層	

※ DP10・M39～M65・Y1・Y2の磁着度、メタル度及び特徴については、穴澤義功氏の指導のもと記載した。

第 258 号土坑 (第 76 図)

位置 調査区北部の D 5 j0 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径 1.32 m, 短径 1.30 m の円形である。深さは 17cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

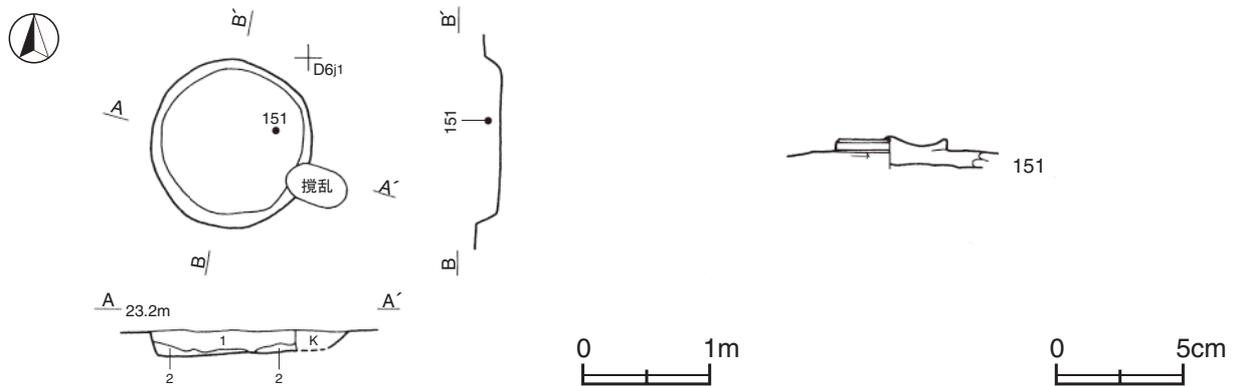
覆土 2 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗 褐 色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 13 点 (甕類), 須恵器片 4 点 (坏 2, 蓋 1, 甕類 1) が出土している。151 は東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉に比定できる。



第 76 図 第 258 号土坑・出土遺物実測図

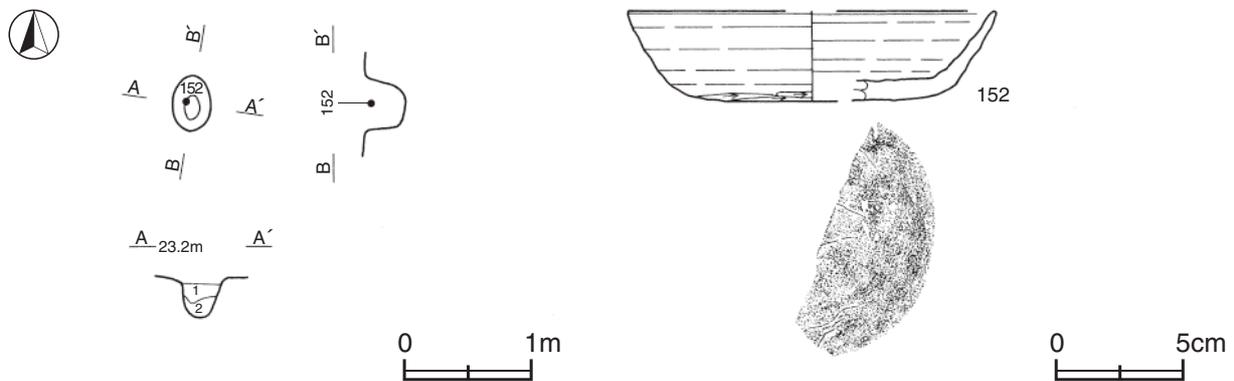
第 258 号土坑出土遺物観察表 (第 76 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
151	須恵器	蓋	-	(1.3)		長石・雲母	褐灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後, つまみ貼り付け	覆土下層	10%

第 269 号土坑 (第 77 図)

位置 調査区北東部の E 5 d8 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径 0.43 m, 短径 0.31 m の楕円形で, 長径方向は N - 8° - E である。深さは 33cm で, 底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。



第 77 図 第 269 号土坑・出土遺物実測図

覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1点(坏), 須恵器片2点(坏)が出土している。152は中央部の覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第269号土坑出土遺物観察表(第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
152	須恵器	坏	[14.4]	3.6	[10.0]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土上層	30%

第279号土坑(第78図)

位置 調査区北東部のE5j9区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第280号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.00m, 短径0.82mの楕円形で, 長径方向はN-42°-Wである。深さは26cmで, 底面はほぼ平坦で, 南東部に深さ42cmのピット状のくぼみがみられる。壁は外傾して立ち上がっている。

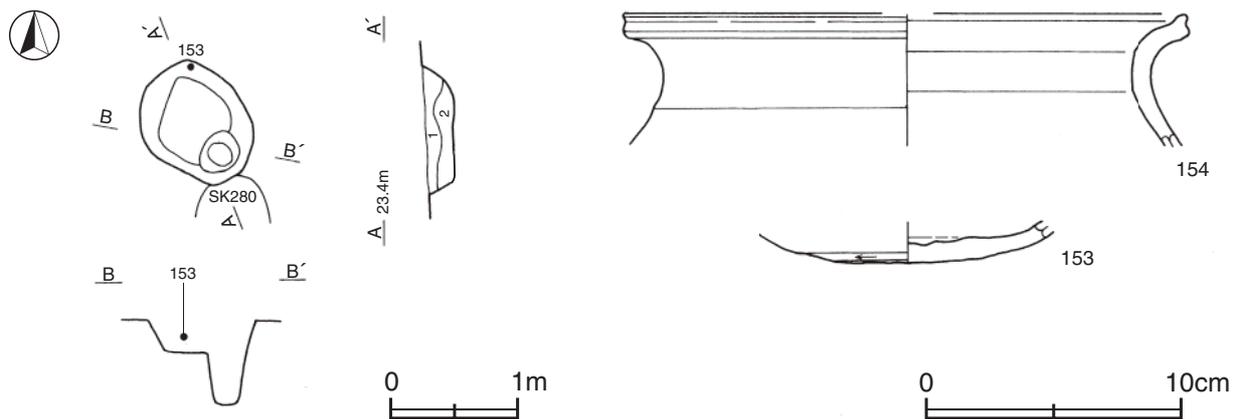
覆土 2層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量 2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片5点(甕類), 須恵器片1点(坏)が出土している。153は北部壁際の覆土下層, 154は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第78図 第279号土坑・出土遺物実測図

第279号土坑出土遺物観察表(第78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
153	須恵器	坏	-	(1.6)		長石・石英・雲母・細礫	浅黄	普通	底部回転ヘラ削り	覆土下層	30%
154	土師器	甕	[22.2]	(5.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土中	10%

第 306 号土坑 (第 79 図)

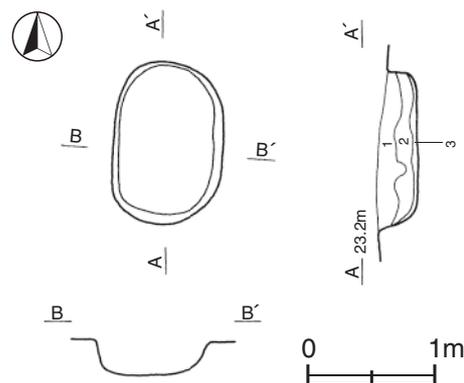
位置 調査区北東部の F 5 a4 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径 1.28 m, 短径 0.88 m の楕円形で, 長径方向は N - 2° - E である。深さは 30cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック少量



第 79 図 第 306 号土坑実測図

遺物出土状況 土師器片 20 点 (甕類), 須恵器片 2 点 (坏), 鉄製品 1 点 (釘) が出土している。

所見 時期は, 細片で図示できないが須恵器坏片の器形から, 8 世紀代と考えられる。

第 309 号土坑 (第 80・81 図)

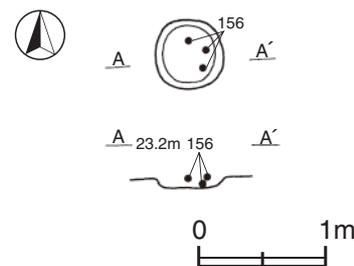
位置 調査区中央部の E 5 a7 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 58 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

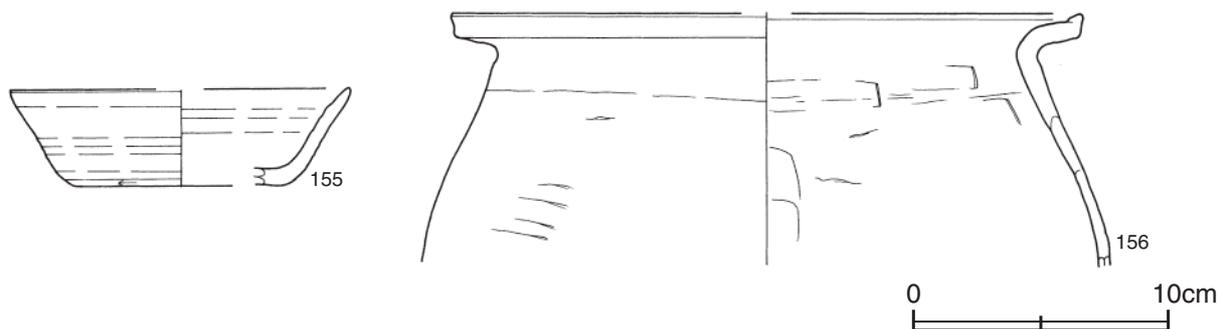
規模と形状 径 0.55 m の円形である。深さは 8 cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

遺物出土状況 土師器片 35 点 (坏 3, 甕類 32), 須恵器片 5 点 (坏 4, 甕類 1) が出土している。156 は覆土上層, 155 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 80 図 第 309 号土坑実測図



第 81 図 第 309 号土坑出土遺物実測図

第 309 号土坑出土遺物観察表 (第 81 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備 考
155	須恵器	坏	[13.4]	3.9	[8.2]	長石・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中	10%
156	土師器	甕	[24.6]	(10.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ痕を残すナデ 内面ヘラナデ	覆土上層	15%

第 316 号土坑 (第 82 図)

位置 調査区中央部の E 5 d8 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 171 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 0.77 m, 短径 0.56 m の楕円形で, 長径方向は N - 86° - W である。深さは 18cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

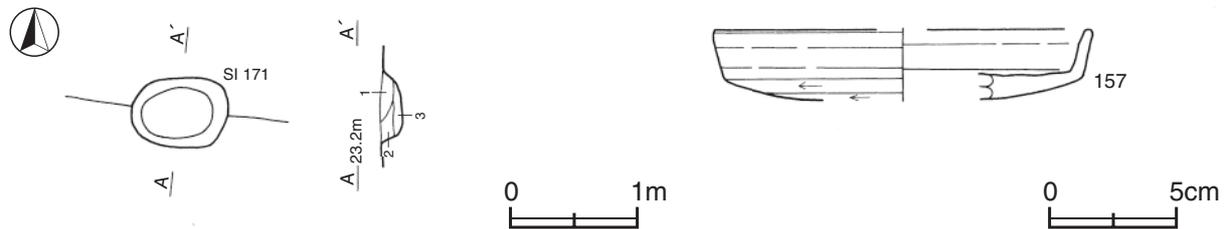
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 須恵器片 1 点 (盤カ) が覆土中から出土している。

所見 時期は, 8 世紀中葉に比定できる第 171 号住居跡を掘り込んでいることや, 出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 82 図 第 316 号土坑・出土遺物実測図

第 316 号土坑出土遺物観察表 (第 82 図)

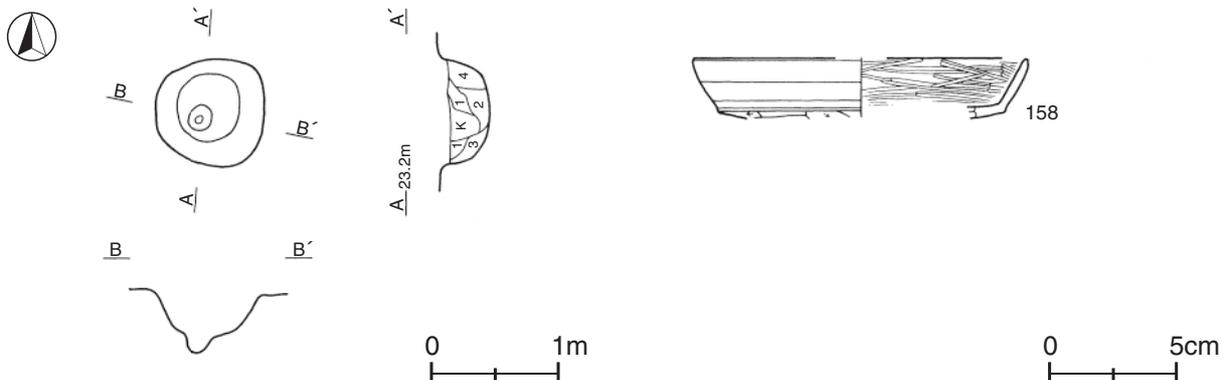
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
157	須恵器	盤カ	[14.8]	(2.8)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土中	10%

第 322 号土坑 (第 83 図)

位置 調査区北東部の E 5 d3 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 54 号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と形状 長径 0.92 m, 短径 0.90 m の円形である。深さは 36cm で, 底面は皿状で, 中央部に深さ 16cm のピット状のくぼみがみられる。壁は外傾して立ち上がっている。



第 83 図 第 322 号土坑・出土遺物実測図

覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片 8点（坏1，甕類7），須恵器片 3点（坏）が出土している。158は覆土中から出土している。また、細片で図示できないが扁平な丸底の須恵器坏片も出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第322号土坑出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
158	土師器	坏	[13.2]	(2.4)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中	10%

第323号土坑（第84図）

位置 調査区北東部のE5b2区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径1.36m、短径1.22mの楕円形で、長径方向はN-26°-Eである。深さは35cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

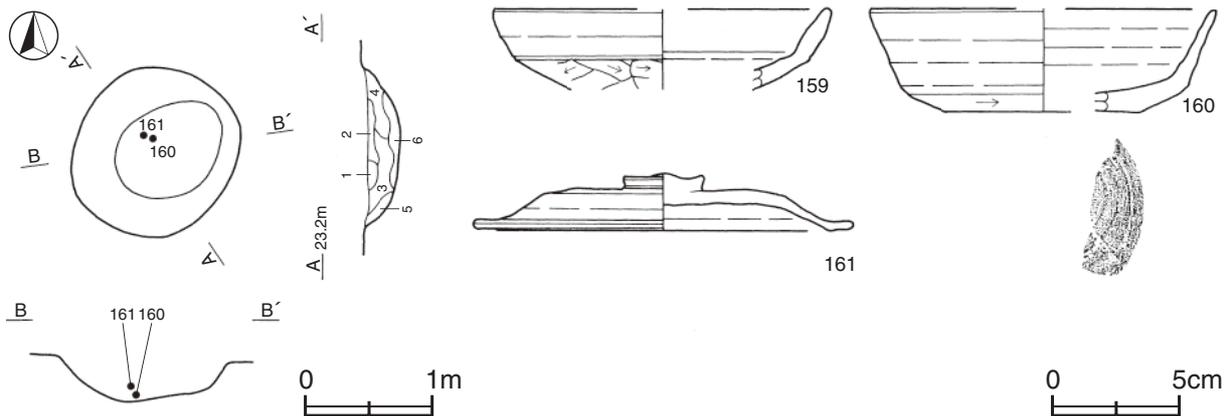
覆土 6層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片 16点（坏6，甕類10），須恵器片 4点（坏3，蓋1）が出土している。160・161は中央部の覆土下層，159は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第84図 第323号土坑・出土遺物実測図

第323号土坑出土遺物観察表（第84図）

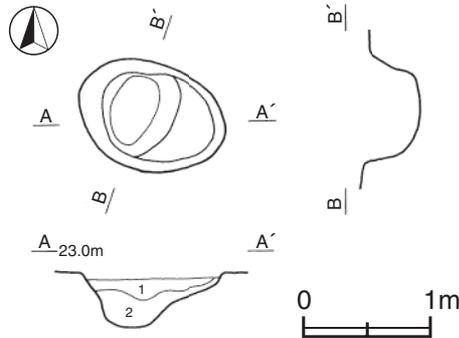
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
159	土師器	坏	[13.2]	(3.2)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土中	10%
160	須恵器	坏	[13.6]	4.1	[7.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	15%
161	須恵器	蓋	[15.0]	2.3		長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土下層	30%

第 332 号土坑 (第 85 図)

位置 調査区北東部の E 5 a4 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 61 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径 1.20 m, 短径 0.86 m の楕円形で, 長径方向は N - 70° - W である。深さは 44cm で, 底面は皿状で, 西側が一段低くなっている。西壁は外傾して立ち上がり, 東壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。



覆土 2層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 明褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片 13 点 (甕類), 須恵器片 4 点 (坏 3, 蓋 1) が出土している。細片で図示できないが, かえりの付いた須恵器蓋片が出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉に比定できる。

第 85 図 第 332 号土坑実測図

第 335 号土坑 (第 86 図)

位置 調査区北部の D 5 j6 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 1.55 m, 短軸 0.68 m の隅丸長方形で, 長軸方向は N - 15° - W である。深さは 31cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

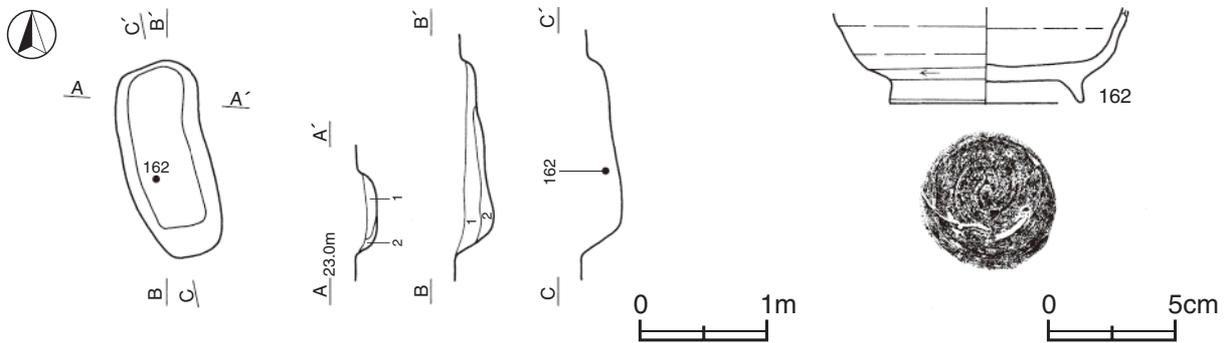
覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片 4 点 (甕類), 須恵器片 10 点 (坏 6, 高台付坏 1, 甕類 3) が出土している。162 は中央部の覆土下層から出土している。また, 細片で図示できないが, 横位の平行叩きが施された須恵器甕片も出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀後半と考えられる。



第 86 図 第 335 号土坑・出土遺物実測図

第 335 号土坑出土遺物観察表 (第 86 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
162	須恵器	高台付坏	-	(3.8)	7.7	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け	覆土下層	70%

第 340 号土坑 (第 87 図)

位置 調査区北東部の E 4 a0 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 56 号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸 1.03 m, 短軸 1.00 m の隅丸方形で, 長軸方向は N - 32° - E である。深さは 25cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

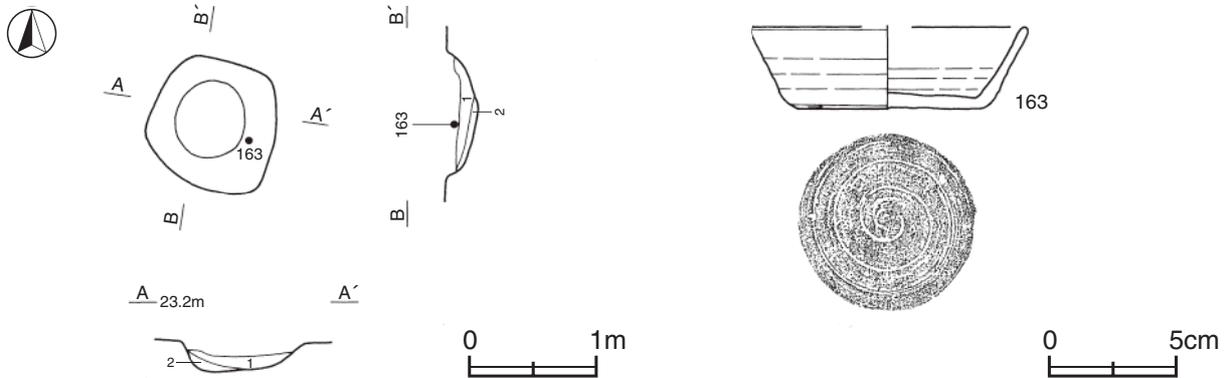
覆土 2 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 15 点 (坏 4, 甕類 11), 須恵器片 6 点 (坏 5, 瓶類 1) が出土している。163 は覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 87 図 第 340 号土坑・出土遺物実測図

第 340 号土坑出土遺物観察表 (第 87 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
163	須恵器	坏	[10.8]	3.3	7.0	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土上層	70% PL37

第 344 号土坑 (第 88 図)

位置 調査区北東部の E 5 a6 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 59 号掘立柱建物跡, 第 337 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 径 1.25 m の円形である。深さは 22cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

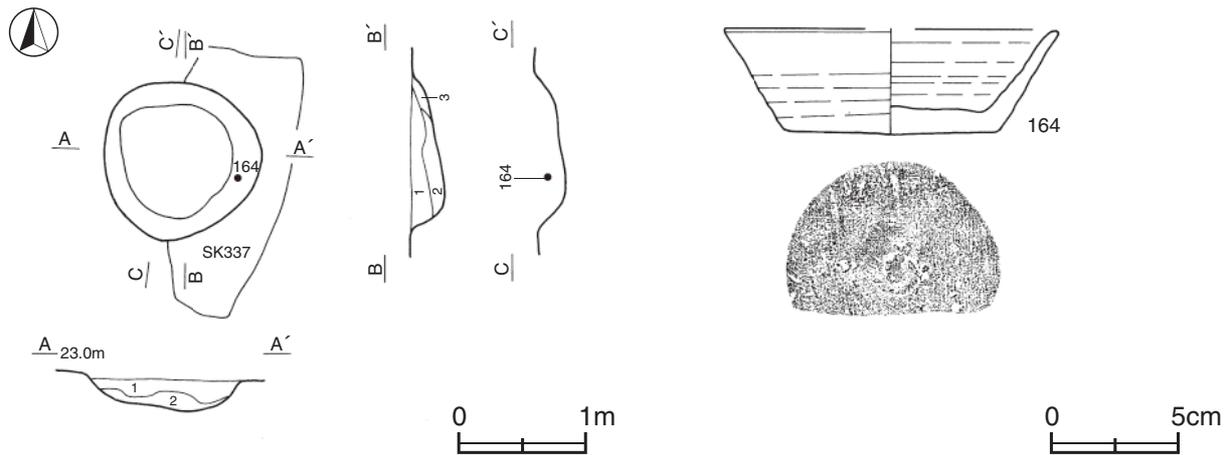
覆土 3 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量
2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 43 点 (坏 3, 甕類 40), 須恵器片 26 点 (坏 22, 甕類 4) が出土している。164 は東部の覆土中層から出土している。また, 細片で図示できないが横位の平行叩きが施された須恵器甕片も出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 88 図 第 344 号土坑・出土遺物実測図

第 344 号土坑出土遺物観察表（第 88 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
164	須恵器	坏	[13.2]	4.2	8.4	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土中層	45%

表 4 奈良時代 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
251	D 6 j0	-	円形	3.54 × 3.30	147 ~ 186	皿状	外傾	人為	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片, 鍛冶関連遺物	SK252 → 本跡
258	D 5 j0	-	円形	1.32 × 1.30	17	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
269	E 5 d8	N - 8° - E	楕円形	0.43 × 0.31	33	皿状	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
279	E 5 j9	N - 42° - W	楕円形	1.00 × 0.82	26・65	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SK280 → 本跡
306	F 5 a4	N - 2° - E	楕円形	1.28 × 0.88	30	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片, 釘	
309	E 5 a7	-	円形	0.55 × 0.55	8	平坦	緩斜	-	土師器片, 須恵器片	SB58 → 本跡
316	E 5 d8	N - 86° - W	楕円形	0.77 × 0.56	18	平坦	外傾	人為	須恵器片	SI171 → 本跡
322	E 5 d3	-	円形	0.92 × 0.90	36・50	皿状	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SB54
323	E 5 b2	N - 26° - E	楕円形	1.36 × 1.22	35	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
332	E 5 a4	N - 70° - W	楕円形	1.20 × 0.86	44	皿状	外傾	自然	土師器片, 須恵器片	本跡 → SB61
335	D 5 j6	N - 15° - W	隅丸長方形	1.55 × 0.68	31	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
340	E 4 a0	N - 32° - E	隅丸方形	1.03 × 1.00	25	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	SB56
344	E 5 a6	-	円形	1.25 × 1.25	22	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	SB59, SK337 → 本跡

3 平安時代の遺構と遺物

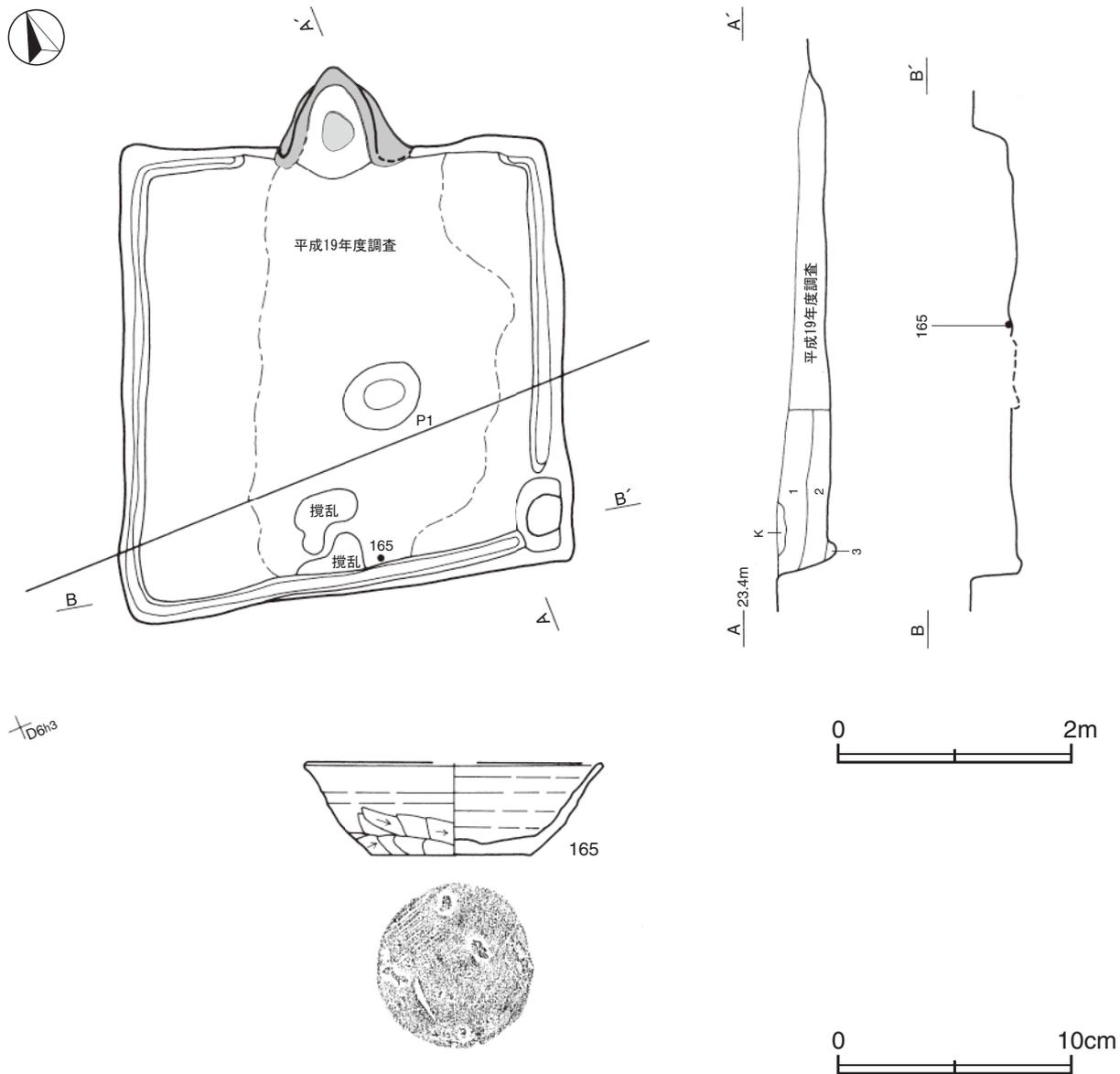
当時代の遺構は、竪穴住居跡 46 軒、掘立柱建物跡 4 棟、鍛冶工房跡 1 基、土坑 16 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第 102 号住居跡（第 89 図）

位置 調査区北部の D 6 g3 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

確認状況 北部の大半は平成 19 年度に調査し、『茨城県教育財団文化財報告』第 326 集で報告されているが、平面図及び断面図については既調査分と合成して記載した。



第 89 図 第 102 号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状 長軸 4.10 m，短軸 3.94 m の方形で，主軸方向は $N - 20^\circ - E$ である。壁高は 16 ～ 40cm で，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，竈前面から南壁際にかけて踏み固められている。北壁の東側を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 98cm，燃烧部幅は 52cm である。袖部は，床面と同じ高さの地山の上にロームブロックと砂質粘土粒子を含んだにぶい褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 70cm 掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。

ピット 深さ 14cm で，中央部の南寄りに位置しているが性格は不明である。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 灰黄褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 本年度の調査区からは、土師器片5点（甕類）、須恵器片1点（坏）が出土している。また、平成19年度の調査区からは、土師器片132点（坏4、甕類107、小形甕21）、須恵器片39点（坏35、蓋2、盤1、高盤1）が出土している。165は南部壁際の床面から逆位の状態で出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 北半部については平成19年度刊行の『茨城県教育財団文化財報告』第326集を参照されたい。時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第102号住居跡出土遺物観察表（第89図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
165	須恵器	坏	[12.6]	4.0	7.0	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	75% PL39

第125号住居跡（第90図）

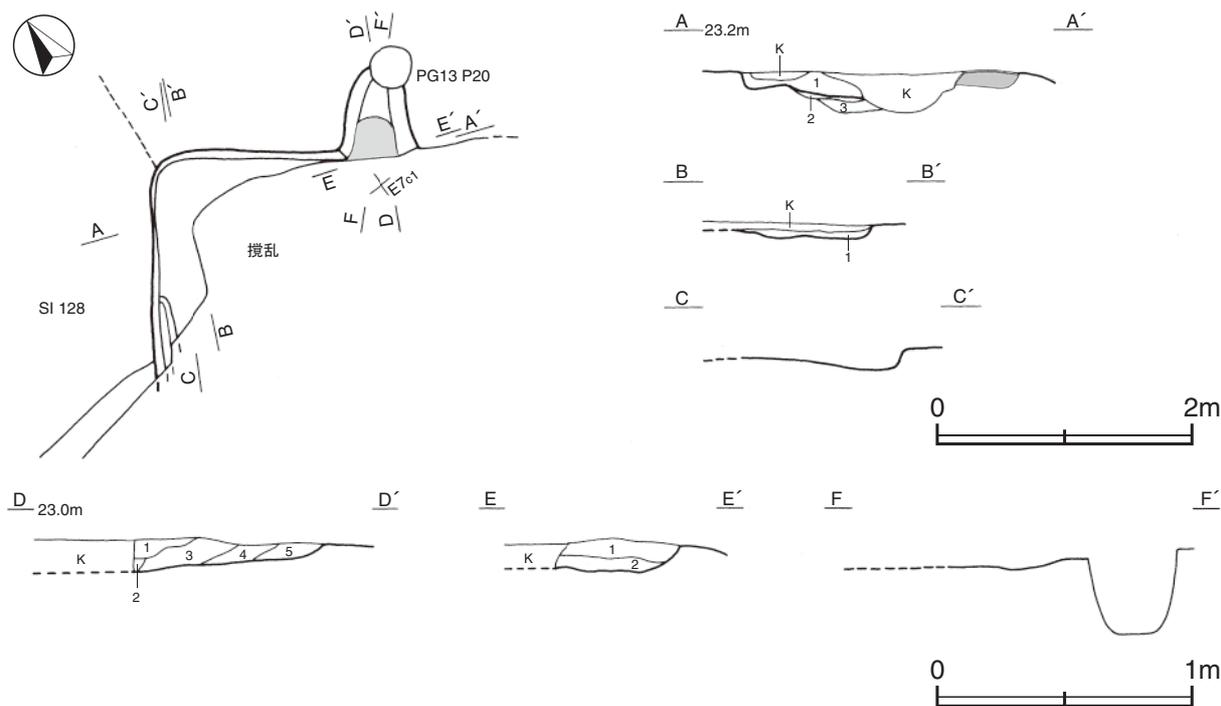
位置 調査区北東部のE6b0区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第128号住居跡を掘り込み、第13号ピット群P20に掘り込まれている。

規模と形状 南部の大半は攪乱を受けており、東部は調査区域外へ延びているため、北東・南西軸は2.10m、北西・南東軸は1.50mしか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、主軸方向はN-35°-Eである。遺存している壁高は10～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床である。貼床は、ロームブロックを含んだ第2・3層を埋土して構築されている。北西壁の一部の壁下で壁溝が確認できた。

竈 北東壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで75cm、燃焼部幅は38cmである。袖部は遺存しない。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に59cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。



第90図 第125号住居跡実測図

竈土層解説

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量 | 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量 | |

覆土 単一層である。確認できた層厚が薄いため、堆積状況は不明である。第2・3層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片4点（高台付椀1、甕類3）、須恵器片1点（坏）が出土している。土器片はいずれも細片のため図示できないが、内面黒色処理が施され、高台の高さが約1.5cm、底径が9cmと推定できる土師器高台付椀が覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定が困難であるが、9世紀中葉に比定できる第128号住居跡を掘り込んでいることや、出土土器から9世紀後葉と考えられる。

第126号住居跡（第91図）

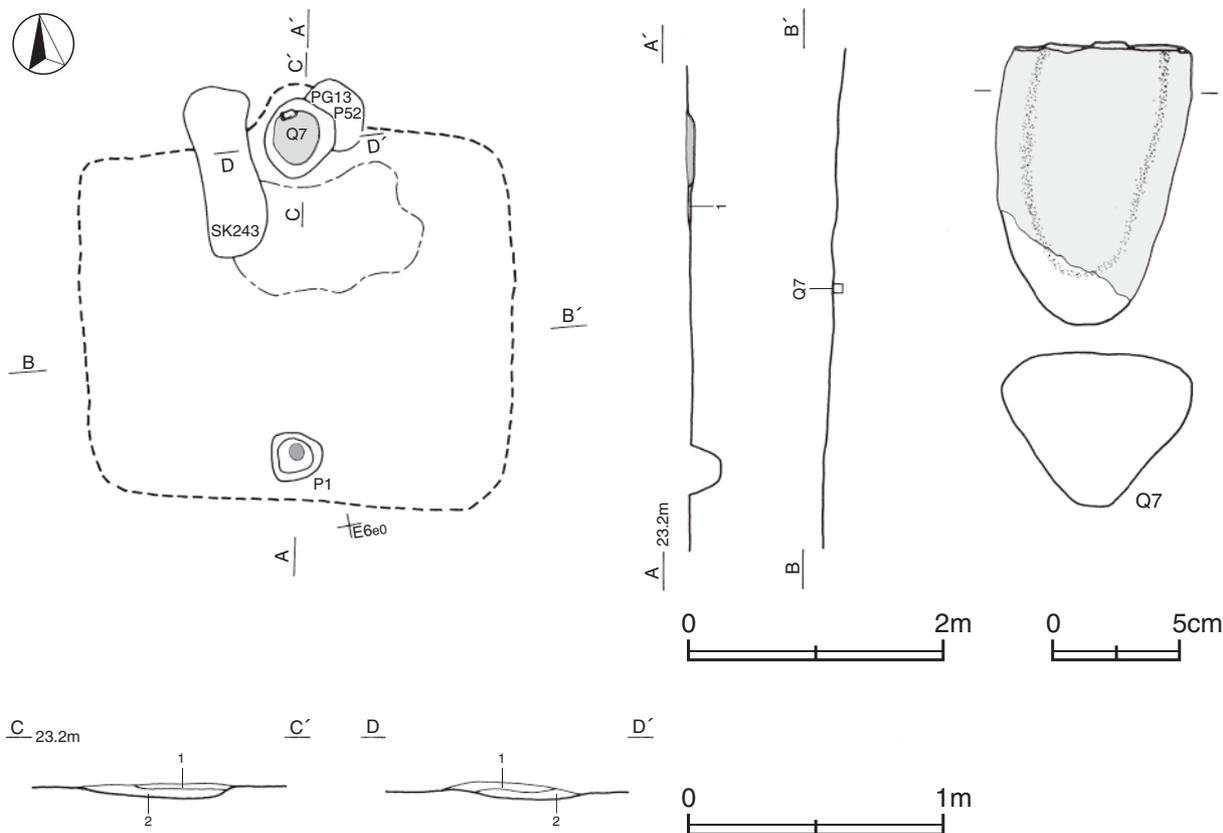
位置 調査区東部のE6d0区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 覆土のほとんどが削平されているため、竈の火床部と床面が露出した状態で確認した。

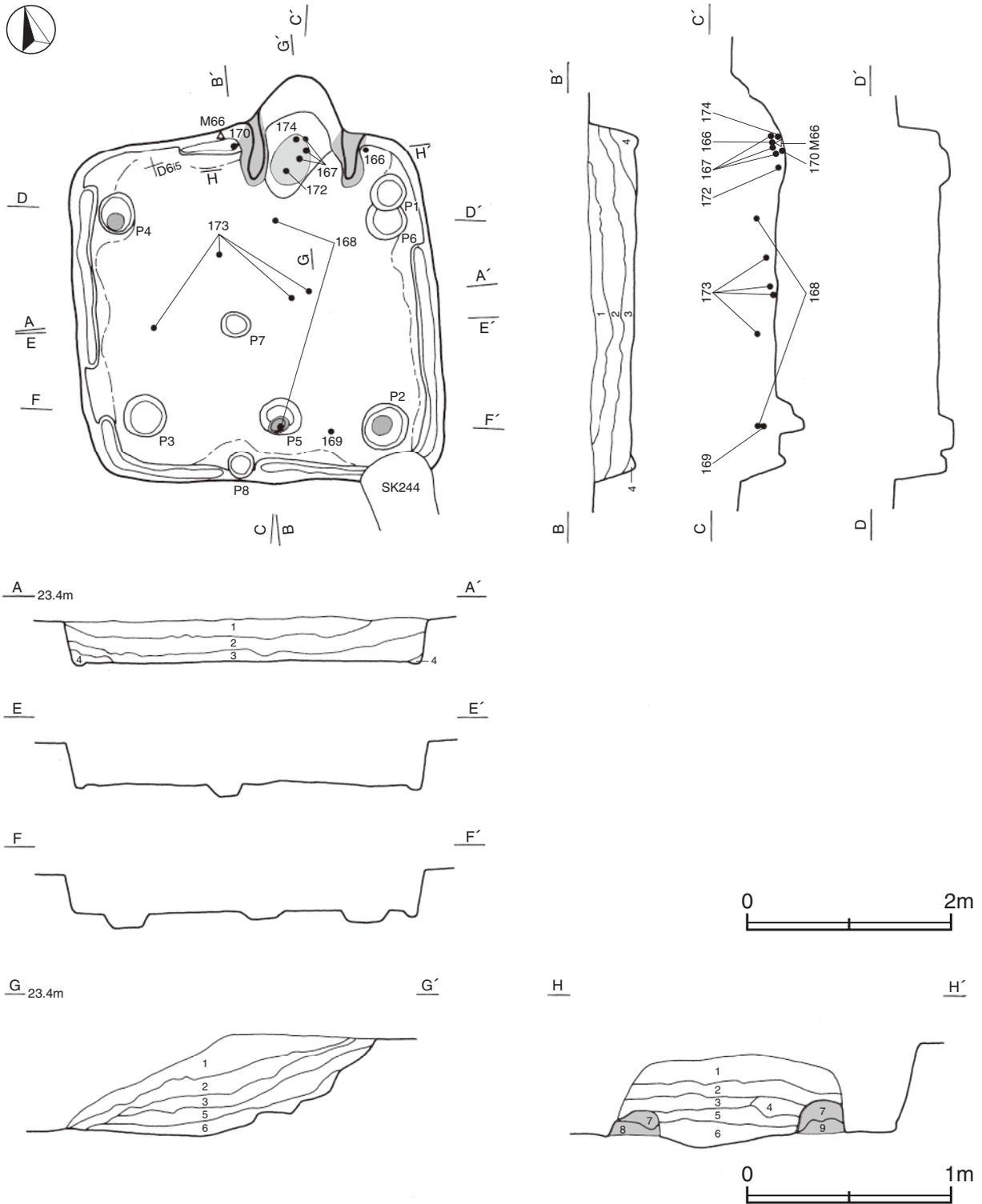
重複関係 第243号土坑、第13号ピット群P52に掘り込まれている。

規模と形状 竈の火床部の位置や硬化面の広がり、ピットの配置から長軸3.40m、短軸3.00mの隅丸長方形と推定できる。主軸方向はN-9°-Eである。

床 ほぼ平坦で、竈の前面が踏み固められている。



第91図 第126号住居跡・出土遺物実測図



第 92 図 第 127 号住居跡実測図

覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

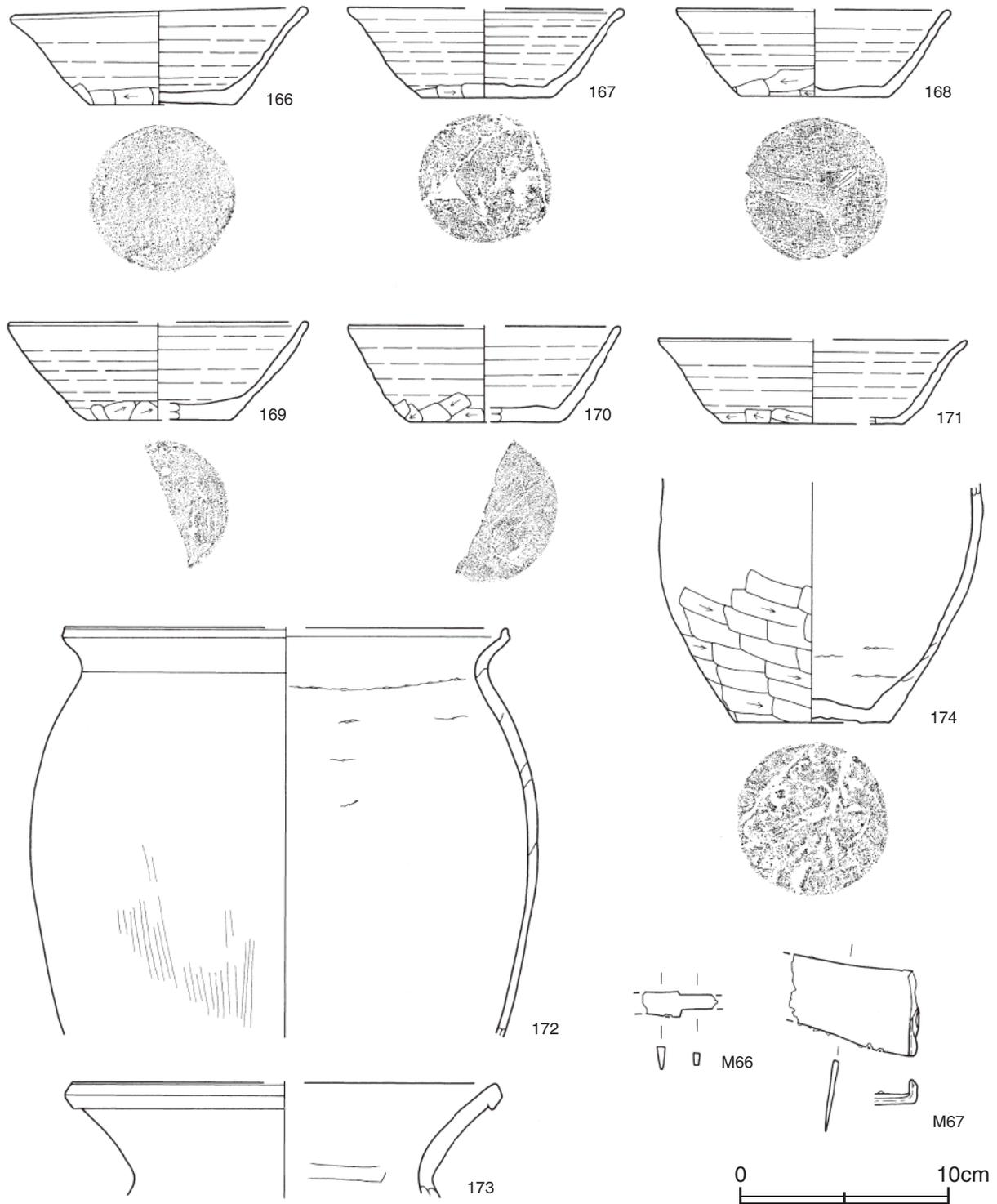
土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化物・焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 348 点 (坏 10, 甕類 332, 小形甕 6), 須恵器片 134 点 (坏 120, 高台付坏 1, 蓋 7, 甕類 6), 灰釉陶器片 4 点 (長頸瓶 1, 瓶類 3), 鉄製品 4 点 (刀子 1, 鎌 1, 釘 2) が, 全面の覆土中層か

ら下層にかけて出土している。170・M 66 は北部壁際の床面，166 は北東コーナー部，172・174 は竈の覆土下層からそれぞれ出土している。167 は竈の覆土下層から出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶時に遺棄されたものと考えられる。173 は中央部から西部にかけての覆土下層，168 は竈前と南部の覆土中層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。169 は南部の覆土中層，171・M 67 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第 93 図 第 127 号住居跡出土遺物実測図

第 127 号住居跡出土遺物観察表（第 93 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほか	出土位置	備 考
166	須恵器	坏	14.0	4.7	6.9	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	80% PL39
167	須恵器	坏	[13.2]	4.4	6.2	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	竈覆土下層	55%
168	須恵器	坏	[13.2]	4.3	7.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向のヘラ削り	覆土中層	55%
169	須恵器	坏	[14.3]	4.8	[6.8]	長石・石英	オリーブ黒	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	35%
170	須恵器	坏	[13.6]	4.7	[7.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	30%
171	須恵器	坏	[15.0]	4.1	[8.6]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	20%
172	土師器	甕	[21.4]	(19.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面輪積痕を残すナデ	竈覆土下層	20%
173	須恵器	甕	[20.6]	(5.6)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	頸部内面ヘラナデ	覆土下層	10%
174	土師器	小形甕	-	(11.7)	7.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すナデ 底部木葉痕	竈覆土下層	40%

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 66	刀子	(3.6)	1.2	0.4	(2.72)	鉄	刃部・茎部一部欠損 刃部断面三角形 茎部断面長方形	床面	
M 67	鎌	(6.1)	(4.9)	0.3	(22.8)	鉄	切先部一部欠損 断面三角形 柄付部はL字に屈曲	覆土中	PL50

第 128 号住居跡（第 94 図）

位置 調査区北東部の E 6 b0 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 125 号住居，第 246 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が削平を受けているため，南北軸は 4.36 m で，東西軸は 3.44 m しか確認できなかった。平面形は竈の位置やピットの配置から隅丸長方形と推定でき，主軸方向は N - 0° である。壁高は 5 cm で，直立している。

床 ほほ平坦で，東壁際及び西壁際を除いて踏み固められている。遺存している壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 85cm で，燃焼部幅は 26cm である。袖部は遺存しない。火床部は床面から 5 cm くぼんでおり，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 59 cm 掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 3 暗 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子少量
- 2 暗 赤 褐 色 焼土ブロック中量，炭化粒子微量

ピット 3 か所。P 1・P 2 は深さ 20cm・21cm で，硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P 3 は深さ 20cm で，南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

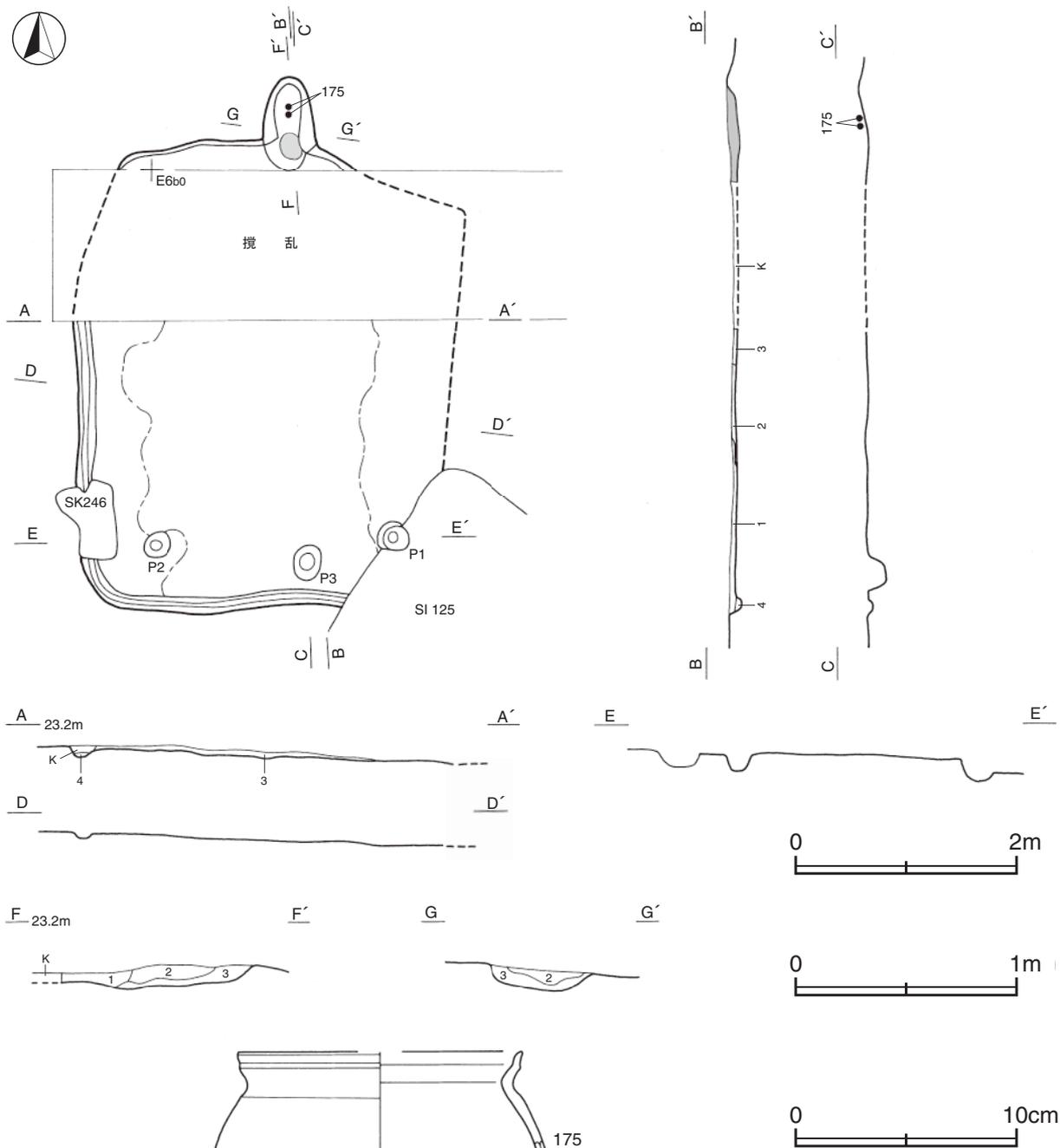
覆土 4 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ，ブロック状に堆積していることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量 3 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量 4 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 14 点（坏 5，甕類 8，小形甕 1），須恵器片 8 点（坏）のほか，鉄滓 6 点（14.5 g）が出土している。175 は竈の覆土下層から出土した破片が接合したものであり，廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。また，細片のため図示できないが，内面黒色処理が施された土師器坏が中央部の床面から出土している。

所見 時期は，出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第94図 第128号住居跡・出土遺物実測図

第128号住居跡出土遺物観察表（第94図）

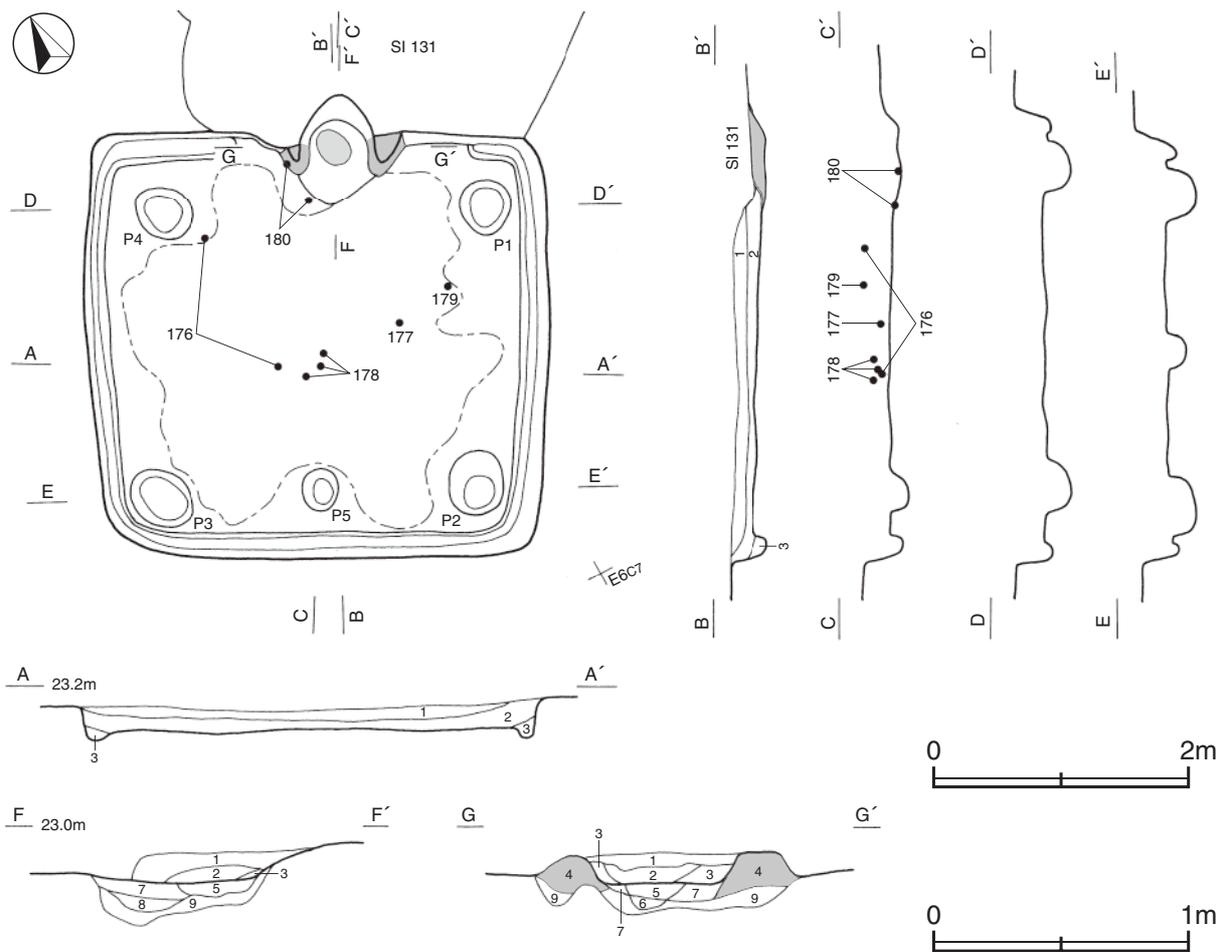
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
175	土師器	小形甕	[13.0]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	竈覆土下層	10%

第129号住居跡（第95・96図）

位置 調査区北東部のE6b6区，標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第131号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.65m，短軸3.41mの隅丸方形で，主軸方向はN-27°-Eである。壁高は20～25cmで，外傾して立ち上がっている。



第95図 第129号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北東壁中央部に付設されている。煙道部を第131号住居に掘り込まれているため、規模は焚口部から煙道部までの87cmしか確認できなかった。燃焼部幅は47cmである。袖部は、床面を20cm掘りくぼめた部分にロームや焼土を含んだ第5～9層を埋土し、その上にロームブロックを主体とした第4層を積み上げて構築されている。火床部は床面から5cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 明赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 |
| 2 赤褐色 | 焼土ブロック多量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子多量 | 8 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 にぶい褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 明赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子多量 | | |

ピット 5か所。P1～P4は深さ20～24cmで、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P5は深さ15cmで、南西壁際の中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

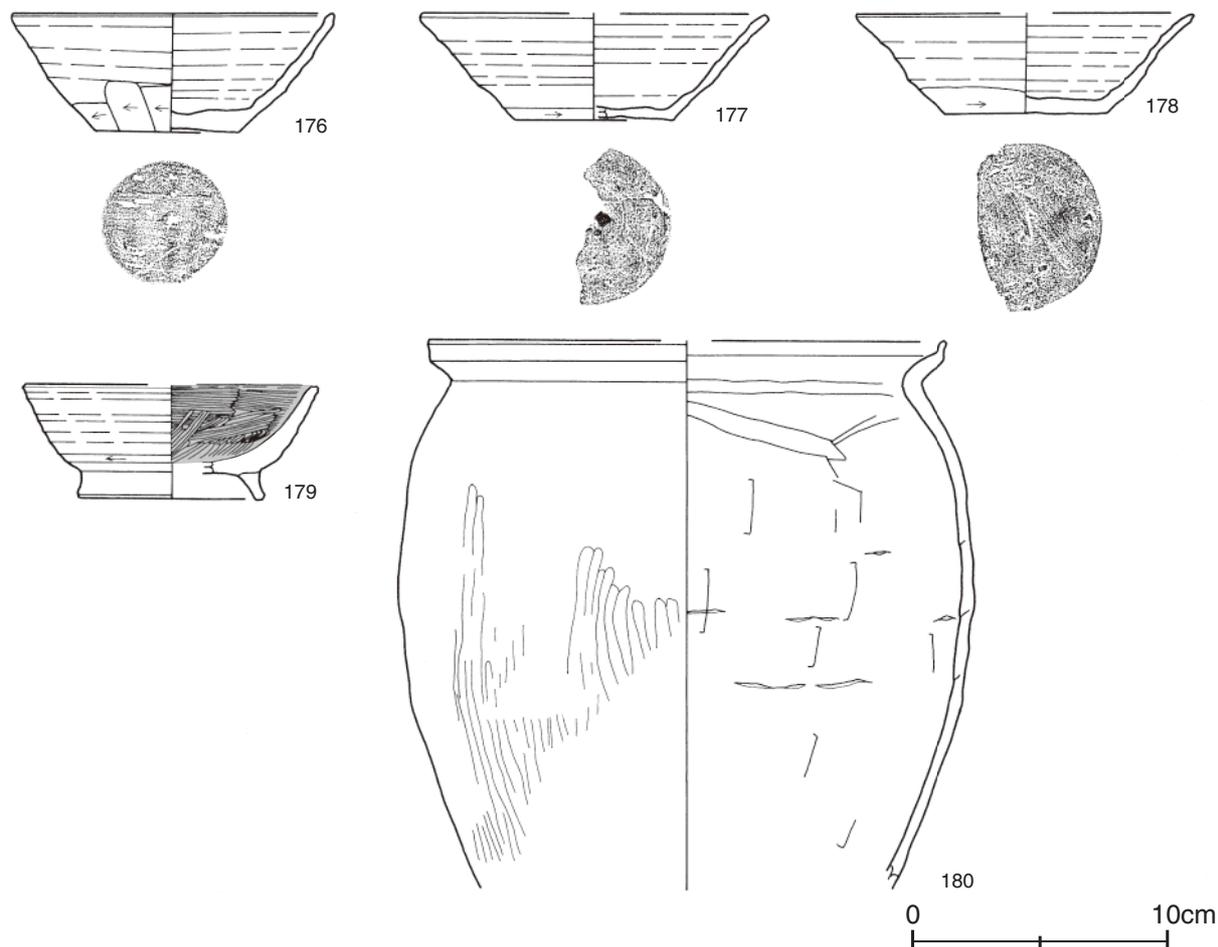
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック多量 | | |

遺物出土状況 土師器片123点（坏23, 高台付椀2, 甕類98）、須恵器片53点（坏31, 蓋3, 甕類19）のほか、混入した縄文土器片2点（深鉢）が出土している。176は中央部と北部の覆土上層と下層から出土した破片、

180は竈前の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。177は中央部の覆土下層，178は中央部の覆土中層，179は東部の覆土上層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第96図 第129号住居跡出土遺物実測図

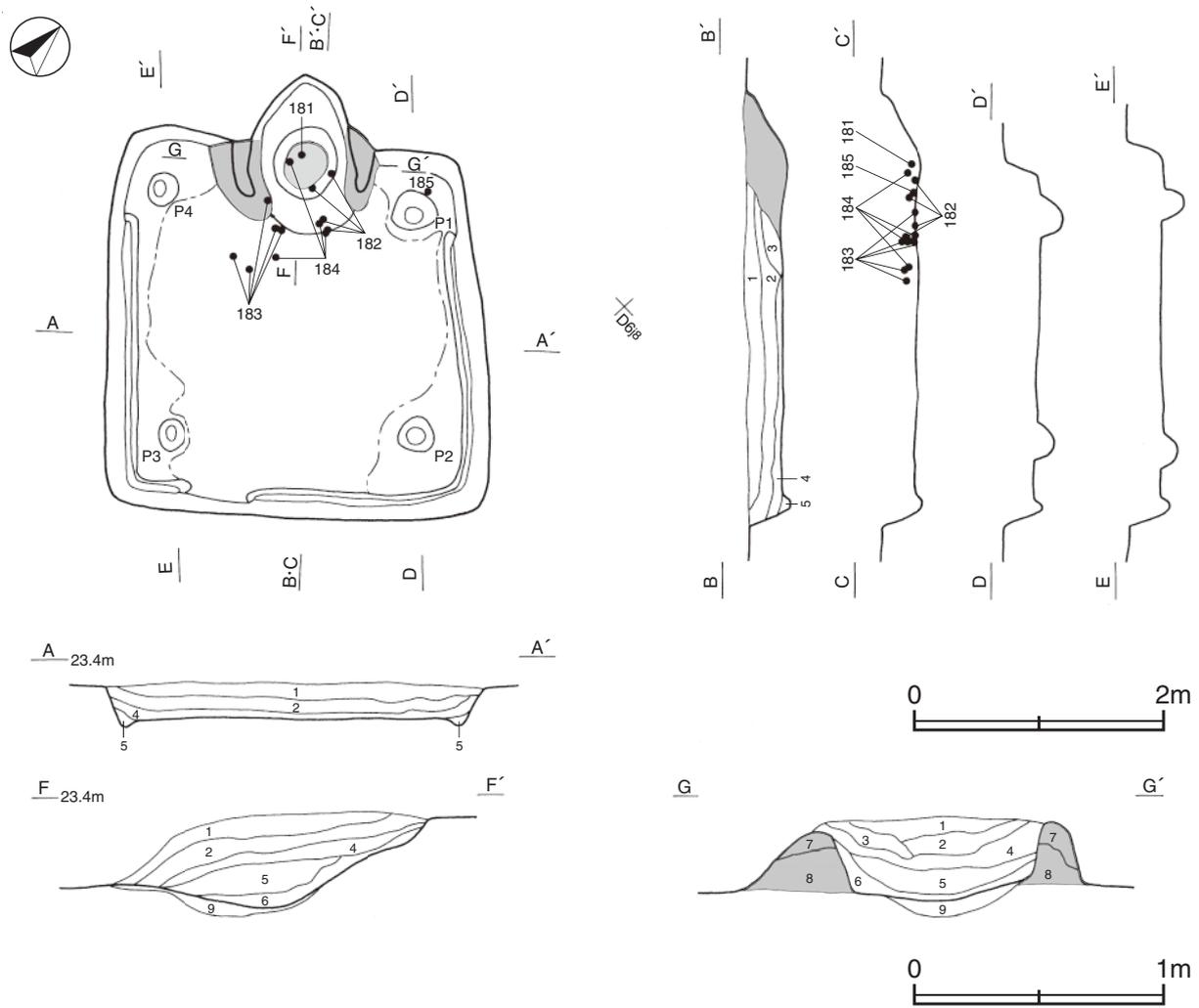
第129号住居跡出土遺物観察表（第96図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
176	須恵器	坏	12.6	4.8	5.4	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土上層・下層	75% PL40
177	須恵器	坏	[13.4]	4.2	[6.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	45%
178	須恵器	坏	[13.4]	4.0	6.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	40%
179	土師器	高台付碗	[11.4]	4.6	[7.2]	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け	覆土上層	25%
180	土師器	甕	[20.4]	(21.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面輪積痕を残すヘラナデ	覆土下層	35%

第130号住居跡（第97～99図）

位置 調査区北東部のD6j7区，標高23mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 一辺が3.12mの方形で，主軸方向はN-43°-Wである。壁高は23～28cmで，外傾して立ち上がっている。



第 97 図 第 130 号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。北・西コーナー部を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 北西壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 130cm で、燃焼部幅は 70cm である。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に黄灰色粘土混じりのロームブロックを主体とした第 7・8 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 12cm 掘りくぼめた部分に、ロームブロックを含んだ第 9 層が埋土されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 55cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子多量、灰中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黄灰色 ロームブロック・灰黄色粘土多量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子多量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 明黄褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 9 明褐色 ロームブロック多量 |
| 5 明赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子微量 | |

ピット 4 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 15 ~ 24cm で、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。

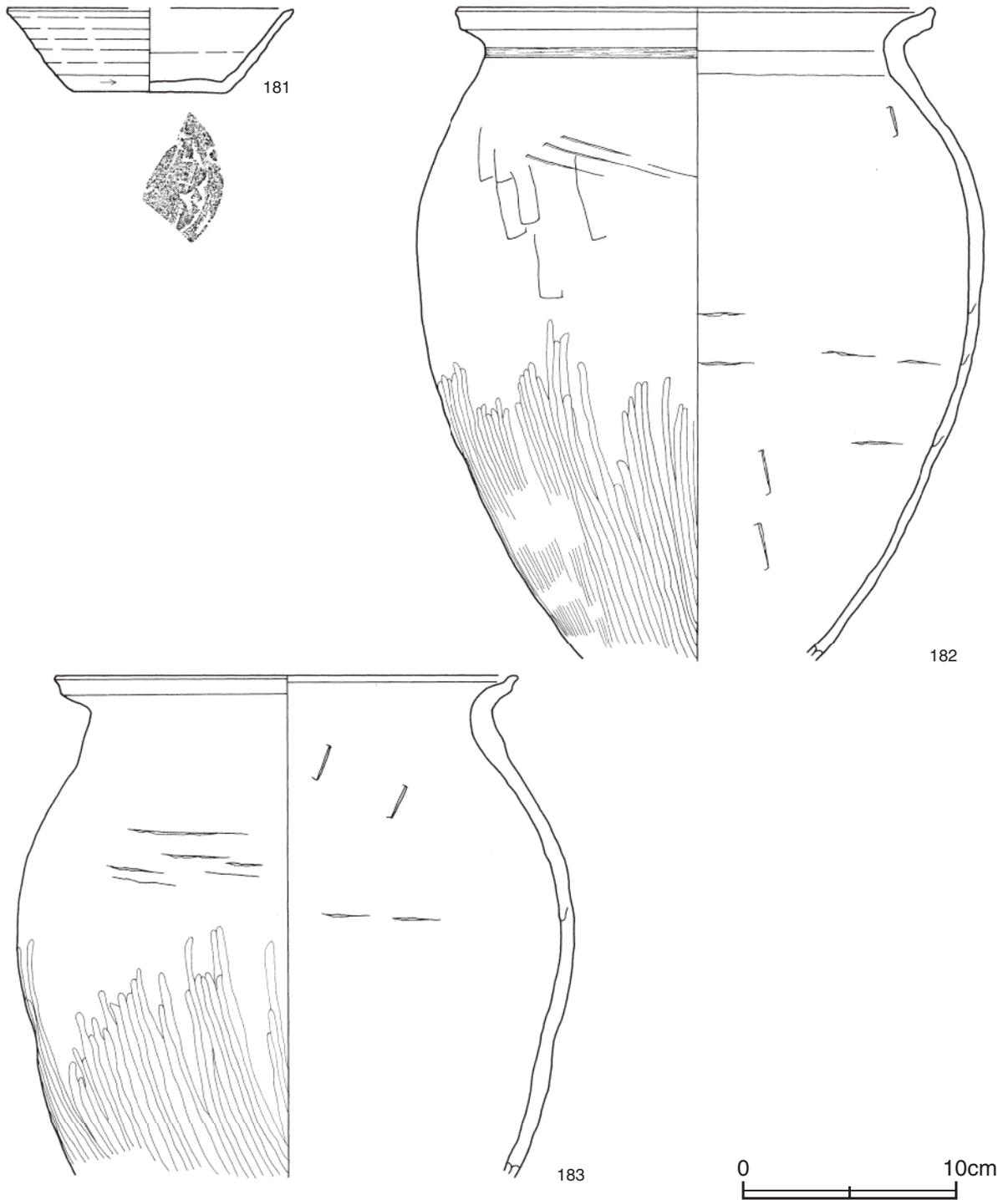
覆土 5 層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子少量 | 4 暗褐色 ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量 | 5 褐色 ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 黄灰色粘土粒子中量、焼土ブロック微量 | |

遺物出土状況 土師器片 139 点（甕類），須恵器片 15 点（坏 14，甕類 1）が，中央部の覆土下層を中心に出土している。また，竈の覆土下層から土師器甕片が多数出土している。さらに，混入した縄文土器片 4 点（深鉢）も出土している。181 は竈，185 は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。182～184 は竈と竈前の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 98 図 第 130 号住居跡出土遺物実測図（1）



第 99 図 第 130 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 130 号住居跡出土遺物観察表 (第 98・99 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
181	須恵器	坏	[13.2]	3.9	[7.2]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈覆土下層	25%	
182	土師器	甕	22.5	(31.1)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 中位から下位ヘラ磨き	体部外面上位ヘラナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	竈覆土下層	50%
183	土師器	甕	21.6	(23.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 中位から下位ヘラ磨き	体部外面上位ヘラナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	竈覆土下層 覆土下層	30%
184	土師器	甕	20.4	(24.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 中位から下位ヘラ磨き	体部外面上位ヘラナデ 内面ヘラナデ	竈覆土下層 覆土下層	20%
185	土師器	甕	-	(29.3)	8.7	長石・石英・雲母・細礫	明赤褐	普通	体部外面上位ヘラナデ 内面剥離が激しく調整不明	中位から下位ヘラ磨き 底部木葉痕	覆土下層	90% PL40

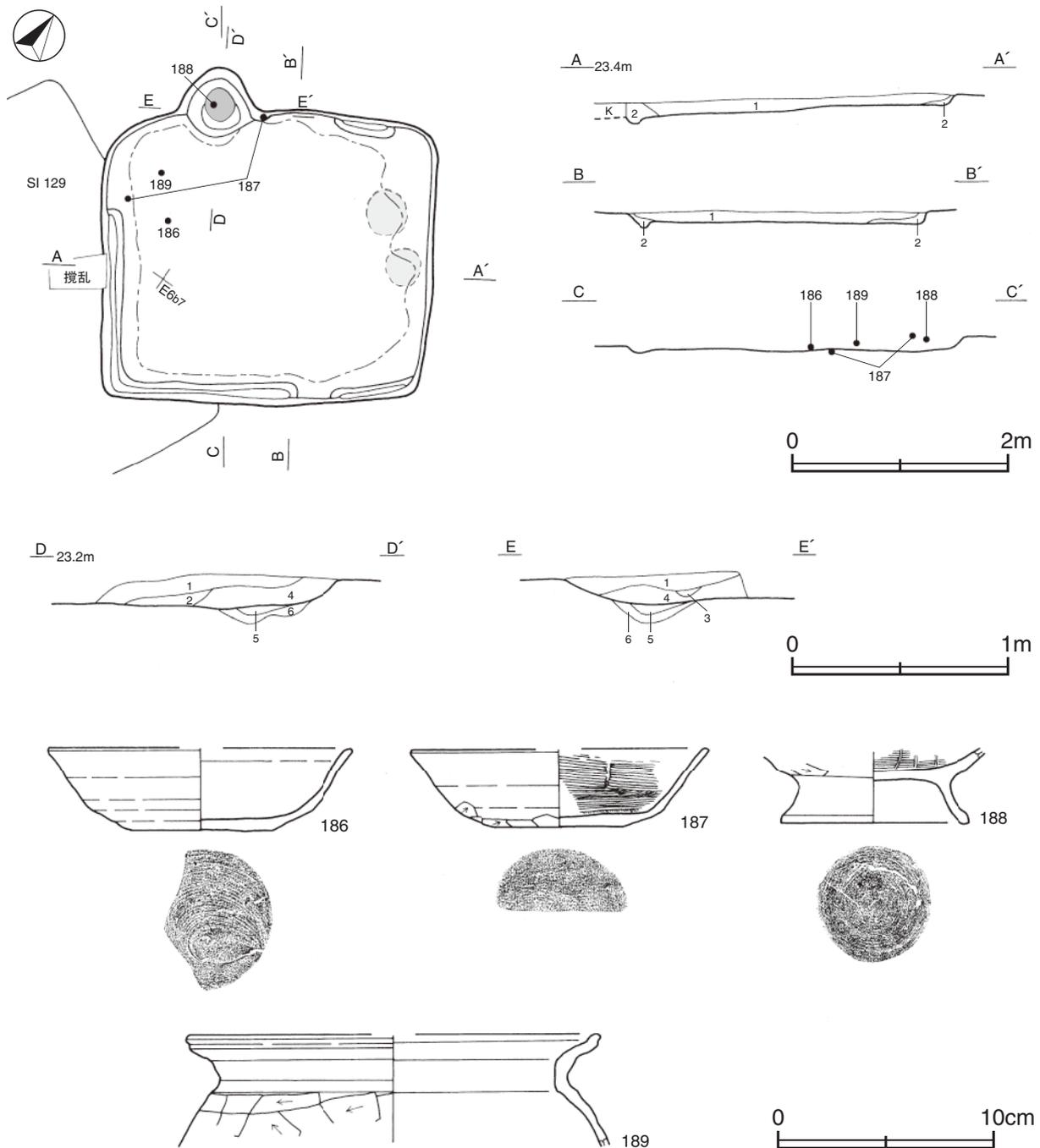
第 131 号住居跡 (第 100 図)

位置 調査区北東部の E 6 a7 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 129 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.05 m, 短軸 2.78 m の方形で, 主軸方向は N - 35° - W である。壁高は 9 ~ 12 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 壁際を除いて踏み固められている。北東壁及び西コーナー部を除く壁下には壁溝が巡っている。北東壁際に焼土の広がりを確認した。



第 100 図 第 131 号住居跡・出土遺物実測図

竈 北西壁西寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで64cmで、燃焼部幅は40cmである。袖部は遺存しない。火床部は床面を8cm掘りくぼめた部分に、ロームや焼土のブロックを含んだ第5・6層が埋土されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に56cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 明赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 2 黒色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック・灰少量, 炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量 | | |
| 4 明赤褐色 | 焼土ブロック多量, 炭化粒子微量 | | |

覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 2 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量 |
|-------|------------------------|-------|-----------------------------|

遺物出土状況 土師器片110点(坏19, 高台付椀2, 甕類89), 須恵器片17点(坏12, 甕類5), 灰釉陶器片1点(瓶類)のほか、鉄滓2点(14.7g)が、西コーナー部付近の覆土中層から下層を中心に出土している。186・189は西部の覆土下層, 188は竈の覆土中層からそれぞれ出土している。187は西部と北西部壁際の覆土上層と下層から出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。

第131号住居跡出土遺物観察表(第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
186	土師器	坏	[14.0]	3.9	6.6	長石・赤色粒子	橙	普通	体部下端ナデ 内面ナデ 底部回転糸切り	覆土下層	50%
187	土師器	坏	[13.8]	3.7	[6.0]	長石・石英	明赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部多方向のヘラ削り	覆土上層・下層	30%
188	土師器	高台付椀	-	(3.5)	[8.8]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け	竈覆土中層	35%
189	土師器	甕	[19.0]	(5.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	10%

第133号住居跡(第101・102図)

位置 調査区南部のE6j2区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸3.38m, 短軸2.74mの隅丸長方形で、主軸方向はN-25°-Eである。壁高は27~35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。北コーナー部を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 北東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで129cmで、燃焼部幅は44cmである。袖部は、床面を17cm掘りくぼめた部分にロームブロックを含んだ第11・12層を埋土し、その上に砂質粘土混じりのロームを主体とした第8~10層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に64cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第2~5層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 4 暗赤褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化物微量 |
| 2 暗赤褐色 | ローム粒子中量, 砂質粘土粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ロームブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| | | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子微量 |

- | | | | |
|----------|----------------------------------|--------|-------------------------|
| 8 灰黄褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 9 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| | | 12 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット 3か所。P1・P2は深さ23cm・14cmで、規模や配置から支柱穴である。P3は深さ23cmで、南西壁際の中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

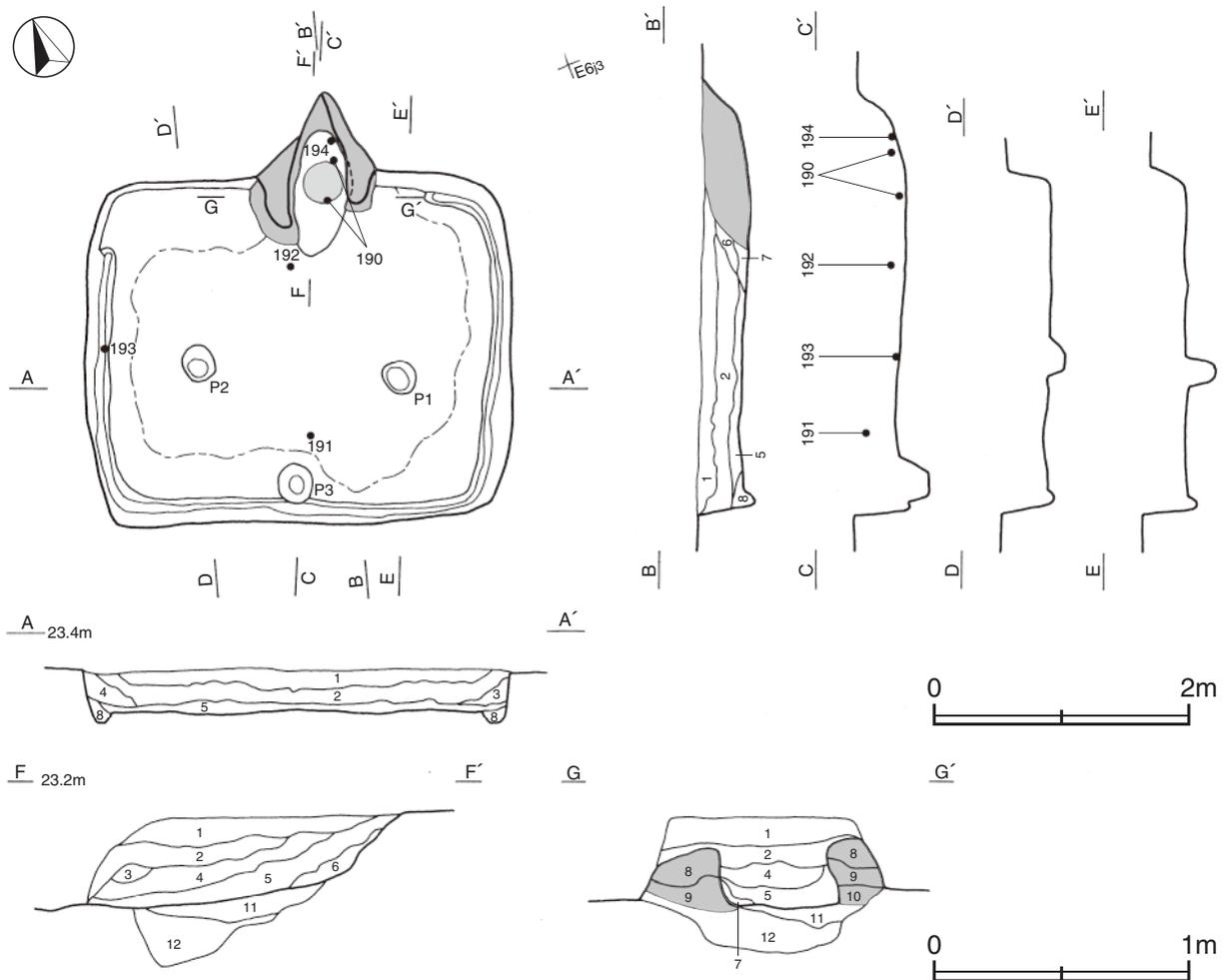
覆土 8層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

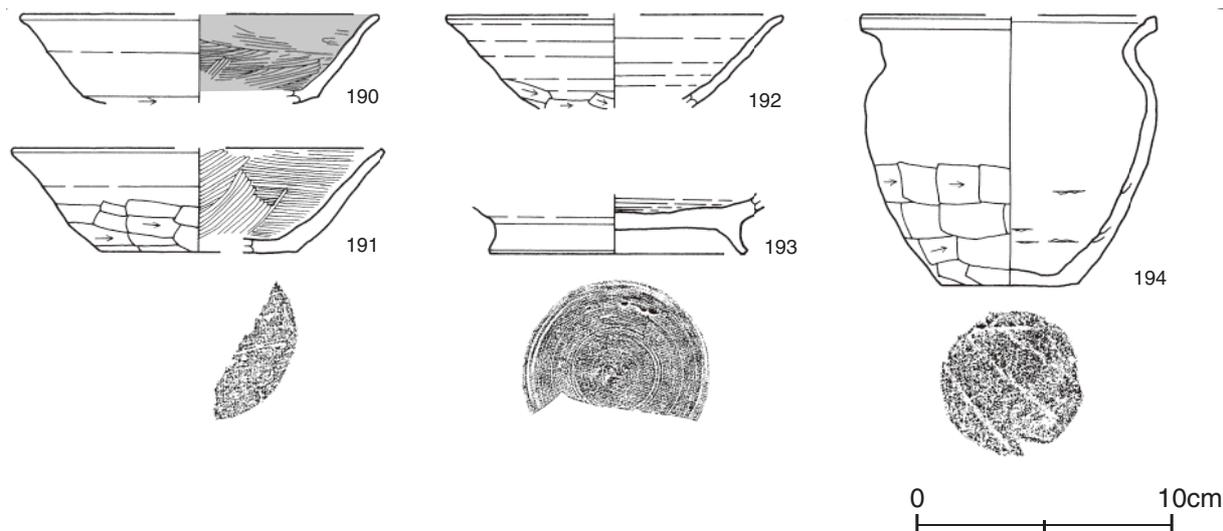
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・砂粒少量, 炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |
| 5 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片196点（坏15, 甕類180, 小形甕1）, 須恵器片55点（坏21, 高台付坏3, 蓋2, 甕類29）が、竈前の覆土下層を中心に出土している。194は竈の覆土下層から逆位の状態で出土している。190は竈の覆土下層から出土した破片が接合したものである。192は竈前, 193は西部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。191は南部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第101図 第133号住居跡実測図



第 102 図 第 133 号住居跡出土遺物実測図

第 133 号住居跡出土遺物観察表 (第 102 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
190	土師器	坏	[13.8]	3.5	[9.3]	長石・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き	竈覆土下層	30%
191	土師器	坏	[14.8]	4.1	[7.6]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部多方向のヘラ削り	覆土中層	20%
192	須恵器	坏	[13.2]	(3.7)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土下層	30%
193	須恵器	高台付坏	-	(2.4)	9.9	長石	灰	良好	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	25%
194	土師器	小形甕	[11.6]	10.7	5.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部下半ヘラ削り 内面輪積痕を残すナデ	竈覆土下層	90% PL41

第 134 号住居跡 (第 103・104 図)

位置 調査区南部の E 6 i3 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 135 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東半部が調査区域外へ延びているため、南北軸は 3.73 m で、東西軸は 2.35 m しか確認できなかった。平面形はピットの配置から隅丸方形と推定でき、主軸方向は N - 0° である。壁高は 30 ~ 35 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、北西・南西コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。遺存している壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁に付設されているものと考えられるが、調査区域外のため確認できなかった。

ピット 3 か所。P 1・P 2 は深さ 21 cm・23 cm で、規模や配置から主柱穴である。P 3 は深さ 10 cm で、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

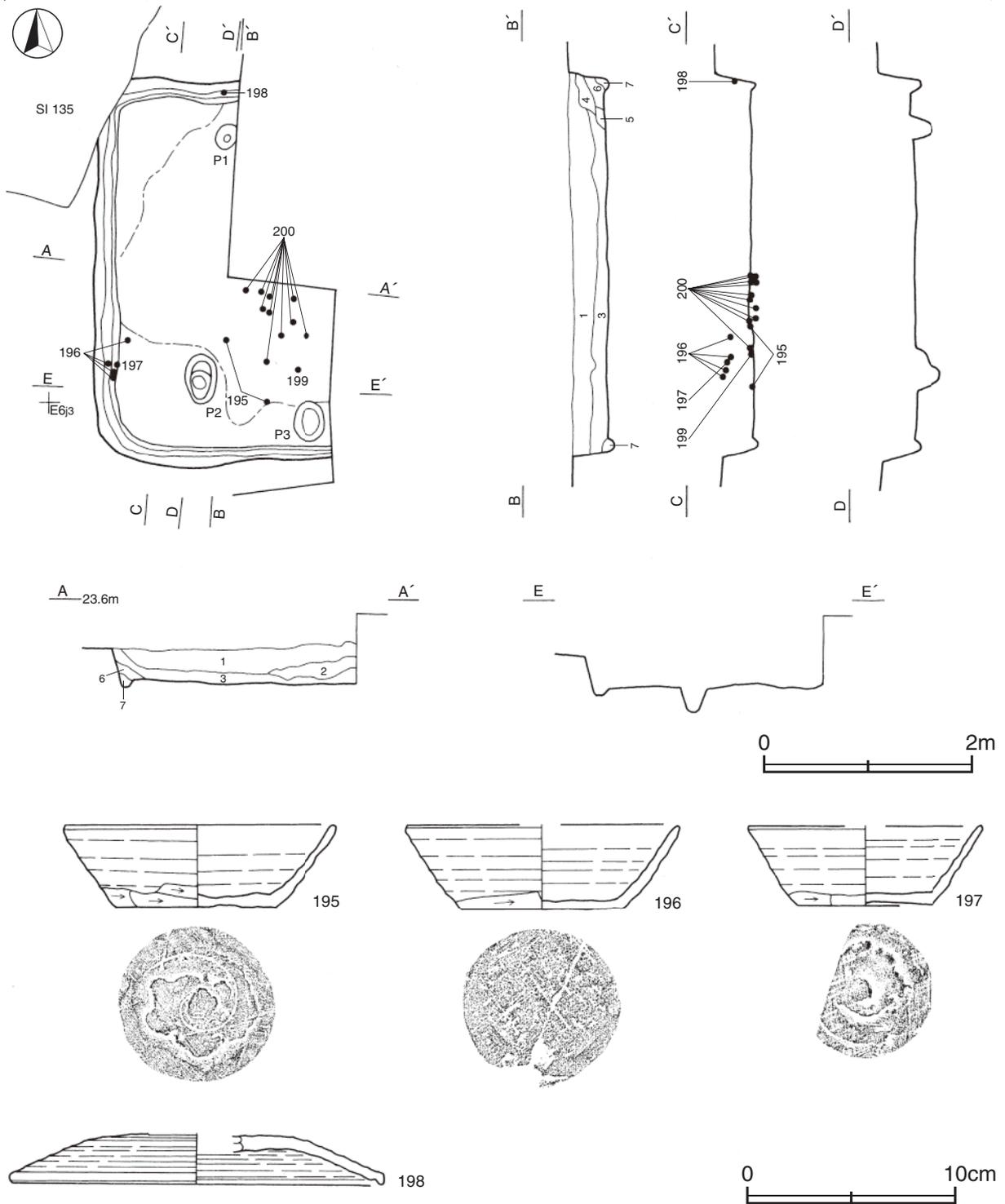
覆土 7 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

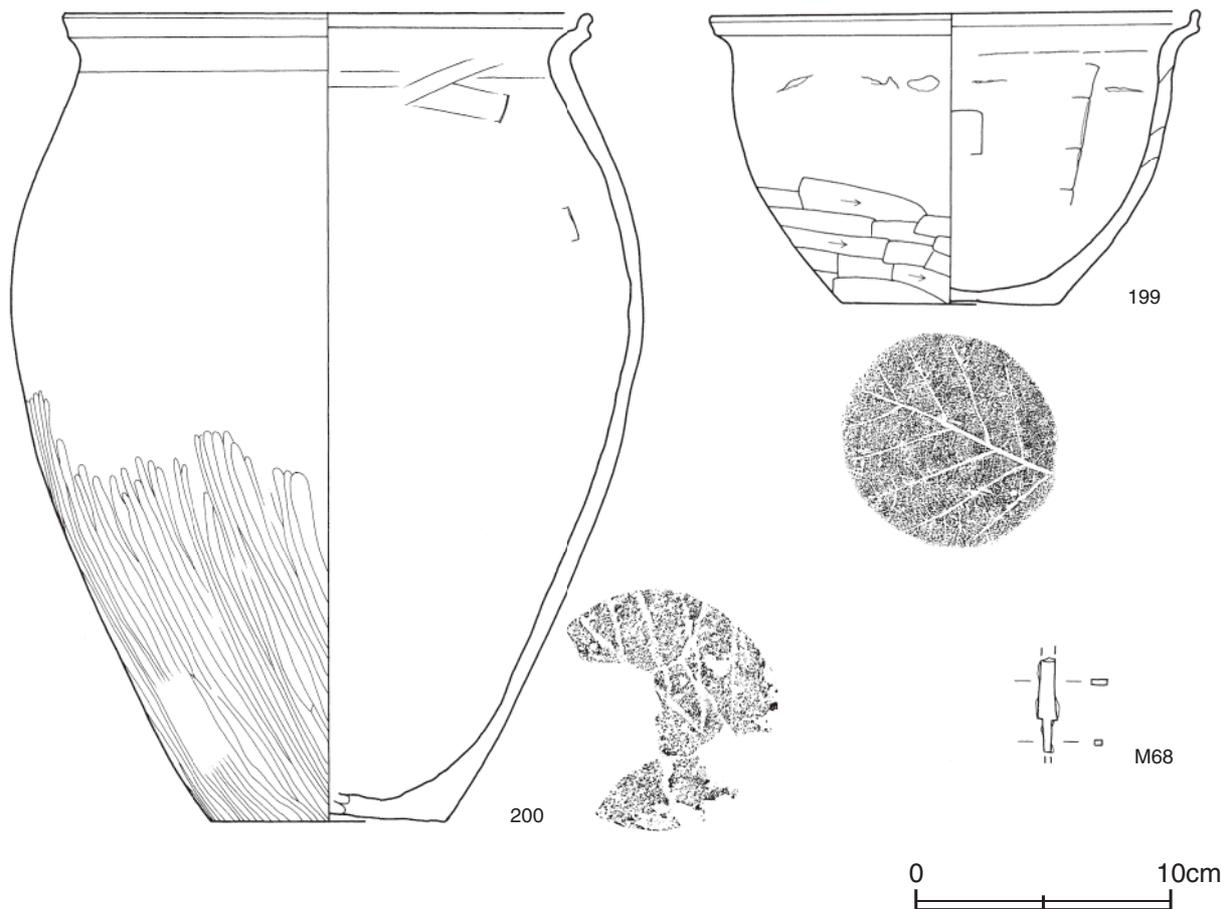
1 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック・砂粒少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量	6 暗褐色	ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子・砂粒微量		

遺物出土状況 土師器片 86 点 (坏 4, 鉢 1, 甕類 81), 須恵器片 32 点 (坏 30, 蓋 2), 鉄製品 1 点 (鎌) が出土している。200 は中央部の床面から出土した破片が接合したものである。195・199 は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。198 は北部壁際の覆土中層, 196・197 は南西部壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。M 68 は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 103 図 第 134 号住居跡・出土遺物実測図



第 104 図 第 134 号住居跡出土遺物実測図

第 134 号住居跡出土遺物観察表 (第 103・104 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
195	須恵器	坏	13.0	4.0	7.7	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	75% PL40
196	須恵器	坏	[13.1]	4.1	7.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土上層	55%
197	須恵器	坏	[11.4]	3.8	6.6	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土上層	50%
198	須恵器	蓋	[18.0]	(3.4)		長石・石英	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	覆土中層	25%
199	土師器	鉢	19.2	11.7	8.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面輪積痕を残すナデ 下半ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕	覆土下層	80% PL40
200	土師器	甕	20.6	32.2	[9.2]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半ナデ 下半ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部木葉痕	床面	70% PL40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 68	鉢	(3.7)	0.8	0.2	(1.78)	鉄	鉢身部欠損 茎部断面長方形	覆土中	PL51

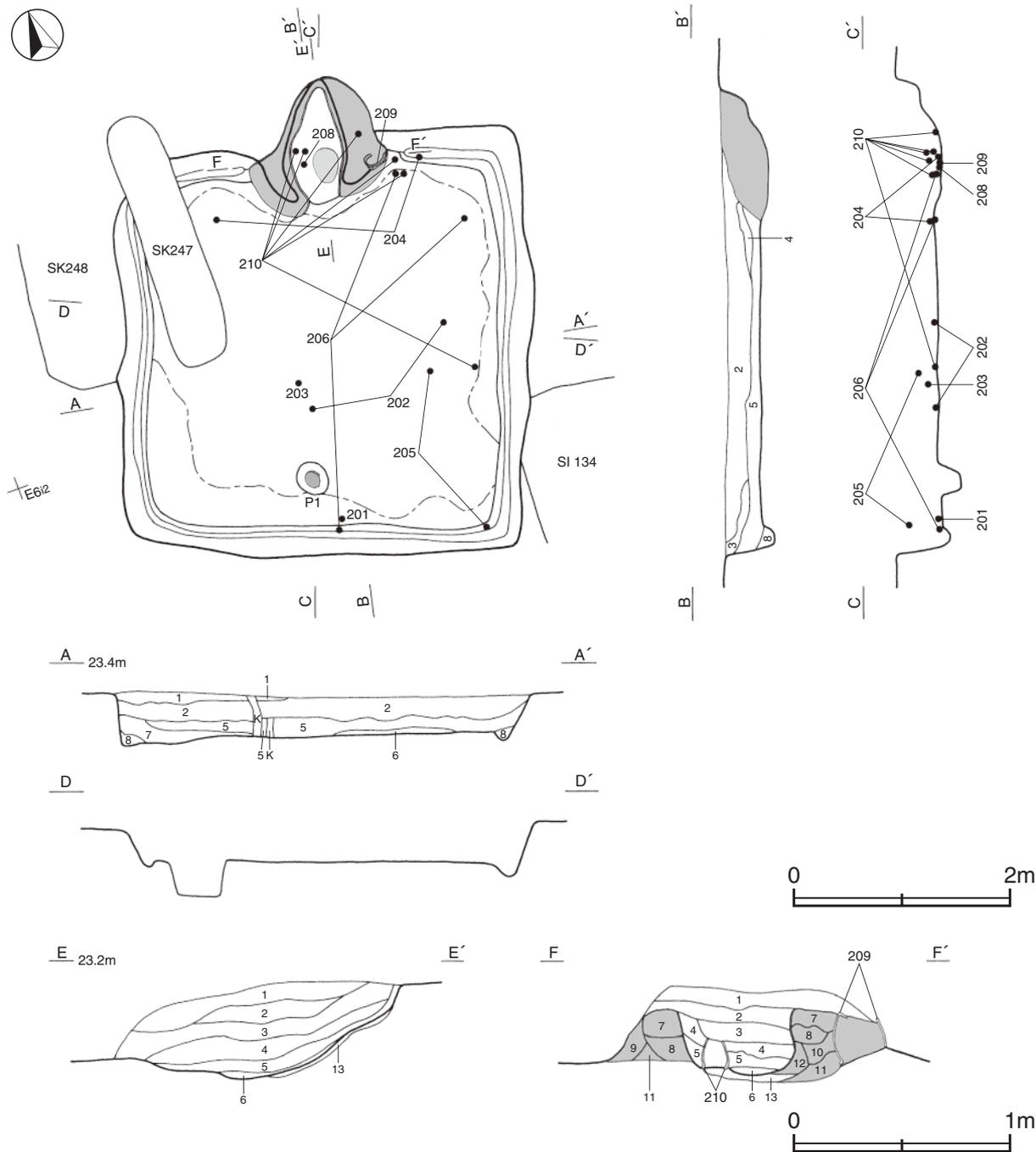
第 135 号住居跡 (第 105 ~ 107 図)

位置 調査区南部の E 6 h2 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 134 号住居跡を掘り込み, 第 247・248 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.96 m, 短軸 3.85 m の方形で, 主軸方向は N - 23° - E である。壁高は 29 ~ 41cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 南西コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。



第105図 第135号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで116cmで、燃焼部幅は42cmである。袖部は、床面を10cm掘りくぼめた部分にローム粒子を含んだ第13層を埋土し、その上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第7～12層を積み上げ、補強材として須恵器甑片を使用して構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面から5cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に48cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第2～5層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |

5 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子中量，炭化粒子少量	10 におい黄褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
6 暗赤褐色	焼土粒子少量，炭化物微量	11 褐色	ロームブロック中量，砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7 におい黄褐色	砂質粘土粒子中量，焼土粒子微量	12 におい赤褐色	焼土粒子中量，ロームブロック・砂質粘土粒子微量
8 におい黄褐色	砂質粘土粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量	13 におい赤褐色	ローム粒子中量，焼土ブロック少量
9 暗褐色	ロームブロック中量，砂質粘土粒子少量		

ピット 深さ30cmで，南壁際の中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。底面には，柱のあたりとみられる円形の硬化範囲が認められる。

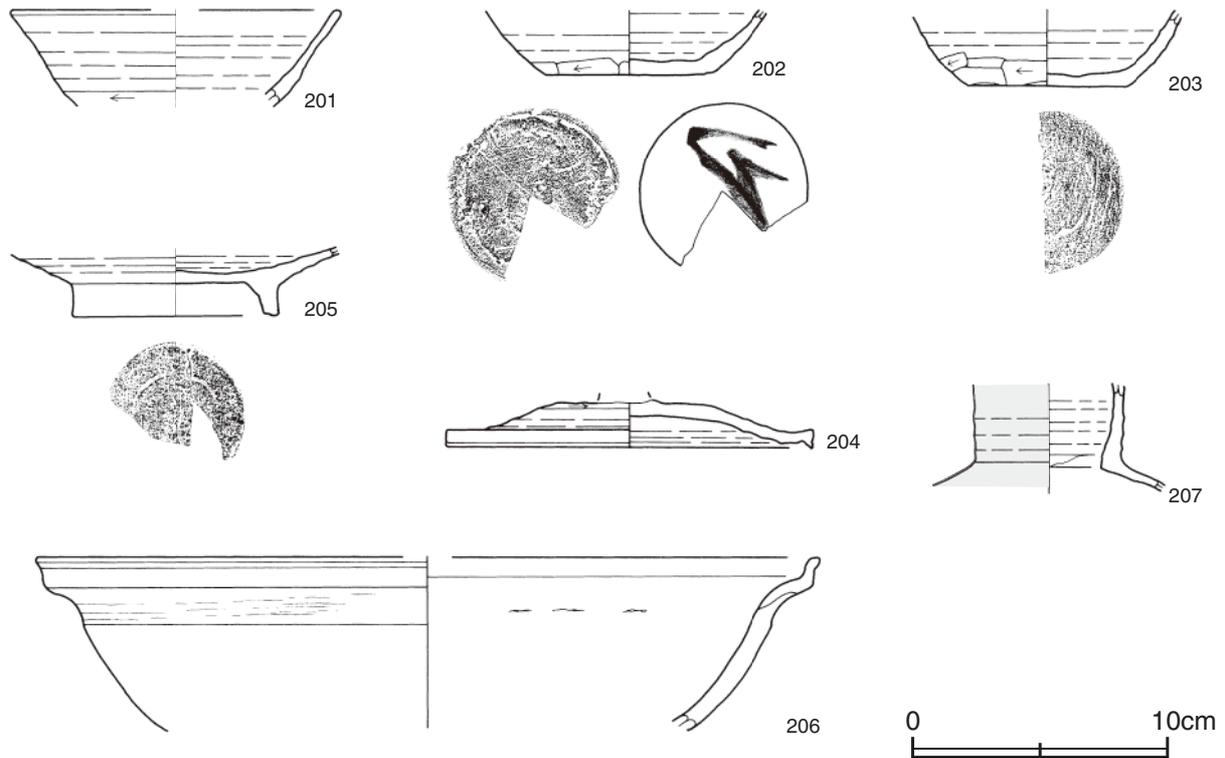
覆土 8層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

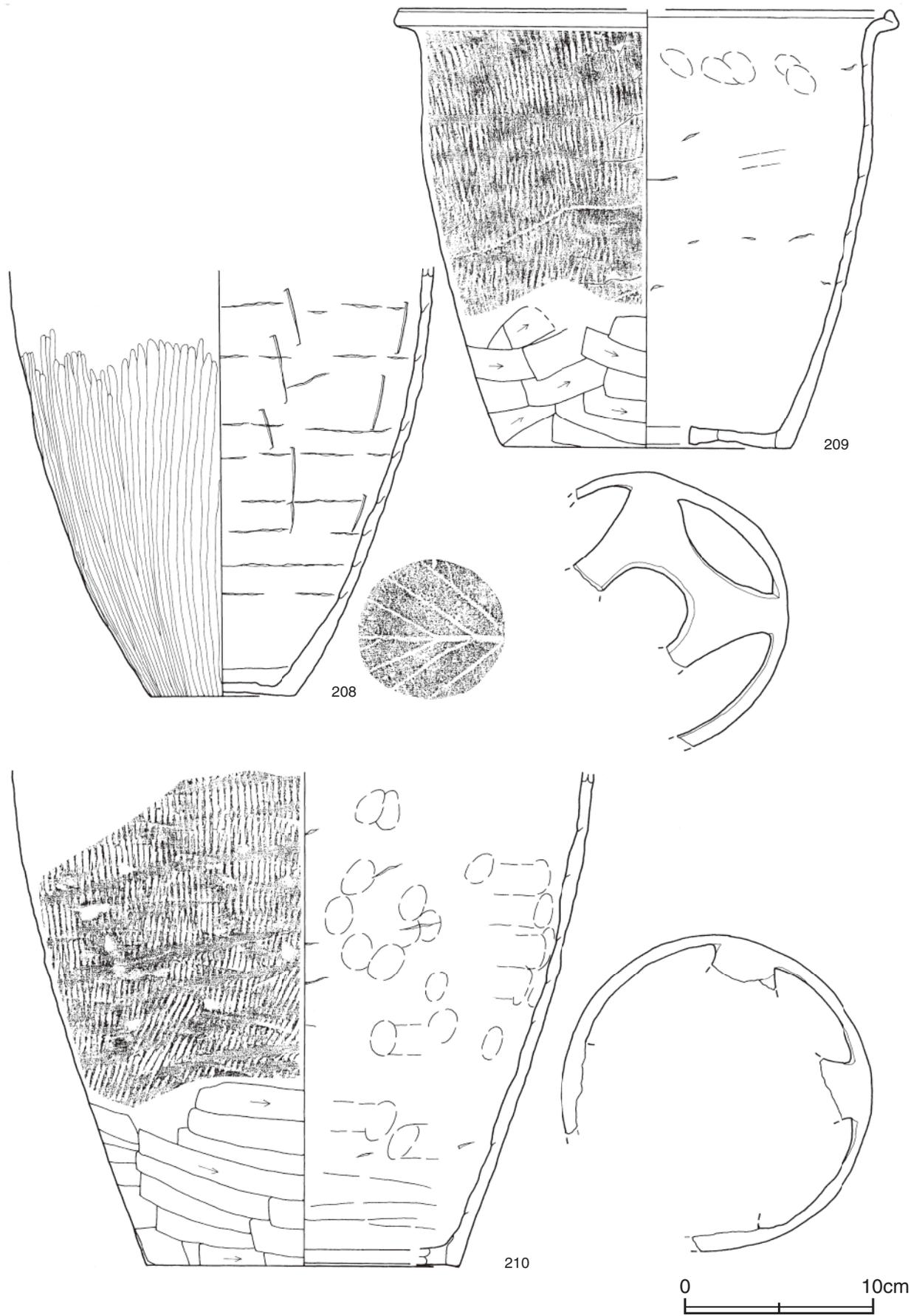
1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	5 暗褐色	ロームブロック中量，焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	7 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量，焼土ブロック・砂質粘土粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片247点（坏23，鉢1，甕類223），須恵器片131点（坏71，高台付坏1，蓋9，高台付皿1，盤1，甕類41，甑7），灰釉陶器片1点（長頸瓶）が，全面の覆土中層から下層にかけて出土している。また，混入した縄文土器片2点（深鉢）も出土している。201は南部壁際，203は中央部，208は竈の覆土下層からそれぞれ出土している。204は北西部と北東部の床面，202は中央部と東部，206は南部壁際と北東部，210は竈と東部の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。209は竈右袖部の覆土下層から出土しており，袖部の補強材として使用されている。205は南東コーナー部と東部の覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したものである。207は覆土中から出土している。

所見 時期は，出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第106図 第135号住居跡出土遺物実測図（1）



第 107 图 第 135 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 135 号住居跡出土遺物観察表（第 106・107 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
201	須恵器	坏	[12.8]	(3.8)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	10%
202	須恵器	坏	-	(2.6)	6.6	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り 墨書「□」	覆土下層	35%
203	須恵器	坏	-	(3.0)	[6.2]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	25%
204	須恵器	蓋	[14.6]	(1.8)		長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	床面	25%
205	須恵器	高台付皿	-	(2.7)	[8.2]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土上層・中層	25%
206	土師器	鉢	[31.0]	(6.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面輪積痕を残すナデ	覆土下層	10%
207	灰釉陶器	長頸瓶	-	(4.3)	-	精緻	にぶい黄橙	良好	頸部に接合痕 井ヶ谷 78 号窯式期	覆土中	10% PL40
208	土師器	甕	-	(23.0)	7.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き 内面輪積痕を残すヘラナデ 底部木葉痕	甕覆土下層	50%
209	須恵器	甌	[26.4]	23.7	[15.4]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部縦位の平行叩き 下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すナデ 指頭痕 底部五孔式	甕袖覆土下層	55% PL40
210	須恵器	甌	-	(26.6)	16.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部縦位の平行叩き 下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すナデ 指頭痕 底部五孔式	甕覆土下層 覆土下層	40%

第 136 号住居跡（第 108・109 図）

位置 調査区北東部の D 6 j6 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 142 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 4.17 m、短軸 4.08 m の方形で、主軸方向は N - 13° - E である。壁高は 15 ~ 20 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、壁際まで踏み固められている。東壁及び南西コーナー部を除く壁下には壁溝が巡っている。中央部と東壁際に焼土の広がりを確認した。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 97 cm で、燃焼部幅は 60 cm である。袖部は、床面を 15 cm 掘りくぼめた部分に焼土ブロックを含んだ第 9・10 層を埋土し、その上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第 6 ~ 8 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 52 cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜し、奥壁で外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|--------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 5 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | 焼土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 7 黄灰色 | 砂質粘土粒子多量、焼土ブロック少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック微量 | 8 明黄褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量 |
| | | 9 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| | | 10 暗褐色 | 焼土ブロック中量 |

ピット 6 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 12 ~ 25 cm で、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 5 は深さ 10 cm で、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6 は深さ 11 cm で性格不明である。

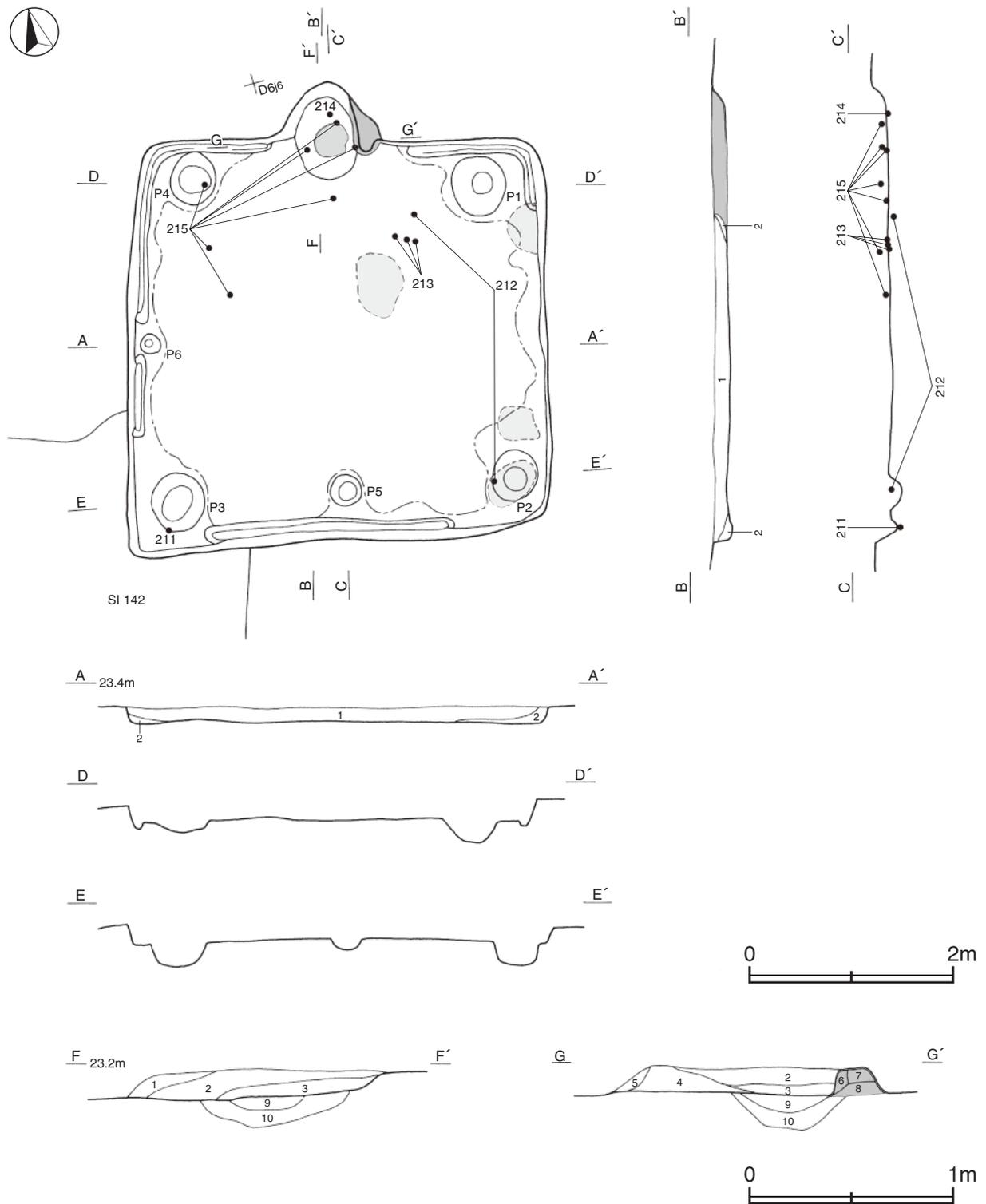
覆土 2 層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

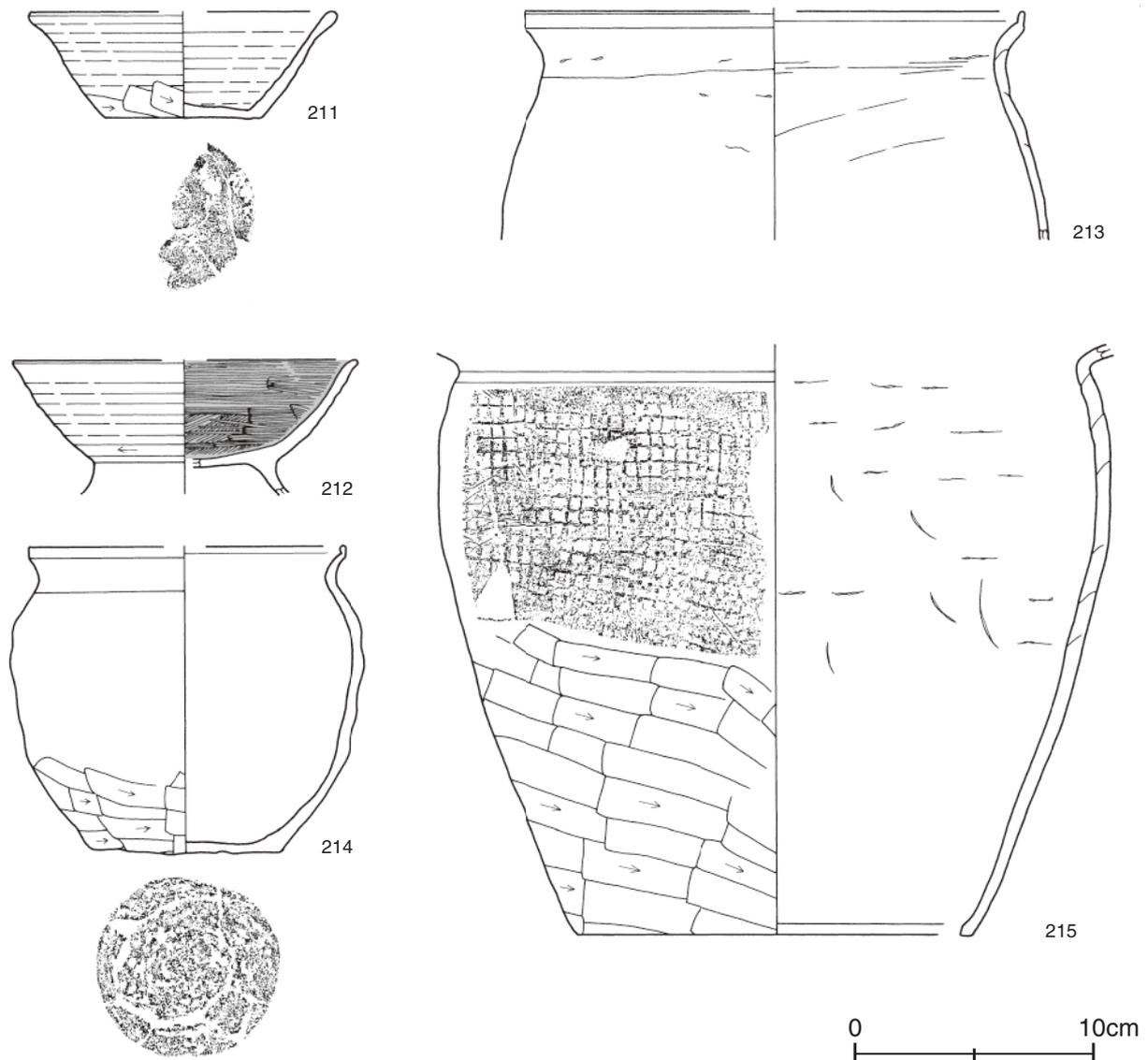
- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 2 暗褐色 | ロームブロック多量 |
|-------|-------------------------|-------|-----------|

遺物出土状況 土師器片 271 点（坏 20、高台付椀 2、甕 247、小形甕 1、甌 1）、須恵器片 53 点（坏 40、高台付坏 1、蓋 2、甕 8、甌 2）、灰釉陶器片 1 点（椀）、鉄製品 2 点（釘）のほか、鉄滓 2 点（26.4 g）が、

全面の覆土中層から下層にかけて出土している。211 は南西コーナー部の床面，214 は竈の火床部，213 は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。215 は竈と北西部の覆土下層，212 は北部の床面と P 2 の覆土上層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。
所見 時期は，出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 108 図 第 136 号住居跡実測図



第 109 図 第 136 号住居跡出土遺物実測図

第 136 号住居跡出土遺物観察表 (第 109 図)

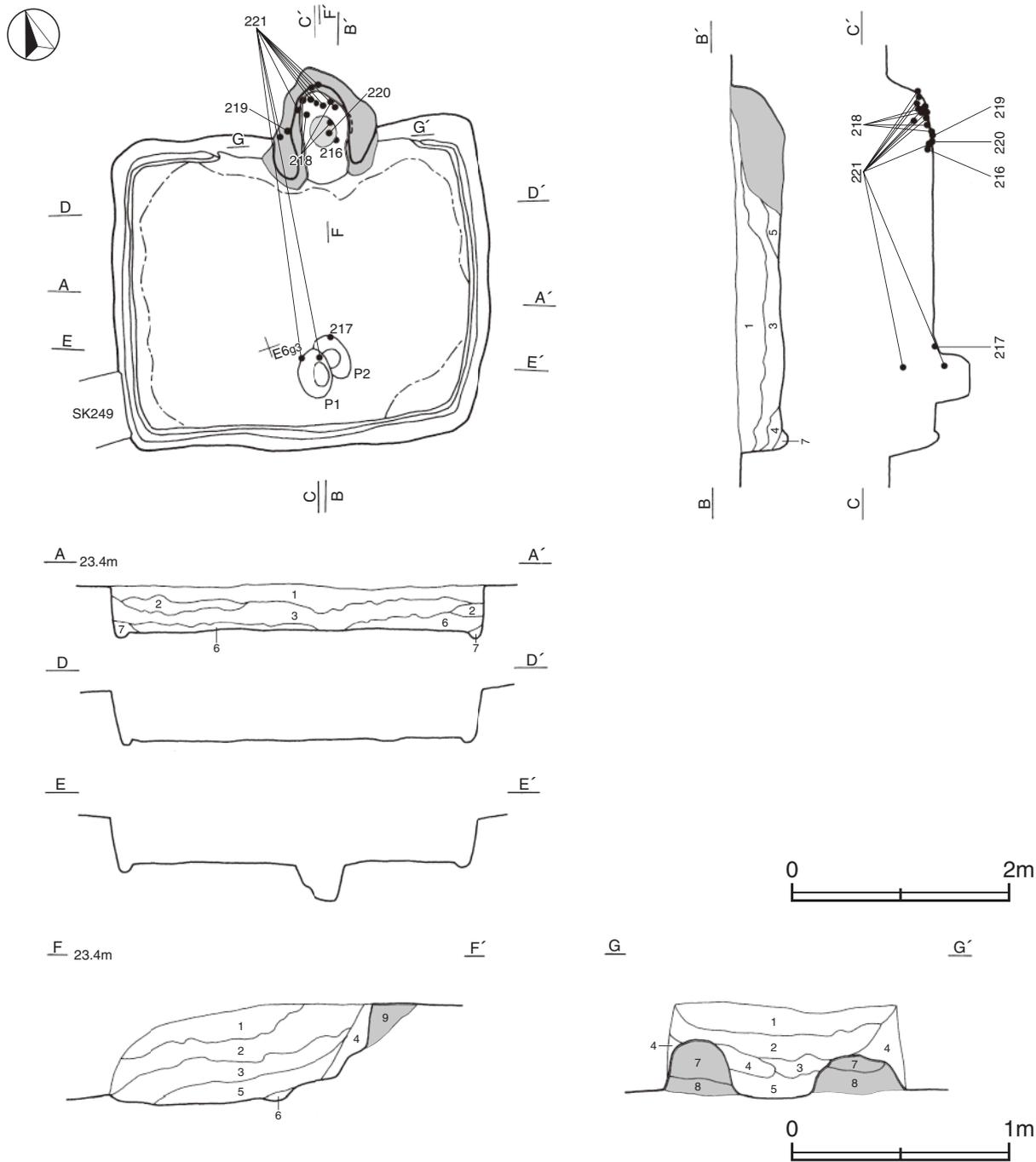
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
211	須恵器	坏	[12.8]	4.6	[6.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	40%
212	土師器	高台付碗	[14.4]	(5.7)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部ヘラ削り後、高台貼り付け	床面 P2 覆土上層	40%
213	土師器	甕	[21.0]	(9.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土下層	10%
214	土師器	小形甕	[13.3]	13.2	8.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 下位ヘラ削り 内面ナデ	竈火床部	50%
215	須恵器	甗	-	(25.1)	[16.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部上半格子叩き 下半ヘラ削り 内面無文の当て具痕 輪積痕を残すナデ	竈覆土下層 覆土下層	40%

第 137 号住居跡 (第 110 ~ 112 図)

位置 調査区中央部の E 6 f3 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 249 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.52 m, 短軸 2.92 m の長方形で, 主軸方向は N - 19° - E である。壁高は 40 ~ 48cm で, 直立している。



第 110 図 第 137 号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁やや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 110cm で、燃焼部幅は 42cm である。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第 7・8 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 62cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜し奥壁で直立している。奥壁にはロームブロックを含んだ暗褐色土の第 9 層を貼り付けて補強している。第 4・5 層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック多量, 砂質粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 砂質粘土粒子少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・砂質粘土粒子微量, 炭化物微量 |
| 5 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化物微量 | | |

ピット 2か所。P1・P2は深さ34cm・35cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

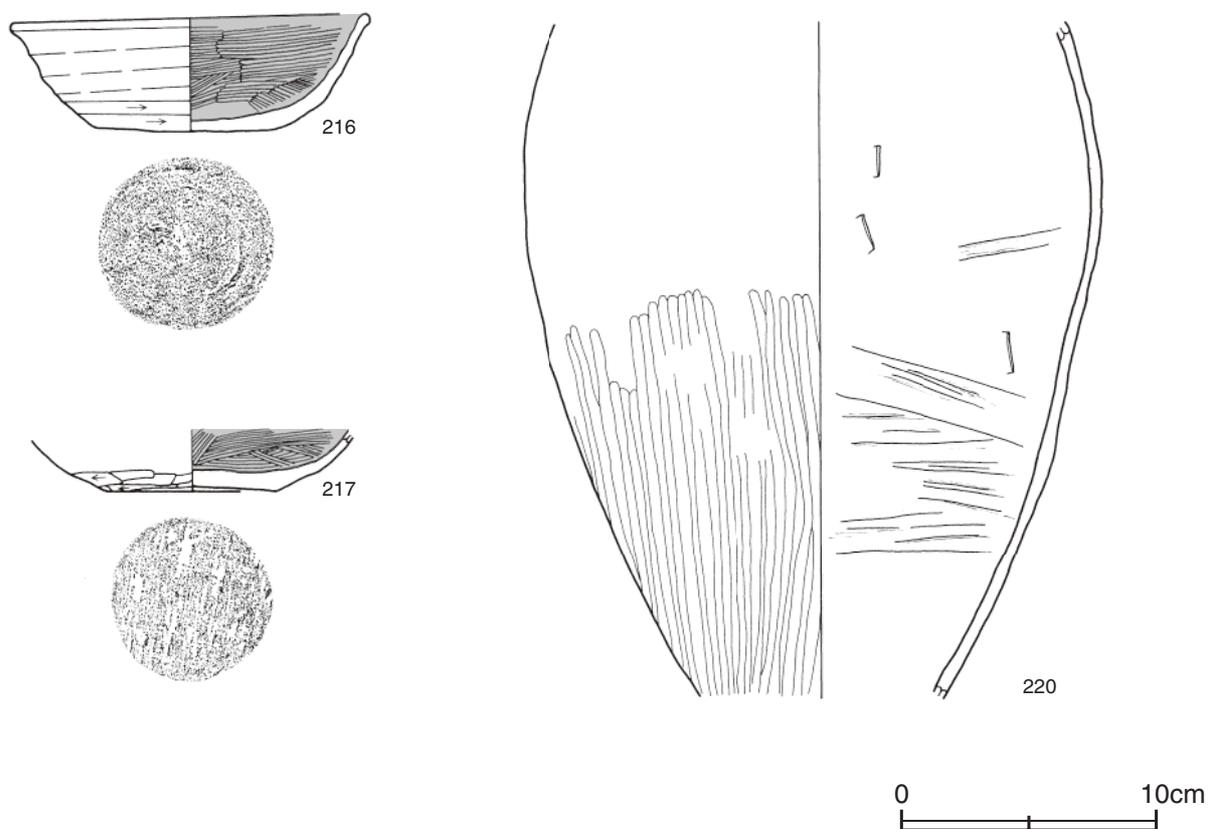
覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

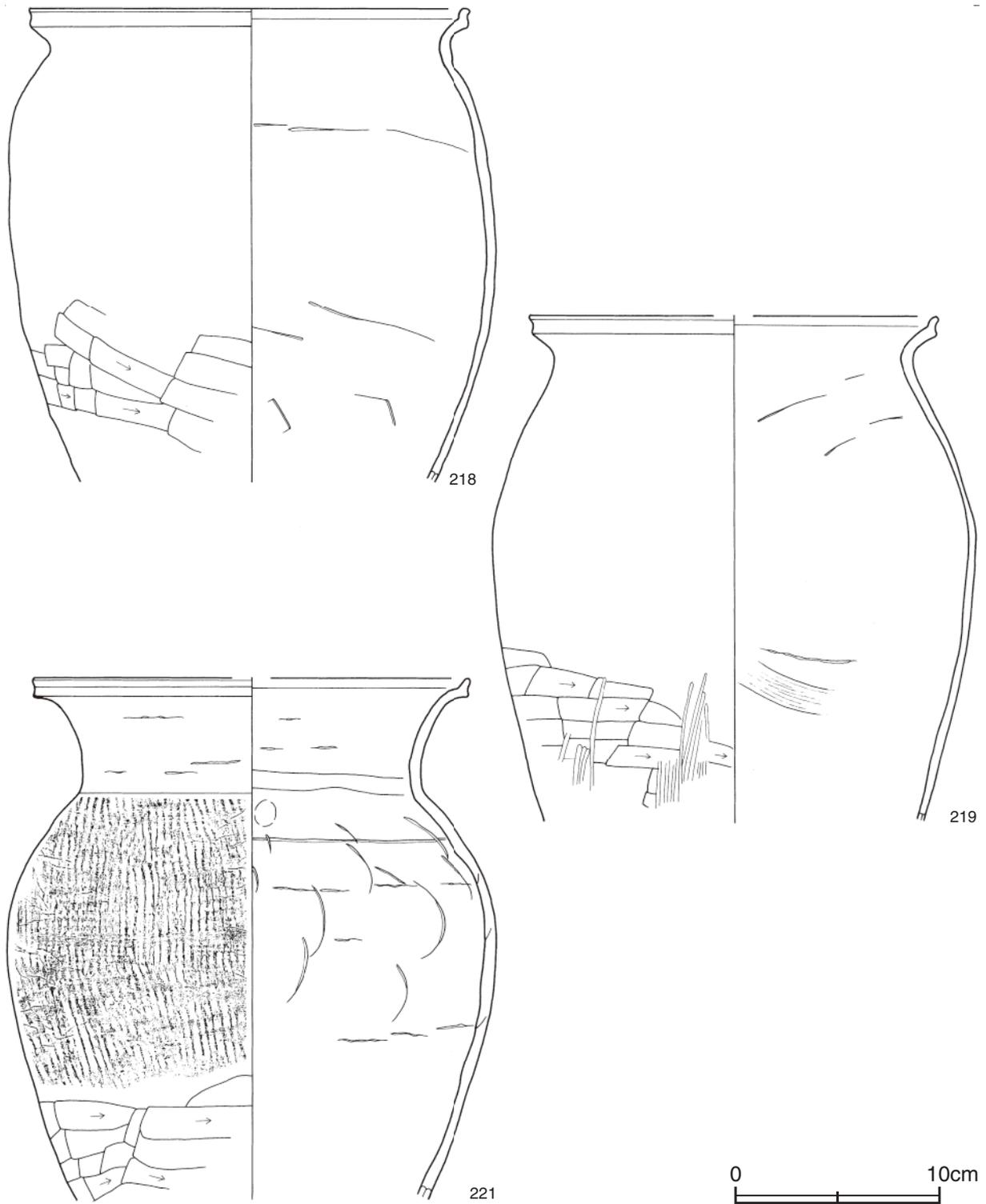
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 289点 (坏 23, 甕類 266), 須恵器片 143点 (坏 74, 高台付坏 1, 蓋 1, 甕類 67) のほか, 鉄滓 13点 (85.2g) が, 中央部の覆土中層から下層を中心に出土している。また, 混入した縄文土器片 2点 (深鉢) も出土している。220は竈の火床面, 216は竈の覆土下層からそれぞれ出土している。218は竈の覆土下層から出土した破片が接合したものである。いずれもほぼ完形であることから廃絶時に遺棄されたものと考えられる。217は南部の床面, 219は竈の覆土下層からそれぞれ出土している。221は竈と南部の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第 111 図 第 137 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 112 図 第 137 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 137 号住居跡出土遺物観察表 (第 111・112 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
216	土師器	坏	13.9	4.7	7.1	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り	竈覆土下層	90% PL41
217	土師器	坏	-	(2.4)	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部一方のヘラ削り	床面	30%
218	土師器	甕	21.5	(23.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半ナデ 下半ヘラ削り 内面ヘラナデ	竈覆土下層	80% PL41

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
219	土師器	甕	[20.0]	(25.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 下位ヘラ削り後、ヘラ磨き 内面ヘラナデ	竈覆土下層	30%
220	土師器	甕	-	(26.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	竈火床面	70% PL41
221	須恵器	甕	[21.4]	(26.9)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部縦位の平行叩き 下端ヘラ削り 内面無文の当て具痕 輪積痕を残すナデ 指頭痕	竈覆土下層 覆土中層・下層	50% PL41

第 138 号住居跡 (第 113 図)

位置 調査区中央部の E 6 g3 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 東半部が調査区域外に伸びているため、南北軸は 3.18 m で、東西軸は 1.14 m しか確認できなかった。平面形はわずかに確認できる竈の位置から隅丸方形と推定でき、主軸方向は N - 2° - E である。壁高は 50 ~ 53 cm で、直立している。

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 覆土の様子から袖部の一部が確認でき、北壁中央部に付設されていたものと考えられる。大部分は調査区域外へ伸びているため、規模などは不明である。

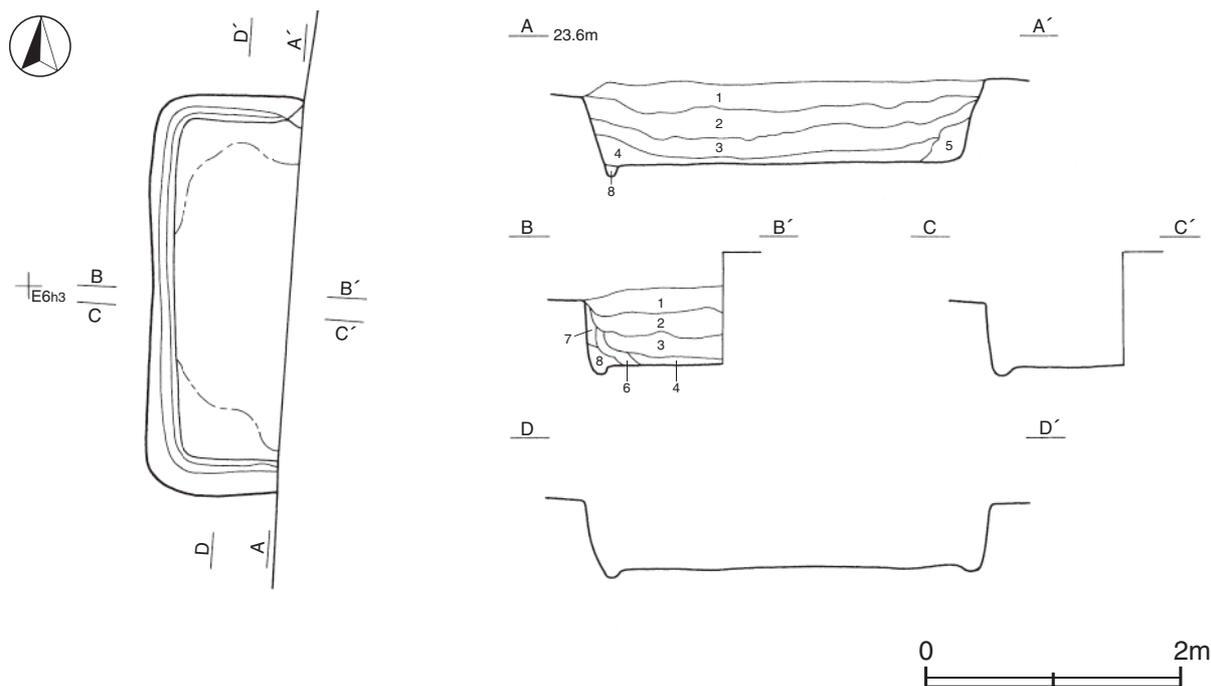
覆土 8 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子微量 | | |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 38 点 (坏 3, 甕類 35), 須恵器片 4 点 (坏 3, 甕類 1) が出土しており、いずれも細片である。

所見 時期は、9 世紀前葉に比定できる第 134 号住居跡と主軸及び規模がほぼ同じであることから、9 世紀前葉と考えられる。



第 113 図 第 138 号住居跡実測図

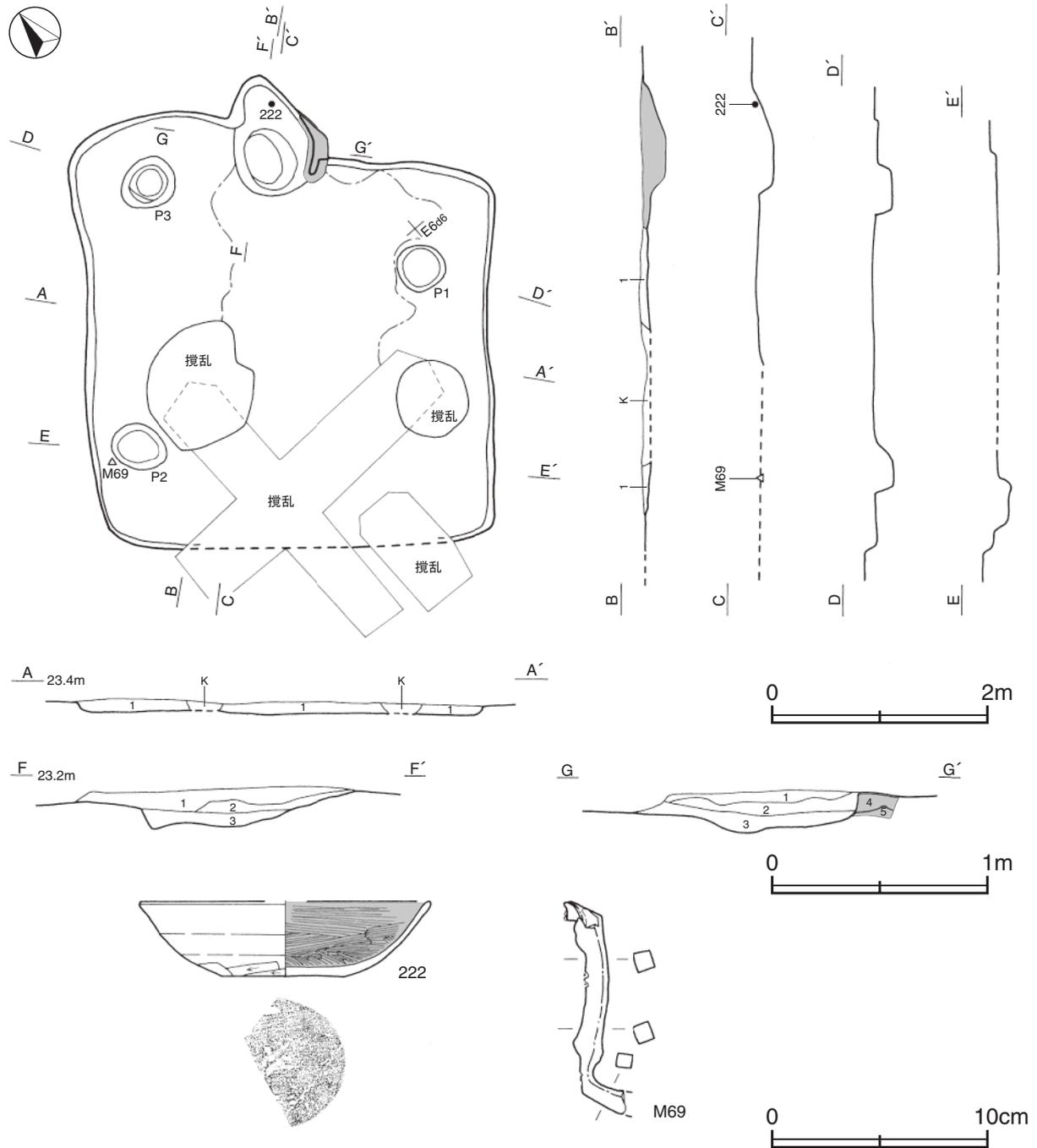
第 139 号住居跡 (第 114 図)

位置 調査区東部の E 6 c5 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 4.10 m, 短軸 3.82 m の方形で, 主軸方向は N - 41° - E である。壁高は 6 ~ 13cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 竈前面と中央部が踏み固められている。

竈 北東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 110cm で, 燃焼部幅は 70cm である。袖部は右袖のみが遺存しており, ロームブロックを主体とした第 4・5 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 10cm くぼんでおり, 火床面は赤変, 硬化ともに弱い。煙道部は壁外に 48cm 掘り込まれ, 火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。



第 114 図 第 139 号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量 | 5 明黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 3か所。P1～P3は深さ15～18cmで、規模や配置から主柱穴である。

覆土 単一層である。ロームや焼土のブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック中量, 炭化物微量

遺物出土状況 土師器片131点(坏47, 高台付椀1, 甕類83), 須恵器片57点(坏27, 甕類29, 甌1), 鉄製品1点(釘カ)のほか, 瓦片1点^が, 北半部の覆土中層から下層にかけて出土している。222は竈, M69は西部壁際の覆土下層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀後葉に比定できる。

第139号住居跡出土遺物観察表(第114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
222	土師器	坏	[13.6]	3.5	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部一方方向のヘラ削り	竈覆土下層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M69	釘カ	(10.0)	29	0.9	(35.4)	鉄	先端部欠損 端部屈曲 断面方形	覆土下層	

第141号住居跡(第115～118図)

位置 調査区中央部のE6g2区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第249・253号土坑を掘り込み, 第248号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.25m, 短軸4.19mの隅丸方形で, 主軸方向はN-5°-Eである。壁高は38～54cmで, 外傾して立ち上がっている。

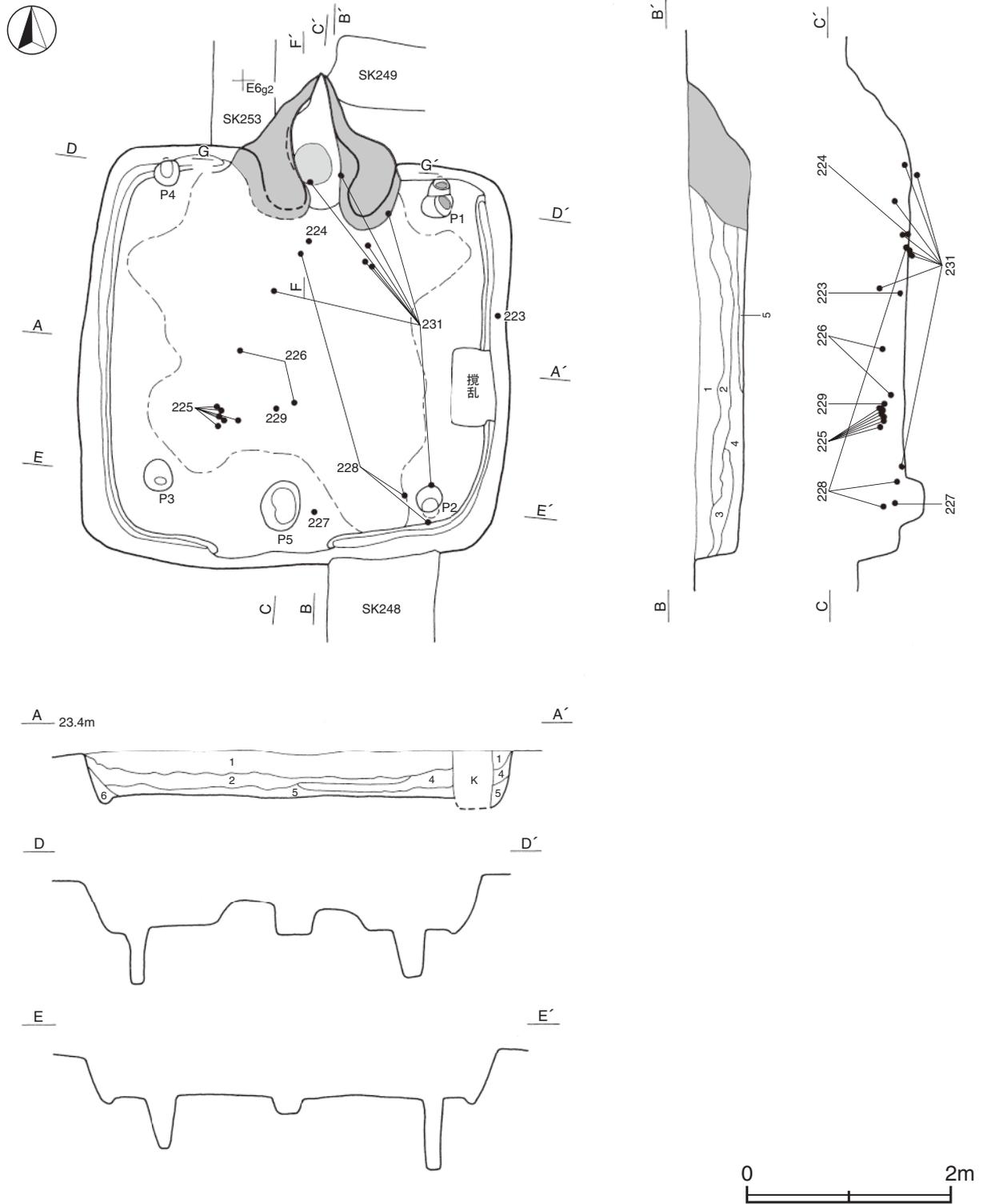
床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。北壁東部及び南壁中央部を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで134cmで, 燃烧部幅は45cmである。袖部は, 床面を30cm掘りくぼめた部分にロームブロックを含んだ第19～22層を埋土し, その上に砂質粘土を主体とした第13～18層を積み上げて構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面から12cmくぼんでおり, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に80cm掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。第2～11層は, 袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化物微量 | 10 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 にぶい黄褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量, ロームブロック微量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子微量 | 13 にぶい黄褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物・砂質粘土粒子微量 | 14 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 15 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ロームブロック少量, 炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 16 暗褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック微量 |

- | | | | |
|------------|---------------------------------|----------|-------------------------------------|
| 17 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 20 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 18 暗 褐 色 | ロームブロック・砂質粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 21 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 19 暗 赤 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 22 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 砂質粘土ブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量 |

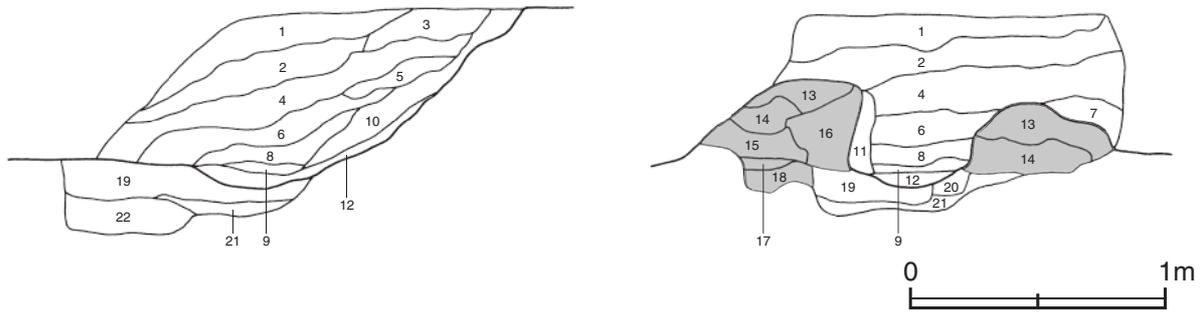


第 115 図 第 141 号住居跡実測図 (1)

F 23.4m

F' G

G'



第 116 図 第 141 号住居跡実測図 (2)

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ 42～73cmで、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P 5は深さ 24cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 1の底面には、柱のあたりとみられる円形の硬化範囲が認められる。

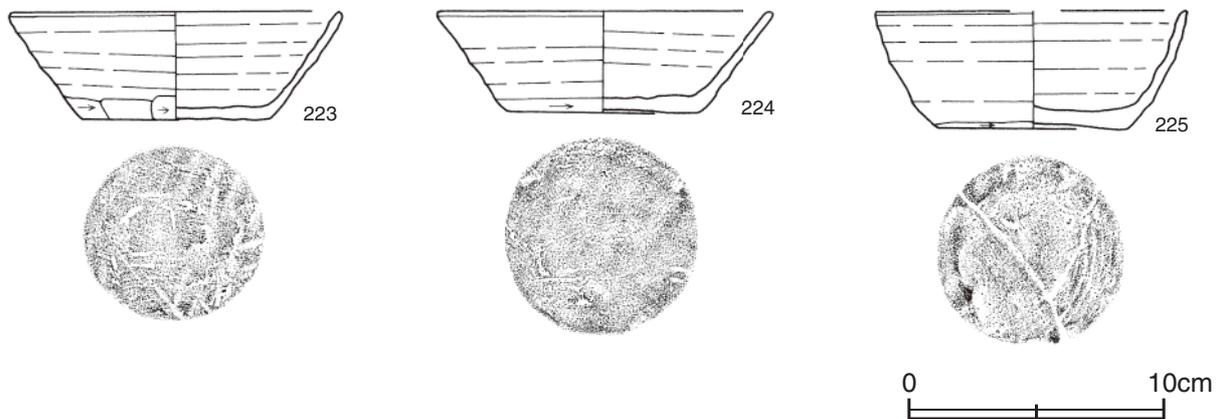
覆土 6層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

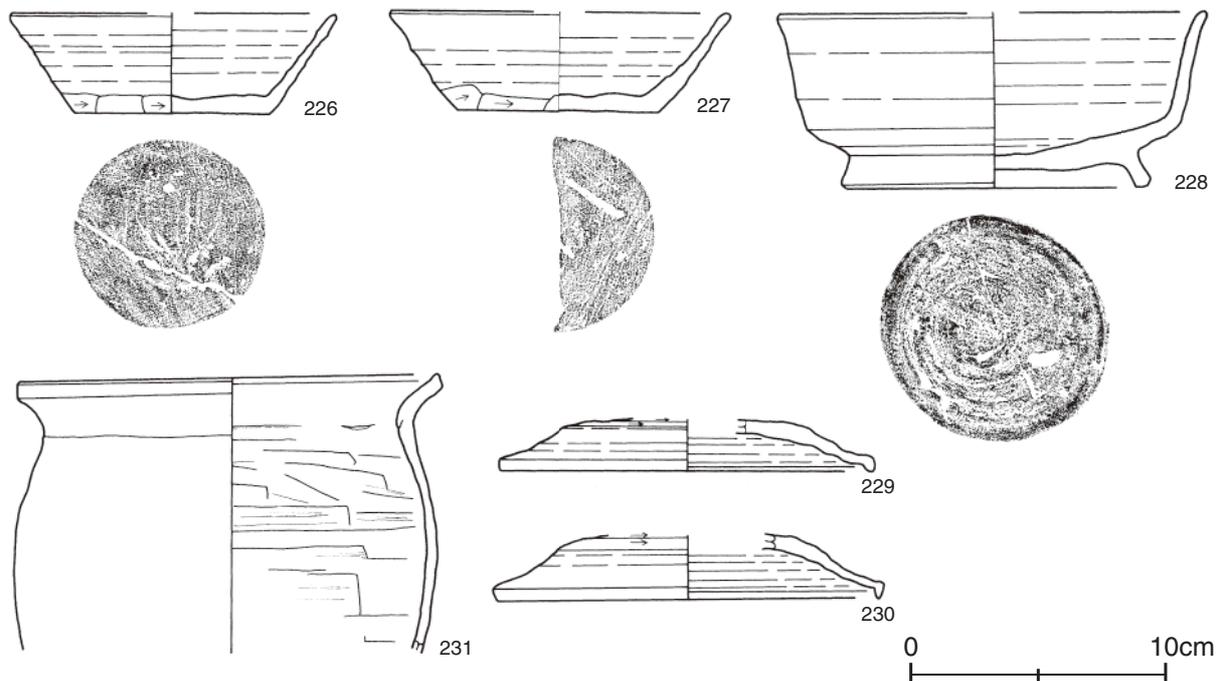
- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片 765 点 (坏 27, 甕類 736, 小形甕 1, 甑 1), 須恵器片 290 点 (坏 200, 高台付坏 1, 蓋 15, 盤 8, 瓶類 1, 甕類 64, 甑 1), 土製品 3 点 (支脚), 鉄製品 3 点 (刀子 1, 釘 2) のほか, 鉄滓 1 点 (19.7 g) が, 全面の覆土上層から下層にかけて出土している。また, 混入した磁器片 2 点 (碗) も出土している。223 は東部壁際の覆土下層, 224 は竈前の床面からそれぞれ出土しており, いずれもほぼ完形であることから廃絶時に遺棄されたものと考えられる。227 は南部の覆土下層から出土している。228 は竈前の床面と南東部の覆土下層, 231 は竈の火床面と竈前の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。230 は竈の覆土中から出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。225 は南西部, 226・229 は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 117 図 第 141 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 118 図 第 141 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 141 号住居跡出土遺物観察表 (第 117・118 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
223	須恵器	坏	12.9	4.3	7.4	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向のヘラ削り	覆土下層	100% PL41
224	須恵器	坏	13.1	4.1	7.5	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	95% PL41
225	須恵器	坏	[12.4]	4.7	7.4	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部ナデ	覆土中層	75% PL41
226	須恵器	坏	[12.8]	4.0	7.7	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土中層	70%
227	須恵器	坏	[13.4]	3.9	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向のヘラ削り	覆土下層	50%
228	須恵器	高台付坏	[16.9]	7.0	11.9	長石・石英	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	床面 覆土下層	50%
229	須恵器	蓋	[14.8]	(2.1)		長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	覆土中層	45%
230	須恵器	蓋	[15.2]	(2.6)		長石・石英	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	竈覆土中	40%
231	土師器	小形甕	16.5	(11.1)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈火床面 覆土下層	40%

第 142 号住居跡 (第 119・120 図)

位置 調査区北東部の E 6 a5 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 148 号住居跡を掘り込み, 第 136 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.85 m, 短軸 3.79 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 25° - E である。壁高は 30 ~ 34cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北東壁東寄りに付設されている。煙道部を第 136 号住居に掘り込まれているため, 規模は焚口部から煙道部までの 103cm しか確認できなかった。燃焼部幅は 81cm である。袖部は, 床面を 12cm 掘りくぼめた部分にロームや焼土のブロックを含んだ第 9・10 層を埋土し, その上に黄灰色粘土を主体とした第 6~8 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 53cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 明赤褐色 | 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | 焼土ブロック多量, 黄灰色粘土ブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子微量 | 9 明赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 5 明褐色 | ローム粒子多量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック多量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ12～18cmで、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P5は深さ14cmで、南西壁際の中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

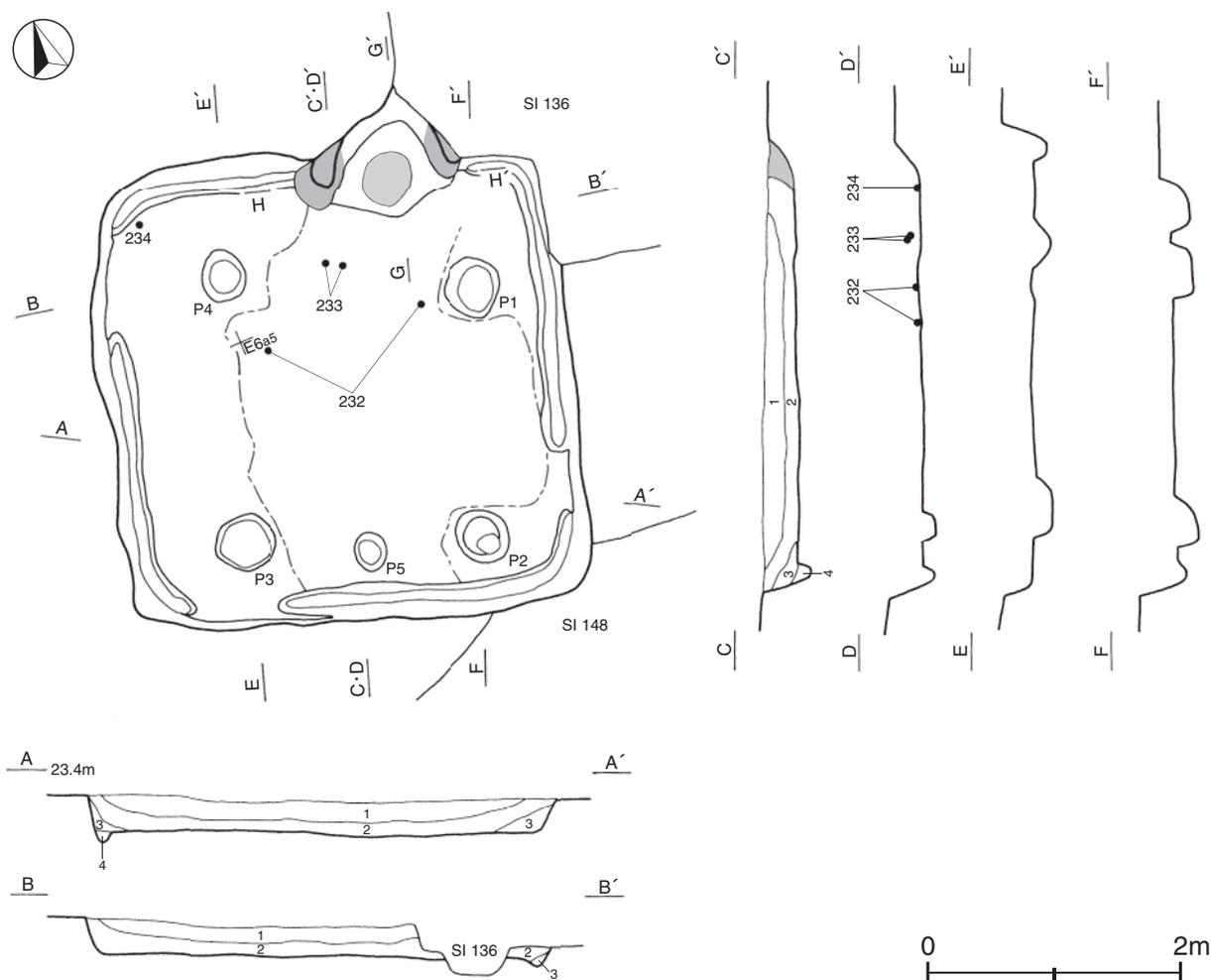
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

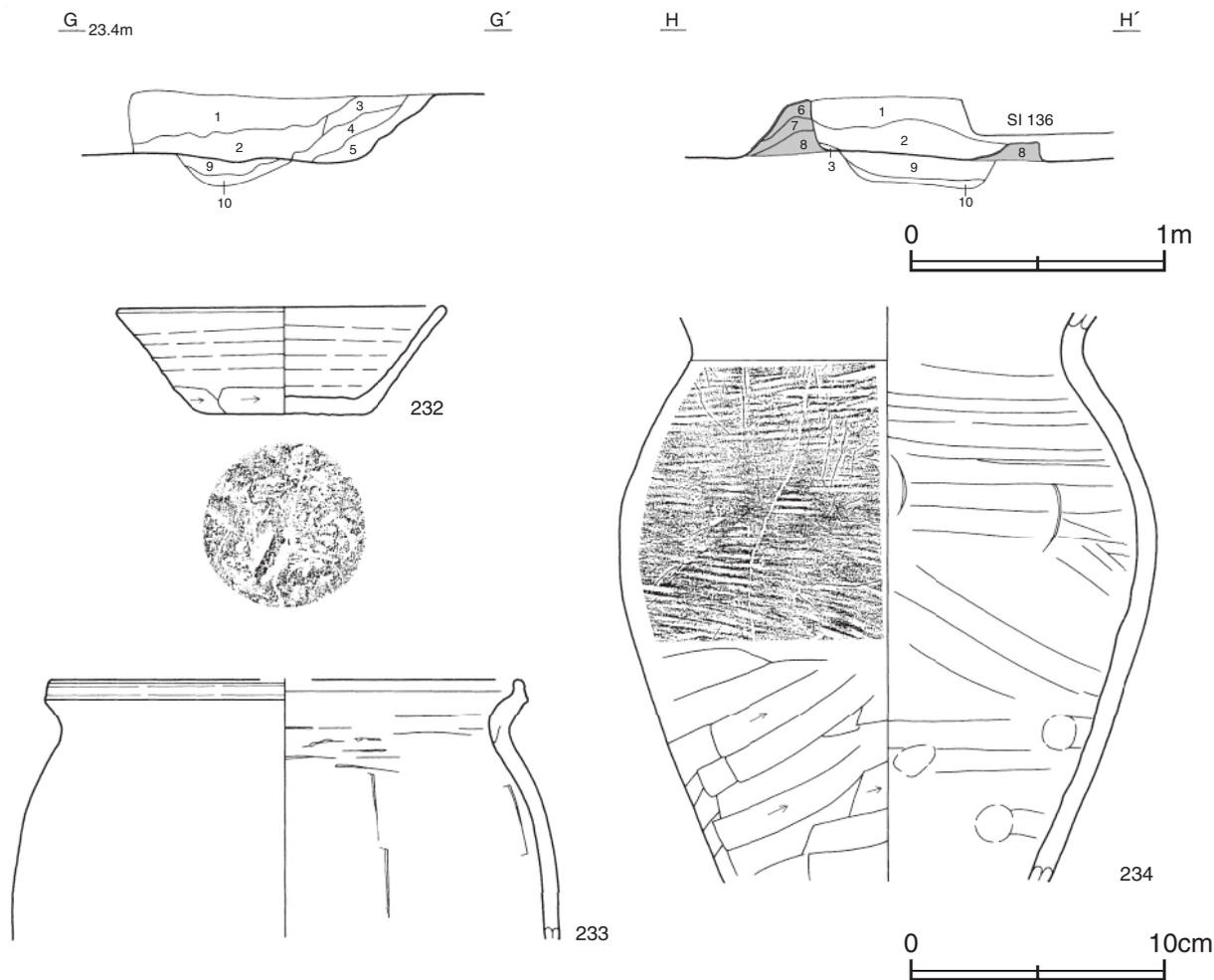
- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片162点(坏10, 甕類152), 須恵器片118点(坏66, 蓋4, 盤2, 甕類46)のほか, 不明鉄製品1点だが, 北部から中央部にかけての覆土下層を中心に出土している。また, 混入した縄文土器片2点(深鉢)も出土している。232は中央部, 233は竈前の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。234は北コーナー部の覆土下層から出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第119図 第142号住居跡実測図



第 120 図 第 142 号住居跡・出土遺物実測図

第 142 号住居跡出土遺物観察表 (第 120 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
232	須恵器	坏	12.9	4.4	6.4	長石・石英・雲母・細礫	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	90% PL41
233	土師器	甕	[18.6]	(10.4)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土下層	10%
234	須恵器	甕	-	(22.8)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部横位・斜位の平行叩き 下位ヘラ削り 内面無文の当て具痕を残すヘラナデ 指頭痕	覆土下層	40%

第 146 号住居跡 (第 121 ~ 123 図)

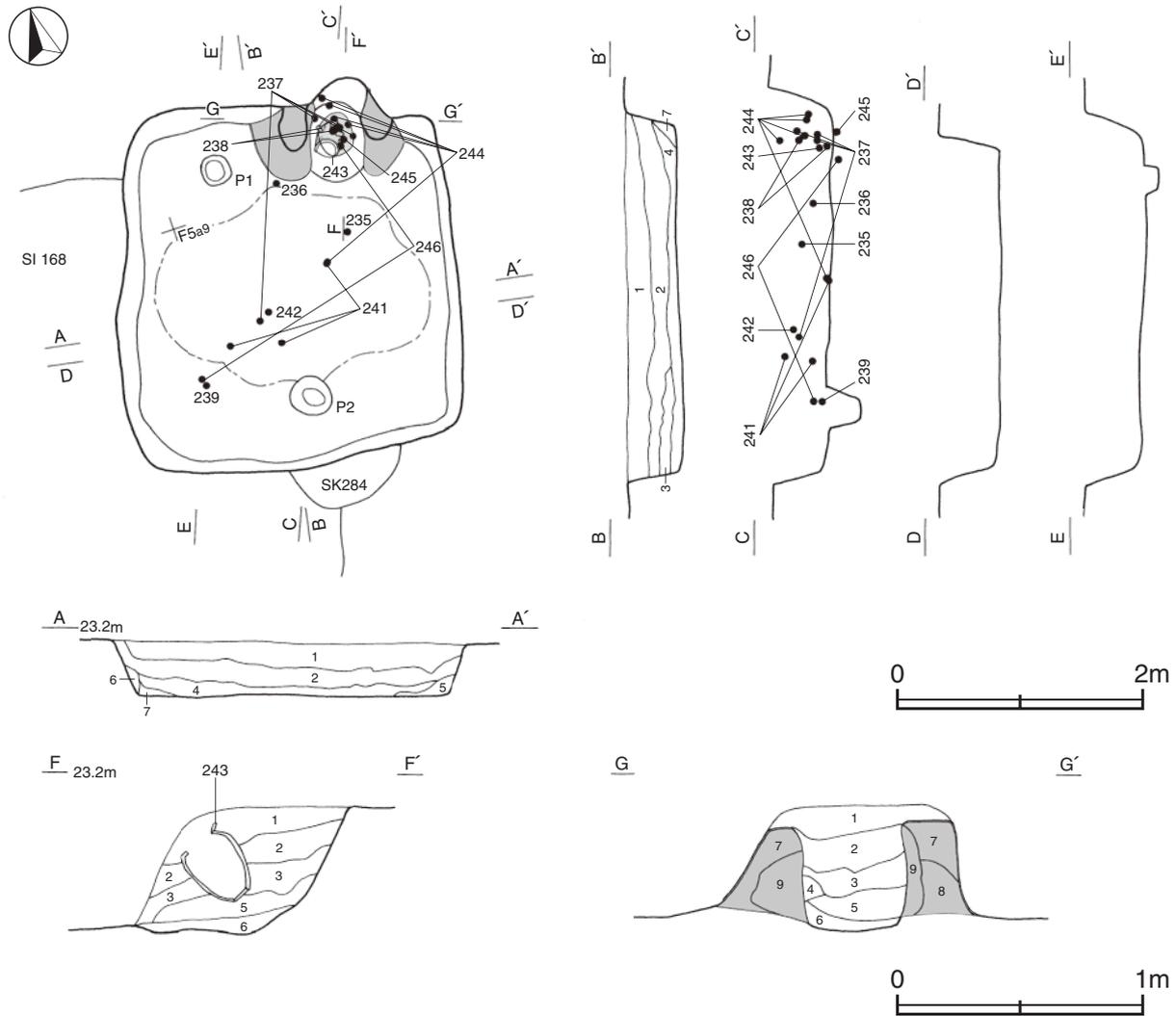
位置 調査区南部の F 5 a9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 168 号住居跡, 第 284 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.03 m, 短軸 2.82 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 19° - E である。壁高は 44 ~ 52 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。

竈 北壁東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 86 cm で, 燃焼部幅は 46 cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし, その上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第 7 ~ 9 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 3 cm くぼんでおり, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 27 cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。第 1 ~ 5 層は, 袖部及び天井部の崩落土である。



第 121 図 第 146 号住居跡実測図

竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------|----------|------------------------------------|
| 1 灰 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 6 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量 | 7 暗 褐色 | ロームブロック中量, 砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化物・砂質粘土粒子微量 | 8 灰 黄 褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 暗 赤 褐色 | 砂質粘土粒子少量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 5 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物・砂質粘土粒子微量 | | |

ピット 2か所。P 1は深さ 15cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 2は深さ 29cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

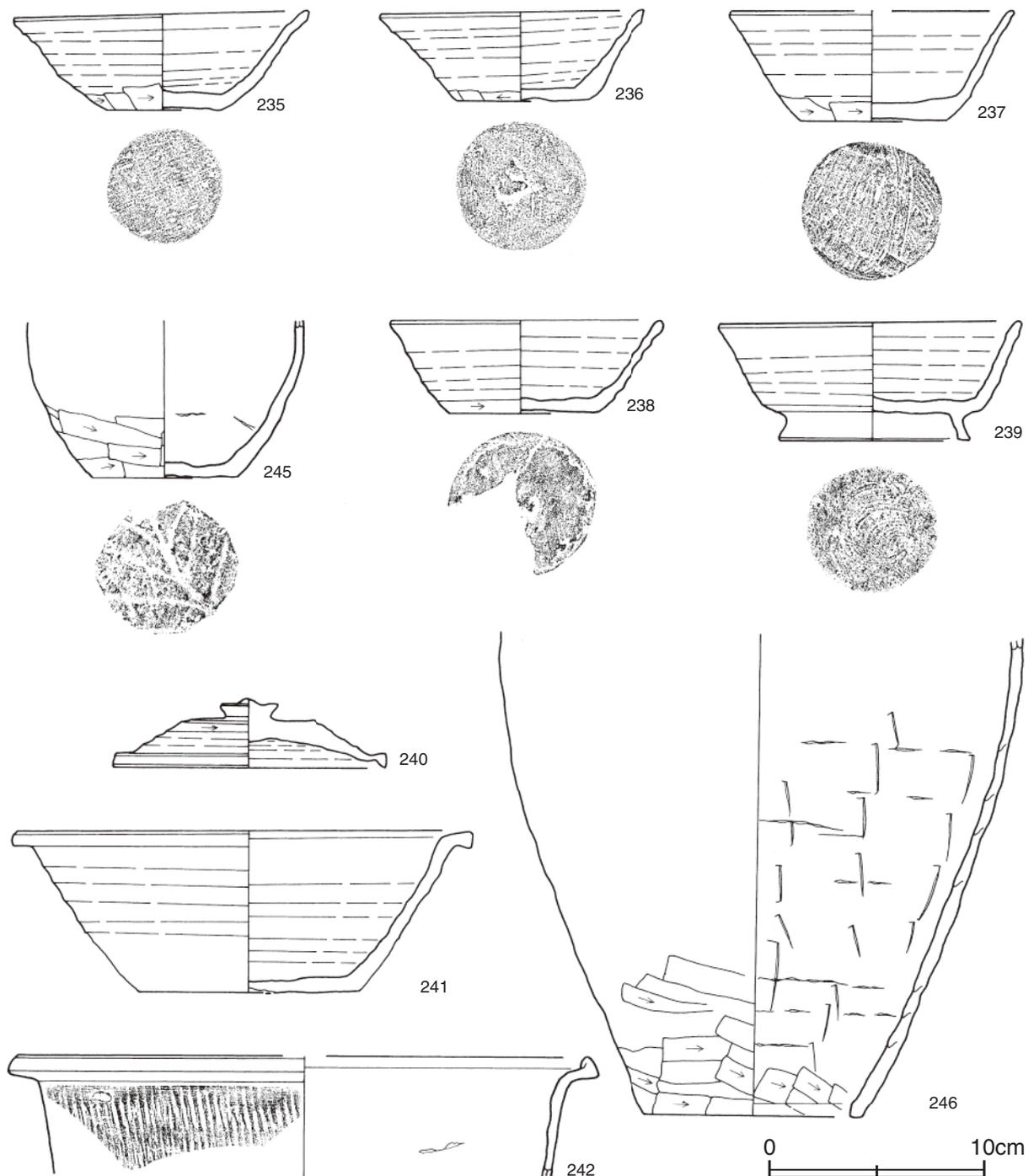
土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗 褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 3 褐 色 | ロームブロック多量, 焼土粒子微量 | 7 暗 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | | |

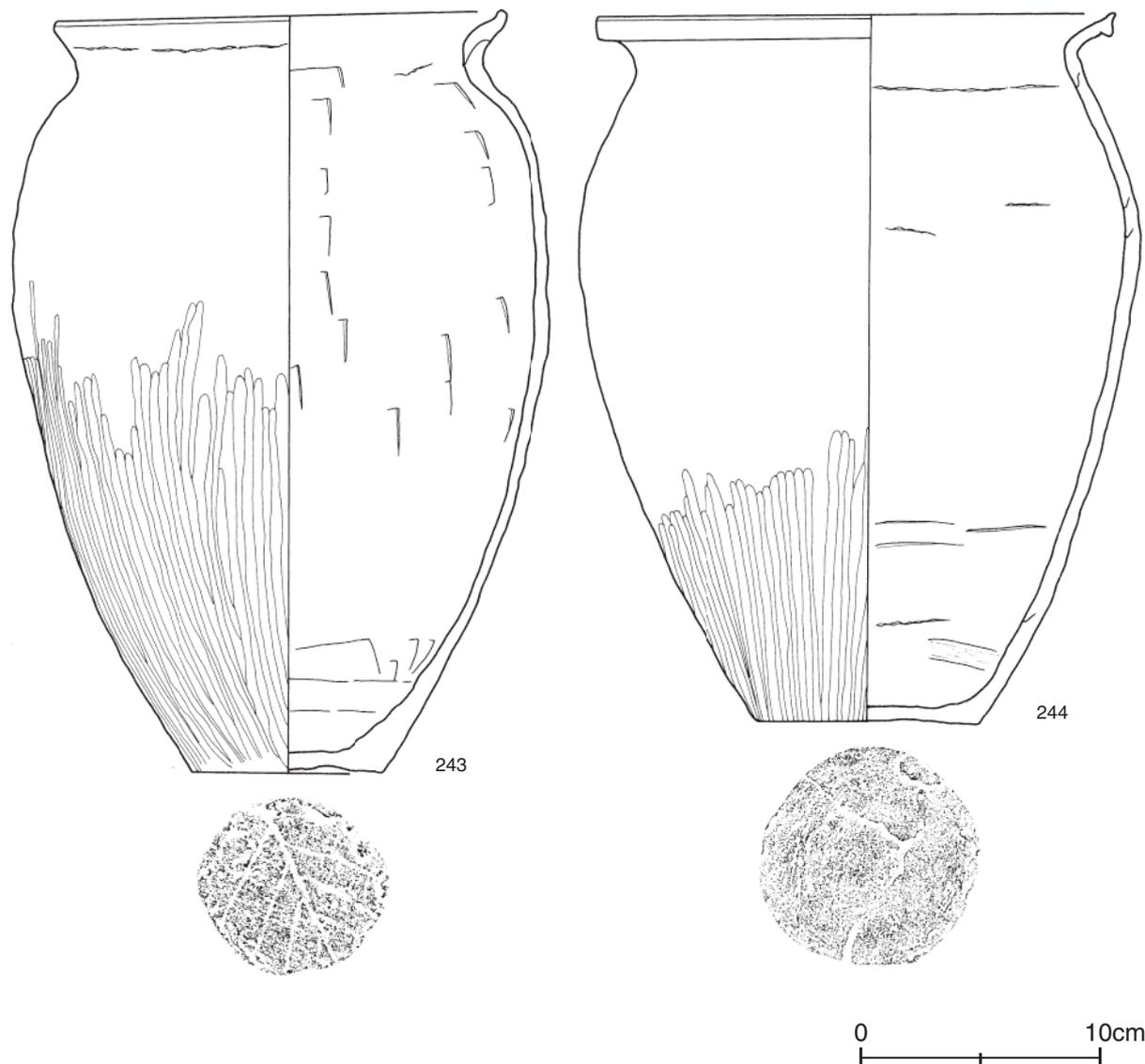
遺物出土状況 土師器片 187点 (坏 16, 甕類 168, 小形甕 1, 甕 2), 須恵器片 85点 (坏 32, 高台付坏 1, 蓋 1, 盤 2, 鉢 7, 壺類 1, 甕類 41) が、中央部の覆土中層から下層を中心に出土している。243は竈の覆土下層

から斜位の状態で出土しており、竈に据えられていたものと考えられる。239は南西部の覆土下層から斜位の状態で、235・236は竈前の覆土中層から正位の状態でそれぞれ出土している。245は竈の火床面から出土している。いずれもほぼ完形であることから廃絶時に遺棄されたものと考えられる。237は竈と中央部の覆土中層、238は竈の覆土中層・下層、244は竈の覆土中層と中央部の覆土下層、246は竈の火床面と南西部の覆土下層、241は中央部の覆土中層・下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。240は覆土中、242は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第 122 図 第 146 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 123 図 第 146 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 146 号住居跡出土遺物観察表 (第 122・123 図)

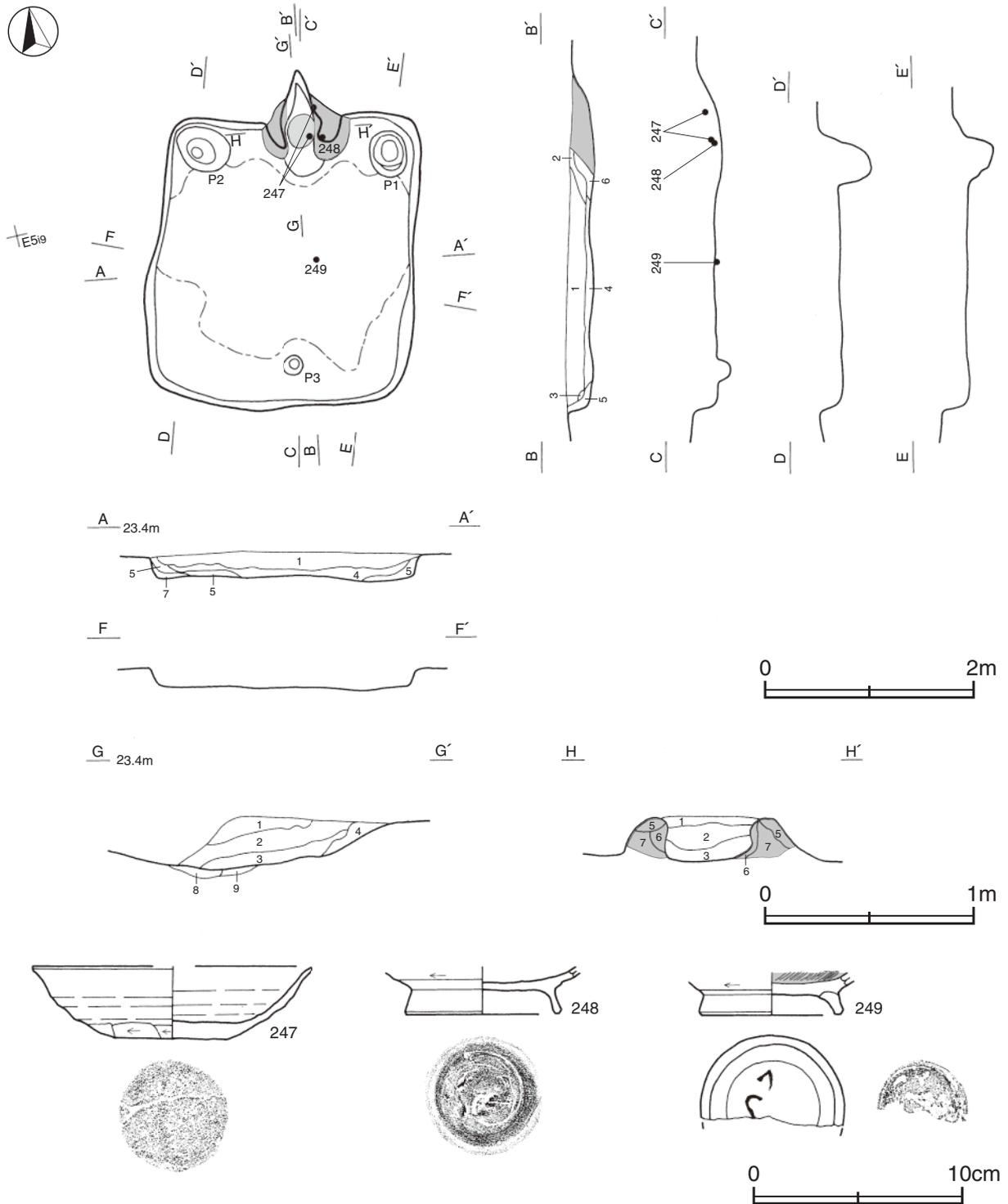
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
235	須恵器	坏	13.7	4.7	5.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	100% PL42
236	須恵器	坏	12.4	4.2	6.2	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	80% PL42
237	須恵器	坏	[13.3]	5.2	6.8	長石・石英	褐灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り後、一方向のヘラ削り	竈覆土中層 覆土中層	50%
238	須恵器	坏	12.6	4.4	6.9	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	竈覆土中層・下層	30%
239	須恵器	高台付坏	14.0	5.7	8.8	長石・石英	灰	普通	底部回転糸切り後、回転ヘラ削り	覆土下層	100% PL42
240	須恵器	蓋	12.8	3.2		長石・石英	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土中	70% PL42
241	須恵器	鉢	21.2	7.6	10.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外・内面クロロナデ 体部外面下位剥離 底面ナデ	覆土中層・下層	50%
242	須恵器	鉢	[26.8]	(5.7)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部縦位の平行叩き 内面輪積痕を残すナデ	覆土中層	10%
243	土師器	甕	18.7	32.4	8.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部木葉痕	竈覆土下層	100% PL42
244	土師器	甕	21.8	30.2	9.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下位ヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪積痕 底部ナデ	竈覆土中層 覆土下層	90% PL42
245	土師器	小形甕	-	(7.4)	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すナデ 底部木葉痕	竈火床面	40%
246	土師器	甕	-	(22.8)	10.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ナデ 下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すヘラナデ 下位ヘラ削り	竈火床面 覆土下層	60% PL42

第 147 号住居跡 (第 124 図)

位置 調査区南部の E 5 i9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 2.77 m, 短軸 2.61 m の隅丸方形で, 主軸方向は $N - 13^\circ - E$ である。壁高は 18 ~ 25cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。



第 124 図 第 147 号住居跡・出土遺物実測図

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで104cmで、燃焼部幅は31cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし、その上に砂質粘土を主体とした第5～7層を積み上げて構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面を10cm掘りくぼめた部分に、ロームや焼土のブロックを含んだ第8・9層が埋土されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に48cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	6	にぶい黄褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
2	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量	7	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4	暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	9	暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
5	暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量			

ピット 3か所。P1・P2は深さ24cm・30cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P3は深さ13cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	5	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	6	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3	暗褐色	ロームブロック中量	7	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量			

遺物出土状況 土師器片114点（坏14、高台付椀2、高台付皿2、甕類94、甌2）、須恵器片31点（坏11、蓋2、瓶類1、甕類17）のほか、鉄滓2点（49.5g）が、北東部の覆土中層を中心に出土している。247・248は竈の覆土下層、249は中央部の床面からそれぞれ出土しており、いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。

第147号住居跡出土遺物観察表（第124図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
247	須恵器	坏	[13.4]	3.5	5.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持ちへら削り 底部多方向のへら削り	竈覆土下層	50%
248	土師器	高台付椀	-	(2.3)	7.3	長石・雲母	明赤褐	普通	体部下端回転へら削り 内面剥離が激しいため調整不明 底部回転へら削り後、高台貼り付け	竈覆土下層	30%
249	土師器	高台付椀	-	(2.1)	6.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転へら削り 内面へら磨き 底部回転へら削り後、高台貼り付け 底部に墨書「□」	床面	15%

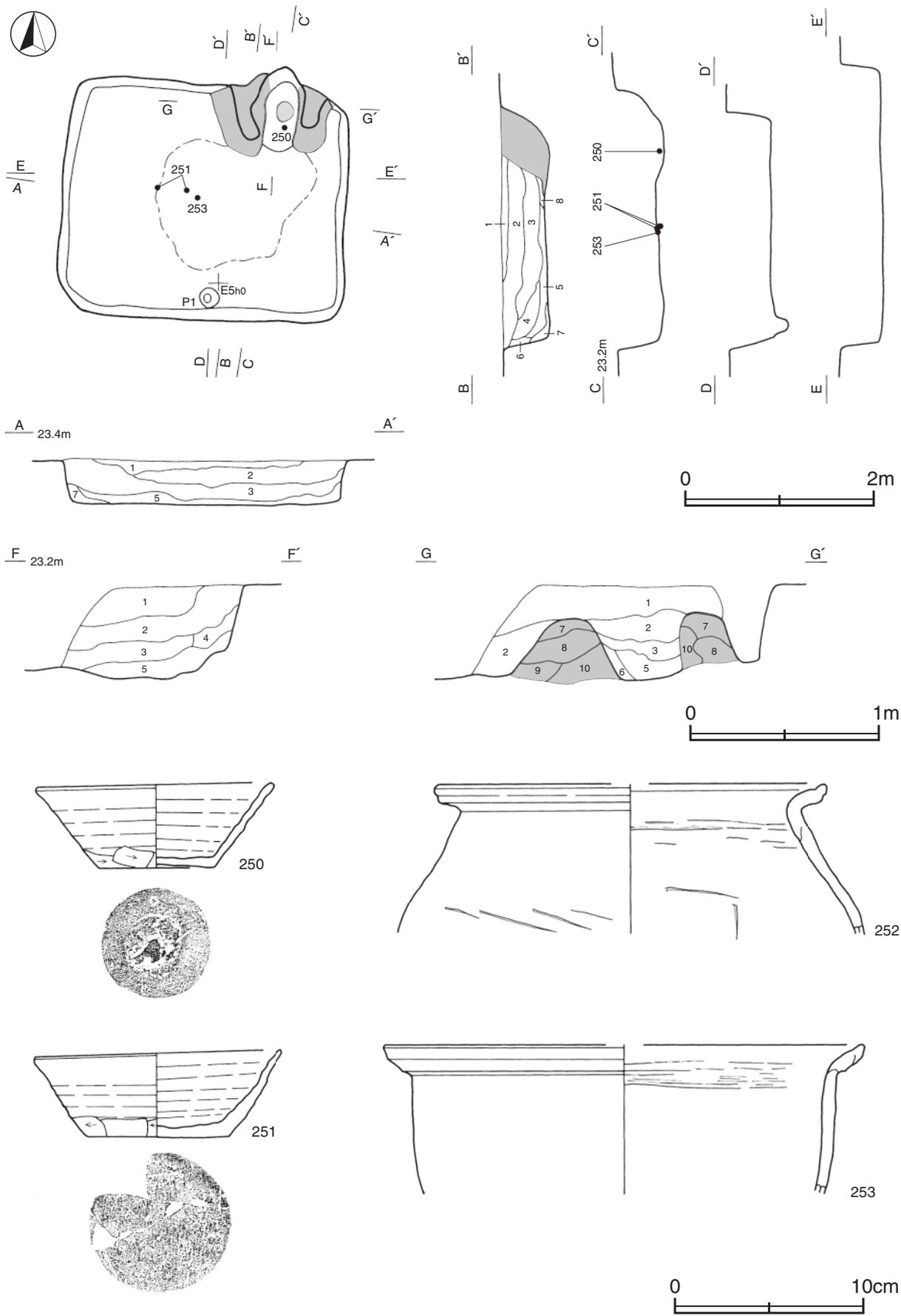
第149号住居跡（第125図）

位置 調査区中央部のE5g0区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸3.08m、短軸2.59mの隅丸長方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は40～48cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで94cmで、燃焼部幅は36cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第7～10層を積み上げて構築されている。火床部は床面から6cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に17cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜し奥壁で直立している。第2～6層は、袖部及び天井部の崩落土である。



第 125 图 第 149 号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1 暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗 赤 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化物微量
2 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量	7 暗 褐 色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗 赤 褐 色	焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量	8 褐 色	ロームブロック中量
4 暗 赤 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量	9 色	ロームブロック中量, 砂質粘土粒子少量
5 暗 赤 褐 色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	10 褐 色	ロームブロック中量, 砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット 深さ17cmで、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗 褐 色	ロームブロック中量
2 暗 褐 色	ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量	7 暗 褐 色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量
3 暗 褐 色	ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子微量	8 暗 褐 色	ローム粒子中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック微量
4 暗 褐 色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量		
5 暗 褐 色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片145点(坏8, 甕類136, 甌1), 須恵器片55点(坏44, 高台付坏1, 蓋3, 甕類7)のほか、鉄滓1点(60.8g)が、中央部の覆土下層を中心に出土している。250は竈の覆土下層から逆位の状態で出土している。252は竈の覆土中から出土している。251・253は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。

第149号住居跡出土遺物観察表(第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
250	須恵器	坏	12.3	4.6	6.1	長石・石英	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ナデ	竈覆土下層	95% PL43
251	須恵器	坏	13.2	4.7	7.6	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向のヘラ削り	覆土下層	70%
252	土師器	甕	[20.6]	(8.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ 輪積痕	竈覆土中	10%
253	土師器	甌	[25.6]	(8.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	10%

第154号住居跡(第126～128図)

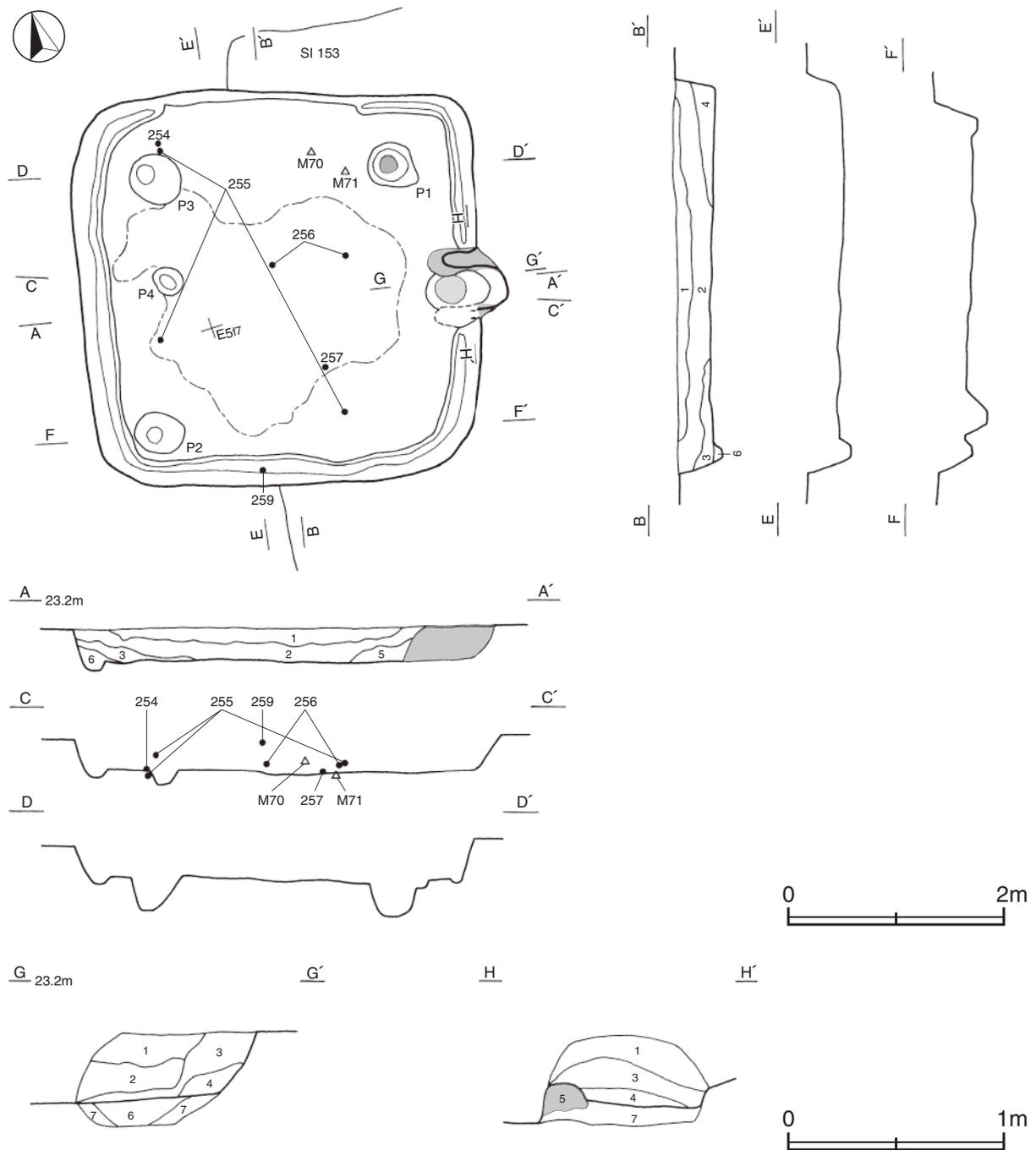
位置 調査区中央部のE5e7区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第153号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.78m, 短軸3.72mの隅丸方形で、主軸方向はN-108°-Eである。壁高は28～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。北壁の一部を除く壁下には壁溝が巡っている。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで78cmで、燃焼部幅は左袖部しか遺存していないため、28cmしか確認できなかった。袖部は、床面を12cm掘りくぼめた部分にロームや焼土のブロックを含んだ第6・7層を埋土し、その上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第5層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に25cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。



第 126 図 第 154 号住居跡実測図

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|----------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量, 砂質粘土粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量, ロームブロック微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | | |

ピット 4か所。P1～P3は深さ19～32cmで、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P4は深さ13cmで、西壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P1の底面には、柱のあたりとみられる円形の硬化範囲が認められる。

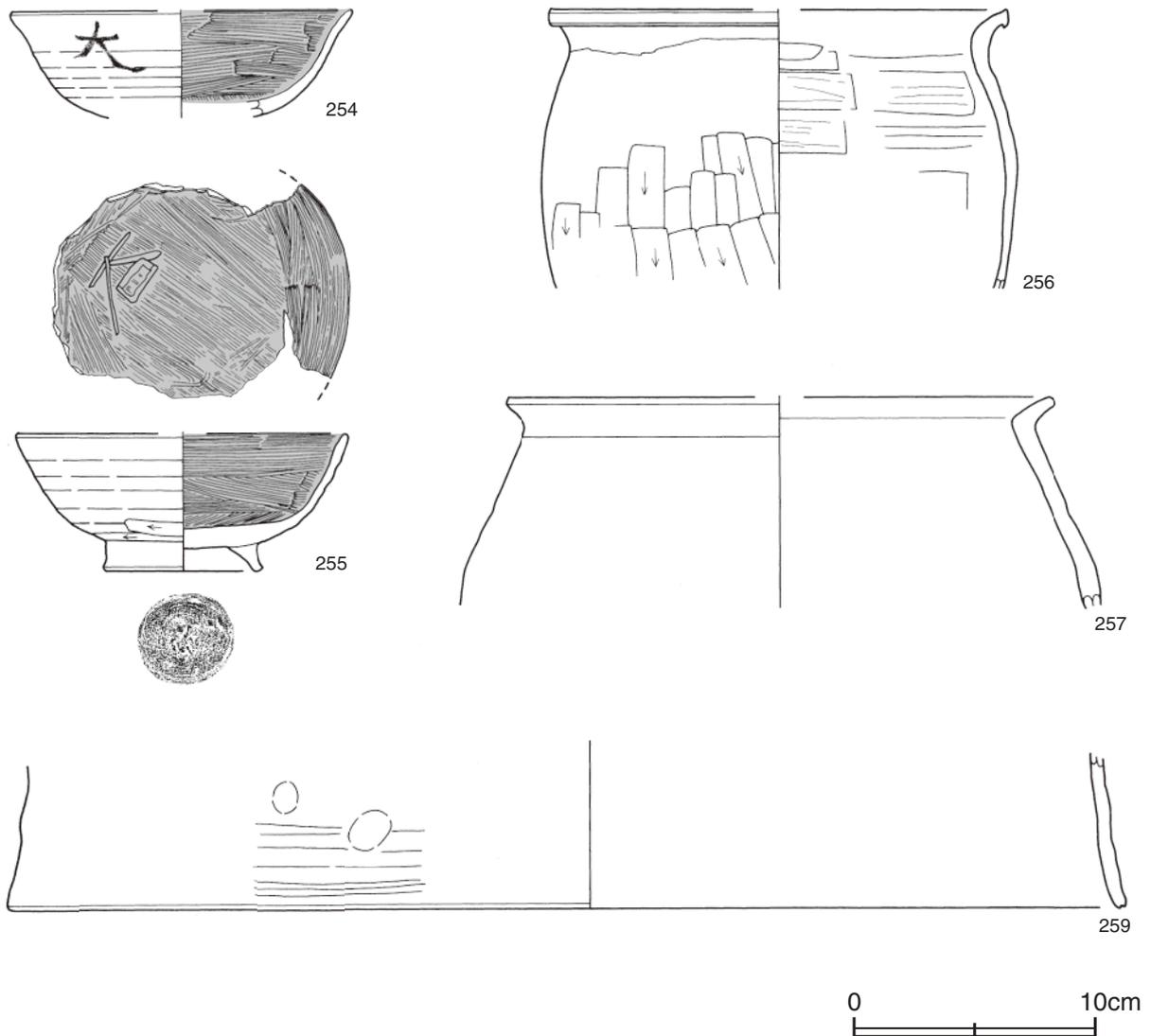
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

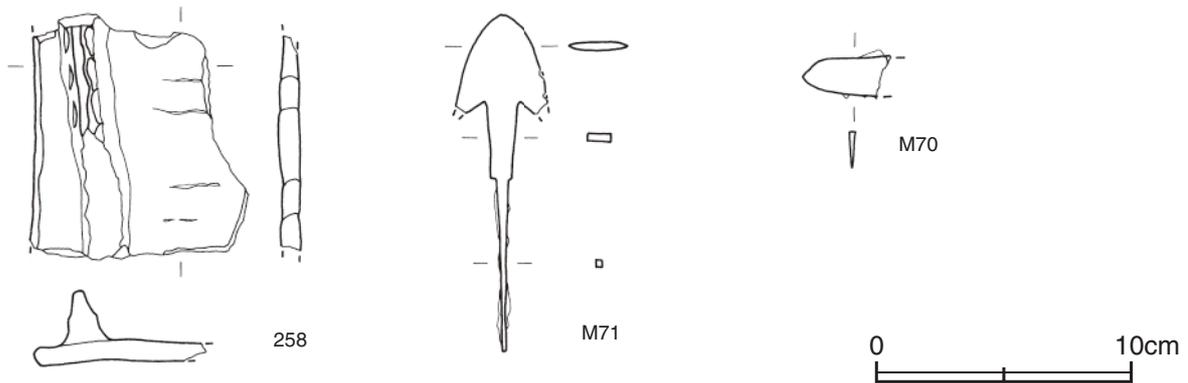
- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂質粘土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 599点 (坏 64, 高台付碗 11, 甕類 524), 須恵器片 180点 (坏 101, 高台付坏 3, 蓋 19, 高盤 1, 甕類 55, 甗 1), 土師質土器片 2点 (置き竈), 鉄製品 2点 (刀子, 鋏) のほか, 炭化材 1点, 種子 (桃) 1点 が, 北半部の覆土下層を中心に出土している。254 は北西部, 256 は中央部, 257 は南部, M 70 は北部の覆土下層, M 71 は北部の床面からそれぞれ出土している。255 は北西部と西部と南東部の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。258 は覆土中, 259 は南部壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9世紀後葉に比定できる。



第 127 図 第 154 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 128 図 第 154 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 154 号住居跡出土遺物観察表 (第 127・128 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
254	土師器	坏	[14.2]	(4.5)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き 体部外面に墨書「大」	覆土下層	30% PL43
255	土師器	高台付碗	[13.6]	5.8	6.4	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 高台貼り付け 内面に刻書「大口」	覆土中層~下層	80% PL43
256	土師器	甕	[19.2]	(11.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	10%
257	土師器	甕	[22.8]	(8.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	覆土下層	10%
258	土師質土器	置き竈	-	(8.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外・内面輪積痕を残すナデ 鋸部指頭痕	覆土中	10%
259	土師質土器	置き竈	-	(6.5)	[46.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面輪積痕を残すナデ 指頭痕 内面ナデ	覆土上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M70	刀子	(34)	1.5	0.2	(3.10)	鉄	刃部断面三角形	覆土下層	
M71	鎌	13.5	(3.7)	0.3	(16.3)	鉄	ほぼ完形 鎌身部三角形 断面両丸 竈被部断面長方形 茎部断面方形	床面	PL51

第 155 号住居跡 (第 129 図)

位置 調査区北部の D 6 i3 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 150 号住居跡を掘り込み, 第 26 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西部を第 26 号溝に掘り込まれているため, 南北軸は 2.17 m で, 東西軸は 2.52 m しか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定できる。主軸方向は N - 2° - W である。壁高は 9 ~ 16 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 6 か所。P 1 ~ P 6 は深さ 19 ~ 31 cm で, いずれも性格不明である。

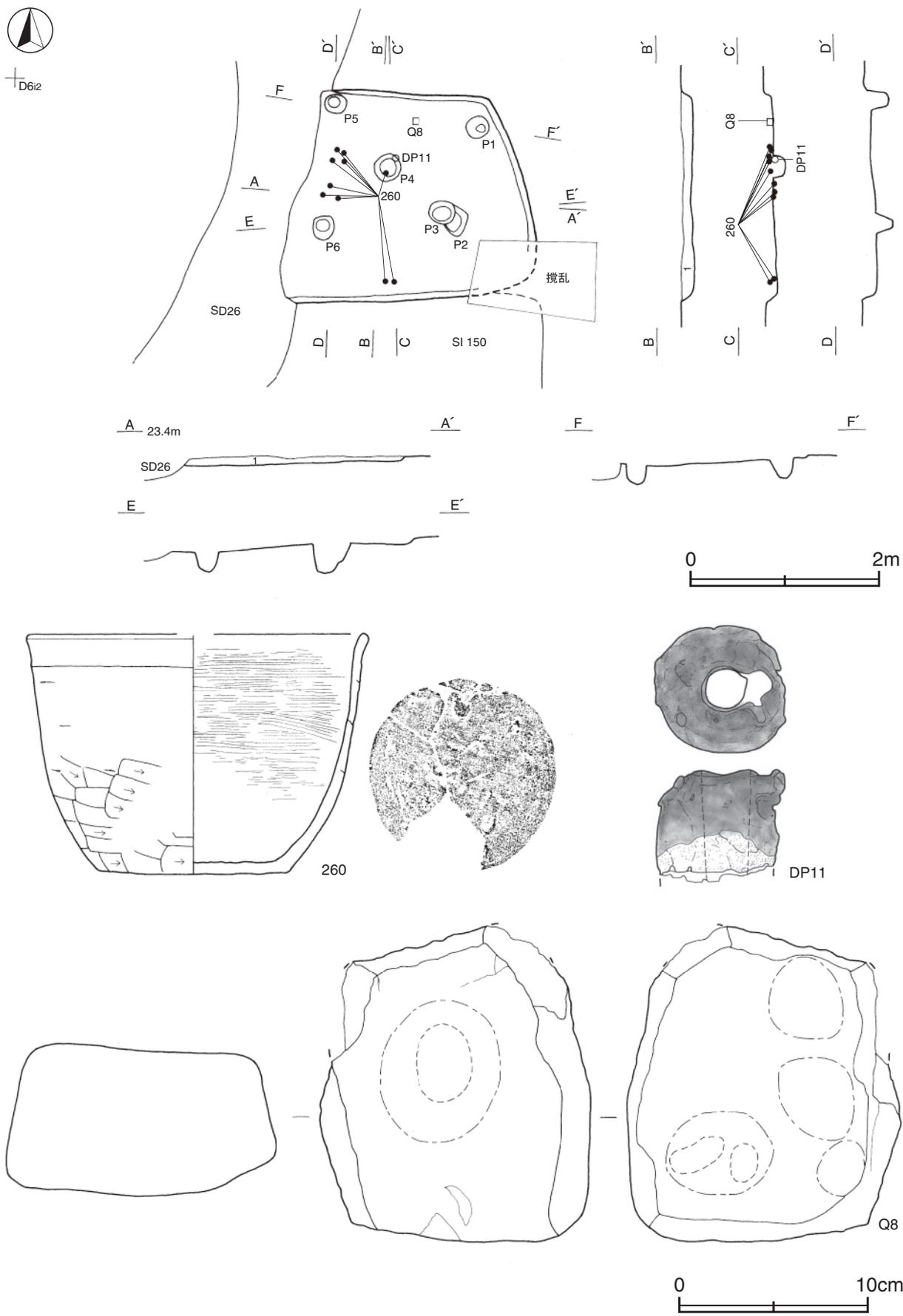
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 23 点 (坏 2, 鉢 4, 甕類 17), 須恵器片 11 点 (坏 6, 甕類 5), 土製品 1 点 (羽口), 石器 1 点 (金床石) が出土している。260 は西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。DP11 は P 4 の覆土上層, Q 8 は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。また, 細片で図示できないが, 内面黒色処理が施された土師器坏片や縦位の平行叩きが施された須恵器甕片も覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世後半と考えられる。



第 129 图 第 155 号住居跡・出土遺物実測図

第 155 号住居跡出土遺物観察表 (第 129 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
260	土師器	鉢	[18.0]	13.0	10.2	長石	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半輪積痕を残すナデ 下半ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	50%

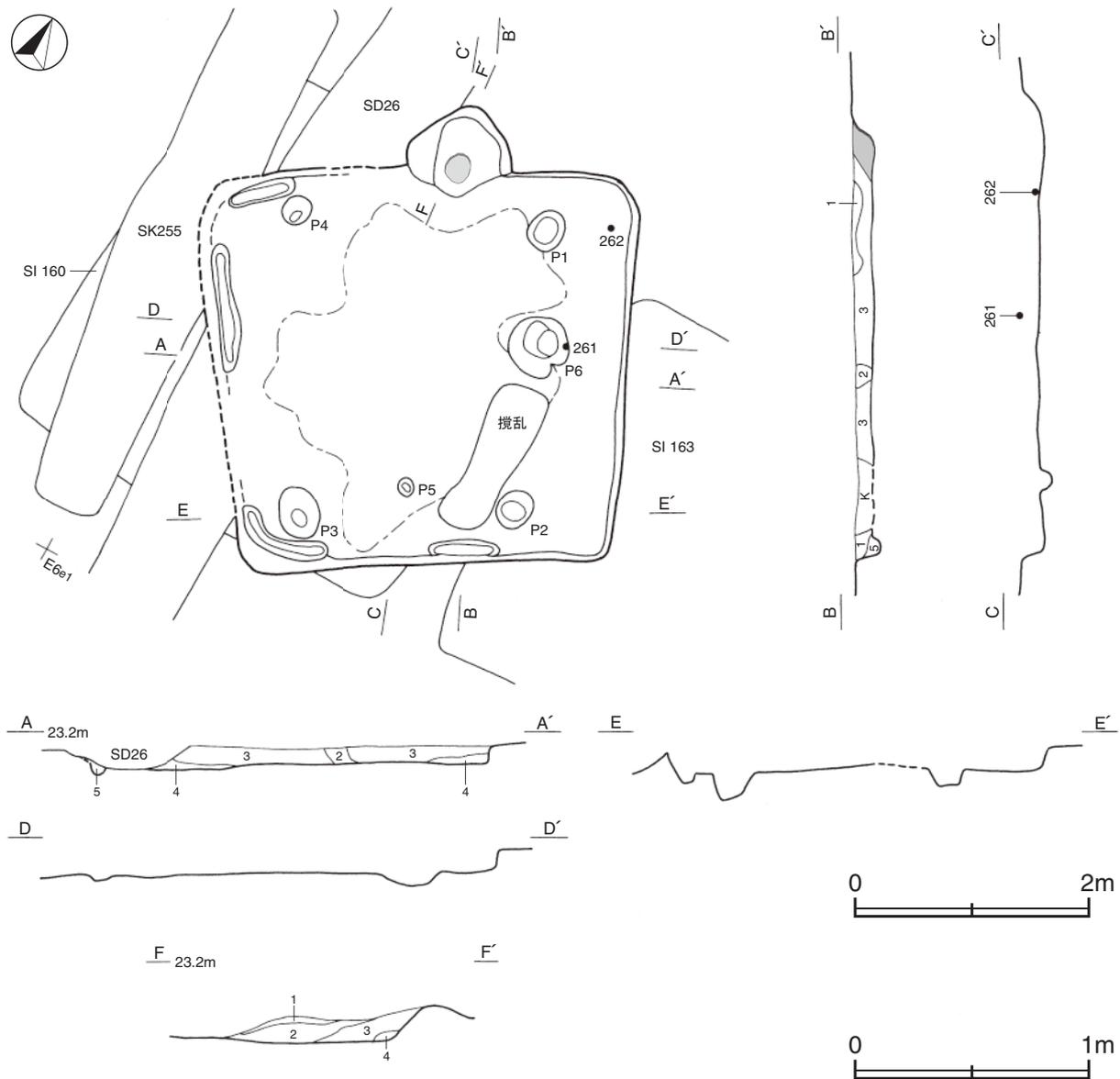
番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP11	羽口	(6.1)	6.9	22~26	(200)	長石・石英・細礫	先端部のみ遺存 溶融物付着	P 4 覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 8	金床石	17.0	14.6	8.2	(3320)	砂岩	殴打痕 2面 他は破断面	覆土下層	PL49

第 156 号住居跡 (第 130・131 図)

位置 調査区中央部の E 6 d1 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 160・163 号住居跡を掘り込み, 第 26 号溝, 第 255 号土坑に掘り込まれている。



第 130 図 第 156 号住居跡実測図

規模と形状 長軸 3.67 m，短軸 3.37 m の方形で，主軸方向は N - 29° - W である。壁高は 14 ~ 19cm で，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。西・南コーナー部と南東壁の一部の壁下には壁溝が巡っている。

竈 北西壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 80cm で，燃烧部幅は 54cm である。袖部は遺存しない。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 54cm 掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック中量，炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック中量
- 4 極暗赤褐色 焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 6 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 18 ~ 25cm で，硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 5 は深さ 12cm で，南東壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6 は深さ 15cm で，覆土上層に焼土ブロックを中量含み，表面は硬化している。性格は不明である。

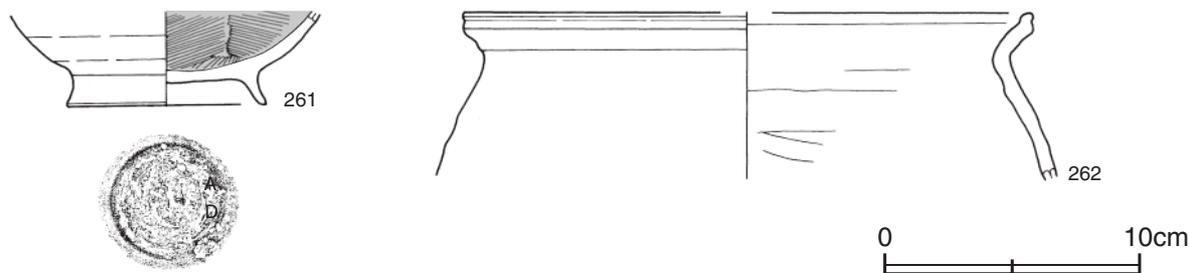
覆土 5 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ，不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 198 点（坏 34，高台付椀 2，甕類 161，甌 1），須恵器片 74 点（坏 34，蓋 1，瓶類 1，甕類 38）のほか，瓦片 1 点，鉄滓 1 点（4.96 g），鍛造剥片（0.07 g）が，竈前と南東部の覆土中層から下層にかけて出土している。262 は北コーナー部の覆土下層，261 は東部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 131 図 第 156 号住居跡出土遺物実測図

第 156 号住居跡出土遺物観察表（第 131 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
261	土師器	高台付椀	-	(3.7)	7.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け	覆土中層	35%
262	土師器	甕	[22.4]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	10%

第 157 号住居跡（第 132・133 図）

位置 調査区北部の D 5 i 0 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 3.58 m，短軸 3.40 m の方形で，主軸方向は N - 99° - E である。壁高は 32 ~ 47cm で，直立している。

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いて壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 2か所。竈1は東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、燃焼部幅は60cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に黄灰色砂質粘土混じりのロームを主体とした第8・9層を積み上げて構築されている。火床部は床面を20cm掘りくぼめた部分に、ローム粒子や焼土ブロックを含んだ第10・11層が埋土されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に62cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。奥壁にはロームブロックを多く含んだ黄褐色土の第12層を貼り付けて補強している。第1～6層は、袖部及び天井部の崩落土である。竈2は北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで117cmで、燃焼部幅は58cmである。袖部は黄灰色砂質粘土を主体とした第6層を積み上げて構築された右袖部が遺存するだけである。袖部の内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に73cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。竈2の遺存状態が悪いことや左袖部まで壁溝が掘り込まれていることから、竈2から竈1へ作り替えられている。

竈1土層解説

1 黒褐色	ローム粒子多量, 黄灰色砂質粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	6 赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子多量
2 黒褐色	ローム粒子多量, 黄灰色砂質粘土ブロック少量, 焼土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量
3 赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子多量	8 暗褐色	ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子多量, 黄灰色砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子微量	9 黄灰色	ローム粒子多量, 黄灰色砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	10 黒褐色	焼土ブロック多量
		11 暗褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
		12 黄褐色	ロームブロック多量

竈2土層解説

1 黒褐色	ロームブロック多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子多量, 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 明褐色	ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量	6 黄灰色	黄灰色砂質粘土ブロック多量

ピット 5か所。P1～P4は深さ6～23cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P5は深さ10cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

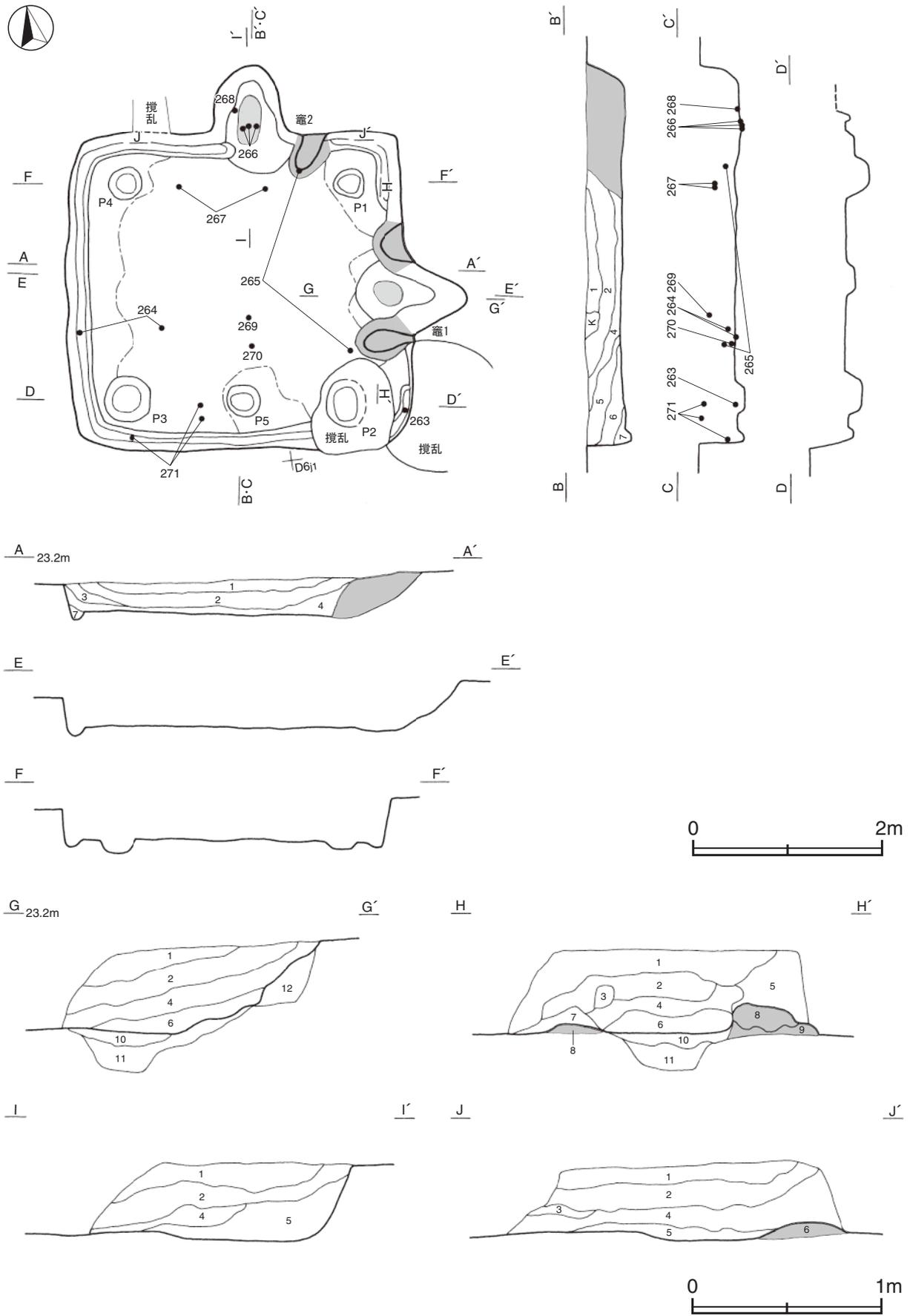
覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

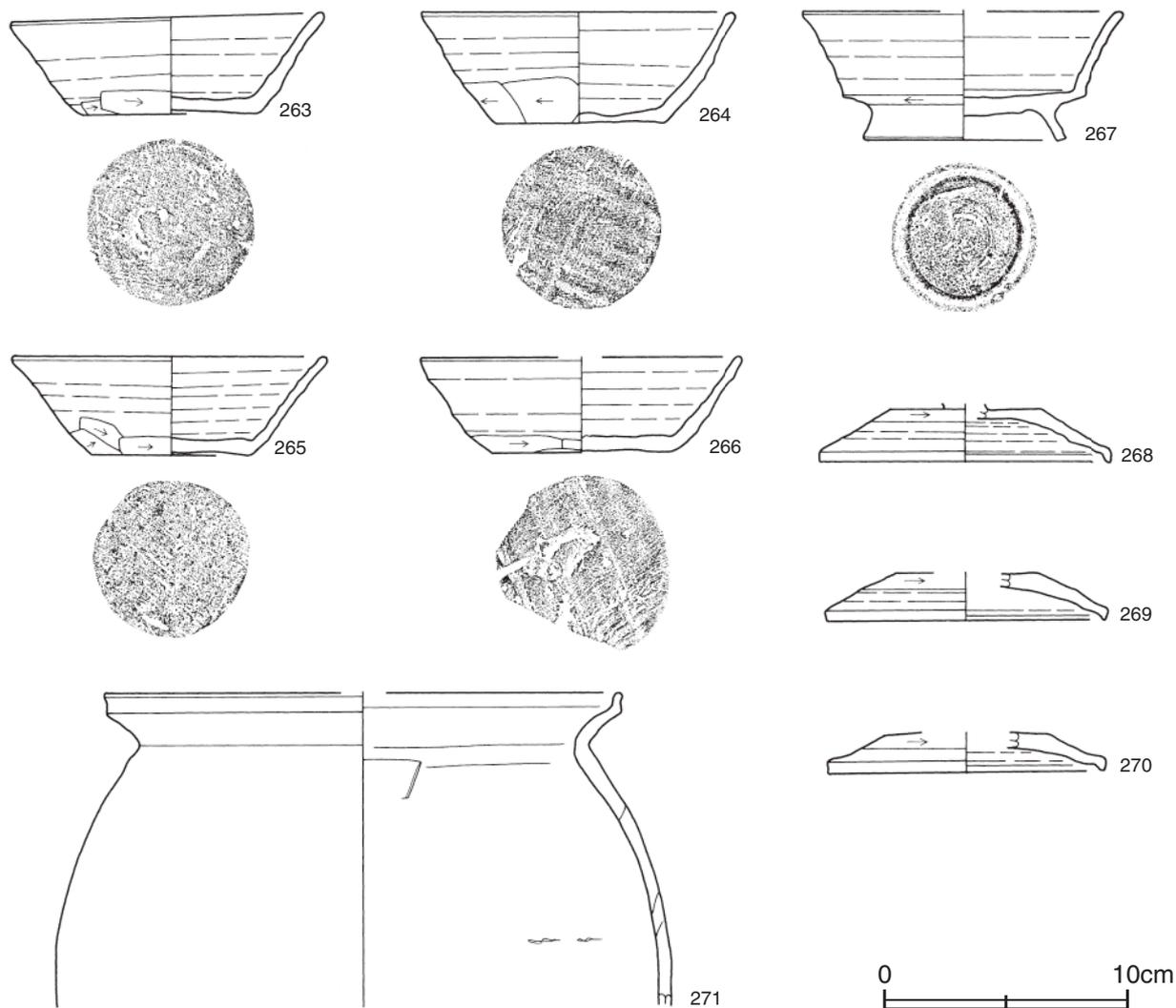
1 黒褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片114点(坏1, 高台付碗1, 甕類111, 甑1), 須恵器片61点(坏52, 高台付坏1, 蓋3, 盤1, 甕類3, 甑1)のほか、鉄滓1点(10.7g)が、全面の覆土上層から下層にかけて出土している。また、混入した縄文土器片3点(深鉢)も出土している。263は南東部壁際, 264は西部の覆土下層からそれぞれ出土しており、いずれもほぼ完形であることから廃絶時に遺棄されたものと考えられる。265は北部と南東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。270は中央部の覆土下層から出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。266は竈2の火床面, 268は竈2の覆土下層から, 267は竈2前, 269は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。271は南西部の覆土上層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第 132 图 第 157 号住居跡実測图



第 133 図 第 157 号住居跡出土遺物実測図

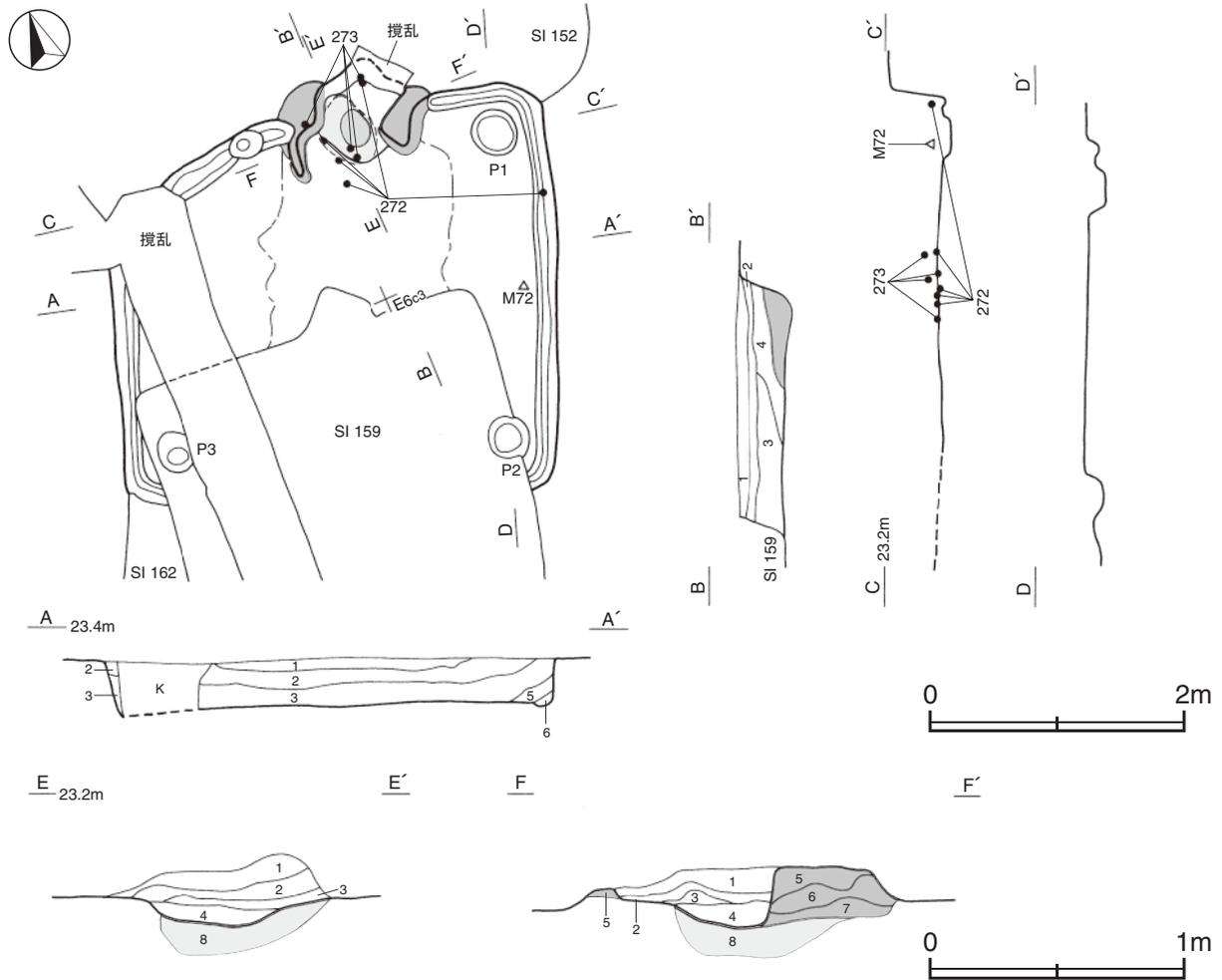
第 157 号住居跡出土遺物観察表 (第 133 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
263	須恵器	坏	12.7	4.2	7.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	95% PL43
264	須恵器	坏	12.9	4.6	6.9	長石・石英・白色粒子	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	95% PL43
265	須恵器	坏	12.8	4.2	6.5	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	60%
266	須恵器	坏	[13.2]	4.0	7.4	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈2火床面	35%
267	須恵器	高台付坏	[13.2]	5.4	7.8	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土中層	40%
268	須恵器	蓋	[12.0]	(2.4)		長石・石英・雲母	褐灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	竈2覆土下層	20%
269	須恵器	蓋	[11.4]	(1.9)		長石	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	覆土中層	15%
270	須恵器	蓋	[11.4]	(1.7)		長石・石英	黄灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	覆土下層	10%
271	土師器	甕	[21.2]	(13.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面輪積痕を残すナデ	覆土上層~下層	10%

第 158 号住居跡 (第 134・135 図)

位置 調査区北部の E 6 b3 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 152 号住居跡を掘り込み、第 159・162 号住居に掘り込まれている。



第 134 図 第 158 号住居跡実測図

規模と形状 南部を第 159 号住居に掘り込まれているため、東西軸は 3.52 m で、南北軸は 3.28 m しか確認できなかった。平面形は柱穴の配置から方形と推定でき、主軸方向は N - 22° - E である。壁高は 35 ~ 42cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。煙道部が攪乱を受けているため、規模は焚口部から煙道部までの 82cm しか確認できなかった。燃燒部幅は 51cm である。袖部は、床面を 24cm 掘りくぼめた部分にロームブロックを多く含んだ第 8 層を埋土し、その上に黄灰色砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第 5 ~ 7 層を積み上げ、補強材として土師器甕片を混入させて構築されている。火床部は床面から 10cm くぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 27cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|--|
| 1 黄灰色 焼土粒子・炭化粒子多量, ローム粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック多量, 黄灰色砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子多量, ローム粒子微量 | 7 暗褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子少量 |
| 3 明赤褐色 焼土ブロック多量, ローム粒子微量 | 8 褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子少量 | |
| 5 黄灰色 炭化物中量 | |

ピット 3か所。P1 ~ P3 は深さ 14 ~ 30cm で、配置から主柱穴である。

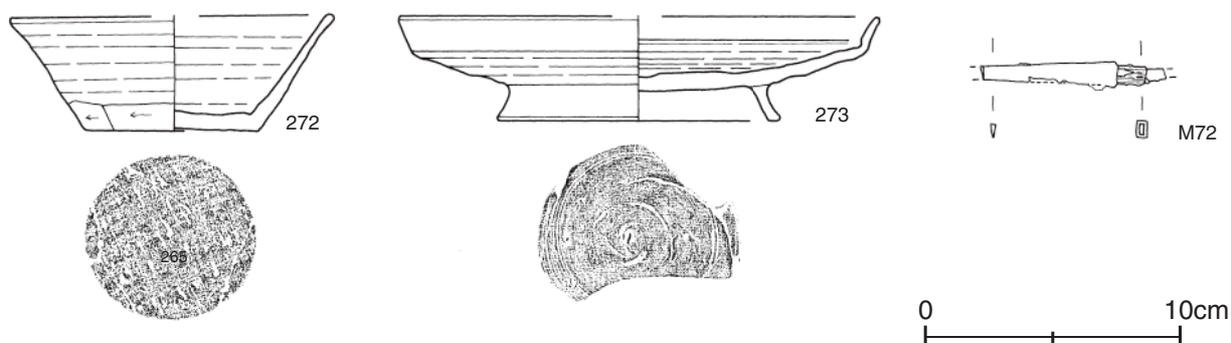
覆土 6層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |
| 4 暗褐色 | 黄灰色砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 121 点(坏 7, 甕類 114), 須恵器片 85 点(坏 57, 蓋 2, 盤 1, 甕類 25), 鉄製品 1 点(刀子)が, 竈前の覆土中層から下層を中心に出土している。また, 流れ込んだ縄文土器片 1 点(深鉢)も出土している。272 は竈と北東部壁際の覆土下層から出土した破片が接合したものである。273 は竈, M 72 は東部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 9 世紀後葉に比定できる第 159 号住居に掘り込まれていることや, 出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 135 図 第 158 号住居跡出土遺物実測図

第 158 号住居跡出土遺物観察表 (第 135 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
272	須恵器	坏	[12.5]	4.7	6.8	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈覆土下層 覆土下層	70% PL43
273	須恵器	盤	[18.8]	4.1	[11.1]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け	竈覆土下層	40% PL43

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 72	刀子	(7.3)	1.1	0.3	(3.38)	鉄	刃部一部欠損 断面三角形 茎部一部欠損 断面長方形 木質一部残存	覆土下層	PL50

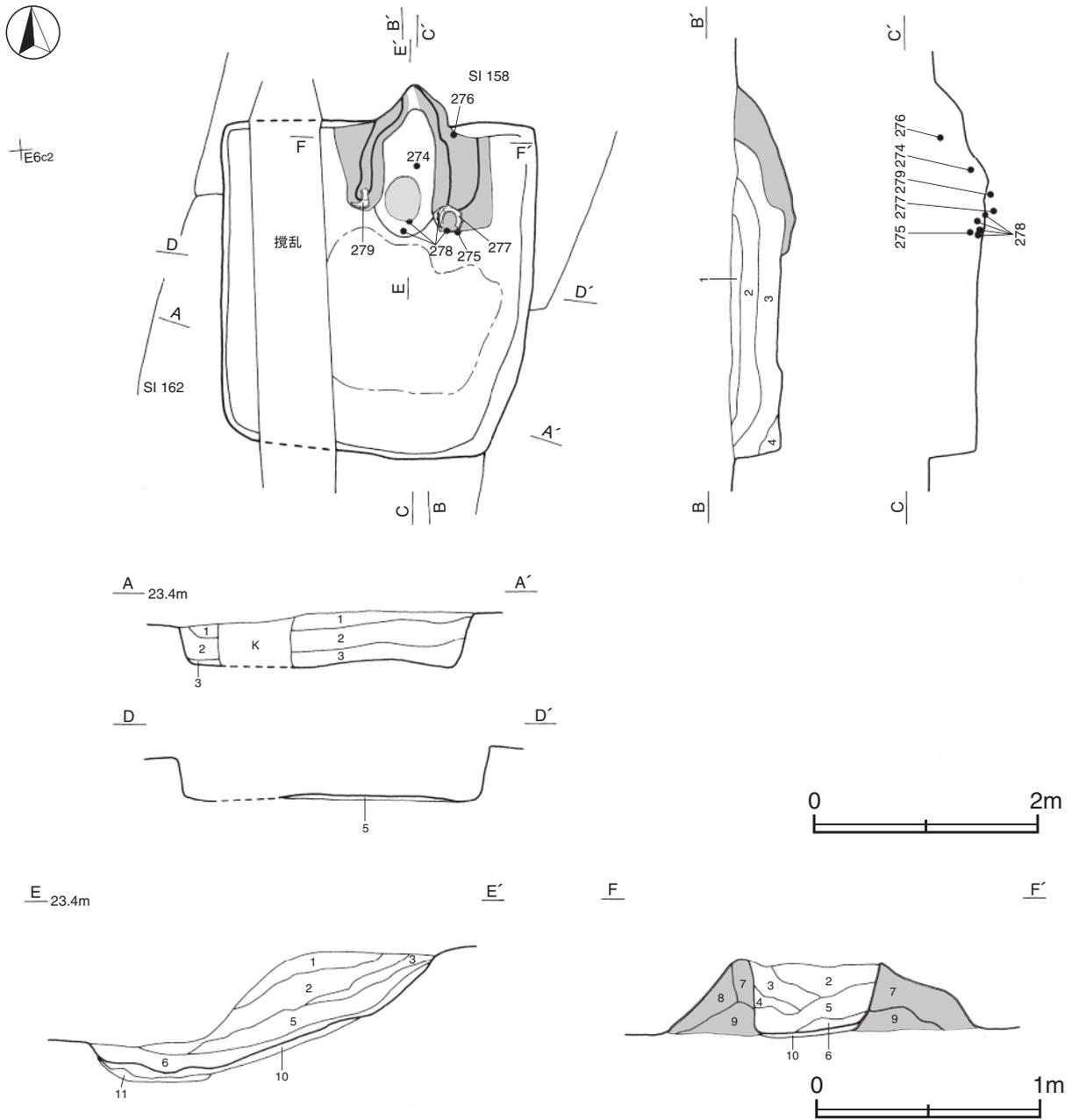
第 159 号住居跡 (第 136・137 図)

位置 調査区中央部の E 6 c 2 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 158・162 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.02 m, 短軸 2.83 m の方形で, 主軸方向は N - 4° - E である。壁高は 36 ~ 43cm で, 直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で, 中央部が踏み固められている。貼床は, ロームブロックを多く含んだ黒褐色土の第 5 層を埋土して構築されている。



第 136 図 第 159 号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 140cm で、 燃焼部幅は 47cm である。袖部は、床面と同じ高さの地山の上にロームブロックを主体とした第 7～9 層を積み上げ、 補強材として土師器甕の破片を使用して構築されている。火床部は床面を 18cm 掘りくぼめた部分に、 ロームブロックや焼土粒子を多く含んだ第 10・11 層が埋土されており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 38cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第 2～6 層は、 袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|---|----------|--------------------------|
| 1 黒 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 赤 褐 色 | 焼土ブロック多量 |
| 2 黒 褐 色 | 黄灰色砂質粘土ブロック多量, ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 黄 灰 色 | ロームブロック・焼土ブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 3 赤 褐 色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック多量 |
| 4 暗 褐 色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 暗 褐 色 | ロームブロック多量 |
| 5 暗 褐 色 | 黄灰色砂質粘土粒子多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 10 暗 褐 色 | 焼土粒子多量, 炭化物少量 |
| | | 11 暗 褐 色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |

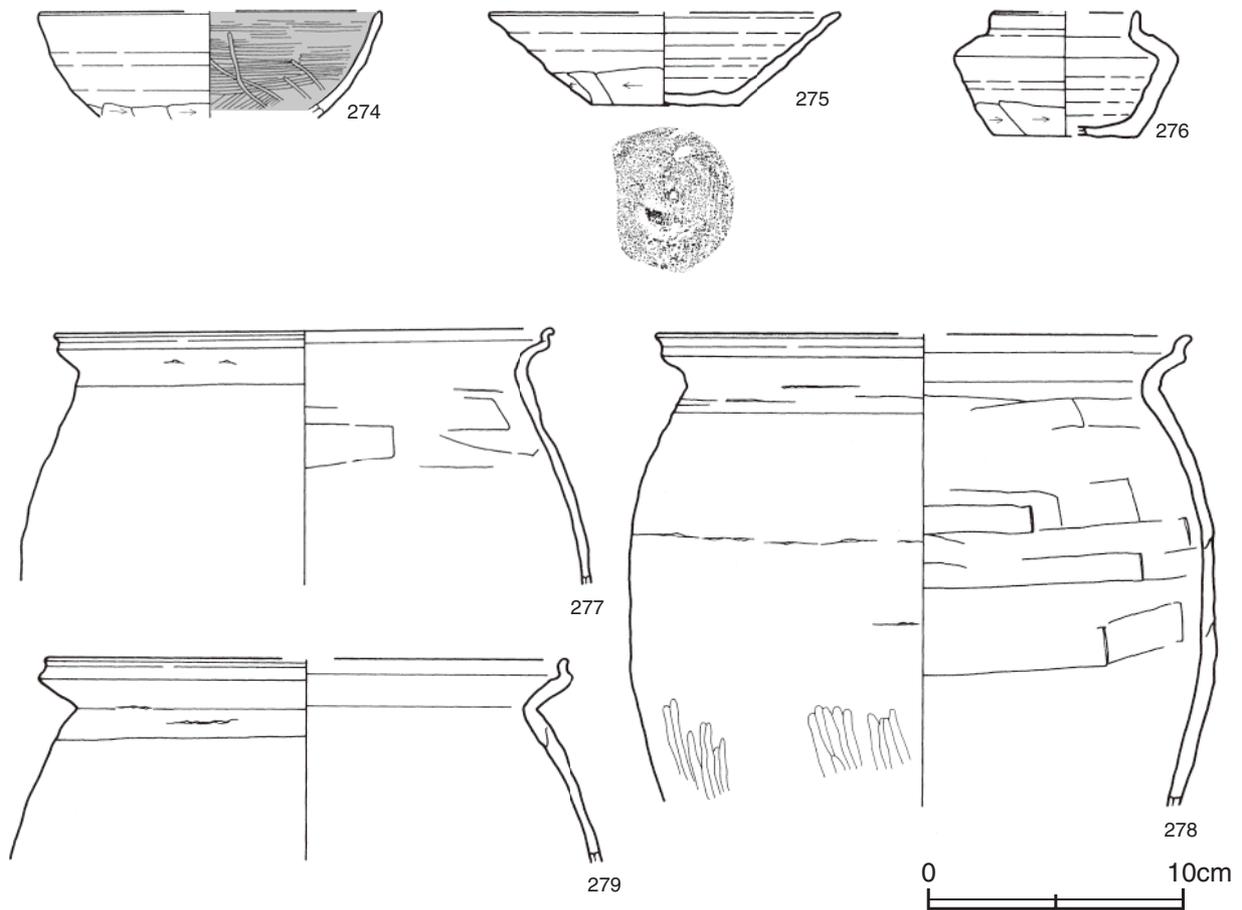
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第5層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| | | 5 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片 309点 (坏 29, 高台付碗 1, 高台付皿 1, 甕類 278), 須恵器片 68点 (坏 38, 高台付坏 1, 蓋 3, 盤 2, 小形壺 1, 甕類 23), 灰釉陶器片 1点 (長頸瓶) のほか, 炭化米 1粒が, 全面的覆土上層から下層にかけて出土している。また, 混入した磁器片 1点 (碗) も出土している。274 は竈, 275 は竈前の覆土下層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。277 ~ 279 は竈の袖部内からそれぞれ出土しており, いずれも袖部の補強材として使用されたものである。276 は竈の覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9世紀後葉に比定できる。



第 137 図 第 159 号住居跡出土遺物実測図

第 159 号住居跡出土遺物観察表 (第 137 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
274	土師器	坏	[13.4]	(4.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き	竈覆土下層	25%
275	須恵器	坏	[13.8]	3.7	5.8	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	40%
276	須恵器	小形壺	[5.6]	5.0	[5.8]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	竈覆土上層	30% PL43

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
277	土師器	甕	19.6	(10.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈袖部内	20%
278	土師器	甕	[21.0]	(18.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半輪積痕を残すナデ 下半ヘラ磨き 内面ヘラナデ	竈袖部内	25%
279	土師器	甕	[20.4]	(8.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈袖部内	15%

第160号住居跡（第138図）

位置 調査区中央部のE6d1区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第156号住居、第26号溝、第255号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分を第156号住居、第26号溝、第255号土坑に掘り込まれているため、東西軸は3.65mで、南北軸は硬化面や焼土の広がりから3.84mと推定できる。平面形は方形と推定でき、主軸方向はN-0°である。壁高は10～21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、北西部の一部で踏み固められているのが確認できた。また、北西部に焼土の広がりを確認した。

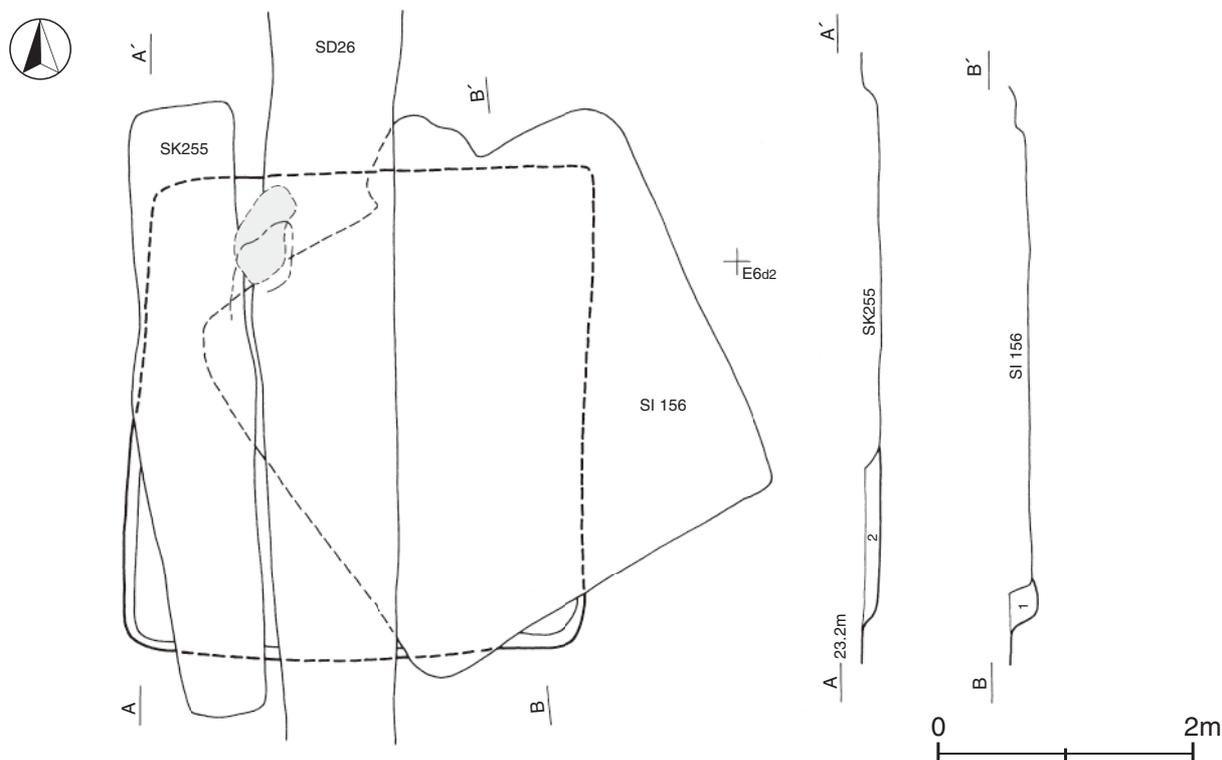
覆土 2層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片11点（甕類）、須恵器片3点（甕類）が散在した状態で出土している。いずれも細片のため図示できないが、口縁部のつまみ上げが顕著な土師器甕片や縦位の平行叩きが施された須恵器甕片が覆土中から出土している。

所見 時期は、10世紀前葉に比定できる第156号住居に掘り込まれていることや、出土土器から9世紀代と考えられる。



第138図 第160号住居跡実測図

第 161 号住居跡（第 139 ～ 141 図）

位置 調査区中央部の E 5 f0 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 267 号土坑を掘り込み，第 256 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.96 m，短軸 3.63 m の隅丸方形で，主軸方向は N - 13° - E である。壁高は 36 ～ 44cm で，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。南東部に焼土の広がりを確認した。

竈 2 か所。竈 1 は北東コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 102cm で，燃焼部幅は右袖部が攪乱を受けているため，火床面の範囲から 57cm と推定できる。袖部は，床面を 18cm 掘りくぼめた部分にロームや焼土のブロックを含んだ第 7 ～ 9 層を埋土し，その上に砂質粘土を主体とした第 6 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 52cm 掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。第 1 ～ 5 層は，袖部及び天井部の崩落土である。竈 2 は北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 82cm で，燃焼部幅は 35cm である。袖部は，右袖部しか遺存しないが，床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第 4 ・ 5 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており，火床面は赤変，硬化ともに弱い。煙道部は壁外に 68cm 掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。竈 2 から竈 1 へ作り替えられている。

竈 1 土層解説

1 灰黄褐色	砂質粘土粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	5 暗赤褐色	焼土ブロック中量，炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量	6 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量	7 暗赤褐色	焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
4 灰褐色	焼土ブロック少量，炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック少量，炭化粒子微量
		9 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

竈 2 土層解説

1 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	5 オリーブ褐色	ロームブロック中量，砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量		
3 暗赤褐色	焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量		
4 オリーブ褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量		

ピット 2 か所。P 1 は深さ 22cm で，硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 2 は深さ 23cm で，南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

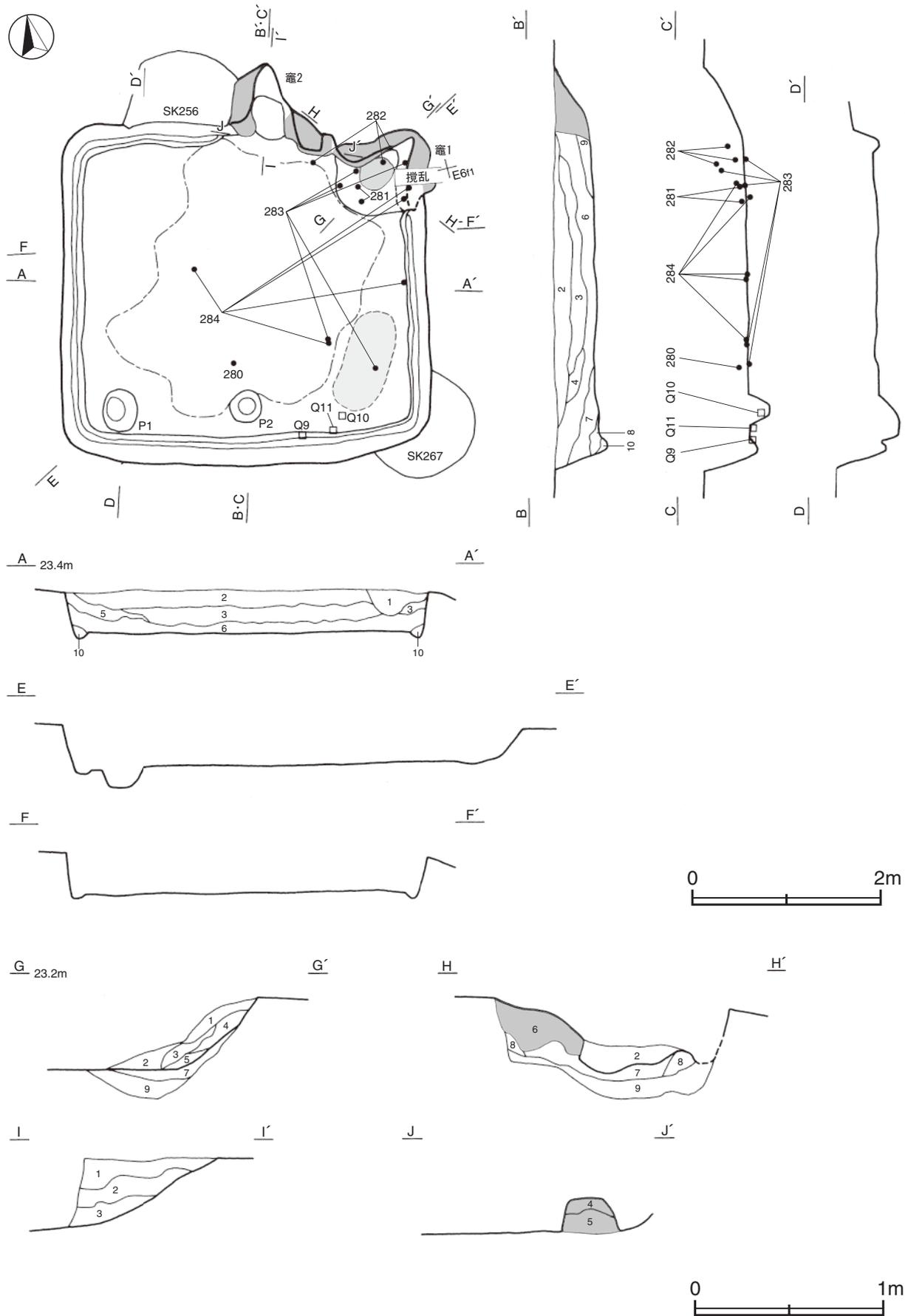
覆土 10 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

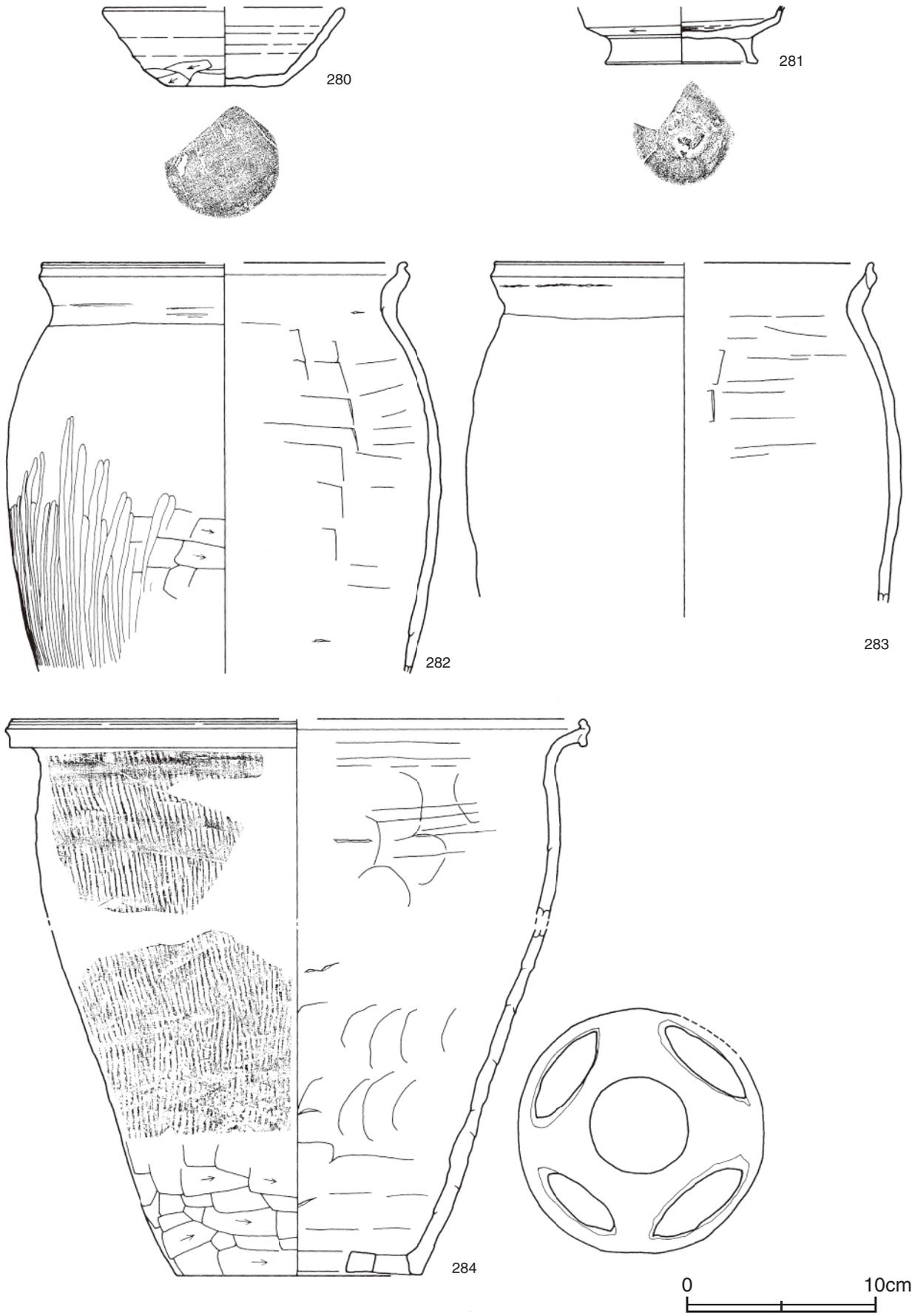
1 黒褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子中量，焼土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 233 点（坏 17，高台付椀 4，甕類 212），須恵器片 141 点（坏 81，高台付坏 1，蓋 6，甕類 52，甌 1），石器 3 点（砥石）が，東半部の覆土中層から下層にかけて出土している。また，竈の覆土中から鍛造剥片（5.0 g），炭化米 30 粒も出土している。280 は南部，281 は竈 1，Q 9 ～ Q 11 は南東部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。282 は竈 1 と北部の覆土中層，283 は竈 1 と南東部の覆土下層，284 は竈 1 と東部壁際，南東部の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

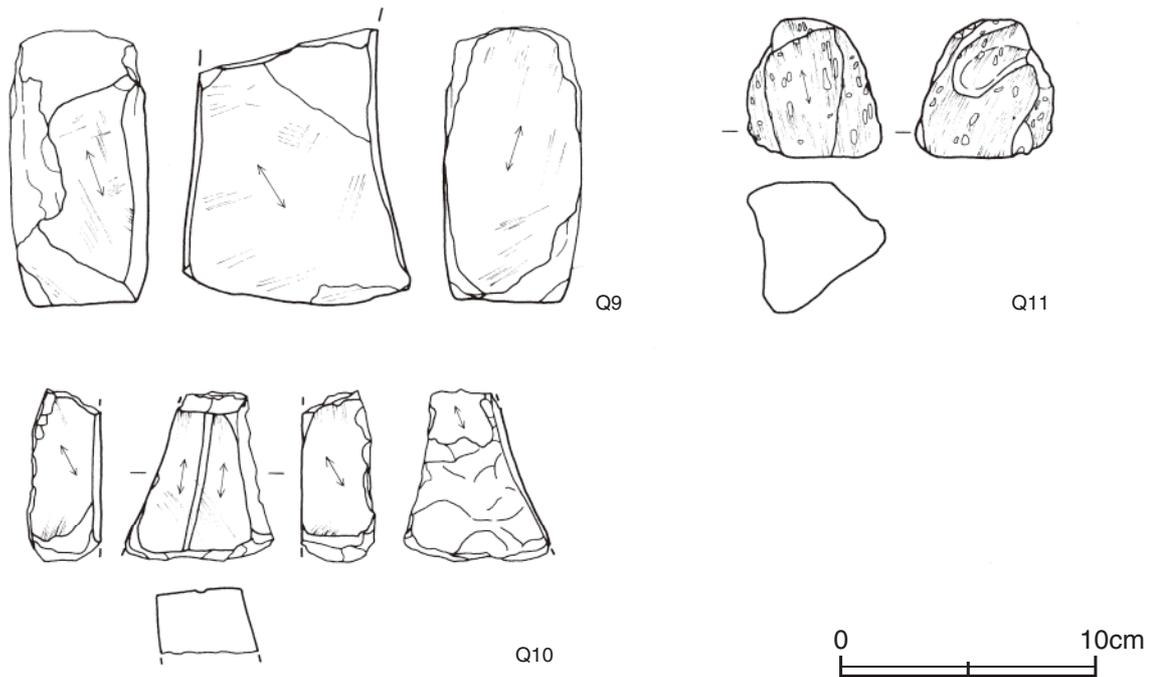
所見 時期は，出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 139 图 第 161 号住居跡実測图



第 140 图 第 161 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 141 図 第 161 号住居跡出土遺物実測図（2）

第 161 号住居跡出土遺物観察表（第 140・141 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
280	須恵器	坏	[12.7]	4.3	6.2	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	35%
281	須恵器	高台付坏	-	(3.1)	[8.0]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	竈1 覆土下層	30%
282	土師器	甕	[19.4]	(22.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き 内面ヘラナデ	竈1 覆土中層 覆土中層	30%
283	土師器	甕	[20.2]	(18.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈1 覆土下層 覆土下層	15%
284	須恵器	甕	[30.6]	[30.0]	13.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	黄灰	普通	体部縦位の平行叩き 内面無文の当て具痕を残すナデ 底部五孔式	竈1 覆土下層 覆土下層	40% PL43

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 9	砥石	(11.0)	9.0	(5.5)	(694)	凝灰岩	砥面3面 他は破断面	覆土下層	PL49
Q 10	砥石	(6.9)	(5.8)	(2.8)	(124)	凝灰岩	砥面4面うち1面に溝状の研磨痕 他は破断面	覆土下層	PL49
Q 11	砥石	5.5	5.4	5.2	36	軽石	砥面1面 裏面に指を添えた凹み痕有り	覆土下層	PL49

第 162 号住居跡（第 142・143 図）

位置 調査区中央部の E 6 c2 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 158・163 号住居跡を掘り込み，第 159 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.57 m，短軸 3.37 m の隅丸方形で，主軸方向は N - 13° - E である。壁高は 32 ~ 47cm で，外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で，中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されているが，第 159 号住居に掘り込まれている。袖部，火床部は遺存していないので規模は不明である。

ピット 7 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 10 ~ 12cm で，硬化面の広がりや配置から支柱穴である。P 5 は深さ 22cm で，南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7 はいずれも深さ 8cm で，性格不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長軸 80cm, 短軸 65cmの隅丸長方形である。深さは 16cmで, 底面は皿状で, 壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 2 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量

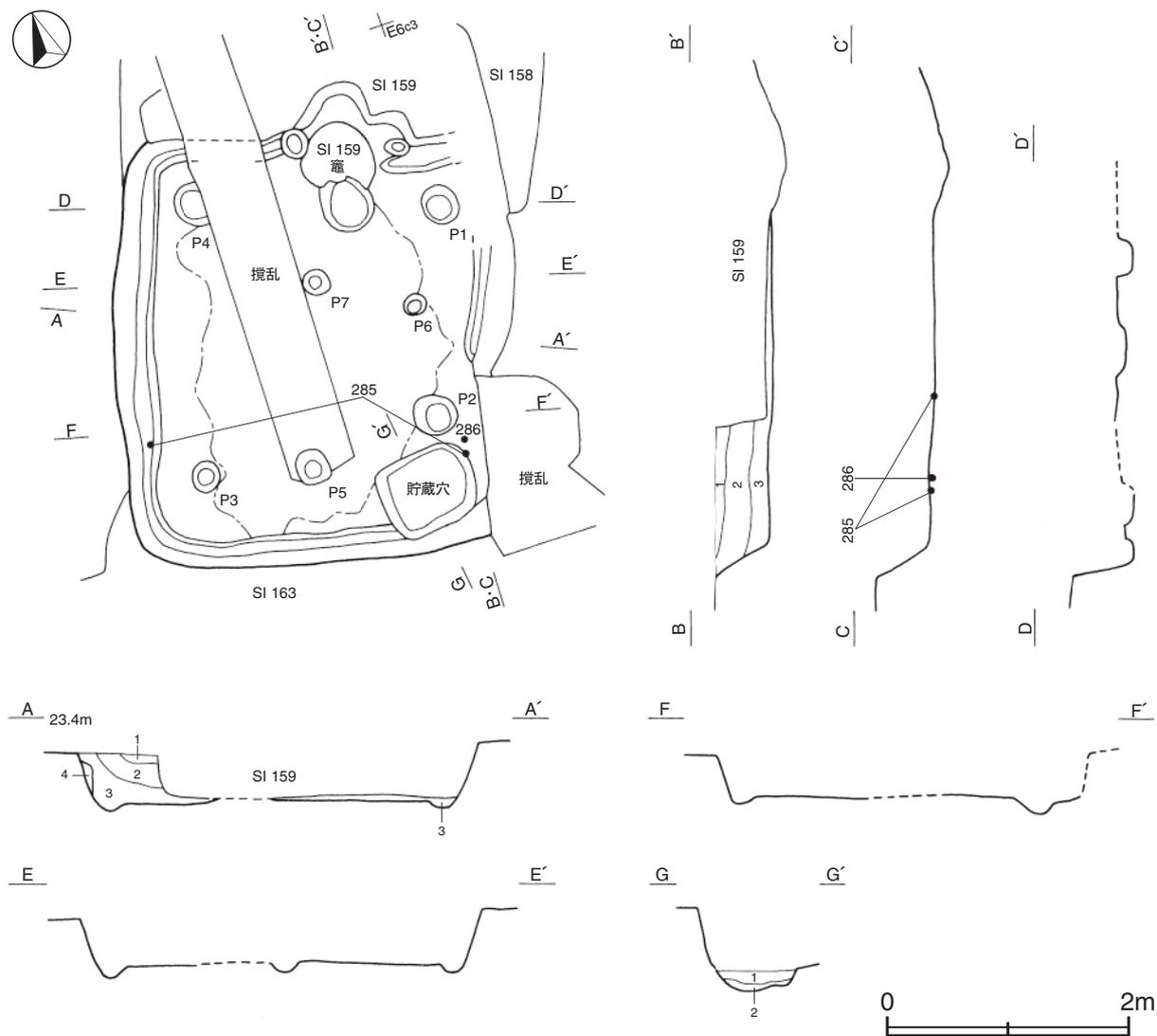
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

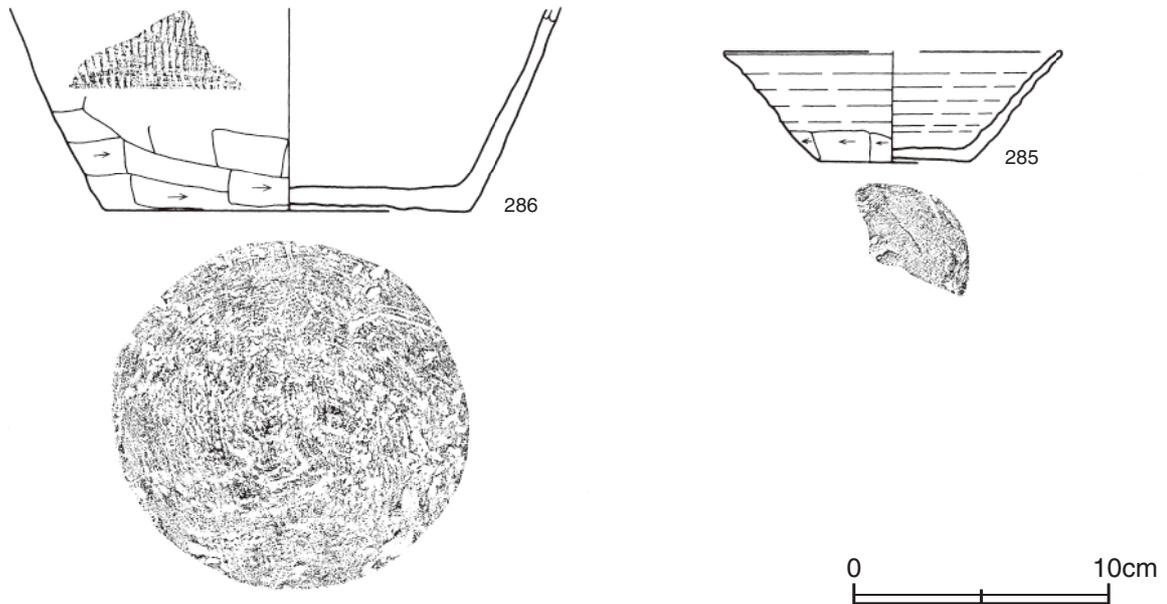
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 138 点 (坏 8, 甕類 130), 須恵器片 94 点 (坏 37, 甕類 57) のほか, 瓦片 1 点, 鉄滓 1 点 (13.8 g) が, 南西部の覆土上層から下層にかけて出土している。285 は南西部と南東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。286 は南東部の覆土下層から出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 9 世紀前葉に比定できる第 158 号住居跡を掘り込み, 9 世紀後葉に比定できる第 159 号住居に掘り込まれていることや, 出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 142 図 第 162 号住居跡実測図



第 143 図 第 162 号住居跡出土遺物実測図

第 162 号住居跡出土遺物観察表（第 143 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
285	須恵器	坏	[13.4]	4.4	[6.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	20%
286	須恵器	甕	-	(8.1)	14.6	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部縦位の平行叩き 下端ヘラ削り	覆土下層	15%

第 164 号住居跡（第 144・145 図）

位置 調査区北部の E 6 a2 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 152 号住居跡を掘り込み，第 26 号溝，第 257 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.35 m，短軸 3.16 m の隅丸方形で，主軸方向は N - 0° である。壁高は 18 ~ 29cm で，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。各壁の一部の壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁西寄りに付設されている。煙道部を第 257 号土坑に掘り込まれているため，規模は焚口部から煙道部までの 64cm しか確認できなかった。燃焼部幅は 58cm である。袖部は，床面と同じ高さの地山の上に黄灰色粘土を主体とした第 5・6 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 18cm 掘りくぼめた部分に，ロームや焼土のブロックを多く含んだ第 7 層が埋土されており，火床面は火を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量 | 5 黄灰色 | 黄灰色粘土ブロック・ローム粒子多量，焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子多量，炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック多量，炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量 | | |

ピット 4 か所。P 1 ~ P 3 は深さ 10 ~ 26cm で，硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 4 は深さ 20cm で，西部の中央に位置しているが，柱のあたりとみられる円形の硬化範囲が認められることから柱穴と考えられる。

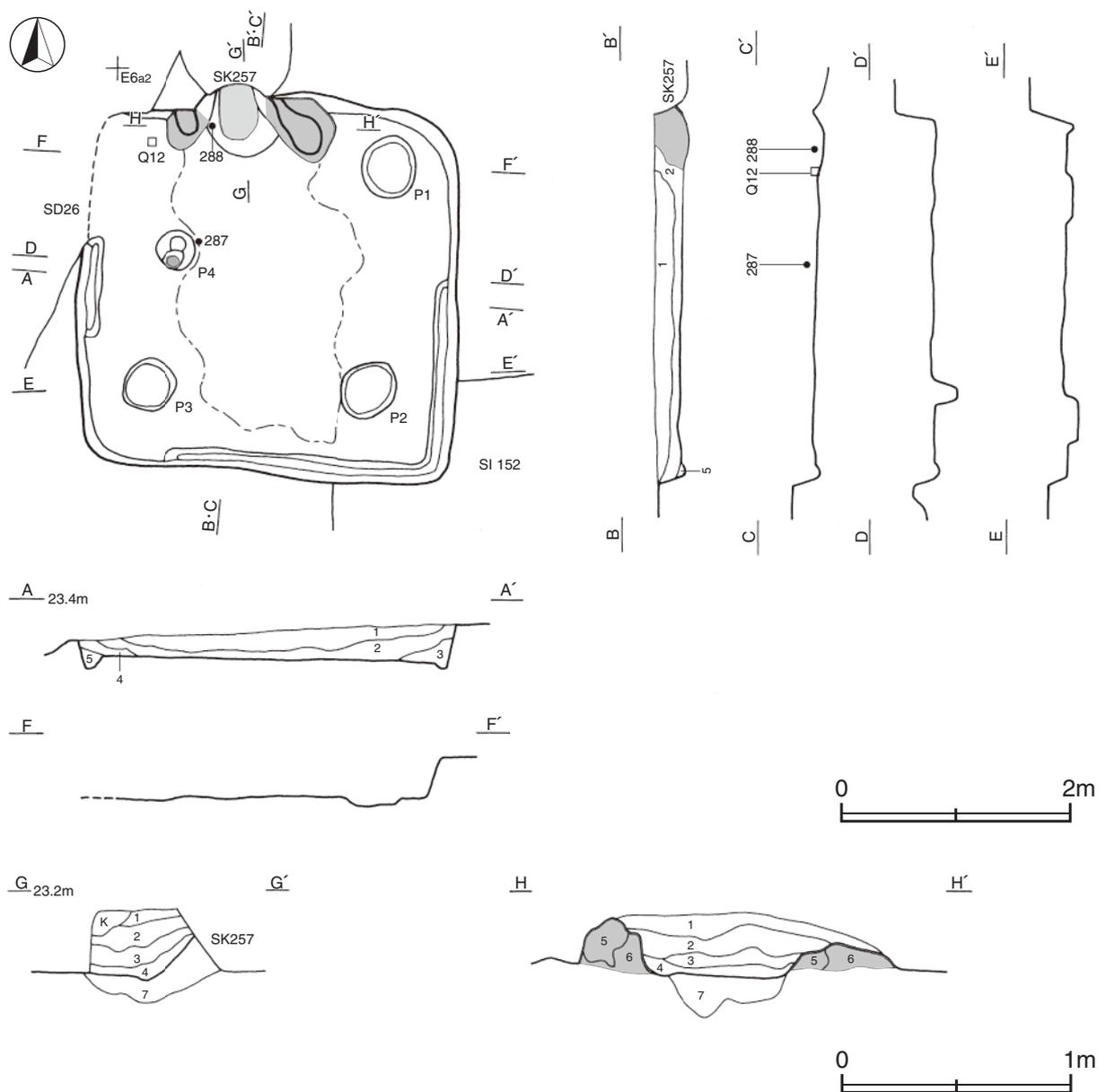
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

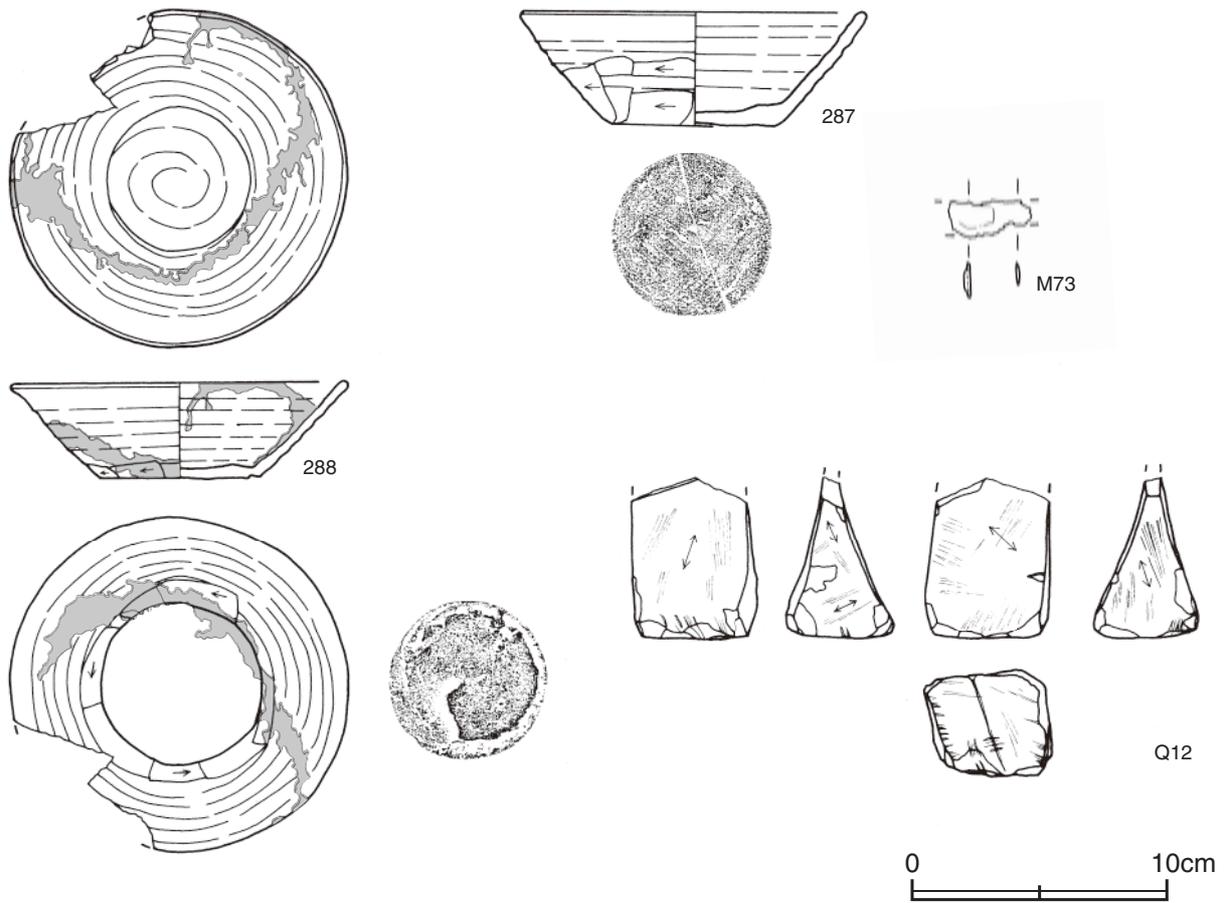
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量 | | |

遺物出土状況 土師器片 91 点 (坏 3, 甕類 88), 須恵器片 28 点 (坏 22, 甕類 6), 石器 1 点 (砥石), 鉄製品 1 点 (刀子) が散在した状態で出土している。また, 混入した縄文土器片 1 点 (深鉢) も出土している。287 は西部, 288 は竈の覆土下層からそれぞれ出土しており, いずれもほぼ完形であることから廃絶時に遺棄されたものと考えられる。Q 12 は北西部の覆土下層, M 73 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 144 図 第 164 号住居跡実測図



第 145 図 第 164 号住居跡出土遺物実測図

第 164 号住居跡出土遺物観察表（第 145 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
287	須恵器	坏	13.6	4.6	6.5	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向のヘラ削り	覆土下層	90% PL44
288	須恵器	坏	13.1	3.8	6.3	長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 体部外・内面に漆付着	竈覆土下層	90% PL44

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 12	砥石	(6.5)	5.0	4.2	(141)	凝灰岩	砥面5面うち2面に条線状の研磨痕 他は破断面	覆土下層	PL49

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 73	刀子	(3.3)	(1.5)	(0.08)	(1.78)	鉄	刃部一部遺存 腐蝕が激しい	覆土中	

第 165 号住居跡（第 146・147 図）

位置 調査区北部の E 6 a1 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 26 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南東部を第 26 号溝に掘り込まれているため，北東・南西軸は 3.34 m で，北西・南東軸は 3.10 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき，主軸方向は N - 25° - E である。壁高は 18 ~ 20cm で，外傾して立ち上がっている。壁溝内には，壁柱穴とみられる深さ 8 ~ 15cm の楕円形のピットが認められる。

床 ほぼ平坦である。大部分が攪乱を受けているため、硬化面は竈前と南東部の一部しか確認できなかった。遺存する壁の壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。竈前面が攪乱を受けているため、規模は焚口部から煙道部までの67cmしか確認できなかった。燃烧部幅は24cmである。袖部は、床面と同じ高さの地山の上にロームや焼土のブロックを主体とした第5・6層を積み上げ、補強材として土師器甕片を使用して構築されている。火床部は床面から6cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に33cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック少量 | 4 赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子多量 |
| 2 赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック少量 | 5 暗褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子多量 | 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック多量 |

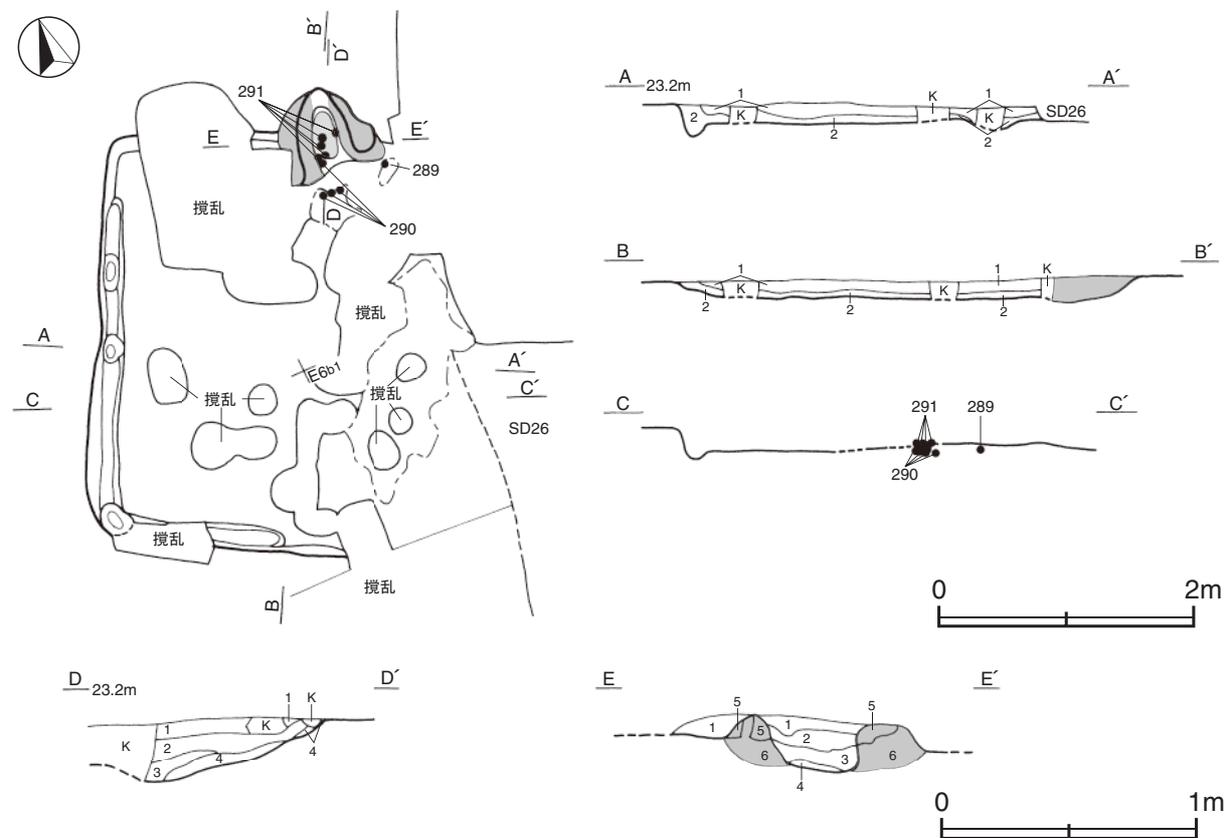
覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

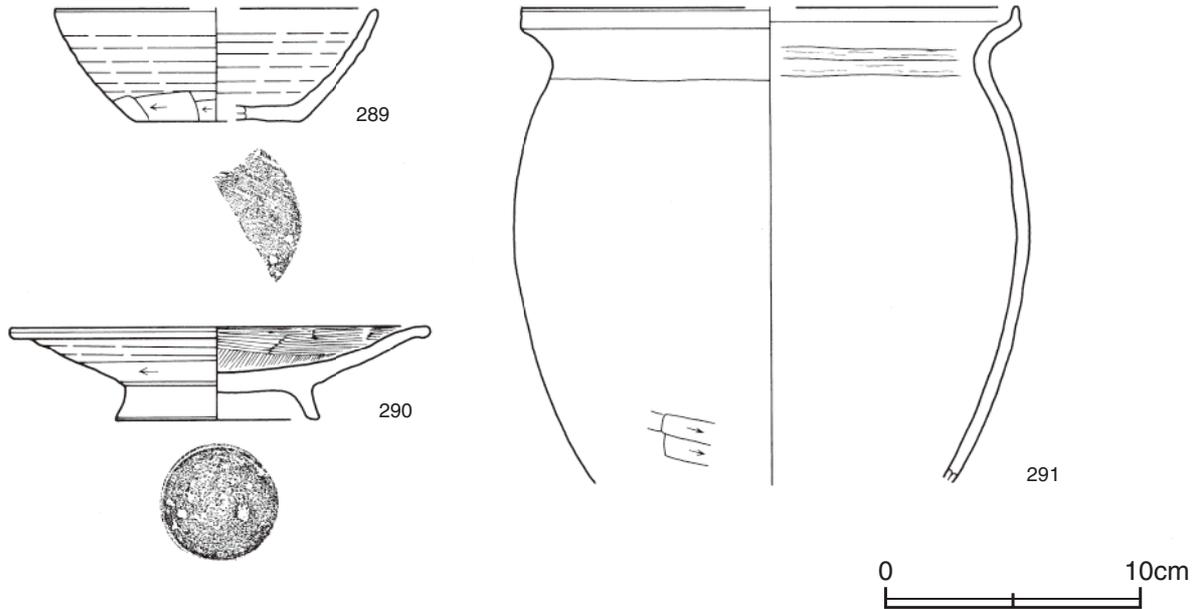
- | | |
|------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
|------------------------------|---------------------------------|

遺物出土状況 土師器片 105 点 (坏 15, 高台付皿 1, 甕類 89), 須恵器片 51 点 (坏 19, 高台付坏 1, 蓋 2, 甕類 29) のほか, 瓦片 1 点, 鉄滓 1 点 (14.3 g) が出土している。289・290 は竈前, 291 は竈の覆土下層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 146 図 第 165 号住居跡実測図



第 147 図 第 165 号住居跡出土遺物実測図

第 165 号住居跡出土遺物観察表 (第 147 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
289	須恵器	坏	[12.6]	5.0	[6.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	25%
290	土師器	高台付皿	16.4	3.7	7.8	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	80% PL44
291	土師器	甕	[19.6]	(18.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面摩滅が激しい	甕覆土下層	10%

第 169 号住居跡 (第 148 ~ 150 図)

位置 調査区南部の E 5 i 6 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 167 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 4.50 m、短軸 3.74 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 2° - W である。壁高は 32 ~ 43 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、ローム粒子を多く含んだ褐色土の第 8 層を埋土して構築されている。

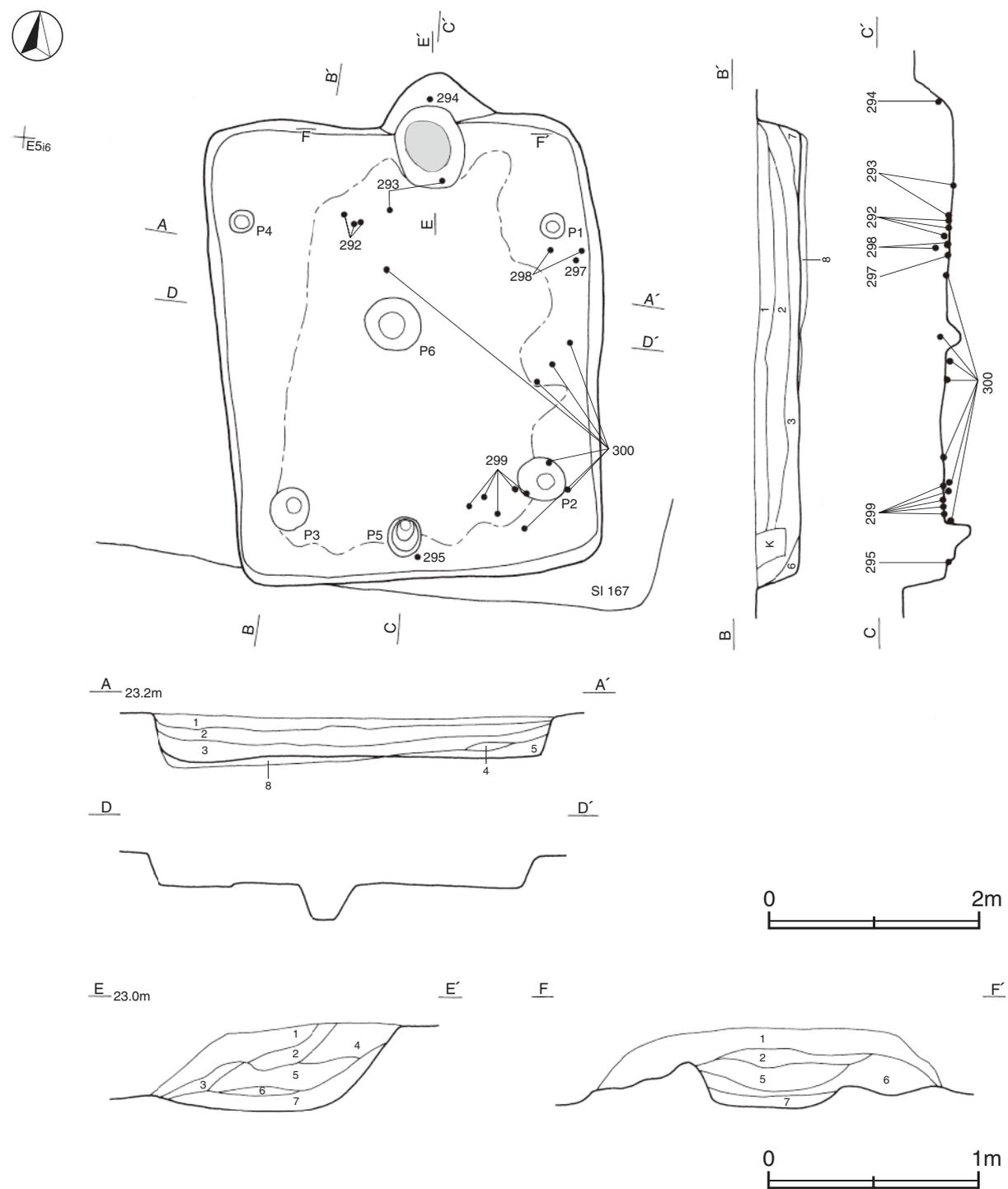
竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 112 cm で、燃焼部幅は 62 cm である。袖部は遺存しない。火床部は床面から 6 cm くぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 45 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第 1 ~ 7 層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量	5	灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
2	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	6	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3	暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量	7	極暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量
4	灰褐色	砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量			

ピット 6か所。P1～P4は深さ9～32cmで、規模や配置から支柱穴である。P5は深さ26cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ38cmで、中央部に位置しているが、性格不明である。

覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第8層は貼床の構築土である。



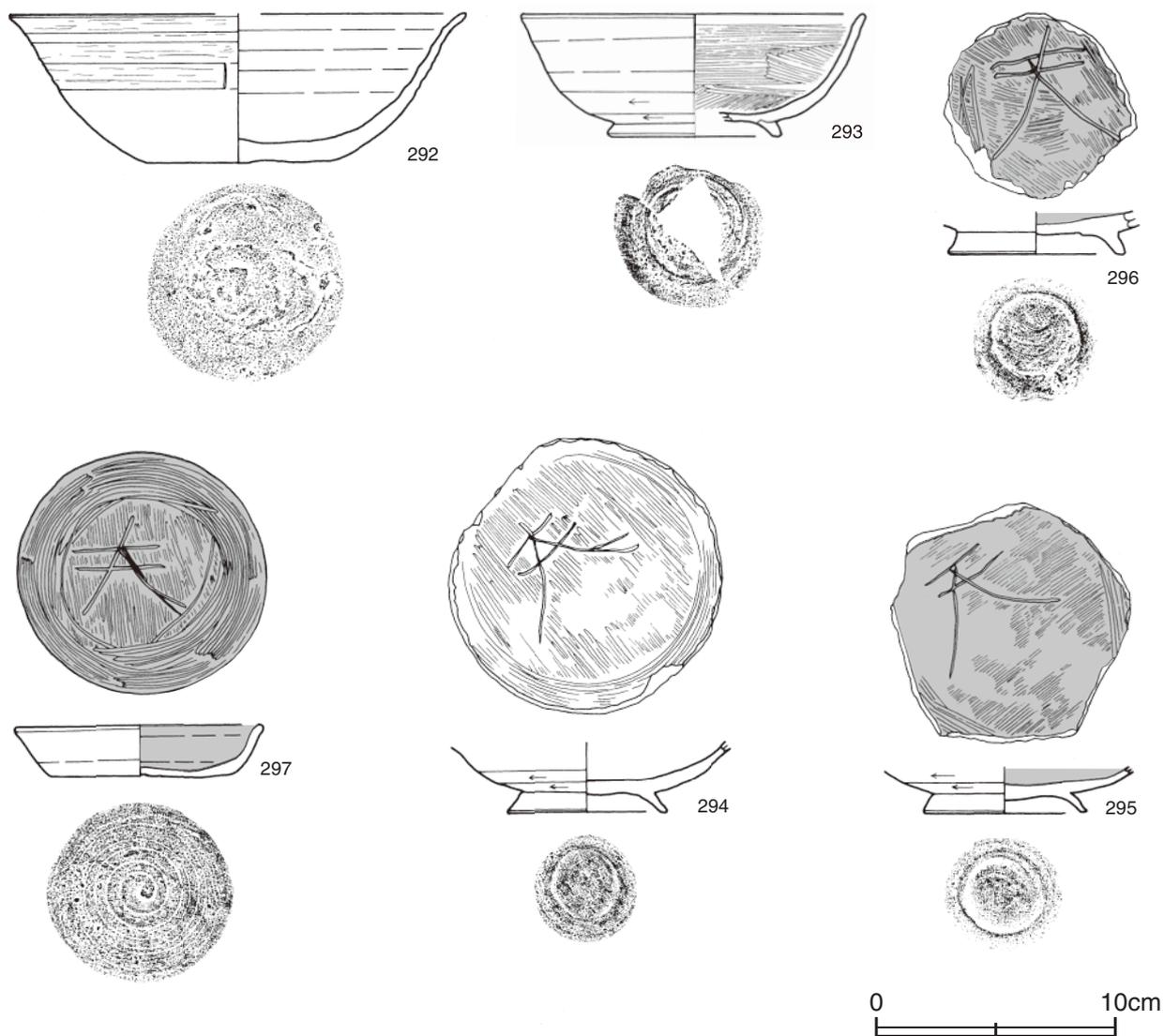
第 148 図 第 169 号住居跡実測図

土層解説

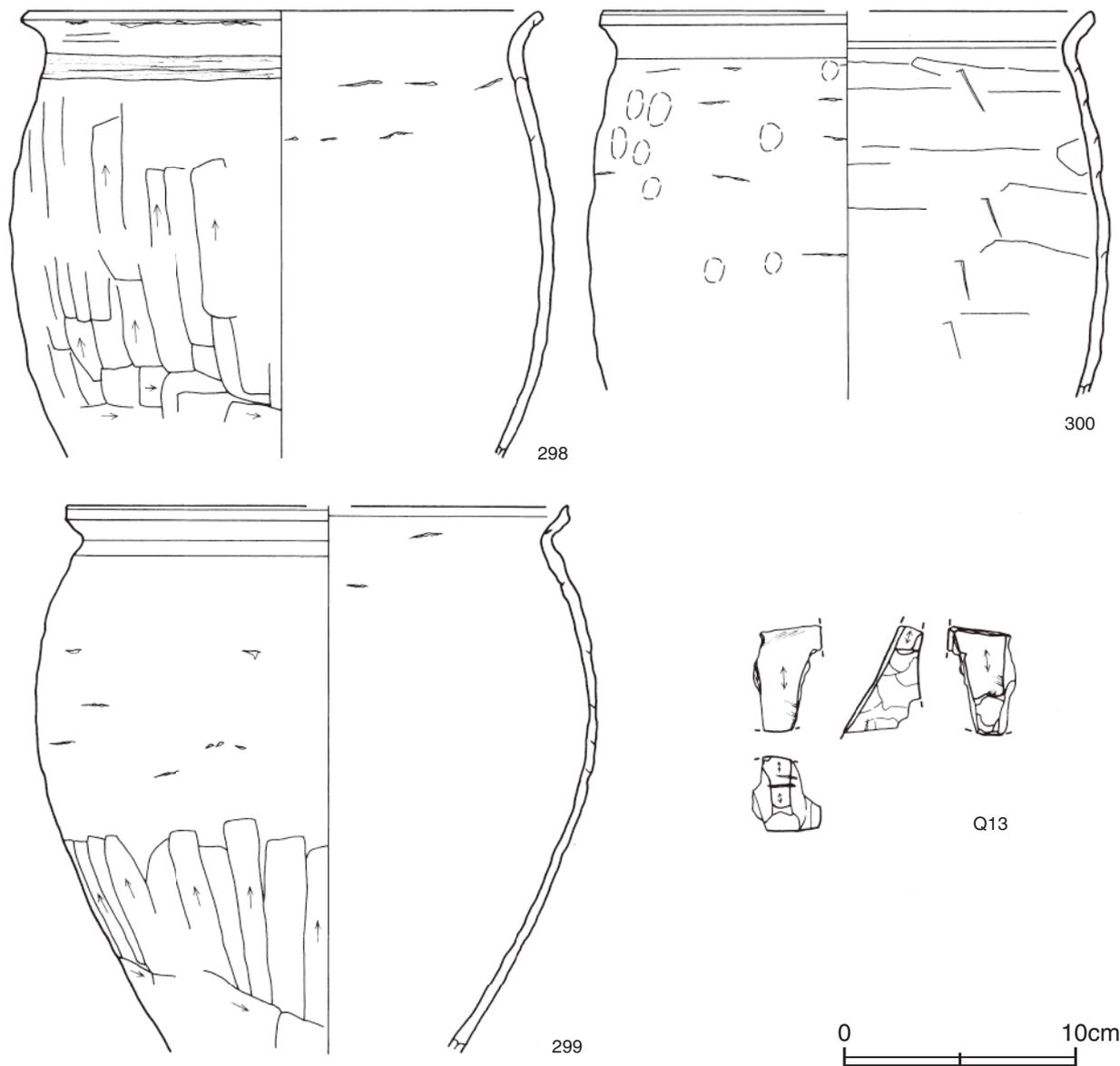
- | | | | |
|-------|----------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 7 暗褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | | |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 549 点 (坏 91, 高台付碗 10, 小皿 1, 甕類 446, 甑 1), 須恵器片 219 点 (坏 117, 高台付坏 3, 蓋 8, 盤 3, 甕類 82, 甑 6), 石器 1 点 (砥石), 鉄製品 1 点 (釘) のほか, 鉄滓 5 点 (523.9 g) が, 西半部の覆土中層から下層を中心に出土している。292・293 は竈前の床面と覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。294 は竈, 295 は南部壁際, 297 は東部壁際の覆土下層から出土している。298 は東部壁際, 299 は南東部の覆土下層, 300 は中央部と東部から南東部にかけての床面と覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。296・Q13 は覆土中からそれぞれ出土している。294～297 の内面には「夫カ」と刻書されている。

所見 時期は, 出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 149 図 第 169 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第 150 図 第 169 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 169 号住居跡出土遺物観察表 (第 149・150 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
292	須恵器	坏	[19.2]	6.3	7.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ	床面 覆土下層	50%
293	土師器	高台付椀	14.4	5.3	7.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	床面 覆土下層	80% PL45
294	土師器	高台付椀	-	(3.0)	6.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部高台貼り付け 内面に刻書「夫カ」	竈覆土下層	50% PL45
295	土師器	高台付椀	-	(2.0)	6.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け 内面に刻書「夫カ」	覆土下層	45% PL45
296	土師器	高台付椀	-	(1.8)	7.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転系切り痕を残すヘラ削り後、高台貼り付け 内面に刻書「夫カ」	覆土中	30% PL45
297	土師器	小皿	10.3	2.3	7.8	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り 内面に刻書「夫カ」	覆土下層	100% PL45
298	土師器	甕	22.2	(19.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ 下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すナデ	覆土下層	50%
299	土師器	甕	[20.6]	(23.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位輪積痕を残すナデ 下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すナデ	覆土下層	35%
300	土師器	甕	[21.4]	(17.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面輪積痕を残すナデ 指頭痕 内面ヘラナデ	床面 覆土下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	砥石	(4.7)	(3.0)	(3.4)	(27)	凝灰岩	砥面 4 面 他は破断面	覆土中	PL49

第 173 号住居跡 (第 151 ~ 153 図)

位置 調査区南西部の F 5 b5 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 174・175 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.70 m, 短軸 3.58 m の方形で, 主軸方向は N - 15° - E である。壁高は 43cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 2 か所。竈 1 は北西コーナー部に付設されている。煙道部を第 175 号住居に掘り込まれているため, 規模は焚口部から煙道部まで 73cm しか確認できなかった。燃焼部幅は 42cm である。袖部は, 床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土を主体とした第 7 ~ 10 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 52cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。第 1 ~ 6 層は, 袖部及び天井部の崩落土である。竈 2 は北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 91cm しか確認できなかった。燃焼部幅は不明である。袖部は遺存しない。煙道部は壁外に 81cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。竈 2 の前面に壁溝が掘り込まれていることから竈 2 から竈 1 へ作り替えられている。

竈 1 土層解説

1 暗 褐 色	炭化物・砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック・ローム粒子微量	7 灰 褐 色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量
2 暗 褐 色	焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量	8 灰 褐 色	砂質粘土粒子中量, 焼土ブロック・炭化物少量, ローム粒子微量
3 暗 赤 褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	9 暗 褐 色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 極暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量	10 暗 褐 色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量
5 暗 褐 色	砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		
6 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量, 砂質粘土粒子少量		

竈 2 土層解説

1 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	8 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
2 暗 褐 色	焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量	9 暗 褐 色	焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗 赤 褐色	焼土ブロック少量, 炭化粒子微量	10 暗 褐 色	焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量
4 暗 赤 褐色	焼土ブロック微量	11 暗 褐 色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量
5 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量	12 暗 赤 褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量
6 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量, 炭化粒子微量	13 暗 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量
7 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量, 砂質粘土ブロック少量		

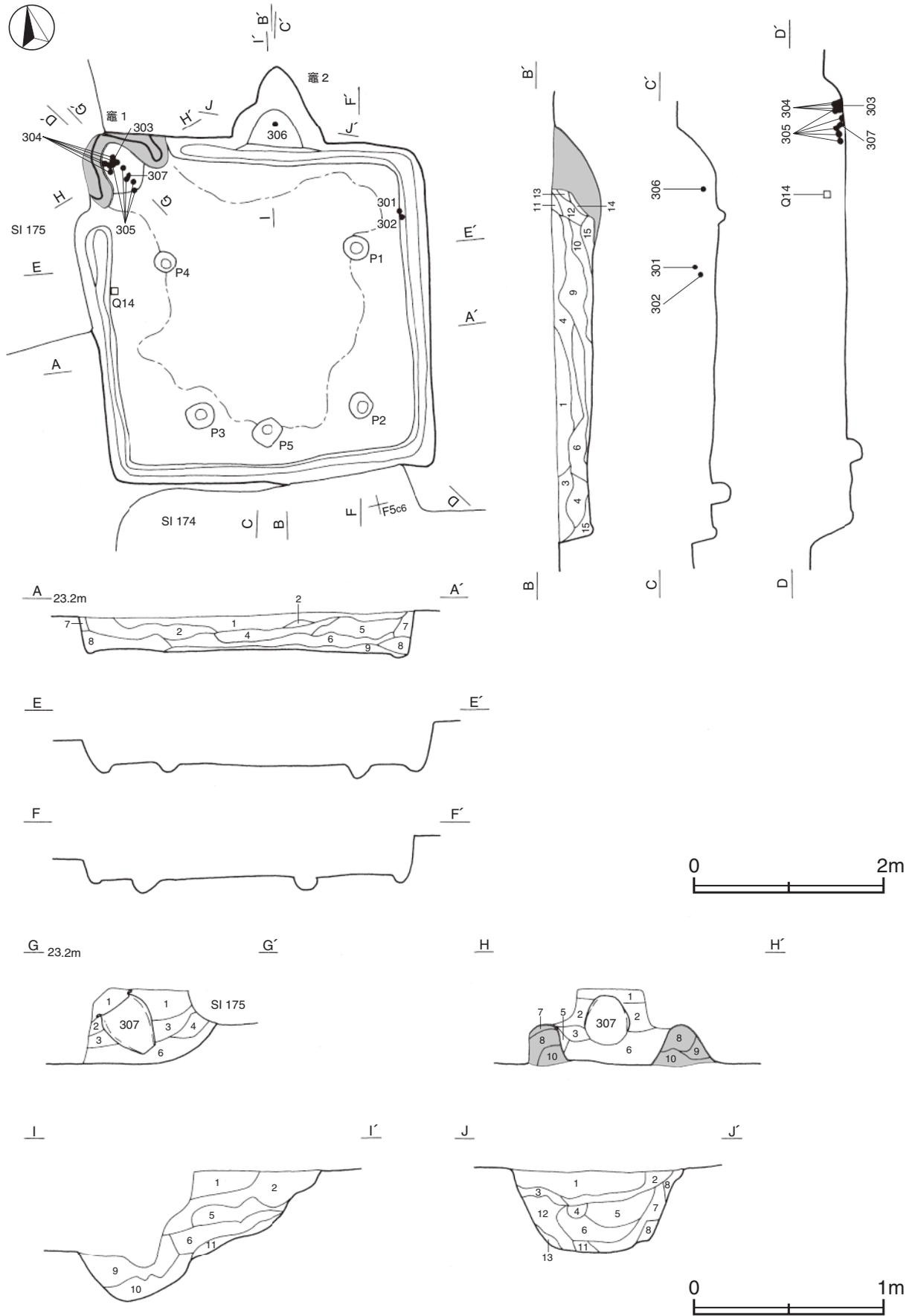
ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 10 ~ 20cm で, 硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 5 は深さ 29cm で, 南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 15 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ, 不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色	ローム粒子微量	11 にぶい褐色	砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐 色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	12 褐 灰 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
3 極暗褐色	ローム粒子微量	13 灰 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	14 にぶい橙色	砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	15 にぶい褐色	ロームブロック少量
6 褐 色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量		
7 橙 色	ロームブロック少量		
8 明 褐 色	ロームブロック少量		
9 にぶい褐色	ロームブロック微量		
10 黒 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		

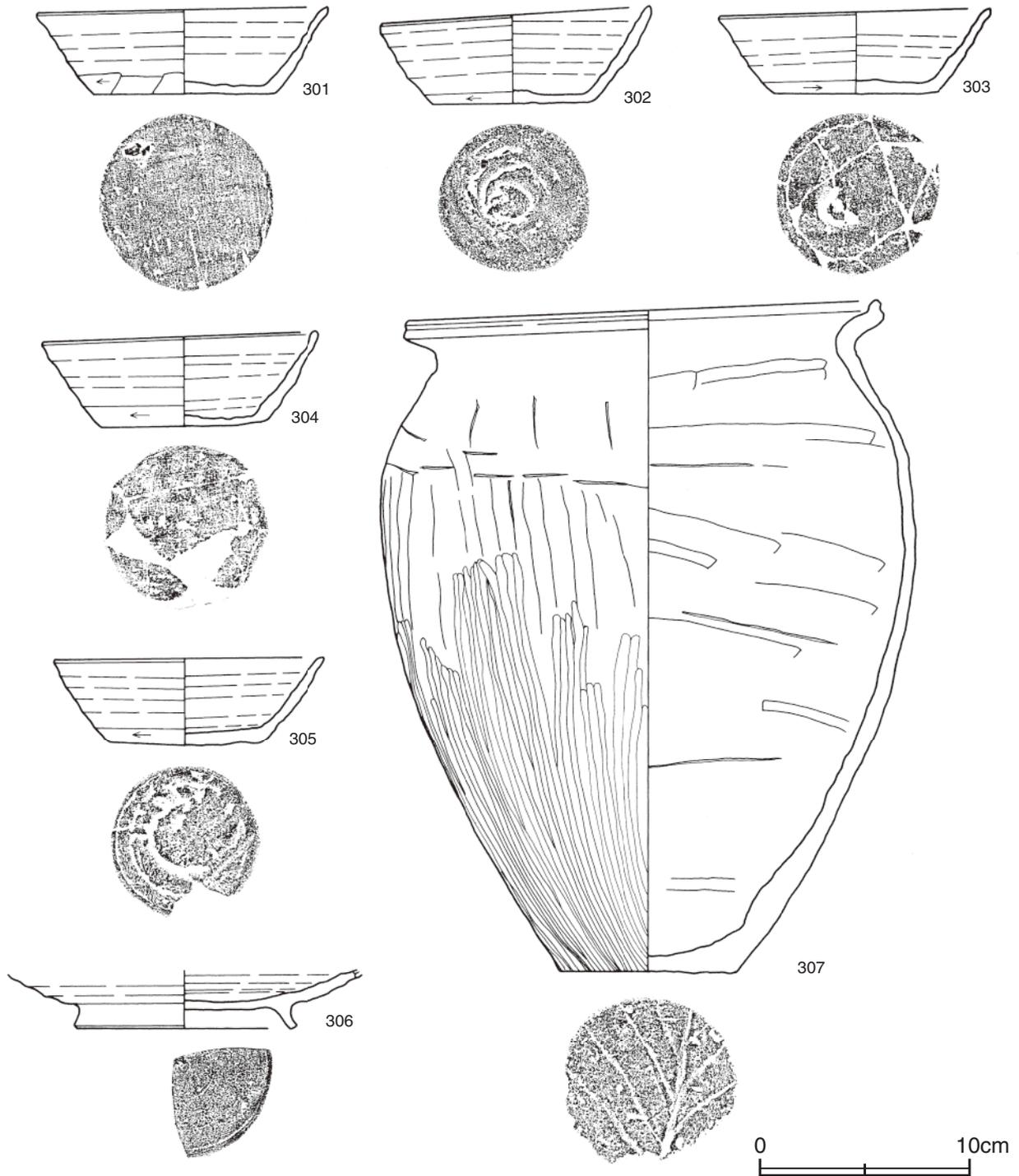
遺物出土状況 土師器片 236 点 (坏 15, 甕類 221), 須恵器片 135 点 (坏 102, 高台付坏 3, 蓋 3, 盤 2, 甕類 24, 甌 1), 石器 1 点 (金床石) のほか, 鉄滓 5 点 (52.8 g), 椀形鍛冶滓 1 点 (183.4 g) が, 全面の覆土



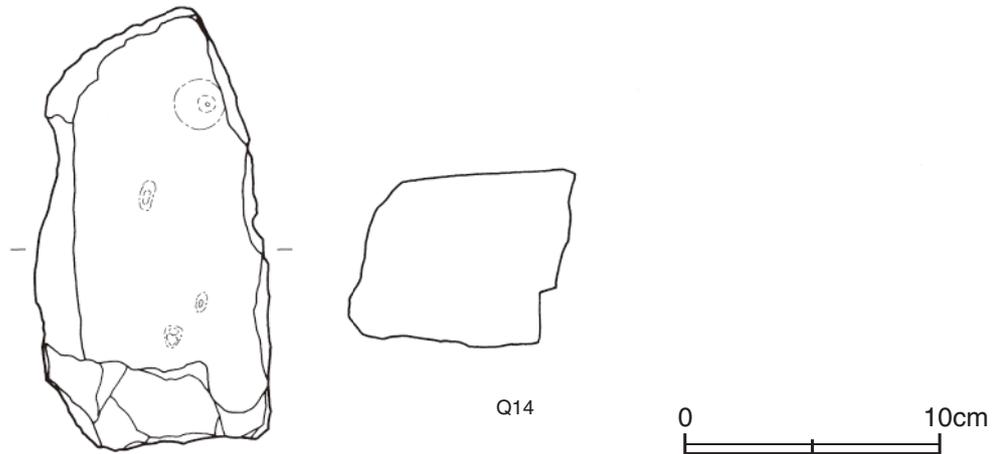
第 151 图 第 173 号住居迹实测图

上層から下層にかけて出土している。303は竈1の覆土下層から逆位の状態で、307は竈1の覆土下層から斜位の状態でそれぞれ出土しており、いずれもほぼ完形であることから廃絶時に遺棄されたものと考えられる。304・305は竈1の覆土下層から出土した破片が接合したものである。301・302は北東部壁際の覆土中層から出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。306は竈2の覆土中層、Q14は西部壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第152図 第173号住居跡出土遺物実測図(1)



第 153 図 第 173 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 173 号住居跡出土遺物観察表 (第 152・153 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
301	須恵器	坏	14.0	4.1	8.6	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	100% PL44
302	須恵器	坏	13.8	4.6	7.4	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	100% PL44
303	須恵器	坏	13.0	4.1	7.8	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈1覆土下層	95% PL44
304	須恵器	坏	13.0	4.5	8.0	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部二方向のヘラ削り	竈1覆土下層	75% PL44
305	須恵器	坏	12.9	4.3	7.2	長石・石英・雲母・細礫	暗灰褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	竈1覆土下層	75% PL44
306	須恵器	盤	-	(2.8)	[10.6]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	竈2覆土中層	20%
307	土師器	甕	22.6	32.5	8.5	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ヘラナデ中位から下位ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部木葉痕	竈1覆土下層	95% PL44

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 14	金床石	17.6	9.3	7.0	1516	雲母片岩	表面毆打痕 凹痕1か所 裏面ガラス質付着 凹石転用カ	覆土上層	PL49

第 174 号住居跡 (第 154 図)

位置 調査区南西部の F 5 c5 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 173 号住居跡を掘り込み、第 2 号鍛冶工房に掘り込まれている。

規模と形状 南半部が調査区域外へ延びているため、東西軸は 4.93 m で、南北軸は 2.15 m しか確認できなかった。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定でき、主軸方向は N - 10° - E である。壁高は 30 ~ 40 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部を第 2 号鍛冶工房に掘り込まれているため、規模は焚口部から煙道部までの 89 cm しか確認できなかった。燃烧部幅は 33 cm である。袖部は遺存しない。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 78 cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|--------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | ロームブロック少量、炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック・砂質粘土粒子少量 | 5 暗赤褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | | |

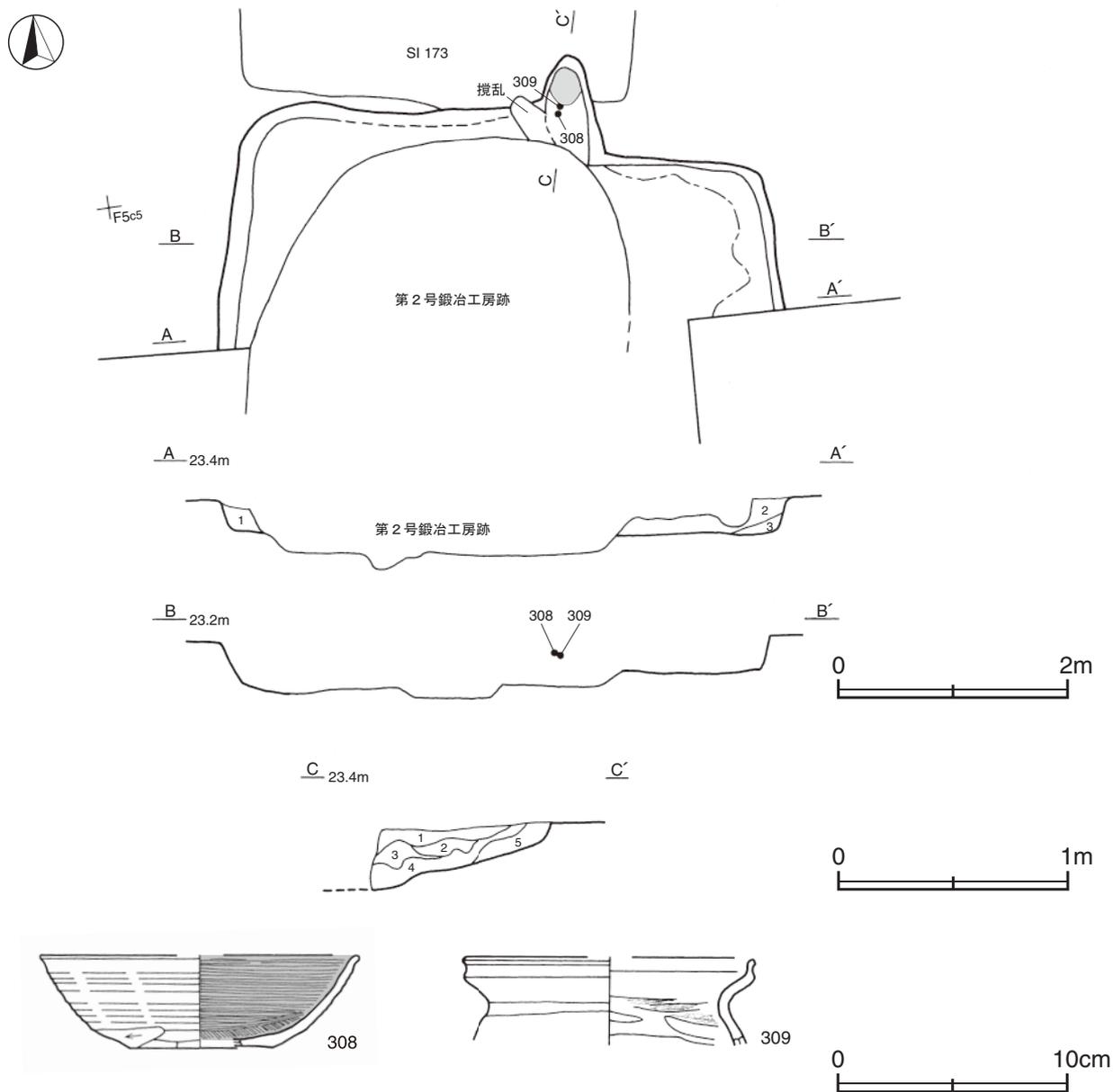
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 25 点 (坏 4, 高台付椀 1, 甕類 19, 小形甕 1), 須恵器片 7 点 (坏 1, 高台付坏 2, 蓋 1, 甕類 3) が出土している。308・309 は竈の覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 154 図 第 174 号住居跡・出土遺物実測図

第 174 号住居跡出土遺物観察表 (第 154 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
308	土師器	坏	[13.8]	4.1	[6.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちへら削り 二方向のへら削り	内面へら磨き 底部	竈覆土中層	20%
309	土師器	小形甕	[12.6]	(3.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ	内面へら	竈覆土中層	10%

第 175 号住居跡 (第 155 ~ 157 図)

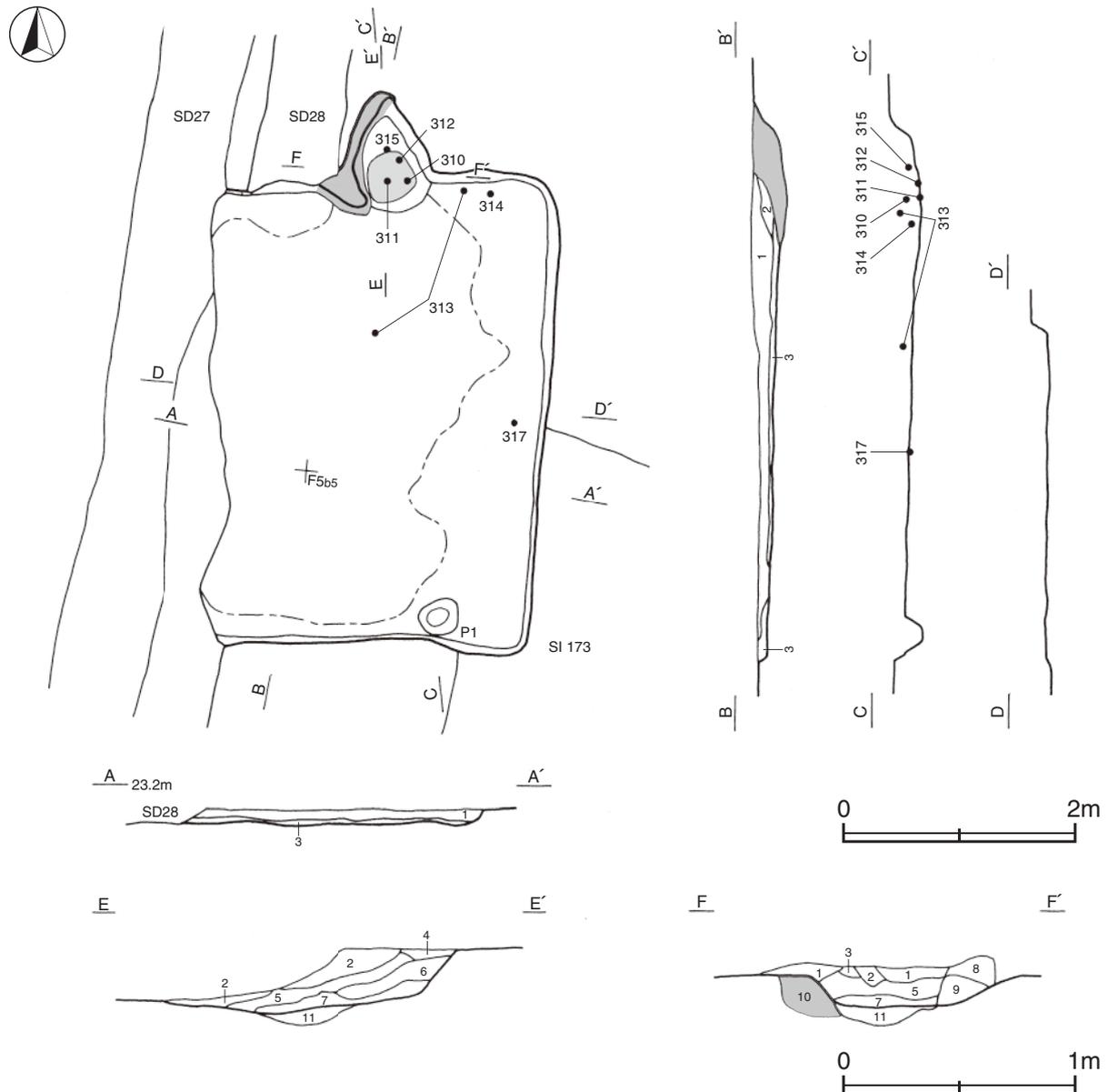
位置 調査区南西部の F 5 a5 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 173 号住居跡を掘り込み, 第 27・28 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西部を第 27・28 号溝に掘り込まれているため, 南北軸は 4.21 m で, 東西軸は 2.98 m しか確認できなかった。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定でき, 主軸方向は $N-4^{\circ}-W$ である。壁高は 6 ~ 16 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 竈前面から南壁際にかけて踏み固められている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 100 cm で, 燃烧部幅は 51 cm である。袖部は, 床面と同じ高さの上に砂質粘土混じりのロームブロックを主体とした第 10 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 15 cm 掘りくぼめた部分に, 焼土ブロックを含んだ第 11 層が埋土されており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 69 cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。第 5・6 層は, 袖部及び天井部の崩落土である。



第 155 図 第 175 号住居跡実測図

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|---------|----------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物少量, ローム粒子微量 | 8 明褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック微量 | 9 にぶい褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量, ローム粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 灰褐色 | 砂質粘土ブロック少量, ローム粒子微量 | 11 暗褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子微量 |
| 6 灰褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化物微量 | | |

ピット 深さ16cmで、南壁際の東寄りに位置している。性格は不明である。

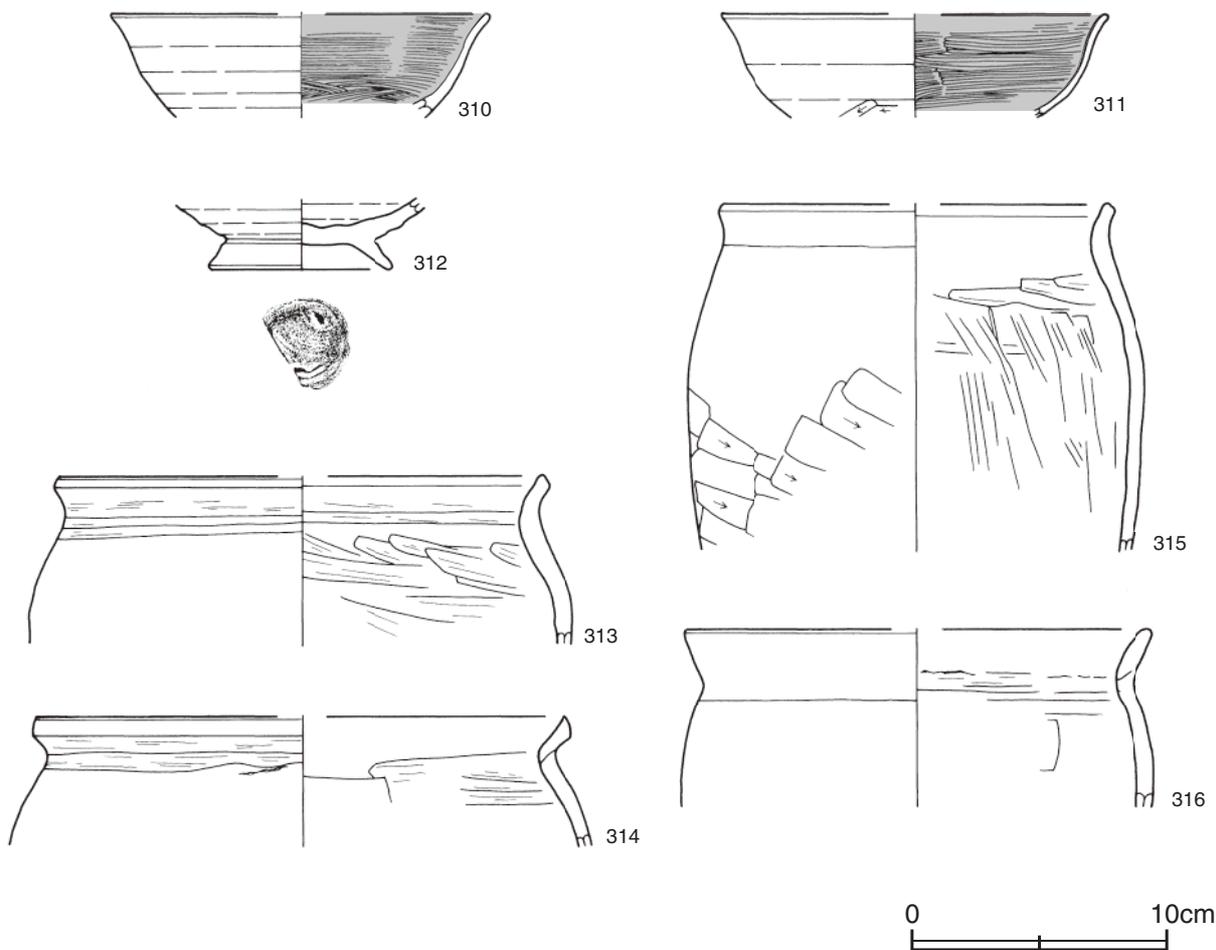
覆土 3層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

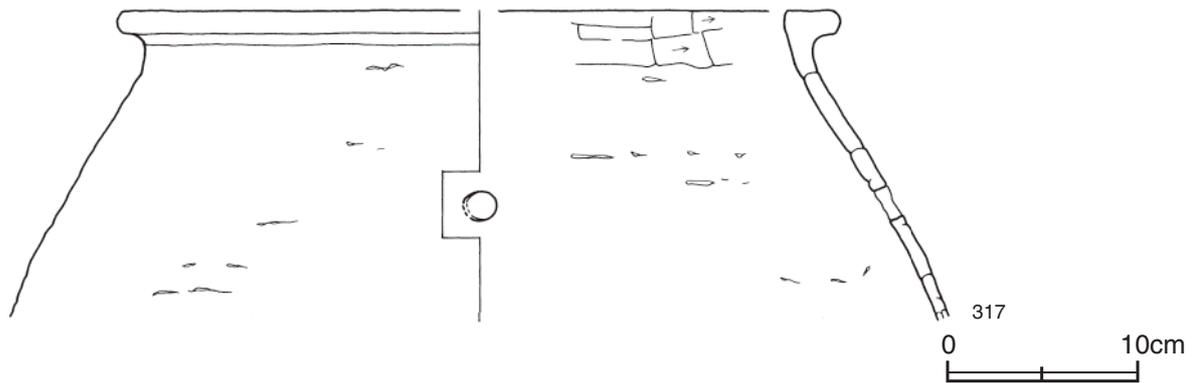
- | | | | |
|---------|----------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 にぶい褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片180点(坏21, 高台付椀4, 甕類155), 須恵器片43点(坏23, 高台付坏1, 蓋3, 甕類16), 土師質土器片1点(置き竈)のほか, 鉄滓2点(146.2g)が, 竈前から北東部にかけての覆土中層から下層を中心に出土している。311・312は竈の火床面, 310・315は竈の覆土下層, 317は東部の床面からそれぞれ出土している。314は北東部壁際の覆土下層から出土している。いずれも廃絶時に遺棄されたものと考えられる。313は竈の覆土中層と中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。316は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第156図 第175号住居跡出土遺物実測図(1)



第 157 図 第 175 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 175 号住居跡出土遺物観察表 (第 156・157 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
310	土師器	坏	[14.8]	(4.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き	竈覆土下層	20%
311	土師器	坏	[15.2]	(4.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き	竈火床面	20%
312	土師器	高台付椀	-	(2.8)	[7.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後、高台貼り付け	竈火床面	20%
313	土師器	甕	[19.0]	(6.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈覆土中層 覆土下層	10%
314	土師器	甕	[20.8]	(5.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	10%
315	土師器	甕	[15.2]	(13.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	竈覆土下層	10%
316	土師器	甕	[18.2]	(7.1)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土中	10%
317	土師質土器	置き竈	[37.5]	(16.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内面ヘラ削り 体部外・内面輪痕を残すナデ 背面に孔を穿つ 孔径 1.6cm	床面	10%

第 176 号住居跡 (第 158 図)

位置 調査区南西部の F 5 b2 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 178 号住居、第 299 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 2.55 m、短軸 2.20 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 8° - W である。壁高は 15 ~ 17cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、竈前面から南東部にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 76cm で、燃焼部幅は 37cm である。袖部は、床面と同じ高さの地山の上に砂質粘土を主体とした第 8・9 層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。火床部の北部には、土師器坏片を柱状に積み上げて支脚に転用しており、焚き口からの距離は 45cm である。煙道部は壁外に 50cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------|------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 7 赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 灰褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 | 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 暗褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | |

ピット 深さ 20cm で、規模や配置から支柱穴である。

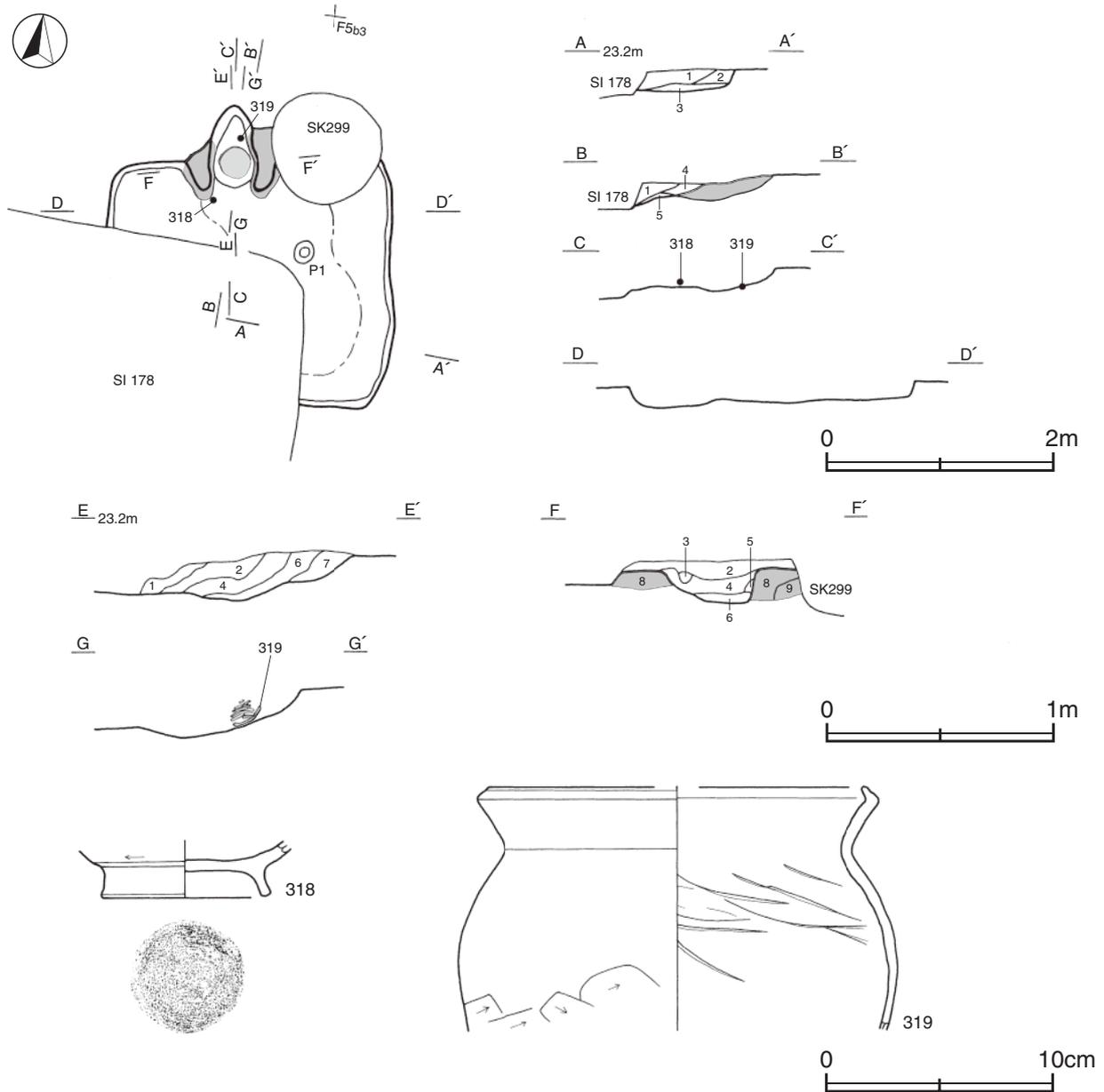
覆土 5 層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 にぶい褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
 2 褐色 ロームブロック少量 5 褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
 3 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 16 点 (坏 1, 高台付椀 1, 甕類 8, 小形甕 1, 甑 5), 須恵器片 4 点 (坏 1, 蓋 1, 甕類 2) が出土している。318 は竈前の覆土下層から出土しており, 廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。319 は竈の覆土下層から出土しており, 支脚に転用された一片である。

所見 時期は, 出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 158 図 第 176 号住居跡・出土遺物実測図

第 176 号住居跡出土遺物観察表 (第 158 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
318	土師器	高台付椀	-	(2.5)	7.2	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け	覆土下層	20%
319	土師器	小形甕	[16.8]	(11.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	竈覆土下層	10%

第 177 号住居跡 (第 159・160 図)

位置 調査区中央部の E 5 c9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 171 号住居跡を掘り込み, 第 17 号ピット群に掘り込まれている。

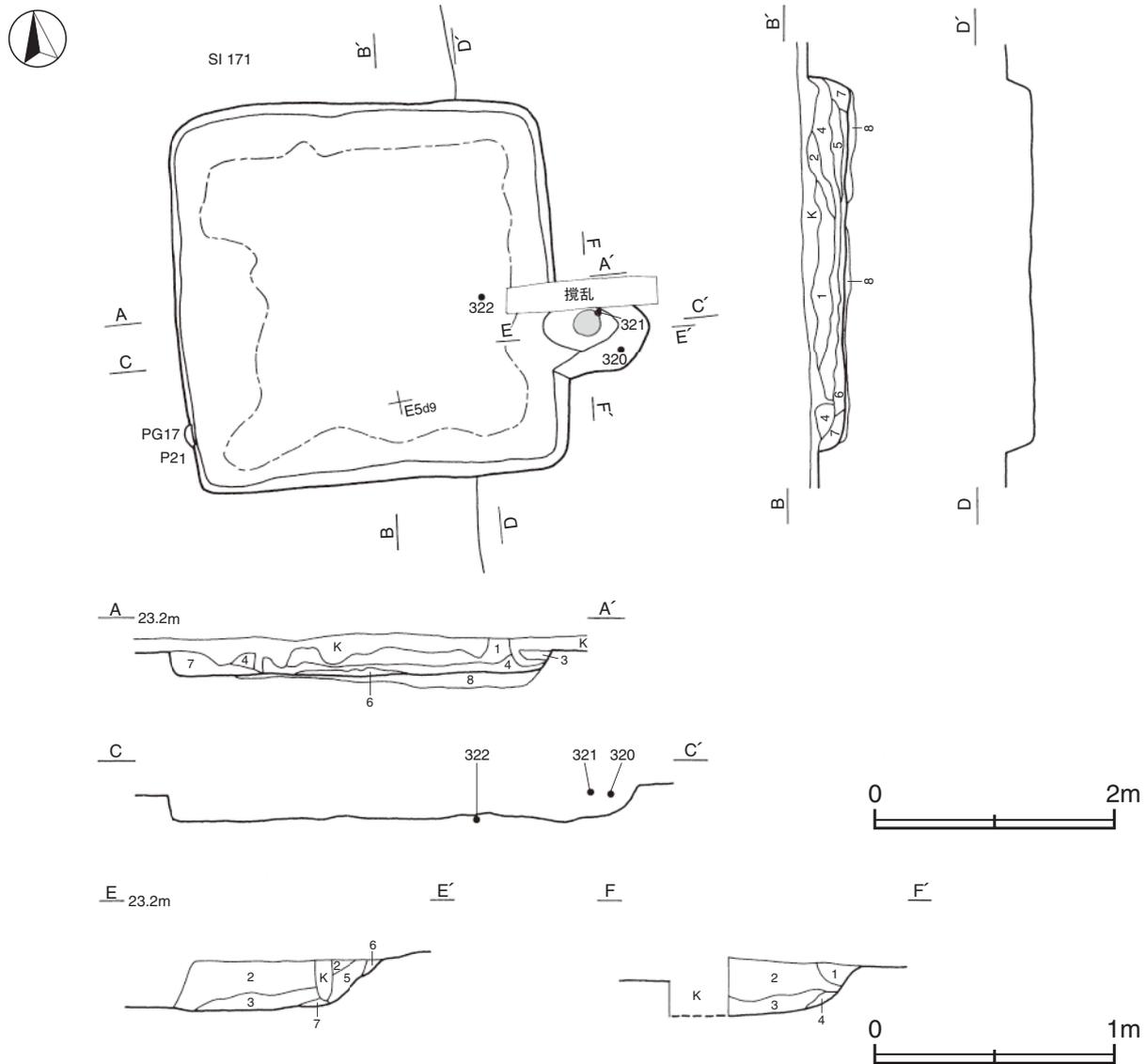
規模と形状 一辺が 3.15 m の方形で, 主軸方向は N - 98° - E である。壁高は 19 ~ 22cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で, 中央部が踏み固められている。貼床は, ロームブロックを多く含んだ褐色土の第 8 層を埋土して構築されている。

竈 東壁やや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 88cm で, 燃焼部幅は 36cm しか確認できなかった。袖部は遺存しない。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 73cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|-------|-----------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 6 灰褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック微量 | 7 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 4 灰褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | | |



第 159 図 第 177 号住居跡実測図

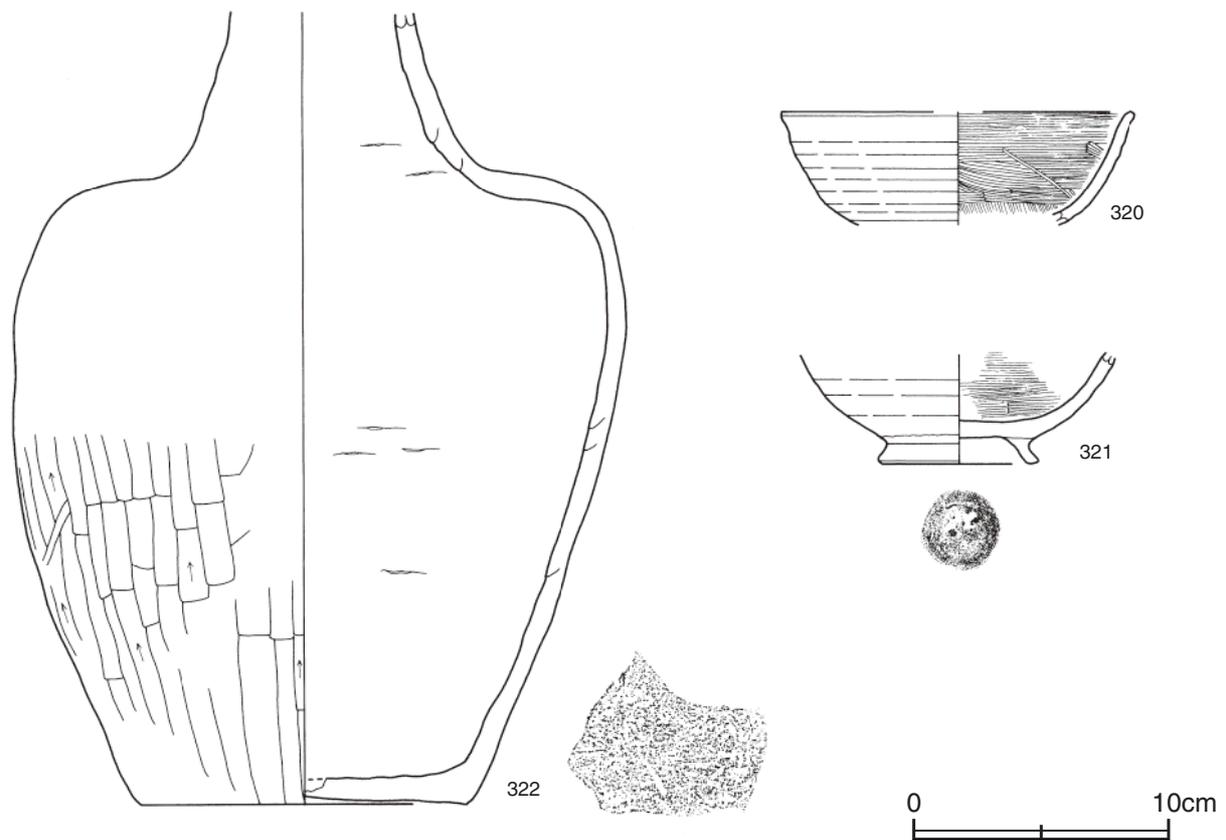
覆土 7層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。第8層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック微量 | 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 | 6 灰褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 7 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量 |
| 4 暗褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 | 8 褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片 553 点 (坏 38, 高台付椀 4, 長頸瓶 1, 壺 16, 甕類 494), 須恵器片 120 点 (坏 74, 高台付坏 1, 蓋 2, 瓶類 2, 甕類 41), 土製品 1 点 (支脚), 鉄製品 5 点 (釘 4, 不明 1) のほか, 鉄滓 2 点 (31.4 g) が, 竈の覆土中や竈前の覆土上層から下層を中心に出土している。また, 混入した磁器片 1 点 (碗) も出土している。320・321 は竈の覆土上層, 322 は竈前の床面からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 160 図 第 177 号住居跡出土遺物実測図

第 177 号住居跡出土遺物観察表 (第 160 図)

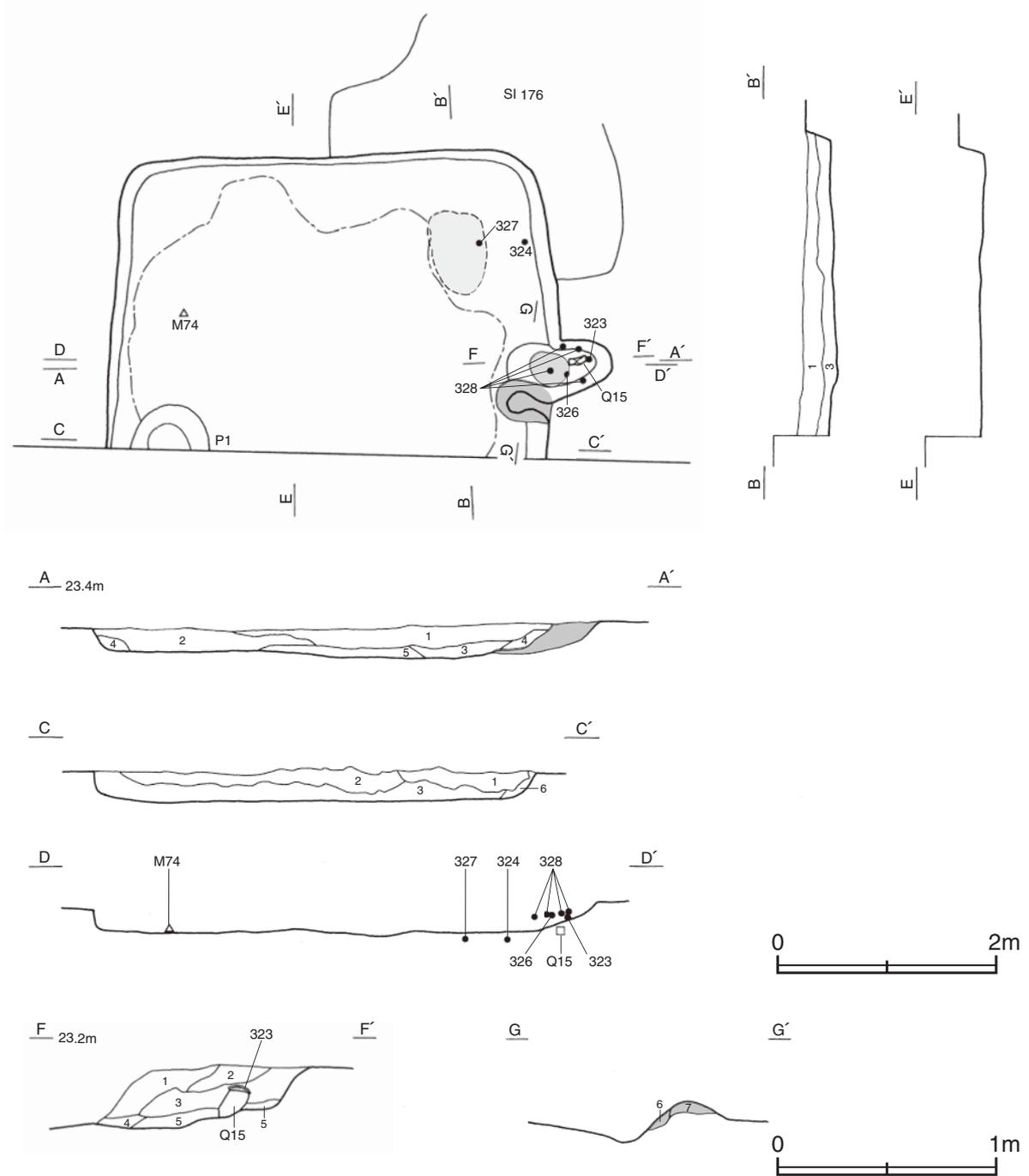
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
320	土師器	坏	[13.8]	(4.5)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き	竈覆土上層	20%
321	土師器	高台付椀	-	(4.4)	6.2	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	竈覆土上層	20%
322	土師器	長頸瓶	-	(31.5)	[12.9]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面縦位のヘラ削り 内面輪積痕を残すナデ	床面	40% PL44

第 178 号住居跡 (第 161 ~ 163 図)

位置 調査区南西部の F 5 b2 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 176 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南半部が調査区域外へ延びているため, 東西軸は 4.12 m で, 南北軸は 2.80 m しか確認できなかった。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定でき, 主軸方向は $N - 94^\circ - E$ である。壁高は 20 ~ 25 cm で, 直立している。



第 161 図 第 178 号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。北東部に焼土の広がりを確認した。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで98cmで、燃烧部幅は37cmである。袖部は右袖部しか遺存しないが、地山を掘り残して基部とし、その上に砂質粘土混じりの黒褐色土や灰褐色土である第6・7層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。火床部の東部には支脚が据えられており、焚き口からの距離は60cmである。煙道部は壁外に53cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------|--------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 明赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 灰褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | | |

ピット 深さ54cmで、竈と対峙する西壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

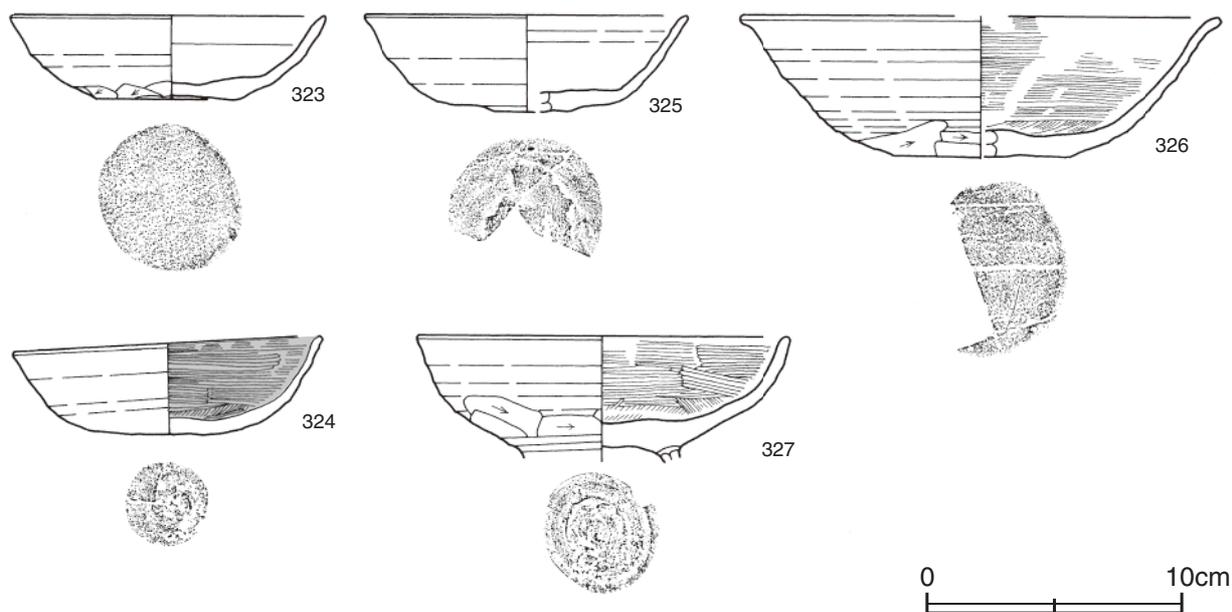
覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則な体積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

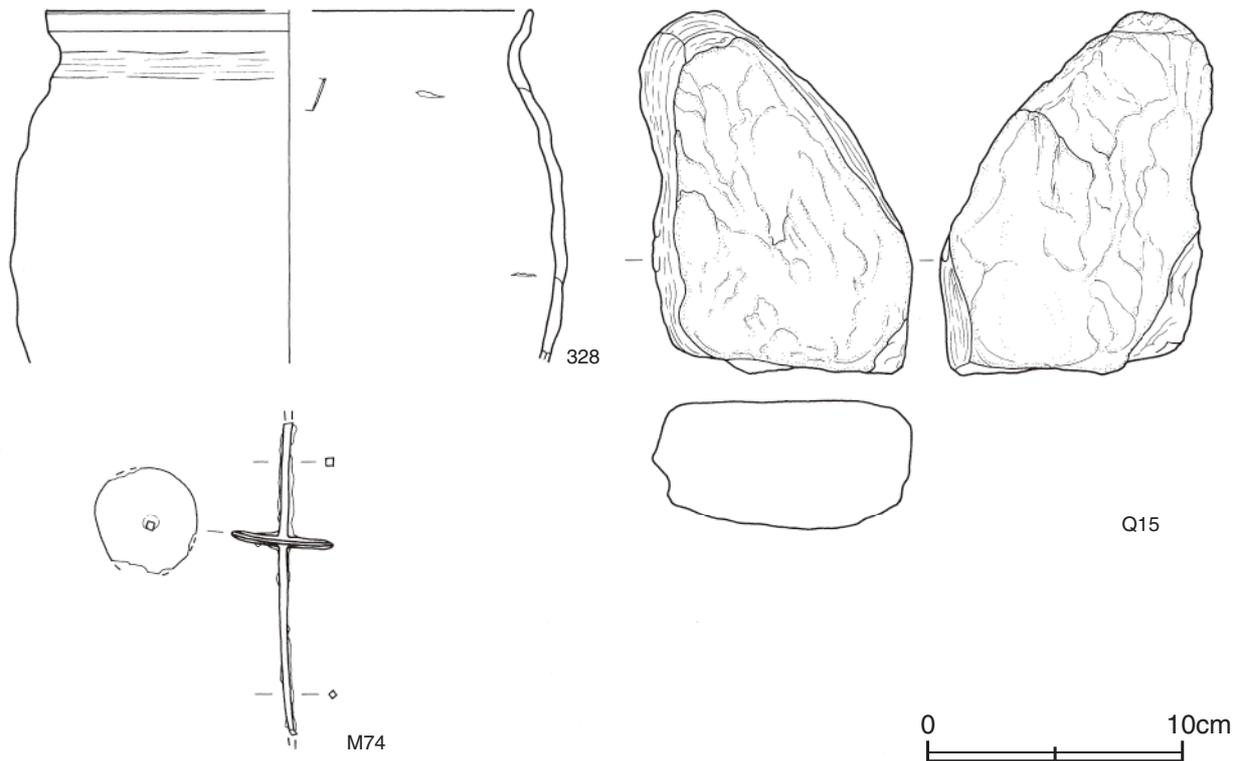
- | | | | |
|--------|-------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子微量 | 5 明褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片156点（坏48，高台付椀1，甕類105，甗2），須恵器片18点（坏8，高台付坏2，蓋2，甕類6），石器1点（支脚），鉄製品1点（紡錘車）が、北東部の覆土中層から下層を中心に出土している。Q15は竈火床面の東部に立位の状態で据えられており、火を受けた痕跡が認められることから支脚として使用されたものである。323はQ15の上に逆位の状態で被せられており、支脚の高さ調整に使用されたものである。326・328は竈，324は北東部壁際，327は北東部の覆土下層，M74は西部の床面からそれぞれ出土しており、いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。325は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉に比定できる。



第162図 第178号住居跡出土遺物実測図（1）



第 163 図 第 178 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 178 号住居跡出土遺物観察表 (第 162・163 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
323	土師器	坏	12.3	3.7	5.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈覆土中層	90% PL46
324	土師器	坏	12.1	4.0	3.2	長石・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部ヘラ切り痕を残すナデ	覆土下層	80% PL46
325	土師器	坏	12.6	3.8	[6.0]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ロクロナデ	覆土中	40%
326	土師器	坏	[18.8]	5.6	[6.9]	長石・石英	明赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部一方向のヘラ削り	竈覆土下層	40%
327	土師器	高台付碗	14.6	(5.0)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	90% PL46
328	土師器	甕	[19.2]	(14.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラ削り 輪積痕	竈覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 15	支脚	14.5	10.9	5.1	1220	雲母片岩	被熱痕有り	竈火床部	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 74	紡錘車	(12.4)	4.0	0.2~0.3	(13.2)	鉄	軸部断面方形 端部欠損	床面	PL51

第 181 号住居跡 (第 164・165 図)

位置 調査区南西部の F 4 b9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 310 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部が攪乱を受けているため, 南北軸は 2.42 m で, 東西軸は 2.10 m しか確認できなかった。平面形は隅丸長方形で, 主軸方向は N - 94° - E である。壁高は 33 ~ 35cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cmで、燃焼部幅は56cmである。袖部は地山を掘り残して基部とし、その上に砂質粘土混じりの灰褐色土である第6層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に34cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土粒子少量, 炭化物微量 |
| 2 にぶい赤褐色 砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 にぶい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 灰褐色 砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット 2か所。P1・P2は深さ23cm・17cmで、硬化面の広がりや配置から支柱穴である。

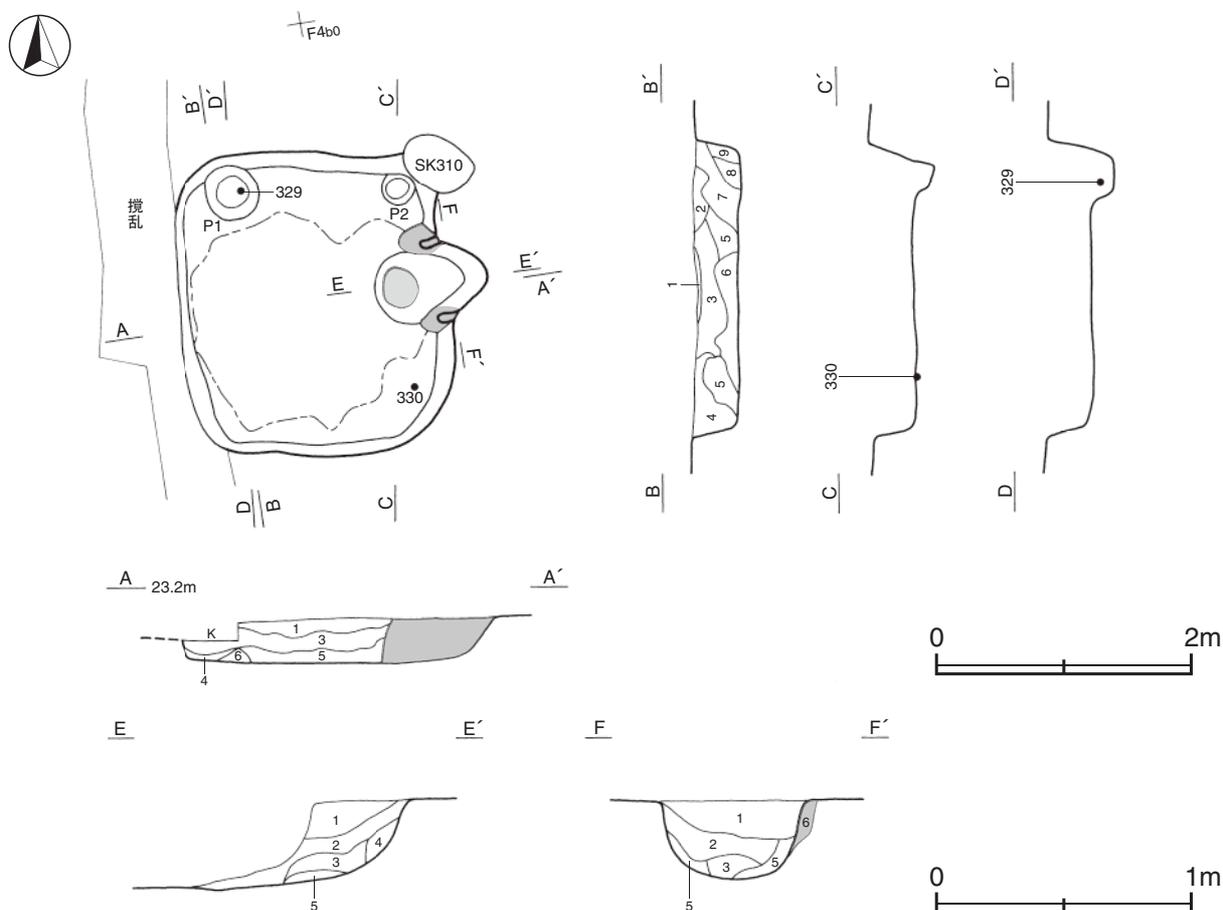
覆土 9層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

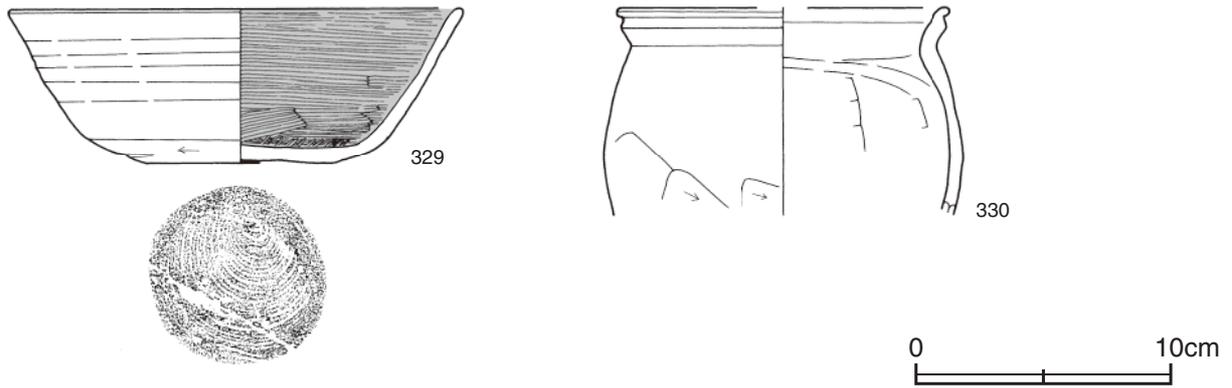
- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 明褐色 ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子微量 | 7 褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子微量 | 8 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック微量 | 9 にぶい褐色 ローム粒子少量 |
| 5 にぶい褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片63点(坏15, 高台付椀3, 甕類44, 小形甕1), 須恵器片10点(坏2, 甕類8)のほか、鉄滓1点(11.7g)が出土している。329はP1の覆土中層, 330は南東部の覆土下層からそれぞれ出土しており、いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第164図 第181号住居跡実測図



第 165 図 第 181 号住居跡出土遺物実測図

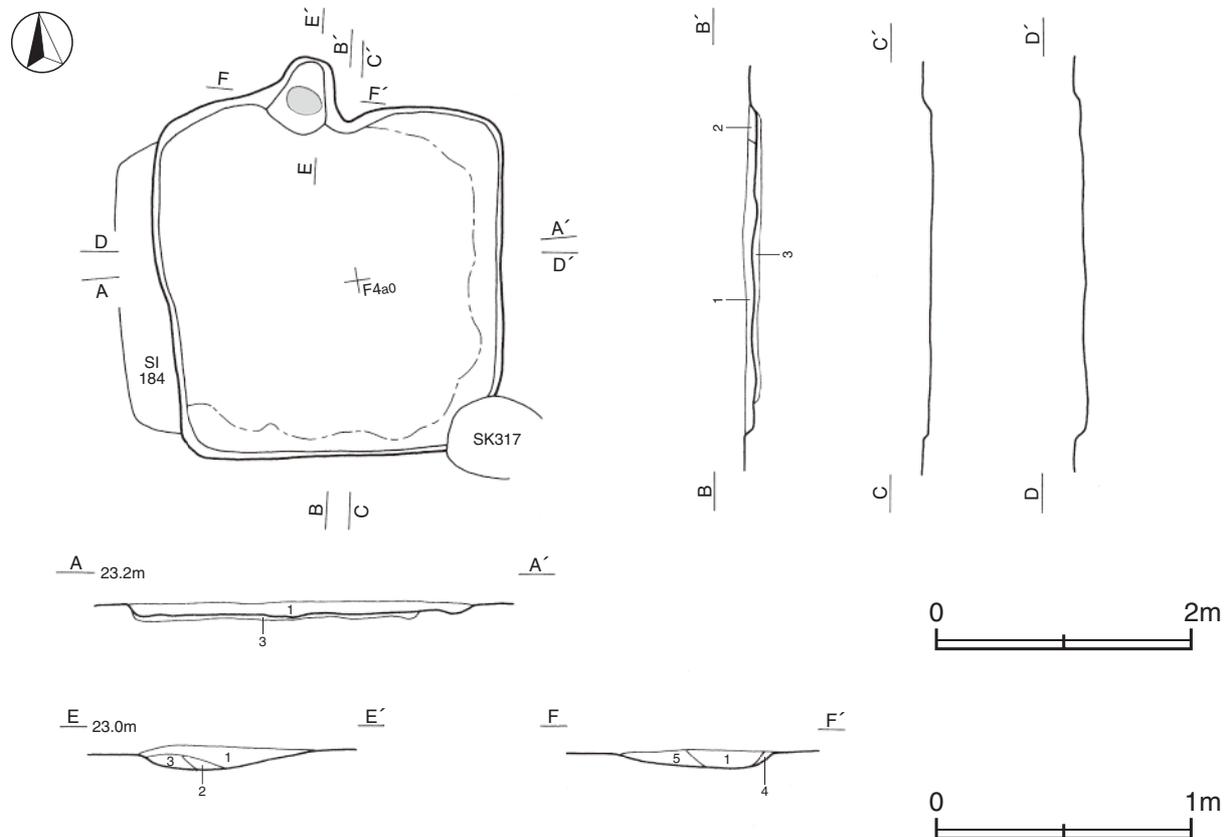
第 181 号住居跡出土遺物観察表 (第 165 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
329	土師器	坏	17.8	6.2	7.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転条切り	P 1 覆土中層	100% PL46
330	土師器	小形甕	[13.0]	(8.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 下位ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	10%

第 182 号住居跡 (第 166 図)

位置 調査区南西部の E 4j9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 184 号住居跡を掘り込み, 第 317 号土坑に掘り込まれている。



第 166 図 第 182 号住居跡実測図

規模と形状 長軸 2.87 m, 短軸 2.76 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 6° - E である。壁高は 4 ~ 8 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床である。貼床は, 粘土粒子を含んだにぶい褐色土の第 3 層を埋土して構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 61 cm で, 燃焼部幅は 42 cm である。袖部は遺存しない。火床部は床面から 5 cm くぼんでおり, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 38 cm 掘り込まれ, 火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|---------|----------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 灰褐色 | 焼土粒子少量, 粘土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 |
| 3 灰褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

覆土 2 層に分層できる。層厚が薄いいため堆積状況は不明である。第 3 層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|---------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 3 にぶい褐色 | 粘土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 51 点 (坏 6, 高台付椀 1, 甕類 44), 須恵器片 4 点 (坏 1, 蓋 1, 甕類 2) が, 散在した状態で出土している。いずれも細片で図示できないが, 土師器の坏や高台付椀は内面黒色処理が施されないものが主体である。

所見 時期は, 10 世紀前葉に比定できる第 184 号住居跡を掘り込んでいることや, 出土土器から 10 世紀中葉に比定できる。

第 183 号住居跡 (第 167・168 図)

位置 調査区南西部の E 4 i9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 65 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.47 m, 短軸 3.35 m の隅丸方形で, 主軸方向は N - 13° - E である。壁高は 26 ~ 30 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。中央部に粘土の塊を確認した。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 98 cm で, 燃焼部幅は 46 cm である。袖部は, 床面と同じ高さの地山の上に白色粘土を主体とした第 7 ~ 9 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 6 cm くぼんでおり, 火床面は火を受けて赤変硬化している。火床部の北部には, 土師器甕片が逆位の状態で据えられ, その上に土師器坏片を積み上げて支脚として使用されている。焚き口からの距離は 60 cm である。煙道部は壁外に 55 cm 掘り込まれ, 火床部から外傾して立ち上がっている。第 2 ~ 5 層は, 袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 灰褐色 | 白色粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 7 黒褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物・白色粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物・ローム粒子微量 | 8 灰褐色 | 白色粘土粒子中量, ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 炭化物少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子微量 |
| 5 灰褐色 | 焼土粒子・白色粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 16 ~ 22 cm で, 規模や配置から主柱穴である。P 5 は深さ 30 cm で, 南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

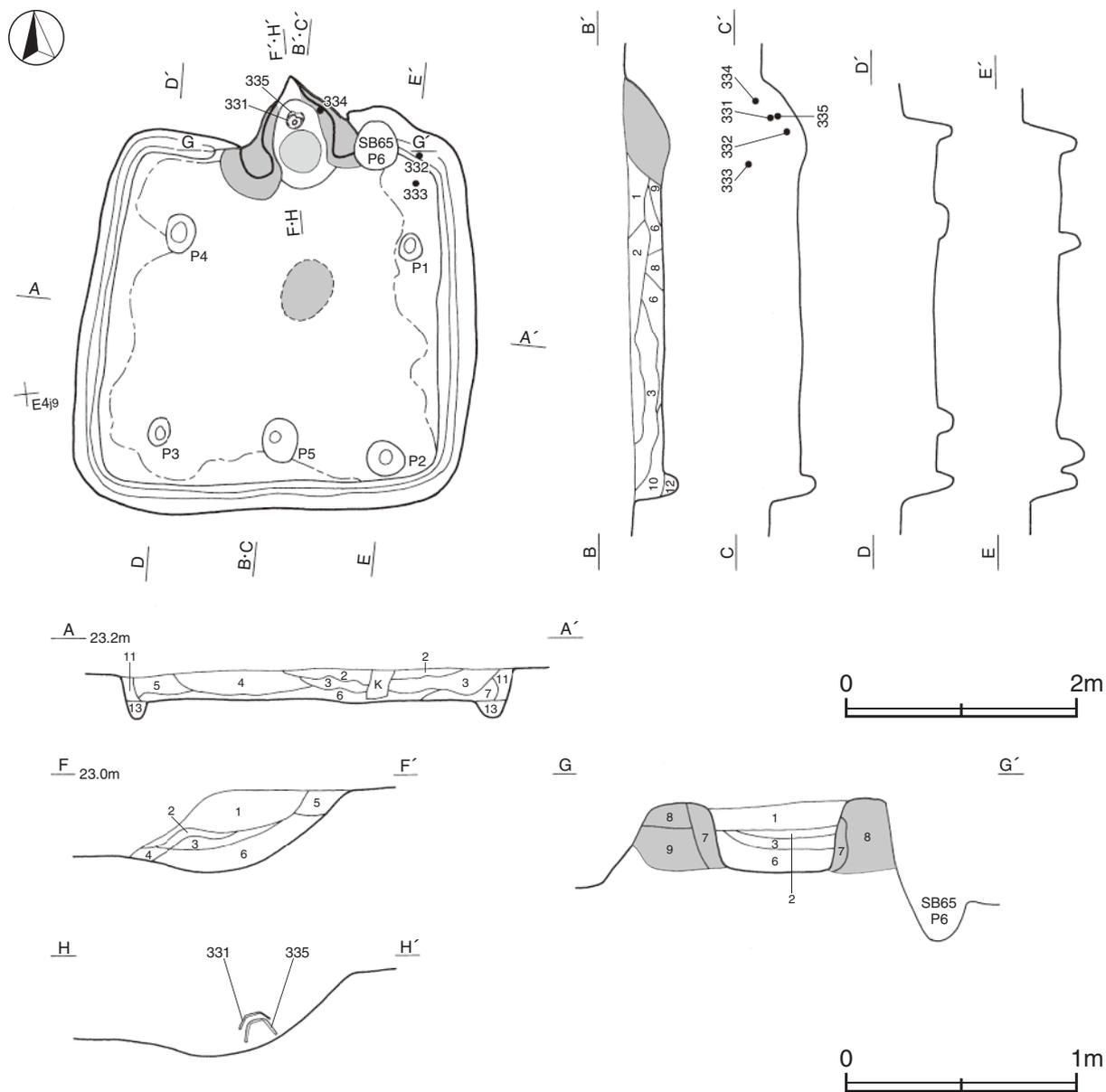
覆土 13層に分層できる。ブロック状に堆積していることから埋め戻されている。

土層解説

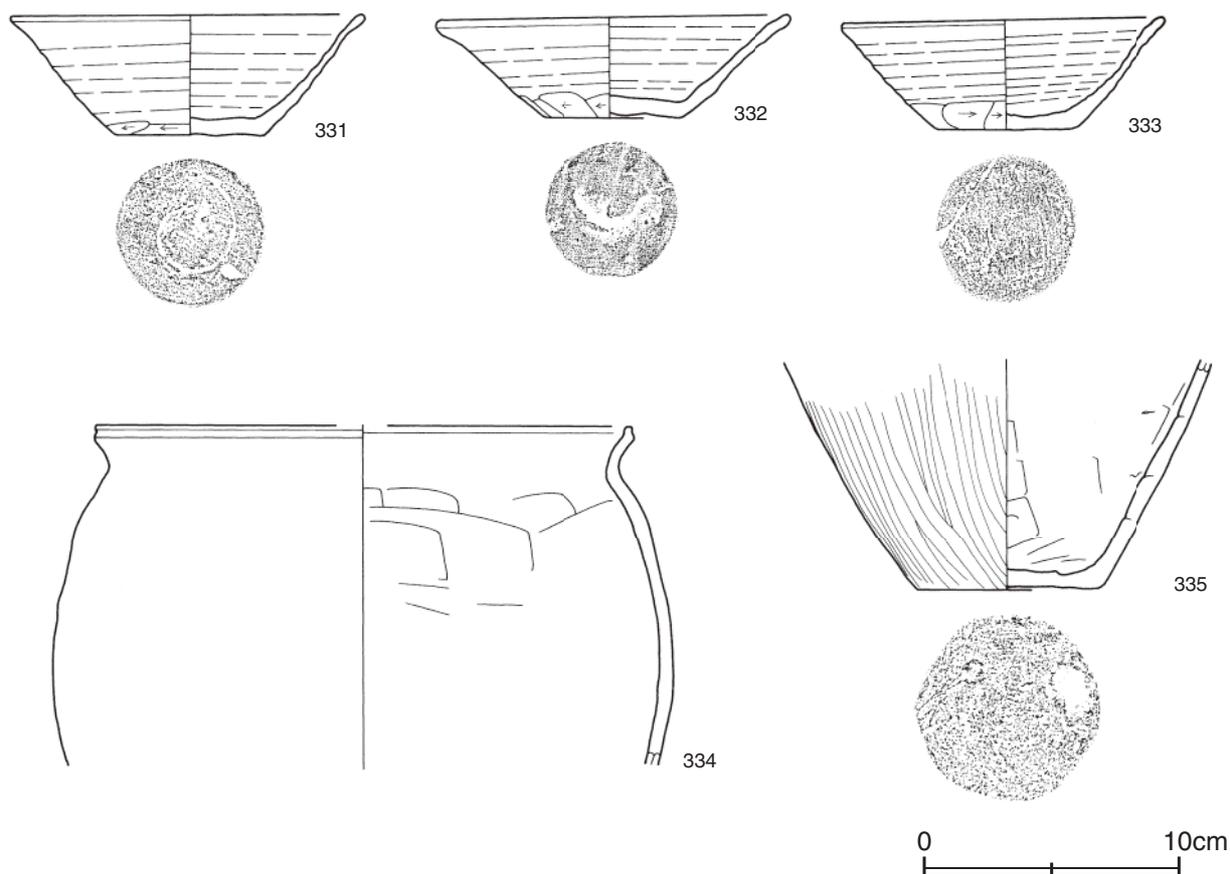
- | | | | |
|--------|----------------|---------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 8 にぶい褐色 | 白色粘土粒子中量, ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 10 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 極明褐色 | ローム粒子微量 | 11 明褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 12 褐色 | ローム粒子中量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子微量 | 13 灰褐色 | ロームブロック少量 |
| 7 褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 156 点 (坏 3, 甕類 152, 甑 1), 須恵器片 44 点 (坏 25, 高台付坏 2, 蓋 3, 瓶類 1, 甕類 12, 甑 1) が出土している。331・335 は竈火床面の北部に逆位の状態でそれぞれ出土しており, いずれも支脚として使用されたものである。334 は竈の覆土上層, 332 は北東部壁際の覆土下層, 333 は北東部の覆土上層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 167 図 第 183 号住居跡実測図



第 168 図 第 183 号住居跡出土遺物実測図

第 183 号住居跡出土遺物観察表 (第 168 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
331	須恵器	坏	13.9	4.8	5.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り痕を残す一方向のヘラ削り	竈火床部	90% PL46
332	須恵器	坏	13.7	4.2	5.4	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	80% PL46
333	須恵器	坏	12.7	4.5	5.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土上層	60%
334	土師器	甕	[21.2]	(13.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈覆土上層	10%
335	土師器	甕	-	(9.2)	7.3	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部ナデ	竈火床部	20%

第 184 号住居跡 (第 169・170 図)

位置 調査区南西部の E 4 j9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 182 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 2.54 m, 短軸 2.48 m の方形で, 主軸方向は N - 7° - E である。壁高は 20 ~ 25cm で, 直立している。

床 ほぼ平坦で, 壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚き口から煙道部まで 96cm で, 燃焼部幅は 32cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし, その上に砂質粘土を主体とした第 10 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 5 cm 掘りくぼめた部分に, 焼土粒子を含んだ第 11 層が埋土されており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。火床部の北部には, 羽口を転用した支脚が据えられており, 焚き口からの距離は 73cm で, 縦並び二

掛竈の可能性はある。煙道部は壁外に52cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第1～9層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------------|---------|-----------------------------------|
| 1 極暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 6 黒褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 灰褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 淡橙色 | 砂質粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 9 極暗赤褐色 | 炭化物少量, 焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 5 にぶい赤褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量 |
| | | 11 暗褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |

ピット 深さ15cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

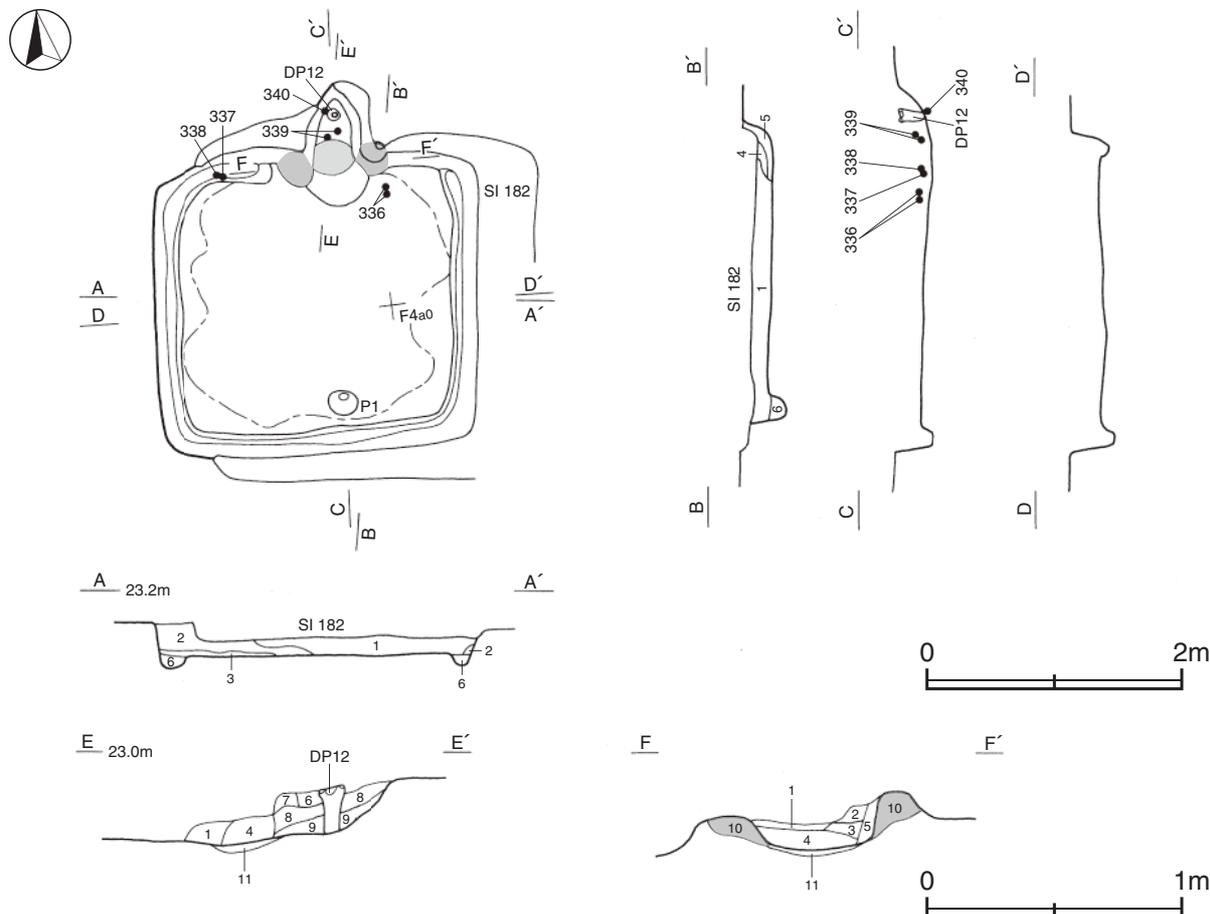
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

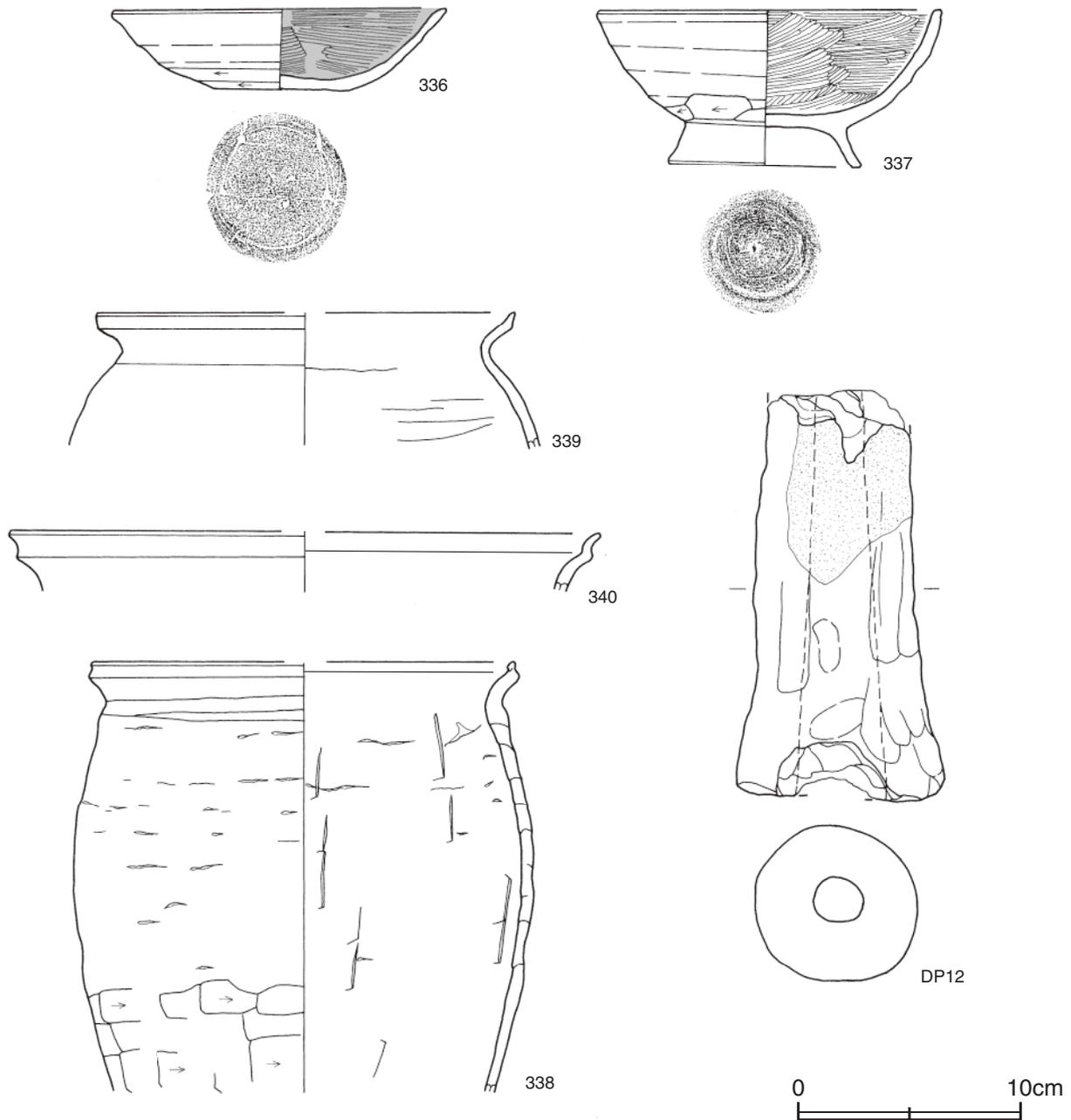
- | | | | |
|-------|-----------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 明褐色 | ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片55点(坏10, 高台付碗3, 甕類42), 須恵器片10点(坏4, 高台付坏1, 甕類5), 土製品1点(羽口), 鉄製品1点(刀子)のほか, 鉄滓2点(49.6g)が散在した状態で出土している。DP12は竈火床面の北部に立位の状態に据えられており, 支脚として使用されたものである。339・340は竈, 336は竈前, 337・338は北西部壁際の覆土下層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第169図 第184号住居跡実測図



第170図 第184号住居跡出土遺物実測図

第184号住居跡出土遺物観察表（第170図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
336	土師器	坏	15.0	3.9	6.2	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り	覆土下層	80% PL46
337	土師器	高台付椀	15.5	7.5	8.6	長石・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部一方のヘラ削り後、高台貼り付け	覆土下層	60% PL46
338	土師器	甕	[19.0]	(19.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面上位輪積痕を残すナデ 下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すヘラナデ	覆土下層	20%
339	土師器	甕	[19.0]	(6.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	甕覆土下層	10%
340	土師器	甕	[26.6]	(2.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	甕覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP12	羽口	(18.1)	9.4	7.1	(935)	長石・石英	先端部に溶融物付着 ナデ 孔径2.0～4.2cm	竈火床部	PL48

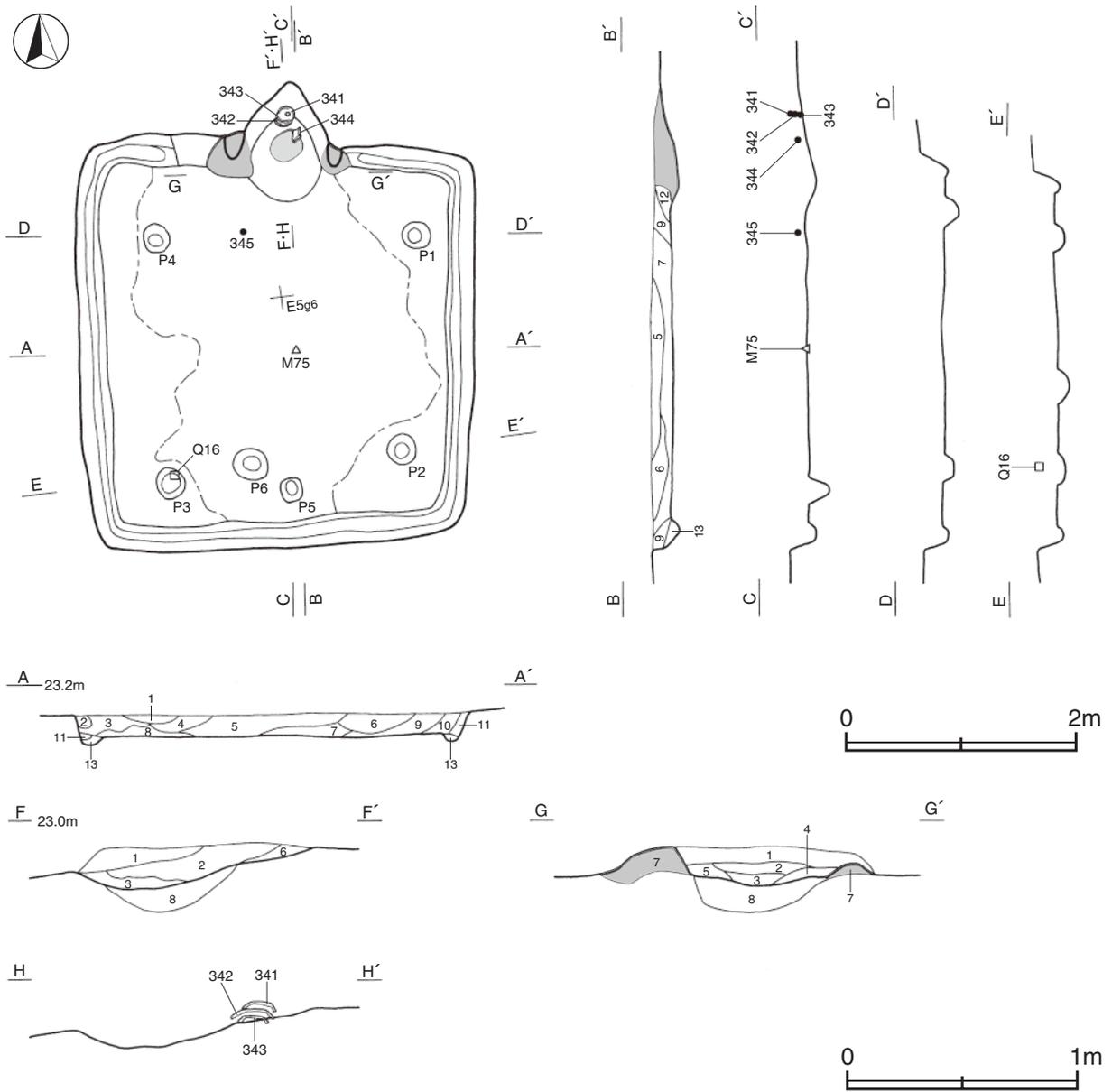
第 186 号住居跡 (第 171 ~ 173 図)

位置 調査区西部の E 5 g5 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸 3.69 m, 短軸 3.46 m の方形で, 主軸方向は $N - 7^\circ - E$ である。壁高は 14 ~ 18 cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 105 cm で, 燃焼部幅は 61 cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし, その上に砂質粘土混じりのロームを主体とした第 7 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 18 cm 掘りくぼめた部分に, ローム粒子を多く含んだ第 8 層が埋土されており, 火床面は火を受けて赤変硬化している。火床部の北部には, 土師器破片が積み重ねて据えられており, 支脚として使用されている。焚き口からの距離は 72 cm である。煙道部は壁外に 50 cm 掘り込まれ, 火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。



第 171 図 第 186 号住居跡実測図

竈土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物少量, ローム粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 4 赤褐色 | 焼土粒子多量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | | |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | | |

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ10～14cmで、規模や配置から主柱穴である。P 5は深さ23cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ13cmで、性格不明である。

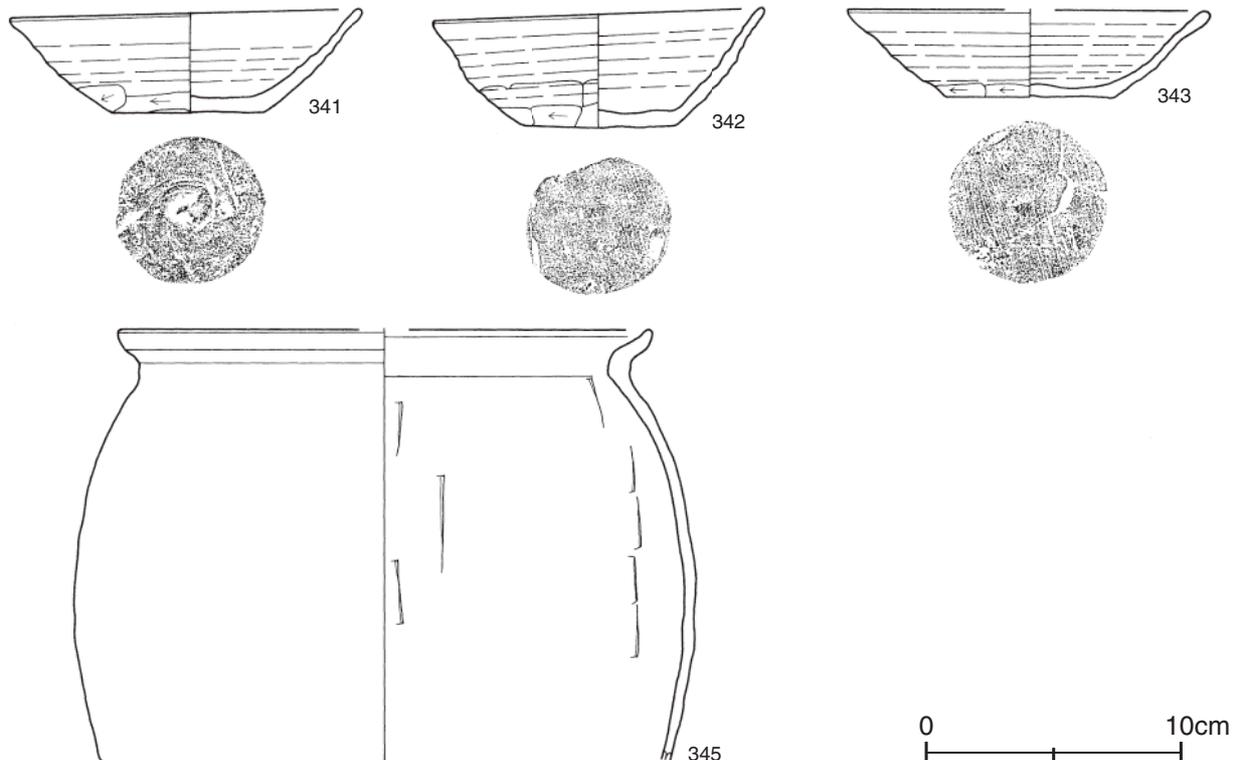
覆土 13層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、ブロック状に堆積していることから埋め戻されている。

土層解説

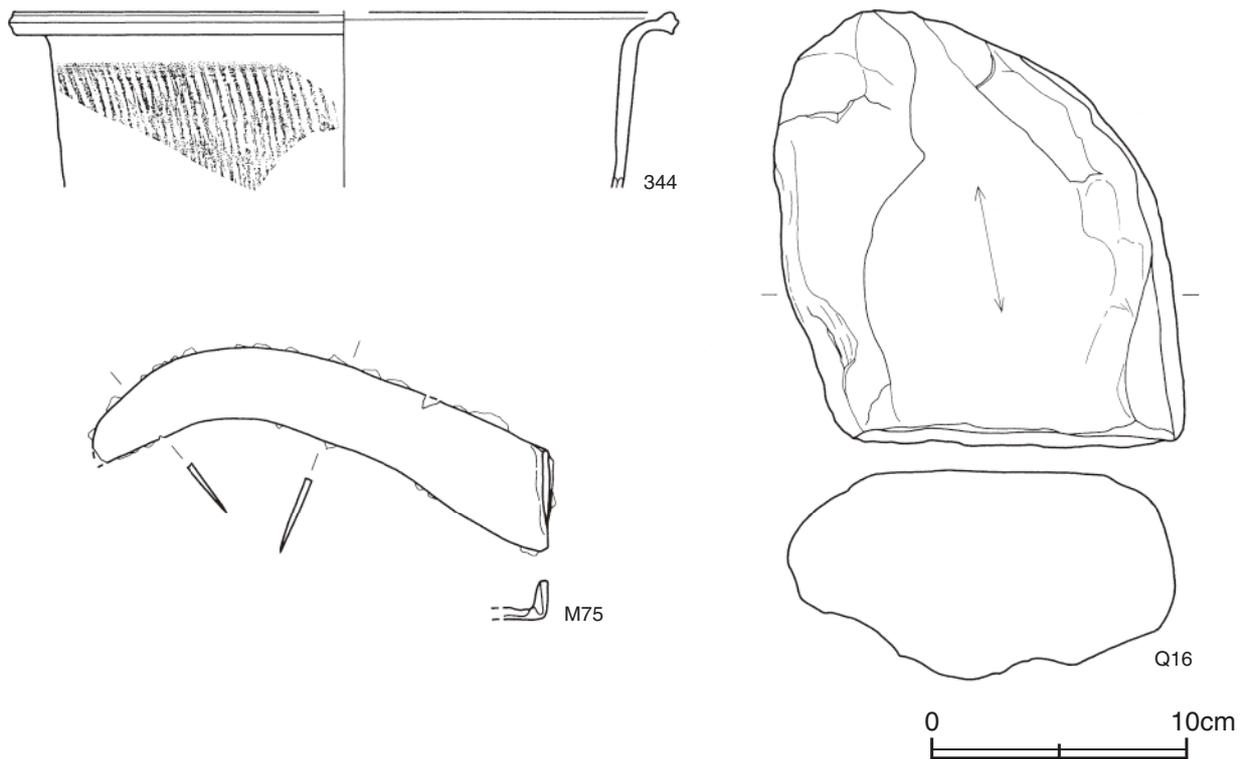
- | | | | |
|---------|------------------------|----------|---------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 明褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック微量 | 9 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 極暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 6 にぶい褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 13 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片187点（坏3，甕類184），須恵器片116点（坏57，盤1，鉢1，甕類55，甑2），灰釉陶器片1点（長頸瓶），石器1点（砥石），鉄製品1点（鎌）が、竈と竈前の覆土中層から下層を中心に出土している。341～343は竈火床面の北部に逆位の状態で重ねて据えられており、いずれも支脚として使用されたものである。344は竈，345は竈前の覆土下層，M 75は中央部の床面からそれぞれ出土しており、いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。Q 16は南西部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第172図 第186号住居跡出土遺物実測図（1）



第 173 図 第 186 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 186 号住居跡出土遺物観察表 (第 172・173 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
341	須恵器	坏	13.8	4.1	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り痕を残す多方向のヘラ削り	竈火床部	100% PL46
342	須恵器	坏	13.0	4.8	6.0	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈火床部	95% PL46
343	須恵器	坏	[14.3]	3.5	6.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	竈火床部	40%
344	須恵器	鉢	[26.0]	(7.0)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部縦位の平行叩き 内面ナデ	竈覆土下層	10%
345	土師器	甕	[21.0]	(17.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	25%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	砥石	17.4	16.3	8.4	3520	砂岩	砥面 1 面 他は破断面	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 75	鎌	(18.2)	8.1	0.35	(74.0)	鉄	ほぼ完形 刃部断面三角形 柄付部 L 字に屈曲	床面	PL50

第 189 号住居跡 (第 174・175 図)

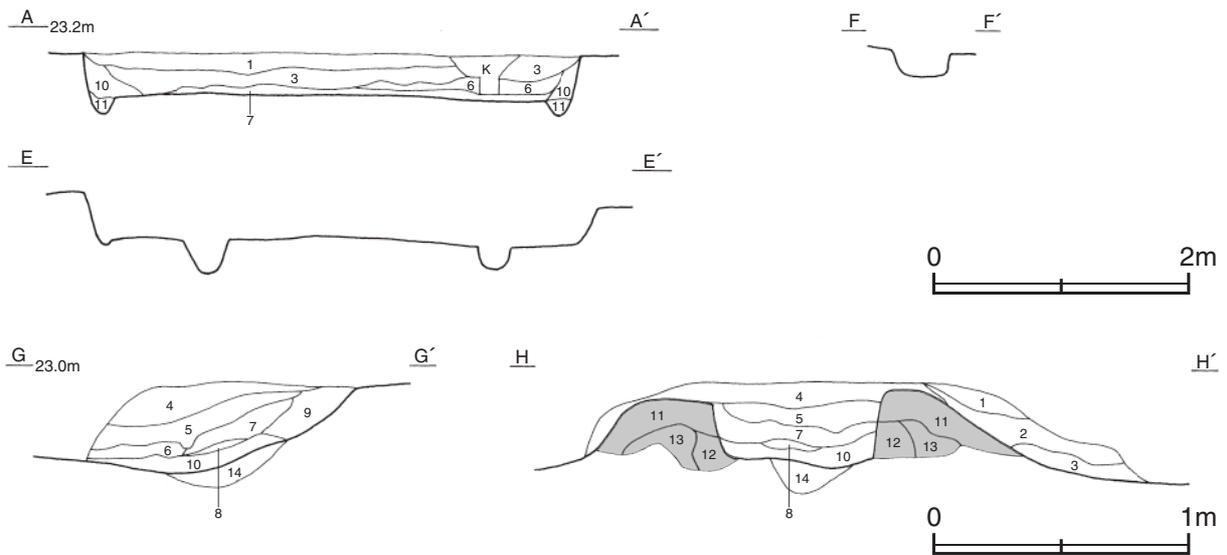
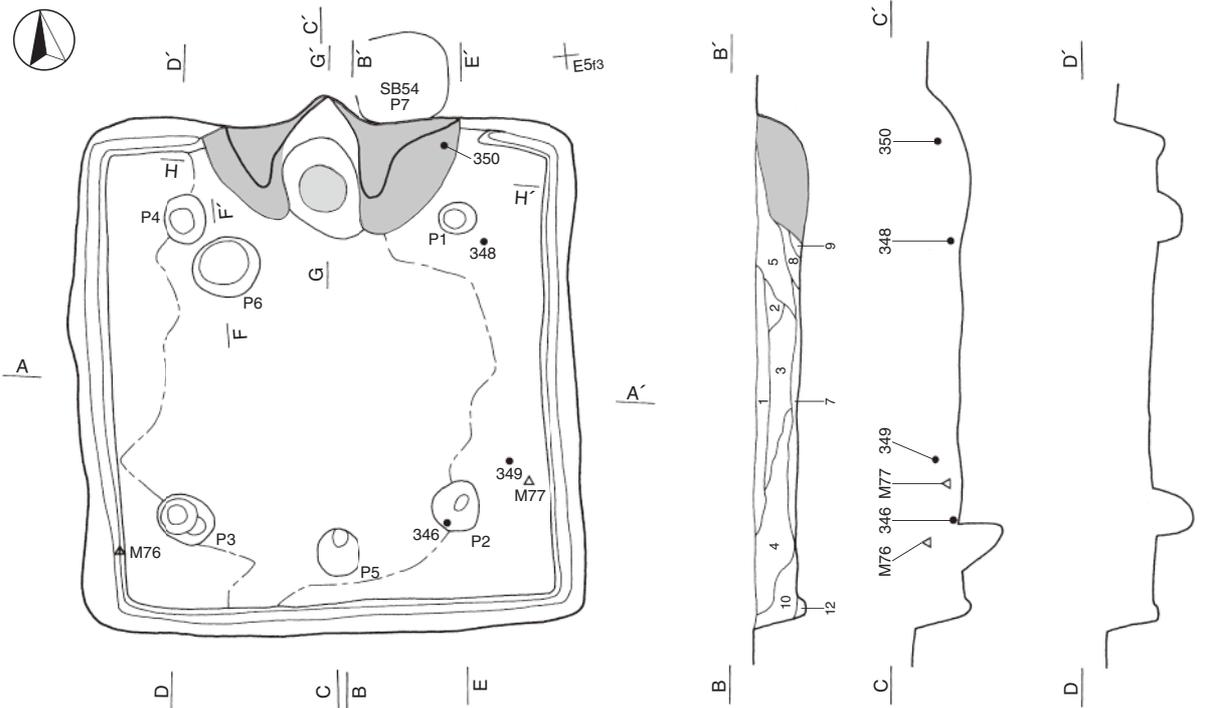
位置 調査区西部の E 5 f2 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 54 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 4.10 m, 短軸 3.97 m の方形で, 主軸方向は N - 5° - E である。壁高は 30 ~ 38cm で, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 113cm で, 燃焼部幅は 60cm である。袖部は地山を掘り残して基部とし, その上に砂質粘土を主体とした第 11 ~ 13 層を積み上げて構築されている。火床部は床面を 12cm 掘りくぼめた部分に, 焼土ブロックを含んだ第 14 層が埋土されており, 火床面は火を受けて



第174図 第189号住居跡実測図

赤変硬化している。煙道部は壁外に17cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第1～6層は、袖部及び天井部の崩落土である。

甕土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------------|-----------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 9 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 灰褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 12 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 13 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子微量 | 14 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量 |

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ19～31cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P 5は深さ35cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ21cmで、性格不明である。

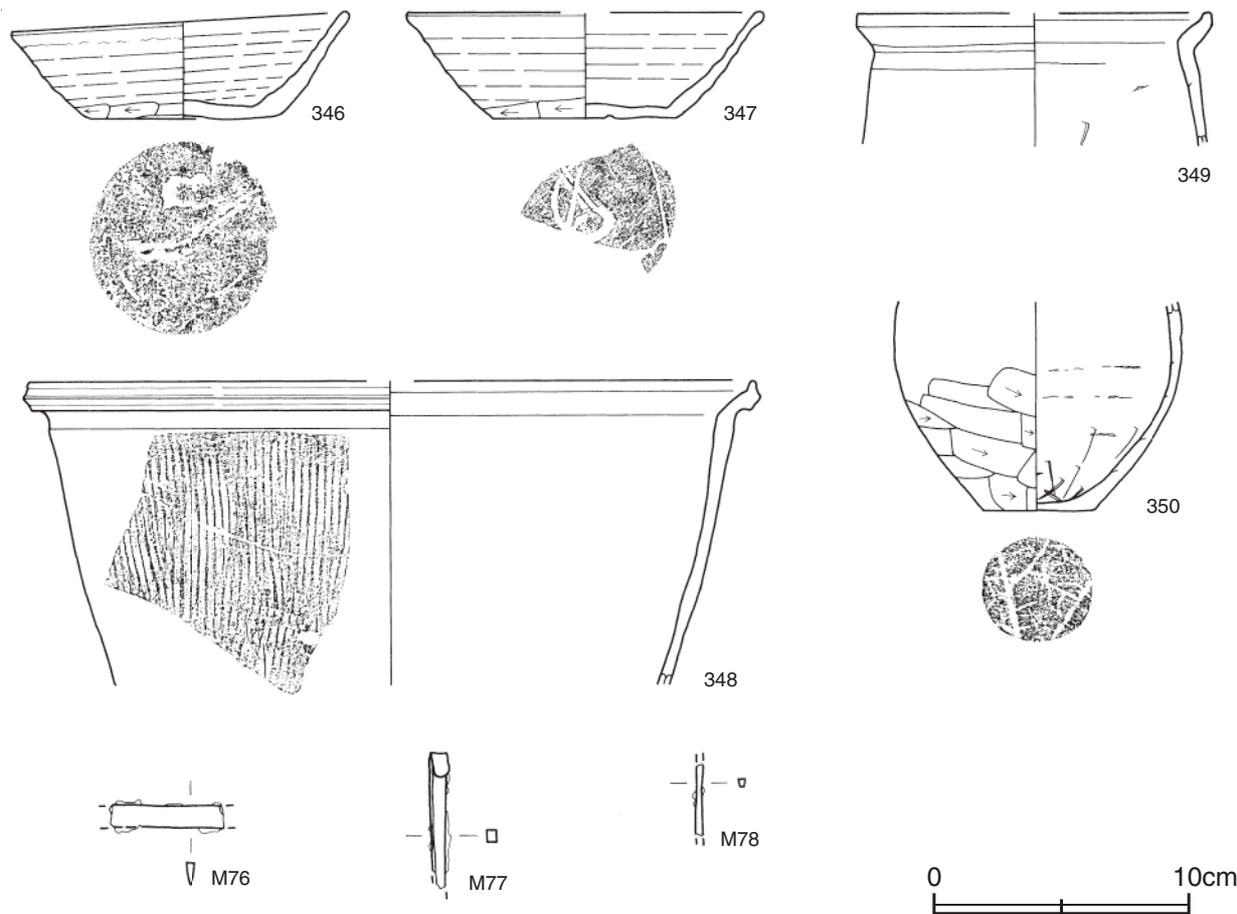
覆土 12層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	7 黒 褐 色	ロームブロック・焼土粒子微量
2 灰 褐 色	砂質粘土粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	8 灰 褐 色	砂質粘土粒子少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐 色	焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量	9 灰 褐 色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
4 暗 褐 色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量	10 黒 褐 色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量
5 灰 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量	11 褐 色	ロームブロック多量
6 暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	12 褐 色	ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片490点(坏34, 甕類454, 小形甕2), 須恵器片149点(坏69, 蓋6, 甕類74), 灰釉陶器片1点(長頸瓶), 鉄製品3点(刀子1, 釘2)のほか, 鉄滓4点(311.2g), 炭化材1点が, 竈前と北東部, 南部の覆土上層から下層にかけて出土している。346は南東部, 348は北東部, M77は南東部壁際の覆土下層, 350は竈, 349は南東部, M76は南西部壁際の覆土中層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。347・M78は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第175図 第189号住居跡出土遺物実測図

第 189 号住居跡出土遺物観察表（第 175 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
346	須恵器	坏	13.2	4.2	7.6	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り痕を残すナデ	覆土下層	100% PL47
347	須恵器	坏	[14.0]	4.2	[7.2]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り 底部にヘラ記号「☒」	覆土中	45%
348	須恵器	鉢	[28.6]	(12.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部縦位の平行叩き 内面ナデ	覆土下層	10%
349	土師器	小形甕	[14.0]	(5.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土中層	10%
350	土師器	小形甕	-	(8.3)	4.3	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面輪積痕を残すヘラナデ 底部木葉痕	竈覆土中層	55%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 76	刀子	(4.5)	0.9	0.3	(3.5)	鉄	刃部断面三角形	覆土中層	
M 77	釘	(5.4)	0.7	0.5	(5.8)	鉄	端部欠損 断面長方形	覆土下層	
M 78	釘	(2.75)	(0.3)	(0.25)	(0.8)	鉄	頭頂部・端部欠損 断面方形	覆土中	

第 190 号住居跡（第 176 図）

位置 調査区西部の E 5c2 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 54 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 330 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.29 m、短軸 3.22 m の隅丸方形で、主軸方向は N - 26° - E である。壁高は 30 ~ 40cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 85cm で、燃焼部幅は 48cm である。袖部は、床面を 15cm 掘りくぼめた部分にロームブロックを含んだ第 9 ~ 11 層を埋土し、その上に砂質粘土を主体とした第 7・8 層を積み上げて構築されている。内壁は火を受けて赤変している。火床部は床面とほほ同じ高さを使用しており、火床面は赤変、硬化ともに弱い。煙道部は壁外に 28cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がり、奥壁で直立している。第 2 ~ 5 層は、袖部及び天井部の崩落土である。

竈土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	灰	褐色	砂質粘土ブロック多量、ロームブロック少量、粘土ブロック微量
2	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量	8	灰	褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子微量
3	灰	褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量	9	暗	褐色	ロームブロック少量
4	黄	褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	褐	色	ロームブロック中量
5	暗	赤褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	暗	褐色	ローム粒子中量
6	にぶい	赤褐色	焼土ブロック微量				

ピット 深さ 25cm で、南壁際の中央部に位置していることや硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

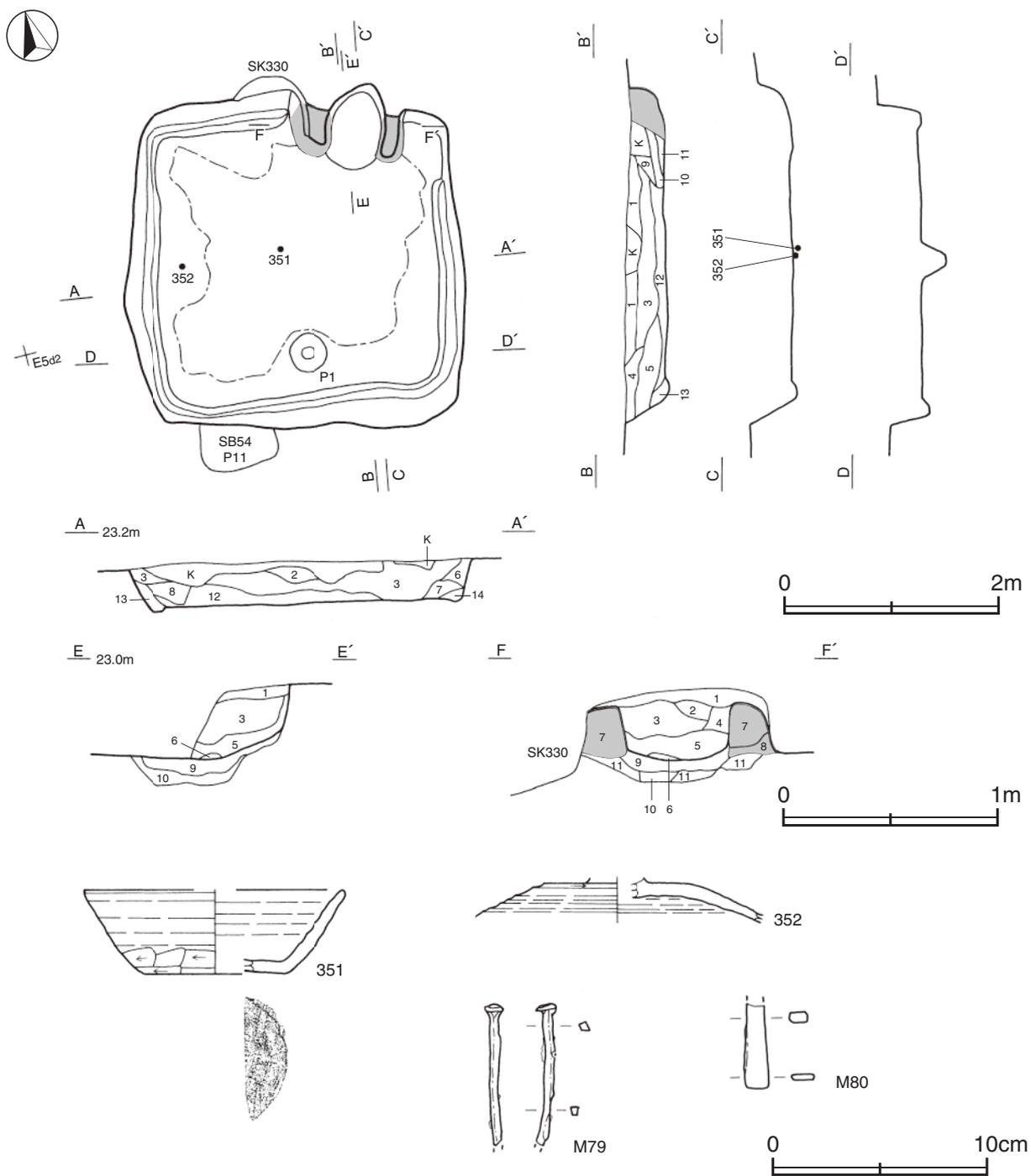
覆土 14 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1	褐	色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	9	灰	褐色	ロームブロック少量
2	褐	色	ロームブロック少量	10	灰	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
3	褐	色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	11	黒	褐色	ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4	褐	色	ロームブロック微量	12	暗	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
5	灰	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	13	褐	色	ローム粒子多量
6	褐	色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	14	褐	色	ローム粒子中量
7	黒	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量				
8	黒	褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量				

遺物出土状況 土師器片 67 点 (坏 5, 甕類 62), 須恵器片 32 点 (坏 20, 高台付坏 1, 蓋 2, 甕類 9), 鉄製品 2 点 (釘, 鑿カ) が出土している。また, 混入した土師質土器片 1 点 (鍋) も出土している。351 は中央部の床面, 352 は西部の覆土下層からそれぞれ出土しており, いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。M 79・M 80 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 176 図 第 190 号住居跡・出土遺物実測図

第 190 号住居跡出土遺物観察表 (第 176 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
351	須恵器	坏	[12.2]	4.0	[6.8]	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	30%
352	須恵器	蓋	-	(2.2)		長石・石英	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土下層	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 79	釘	(6.6)	0.9	0.3~0.4	(3.5)	鉄	端部欠損 断面方形	覆土中	PL51
M 80	鑿カ	(4.0)	1.2	0.3~0.5	(8.6)	鉄	先端部のみ遺存 断面長方形	覆土中	

第 191 号住居跡 (第 177・178 図)

位置 調査区南西部の F 5 c1 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 29 号溝に掘り込まれている。

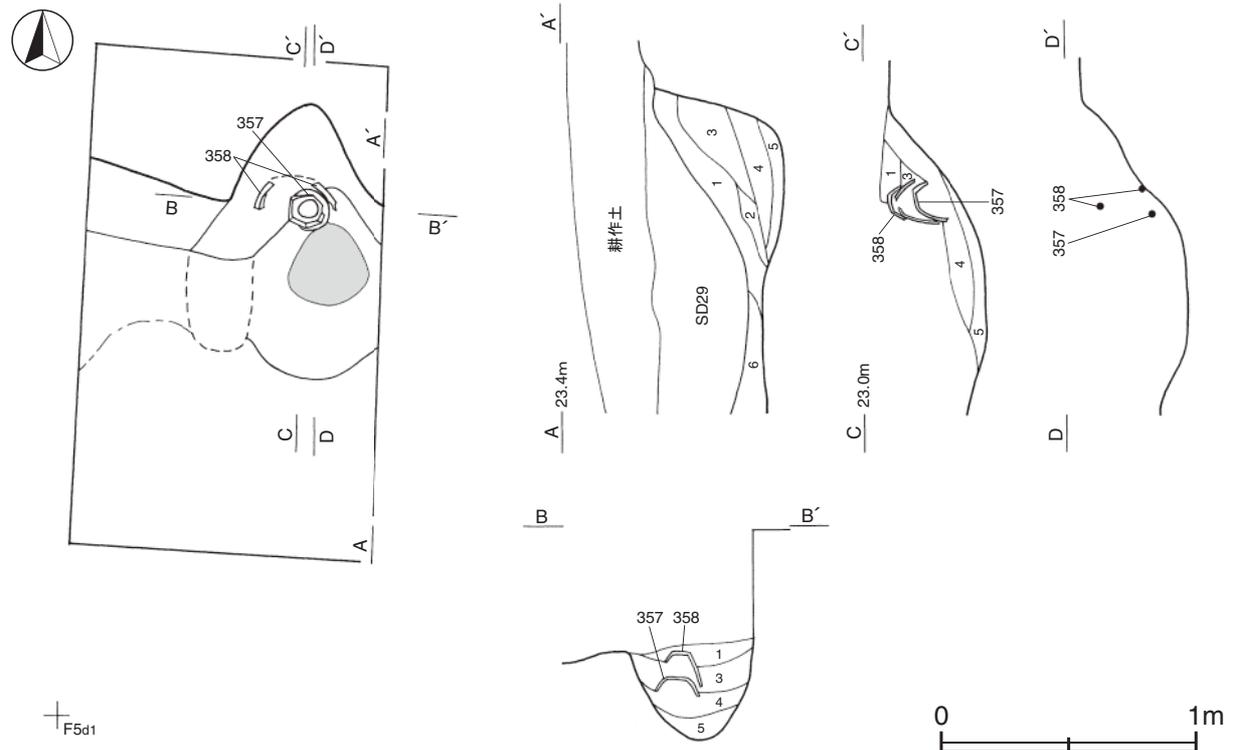
規模と形状 調査区域際で、大部分は調査区域外へ延びているため、東西軸は 1.24 m、南北軸は 0.80 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向は N-4°-E である。

床 ほぼ平坦で、竈前面が踏み固められている。

竈 煙道部の向きから北壁に付設されていたと推定できる。規模は焚口部から煙道部まで 109cm で、燃烧部幅は 36cm しか確認できなかった。火床部は床面から 10cm くぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。火床部の北部には、土師器小形甕片を転用して支脚とし、焚き口からの距離は 68cm である。煙道部は壁外に 50cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 ぶい赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量



第 177 図 第 191 号住居跡実測図

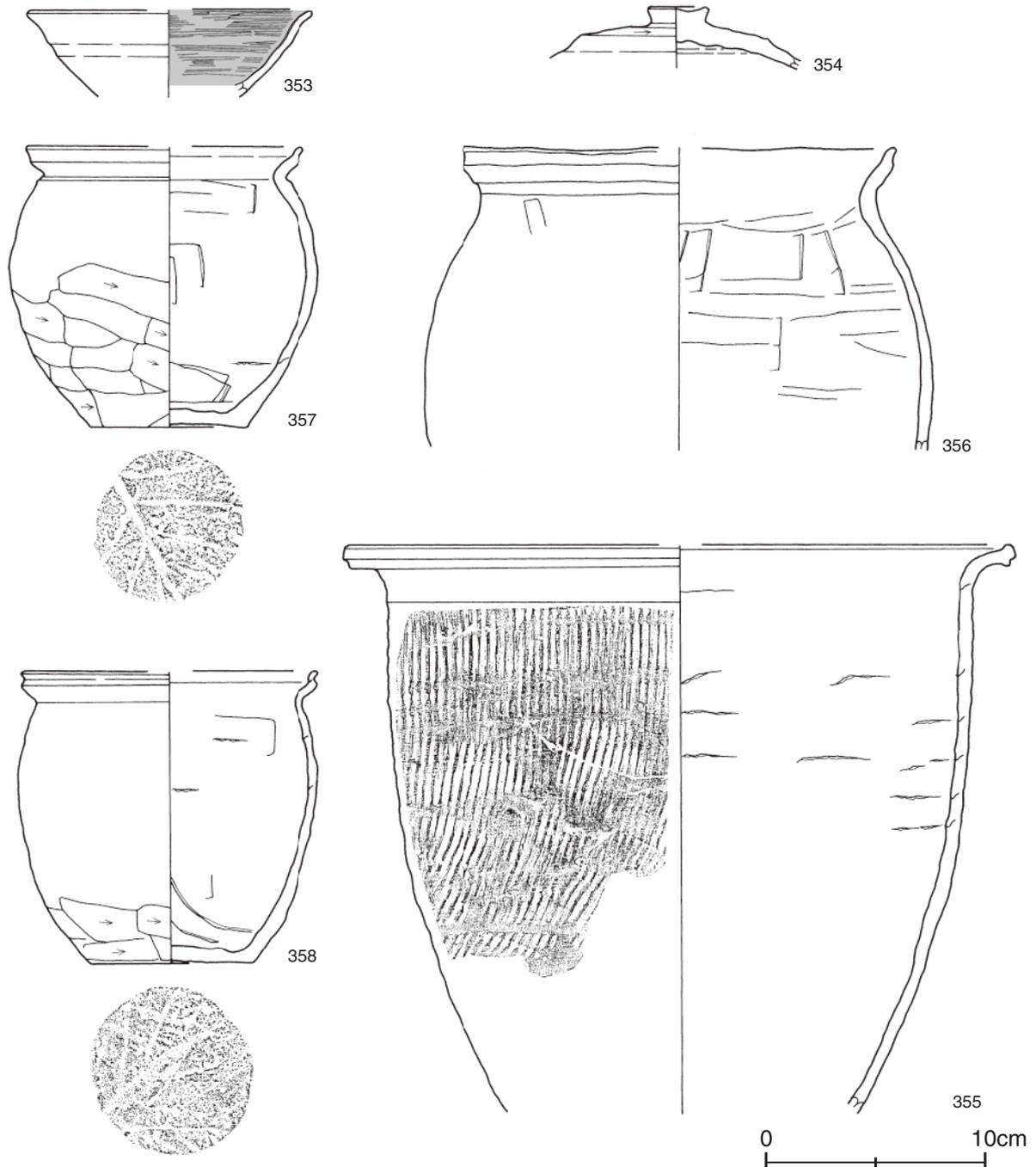
覆土 単一層である。ロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

6 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片 128 点（坏6，甕類 119，小形甕 3），須恵器片 28 点（坏6，蓋 1，鉢 2，甕類 13，甗 6）が出土している。357・358 は竈火床面の北部に逆位の状態で重ねて据えられており，支脚として使用されたものである。353～356 は竈前の覆土下層からそれぞれ出土しており，いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 178 図 第 191 号住居跡出土遺物実測図

第 191 号住居跡出土遺物観察表 (第 178 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
353	土師器	坏	[13.0]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	覆土下層	10%
354	須恵器	蓋	-	(2.8)	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け	覆土下層	45%
355	須恵器	鉢	[30.6]	(26.3)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部縦位の平行叩き 内面輪積痕を残すナデ	覆土下層	35%
356	土師器	甕	[19.8]	(14.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	20%
357	土師器	小形甕	[12.5]	13.0	7.2	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕	竈火床部	75% PL47
358	土師器	小形甕	[13.4]	13.5	7.4	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 下位ヘラ削り 内面輪積痕を残すヘラナデ 底部木葉痕	竈火床部	60%

表 5 平安時代 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
				長軸×短軸 (m)					主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
102	D 6 g3	方形	N - 20° - E	4.10 × 3.94	16 ~ 40	平坦	ほぼ全周	-	-	1	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀前葉		
125	E 6 b0	[方形・長方形]	N - 35° - E	(2.10 × 1.50)	10 ~ 15	平坦	一部	-	-	-	竈 1	-	不明	土師器片, 須恵器片	9世紀後葉	SI128 → 本跡 → PG13	
126	E 6 d0	[隅丸長方形]	N - 9° - E	[3.40 × 3.00]	-	平坦	-	-	1	-	竈 1	-	不明	土師器片, 支脚	9世紀後葉	本跡 → SK243, PG13	
127	D 6 i5	隅丸方形	N - 22° - E	3.58 × 3.43	40 ~ 46	平坦	ほぼ全周	4	1	3	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片, 刀子, 鎌, 釘	9世紀前葉	本跡 → SK244	
128	E 6 b0	[隅丸長方形]	N - 0°	4.36 × (3.44)	5	平坦	一部	2	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	9世紀中葉	本跡 → SI125, SK246	
129	E 6 b6	隅丸方形	N - 27° - E	3.65 × 3.41	20 ~ 25	平坦	全周	4	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀後葉	本跡 → SI131	
130	D 6 j7	方形	N - 43° - W	3.12 × 3.12	23 ~ 28	平坦	ほぼ全周	4	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀前葉		
131	E 6 a7	方形	N - 35° - W	3.05 × 2.78	9 ~ 12	平坦	一部	-	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片, 鉄滓	10世紀前葉	SI129 → 本跡	
133	E 6 j2	隅丸長方形	N - 25° - E	3.38 × 2.74	27 ~ 35	平坦	ほぼ全周	2	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀後葉		
134	E 6 i3	[隅丸方形]	N - 0°	3.73 × (2.35)	30 ~ 35	平坦	[全周]	2	1	-	-	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鎌	9世紀前葉	本跡 → SI135	
135	E 6 h2	方形	N - 23° - E	3.96 × 3.85	29 ~ 41	平坦	全周	-	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片	9世紀中葉	SI134 → 本跡 → SK247・248	
136	D 6 j6	方形	N - 13° - E	4.17 × 4.08	15 ~ 20	平坦	一部	4	1	1	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片, 釘, 鉄滓	9世紀後葉	SI142 → 本跡	
137	E 6 f3	長方形	N - 19° - E	3.52 × 2.92	40 ~ 48	平坦	全周	-	2	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	9世紀後葉	本跡 → SK249	
138	E 6 g3	[隅丸方形]	N - 2° - E	3.18 × (1.14)	50 ~ 53	平坦	[全周]	-	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀前葉		
139	E 6 c5	方形	N - 41° - E	4.10 × 3.82	6 ~ 13	平坦	-	3	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 釘, 瓦片	9世紀後葉		
141	E 6 g2	隅丸方形	N - 5° - E	4.25 × 4.19	38 ~ 54	平坦	ほぼ全周	4	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 支脚, 刀子, 釘, 鉄滓	9世紀前葉	SK249・253 → 本跡 → SK248	
142	E 6 a5	隅丸方形	N - 25° - E	3.85 × 3.79	30 ~ 34	平坦	ほぼ全周	4	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀中葉	SI148 → 本跡 → SI136	
146	F 5 a9	隅丸方形	N - 19° - E	3.03 × 2.82	44 ~ 52	平坦	-	1	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀中葉	SI168・SK284 → 本跡	
147	E 5 i9	隅丸方形	N - 13° - E	2.77 × 2.61	18 ~ 25	平坦	-	2	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	9世紀後葉		
149	E 5 g0	隅丸長方形	N - 9° - E	3.08 × 2.59	40 ~ 48	平坦	-	-	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	9世紀中葉		
154	E 5 e7	隅丸方形	N - 108° - E	3.78 × 3.72	28 ~ 35	平坦	ほぼ全周	3	1	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 置き竈, 刀子, 鎌	9世紀後葉	SI153 → 本跡	
155	D 6 i3	[隅丸長方形]	N - 2° - W	(2.52) × 2.17	9 ~ 16	平坦	-	-	-	6	-	-	人為	土師器片, 須恵器片, 羽口, 金床石	9世紀後半	SI150 → 本跡 → SD26	
156	E 6 d1	方形	N - 29° - W	3.67 × 3.37	14 ~ 19	平坦	一部	4	1	1	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 瓦片, 鉄滓, 鍛造剥片	10世紀前葉	SI160・163 → 本跡 → SD26, SK255	
157	D 5 i0	方形	N - 99° - E	3.58 × 3.40	32 ~ 47	平坦	全周	4	1	-	竈 2	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	9世紀前葉		
158	E 6 b3	[方形]	N - 22° - E	3.52 × (3.28)	35 ~ 42	平坦	[全周]	3	-	-	竈 1	-	自然	土師器片, 須恵器片, 刀子	9世紀前葉	SI152 → 本跡 → SI159・162	
159	E 6 c2	方形	N - 4° - E	3.02 × 2.83	36 ~ 43	平坦	-	-	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片, 炭化米	9世紀後葉	SI158・162 → 本跡	
160	E 6 d1	[方形]	N - 0°	[3.84] × 3.65	10 ~ 21	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器片, 須恵器片	9世紀代	本跡 → SI156, SD26, SK255	
161	E 5 f0	隅丸方形	N - 13° - E	3.96 × 3.63	36 ~ 44	平坦	全周	1	1	-	竈 2	-	人為	土師器片, 須恵器片, 砥石, 鍛造剥片, 炭化米	9世紀中葉	SK267 → 本跡 → SK256	
162	E 6 c2	隅丸方形	N - 13° - E	3.57 × 3.37	32 ~ 47	平坦	全周	4	1	2	竈 1	1	人為	土師器片, 須恵器片, 瓦片, 鉄滓	9世紀中葉	SI158・163 → 本跡 → SI159	
164	E 6 a2	隅丸方形	N - 0°	3.35 × 3.16	18 ~ 29	平坦	一部	3	-	1	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 砥石, 刀子	9世紀中葉	SI152 → 本跡 → SD26, SK257	
165	E 6 a1	[方形・長方形]	N - 25° - E	3.34 × (3.10)	18 ~ 20	平坦	一部	-	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 瓦片, 鉄滓	9世紀中葉	本跡 → SD26	
169	E 5 i6	隅丸長方形	N - 2° - W	4.50 × 3.74	32 ~ 43	平坦	-	4	1	1	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 砥石, 釘, 鉄滓	10世紀前葉	SI167 → 本跡	
173	F 5 b5	方形	N - 15° - E	3.70 × 3.58	43	平坦	全周	4	1	-	竈 2	-	人為	土師器片, 須恵器片, 金床石, 鉄滓, 梔形滓	9世紀前葉	本跡 → SI174・175	
174	F 5 c5	[隅丸方形・隅丸長方形]	N - 10° - E	4.93 × (2.15)	30 ~ 40	平坦	-	-	-	-	竈 1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀後葉	SI173 → 本跡 → 第2号鍛冶工房跡	

番号	位置	平面形	主軸方向	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
				長軸×短軸(m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
175	F 5 a5	[隅丸方形・隅丸長方形]	N - 4° - W	4.21 × (2.98)	6 ~ 16	平坦	-	-	-	1	竈1	-	自然	土師器片, 須恵器片, 置き竈, 鉄滓	10世紀前葉	SI173 → 本跡 → SD27・28
176	F 5 b2	隅丸長方形	N - 8° - W	2.55 × 2.20	15 ~ 17	平坦	-	1	-	-	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片	10世紀前葉	本跡 → SI178, SK299
177	E 5 c9	方形	N - 98° - E	3.15 × 3.15	19 ~ 22	平坦	-	-	-	-	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 支脚, 釘, 鉄滓	10世紀前葉	SI171 → 本跡 → PG17
178	F 5 b2	[隅丸方形・隅丸長方形]	N - 94° - E	4.12 × (2.80)	20 ~ 25	平坦	-	-	1	-	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 支脚, 鉄製紡錘車	10世紀中葉	SI176 → 本跡
181	F 4 b9	隅丸長方形	N - 94° - E	2.42 × (2.10)	33 ~ 35	平坦	-	2	-	-	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	9世紀後葉	本跡 → SK310
182	E 4 j9	隅丸方形	N - 6° - E	2.87 × 2.76	4 ~ 8	平坦	-	-	-	-	竈1	-	不明	土師器片, 須恵器片	10世紀中葉	SI184 → 本跡 → SK317
183	E 4 i9	隅丸方形	N - 13° - E	3.47 × 3.35	26 ~ 30	平坦	全周	4	1	-	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片	9世紀後葉	本跡 → SB65
184	E 4 j9	方形	N - 7° - E	2.54 × 2.48	20 ~ 25	平坦	-	-	1	-	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 羽口, 刀子, 鉄滓	10世紀前葉	本跡 → SI182
186	E 5 g5	方形	N - 7° - E	3.69 × 3.46	14 ~ 18	平坦	全周	4	1	1	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 灰袖陶器片, 砥石, 鎌	9世紀中葉	
189	E 5 f2	方形	N - 5° - E	4.10 × 3.97	30 ~ 38	平坦	-	4	1	1	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 灰袖陶器片, 刀子, 釘, 鉄滓	9世紀前葉	SB54 → 本跡
190	E 5 c2	隅丸方形	N - 26° - E	3.29 × 3.22	30 ~ 40	平坦	ほぼ全周	-	1	-	竈1	-	人為	土師器片, 須恵器片, 釘, 鑿カ	9世紀前葉	SB54 → 本跡 → SK330
191	F 5 c1	[方形・長方形]	N - 4° - E	(1.24 × 0.80)	-	平坦	-	-	-	-	竈1	-	不明	土師器片, 須恵器片	9世紀中葉	本跡 → SD29

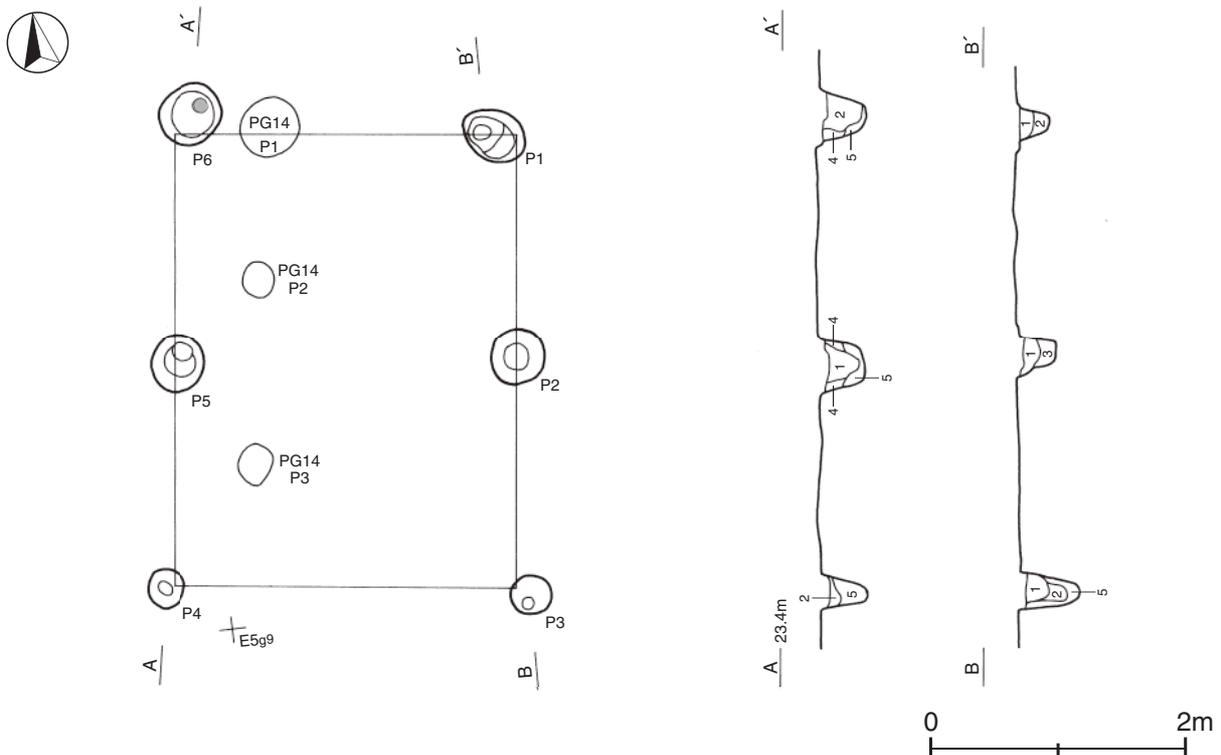
(2) 掘立柱建物跡

第46号掘立柱建物跡 (第179図)

位置 調査区中央部のE 5 f9区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第14号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行2間, 梁行1間の側柱建物跡で, 桁行方向はN - 7° - Eの南北棟である。規模は桁行3.60m, 梁行2.70mで, 面積は9.72㎡である。柱間寸法は, 桁行1.8m(6尺), 梁行2.7m(9尺)で等間隔に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。



第179図 第46号掘立柱建物跡実測図

柱穴 6か所。平面形は円形または楕円形で、長径 30～53cm、短径 30～46cmである。深さは 31～59cmで、掘方の断面形はU字形である。第1～3層は柱抜き取り後の堆積層、第4・5層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 5 褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 | | |

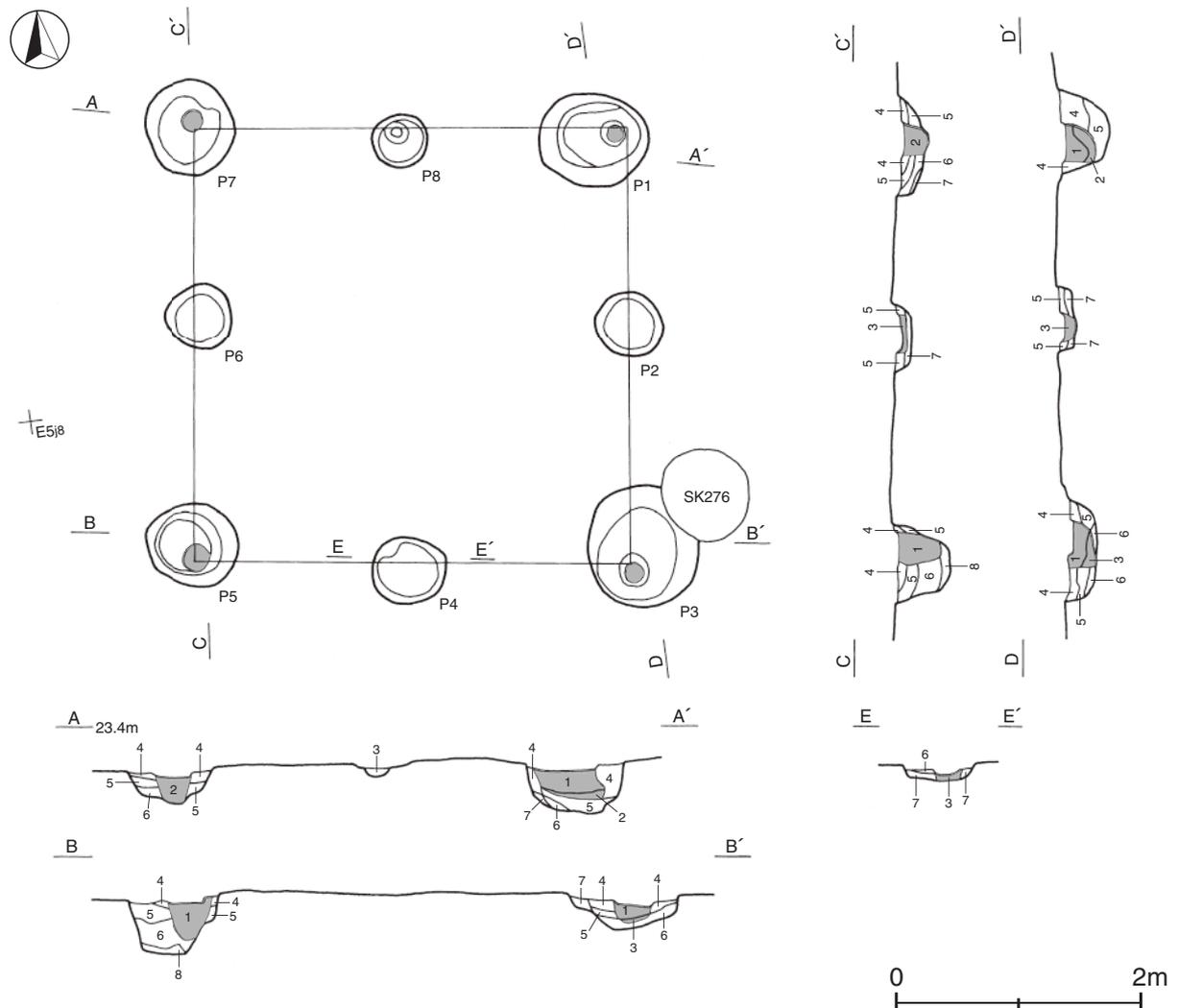
遺物出土状況 土師器片 16点（坏2，甕類14），須恵器片 5点（坏2，蓋1，甕類2）がP3・P5・P6から出土している。いずれも細片で，図示できないが，内面黒色処理が施された土師器坏片や縦位の平行叩きが施された須恵器甕片がP3の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から9世紀後半と考えられる。

第48号掘立柱建物跡（第180・181図）

位置 調査区南部のE5i8～E5j9区，標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第276号土坑に掘り込まれている。



第180図 第48号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の側柱建物跡で、桁行方向はN-8°-Eの南北棟である。規模は桁行、梁行ともに3.60 mで、面積は12.96㎡である。柱間寸法は、桁行、梁行ともに1.80 m（6尺）で等間隔に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

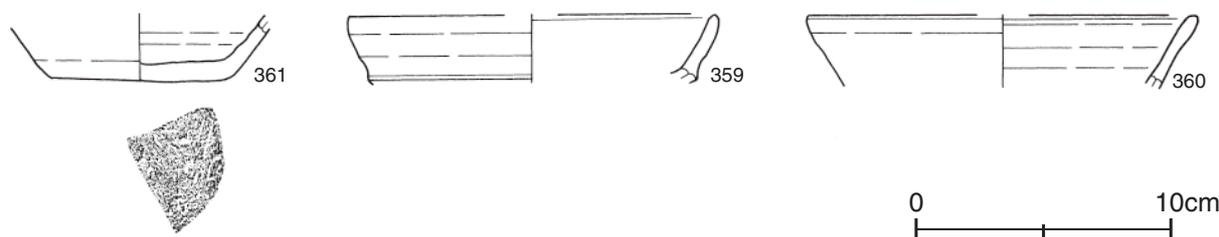
柱穴 8か所。平面形は円形または楕円形で、長径44～100cm、短径42～92cmである。深さは7～43cmで、掘方の断面形はU字形である。第1～3層は柱痕跡、第4～8層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片28点（坏1、甕類27）、須恵器片14点（坏13、甕類1）が、P1～P3・P5・P7から出土している。360はP1、361はP7の埋土から、359はP5の柱痕跡からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第181図 第48号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第48号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第181図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
359	土師器	坏	[14.6]	(2.7)		長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	P5柱痕跡	10%
360	須恵器	坏	[15.4]	(2.9)	-	長石・雲母	黄灰	普通	ロクロナデ	P1埋土	10%
361	須恵器	坏	-	(2.7)	[6.8]	長石・石英・雲母	浅黄	普通	底部多方向のヘラ削り	P7埋土	10%

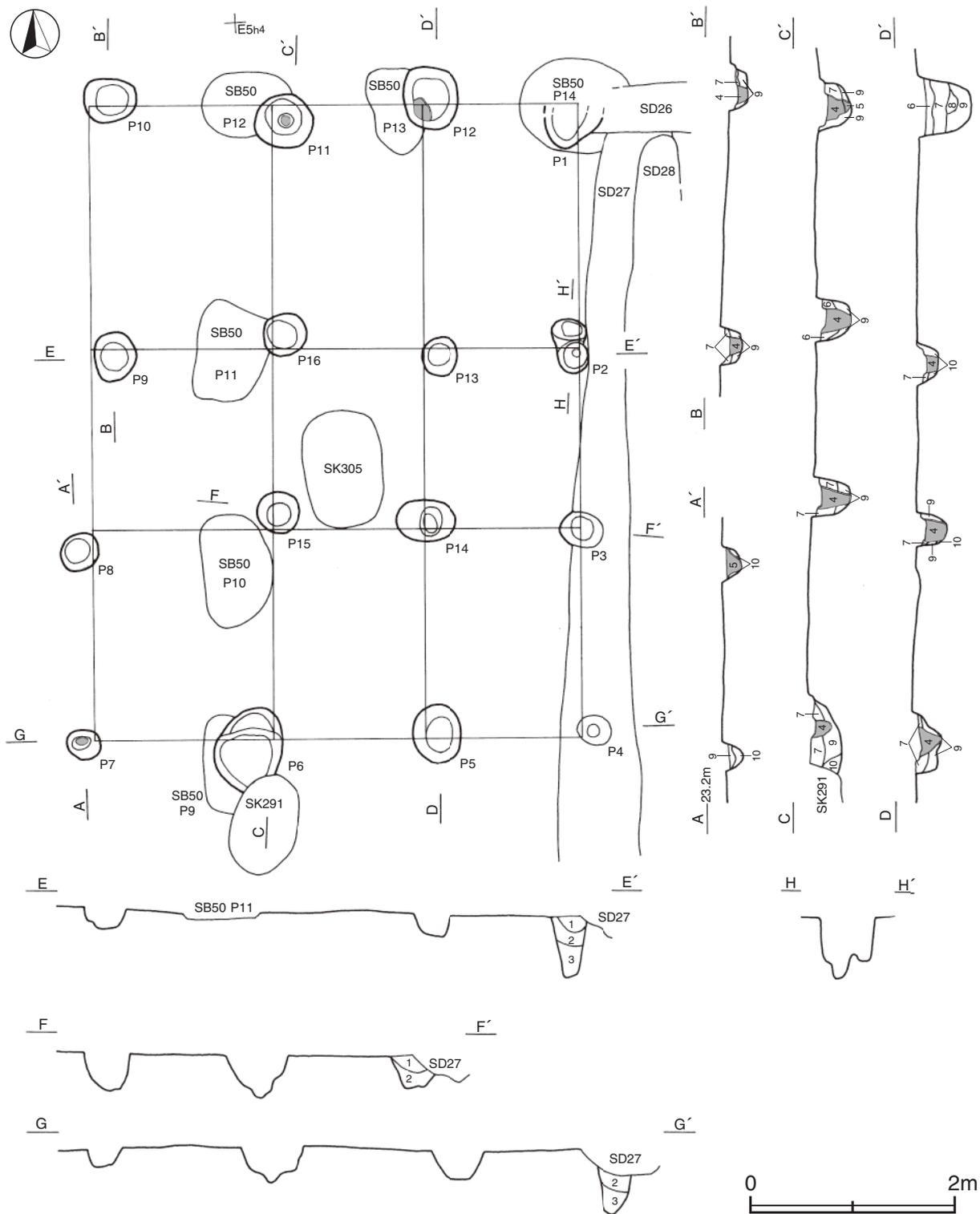
第51号掘立柱建物跡（第182図）

位置 調査区南西部のE5h3～E5i4区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第50号掘立柱建物跡を掘り込み、第26・27号溝、第291号土坑に掘り込まれている。第305号土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行、梁行ともに3間の総柱建物跡で、桁行方向はN-3°-Eの南北棟である。規模は桁行6.30 m、梁行4.80 mで、面積は30.24㎡である。柱間寸法は、桁行が北妻から2.4 m（8尺）・1.8 m（6尺）・2.1 m（7尺）で、梁行は西平から1.8 m（6尺）・1.5 m（5尺）・1.5 m（5尺）で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 16か所。平面形は円形または楕円形で、長径31～94cm、短径29～65cmである。深さは17～62cmで、掘方の断面形は逆台形である。第1～3層は柱抜き取り後の堆積層、第4・5層は柱痕跡、第6～10層は掘方への埋土である。



第 182 図 第 51 号掘立柱建物跡実測図

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|---------|-------------------|---------|------------------------|
| 1 暗 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 暗 褐 色 | 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 黒 褐 色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐 色 | ロームブロック少量 | 8 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 9 暗 褐 色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗 褐 色 | ロームブロック微量 | 10 褐 色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 50 点（坏 5，甕類 45），須恵器片 9 点（坏 6，蓋 2，甕類 1）が P 1～P 6・P 9・P 11～P 15 から出土している。細片で図示できないが，内面黒色処理が施された土師器坏片や縦位の平行叩きが施された須恵器甕片が出土している。

所見 時期は，8 世紀前葉に比定できる第 50 号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや，出土土器から 9 世紀後半と考えられる。

第 53 号掘立柱建物跡（第 183・184 図）

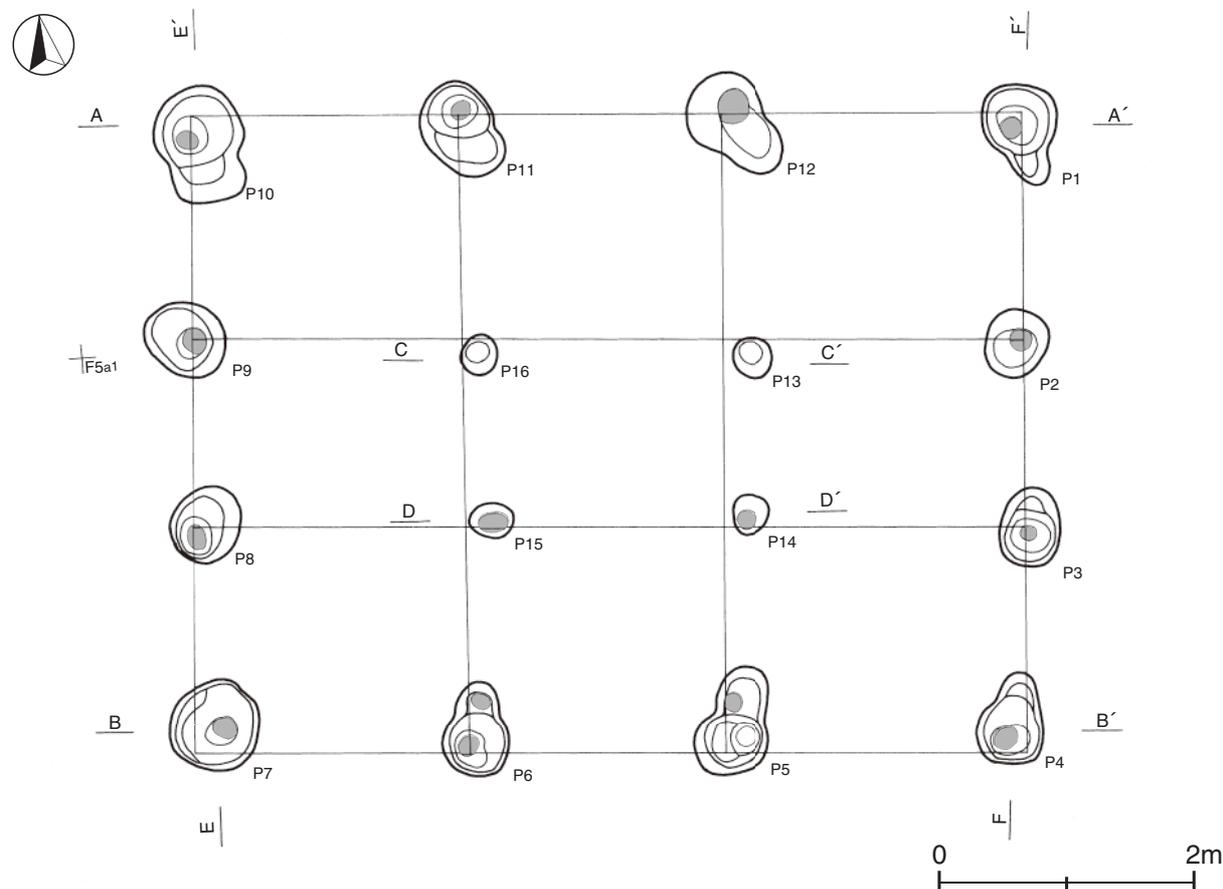
位置 調査区南西部の E 5j1～F 5a2 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と構造 桁行，梁行ともに 3 間の総柱建物跡で，桁行方向は N - 86° - W の東西棟である。規模は桁行 6.60 m，梁行 5.10 m で，面積は 33.66㎡である。柱間寸法は，桁行が西妻から 2.4 m（8 尺）・2.1 m（7 尺）・2.1 m（7 尺）で，梁行は北平から 1.8 m（6 尺）・1.5 m（5 尺）・1.8 m（6 尺）で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 16 か所。平面形は円形または楕円形で，長径 57～93cm，短径 40～47cm である。深さは 57～93cm で，掘方の断面形は U 字形である。第 1 層は柱痕跡，第 2～6 層は掘方への埋土である。P 5・P 6・P 11・P 12 は束柱を伴っている。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

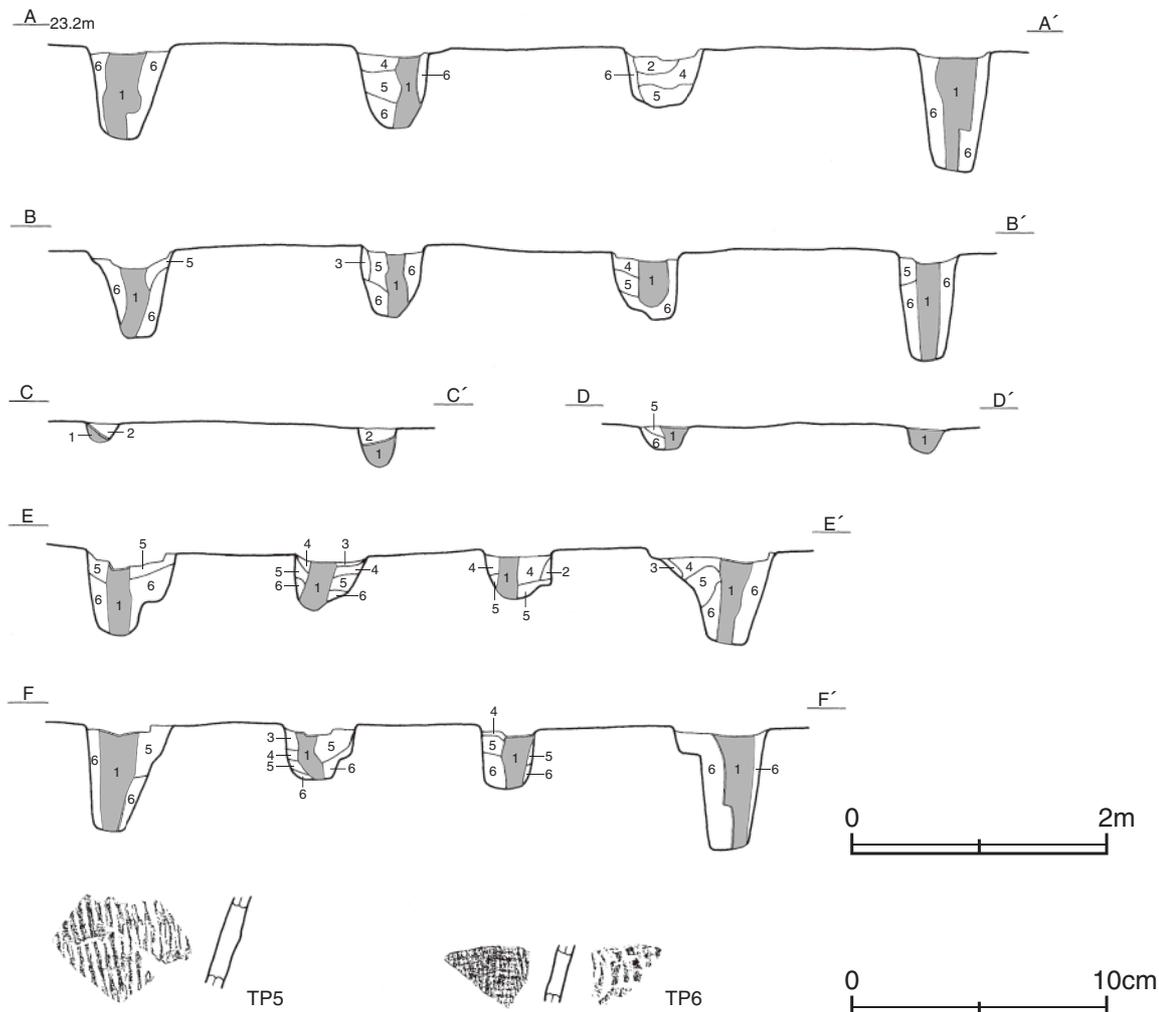
- | | | | |
|---------|---------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 にぶい褐色 | ロームブロック微量 | 6 明褐色 | ロームブロック少量 |



第 183 図 第 53 号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 45 点 (坏 8, 甕類 37), 須恵器片 13 点 (坏 7, 蓋 1, 甕類 5) が P 1・P 2・P 4 ~ P 6・P 10 ~ P 12 から出土している。TP 5 は P 5 の覆土中, TP 6 は P 12 の柱痕跡からそれぞれ出土している。また, 細片で図示できないが, 内面黒色処理が施された土師器坏片が P 11 の埋土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀後半と考えられる。



第 184 図 第 53 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 53 号掘立柱建物跡柱出土遺物観察表 (第 184 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 5	須恵器	甕	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	体部縦位の平行叩き	P 5 覆土中	
TP 6	須恵器	甕	長石・石英	灰	体部格子の叩き 内面同心円文の当て具痕	P 12 柱痕跡	

表 6 平安時代 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法		柱 穴			主な出土遺物	時期	備考	
						桁×梁(間)	桁×梁(m)	面積(m ²)	桁間(m)	梁間(m)				構造
46	E 549	N-7°-E	2×1	3.60×2.70	9.72	1.8	2.7	側柱	6	円形 楕円形	31~59	土師器片, 須恵器片	9世紀後半	PG14
48	E 518~ E 519	N-8°-E	2×2	3.60×3.60	12.96	1.8	1.8	側柱	8	円形 楕円形	7~43	土師器片, 須恵器片	9世紀前半	本跡→SK276
51	E 513~ E 514	N-3°-E	3×3	6.30×4.80	30.24	1.8~2.4	1.5~1.8	総柱	16	円形 楕円形	17~62	土師器片, 須恵器片	9世紀後半	SB50→本跡→SD26・ 27, SK291 SK305
53	E 511~ F 522	N-86°-W	3×3	6.60×5.10	33.66	2.1~2.4	1.5~1.8	総柱	16	円形 楕円形	57~93	土師器片, 須恵器片	9世紀後半	

(3) 鍛冶工房跡

第2号鍛冶工房跡 (第185～188図)

位置 調査区南西部のF5c5区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 第174号住居跡の調査時に, 楕円形のプランと炉跡を確認した。南部は調査区域外へ延びているため不明である。

重複関係 第174号住居跡を掘り込み, 第29号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東西径は4.42mで, 南北径は第29号溝跡に掘り込まれているため3.74mしか確認できなかった。平面形は楕円形と推定でき, 長径方向はN-15°-Eである。東部の深さは20cmで, 中央部から西部にかけて一段下がり, 深さは40～48cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

炉 中央部西寄りに位置している。東西軸は52cmで, 南北軸はトレンチで掘り過ぎたため60cmしか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定でき, 深さは19cmである。炉床は火を受けて赤変硬化しており, 中央部は還元のため青灰色化している。覆土は6層に分層でき, 各層に焼土や炭化物の他に鉄滓が含まれている。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|----------|------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 明赤褐色 | 焼土粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化物微量 | 5 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 |

ピット 4か所。P1は長軸110cm, 短軸98cmの隅丸長方形である。深さ43cmで底面はほぼ平坦である。規模や形状, 配置から火色を見るための足入れ穴と推測できる。P2～P4は, 深さ8～24cmで, 鍛冶に関わる作業用の穴と考えられる。

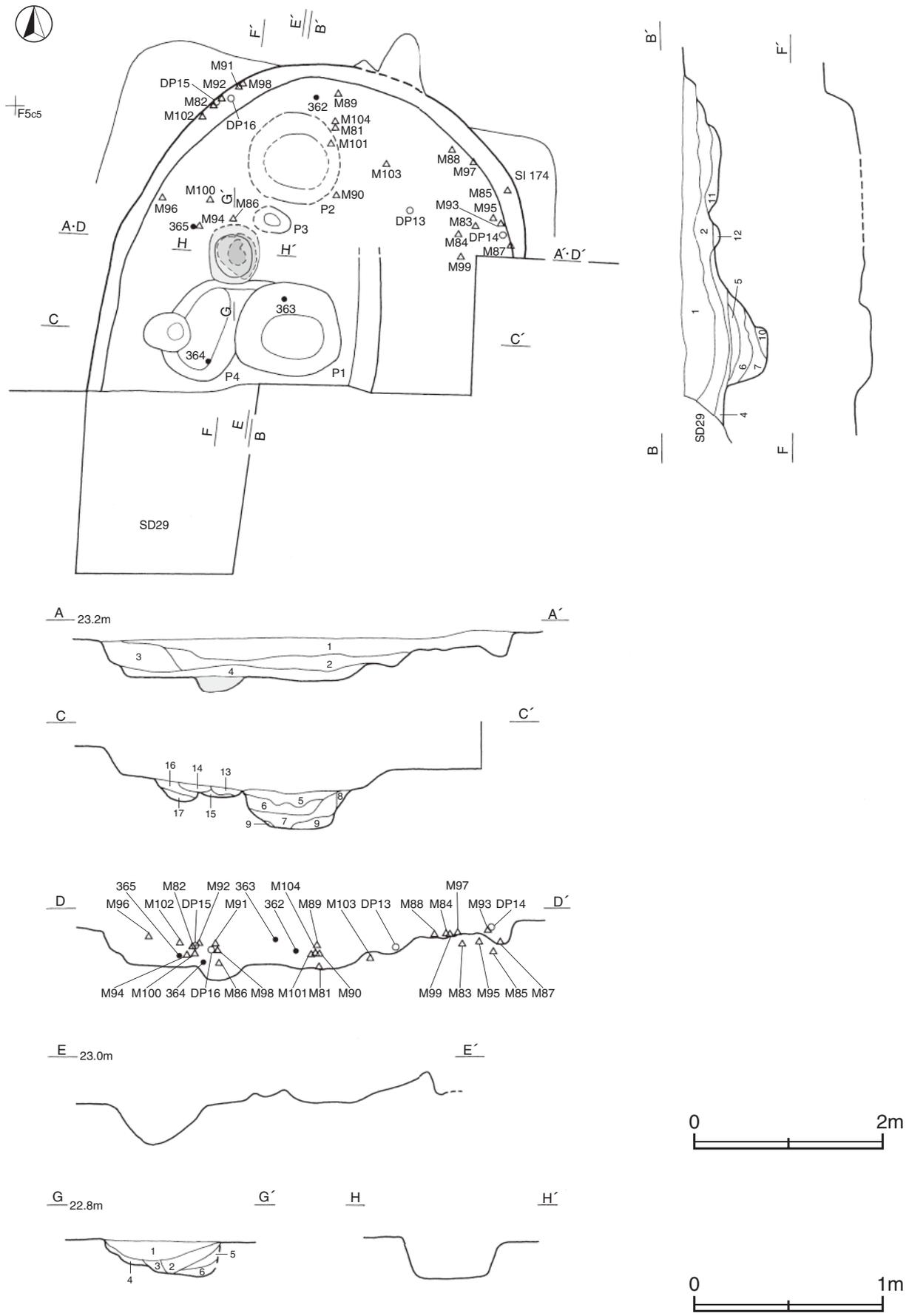
覆土 4層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。第5～10層はP1, 第11層はP2, 第12層はP3, 第13～17層はP4の覆土である。

土層解説

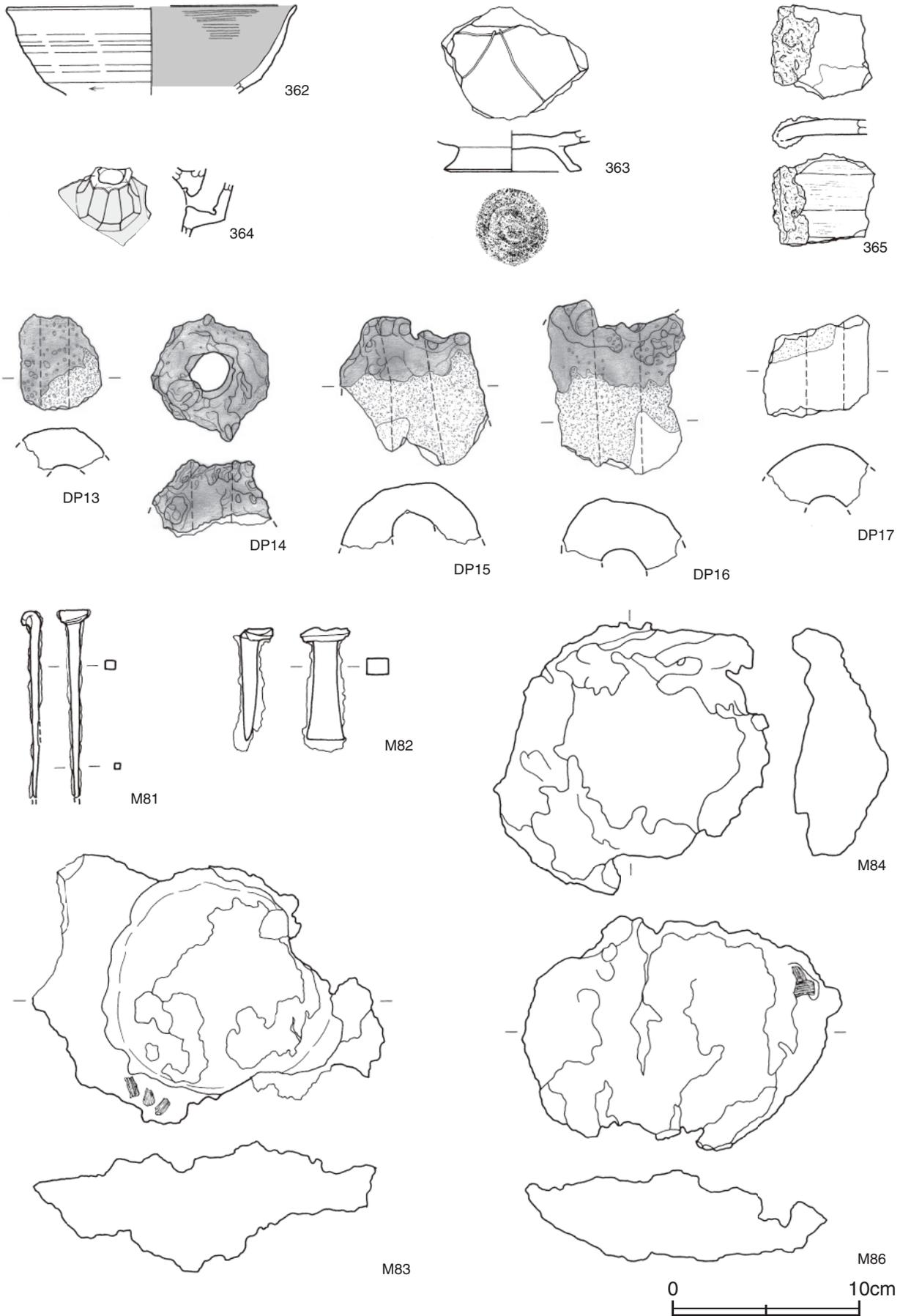
- | | | | |
|-------|-----------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 10 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量 | 11 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量 | 12 暗褐色 | 焼土ブロック・鉄滓中量, 炭化物・砂粒少量, ロームブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 13 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 14 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック微量 | 15 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 16 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 褐色 | ロームブロック中量 | 17 褐色 | ロームブロック多量 |
| 9 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片216点(坏32, 高台付椀8, 甕類176), 須恵器片75点(坏36, 蓋2, 鉢1, 甕類36), 灰釉陶器片1点(浄瓶), 鉄製品1点(釘)のほか, 鑿1点, 鉄塊系遺物8点(100.90g), 椀形鍛冶滓1955点(52000.89g), 鍛冶滓171点(732.48g), 粒状滓226.01g, 鍛造剥片11695.09g, 炉壁材1点, 羽口54点の鍛冶関連遺物が全面の覆土上層から下層にかけて出土している。364は中央部, 365は西部, M81は北部の覆土下層, 362は北部, 363は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。DP13～DP17・M82～M104は北半部の覆土上層から下層にかけてそれぞれ出土している。

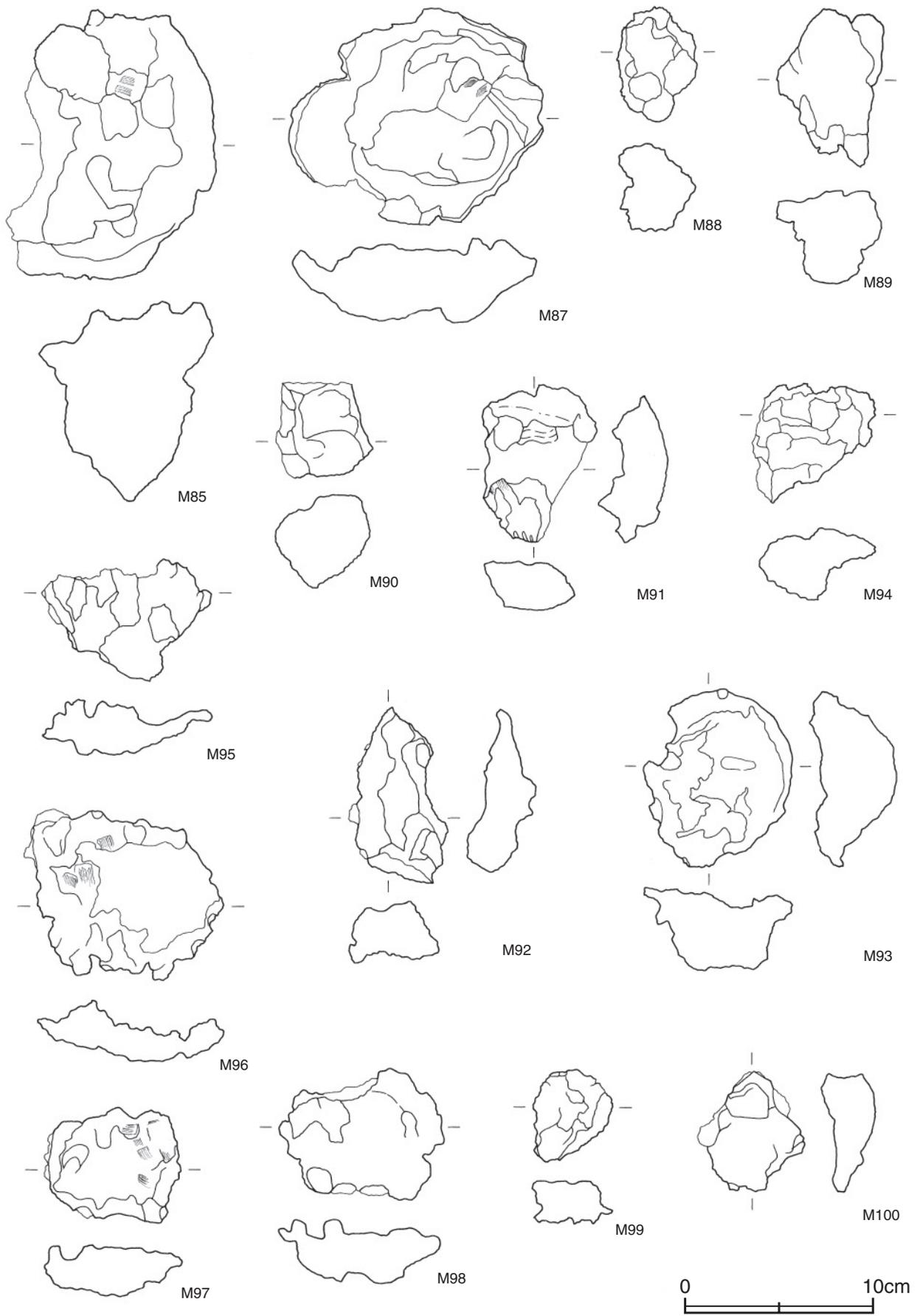
所見 椀形鍛冶滓や羽口などの鍛冶関連遺物の規模や形状から, 精錬・鍛錬段階の鍛冶工房跡と考えられる。時期は, 9世紀後葉に比定できる第174号住居跡を掘り込んでいることや, 出土土器から10世紀前半に比定できる。



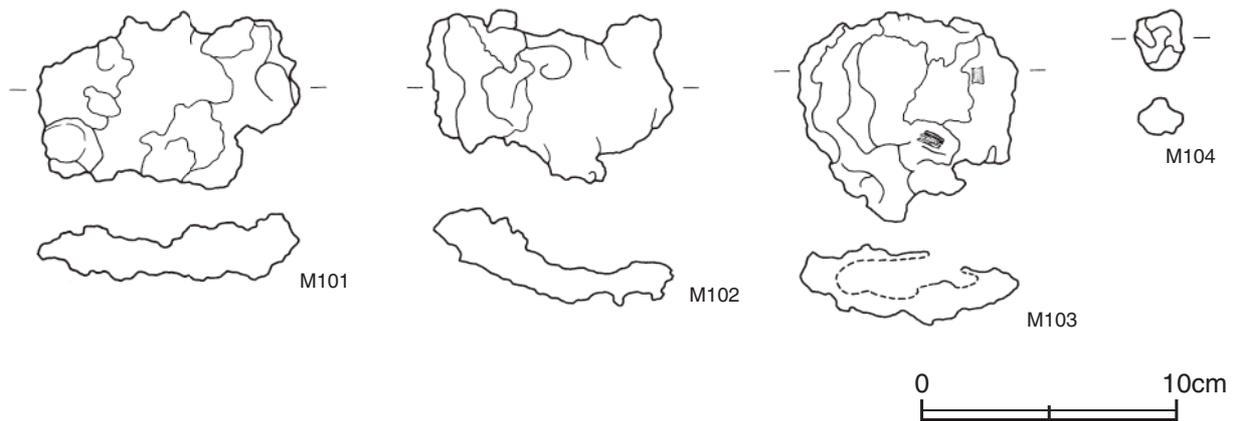
第 185 图 第 2 号鍛冶工房跡実測図



第 186 図 第 2 号鍛冶工房跡出土遺物実測図 (1)



第 187 图 第 2 号鍛冶工房跡出土遺物実測図 (2)



第 188 図 第 2 号鍛冶工房跡出土遺物実測図 (3)

第 2 号鍛冶工房跡出土遺物観察表 (第 186 ~ 188 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
362	土師器	坏	[15.6]	(4.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 摩滅が激しい	覆土中層	15%
363	土師器	高台付椀	-	(2.3)	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け 内面に刻書「夫カ」	覆土中層	30%
364	灰釉陶器	浄瓶	-	(4.3)	-	長石	灰オリーブ	良好	注口部面取り 体部との接合痕を残す	覆土下層	15% PL47
365	須恵器	甕	-	(5.0)	-	長石	黄灰	普通	端部に溶融物付着 転用されたもの	覆土下層	5% PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP13	羽口(鍛冶)先端部	(5.3)	(4.5)	(2.3)	(44)	長石・石英	羽口の先端部小破片。側部2面と体部側が破面となる。残存部位は羽口先正面から見て左下1/4の破片。通風孔部は直孔で、径1.7cm以上を測る。羽口肩部はやや丸味をもったガラス質に溶損する。やや細身の羽口。	覆土下層	
DP14	羽口(鍛冶)先端部	(4.1)	(6.4)	(6.0)	(93)	長石・石英	羽口先端部破片。肩部半ばで欠けて左側部全局が破面となる。肩部は黒褐色のガラス質滓化して、斜め上方に向かい溶損する。通風孔部径は、やや扁平化して、2.1×2.7cmを測る。胎土は僅かに繊維を含む砂質土。やや細身の羽口となる	覆土下層	
DP15	羽口(鍛冶)先端~体部	(7.7)	(6.1)	(2.8)	(152)	長石・細礫	羽口の先端部から体部破片。側部2面と体部側3面が破面となる。部位は羽口先端側から見て左下の部分で、径の2/5程度の破片となる。肩部は黒色ガラス質に溶損して垂れあり。通風孔部は先端側に向かいやや先太りで、最大径3.1cmを測る。DP13・DP14に比べてやや太めの径をもつ。DP16・DP17も同じ。	覆土中層	
DP16	羽口(鍛冶)先端~体部	(9.5)	(7.4)	(2.6)	(176)	長石・赤色粒子・細礫	羽口の先端部破片。側部4面が破面。前者と同様、先端側から見て、斜め左下の約半分程度の破片。先端部はやや不規則な滓化を示し、頸部には垂れも生じている。側部2面と体部側が破面となる。体部外面にはひび割れが目立ち、先端部の不規則な滓化は、ひび割れに由来するものと見られる。通風孔部の径はやや先太りで、最大2.8cmを測る。	覆土中層	
DP17	羽口(鍛冶)先端~体部	(5.5)	(5.8)	(3.4)	(85)	長石・石英・細礫	羽口の体部破片。側部4面が破面となり、内面には通風孔部の一部が残る。部位としては、羽口体部のうちでもやや肩部寄りで見られる被熱状態を示す。通風孔部の径は直孔気味で、2.1cmを測る。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 81	釘	(10.2)	1.6	0.3~0.5	(12.9)	鉄	先端部欠損 断面方形	覆土下層	PL51
M 82	鑿	6.1	2.7	0.9	56	鉄	頭部が横方向に5mmほど突出した鑿。頭部や体部側面の表皮の一部が剥落している。先端部は裏面側が錆膨れとなる。既使用の鑿のためか、頭部の広がりが目立つ。メタル度は特L(☆)で、鉄部の残りが良好。	覆土中層	PL51

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
M 83	椀形鍛冶滓(特大、炉床土付き、重層、含鉄)	14.8	18.9	7.1	1325	3	H(○)	肩部3か所が小破面となった特大の椀形鍛冶滓。上面から見ると重層気味で、下面から見ると突出部が3か所以上数えられる。側部から見ると滓が右上方に向かい順次ずれながら重層している。下面は乱れた舟底状に突出し、炉床土の圧痕や木炭痕に覆われている。含鉄部は上面左下手寄りの表皮直下と推定される。	覆土下層	PL51

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	特 徴	出土位置	備 考
M 84	腕形鍛冶滓 (特大、炉床土付き、重層、含鉄)	14.7	15.0	5.1	1380	5	H (○)	上面の半分以上が流動状の滓に覆われた特大の腕形鍛冶滓。ほぼ完形品ながら、左右で肩部から底面の外観が異なっている。その理由は右半分が側面から底面の表層が欠け落ちていることによる。左側部は立ち上がりが急で、表面は炉床土が薄皮状に貼り付く。含鉄部の主体は分散気味で、下面の下手側には黒錆の吹いた1cm大の部分が露出する。	覆土下層	PL51
M 85	腕形鍛冶滓 (特大、炉床土付、重層、含鉄)	14.6	11.2	10.9	1800	3	H (○)	外面が明らかに重層している特大の腕形鍛冶滓の半欠品。破面は左側部で、中間層に木炭痕の目立つ滓部が露出する。残る右側部には段が生じ、肩部以下の側面にも浅い段が生じている。滓の取り忘れのまま次の鍛冶操作を行ったためか。含鉄部は重層した滓のそれぞれ表層に点在する。下面全体に炉床土が固着。	覆土下層	
M 86	腕形鍛冶滓 (特大、重層、含鉄)	12.7	17.3	5.0	1100	4	M (◎)	左右方向に長手の楕円形をした完形の腕形鍛冶滓。全体に扁平で、肩部に沿って隙間が生じている。従って、一種の重層した滓とも言える。下面は浅い腕形で、炉床土が面をなして付着する。含鉄部は上面中央の表皮沿い。	覆土下層	PL52
M 87	腕形鍛冶滓 (大、炉床土付、重層、含鉄)	11.7	13.7	4.4	699	3	錆化 (△)	完形の腕形鍛冶滓。上面は浅い皿状で、2cm大前後の木炭痕がやや目立つ。左側の肩部や下手側が重層気味で、一部に隙間を生じている。側部から下面はやや乱れた腕形で、炉床土の圧痕主体。含鉄部は上下面の表皮沿い。	覆土下層	PL52
M 88	腕形鍛冶滓 (大、含鉄)	6.2	4.9	5.4	135	4	H (○)	大型の腕形鍛冶滓の中核部破片。上下面は生きており、側部は全周が破面となる。含鉄部は上面表皮沿いに残る塊状の部分。	覆土下層	
M 89	腕形鍛冶滓 (大、含鉄)	8.6	6.0	5.0	209	7	L (●)	放射割れや黒錆の目立つ大型の腕形鍛冶滓破片。左側部が主破面で、右寄りの側部は生きている。上面は平坦気味で、含鉄部は中間部に広い。	覆土中層	
M 90	腕形鍛冶滓 (大、含鉄)	5.2	5.2	4.7	189	6	特L (☆)	大型の腕形鍛冶滓の中核部から側部破片。上半部を中心に黒錆のじみや酸化物が広がり、広範囲の含鉄部の存在を物語る。	覆土中層	
M 91	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	8.5	6.1	3.7	155	3	H (○)	側部2面が破面となった中型の腕形鍛冶滓の左側破片。上面や左側面は生きているものの凹凸が大きい。下面は浅い腕形で、炉床土の圧痕主体。含鉄部は下手側の表層か。	覆土中層	
M 92	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	9.5	5.3	3.7	155	2	H (○)	肩部2面と右側部が破面となった腕形鍛冶滓破片。上面は中央部が窪み、表面が流動状となる。右側部の破面は上半部に隙間があり密度が低い。含鉄部は下面沿いに複数か所が残る。	覆土中層	
M 93	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	9.7	8.0	4.7	351	3	H (○)	やや重層気味の中型の腕形鍛冶滓。ほぼ完形品で、肩部1か所に小破面有り。上面は浅く窪み、右上手側の肩部に低い段を生じている。側部から下面は立ち上がりが急で、肩部が横に張り出す。含鉄部は下手側の芯部に広い。	覆土下層	PL52
M 94	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	6.5	6.7	3.9	189	5	M (◎)	上手側の側部が破面となった中型の腕形鍛冶滓の肩部破片。左側部も破面の可能性あり。側部から下面はやや不規則な腕形をなす。含鉄部は上面右寄りと下面寄りの芯部。	覆土中層	
M 95	腕形鍛冶滓 (小、羽口(鍛冶)先端部付)	6.6	9.1	3.0	127	4	なし	上手側の側部が破面となった、全体に扁平な小型の腕形鍛冶滓。上面左上手側はやや小高く、羽口頸部由来の滓が残る。上面右側は流動状の平滑面。側部から下面は浅い腕形で、木炭痕がやや目立つ。	覆土下層	
M 96	腕形鍛冶滓 (小)	9.3	10.7	3.3	221	3	なし	上面右上手側の表皮が脱落した小型の腕形鍛冶滓。その部分を除いてはほぼ完形品で、浅い皿状の全体観となる。肩部にはやや出入りがあり、上下面の木炭痕が目立つ。木炭痕は2cm大以下。	覆土上層	PL52
M 97	腕形鍛冶滓 (小、含鉄、粘土質溶解物付き)	6.2	7.3	2.7	133	4	H (○)	肩部が狭い連続的な破面となった小型の腕形鍛冶滓。右方向に向かい徐々に薄くなる横断面形で、平坦な上面左端部には、羽口先由来の粘土質溶解物が確認される。含鉄部は下面の中央部付近にやや広め。	覆土下層	
M 98	腕形鍛冶滓 (小、含鉄、粘土質溶解物付き)	7.1	8.9	3.9	207	4	M (◎)	上手側の肩部が小破面となった完形品に近い小型の腕形鍛冶滓。上面は平坦気味で、木炭痕による凹凸が生じている。左上手側上面には羽口先由来の粘土質溶解物が乗る。側部から下面は浅い腕形で、炉床土の圧痕主体。含鉄部は上面右上手側の直下。	覆土中層	
M 99	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	5.0	4.3	2.3	67	5	M (◎)	側部3面が破面となった小型の腕形鍛冶滓の中核部破片。上面は平坦気味で、側部は立ち上がりがやや急。下面の中央部は表皮が脱落する。含鉄部は芯部に広め。	覆土下層	
M 100	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	6.5	5.8	2.9	99	3	L (●)	側部2面が破面となった黒錆の目立つ腕形鍛冶滓破片。上面は浅く窪み、左上手側を中心に錆膨れが盛り上がる。側部から下面はきれいな腕形で、表面には黒錆がにじむ。含鉄部は全体的で、やや右側の下面沿いが広め。	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	特徴	出土位置	備考
M 101	椀形鍛冶滓 (小, 含鉄)	7.1	10.3	2.6	188	4	L (●)	下手側の側部が小破面となった扁平な椀形鍛冶滓。上面は浅い皿状で、左側には羽口先由来の粘土質溶解物がこぶ状に乗る。右側は含鉄部の影響が強く、黒錆のにじみや細い放射割れが生じ始めている。下面も右寄りと同様。下面全体は浅い皿状で、不規則な炉床土の剥離面が広がる。含鉄部は右側の芯部を中心に広範囲。	覆土中層	
M 102	椀形鍛冶滓 (極小, 含鉄, 羽口 鍛冶)	6.9	9.8	3.9	166	5	H (○)	上面左側に羽口先が固着した完形の極小椀形鍛冶滓。上面は皿状に窪み、中央部が流動性が高い。肩部にはやや出入りがあり、3か所が突出する。下面全体は浅い椀形で、炉床土の剥離面が広がる。含鉄部は前者同様、右側の芯部が主体。羽口の通風孔部径は2.4cmを測り、マイナス15°前後の挿入角度で用いられている。羽口胎土は僅かに繊維を混じえるざっくりとした砂質土。羽口の外径は6cm前後を測る細身と推定され、DP13・DP14と類似する。	覆土中層	PL52
M 103	椀形鍛冶滓 (極小, 炉床土付き)	8.4	8.2	3.2	107	2	なし	ほぼ完形の極小椀形鍛冶滓。上面表皮の一部や肩部が僅かに欠けている。上面には2cm大前後の木炭痕が目立ち、浅い皿状の側部から下面の一部に炉床土が貼り付く。密度の低い滓で、表皮直下は全体が中空気味。	覆土下層	
M 104	鍛冶滓	2.5	1.9	1.4	7.0	1	なし	小塊状の完形の鍛冶滓。小さいながらも椀形で、表面には光沢をもつ。滓質はやや粘土質溶解物に近い。	覆土中層	

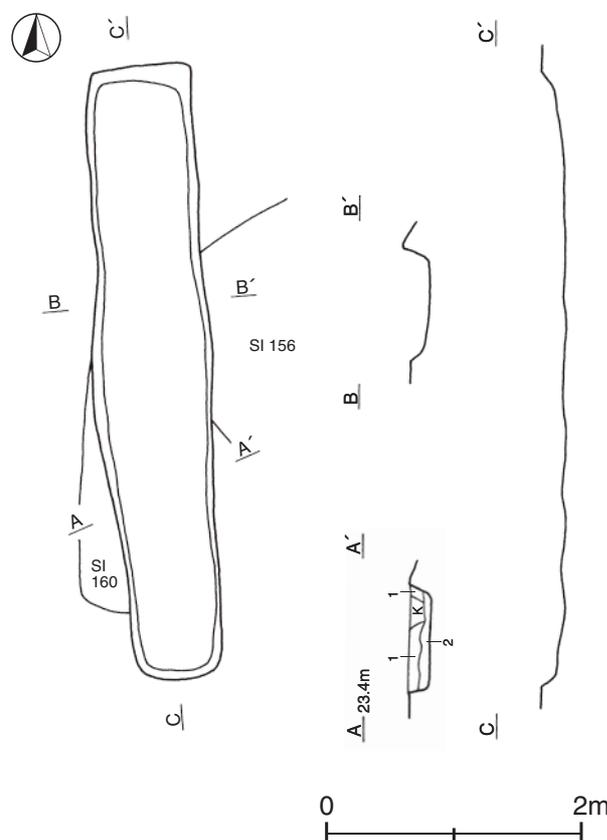
※ DP 13～17, M 82～M 104 の磁着度, メタル度及び特徴については, 穴澤義功氏の指導のもと記載した。

(4) 土坑

平安時代と考えられる土坑は, 16 基確認している。ここでは, 特徴ある5基について記述し, その他については, 一覧表と実測図及び土層解説を記載する。

第 255 号土坑 (第 189 図)

位置 調査区北東部の E 5 d0 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。



重複関係 第 156・160 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 4.88 m, 短軸 0.95 m の隅丸長方形で, 長軸方向は N - 4° - W である。深さは 17cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 2 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片 11 点 (坏 1, 高台付椀 1, 甕類 9), 須恵器片 3 点 (坏 1, 甕類 2) が出土している。いずれも細片で図示できないが, 内面黒色処理が施された土師器坏片や高台付椀片が出土している。

所見 時期は, 10 世紀前葉に比定できる第 156 号住居跡を掘り込んでいることや, 出土土器から 10 世紀中葉以降の 10 世紀代と考えられる。

第 189 図 第 255 号土坑実測図

第 256 号土坑 (第 190 図)

位置 調査区北東部の E 5 e0 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 161 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 0.61 m, 短軸 0.55 m の隅丸長方形で, 長軸方向は N - 62° - W である。深さは 22cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は東壁が緩やかに傾斜, それ以外の壁が外傾して立ち上がっている。

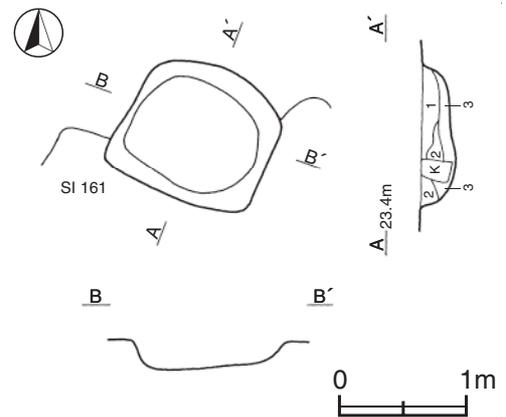
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 7 点 (坏 2, 甕類 5), 須恵器片 4 点 (坏) が出土している。いずれも細片で図示できないが, 須恵器坏片や内面黒色処理が施された土師器坏片が出土している。

所見 時期は, 9 世紀中葉に比定できる第 161 号住居跡を掘り込んでいることや, 出土土器から 9 世紀後半と考えられる。



第 190 図 第 256 号土坑実測図

第 257 号土坑 (第 191 図)

位置 調査区北東部の D 6 j2 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

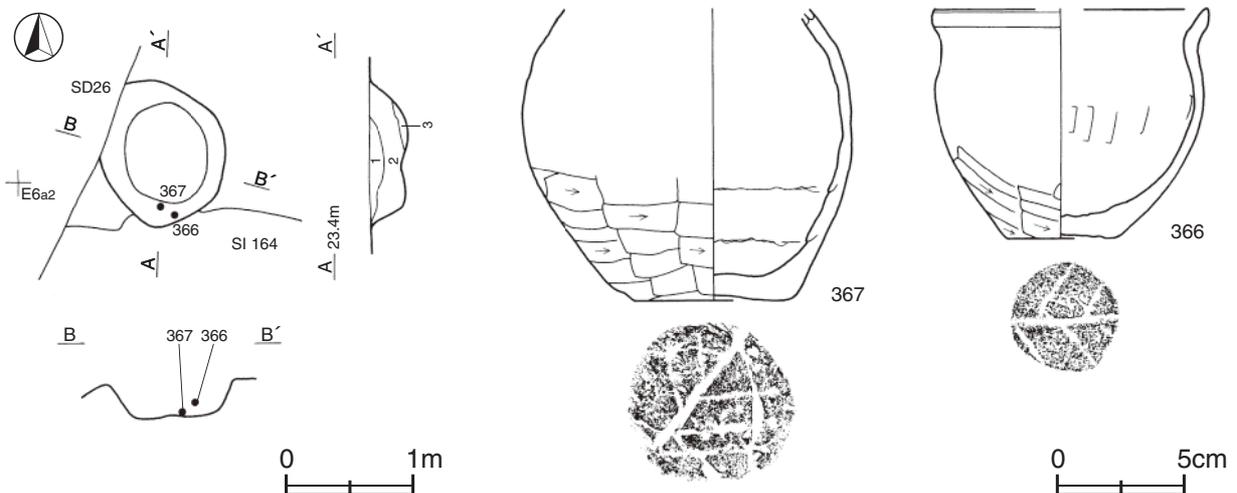
重複関係 第 164 号住居跡を掘り込み, 第 26 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西部を第 26 号溝に掘り込まれているため, 北東・南西径は 0.98 m で, 北西・南東径は 1.15 m しか確認できなかった。平面形は楕円形と推定でき, 北西・南東径方向は N - 32° - W である。深さは 34 cm で, 底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量



第 191 図 第 257 号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 11 点（甕類 9，小形甕 2），須恵器片 7 点（坏 2，甕類 5）が出土している。

366・367 は南壁際の覆土中層・下層からそれぞれ出土している。また，細片で図示できないが，格子叩きが施された須恵器甕片も出土している。

所見 時期は，9 世紀中葉に比定できる第 164 号住居跡を掘り込んでいることや，出土土器から 9 世紀後葉と考えられる。

第 257 号土坑出土遺物観察表（第 191 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
366	土師器	小形甕	[10.9]	9.1	4.3	長石・石英	橙	普通	体部外面ナデ 下位ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕	覆土中層	70% PL39
367	土師器	小形甕	-	(11.6)	6.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ナデ 下位ヘラ削り 内面摩滅が激しい 輪積痕 底部木葉痕	覆土下層	70% PL39

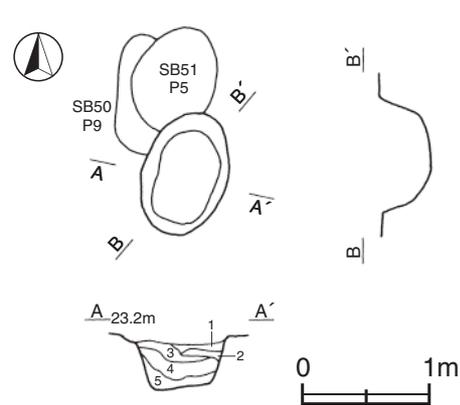
第 291 号土坑（第 192 図）

位置 調査区北東部の E 5 i3 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 50 号掘立柱建物跡 P 9，第 51 号掘立柱建物跡 P 5 を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.00 m，短径 0.68 m の楕円形で，長径方向は N - 15° - E である。深さは 40cm で，底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。



土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 5 点（甕類），須恵器片 6 点（坏 4，高台付坏 1，蓋 1）が出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は，9 世紀後半と考えられる第 51 号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや，出土土器から 9 世紀後半以降の平安時代と考えられる。

第 192 図 第 291 号土坑実測図

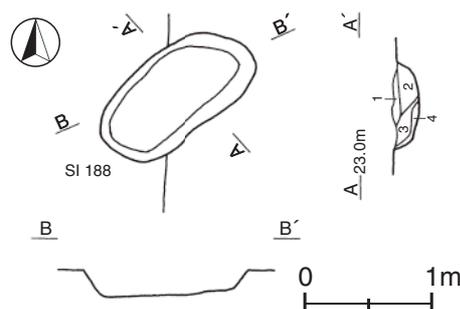
第 327 号土坑（第 193 図）

位置 調査区北東部の E 5 f4 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 188 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.52 m，短径 0.70 m の不整楕円形で，長径方向は N - 51° - E である。深さは 20cm で，底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4 層に分層できる。各層にロームや焼土のブロックが含まれていることから埋め戻されている。



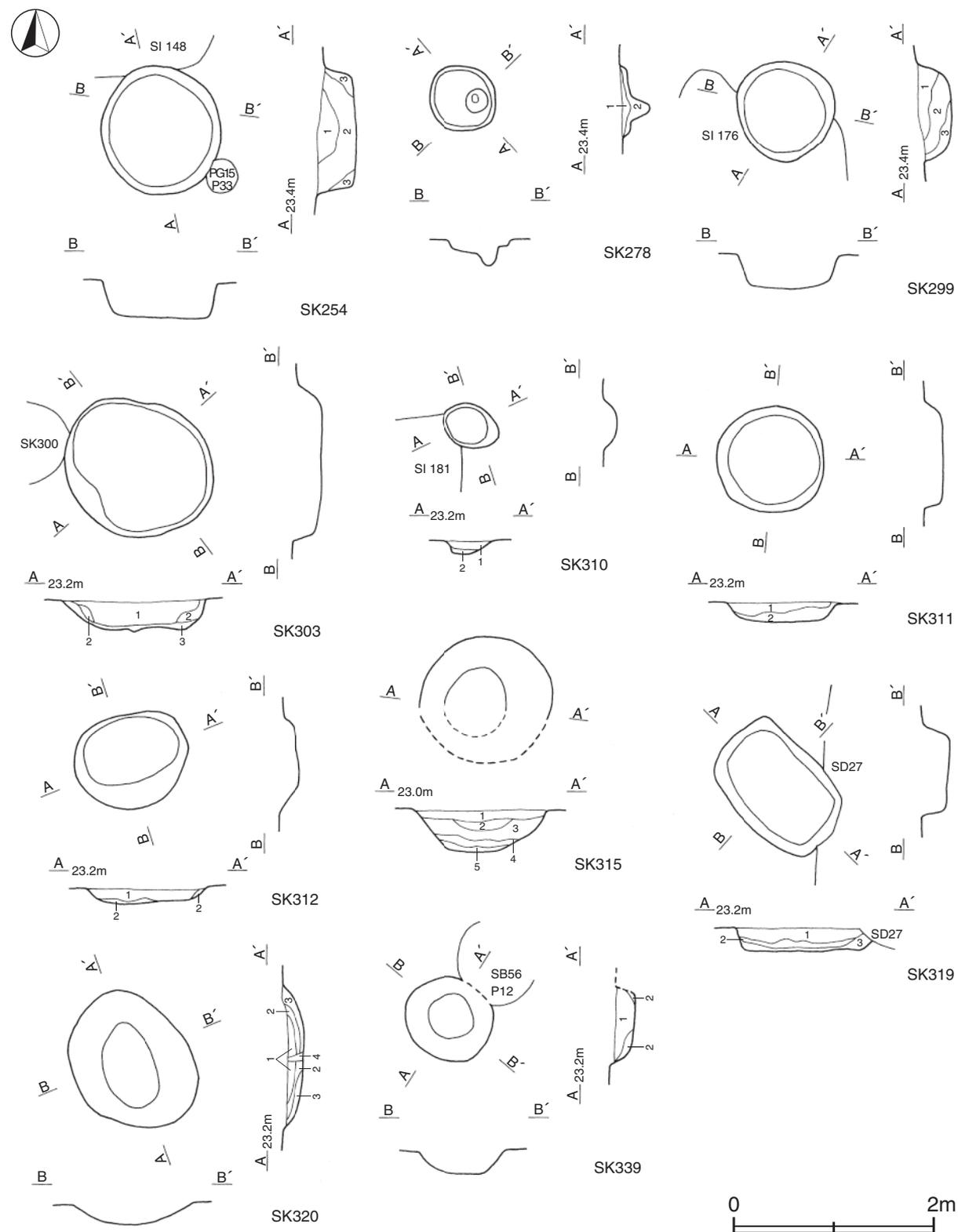
土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

第 193 図 第 327 号土坑実測図

遺物出土状況 土師器片 40 点 (坏 3, 甕類 36, 小形甕 1), 須恵器片 9 点 (坏 5, 高台付坏 1, 蓋 2, 甕類 1) が出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は, 8 世紀後葉に比定できる第 188 号住居跡を掘り込んでいることや, 出土土器から 9 世紀代と考えられる。



第 194 図 平安時代のその他の土坑実測図

第 254 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック多量, 焼土粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック多量, 焼土粒子微量

第 278 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量

第 299 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 303 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 2 にぶい褐色 ロームブロック少量
- 3 褐 色 ロームブロック少量

第 310 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量

第 311 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第 312 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量

第 315 号土坑土層解説

- 1 褐 灰 色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 灰 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 3 黒 褐 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒 色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック少量

第 319 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 明 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 320 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 4 褐 色 ロームブロック多量

第 339 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量

表 7 平安時代 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
254	E 6 b5	-	円形	1.30 × 1.20	36	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SI148 → 本跡 → PG15 P33
255	E 5 d0	N - 4° - W	隅丸長方形	4.88 × 0.95	17	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	SI156・160 → 本跡
256	E 5 e0	N - 62° - W	隅丸長方形	0.61 × 0.55	22	平坦	外傾・緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	SI161 → 本跡
257	D 6 j2	N - 32° - W	[楕円形]	[1.15] × 0.98	34	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	SI164 → 本跡 → SD26
278	F 5 a0	-	円形	0.67 × 0.64	12・25	平坦	外傾	人為	土師器片	
291	E 5 i3	N - 15° - E	楕円形	1.00 × 0.68	40	皿状	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SB50・51 → 本跡
299	F 5 b3	-	円形	1.00 × 1.00	34	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SI176 → 本跡
303	F 5 a7	N - 58° - W	楕円形	1.58 × 1.48	26	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	SK300 → 本跡
310	F 4 b0	N - 48° - W	楕円形	0.56 × 0.44	12	皿状	緩斜	自然	土師器片	SI181 → 本跡
311	F 4 b8	-	円形	1.10 × 1.08	16	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
312	F 4 b8	N - 68° - E	楕円形	1.22 × 0.98	20	平坦	外傾・緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	
315	D 5 g7	-	[円形]	1.35 × [1.28]	43	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	
319	F 5 b4	N - 45° - W	長方形	1.43 × 0.94	25	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	本跡 → SD27
320	E 5 f1	N - 37° - W	楕円形	1.45 × 1.18	20	皿状	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	
327	E 5 f4	N - 51° - E	不整楕円形	1.52 × 0.70	20	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SI188 → 本跡
339	E 5 a1	-	円形	0.88 × 0.86	25	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	SB56 P12 → 本跡

4 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、溝跡 2 条、井戸跡 1 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 溝跡

第 27 号溝跡（第 195 図・付図）

位置 調査区南西部の E 5 h4 ～ F 5 c5 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 175・179 号住居跡，第 50・51 号掘立柱建物跡，第 319 号土坑を掘り込み，第 26・28 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が E 5 h4 区内で第 26 号溝に掘り込まれ，南部が調査区域外へ延びているため，長さは 20.25 m しか確認できなかった。F 5 c5 区から北方向（N - 5° - E）に直線的に延びている。規模は上幅 0.71 ～ 0.84 m，下幅 0.17 ～ 0.33 m，深さ 17 ～ 30cm である。断面形は浅い U 字形で，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

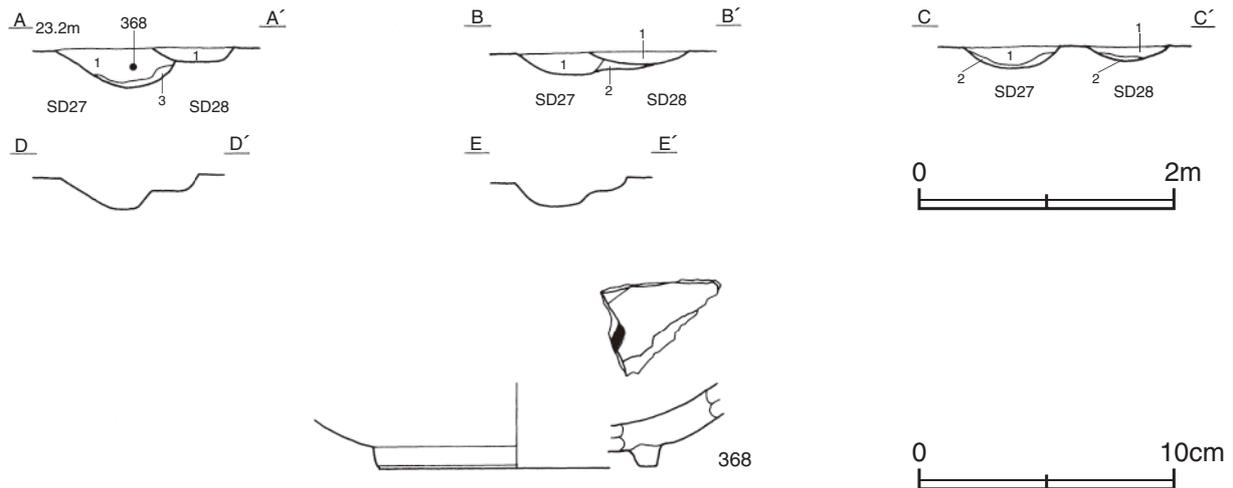
覆土 3 層に分層できる。各層にロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 明褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 陶器片 1 点（皿）のほか，混入した土師器片 54 点（坏 1，高台付皿 1，甕類 51，甑 1），須恵器片 22 点（坏 10，甕類 12），鉄滓 1 点（1.86 g）が出土している。368 は南部の覆土中層から出土している。

所見 時期は，出土遺物から中世後半と考えられる。



第 195 図 第 27・28 号溝跡・第 27 号溝跡出土遺物実測図

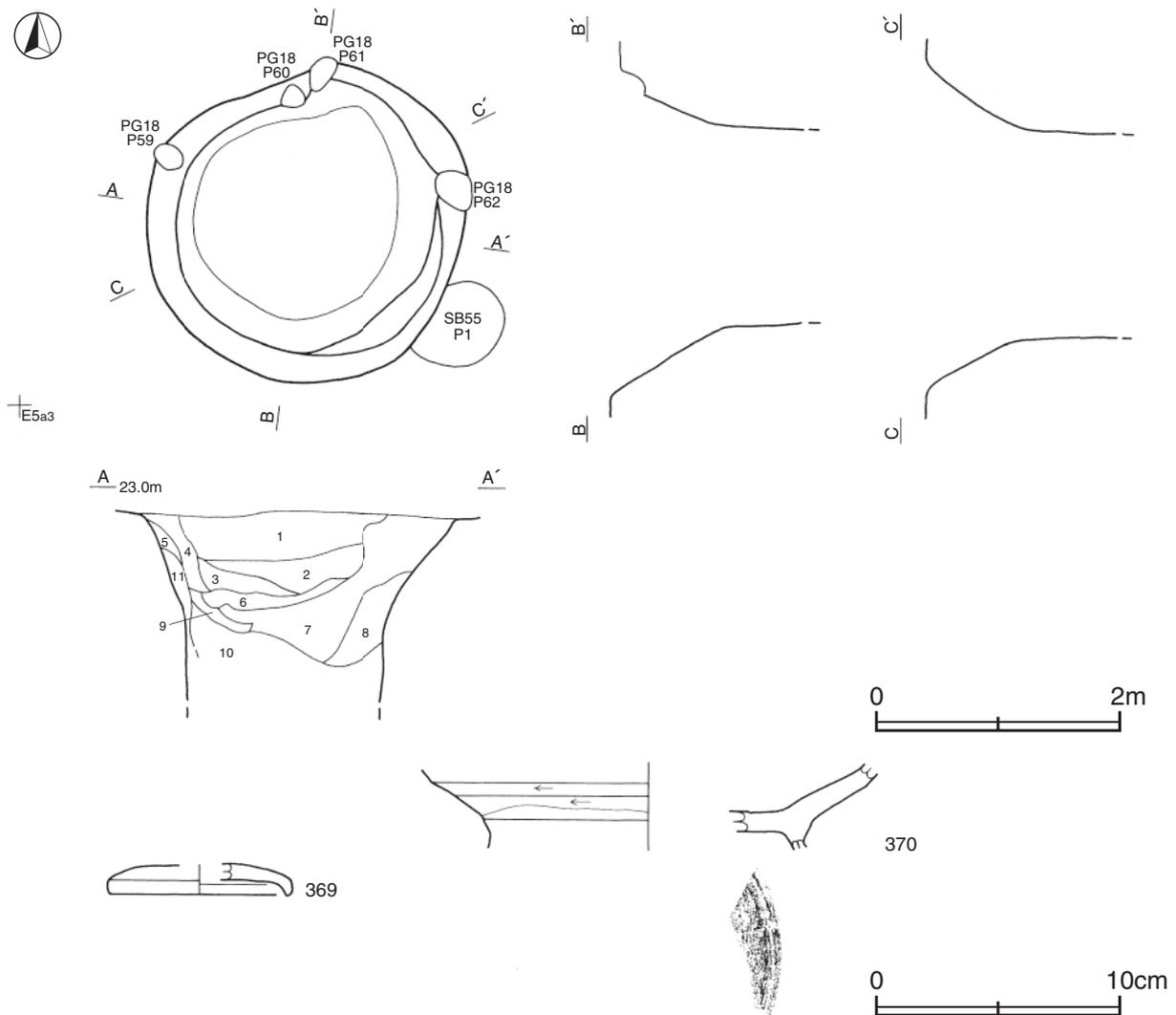
第 27 号溝跡出土遺物観察表（第 195 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
368	陶器	皿	-	(3.3)	[11.0]	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄橙	良好	内面鉄絵 貼り付け高台 長石釉わずかに付着 志野焼	覆土中層	10%

第 28 号溝跡（第 195 図・付図）

位置 調査区南西部の E 5 h4 ～ F 5 c5 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 175・179 号住居跡，第 50・51 号掘立柱建物跡，第 27 号溝跡を掘り込み，第 26 号溝に掘り込まれている。



第 196 図 第 9 号井戸跡・出土遺物実測図

第 9 号井戸跡出土遺物観察表 (第 196 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
369	土師質土器	蓋カ	[7.4]	1.2		長石・雲母	橙	普通	体部外・内面ナデ	覆土中	40%
370	陶器	片口鉢	-	(3.9)	-	長石・黒色粒子	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 高台貼り付け 自然袖 付着 常滑焼	覆土中	10%

5 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明らかでない掘立柱建物跡 8 棟、柱列跡 3 列、溝跡 2 条、土坑 105 基、ピット群 9 か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第 44 号掘立柱建物跡 (第 197 図)

位置 調査区南部の F 5 a7 ~ F 5 b8 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 168 号住居跡を掘り込んでいる。第 49 号掘立柱建物、第 14 号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

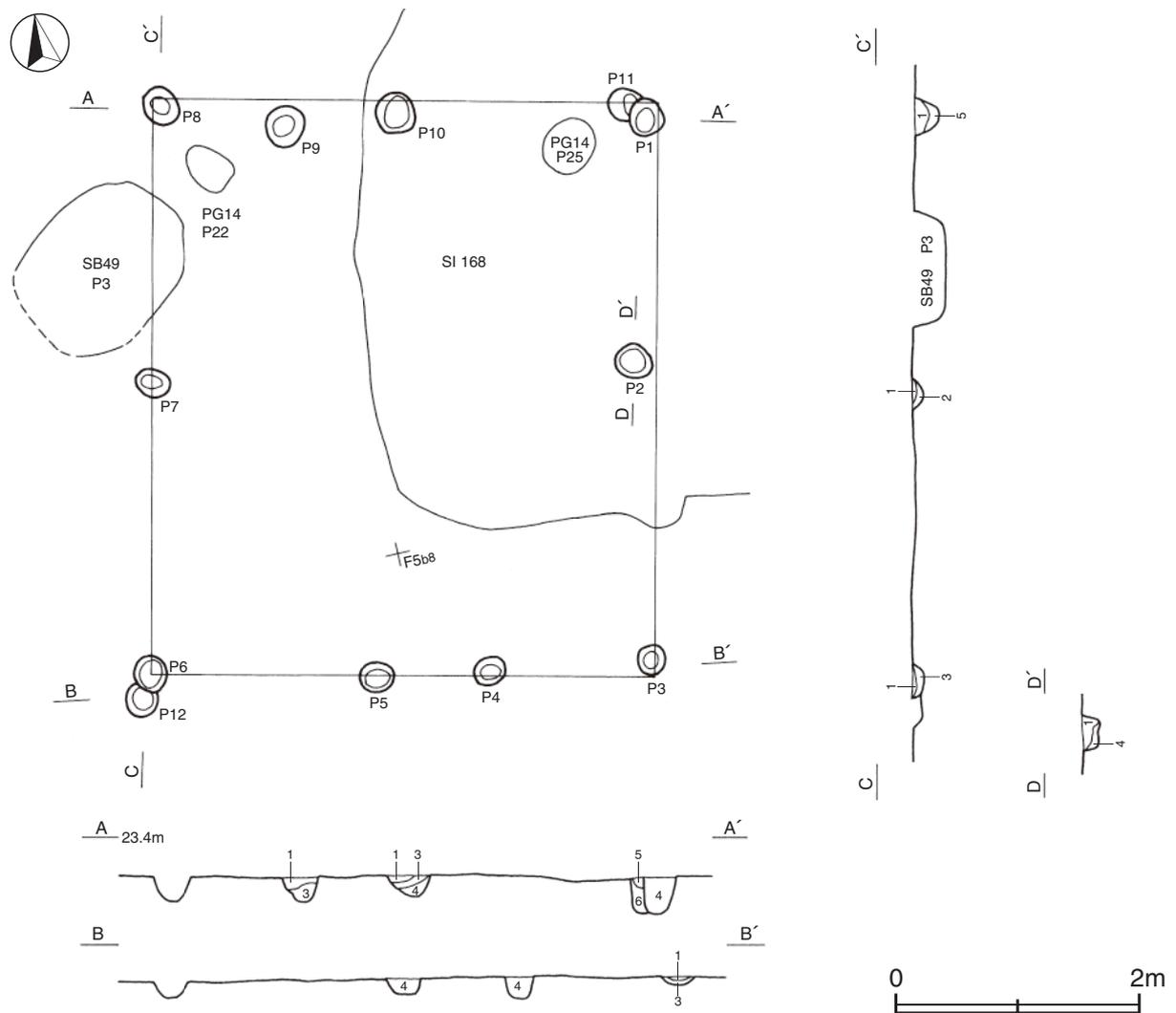
規模と構造 桁行2間、梁行3間の側柱建物跡で、桁行方向はN-13°-Eの南北棟である。規模は桁行4.80m、梁行4.20mで、面積は20.16㎡である。柱間寸法は、西桁行が2.4m（8尺）、東桁行が北妻から2.1m（7尺）・2.7m（9尺）で、北梁行は西平から1.05m（3.5尺）・1.05m（3.5尺）・2.1m（7尺）、南梁行が1.8m（6尺）・0.9m（3尺）・1.5m（5尺）に配置されている。柱筋は不揃いである。

柱穴 12か所。平面形は円形で、長径24～35cm、短径22～33cmである。深さは10～32cmで、掘方の断面形はU字形である。第1～6層は柱抜き取り後の堆積層である。P11・P12はP1・P6の補助柱穴である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子中量 |

所見 時期は、遺物が出土していないため不明である。



第197図 第44号掘立柱建物跡実測図

第45号掘立柱建物跡（第198図）

位置 調査区中央部のE5e7～E5f8区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 第153号住居跡の調査中に住居跡の覆土を掘り込んだピットを確認した。住居跡の東壁に沿って

4か所の柱穴を確認していたので、それに伴う柱穴と想定した。他の柱穴についても調査したが、2か所しか確認できなかった。

重複関係 第153号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 第153号住居跡と重複していたため、東平と西平の一部しか確認できなかったが、北妻・南妻の中央にも柱穴があったと考えられ、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡と推定される。桁行方向はN-8°-Eの南北棟である。規模は桁行4.50m、梁行4.20mで、面積は18.90㎡である。柱間寸法は、桁行1.5m（5尺）、梁行2.1m（7尺）で等間隔に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

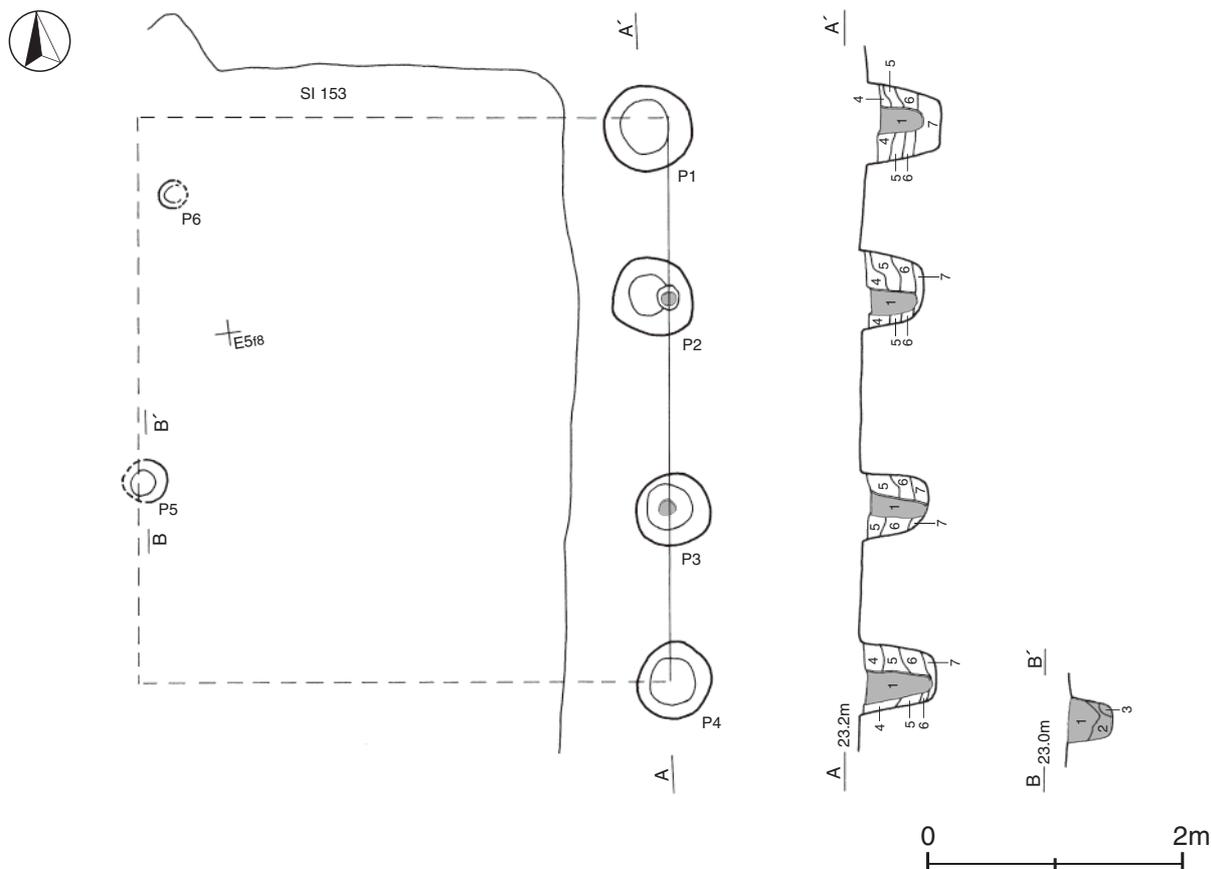
柱穴 6か所しか確認できなかった。平面形は円形で、長径58～67cm、短径56～66cmである。深さは52～64cmで、掘方の断面形はU字形である。第1～3層は柱痕跡、第4～7層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片14点（坏2、甕類12）、須恵器片3点（坏）のほか、鉄滓1点（22.0g）がP1・P3～P5から出土しているが、いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、8世紀前葉に比定できる第153号住居跡を掘り込んでいることや、出土土器から奈良時代以降と考えられるが、明確な時期は不明である。



第198図 第45号掘立柱建物跡実測図

第 47 号掘立柱建物跡 (第 199 図)

位置 調査区東部の E 6c8 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 263 号土坑, 第 13 号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 南西部が攪乱を受けているが, 桁行 3 間, 梁行 2 間の側柱建物跡と推定でき, 桁行方向は N - 83° - E の東西棟である。規模は桁行 4.50 m, 梁行 3.60 m で, 面積は 16.20m² である。柱間寸法は, 桁行 1.5 m (5 尺), 梁行 1.8 m (6 尺) で等間隔に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

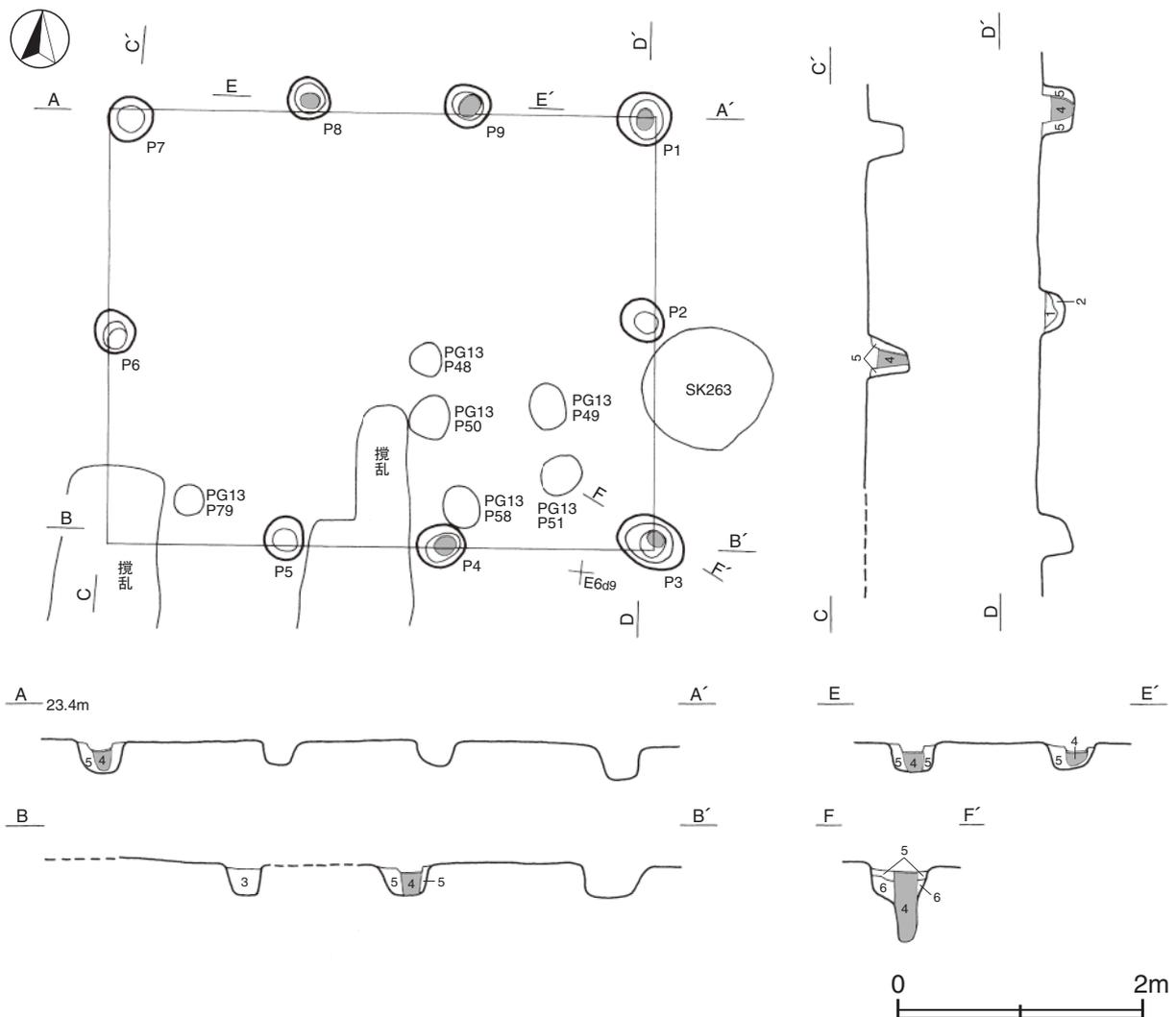
柱穴 9 か所。平面形は円形または楕円形で, 長径 35 ~ 65cm, 短径 31 ~ 41cm である。深さは 25 ~ 83cm で, 掘方の断面形は逆台形である。第 1 ~ 3 層は柱抜き取り後の堆積層, 第 4 層は柱痕跡, 第 5・6 層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片 4 点 (甕類) が P 1・P 9 から出土している。

所見 出土土器が細片のため, 時期は不明である。



第 199 図 第 47 号掘立柱建物跡実測図

第 60 号掘立柱建物跡 (第 200 図)

位置 調査区西部の E 4 f0 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

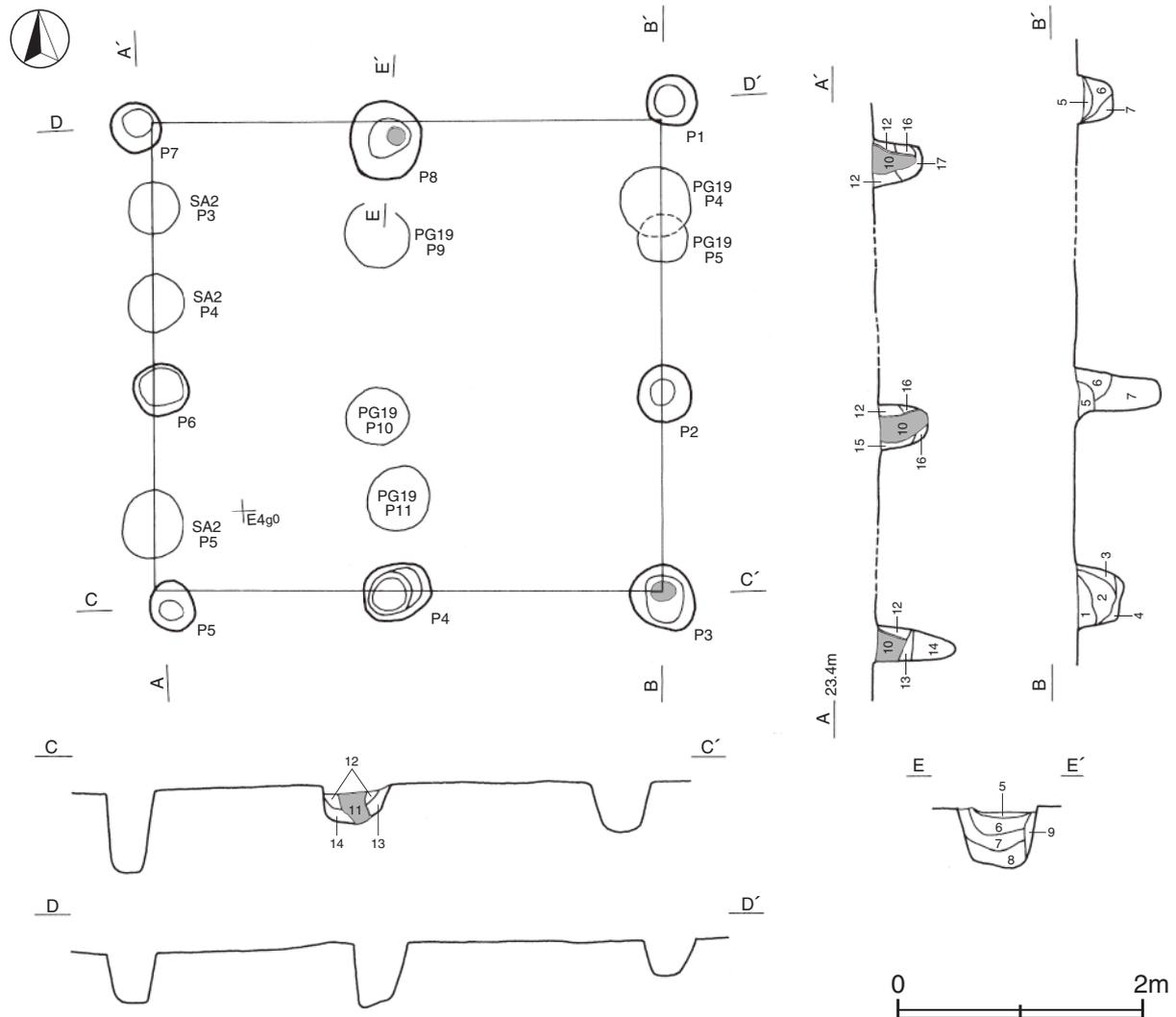
重複関係 第 2 号柱列跡, 第 19 号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行, 梁行ともに 2 間の側柱建物跡で, 桁行方向は N - 87° - W の東西棟である。規模は桁行 4.20 m, 梁行 3.90 m で, 面積は 16.38m² である。柱間寸法は, 桁行が 2.1 m (7 尺) で, 梁行は北平から 2.1 m (7 尺)・1.8 m (6 尺) で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8 か所。平面形は円形または楕円形で, 長径 40 ~ 64cm, 短径 38 ~ 50cm である。深さは 26 ~ 72cm で, 掘方の断面形は U 字形である。第 1 ~ 9 層は柱抜き取り後の堆積層, 第 10・11 層は柱痕跡, 第 12 ~ 17 層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|--------|-------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 10 暗 褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 11 黒 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 12 暗 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 灰 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 13 黒 褐色 | ローム粒子微量 |
| 5 灰 褐色 | ロームブロック微量 | 14 黒 褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 暗 褐色 | ロームブロック少量 | 15 褐 色 | ロームブロック少量 |
| 7 黒 褐色 | ローム粒子少量 | 16 灰 褐色 | ロームブロック少量 |
| 8 褐 色 | ローム粒子中量 | 17 褐 色 | ロームブロック多量 |
| 9 褐 色 | ロームブロック中量 | | |



第 200 図 第 60 号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 11 点（甕類），須恵器片 4 点（坏 1，甕類 3）が P 2・P 3・P 6 から出土しているが、いずれも細片である。

所見 時期は，出土土器から平安時代以降と考えられるが，出土遺物が細片のため明確な時期は不明である。

第 61 号掘立柱建物跡（第 201 図）

位置 調査区北西部の E 5 a4 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

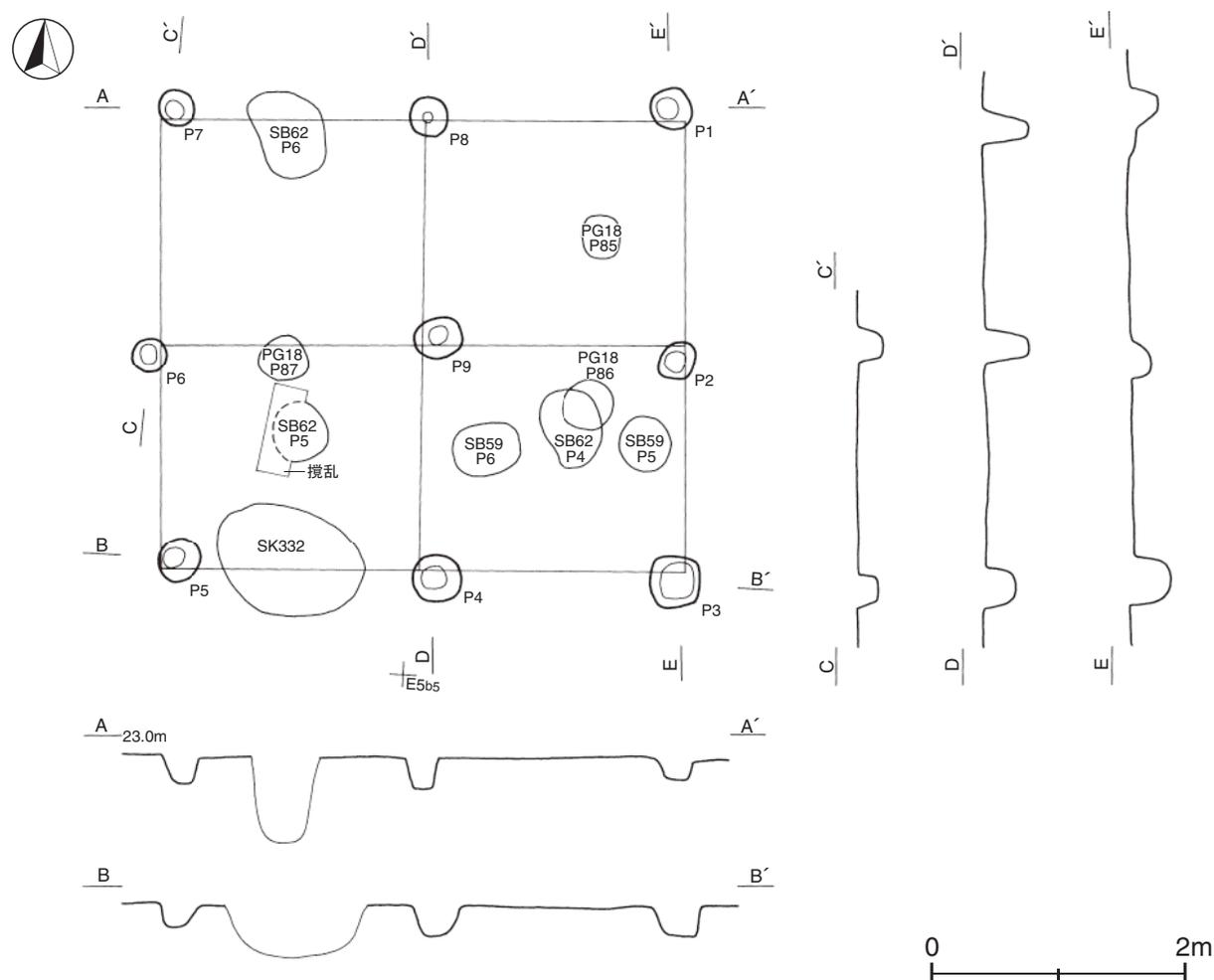
重複関係 第 59・62 号掘立柱建物跡，第 332 号土坑を掘り込んでいる。第 18 号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行，梁行ともに 2 間の総柱建物跡で，桁行方向は N - 2° - W の東西棟である。規模は桁行 4.20 m，梁行 3.60 m で，面積は 15.12m² である。柱間寸法は，桁行 2.1 m（7 尺），梁行 1.8 m（6 尺）で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9 か所。平面形は円形または楕円形で，長径 29 ~ 42cm，短径 28 ~ 40cm である。深さは 14 ~ 36cm で，掘方の断面形は U 字形である。

遺物出土状況 土師器片 3 点（坏 1，甕類 2），須恵器片 2 点（坏）が P 6・P 9 から出土している。

所見 時期は，出土土器から平安時代以降と考えられるが，出土遺物が細片のため明確な時期は不明である。



第 201 図 第 61 号掘立柱建物跡実測図

第 63 号掘立柱建物跡 (第 202 図)

位置 調査区北西部の E 4 b0 ~ E 5 c1 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 56・57 号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行, 梁行ともに 1 間の側柱建物跡で, 桁行方向は N - 9° - E の南北棟である。規模は桁行 6.00 m, 梁行 1.80 m で, 面積は 10.80m² である。柱間寸法は, 桁行 6.0 m (20 尺), 梁行 1.8 m (6 尺) に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

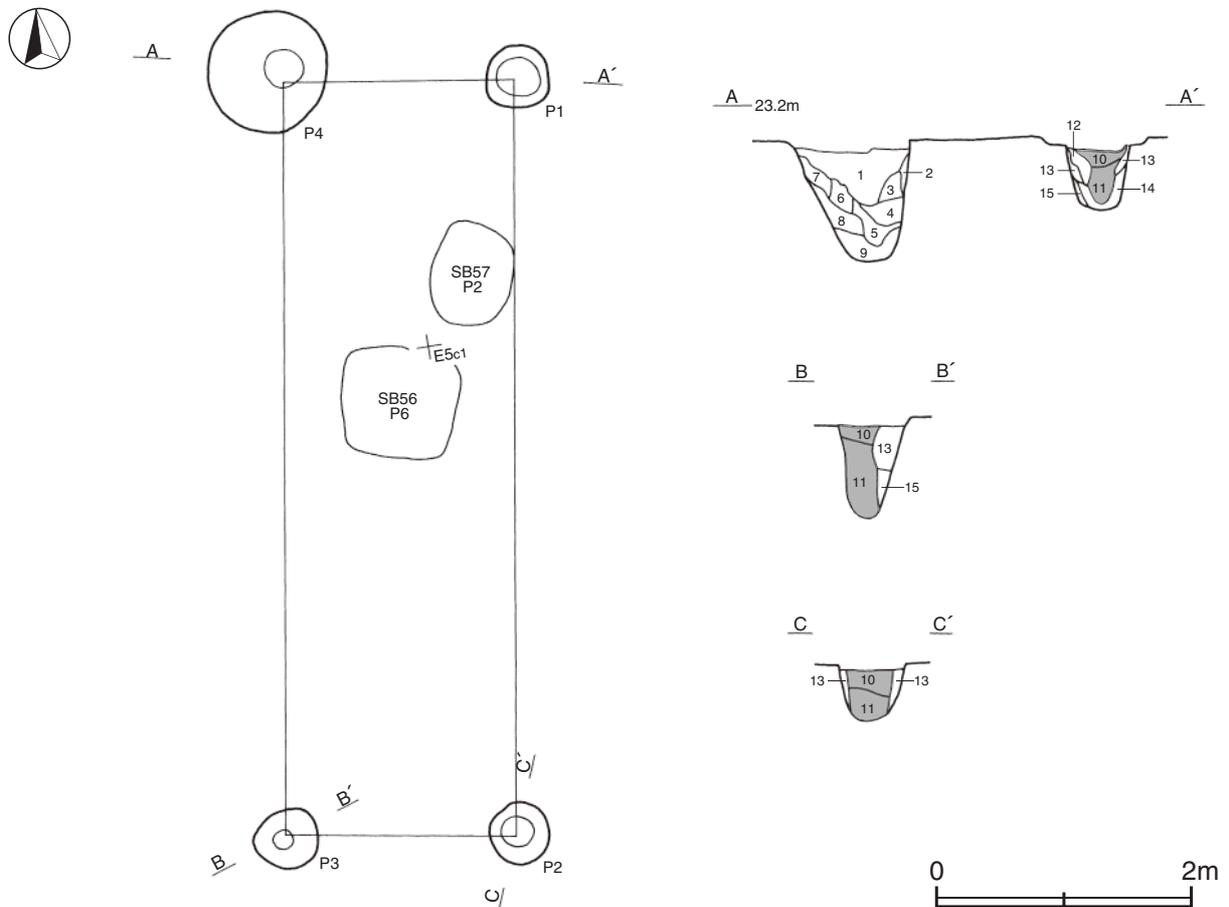
柱穴 4 か所。平面形は円形で, 長径 47 ~ 97cm, 短径 47 ~ 94cm である。深さは 47 ~ 97cm で, 掘方の断面形は U 字形である。第 1 ~ 9 層は柱抜き取り後の堆積層, 第 10・11 層は柱痕跡, 第 12 ~ 15 層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

1 極暗褐色	ローム粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 にぶい褐色	ローム粒子微量	11 極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 黒色	ローム粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック微量
5 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	13 褐色	ロームブロック微量
6 明褐色	ローム粒子中量	14 暗褐色	ロームブロック少量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	15 明褐色	ロームブロック少量
8 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片 15 点 (坏 2, 甕類 13), 須恵器片 9 点 (坏 4, 蓋 4, 甕類 1) が各柱穴から出土している。

所見 時期は, 出土土器から平安時代以降と考えられるが, 出土遺物が細片のため明確な時期は不明である。



第 202 図 第 63 号掘立柱建物跡実測図

第 64 号掘立柱建物跡 (第 203 図)

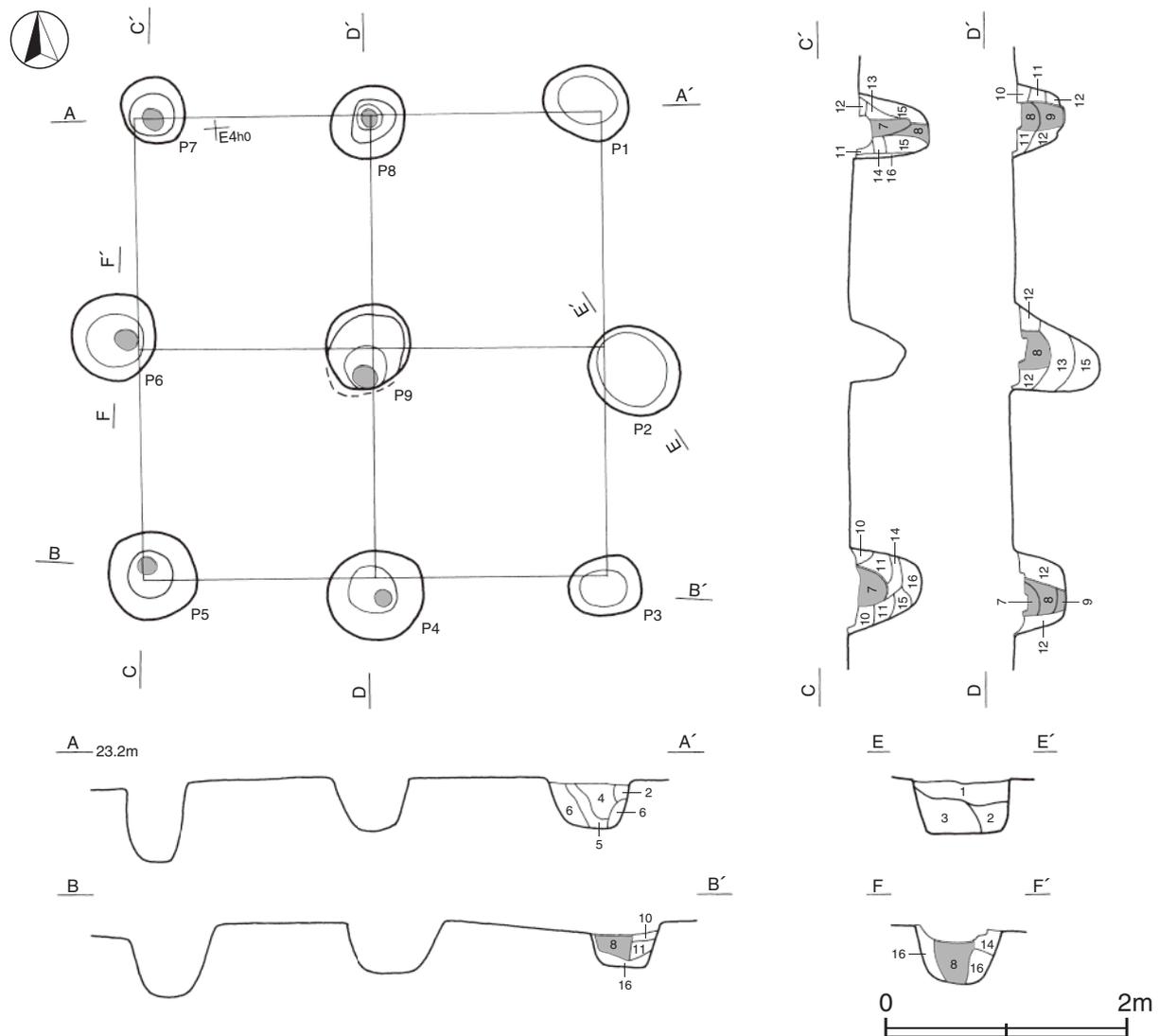
位置 調査区南西部の E 4 h0 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

規模と構造 桁行, 梁行ともに 2 間の総柱建物跡で, 桁行方向は N - 5° - E の南北棟である。規模は桁行, 梁行ともに 3.90 m で, 面積は 15.21 m² である。柱間寸法は, 桁行, 梁行ともに 1.95 m (6.5 尺) で等間隔に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9 か所。平面形は円形または楕円形で, 長径 56 ~ 81 cm, 短径 48 ~ 74 cm である。深さは 33 ~ 81 cm で, 掘方の断面形は U 字形または逆台形である。第 1 ~ 6 層は柱抜き取り後の堆積層, 第 7 ~ 9 層は柱痕跡, 第 10 ~ 16 層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|--------|------------------------|----------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック微量 | 9 褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 11 にぶい褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 12 褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 褐色 | ロームブロック微量 |
| 8 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 16 明褐色 | ロームブロック少量 |



第 203 図 第 64 号掘立柱建物跡実測図

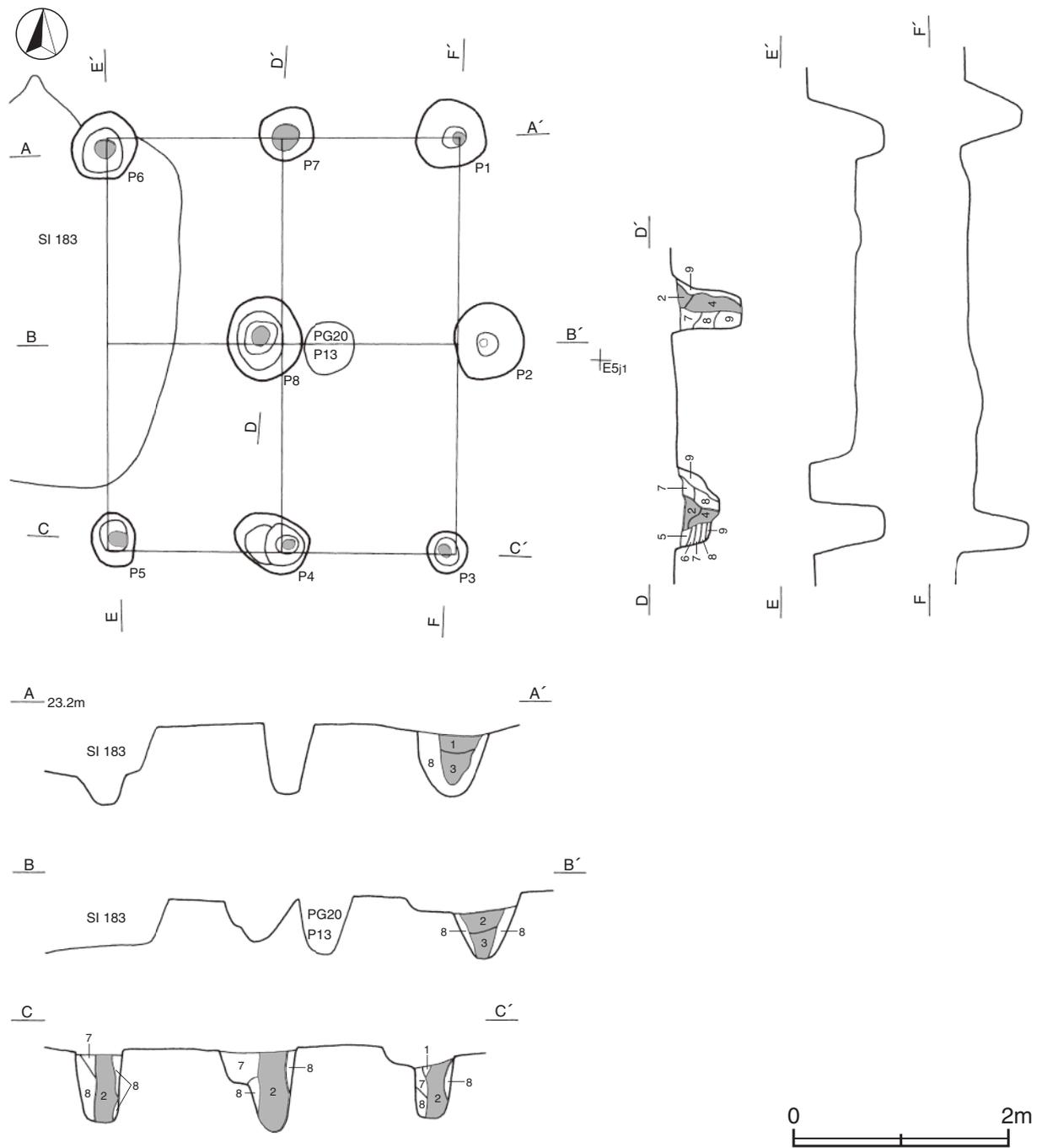
遺物出土状況 土師器片 35 点 (坏 6, 甕類 29), 須恵器片 10 点 (坏 8, 甕類 2) のほか, 鉄滓 1 点 (15.5 g) が P1 ~ P3・P5・P7・P9 から出土している。

所見 時期は, 出土土器から平安時代以降と考えられるが, 出土遺物が細片のため明確な時期は不明である。

第 65 号掘立柱建物跡 (第 204 図)

位置 調査区南西部の E 4 i0 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 183 号住居跡を掘り込んでいる。第 20 号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。



第 204 図 第 65 号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 西平中央の柱穴が確認できないが、桁行、梁行ともに2間の総柱建物跡と推定され、桁行方向はN-0°の南北棟である。規模は桁行3.90m、梁行3.30mで、面積は12.87㎡である。柱間寸法は、桁行1.95m(6.5尺)、梁行1.65m(5.5尺)で均等に配置されている。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所しか確認できなかった。平面形は円形または楕円形で、長径39～77cm、短径37～69cmである。深さは38～63cmで、掘方の断面形はU字形である。第1～4層は柱痕跡、第5～9層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説(各柱穴共通)

1 黒褐色	ローム粒子微量	6 褐色	ローム粒子少量
2 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子微量	8 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 明褐色	ロームブロック少量
5 にぶい褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片7点(坏1, 甕類6), 須恵器片2点(坏)がP2～P5・P8から出土している。
所見 時期は、9世紀後葉に比定できる第183号住居跡を掘り込んでいることから10世紀以降と考えられるが、明確な時期は不明である。

表9 その他の掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁(間)	規模 桁×梁(m)	面積 (㎡)	柱間寸法		柱穴				主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
						桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形	深さ(cm)			
44	F5a7~ F5b8	N-13°-E	2×3	4.80×4.20	20.16	2.1~2.7	0.9~2.1	側柱	12	円形	10~32	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	-	SI168→本跡 SB49 PG14
45	E5e7~ E5f8	N-8°-E	3×[2]	4.50×4.20	18.90	1.5	2.1	側柱	6	円形	52~64	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	-	SI153→本跡
47	E6c8	N-83°-E	3×2	4.50×3.60	16.20	1.5	1.8	側柱	9	円形 楕円形	25~83	土師器片	-	SK263・PG13
60	E4f0	N-87°-W	2×2	4.20×3.90	16.38	2.1	1.8・2.1	側柱	8	円形 楕円形	26~72	土師器片, 須恵器片	-	SA2, PG19
61	E5a4	N-2°-W	2×2	4.20×3.60	15.12	2.1	1.8	総柱	9	円形 楕円形	14~36	土師器片, 須恵器片	-	SB59・62, SK332→ 本跡 PG18
63	E4b0~ E5c1	N-9°-E	1×1	6.00×1.80	10.80	6.0	1.8	側柱	4	円形	47~97	土師器片, 須恵器片	-	SB56・57
64	E4h0	N-5°-E	2×2	3.90×3.90	15.21	1.95	1.95	総柱	9	円形 楕円形	33~81	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	-	
65	E4i0	N-0°	2×2	3.90×3.30	12.87	1.95	1.65	総柱	8	円形 楕円形	38~63	土師器片, 須恵器片	-	SI183→本跡 PG20

(2) 柱列跡

第1号柱列跡(第205図)

位置 調査区南西部のF4a9～F4a0区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第20号ピット群のP17を掘り込んでいる。

規模と構造 東西方向に配置された柱穴3か所を確認した。軸方向はN-88°-Eで、柱間寸法は、2.1m(7尺)の等間隔である。柱筋はほぼ揃っている。

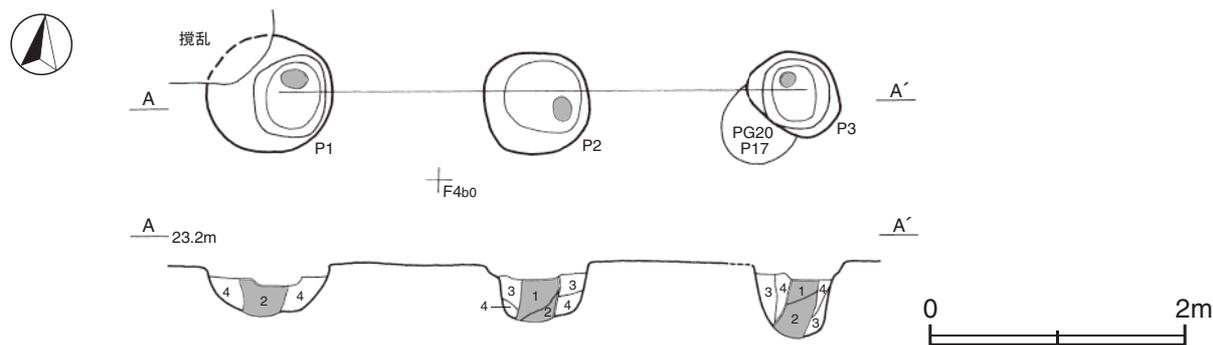
柱穴 平面形は長径72～97cm、短径60～93cmの円形または楕円形である。深さは42～58cmで、掘方の断面形はU字形である。第1・2層は柱痕跡で、第3・4層は埋土である。

柱穴土層解説(各柱穴共通)

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	3 明褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片3点(坏1, 甕類2), 須恵器片3点(坏2, 甕類1)が各柱穴から出土しているが、いずれも細片で図示できない。

所見 出土土器が少量で細片のため、時期は不明である。



第205図 第1号柱列跡実測図

第2号柱列跡 (第206図)

位置 調査区南西部の E 4e9 ~ E 4g9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 60 号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 南北方向に配置された柱穴 6 か所を確認した。軸方向は N - 5° - E で, 柱間寸法は, 北から 0.6 m (2 尺), 1.5 m (5 尺), 0.9 m (3 尺), 1.8 m (6 尺), 1.5 m (5 尺) と不規則である。柱筋はほぼ揃っている。

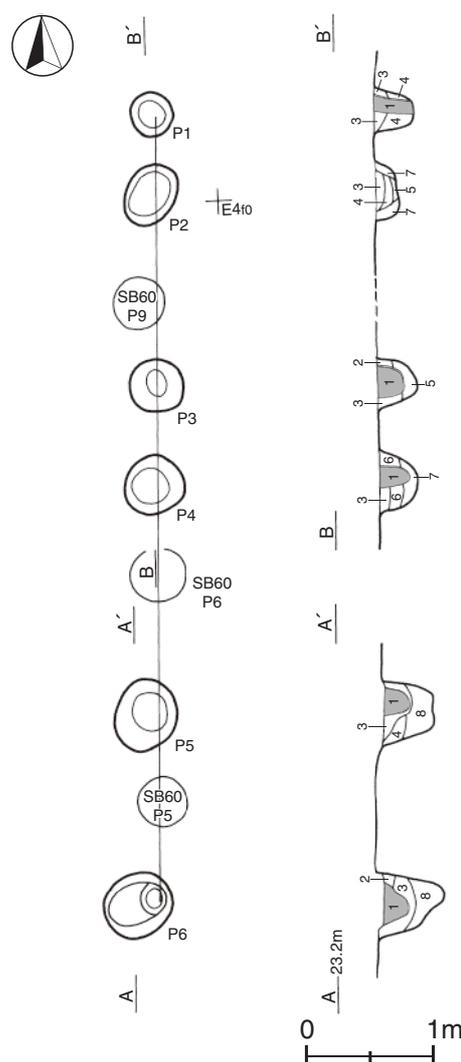
柱穴 平面形は長径 35 ~ 57cm, 短径 33 ~ 51cm の円形または楕円形である。深さは 18 ~ 53cm で, 掘方の断面形は逆台形または U 字形である。第 1 層は柱痕跡で, 第 2 ~ 8 層は埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- | | | |
|---|------|-----------------|
| 1 | 黒 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 | 黒 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 | 暗 褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 | 灰 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 7 | 灰 褐色 | ロームブロック中量 |
| 8 | 褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 土師器甕片 1 点が出土しているが, 細片で図示できない。

所見 出土土器が少量で細片のため, 時期は不明である。



第206図 第2号柱列跡実測図

第3号柱列跡 (第207図)

位置 調査区南西部の E 5b7 ~ E 5b9 区, 標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 171 号住居跡を掘り込んでいる。第 17 号ピット群と重複しているが新旧関係は不明である。

規模と構造 東西方向に配置された柱穴 4 か所を確認した。軸方向は N - 86° - W で, 柱間寸法は, 東から 2.1 m (7 尺), 2.1 m (7 尺), 1.8 m (6 尺) と不規則である。柱筋はほぼ揃っている。

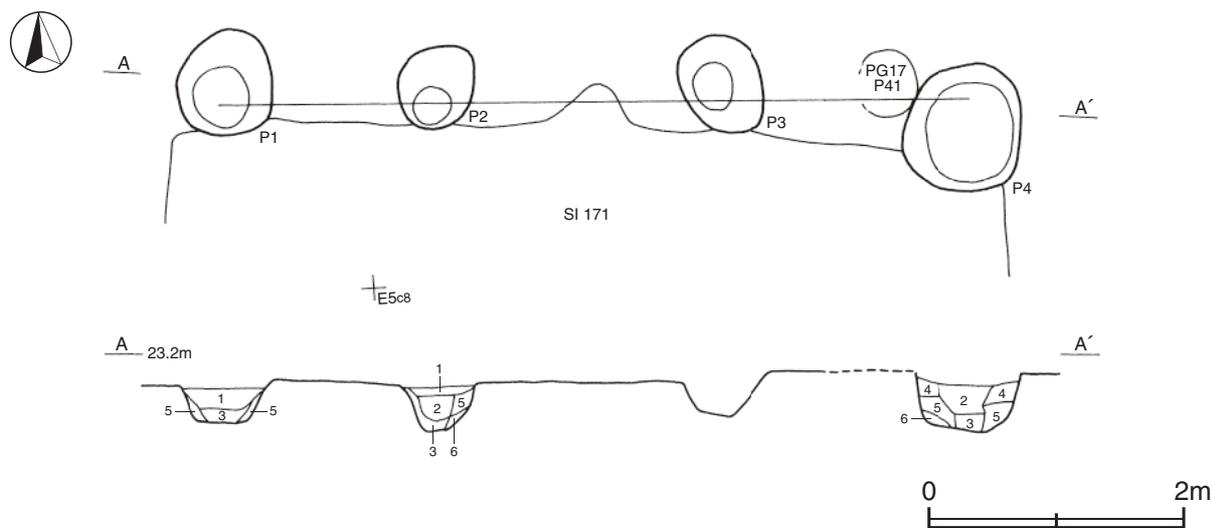
柱穴 平面形は長径 70～103cm，短径 54～90cmの楕円形である。深さは 34～48cmで，掘方の断面形は逆台形またはU字形である。第1～3層は柱抜き取り後の堆積土，第4～6層は埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|------------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片 10点（甕類），須恵器片 4点（坏），磁器片 1点（碗）が P 1～P 3 から出土しているが，いずれも細片で図示できない。

所見 出土土器が少量で細片のため，時期は不明である。



第 207 図 第 3 号柱列跡実測図

表 10 その他の柱列跡一覧表

番号	位置	軸方向	柱間数(間)	規模(m)	柱間寸法	柱 穴			主な出土遺物	時 期	備 考 重複関係(古→新)
						柱穴数	平面形	深さ(cm)			
1	F 4 a9 ~ F 4 a0	N - 88° - E	2	4.2	2.1	3	円形 楕円形	42 ~ 58	土師器片，須恵器片	-	PG20P17 → 本跡
2	E 4 e9 ~ E 4 g9	N - 5° - E	5	6.3	0.6 0.9 0.5 1.8	6	円形 楕円形	18 ~ 53	土師器片	-	SB60
3	E 5 b7 ~ E 5 b9	N - 86° - W	3	6.0	1.8 2.1	4	楕円形	34 ~ 48	土師器片，須恵器片， 磁器片	-	SI171 → 本跡 PG17

(3) 溝跡

第 26 号溝跡 (第 208 図・付図)

位置 調査区北部から西南部にかけての D 6 g3 ~ E 5 h4 区，標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 143・144・150・155・156・160・164・165・167 号住居跡，第 50・51 号掘立柱建物跡，第 27・28 号溝跡，第 257 号土坑を掘り込み，第 307 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西端は E 5 h4 区内で立ち上がり，北部が調査区域外へ延びているため，長さは 66.54 m しか確認できなかった。E 5 h4 区から東方向 (N - 89° - E) に直線的に延び，E 5 h0 区から北方向 (N - 18° - E) に屈曲し，ほぼ直線的に延びている。規模は上幅 0.46 ~ 2.40 m，下幅 0.20 ~ 0.96 m，深さ 20 ~ 90 cm である。断面形は U 字形で，壁は外傾して立ち上がっている。

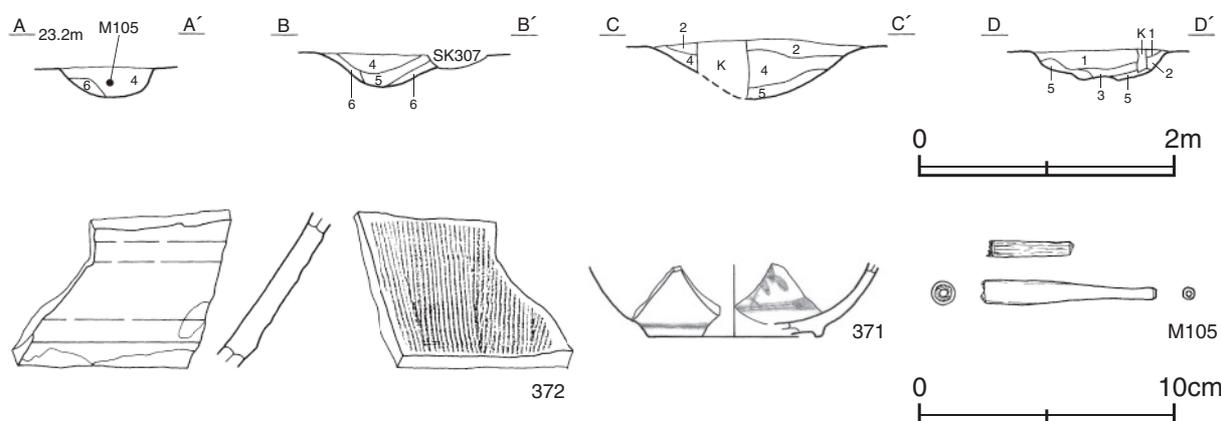
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 炭化物少量, ロームブロック・焼土粒子微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 陶器片2点(播鉢), 磁器片2点(碗), 瓦片5点(平瓦), 銅製品1点(煙管)のほか, 混入した土師器片204点(坏15, 甕類189), 須恵器片104点(坏36, 高台付坏2, 蓋3, 甕類61, 甌2), 鉄滓1点(36g)が出土している。M105は南部の覆土中層から出土している。371・372はいずれも覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土遺物から中世後半以降から近世と考えられるが, 明確な時期は不明である。



第208図 第26号溝跡・出土遺物実測図

第26号溝跡出土遺物観察表 (第208図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
371	磁器	中碗	-	(2.9)	[6.7]	精緻	灰白	良好	内面草花文 高台脇一重円 肥前系	覆土中	10% PL47
372	陶器	播鉢	-	(6.2)	-	精緻	明赤褐	良好	18条一単位の播目	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M105	煙管	(6.8)	0.9	0.25~0.65	(5.0)	銅	内羅字一部残存 吸口部のみ	覆土中層	PL51

第29号溝跡 (第209図・付図)

位置 調査区南西部のF5c1~F5d7区, 標高23mの平坦な台地上に位置している。

確認状況 第2号鍛冶工房跡の調査中に本跡の掘り込みを確認した。しかし, 調査区域際であり, 防塵ネットが設置されているため, 3か所のトレンチのみの調査となった。

重複関係 第191号住居跡, 第2号鍛冶工房跡を掘り込んでいます。

規模と形状 長さはトレンチ調査のため, 28mしか確認できなかった。F5c1区から東方向(N-108°-E)に直線的に延びている。上幅は調査区域際のため, 1.56~2.26mしか確認できなかった。下幅は0.30~0.58mで, 深さは42~68cmである。断面形はU字形で, 壁は外傾して立ち上がっている。

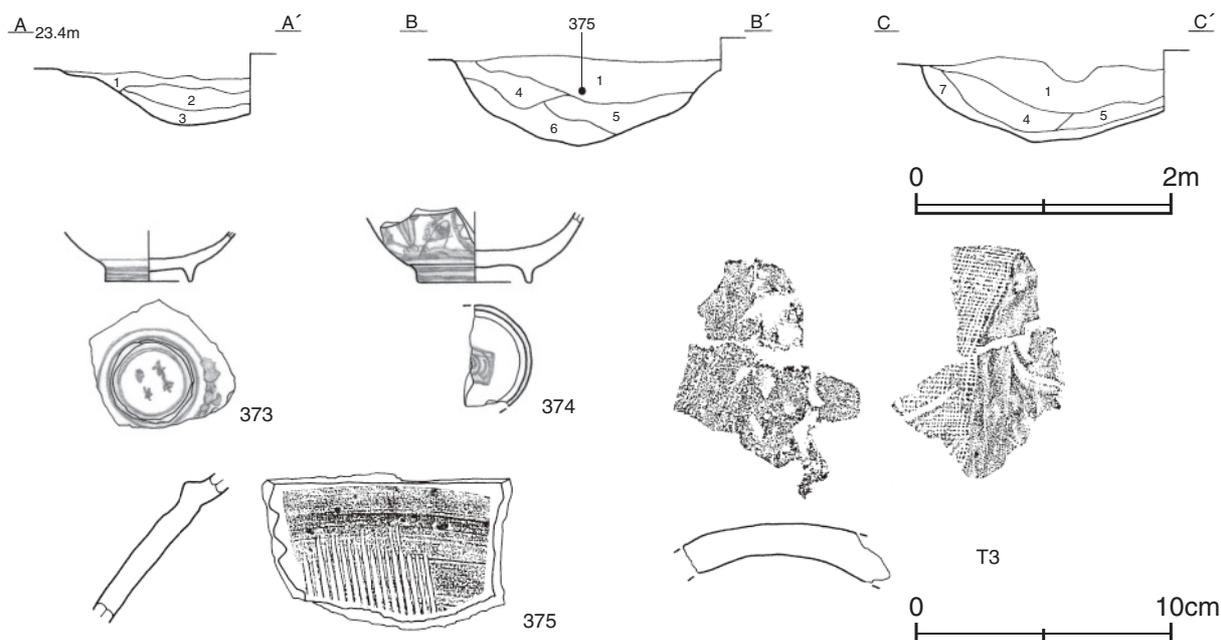
覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 7 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 陶器片1点(播鉢), 磁器片2点(碗), 瓦片1点のほか, 混入した土師器片11点(坏3, 甕類8), 須恵器片3点(坏), 鉄滓6点(663g)が出土している。375は中央部の覆土中層から出土している。373・374・T3はいずれも覆土中から出土している。

所見 現代の地割りと並行していることから, 区画溝としての機能が考えられる。時期は, 出土遺物から中世後半以降から近世と考えられるが, 明確な時期は不明である。



第209図 第29号溝跡・出土遺物実測図

第29号溝跡出土遺物観察表(第209図)

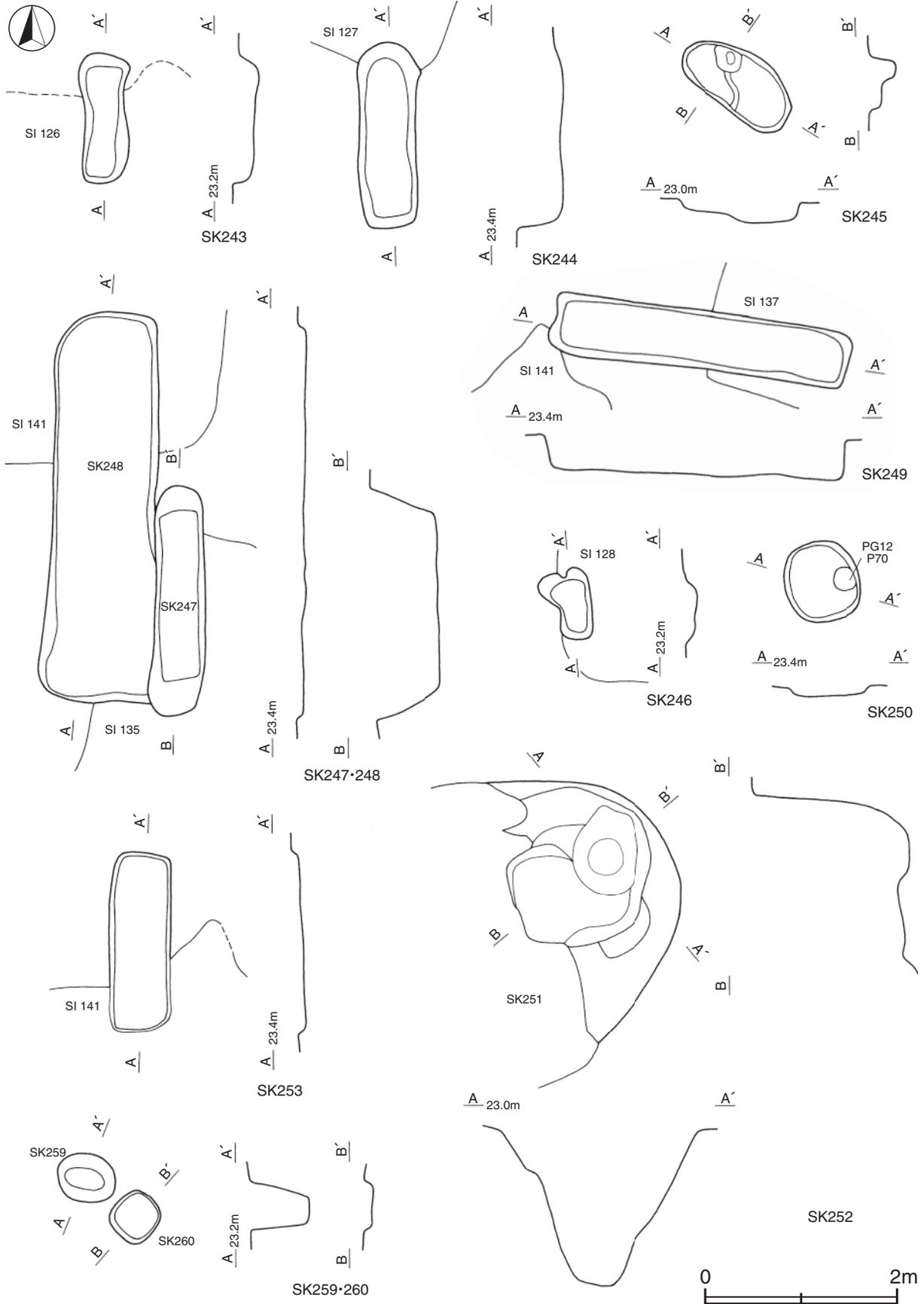
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
373	磁器	小碗	-	(2.0)	[3.3]	精緻	灰白	良好	外面草花文 高台脇一重円 高台二重円 高台内凹形棒「大明年製カ」 肥前系	覆土中	30% PL47
374	磁器	中碗	-	(2.8)	[4.4]	精緻	灰白	良好	外面草花文 高台二重円 高台内凹形棒「福カ」 肥前系	覆土中	30% PL47
375	陶器	播鉢	-	(6.2)	-	精緻	にぶい赤褐	良好	16条一単位の播り目 鉄釉 瀬戸・美濃系	覆土中層	10% PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
T3	丸瓦	(10.5)	(8.3)	(1.3~1.7)	(117.8)	長石・石英・雲母・赤色粒子	凸面ナデ 凹面布目痕	覆土中	PL47

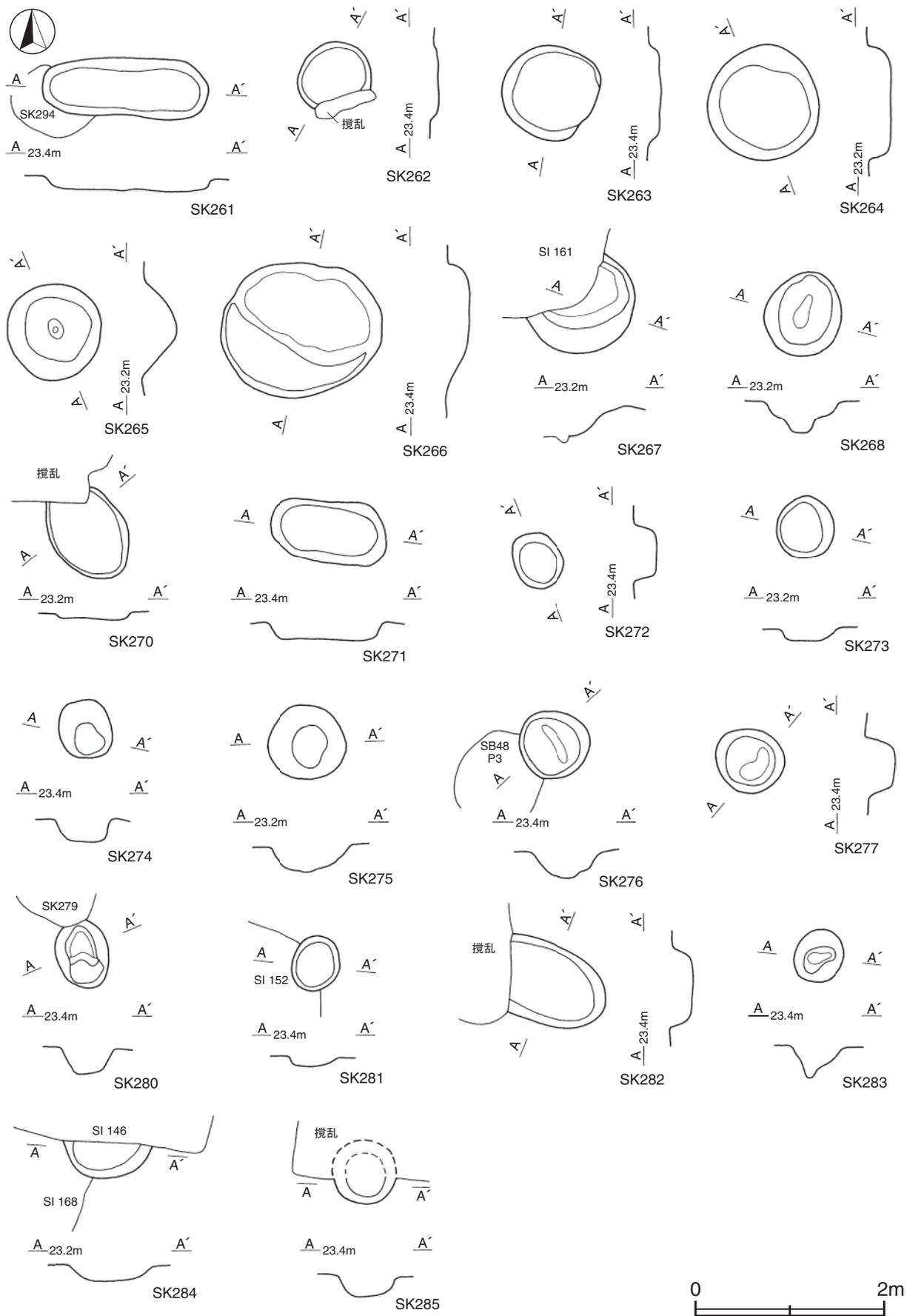
表11 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
26	D 6g3~E 5h4	N-18°-E N-89°-E	L字状	(66.54)	0.46~2.40	0.20~0.96	20~90	U字形	外傾	人為	陶器片, 磁器片, 瓦片, 煙管	重複関係(古→新) SI143・144・150・155・156・160・164・165・167, SB50・51, SD27・28, SK257→本跡→SK307
29	F 5c1~F 5d7	N-108°-E	直線状	(28.00)	(1.56~2.26)	0.30~0.58	42~68	U字形	外傾	人為	陶器片, 磁器片, 瓦片	SI191, 第2号鍛冶工房跡→本跡

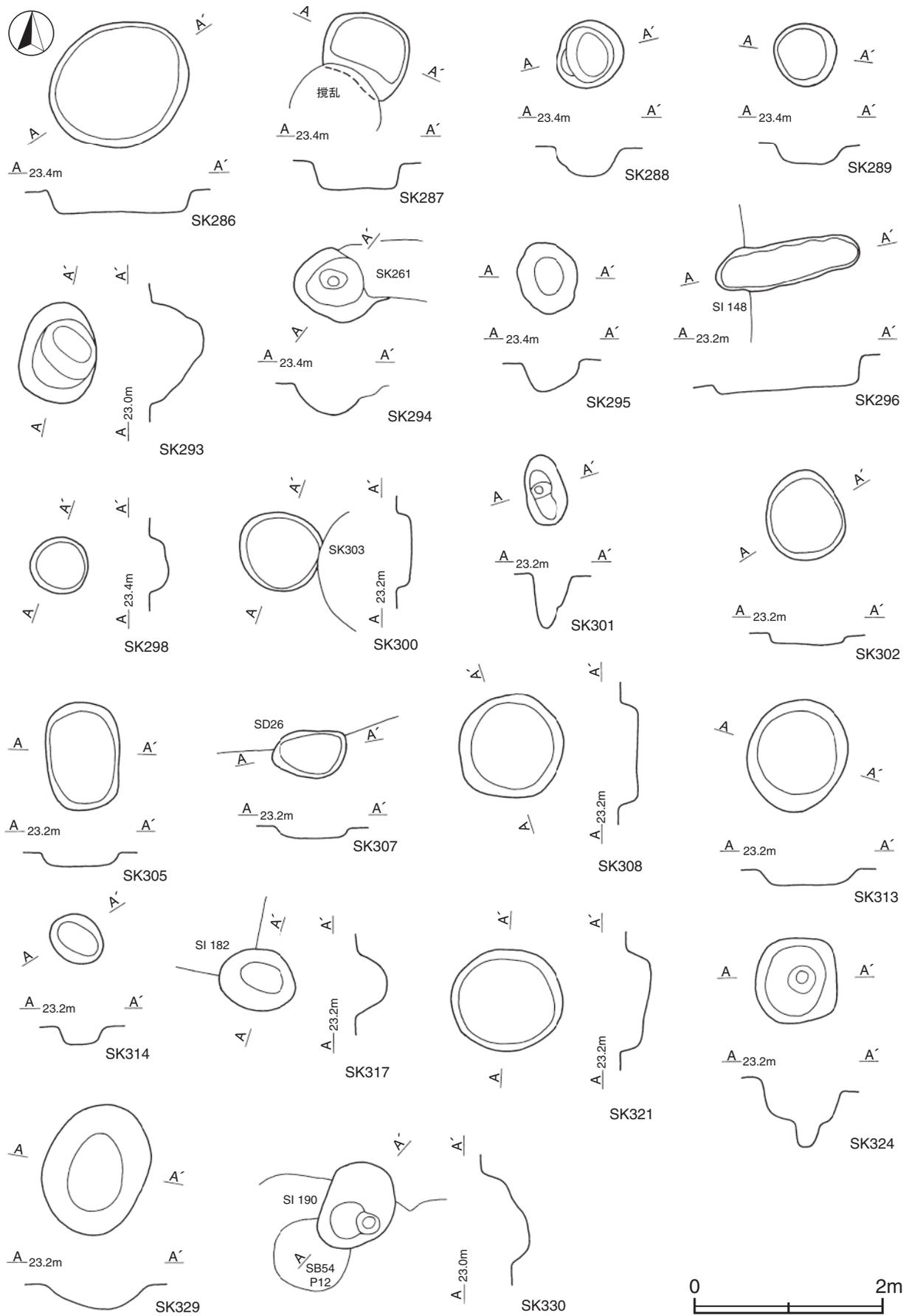
(4) 土坑



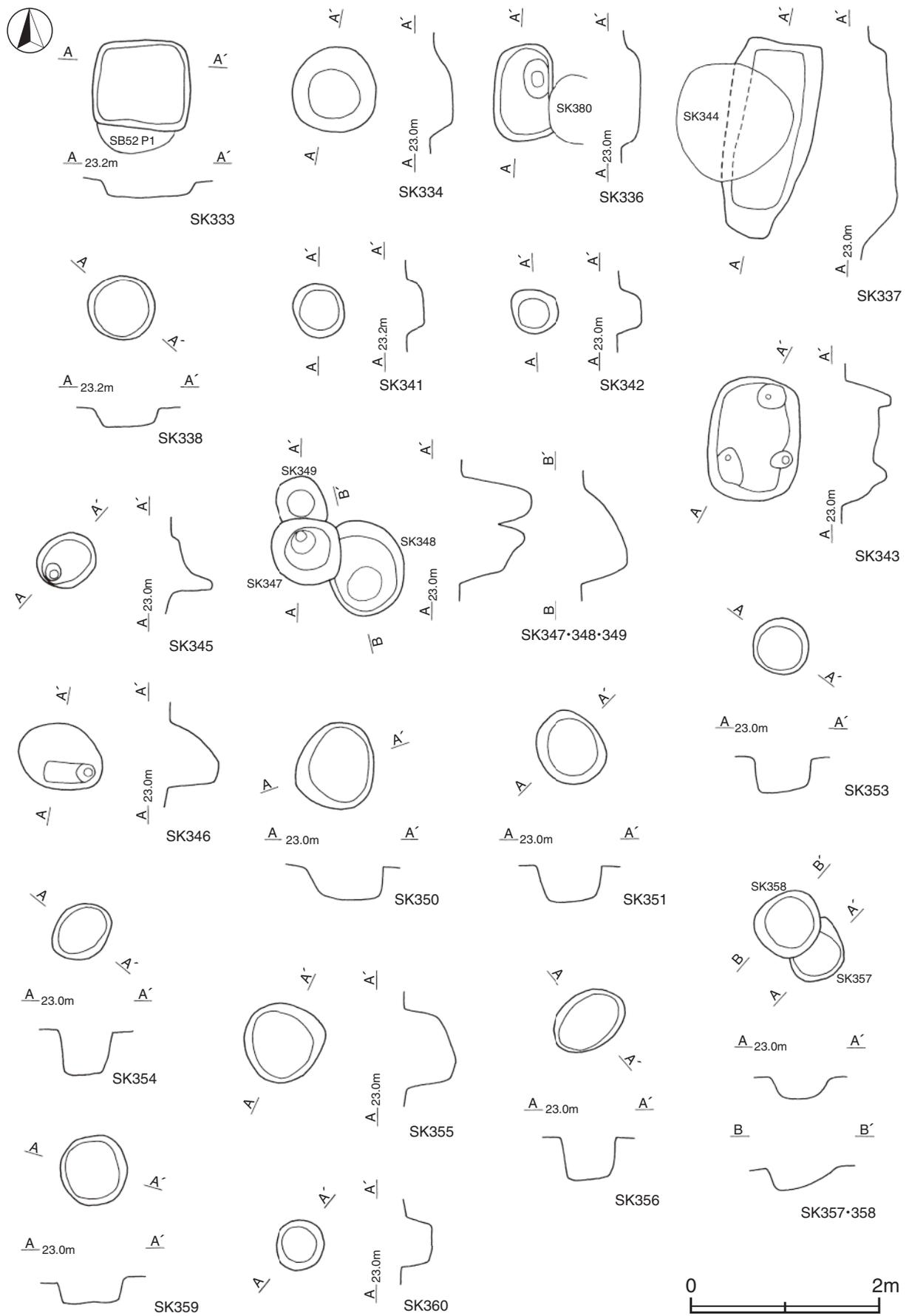
第 210 図 その他の土坑実測図 (1)



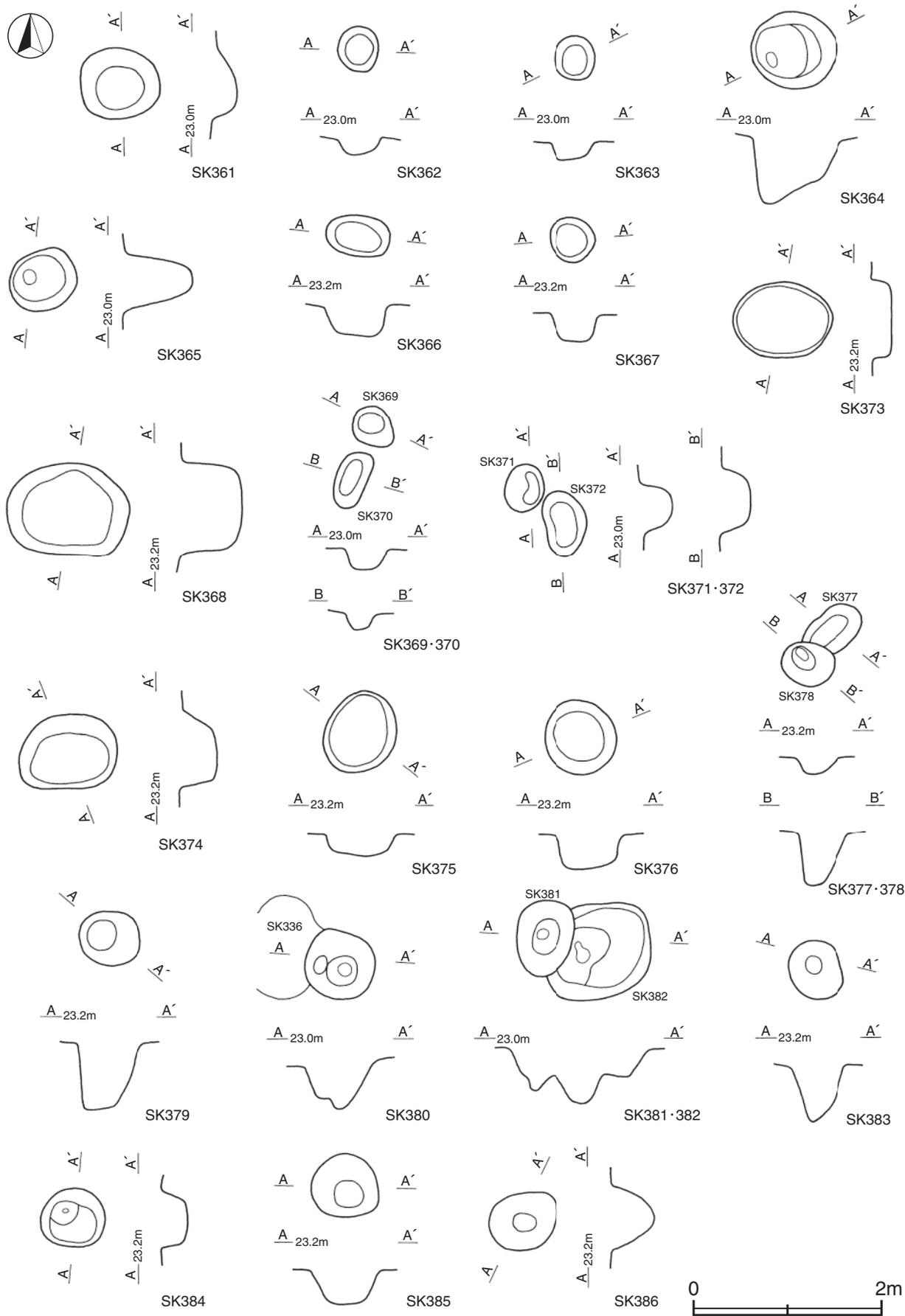
第 211 図 その他の土坑実測図 (2)



第 212 図 その他の土坑実測図 (3)



第 213 図 その他の土坑実測図 (4)



第 214 図 その他の土坑実測図 (5)

表 12 その他の土坑一覧表 (第 210 ~ 214 図)

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
243	E 6 d9	N - 0°	隅丸長方形	1.39 × 0.48	24	平坦	外傾	人為		SI126 →本跡
244	D 6 j5	N - 2° - W	隅丸長方形	1.94 × 0.61	48	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片, 瓦片	SI127 →本跡
245	D 6 i0	N - 57° - W	楕円形	1.29 × 0.64	30	段状	外傾	人為		
246	E 6 b9	N - 7° - W	不定形	0.75 × 0.35	11	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SI128 →本跡
247	E 6 h2	N - 0°	楕円形	2.42 × 0.55	68	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SI135, SK248 → 本跡
248	E 6 h2	N - 2° - E	隅丸長方形	4.10 × 1.09	14	平坦	直立	人為	土師器片, 須恵器片	SI135・141 →本 跡→SK247
249	E 6 g2	N - 82° - W	長方形	3.12 × 0.65	40	平坦	外傾・直立	人為	土師器片, 須恵器片	SI137・141 →本跡
250	E 6 i1	-	円形	0.85 × 0.78	10	平坦	外傾	人為	土師器片	本跡→PG12P70
252	D 7 j1	N - 54° - E	[円形・楕円形]	2.80 × (1.72)	165	皿状	外傾	人為		本跡→SK251
253	E 6 g2	N - 2° - W	長方形	1.88 × 0.65	9	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	本跡→SI141
259	F 6 a2	N - 68° - W	楕円形	0.62 × 0.51	61	平坦	外傾	人為		
260	F 6 a2	N - 39° - E	隅丸方形	0.51 × 0.47	8	平坦	緩斜	人為		
261	D 6 j4	N - 87° - W	楕円形	1.78 × 0.63	13	平坦	外傾	人為	土師器片	SK294 →本跡
262	D 6 i4	-	[円形]	0.81 × (0.57)	8	平坦	外傾	人為		
263	E 6 c9	-	円形	1.05 × 1.03	13	平坦	外傾	人為	土師器片	SB47
264	E 5 d9	-	円形	1.24 × 1.22	25	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
265	E 5 e8	-	円形	1.03 × 1.00	35	皿状	外傾・緩斜	人為	土師器片	
266	E 6 c9	N - 64° - W	楕円形	1.65 × 1.46	24	平坦	緩斜	人為		
267	E 5 f0	-	[円形・楕円形]	(1.10 × 0.74)	40	皿状	緩斜	自然		本跡→SI161
268	E 5 g9	N - 21° - E	楕円形	0.92 × 0.83	35	段状	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	PG14P5 →本跡
270	E 6 e9	N - 40° - W	楕円形	(0.95) × 0.82	10	平坦	外傾	人為		PG13P78 →本跡
271	E 6 a3	N - 83° - W	楕円形	1.26 × 0.68	20	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
272	E 6 b3	N - 22° - W	楕円形	0.62 × 0.52	24	平坦	直立・外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
273	E 5 h9	N - 11° - E	楕円形	0.69 × 0.61	14	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	
274	E 5 i9	-	円形	0.61 × 0.56	25	平坦	外傾・緩斜	人為	土師器片	
275	F 5 b9	-	円形	0.83 × 0.80	27	皿状	緩斜	人為		
276	E 5 j9	-	円形	0.77 × 0.75	27	皿状	緩斜	人為	土師器片	SB48P3 →本跡
277	E 5 j9	-	円形	0.72 × 0.70	29	平坦	外傾	人為	須恵器片	
280	E 5 j0	N - 7° - W	楕円形	(0.68) × 0.55	30	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	本跡→SK279
281	E 6 a3	N - 16° - E	楕円形	0.58 × 0.50	11	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	SI152 →本跡
282	E 6 c6	N - 71° - W	[楕円形]	(1.09) × 0.86	24	平坦	外傾	人為		
283	E 5 j0	-	円形	0.58 × 0.57	33	皿状	外傾	人為	土師器片	
284	F 5 a9	-	[円形・楕円形]	(0.95 × 0.40)	15	平坦	外傾	自然		SI168 →本跡 →SI146
285	E 5 j0	-	[円形]	[0.68 × 0.67]	23	平坦	外傾	人為		
286	D 6 h9	N - 57° - E	楕円形	1.54 × 1.32	24	平坦	外傾	人為		
287	D 6 h8	N - 65° - W	不整楕円形	0.92 × [0.72]	29	平坦	直立・外傾	人為		
288	D 6 i9	N - 39° - E	楕円形	0.74 × 0.66	32	皿状	緩斜	人為		
289	E 5 i8	-	円形	0.69 × 0.67	19	平坦	外傾・緩斜	人為	土師器片	
293	E 7 a1	N - 7° - E	楕円形	1.09 × 0.80	57	皿状	外傾	人為		
294	D 6 j4	-	[円形]	0.84 × (0.69)	32	皿状	緩斜	人為	土師器片	本跡→SK261
295	D 6 i6	N - 16° - W	楕円形	0.75 × 0.63	32	皿状	緩斜	人為	土師器片	
296	E 6 a6	N - 79° - E	楕円形	1.58 × 0.46	38	平坦	直立	人為	土師器片	SI148 →本跡
298	E 6 b1	-	円形	0.60 × 0.60	21	平坦	外傾	人為		
300	F 5 a6	-	円形	0.88 × 0.84	15	平坦	外傾	人為		本跡→SK303
301	F 5 a2	N - 17° - W	楕円形	0.75 × 0.45	58	皿状	外傾	自然	土師器片, 須恵器片, 陶器片	

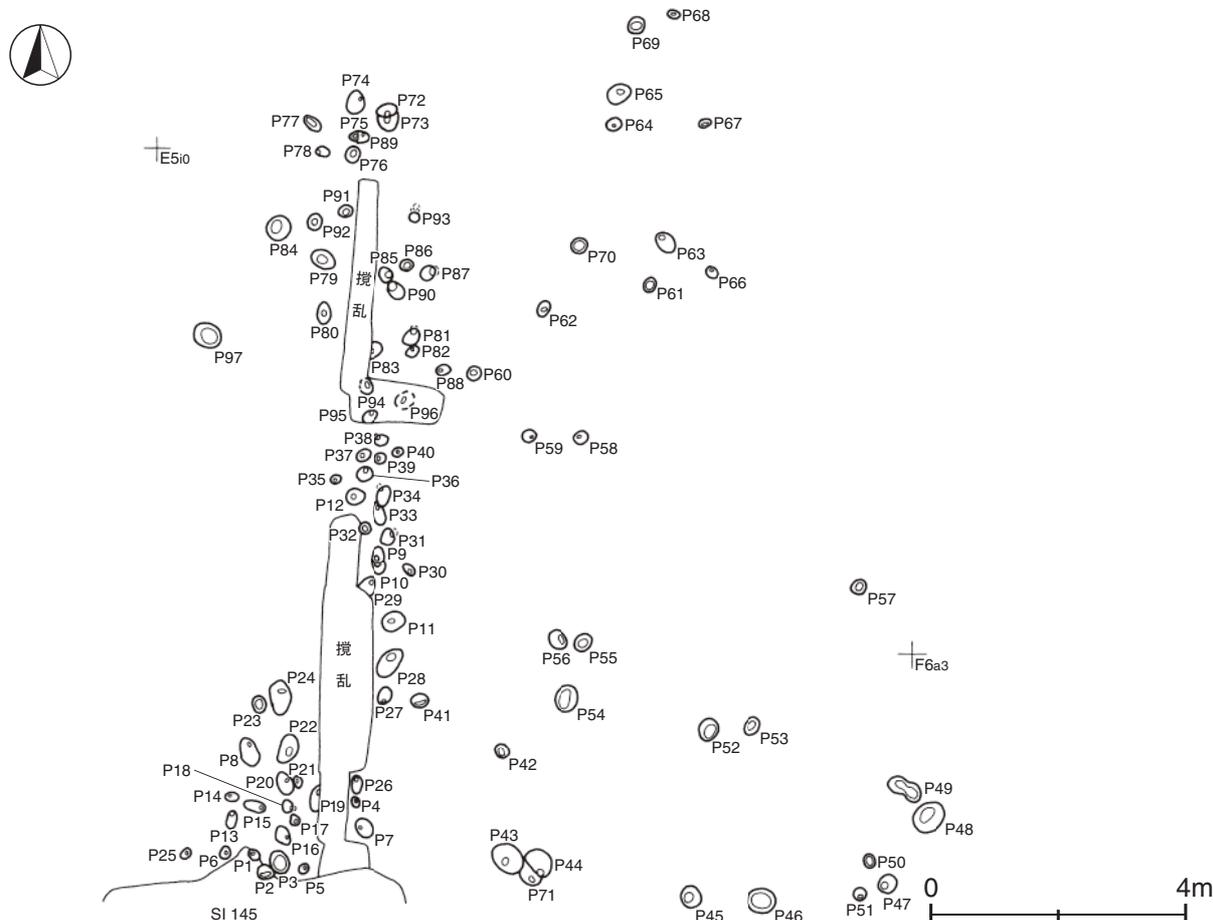
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
302	F 5 b2	N - 19° - W	楕円形	0.94 × 0.84	10	平坦	外傾	自然		
305	E 5 i4	N - 2° - W	楕円形	1.14 × 0.78	17	平坦	緩斜	自然	土師器片	SB50・51
307	E 5 h9	N - 81° - W	楕円形	0.76 × 0.52	14	平坦	外傾・緩斜	自然		SD26 →本跡
308	E 5 d9	-	円形	1.16 × 1.14	18	平坦	外傾	人為		
313	F 4 b8	N - 15° - E	楕円形	1.20 × 1.04	16	平坦	緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	
314	F 4 b0	N - 55° - W	楕円形	0.62 × 0.50	20	平坦	外傾	人為		
317	F 4 a0	N - 67° - W	楕円形	0.82 × 0.68	32	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SI182 →本跡
321	F 4 a9	-	円形	1.18 × 1.10	28	平坦	外傾・緩斜	人為		
324	E 5 b2	-	円形	0.92 × 0.88	42・64	平坦	外傾	人為	土師器片	
329	E 5 h2	N - 18° - E	楕円形	1.38 × 1.08	28	皿状	緩斜	自然		
330	E 5 c2	N - 31° - E	楕円形	1.00 × 0.76	50・70	皿状	緩斜	人為		SI190,SB54 →本跡
333	E 5 b6	N - 90°	隅丸長方形	1.06 × 0.95	17	平坦	外傾	人為	土師器片	SB52P1 →本跡
334	E 5 a6	-	円形	0.90 × 0.88	21	皿状	外傾	人為	土師器片	
336	D 5 j6	N - 0°	楕円形	1.05 × 0.62	10・20	平坦	外傾	人為	土師器片	本跡→SK380
337	E 5 a6	N - 11° - E	長方形	2.10 × 0.95	32	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	本跡→SK344
338	E 5 h2	-	円形	0.72 × 0.68	18	平坦	外傾	人為		
341	E 5 a7	-	円形	0.58 × 0.55	18	平坦	外傾	人為		
342	E 5 a7	-	円形	0.50 × 0.48	24	平坦	外傾	人為		
343	D 5 j7	N - 3° - E	楕円形	1.35 × 0.97	37・46・50	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
345	D 5 j6	N - 45° - E	楕円形	0.62 × 0.54	16・44	平坦	直立・外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
346	D 5 j5	N - 68° - W	楕円形	0.92 × 0.72	60	皿状	直立・緩斜	人為	土師器片	
347	D 5 i6	-	[円形]	0.76 × (0.73)	68	皿状	外傾	人為		SK348・349 →本跡
348	D 5 i6	N - 6° - W	楕円形	1.02 × (0.77)	47	皿状	外傾・緩斜	人為		本跡→SK347
349	D 5 i6	N - 22° - W	[楕円形]	0.51 × (0.45)	75	皿状	外傾	人為		本跡→SK347
350	D 5 i6	N - 19° - E	楕円形	0.92 × 0.80	34	平坦	外傾・緩斜	人為		
351	D 5 i5	N - 26° - W	楕円形	0.81 × 0.69	40	平坦	外傾	人為		
353	D 5 i5	-	円形	0.60 × 0.60	36	平坦	外傾	人為		
354	D 5 h6	N - 43° - E	楕円形	0.69 × 0.55	47	平坦	外傾	人為		
355	D 5 h6	-	円形	0.85 × 0.85	54	平坦	外傾	人為	土師器片	
356	D 5 h6	N - 52° - E	楕円形	0.85 × 0.60	46	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
357	D 5 h4	N - 24° - W	[楕円形]	(0.61) × 0.60	22	皿状	緩斜	人為		本跡→SK358
358	D 5 h4	-	円形	0.73 × 0.67	23	皿状	外傾・緩斜	人為		SK357 →本跡
359	D 5 i3	-	円形	0.75 × 0.73	26	平坦	外傾	自然	土師器片, 須恵器片	
360	D 5 j4	-	円形	0.54 × 0.52	32	平坦	外傾	自然		
361	D 5 j4	N - 88° - W	楕円形	0.86 × 0.74	24	皿状	外傾・緩斜	人為	土師器片	
362	D 5 j4	N - 34° - W	楕円形	0.50 × 0.44	18	皿状	外傾	人為		
363	D 5 j4	-	円形	0.48 × 0.44	18	平坦	外傾	人為		SB62
364	D 5 h1	N - 90°	楕円形	0.95 × 0.83	72	段状	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
365	D 5 i1	-	円形	0.71 × 0.65	71	皿状	外傾	人為		
366	E 5 i3	N - 78° - W	楕円形	0.68 × 0.45	34	平坦	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
367	F 4 b0	-	円形	0.49 × 0.49	30	平坦	外傾	人為		
368	E 5 d3	N - 81° - W	楕円形	1.30 × 0.98	65	平坦	外傾	人為		SB54
369	E 5 e4	N - 44° - W	楕円形	0.51 × 0.43	24	平坦	外傾・緩斜	人為	土師器片	
370	E 5 e4	N - 25° - E	楕円形	0.63 × 0.31	19	平坦	外傾・緩斜	人為		
371	E 5 b4	N - 11° - E	楕円形	0.52 × 0.43	36	皿状	外傾	人為		SB52
372	E 5 b5	N - 10° - W	楕円形	0.71 × 0.45	34	皿状	外傾	人為		SB52

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
373	E 5 a0	N - 87° - E	楕円形	1.06 × 0.80	22	平坦	直立・外傾	人為	土師器片, 須恵器片	
374	D 5 i0	N - 70° - E	楕円形	1.11 × 0.84	39	平坦	外傾・緩斜	人為		
375	D 5 i8	N - 25° - E	楕円形	0.94 × 0.73	23	平坦	外傾	人為		
376	E 5 a7	-	円形	0.81 × 0.76	38	皿状	外傾	人為		
377	E 5 e4	N - 48° - E	楕円形	(0.58) × 0.43	17	平坦	直立	人為		本跡→SK378
378	E 5 e4	N - 60° - W	楕円形	0.55 × 0.45	58	皿状	直立	人為		SK377→本跡
379	E 5 e3	N - 90°	楕円形	0.65 × 0.58	72	平坦	直立	人為		
380	D 5 j6	N - 19° - W	楕円形	0.83 × 0.75	55	段状	外傾	人為	土師器片, 須恵器片	SK336→本跡
381	D 5 j7	N - 5° - E	楕円形	0.83 × 0.61	46	皿状	外傾	人為	土師器片	SK382→本跡 SB58
382	D 5 j7	N - 28° - E	楕円形	1.25 × [1.06]	69	段状	外傾・緩斜	人為	土師器片, 須恵器片	本跡→SK381 SB58
383	D 5 j8	N - 17° - W	楕円形	0.64 × 0.55	65	皿状	外傾	人為	土師器片	SB58
384	E 5 a7	-	円形	0.69 × 0.67	50	平坦	直立	人為		SB58
385	E 5 a7	N - 50° - W	楕円形	0.75 × 0.66	32	平坦	緩斜	人為	土師器片	
386	E 4 e0	N - 49° - E	楕円形	0.78 × 0.65	48	皿状	緩斜	人為		

(5) ピット群

第12号ピット群 (第215図)

位置 調査区南部の標高23m, E 5 h0 ~ F 6 a3区にかけての東西12m, 南北14mの範囲から, 柱穴状のピット97か所を確認した。



第215図 第12号ピット群実測図

重複関係 第 145 号住居跡, 第 250 号土坑を掘り込んでいる。

規模 平面形は長径 15 ~ 59cm, 短径 11 ~ 46cmの円形または楕円形で, 深さが 10 ~ 84cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

遺物出土状況 土師器片 19 点 (坏 3, 甕類 16), 須恵器片 10 点 (坏 5, 蓋 3, 甕類 2), 陶器片 1 点 (瓶類), 瓦片 1 点が P 7・P 8・P 12・P 16・P 19・P 20・P 28・P 38 ~ P 40・P 52・P 78 ~ P 80・P 83・P 88・P 91・P 92 から出土しているが, いずれも細片で図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。

第 12 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	F 5 a0	楕円形	19	16	52
2	F 5 a0	円形	23	22	51
3	F 5 a0	円形	34	31	21
4	F 5 a0	楕円形	17	13	48
5	F 5 a0	楕円形	17	14	45
6	F 5 a0	楕円形	18	16	24
7	F 5 a0	楕円形	31	26	32
8	F 5 a0	楕円形	45	28	68
9	E 5 j0	楕円形	32	20	77
10	E 5 j0	[楕円形]	22	(16)	37
11	E 5 j0	楕円形	34	30	68
12	E 5 j0	円形	28	27	59
13	F 5 a0	楕円形	26	16	27
14	F 5 a0	楕円形	19	14	59
15	F 5 a0	不整楕円形	32	19	40
16	F 5 a0	楕円形	31	25	45
17	F 5 a0	楕円形	18	16	36
18	F 5 a0	楕円形	21	19	72
19	F 5 a0	[楕円形]	42	(15)	37
20	F 5 a0	楕円形	37	26	58
21	F 5 a0	楕円形	17	11	22
22	F 5 a0	楕円形	46	31	43
23	F 5 a0	楕円形	26	23	42
24	F 5 a0	楕円形	51	35	84
25	F 5 a0	楕円形	20	13	22
26	F 5 a0	楕円形	25	19	57
27	F 5 a0	楕円形	26	21	70
28	F 5 a0	楕円形	53	43	46
29	E 5 j0	[楕円形]	(27)	25	42
30	E 6 j1	楕円形	21	15	23
31	E 5 j0	楕円形	27	21	55
32	E 5 j0	楕円形	20	16	33
33	E 5 j0	楕円形	25	17	45

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
34	E 5 j0	楕円形	34	22	69
35	E 5 j0	円形	17	16	21
36	E 5 j0	円形	25	23	50
37	E 5 j0	円形	22	21	59
38	E 5 j0	円形	20	20	68
39	E 5 j0	円形	23	21	52
40	E 5 j0	楕円形	21	17	39
41	F 6 a1	円形	26	26	23
42	F 6 a1	円形	24	23	28
43	F 6 a1	楕円形	54	43	55
44	F 6 a1	楕円形	59	45	48
45	F 6 a2	円形	34	32	65
46	F 6 a2	楕円形	44	39	17
47	F 6 a2	楕円形	31	28	25
48	F 6 a3	楕円形	52	46	51
49	F 6 a2	不整楕円形	55	28	35
50	F 6 a2	楕円形	23	18	24
51	F 6 a2	円形	19	19	42
52	F 6 a2	楕円形	34	28	36
53	F 6 a2	楕円形	27	21	25
54	F 6 a1	円形	39	38	43
55	E 6 j1	楕円形	29	24	31
56	E 6 j1	楕円形	33	29	28
57	E 6 j2	円形	24	23	37
58	E 6 j1	円形	23	21	31
59	E 6 j1	楕円形	22	18	49
60	E 6 i1	円形	23	23	10
61	E 6 i1	楕円形	21	19	17
62	E 6 i1	楕円形	25	20	33
63	E 6 i2	楕円形	35	29	28
64	E 6 h1	円形	24	24	25
65	E 6 h1	楕円形	38	33	35
66	E 6 i2	楕円形	18	16	22

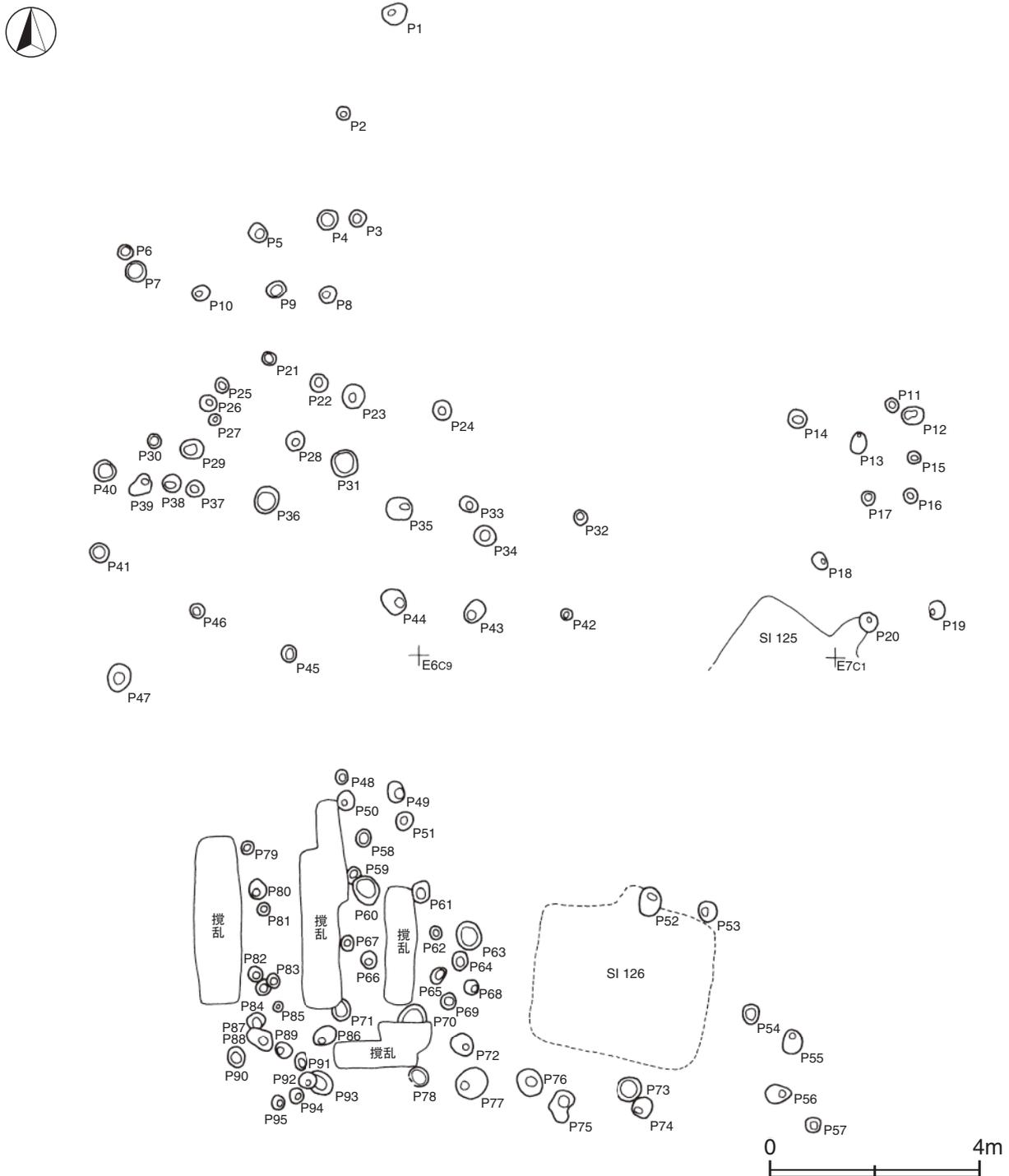
番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
67	E 6 h2	楕円形	21	18	36
68	E 6 h1	楕円形	15	11	44
69	E 6 h1	円形	27	25	20
70	E 6 i1	円形	26	25	15
71	F 6 a1	[円形・楕円形]	(39)	(22)	48
72	E 5 h0	楕円形	29	25	39
73	E 5 h0	[楕円形]	(32)	30	36
74	E 5 h0	楕円形	35	29	35
75	E 5 h0	[楕円形]	20	(13)	16
76	E 5 i0	楕円形	25	22	10
77	E 5 h0	楕円形	34	22	31
78	E 5 i0	楕円形	20	17	41
79	E 5 i0	楕円形	36	29	24
80	E 5 i0	楕円形	34	20	13
81	E 6 i1	楕円形	28	22	68
82	E 6 i1	楕円形	32	22	37
83	E 5 i0	[楕円形]	(30)	(19)	20
84	E 5 i0	楕円形	40	36	63
85	E 5 i0	楕円形	27	24	14
86	E 5 i0	楕円形	21	18	14
87	E 6 i1	楕円形	23	19	20
88	E 6 i1	楕円形	22	19	20
89	E 5 h0	円形	18	17	33
90	E 5 i0	楕円形	32	25	50
91	E 5 i0	楕円形	24	21	12
92	E 5 i0	円形	25	23	17
93	E 6 i1	楕円形	19	16	55
94	E 5 i0	[楕円形]	[25]	20	59
95	E 5 j0	楕円形	29	18	50
96	E 5 j0	[楕円形]	[36]	[27]	58
97	E 5 i0	楕円形	44	39	19

第 13 号ピット群 (第 216 図)

位置 調査区東部の標高 23 m, D 6 i7 ~ E 7 e1 区にかけての東西 17 m, 南北 21 m の範囲から, 柱穴状のピット 95 か所を確認した。

重複関係 第 125・126・166 号住居跡を掘り込み, 第 270 号土坑に掘り込まれている。第 47 号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径 21 ~ 65cm, 短径 16 ~ 58cm の円形または楕円形で, 深さが 8 ~ 139cm である。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。



第 216 図 第 13 号ピット群実測図

遺物出土状況 土師器片 30 点（甕類），須恵器片 7 点（坏 3・甕類 4）が P 12・P 35～P 37・P 44・P 51・P 66・P 67・P 69・P 72・P 75・P 77・P 78・P 80・P 84・P 86・P 88・P 91・P 92 から出土しているが、いずれも細片で図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。

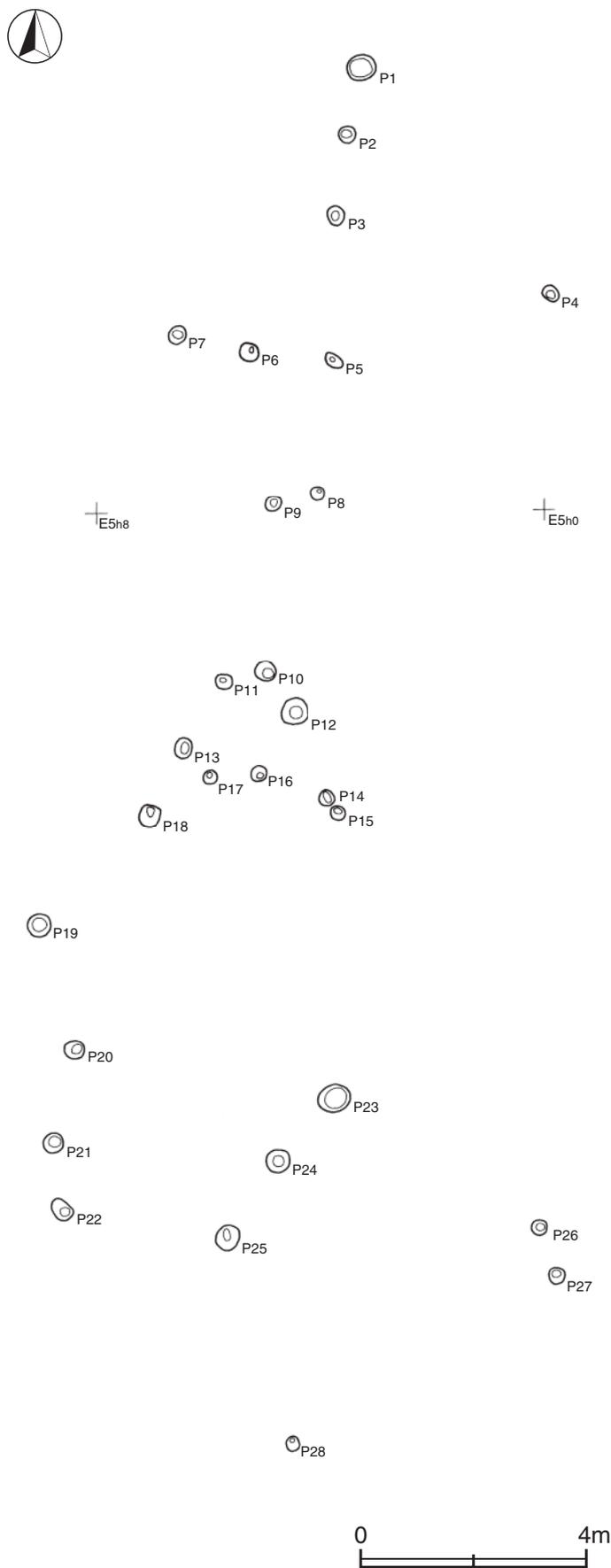
第 13 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	D 6 i8	不整円形	43	42	42	33	E 6 b9	楕円形	32	28	13	65	E 6 d9	楕円形	32	23	26
2	D 6 j8	円形	24	24	27	34	E 6 b9	円形	43	41	32	66	E 6 d8	円形	31	30	42
3	D 6 j8	円形	30	30	23	35	E 6 b8	円形	48	46	55	67	E 6 d8	円形	27	26	41
4	D 6 j8	円形	36	34	23	36	E 6 b8	円形	49	45	139	68	E 6 d9	円形	30	28	25
5	D 6 j8	円形	34	32	15	37	E 6 b7	円形	31	31	29	69	E 6 d9	円形	31	30	32
6	E 6 a7	円形	28	27	13	38	E 6 b7	円形	35	33	27	70	E 6 d9	[円形]	55	(35)	33
7	E 6 a7	円形	38	38	28	39	E 6 b7	不整楕円形	45	39	73	71	E 6 d8	楕円形	44	35	15
8	E 6 a8	円形	32	32	44	40	E 6 b7	円形	39	38	11	72	E 6 d9	円形	44	40	45
9	E 6 a8	円形	37	36	25	41	E 6 b7	円形	37	34	16	73	E 6 e0	円形	50	48	23
10	E 6 a7	円形	32	31	30	42	E 6 b9	楕円形	21	19	13	74	E 6 e0	円形	38	35	10
11	E 7 a1	円形	25	25	19	43	E 6 b9	楕円形	43	35	29	75	E 6 e9	不定形	62	50	34
12	E 7 a1	楕円形	40	32	35	44	E 6 b8	楕円形	56	47	79	76	E 6 e9	楕円形	55	48	29
13	E 7 a1	楕円形	39	30	37	45	E 6 b8	円形	30	29	80	77	E 6 e9	楕円形	65	58	52
14	E 6 a0	楕円形	37	33	18	46	E 6 b7	円形	30	28	24	78	E 6 e9	[楕円形]	40	[32]	42
15	E 7 b1	円形	25	24	12	47	E 6 c7	楕円形	56	48	25	79	E 6 c8	円形	25	25	25
16	E 7 b1	楕円形	28	24	22	48	E 6 c8	円形	27	26	20	80	E 6 d8	楕円形	36	31	46
17	E 7 b1	円形	26	26	16	49	E 6 c8	楕円形	39	30	31	81	E 6 d8	円形	23	21	31
18	E 6 b0	楕円形	34	25	27	50	E 6 c8	円形	37	35	28	82	E 6 d8	円形	29	27	27
19	E 7 b1	円形	35	33	65	51	E 6 c8	円形	35	33	34	83	E 6 d8	楕円形	27	24	22
20	E 7 b1	円形	37	35	33	52	E 6 d0	楕円形	53	42	59	84	E 6 d8	[円形]	28	(26)	23
21	E 6 a8	楕円形	28	25	13	53	E 6 d0	円形	38	36	15	85	E 6 d8	楕円形	19	16	8
22	E 6 a8	円形	35	32	33	54	E 6 d0	楕円形	37	33	19	86	E 6 d8	楕円形	45	39	39
23	E 6 a8	円形	45	45	72	55	E 6 d0	楕円形	47	39	30	87	E 6 d8	[円形]	34	(31)	39
24	E 6 a9	円形	36	34	14	56	E 6 e0	楕円形	50	38	33	88	E 6 d8	楕円形	49	38	85
25	E 6 a8	楕円形	29	25	18	57	E 6 e0	円形	30	29	45	89	E 6 d8	楕円形	32	26	33
26	E 6 a7	円形	34	31	20	58	E 6 c8	円形	35	32	13	90	E 6 d8	楕円形	36	31	21
27	E 6 a8	円形	23	23	22	59	E 6 c8	[円形]	35	(30)	22	91	E 6 d8	楕円形	35	28	22
28	E 6 a8	円形	37	35	31	60	E 6 d8	楕円形	56	46	21	92	E 6 e8	円形	34	33	29
29	E 6 b7	楕円形	42	38	24	61	E 6 d9	楕円形	39	33	37	93	E 6 e8	[楕円形]	(43)	35	36
30	E 6 a7	円形	26	26	12	62	E 6 d9	円形	25	24	18	94	E 6 e8	円形	29	28	29
31	E 6 b8	円形	52	49	26	63	E 6 d9	円形	53	50	14	95	E 6 e8	楕円形	27	24	17
32	E 6 b9	円形	24	22	17	64	E 6 d9	楕円形	35	30	18						

第 14 号ピット群 (第 217 図)

位置 調査区南部の標高 23 m, E 5 f7～F 5 b0 区にかけての東西 10 m, 南北 26 m の範囲から、柱穴状のピット 28 か所を確認した。

重複関係 第 168 号住居跡, 第 46・49 号掘立柱建物跡, 第 268 号土坑を掘り込んでいる。第 44 号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。



規模 平面形は長径 23～55cm, 短径 21～49cmの円形または楕円形で, 深さが 12～70cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

遺物出土状況 土師器片 9点 (坏 1・甕類 8), 須恵器片 4点 (甕類) が P 1・P 4・P 7・P 10・P 12・P 17・P 20・P 23 から出土しているが, いずれも細片で図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。

第 14 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	E 5 f9	円形	49	46	19
2	E 5 f9	円形	28	28	55
3	E 5 f9	円形	34	31	16
4	E 5 g0	楕円形	32	25	53
5	E 5 g9	不整楕円形	36	24	70
6	E 5 g8	楕円形	34	30	32
7	E 5 g8	楕円形	35	29	25
8	E 5 g8	円形	25	24	39
9	E 5 g8	円形	29	28	15
10	E 5 h8	楕円形	38	34	24
11	E 5 h8	楕円形	31	28	16
12	E 5 h8	円形	48	48	37
13	E 5 i8	楕円形	38	30	35
14	E 5 i9	円形	26	26	18
15	E 5 i9	楕円形	25	22	17
16	E 5 i8	楕円形	28	25	24
17	E 5 i8	円形	23	23	25
18	E 5 i8	円形	40	38	30
19	E 5 i8	円形	41	40	45
20	E 5 j7	楕円形	35	31	25
21	E 5 j7	円形	35	32	30
22	F 5 a7	楕円形	42	31	23
23	E 5 j9	楕円形	55	49	32
24	E 5 j8	円形	40	40	31
25	F 5 a8	円形	45	42	38
26	F 5 a9	円形	25	23	17
27	F 5 a0	円形	29	29	12
28	F 5 b8	楕円形	26	21	36

第 217 図 第 14 号ピット群実測図

第15号ピット群 (第218図)

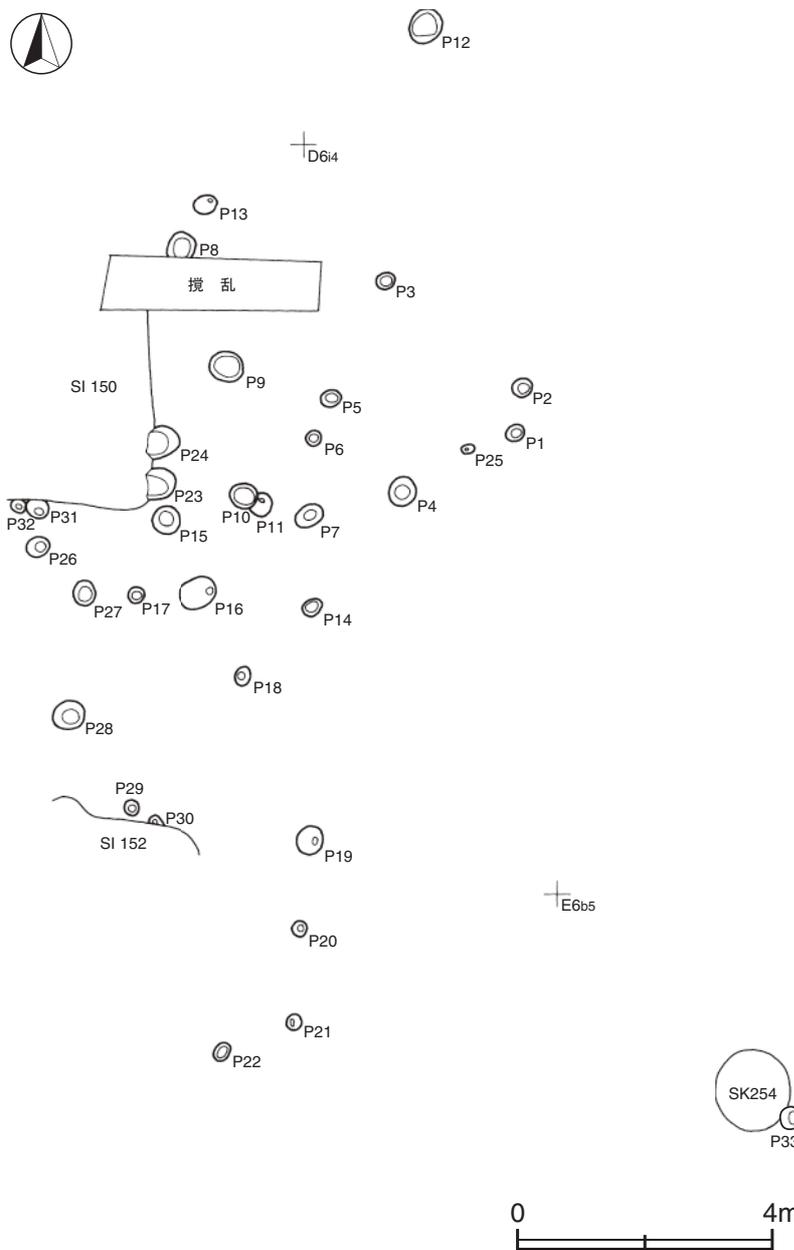
位置 調査区北部の標高23m, D6h2～E6b5区にかけての東西12m, 南北18mの範囲から, 柱穴状のピット33か所を確認した。

重複関係 第150号住居跡, 第254号土坑を掘り込み, 第152号住居に掘り込まれている。

規模 平面形は長径20～59cm, 短径15～49cmの円形または楕円形で, 深さが9～80cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

遺物出土状況 土師器片3点(甕類), 須恵器片5点(坏1, 蓋2, 高盤1, 壺類1)がP1・P19・P20・P26・P28・P30から出土しているが, いずれも細片のため図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。



第15号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	D 6j4	円形	27	27	33
2	D 6i4	円形	30	30	32
3	D 6i4	円形	29	27	14
4	D 6j4	楕円形	47	42	16
5	D 6j4	円形	28	27	17
6	D 6j4	円形	23	22	14
7	D 6j4	楕円形	42	37	17
8	D 6i3	[円形]	47	(37)	26
9	D 6i3	楕円形	53	48	20
10	D 6j3	楕円形	45	40	25
11	D 6j3	[円形]	35	(24)	32
12	D 6h4	楕円形	57	49	25
13	D 6i3	円形	37	35	28
14	D 6j4	円形	30	29	15
15	D 6j3	円形	44	43	34
16	D 6j3	楕円形	59	46	37
17	D 6j3	円形	25	25	39
18	E 6a3	楕円形	31	26	35
19	E 6a4	円形	43	41	26
20	E 6b4	円形	24	24	24
21	E 6b3	円形	27	26	14
22	E 6b3	楕円形	31	25	9
23	D 6j3	[楕円形]	(50)	40	35
24	D 6j3	[楕円形]	(47)	41	40
25	D 6j4	楕円形	20	15	13
26	D 6j2	楕円形	36	32	38
27	D 6j3	楕円形	40	33	13
28	E 6a3	円形	50	46	23
29	E 6a3	円形	24	22	16
30	E 6a3	[円形]	22	(13)	30
31	D 6j2	円形	34	33	27
32	D 6j2	円形	22	20	38
33	E 6b5	円形	33	32	80

第218図 第15号ピット群実測図

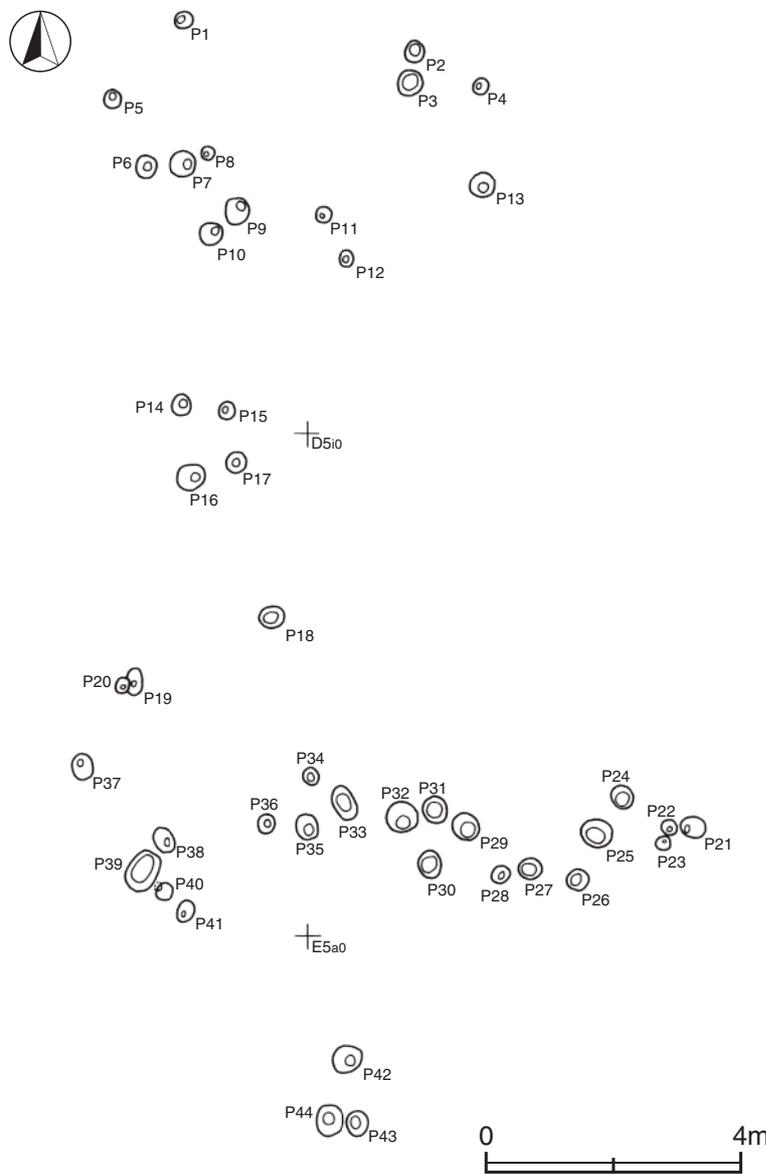
第 16 号ピット群 (第 219 図)

位置 調査区北部の標高 23 m, D 5 g9 ~ E 6 a1 区にかけての東西 10 m, 南北 18 m の範囲から, 柱穴状のピット 44 か所を確認した。

規模 平面形は長径 22 ~ 66 cm, 短径 16 ~ 47 cm の円形または楕円形で, 深さが 9 ~ 70 cm である。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

遺物出土状況 土師器片 43 点 (坏 3, 甕類 40), 須恵器片 11 点 (坏 3, 甕類 8) が P 10・P 14・P 19・P 27 ~ P 29・P 32・P 33・P 35・P 38 ~ P 44 から出土しているが, いずれも細片で図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。



第 219 図 第 16 号ピット群実測図

第 16 号ピット群計測表

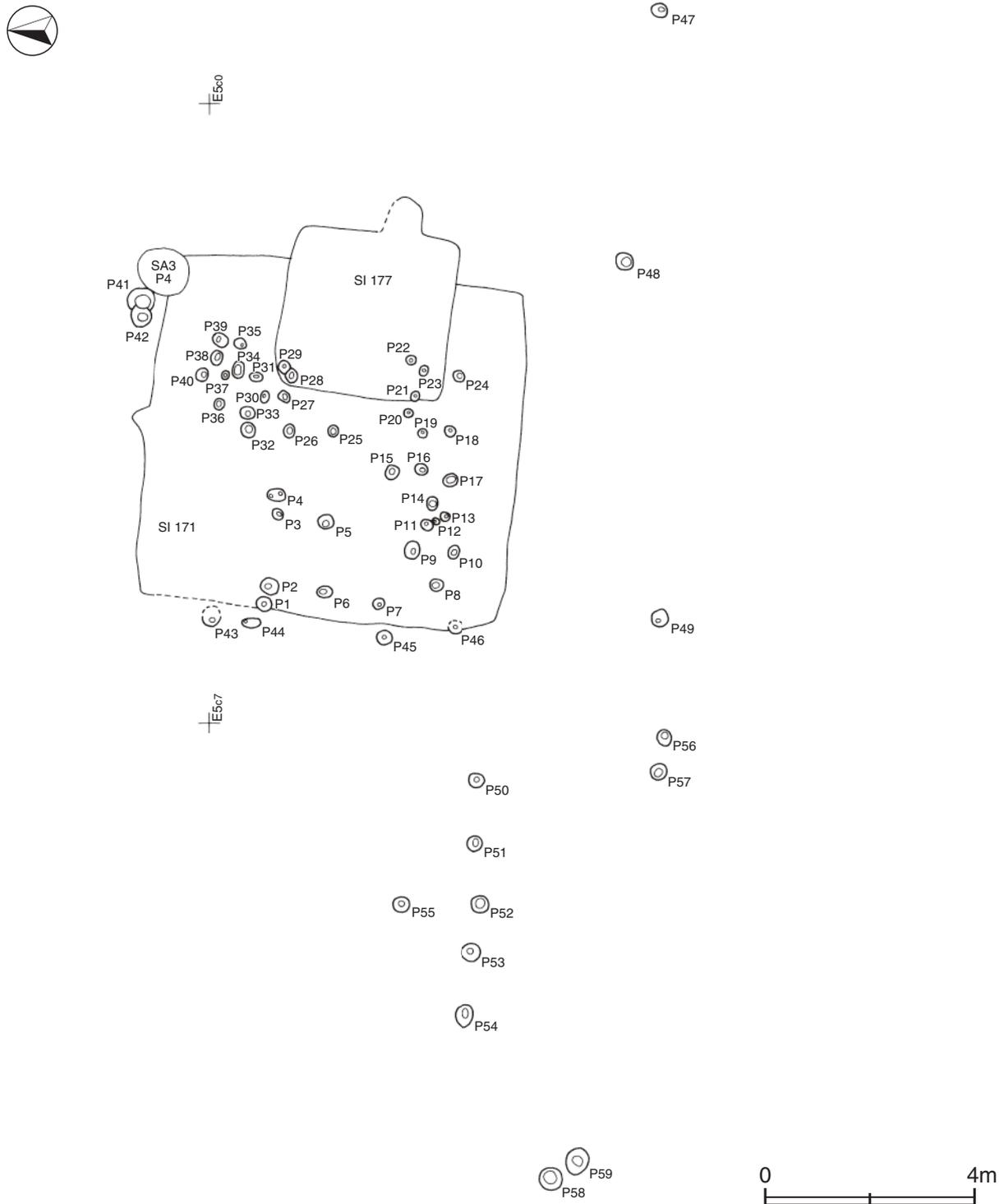
番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	D 5 g9	円形	31	29	22
2	D 5 g0	楕円形	32	27	9
3	D 5 g0	円形	39	37	9
4	D 5 g0	円形	26	25	17
5	D 5 g9	楕円形	29	24	50
6	D 5 g9	円形	33	31	33
7	D 5 g9	円形	43	40	47
8	D 5 g9	円形	22	21	22
9	D 5 h9	円形	40	39	49
10	D 5 h9	円形	35	34	54
11	D 5 h0	円形	25	24	30
12	D 5 h0	楕円形	27	22	49
13	D 5 h0	楕円形	41	37	30
14	D 5 h9	円形	30	29	33
15	D 5 h9	円形	26	25	28
16	D 5 i9	楕円形	45	40	30
17	D 5 i9	円形	32	31	29
18	D 5 i9	楕円形	39	34	35
19	D 5 i9	[楕円形]	41	(27)	30
20	D 5 i9	楕円形	22	16	28
21	D 6 j1	楕円形	39	35	34
22	D 6 j1	円形	25	25	28
23	D 6 j1	円形	24	23	26
24	D 6 j1	円形	37	35	20
25	D 6 j1	円形	45	44	21
26	D 6 j1	円形	33	31	24
27	D 5 j0	楕円形	36	31	22
28	D 5 j0	円形	27	26	27
29	D 5 j0	円形	44	43	41
30	D 5 j0	楕円形	42	37	36
31	D 5 j0	円形	41	39	29
32	D 5 j0	円形	51	47	55
33	D 5 j0	楕円形	52	33	25
34	D 5 j0	円形	26	25	19
35	D 5 j0	円形	41	38	60
36	D 5 j9	円形	27	27	28
37	D 5 j9	楕円形	38	32	36
38	D 5 j9	楕円形	43	30	42
39	D 5 j9	楕円形	66	45	41
40	D 5 j9	円形	29	27	38
41	D 5 j9	楕円形	36	28	36
42	E 5 a0	楕円形	50	42	64
43	E 5 a0	楕円形	38	34	39
44	E 5 a0	楕円形	48	42	70

第17号ピット群 (第220図)

位置 調査区中央部の標高23m, E 5 b4 ~ E 5 e0区にかけての東西23m, 南北10mの範囲から, 柱穴状のピット59か所を確認した。

重複関係 第171・177号住居跡を掘り込んでいる。第3号柱列跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径11~55cm, 短径11~44cmの円形または楕円形で, 深さが14~51cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。



第220図 第17号ピット群実測図

遺物出土状況 土師器片 103 点（坏 10，甕類 93），須恵器片 18 点（坏 10，高台付坏 1，蓋 1，甕類 6），陶器片 1 点（碗）が P 18・P 21・P 23・P 24・P 26～P 40・P 52～P 54・P 58 から出土しているが、いずれも細片で図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。

第 17 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	E 5 c7	円形	29	28	40	21	E 5 c8	楕円形	20	16	26	41	E 5 b9	[楕円形]	55	(40)	16
2	E 5 c7	円形	35	33	51	22	E 5 c8	円形	18	18	27	42	E 5 b8	円形	38	36	14
3	E 5 c7	楕円形	24	20	31	23	E 5 d8	円形	18	17	33	43	E 5 c7	[円形]	[40]	[37]	16
4	E 5 c7	楕円形	34	25	28	24	E 5 d8	楕円形	23	20	34	44	E 5 c7	楕円形	37	20	39
5	E 5 c7	円形	31	29	35	25	E 5 c8	円形	20	19	32	45	E 5 c7	円形	31	29	24
6	E 5 c7	楕円形	31	26	39	26	E 5 c8	楕円形	28	22	28	46	E 5 d7	[円形]	28	[26]	23
7	E 5 c7	楕円形	23	20	37	27	E 5 c8	方形	21	19	26	47	E 5 e0	円形	26	24	49
8	E 5 d7	円形	26	24	36	28	E 5 c8	円形	24	23	32	48	E 5 e9	楕円形	33	30	40
9	E 5 d7	楕円形	35	31	43	29	E 5 c8	円形	26	25	32	49	E 5 e7	円形	36	34	17
10	E 5 d7	楕円形	27	21	27	30	E 5 c8	楕円形	24	15	27	50	E 5 d6	楕円形	30	26	28
11	E 5 d7	円形	23	22	36	31	E 5 c8	楕円形	25	20	24	51	E 5 d6	円形	27	27	27
12	E 5 d7	円形	11	11	28	32	E 5 c8	楕円形	31	28	26	52	E 5 d6	円形	32	30	14
13	E 5 d8	楕円形	19	17	33	33	E 5 c8	楕円形	30	27	24	53	E 5 d5	円形	34	34	33
14	E 5 d8	楕円形	27	21	32	34	E 5 c8	楕円形	35	26	25	54	E 5 d5	楕円形	44	36	37
15	E 5 c7	楕円形	28	23	32	35	E 5 c8	円形	24	24	30	55	E 5 e5	楕円形	32	28	35
16	E 5 d8	円形	25	24	31	36	E 5 c8	円形	21	20	25	56	E 5 e6	楕円形	29	26	29
17	E 5 d8	円形	29	28	31	37	E 5 c8	楕円形	20	16	24	57	E 5 e6	円形	29	27	41
18	E 5 d8	楕円形	23	20	31	38	E 5 c8	楕円形	30	26	25	58	E 5 d4	円形	44	43	39
19	E 5 d8	円形	17	17	27	39	E 5 c8	楕円形	31	26	37	59	E 5 d4	楕円形	53	44	36
20	E 5 c8	楕円形	18	16	24	40	E 5 b8	円形	25	25	28						

第 18 号ピット群（第 221 図）

位置 調査区北西部の標高 23 m，D 4 g0～E 5 c8 区にかけての東西 31 m，南北 28 m の範囲から，柱穴状のピット 110 か所を確認した。

重複関係 第 52・55・56・58・59・61・62 号掘立柱建物跡，第 9 号井戸跡を掘り込んでいる。

規模 平面形は長径 18～58cm，短径 18～50cm の円形または楕円形で，深さが 9～76cm である。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

遺物出土状況 土師器片 55 点（坏 5，甕類 50），須恵器片 13 点（坏 11，甕類 2）が P 12・P 15・P 17・P 19・P 25・P 26・P 30・P 32・P 41・P 43・P 45・P 48～P 51・P 53・P 69・P 71・P 80・P 81・P 102・P 104・P 108～P 110 から出土しているが，いずれも細片で図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。



第 221 図 第 18 号ピット群実測図

第18号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	D 5 f4	円形	42	40	15
2	D 5 f4	円形	31	30	30
3	D 5 g4	円形	40	39	37
4	D 5 g4	楕円形	36	28	27
5	D 5 g5	楕円形	57	36	18
6	D 5 g5	円形	28	27	17
7	D 5 g4	楕円形	43	39	41
8	D 5 g4	円形	50	47	31
9	D 5 g4	円形	31	29	25
10	D 5 g5	円形	31	29	21
11	D 5 g4	楕円形	32	29	13
12	D 5 g5	円形	36	35	31
13	D 5 h5	円形	36	33	30
14	D 5 h5	楕円形	32	23	25
15	D 5 h5	楕円形	42	38	43
16	D 5 h4	円形	25	24	25
17	D 5 h4	円形	40	38	50
18	D 5 h4	円形	36	35	38
19	D 5 h4	楕円形	44	36	37
20	D 5 h4	円形	44	43	54
21	D 5 h3	楕円形	56	50	32
22	D 5 h3	円形	36	36	38
23	D 5 g2	楕円形	31	25	24
24	D 5 h2	円形	18	18	59
25	D 5 h1	楕円形	28	20	73
26	D 5 i6	円形	40	37	69
27	D 5 i4	楕円形	58	37	35
28	D 5 i4	楕円形	50	41	30
29	D 5 i4	楕円形	50	44	35
30	D 5 i3	楕円形	40	34	33
31	D 5 h2	楕円形	33	30	17
32	D 5 h2	円形	41	40	25
33	D 5 i2	楕円形	40	26	36
34	D 5 i2	楕円形	41	31	24
35	D 5 i1	円形	32	30	40
36	D 5 i1	円形	24	23	26
37	D 5 i1	円形	32	32	14

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
38	D 4 i0	円形	25	24	20
39	D 5 i1	円形	30	29	67
40	D 5 i1	円形	28	28	37
41	D 5 i1	円形	29	27	39
42	D 5 i1	円形	34	32	30
43	D 5 i1	円形	28	27	52
44	D 5 i1	円形	29	29	52
45	D 5 i2	楕円形	26	22	36
46	D 5 i2	円形	26	25	41
47	D 5 i2	円形	31	29	51
48	D 5 i2	円形	35	34	57
49	D 5 i2	楕円形	37	30	33
50	D 5 i2	楕円形	45	40	24
51	D 5 i2	楕円形	43	34	60
52	D 5 j2	楕円形	33	20	57
53	D 5 j2	楕円形	40	35	40
54	D 5 j1	円形	42	39	34
55	D 5 j1	円形	43	41	27
56	D 5 j1	楕円形	30	25	35
57	D 4 i0	円形	36	36	32
58	D 4 i0	円形	32	31	33
59	D 5 j3	楕円形	25	20	37
60	D 5 j3	円形	20	19	39
61	D 5 j3	楕円形	32	19	27
62	D 5 j3	楕円形	39	30	40
63	D 5 j4	楕円形	42	36	52
64	D 5 j5	円形	31	31	27
65	D 5 j5	楕円形	27	22	34
66	D 5 i5	楕円形	42	33	22
67	D 5 j5	円形	31	30	44
68	D 5 i6	楕円形	42	36	21
69	D 5 j6	円形	32	30	47
70	D 5 j5	円形	37	35	52
71	D 5 j6	円形	38	36	34
72	D 5 j6	楕円形	55	42	58
73	D 5 j6	楕円形	48	40	38
74	D 5 j6	円形	32	32	17

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
75	D 5 j7	楕円形	47	35	21
76	D 5 j7	楕円形	48	37	32
77	D 5 j7	楕円形	43	30	25
78	D 5 j7	円形	33	33	39
79	D 5 j8	円形	35	34	35
80	D 5 j8	楕円形	41	35	59
81	D 5 j8	楕円形	53	30	55
82	E 5 a7	楕円形	48	43	22
83	E 5 a5	楕円形	27	23	62
84	E 5 j5	楕円形	33	28	31
85	E 5 a5	円形	34	33	30
86	E 5 a5	楕円形	42	38	30
87	E 5 a4	円形	37	34	39
88	E 5 a3	円形	27	27	24
89	E 5 a3	円形	30	28	39
90	E 5 a3	楕円形	54	26	37
91	E 5 a1	楕円形	37	32	61
92	E 5 a3	楕円形	25	22	23
93	E 5 a3	楕円形	44	38	51
94	E 5 a3	楕円形	42	35	59
95	E 5 a3	楕円形	55	42	50
96	E 5 a3	楕円形	42	37	15
97	E 5 b3	楕円形	32	27	54
98	E 5 b3	円形	42	40	38
99	E 5 b3	円形	39	39	9
100	E 5 b5	円形	36	36	28
101	E 5 b5	円形	37	34	50
102	E 5 b5	円形	34	32	34
103	E 5 c6	円形	37	34	29
104	E 5 c5	円形	43	41	76
105	E 5 b4	楕円形	34	30	28
106	E 5 c3	円形	38	38	31
107	E 5 c3	楕円形	40	36	30
108	E 5 c4	楕円形	21	19	16
109	E 5 c5	円形	26	25	16
110	E 5 c5	円形	28	28	21

第19号ピット群 (第222図)

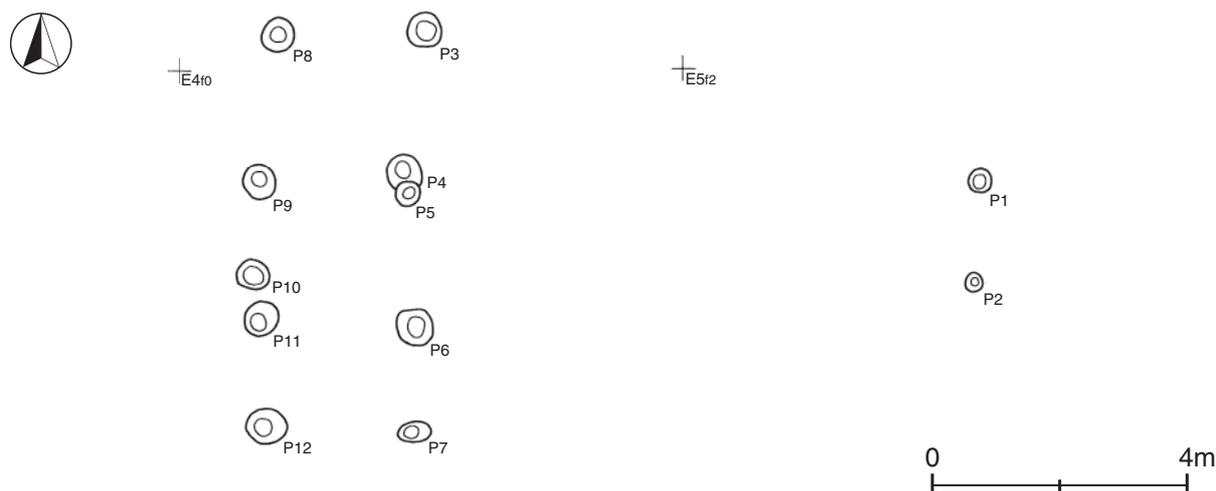
位置 調査区西部の標高 23 m, E 4 e0 ~ E 5 f3 区にかけての東西 12 m, 南北 9 m の範囲から, 柱穴状のピット 12 か所を確認した。

重複関係 第 60 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模 平面形は長径 29～63cm, 短径 27～57cmの円形または楕円形で, 深さが 22～100cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

遺物出土状況 土師器片 20 点 (坏 6, 甕類 14), 須恵器片 8 点 (坏 5, 甕類 3) が P 7・P 8・P 10・P 12 から出土しているが, いずれも細片で図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。



第 222 図 第 19 号ピット群実測図

第 19 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	E 5 f3	円形	37	35	51
2	E 5 f3	円形	29	27	22
3	E 4 e0	円形	57	57	50
4	E 4 f0	[円形]	[58]	57	47

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
5	E 4 f0	円形	40	37	56
6	E 4 g0	円形	58	56	58
7	E 4 g0	楕円形	52	34	37
8	E 4 e0	円形	54	53	58

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
9	E 4 f0	円形	55	52	45
10	E 4 f0	円形	51	47	28
11	E 4 f0	円形	56	52	55
12	E 4 g0	楕円形	63	56	100

第 20 号ピット群 (第 223 図)

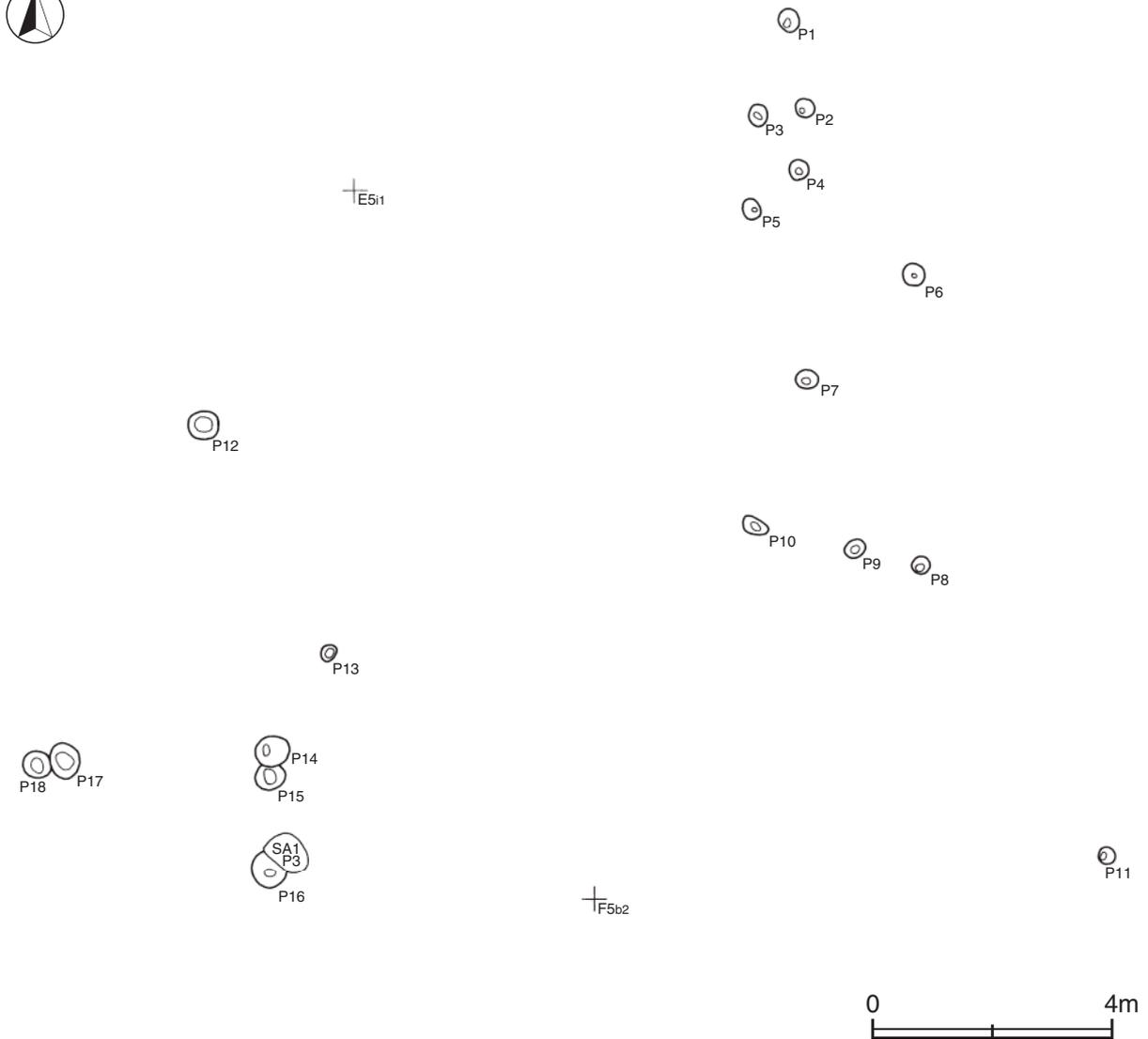
位置 調査区南西部の標高 23 m, E 4 h9～F 5 a4 区にかけての東西 18 m, 南北 19 mの範囲から, 柱穴状のピット 18 か所を確認した。

重複関係 第 1 号柱列に掘り込まれている。第 65 号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模 平面形は長径 30～63cm, 短径 27～61cmの円形または楕円形で, 深さが 18～66cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

遺物出土状況 土師器片 16 点 (甕類), 須恵器片 7 点 (坏 5, 甕類 2) が P 4・P 6・P 7・P 10～P 13・P 15・P 17 から出土しているが, いずれも細片で図示できない。

所見 時期・性格ともに不明である。



第 223 図 第 20 号ピット群実測図

第 20 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	E 5 h2	楕円形	40	33	27
2	E 5 h2	円形	33	31	25
3	E 5 h2	楕円形	37	32	43
4	E 5 h2	円形	33	31	31
5	E 5 i2	円形	34	31	35
6	E 5 i3	円形	36	35	54

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
7	E 5 i2	楕円形	38	33	28
8	E 5 j3	円形	30	28	18
9	E 5 j3	楕円形	35	31	24
10	E 5 j2	楕円形	45	27	23
11	F 5 a4	円形	30	29	43
12	E 4 j0	円形	51	50	55

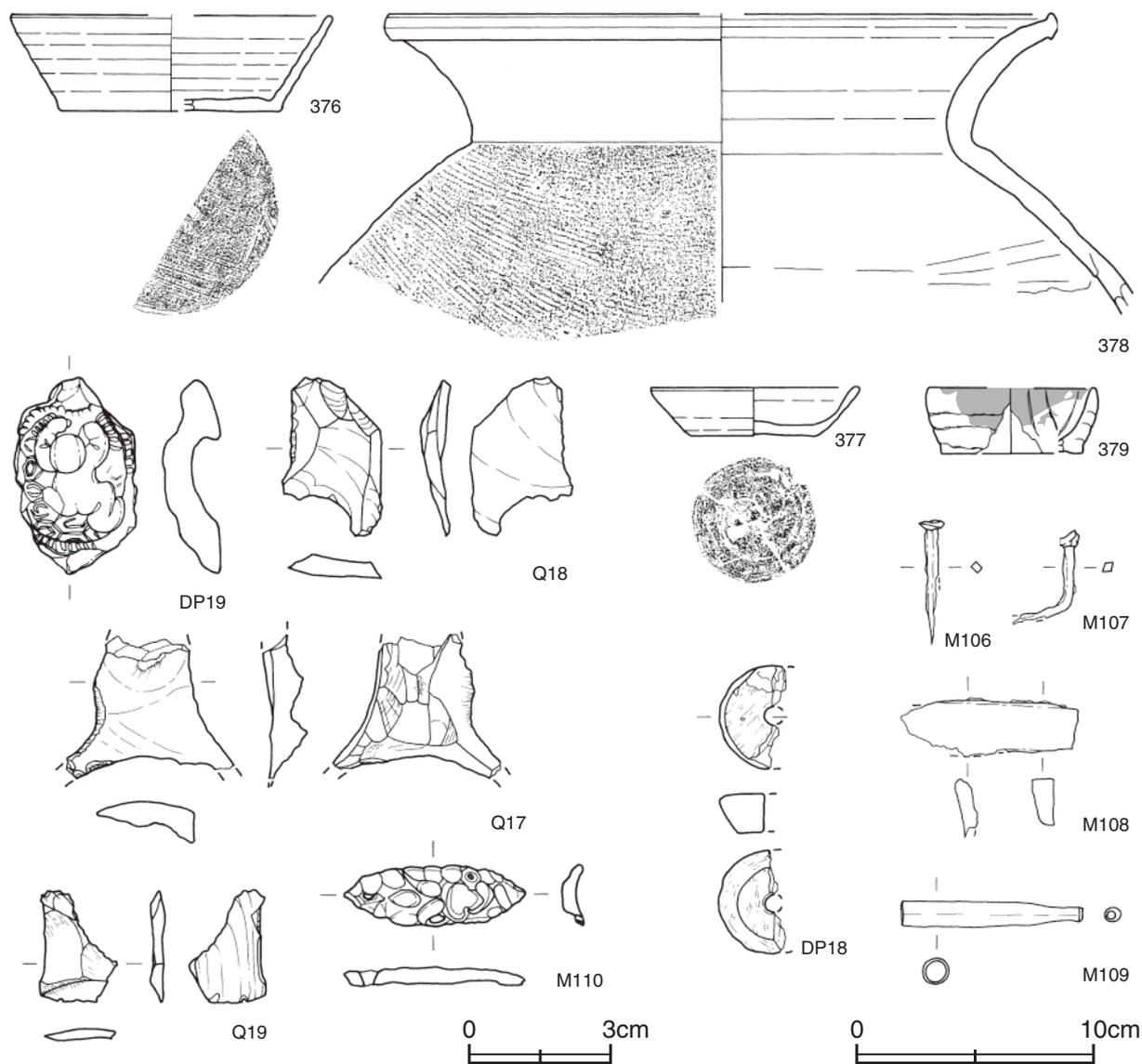
番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
13	E 4 j0	円形	30	28	37
14	F 4 a0	円形	55	54	66
15	F 4 a0	[円形]	(48)	48	50
16	F 4 a0	[円形]	(63)	61	49
17	F 4 a9	楕円形	60	50	33
18	F 4 a9	円形	46	44	44

表 13 その他のピット群一覧表

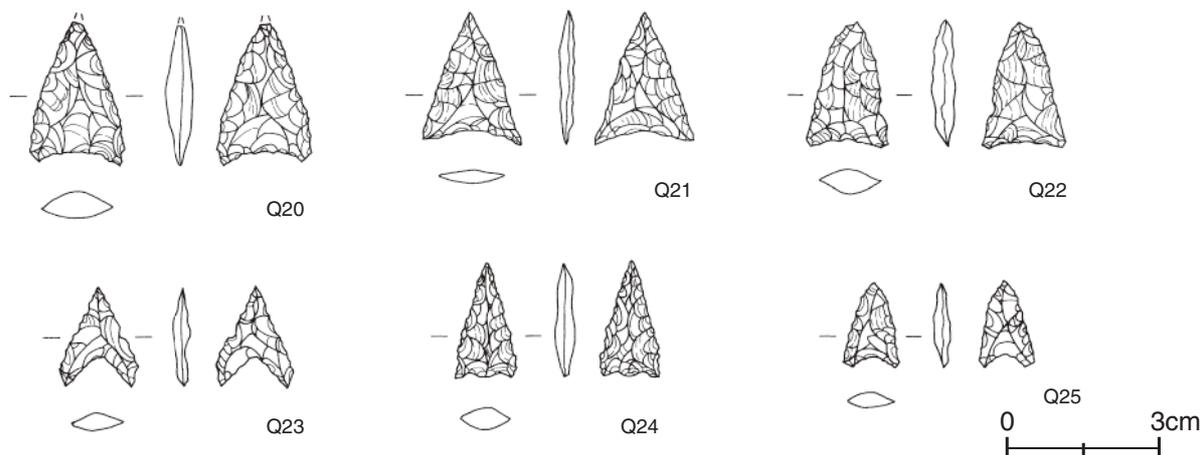
番号	位置	範囲	柱 穴				主な出土遺物	備 考	
			柱穴数	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)			深さ (cm)
12	E 5 h0 ~ F 6 a3	東西 12 m, 南北 14 m	97	円形・楕円形	15 ~ 59	11 ~ 46	10 ~ 84	土師器片, 須恵器片, 陶器片, 瓦片	
13	D 6 i7 ~ E 7 e1	東西 17 m, 南北 21 m	95	円形・楕円形	21 ~ 65	16 ~ 58	8 ~ 139	土師器片, 須恵器片	
14	E 5 f7 ~ F 5 b0	東西 10 m, 南北 26 m	28	円形・楕円形	23 ~ 55	21 ~ 49	12 ~ 70	土師器片, 須恵器片	
15	D 6 h2 ~ E 6 b5	東西 12 m, 南北 18 m	33	円形・楕円形	20 ~ 59	15 ~ 49	9 ~ 80	土師器片, 須恵器片	
16	D 5 g9 ~ E 6 a1	東西 10 m, 南北 18 m	44	円形・楕円形	22 ~ 66	21 ~ 47	9 ~ 70	土師器片, 須恵器片	
17	E 5 b4 ~ E 5 e0	東西 23 m, 南北 10 m	59	円形・楕円形	11 ~ 55	11 ~ 44	14 ~ 51	土師器片, 須恵器片, 陶器片	
18	D 4 g0 ~ E 5 c8	東西 31 m, 南北 28 m	110	円形・楕円形	18 ~ 58	18 ~ 50	9 ~ 76	土師器片, 須恵器片	
19	E 4 e0 ~ E 5 f3	東西 12 m, 南北 9 m	12	円形・楕円形	29 ~ 63	27 ~ 57	22 ~ 100	土師器片, 須恵器片	
20	E 4 h9 ~ F 5 a4	東西 18 m, 南北 19 m	18	円形・楕円形	30 ~ 63	27 ~ 61	18 ~ 66	土師器片, 須恵器片	

(6) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第 224 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第 225 図 遺構外出土遺物実測図 (2)

遺構外出土遺物観察表 (第 224・225 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
376	須恵器	坏	[13.4]	4.1	[9.2]	長石・雲母	にぶい黄	普通	底部一方向のヘラ削り	E 5 a6	40%
377	土師質土器	小皿	8.8	2.1	5.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り痕を残すナデ	SI153	70% PL47
378	須恵器	甕	[28.4]	(12.9)	-	長石・石英・黒色粒子	褐灰	普通	体部横位の平行叩き 内面輪積痕を残すナデ	第2号鍛冶工房跡	10%
379	土師器	手捏土器	[7.0]	2.8	[6.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面輪積痕を残すナデ 内面ヘラナデ 油煙付着	E 5 c3	40%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP18	紡錘車	(4.0)	(2.8)	0.75	(18.9)	長石・石英・細礫	ナデ	SD26	PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP19	泥面子	4.2	2.6	1.3	7.3	長石・石英	亀形 裏面ナデ	SI143	PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 17	搔器	(3.1)	(3.6)	1.0	(4.58)	瑪瑙	端部に急角度の調整で刃部をつくる	SI184	PL49
Q 18	剥片	3.4	2.2	0.65	3.32	チャート	片面に押圧剥離痕	SI159	PL49
Q 19	剥片	2.4	1.6	0.3	1.10	チャート	端部に押圧剥離痕	SI125	PL49
Q 20	石鏃	(2.8)	1.9	0.5	(2.54)	頁岩	両面押圧剥離 凹基無茎鏃	SI140	PL50
Q 21	石鏃	2.7	1.9	0.3	1.22	チャート	両面押圧剥離 凹基無茎鏃	PG18P32	PL50
Q 22	石鏃	1.7	2.5	0.5	1.72	チャート	両面押圧剥離 凹基無茎鏃	SI142	PL50
Q 23	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.69	頁岩	両面押圧剥離 凹基無茎鏃	SI186	PL50
Q 24	石鏃	2.3	1.2	0.4	0.80	チャート	両面押圧剥離 凹基有茎鏃	SI171	PL50
Q 25	石鏃	1.7	1.1	0.4	0.54	蛇紋岩	両面押圧剥離 凹基無茎鏃	SK251	PL50

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 106	釘	(5.2)	1.1	0.3	(2.9)	鉄	先端部欠損 断面方形	E 5 i1	
M 107	釘	(4.0)	0.9	0.4	(4.1)	鉄	先端部欠損 断面方形 中央部でL字状に屈曲	F 4 a0	
M 108	刀カ	(7.6)	(2.5)	0.95	(27.7)	鉄	刃部一部遺存 断面三角形 基部断面長方形	E 6 d8	
M109	煙管	7.6	1.1	0.4~0.9	13.1	銅	吸口部のみ	F 5 c5	PL51
M 110	目貫	3.85	1.3	0.45	4.9	銅	草花文カ 鍍金	E 4 j0	PL51

第4節 ま と め

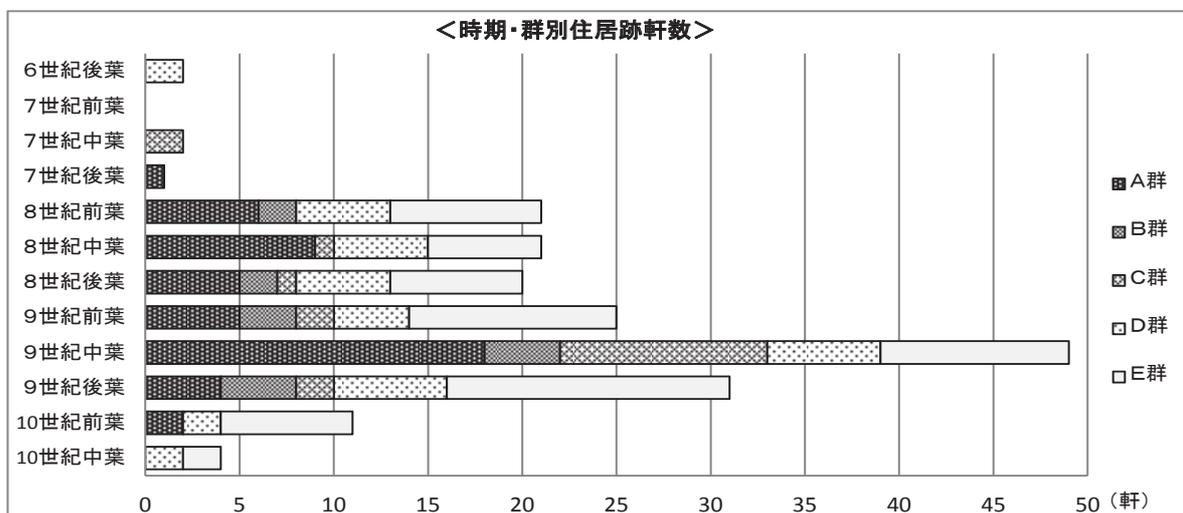
1 はじめに

今回調査した下平塚蕪木台遺跡の調査区は、遺跡の東部にあたり、蓮沼川右岸の標高 24 m の舌状台地上に立地している。今回の調査区の北側から西側にかけては、平成 18・19 年度に調査が行われ、その結果は『茨城県教育財団文化財調査報告』第 326 集（以下『第 326 集』）¹⁾として刊行されている。また、当調査区の東側は、蓮沼川が南流する低位面が広がっており、台地との比高は約 6 m である。南側は、蓮沼川に沿った台地上に当遺跡未調査部が広がっている。

今回の調査は、平成 21 年 11 月から平成 22 年 3 月、同年 4 月から 6 月にかけて実施し、竪穴住居跡 68 軒、掘立柱建物跡 22 棟、柱列跡 3 列、鍛冶工房跡 1 基、溝跡 5 条、井戸跡 1 基、陥し穴 1 基、大形円形土坑 1 基、土坑 135 基などを確認した。今回の調査で、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物を確認し、断続的ではあるが長期間にわたる土地利用の状況が明らかになった。特に『第 326 集』で報告されているものと同時期の、奈良・平安時代の竪穴住居跡 67 軒、掘立柱建物跡 14 棟、鍛冶工房跡 1 基などが確認でき、奈良時代から本格的に集落が営まれるようになったことが改めて明らかになった。ここでは、遺跡の中心となる古墳時代から奈良・平安時代までの集落の変遷を『第 326 集』の報告も踏まえながら概観するとともに、鍛冶関連遺物が多量に出土している鍛冶工房跡や大形円形土坑などと集落の関係について若干の考察を加え、まとめとしたい。

2 集落の様相

当遺跡で確認された遺構は、前回の調査区も含めて住居跡 190 軒（縄文時代 1 軒、古墳時代 5 軒、奈良時代 62 軒、平安時代 122 軒）、掘立柱建物跡 45 棟（奈良時代 16 棟、平安時代 29 棟）である。ここでは、当遺跡の中心となる古墳時代から平安時代の、住居跡とそれに伴う掘立柱建物跡で構成された小集団の推移についてグループ別に述べ、当遺跡の集落の様相について概観してみたい。なお、『第 326 集』では集落を 4 グループに分けて報告している。ここでは今回の調査区である東部集団を加えた 5 グループ（北部・北東部集団を A 群、中央部集団を B 群、西部集団を C 群、南部集団を D 群、東部集団を E 群）に分けて述べることにする。



(1) 古墳時代 (第 226 図)

当時代は、竪穴住居跡 5 軒を数え、6 世紀後葉に D 群で 2 軒、7 世紀中葉に C 群と D 群で各 1 軒、7 世紀後葉に A 群で 1 軒で、縄文時代早期以来の集落が確認でき、住居跡 1 軒ないし 2 軒の小規模な集団が台地上を点々と移動している様相が見られる。

(2) 奈良時代

当時代は、竪穴住居跡 62 軒、掘立柱建物跡 16 棟で、当地域にも前時代よりさらに人々に移り住み、本格的に集落が営まれる時期となる。出土遺物から 8 世紀前葉、中葉、後葉の 3 時期に区分して集落の様相を述べる。

第 I 期 (第 227 図)

当期は四つの単位集団で、A 群で住居跡 6 軒、B 群で住居跡 2 軒、D 群で住居跡 5 軒、E 群で住居跡 8 軒と掘立柱建物跡 6 棟で構成されている。

A 群では、一辺 5.5 m の中形住居跡を中心に、その東側に 1 軒と南側に 4 軒の小形住居跡が位置し、いずれも主軸は概ね北方向で統一されている。主な出土遺物は第 69・76 号住居跡から砥石・不明鉄製品各 1 点で、鉄器等 (砥石も含む。以下同じ) の保有率は 1 軒から 1 点で 16.7% である。

B 群では、一辺 5.7 m と 4.5 m の中形住居跡 2 軒が距離を置いて南北に点在している。いずれも主軸は北西方向で統一されている。主な出土遺物は第 25 号住居跡から銅製耳管 1 点、第 53 号住居跡から刻書土器「×」1 点である。

D 群では、一辺 3.3 m の小形住居跡を中心に、その周りを中形住居跡 3 軒、小形住居跡 1 軒が囲むように位置し、概ね北西方向を主軸としている。主な出土遺物は第 36 号住居跡から銅製飾り金具・砥石各 1 点で、鉄器等の保有率は 1 軒から 1 点で 20.0% である。

E 群では、一辺約 6 m の第 153・187 号住居跡を中心に、その北東から南側に中形住居跡 6 軒が位置し、主軸は北方向で統一されている。第 153 号住居跡は西側へ拡張されており、規模から有力者の居宅と考えられる。また、北から西・南側には掘立柱建物跡 6 棟が大形住居跡と主軸を平行または直交して配置されている。これらの建物跡は、穀物などを収めた倉庫としての機能が想定される。西側に庇が付設された第 54 号掘立柱建物跡や第 50 号掘立柱建物跡は、いずれも 4 間×3 間の側柱建物で床面積が 40m²ほどの大形であることから居宅としての機能も考えられる。主な出土遺物は第 145 号住居跡から鎌 1 点、釘 2 点、第 152 号住居跡から砥石 2 点、釘 1 点、第 153 号住居跡から鑿 1 点、第 170 号住居跡から砥石 1 点、第 52・58 号掘立柱建物跡から石製紡錘車・砥石・刀子・釘各 1 点である。鉄器等の保有率は 4 軒と 2 棟から 11 点で 60.0% と、他群に比べかなり高い。

当期の中でも古い傾向の土器様相を示す D 群や中央部に位置する B 群は、建物の主軸が北西方向と統一されており、前時代を踏襲した集団であったものと考えられる。一方、A 群・E 群の建物の主軸はいずれも概ね北方向で統一されている。特に E 群では、一辺 6.4 m の大形住居とともに整然と立ち並ぶ掘立柱建物群から構成されていることや鉄器等の保有率が他群より 3 倍以上高いことから、A 群も含めて蓮沼川流域の開発にあたるため計画的に作られた集落の中心地であったものと考えられる。

第 II 期 (第 228 図)

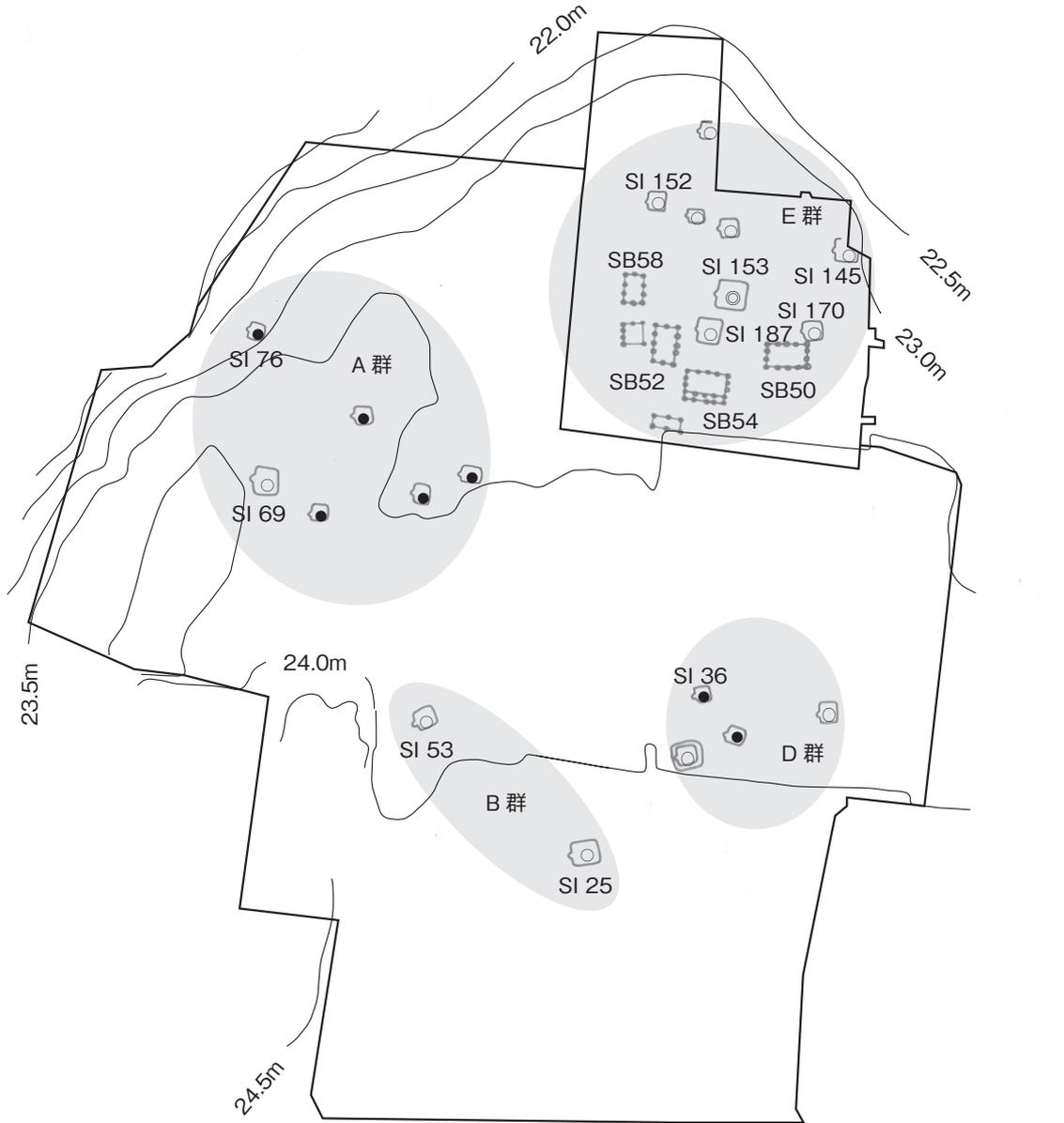
当期は五つの単位集団で、A 群で住居跡 9 軒と掘立柱建物跡 2 棟、B 群で土坑 2 基、C 群で住居跡 1 軒、A 群と D 群の中間地点に掘立柱建物跡 1 棟と井戸跡 1 基、D 群で住居跡 5 軒、E 群で住居跡 6 軒と掘立柱



- | | | | |
|---|-------|---|------|
|  | 6C 後葉 |  | 大形住居 |
|  | 7C 中葉 |  | 中形住居 |
|  | 7C 後葉 | | |



第 226 図 下平塚蕪木台遺跡遺構配置図 (1)

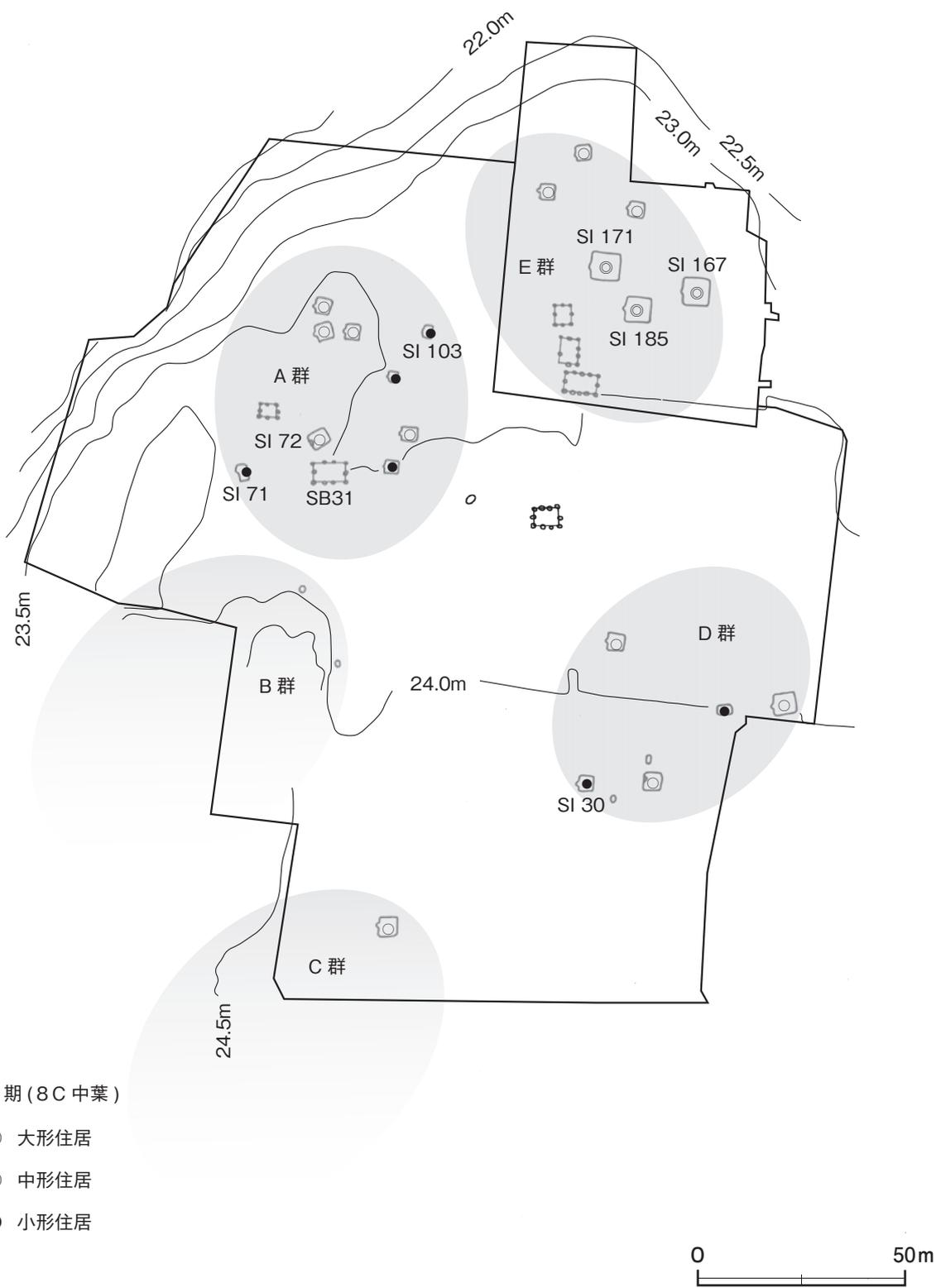


第 I 期 (8C 前葉)

- ◎ 大形住居
- 中形住居
- 小形住居



第 227 図 下平塚燕木台遺跡遺構配置図 (2)



第 228 図 下平塚燕木台遺跡遺構配置図 (3)

建物跡3棟で構成されており、住居跡数は前期と同じである。

A群では、一辺4.8mの中形住居跡と床面積38㎡の大形掘立柱建物跡を中心に、北から東・南側へと囲むように中形住居跡4軒、小形住居跡4軒、小形掘立柱建物跡1棟が位置している。これらの主軸は中心に位置する第72号住居跡を除き、概ね北方向である。大形掘立柱建物跡から北へ15mに位置する第71号住居跡は、長軸が短軸の1.5倍という横長の長方形である。覆土中層から石製紡錘車1点が出土していることから、繊維生産に関わる工房跡の可能性も考えられる。また、当群の南東端に位置する第103号住居跡からも「大・大・大・・・・」と刻書された石製紡錘車1点が出土している。その他の主な出土遺物は刻書土器やヘラ書き土器5点である。また、鉄器等では砥石・鎌・刀子各1点、鍬2点が出土しており、保有率は4軒から7点で44.4%と、前期の2倍以上になる。

B群では、2基の土坑以外は確認できない。また、C群では、中形住居跡1軒が確認されるだけであり、主軸は北方向である。いずれも集団の中心は調査区域外である北西側や西側に展開していたものと考えられる。

D群では、中形住居跡3軒、小形住居跡2軒が互いに距離を置いて点在しており、前期に比べると集団が西側に移動していく様相が見られる。主軸は概ね北方向で統一されている。北西端に位置する第30号住居跡から墨書土器「定万」が出土しており、当遺跡で初出となる。鉄器等では砥石・鎌・刀子・鍬・釘各1点、3軒から出土しており、保有率は60.0%と、前期の3倍になる。

E群では、一辺6mを超える3軒の大形住居跡を中心に北西側には掘立柱建物跡3棟が、主軸を大形住居跡と平行または直交するように位置している。第171・185号住居跡は前期の第153・187号住居跡、第167号住居跡は前期の第50号掘立柱建物跡を踏襲した集団であると考えられる。また、北東側には中形住居跡3軒が一定の距離を置いて弧状に点在している。主軸は概ね北方向で統一されている。第171号住居跡から須恵器のコップ形土器・ヘラ書き土器「↑」各1点、土玉2点、鋤先・鎌各1点、刀子7点、鍬2点、釘12点、第185号住居跡から土玉・砥石各1点、鎌・釘各2点、刀子3点が出土しており、2軒とも有力者の居宅と考えられる。コップ形土器は計量器としての用途とみられるもの²⁾で第121号住居跡(8世紀後葉)からも出土している。鉄器等では砥石・鋤先各1点、鎌3点、刀子11点、鍬2点、釘16点が出土しており、保有率は3軒から34点で50.0%と、前期より低くなるが点数は4倍以上となる。

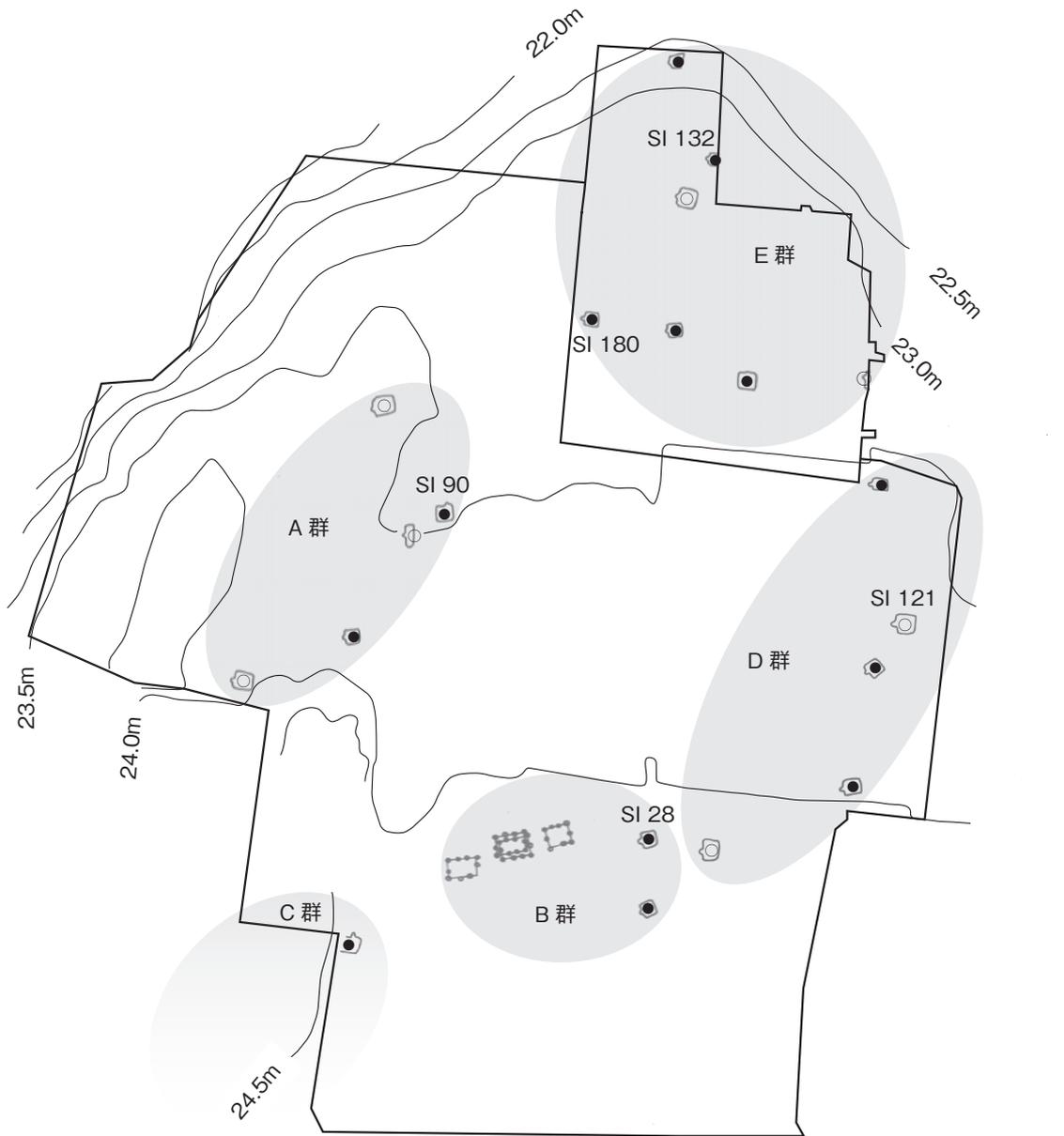
各群の建物の主軸が概ね北方向を向き、集落全体に規格性が見られるようになる。また、A群やA群とD群の間にも掘立柱建物跡が確認されるようになる。古墳時代から踏襲したD群にも鎌や刀子などの農具を保有するようになることから、開発に伴う集団に取り込まれ、律令制による統制が集落全体に図られていったことを物語る。鋤先や鎌などの農具が多く出土するようになることから、E群が集落の中で優位に立った集団であったものと考えられる。

第Ⅲ期(第229図)

当期は前期同様五つの単位集団で、A群で住居跡5軒、B群で住居跡2軒と掘立柱建物跡4棟、C群で住居跡1軒、D群で住居跡5軒、E群で住居跡7軒で構成されており、住居跡数は前期とほぼ同じである。

A群では、中形住居跡3軒と小形住居跡2軒が10～15mの間隔で点在している。主軸は南端に位置する第90号住居跡が東方向であるのに対し、他は概ね北西方向である。主な出土遺物は石製紡錘車1点、砥石2点である。鉄器等の保有率は2軒から2点で40.0%と、前期とほぼ同じである。

B群では、小形住居跡2軒が距離を置いて位置しており、その北側に掘立柱建物跡4棟がまとまっている。主軸は概ね北西方向で統一され、規格性が見られるようになる。南東端に位置する第28号住居跡か



第Ⅲ期(8C 後葉)

○ 中形住居

● 小形住居



第 229 図 下平塚燕木台遺跡遺構配置図 (4)

ら支脚に転用された羽口が出土している。

C群では、調査区域際に東竈の小形住居跡1軒が確認されるだけである。前期に引き続き、北西側に広がっている集団の一部であるものと考えられる。

D群では、中形住居跡2軒と小形住居跡3軒が10～15mの間隔で東西に点在している。間隔は空いているものの中形住居跡と小形住居跡のまとまりが見られ、主軸は北西方向と北方向を向くものが確認できる。主な出土遺物は刀子3点、鎌1点で、鉄器等の保有率は2軒から4点で40.0%と、前期に比べ減少する。

E群では、前期まで確認できた掘立柱建物跡や大形住居跡が見られなくなり、中形住居跡も減少し小形化する傾向にある。住居跡は一定の距離を置いた配置となり、「中形住居+小形住居」で構成された小集団が点在するようになる。主軸も北東方向と北方向を向くものが確認でき、統一性が見られなくなる。第180号住居跡から墨書土器「十」が出土しており、当群でも墨書土器が確認されるようになる。また、第132号住居跡からは支脚に転用された羽口が出土している。鉄器等では砥石2点、鎌1点、刀子・釘各3点、鉄製紡錘車1点が出土しており、保有率は5軒から10点で71.4%と、点数は減るものの保有率は大幅に増える。

前期までA群・E群で確認できた掘立柱建物跡はB群だけとなり、主軸方向に規格性が見られるようになる。これらの建物は集落全体の倉庫や開発に関連する建物としての機能が想定され、B群は収蔵域へと変わっていったものと考えられる。B群の影響を受けたかのようにA群やD群でも北西方向を主軸とする建物跡が主体となる。集落の中心であったE群の様相も大きく変化し、大形住居跡や掘立柱建物跡が確認されなくなる。建物の主軸にも規格性が見られなくなったことから、集落の中心は東部から中央部へ移っていったものと考えられる。また、A群・B群・D群・E群で囲まれた空白地は、蓮沼川流域の水田開発に加え、台地部での畑作を連想させる。遺物では、A群やE群の住居跡から支脚に転用された羽口が出土している。この時期の鍛冶工房跡は確認されていないが、当集落で鍛冶関連の作業が行われていたことがわける資料となる。

(3) 平安時代

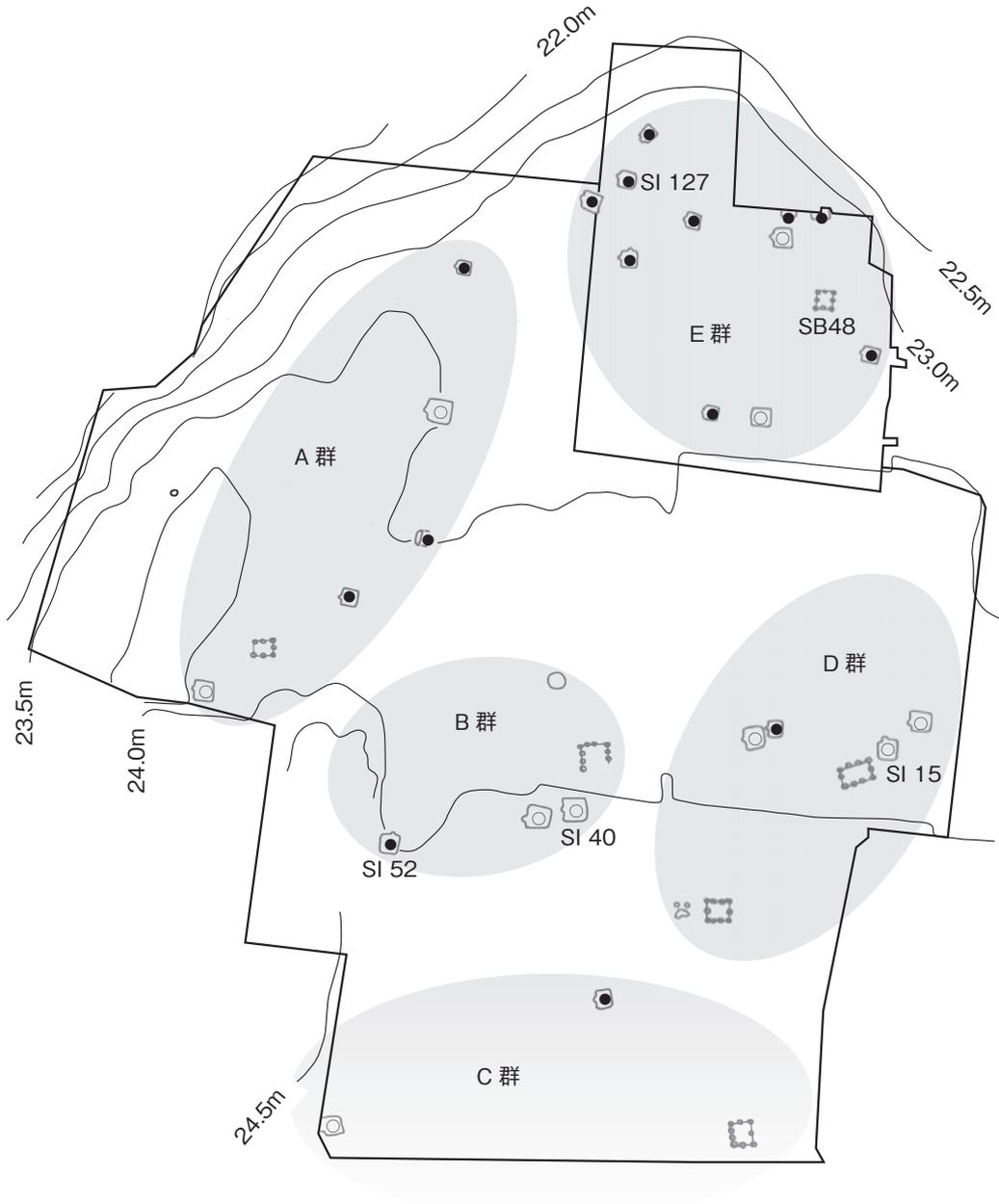
当時代は、住居跡122軒、掘立柱建物跡29棟で、住居跡等の建物が急増し、集落が拡大していく時期となる。しかし10世紀に入ると住居跡15軒、掘立柱建物跡1棟と激減する。出土遺物から9世紀前葉、中葉、後葉、10世紀前葉、中葉の5時期に区分して集落の様相を述べる。なお、期名は奈良時代から継続して第Ⅳ期からとする。

第Ⅳ期（第230図）

当期は、A群で住居跡5軒と掘立柱建物跡1棟、B群で住居跡3軒と掘立柱建物跡1棟、C群で住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟、D群で住居跡4軒と掘立柱建物跡2棟、E群で住居跡11軒と掘立柱建物跡1棟で構成され、各群に掘立柱建物跡が見られるようになる。

A群では、中形住居跡2軒と小形住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟が5～10mの間隔で東西に点在している。主軸は概ね北方向で統一されている。互いに距離を置いているが「中形住居+小形住居+掘立柱建物」と「中形住居+小形住居」で構成された二つの小集団が確認できる。主な出土遺物は墨書土器「家積・判読不明」・鎌・鉄斧各1点、砥石2点で、鉄器等の保有率は2軒から4点で40.0%と、前期と同じである。

B群では、中形住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟が主軸を概ね北西方向にしてまとまっている。第40号住居跡から墨書土器（「万益」1点・「判読不明」2点）、灰釉陶器（長頸瓶）・羽口各1点が出土しており、



第Ⅳ期(9C前葉)

○ 中形住居

● 小形住居



第 230 図 下平塚燕木台遺跡遺構配置図 (5)

集団の中で力を付けてきた人物の居宅と考えられる。その北側には東竈の第52号住居跡が距離を置いて位置しており、灰釉陶器（長頸瓶）1点が出土している。

C群では、中形住居跡、小形住居跡各1軒と掘立柱建物跡1棟が20～30mとかなりの距離を置いて点在し、主軸はいずれも北西方向で統一されている。主な出土遺物は灰釉陶器片（長頸瓶）・土製紡錘車・砥石・釘各1点で、鉄器等の保有率は2軒から2点で100%である。

D群では、中形住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟がまとまっており、その北側には中形住居跡・小形住居跡各1軒が隣接している。また、その北西側に掘立柱建物跡1棟が単独で位置している。主軸は第15号住居跡を除いて概ね北西方向を向き、再び規格性が見られるようになる。主な出土遺物は鎌・刀子各1点で、鉄器等の保有率は2軒から2点で50.0%と、前期よりやや高くなる。

E群では、第127号住居跡を中心とする北東部の集団と第48号掘立柱建物跡を中心とする西部から南東部にかけての集団の二つの小集団で構成されており、前者の主軸が北東方向、後者が北方向と2分される。各集団とも「中形住居1軒+小形住居数軒」のまとまりが見られ、南部に位置する掘立柱建物跡を囲むように住居跡が配置され、住居の規模が前期と比べ小形化している。主な出土遺物はヘラ書き土器「☒」1点、灰釉陶器片（長頸瓶・椀）2点、鎌・鑿・鎌各1点、刀子4点、釘6点である。小破片であるが当群でも灰釉陶器が確認されるようになる。鉄器等の保有率は6軒から13点で60.0%と、前期に続き高い保有率である。

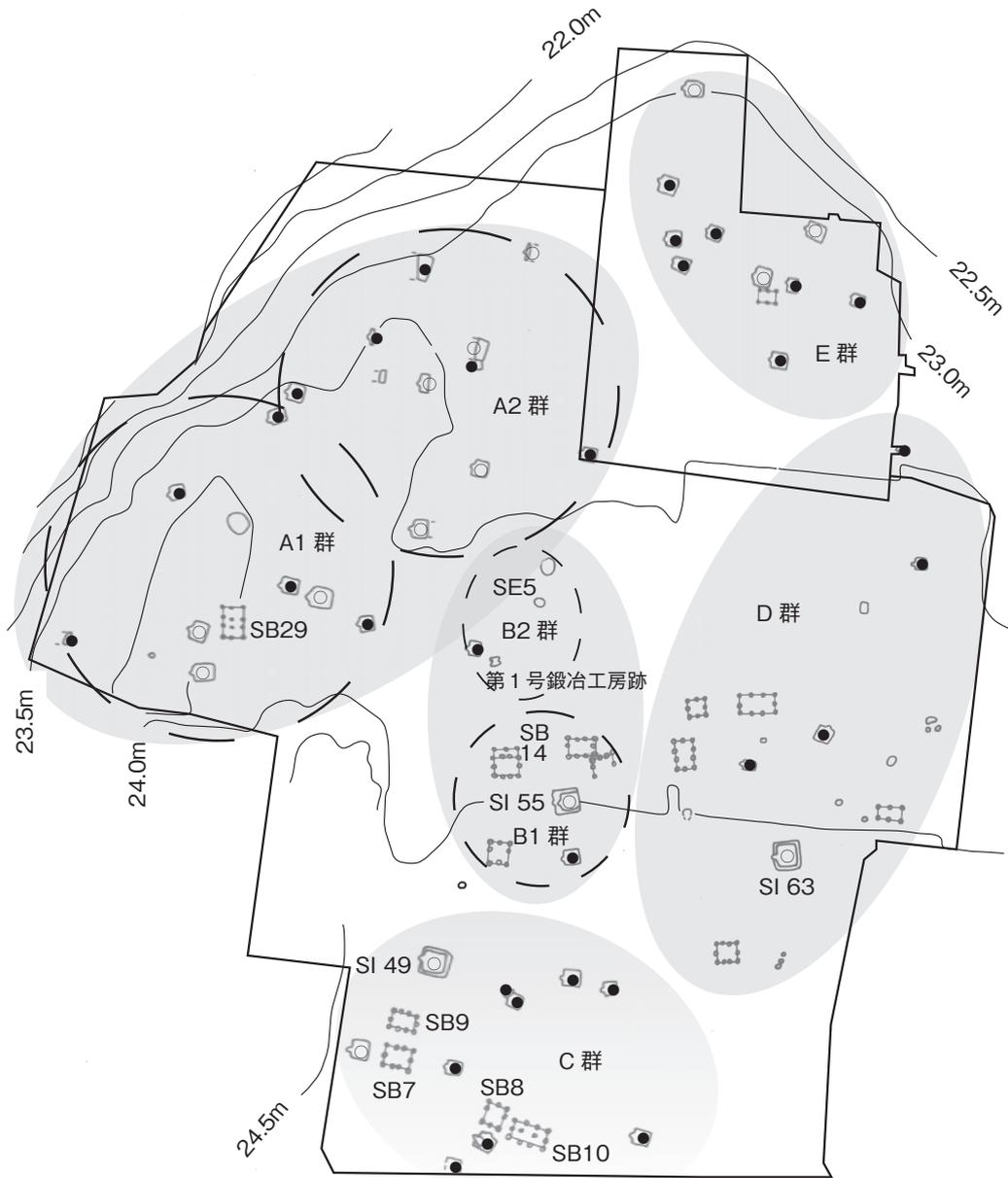
前時代まで住居跡数20軒前後で安定して推移してきたが、当期は住居跡25軒を数えわずかに増加傾向に転じている。単位集団は前時代同様五つのグループで、各群の中にも「中形住居+小形住居」または「中形住居+掘立柱建物」といったいくつかの小集団で構成されるようになる。前期の収蔵域であるB群は踏襲され集落の中心となっていく様相を示している。また、各群にも倉庫としての機能をもつ掘立柱建物跡が確認されるようになる。建物跡の主軸はB群の影響を受けたC群・D群で北西方向が主体となる。一方、A群・E群では依然北方向と北東方向を主軸とする集団が存在する。

第V期（第231図）

当期は、A群で住居跡18軒と掘立柱建物跡1棟、B群で住居跡2軒と掘立柱建物跡4棟、C群で住居跡11軒と掘立柱建物跡4棟、D群で住居跡5軒と掘立柱建物跡5棟、E群で住居跡10軒と掘立柱建物跡1棟で構成され、その数は前期に比べ倍増する。また、鍛冶工房跡や氷室状土坑、井戸跡、粘土採掘坑などの様々な施設も備える。

A群では、第29号掘立柱建物跡を中心にその周りに中形住居跡3軒、小形住居跡5軒が位置し、概ね北方向を主軸とする集団（A1群）と中形住居4軒、小形住居5軒が一定の距離を置いて点在し、北東方向を主軸とする集団（A2群）と二つの小集団が見られ、北部から北東部全体に集落が広がる。主な出土遺物は土製紡錘車・石製紡錘車・刀子・鎌・釘各1点、鎌2点で、鉄器等の保有率は4軒から6点で22.2%と、前期より半減する。

B群では、版築技法を用いて拡張した一辺5.5mの第55号住居跡と東側に庇をもつ第14号掘立柱建物跡を中心にその西側に小形住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、南側に掘立柱建物跡2棟が位置し、概ね北方向を主軸とする集団（B1群）が見られ、集落の中心的存在であったことがうかがえる。また、B1群の東側には小形住居1軒と鍛冶工房や井戸を備えた集団（B2群）が位置しており、工房関係の集団が存在していたことがうかがえる。主な出土遺物は灰釉陶器・石製紡錘車・穂摘具・釘各1点、砥石2点で、鉄器等の保有率は3軒から4点で75.0%と、高い保有率を示し、当集落の中心地であったことを物語る。



第V期(9C中葉)

○ 中形住居

● 小形住居



第231図 下平塚燕木台遺跡遺構配置図(6)

C群では、中形住居跡3軒、小形住居跡8軒、掘立柱建物跡4棟で構成されており、第7・9号掘立柱建物跡と第8・10号掘立柱建物跡を囲むように住居が配置された小集団が二か所確認でき、これまで小規模であった当群が一斉に膨れあがる。主軸は北東方向へ向くものが主体である。一辺5.9mの第49号住居跡からは灰釉陶器7点が出土しており、当群の中で優位に立った人物の居宅と考えられる。その他の主な出土遺物は須恵器の仏鉢片1点、墨書土器「丙」（則天文字）2点、土製紡錘車・石製紡錘車各2点、刀子3点、鎌・砥石各1点で、鉄器等の保有率は2軒から5点で18.2%である。

D群では、版築技法を用いて拡張した一辺5.1mの第63号住居跡を中心にその周りに小形住居跡4軒、掘立柱建物跡5棟が位置し、5棟の掘立柱建物跡の主軸は中形住居と同じ北方向で統一され規則的に建ち並んでいる。主な出土遺物は墨書土器「力」1点、刀子・釘各1点、鎌・砥石各2点で、鉄器等の保有率は2軒から6点で33.3%と、前期より減少する。

E群では、前期に引き続き、「中形住居1軒+小形住居数軒」のまとまりで構成される東部や南東部の集団と「掘立柱建物+小形住居」で構成された南西部の集団の小集団がいくつか見られ、主軸が他群と同様に北東方向を向くものが主体となる。居住域は前期に比べさらに東へ移動していく様相が見られ、当期から北部や西部が空白地となる。前時代においては集落の中心として展開していたため、これは当時の土地利用の状況によるもの、あるいは居住域に何らかの規制が働いていたことによるものと想定される。主な出土遺物は灰釉陶器片2点、墨書土器（判読不明）1点、砥石5点、刀子・鎌各1点である。また、漆が付着した土器の出土は漆工人の存在をうかがわせる。鉄器等の保有率は3軒から7点で30.0%と前期に比べ半減する。

当期は、五つの集団で構成され、住居跡・掘立柱建物跡数ともに最多となる。また、鍛冶工房や井戸、氷室状土坑などの施設も備えられ、これらの遺構は調査区全体を覆い尽くし、集落が最も繁栄したことをうかがわせる。特にB群・C群・D群では、倉庫として機能した掘立柱建物が建ち並び、B群を中心に集落が展開していった様相が捉えられる。また、紡錘車の出土数が最多となり、各群で農耕とともに繊維生産も行っていたことが想定される。さらに、当集落に仏教思想の浸透をうかがわせる須恵器仏鉢片も出土している。

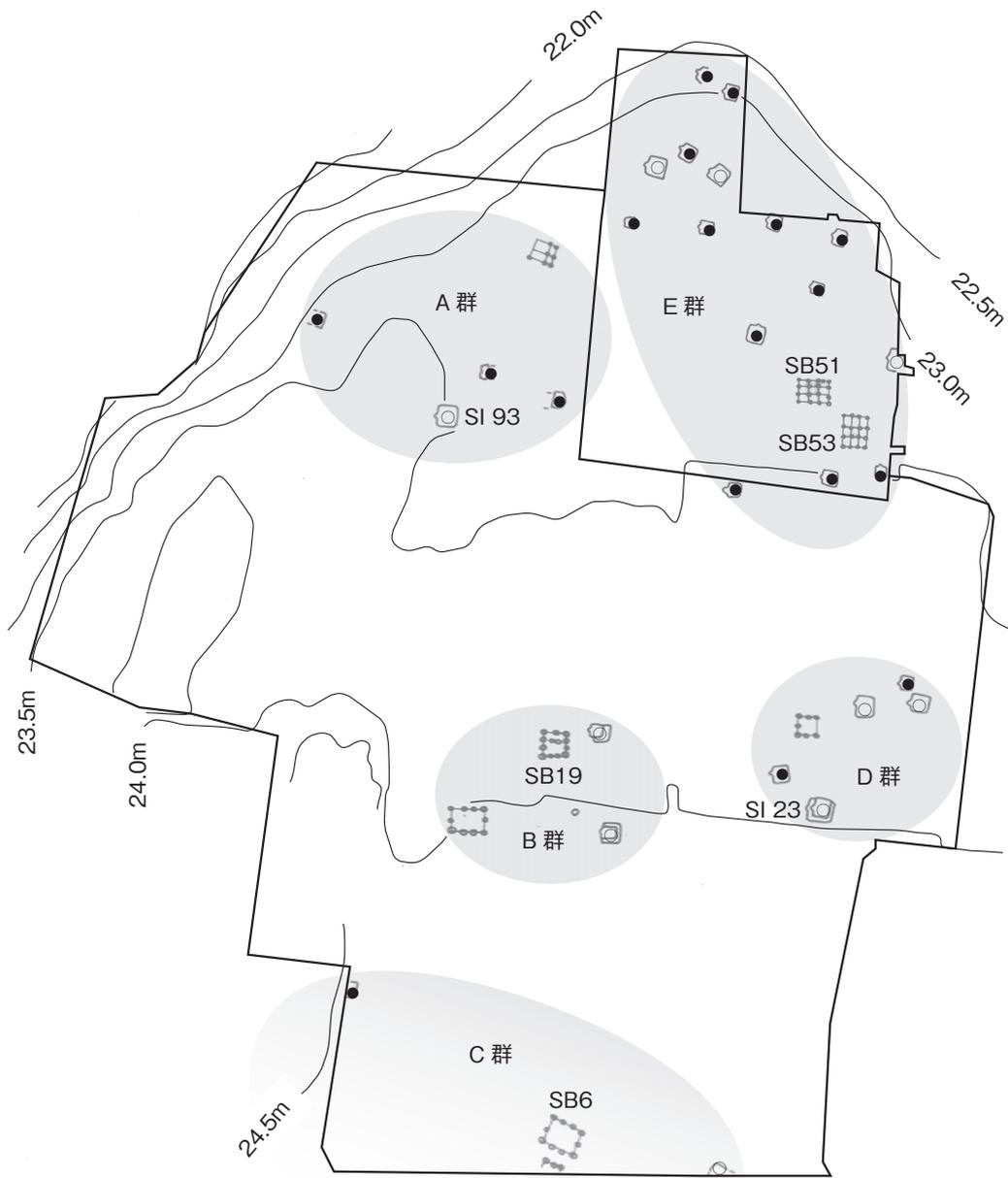
第Ⅵ期（第232図）

当期は、A群で住居跡4軒と掘立柱建物跡1棟、B群で住居跡4軒と掘立柱建物跡2棟、C群で住居跡2軒と掘立柱建物跡2棟、D群で住居跡6軒と掘立柱建物跡1棟、E群で住居跡15軒と掘立柱建物跡2棟で構成され、その数は前期に比べ半減する。

A群では、北部の集団が確認できなくなり、北東部で中形住居跡1軒、小形住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟が一定の距離を置いて点在している。これらは灰釉陶器2点や墨書土器「不カ」・石製紡錘車各1点が出土している第93号住居跡を中心とした集団で、前期のA2群を踏襲している。

B群では、居宅としての機能が考えられる東側に庇をもつ第19号掘立柱建物跡を中心に、その南に拡張された中形住居跡2軒、北西側に掘立柱建物跡1棟がまとまっており、主軸はいずれも北方向で統一されている。この集団は前期を踏襲しており、依然として集落の中心的存在であったものと考えられる。主な出土遺物は灰釉陶器碗や長頸瓶3点、刻書土器「木」、砥石各1点で、鉄器等の保有率は1軒から1点で25.0%と、前期に比べ大きく減少する。

C群では、調査区域際に中形住居跡・小形住居跡各1軒、掘立柱建物跡2棟が80mの距離を置いて点在している。中央に位置する第6号掘立柱建物跡は3間×2間の側柱建物で床面積38㎡の大形であるこ



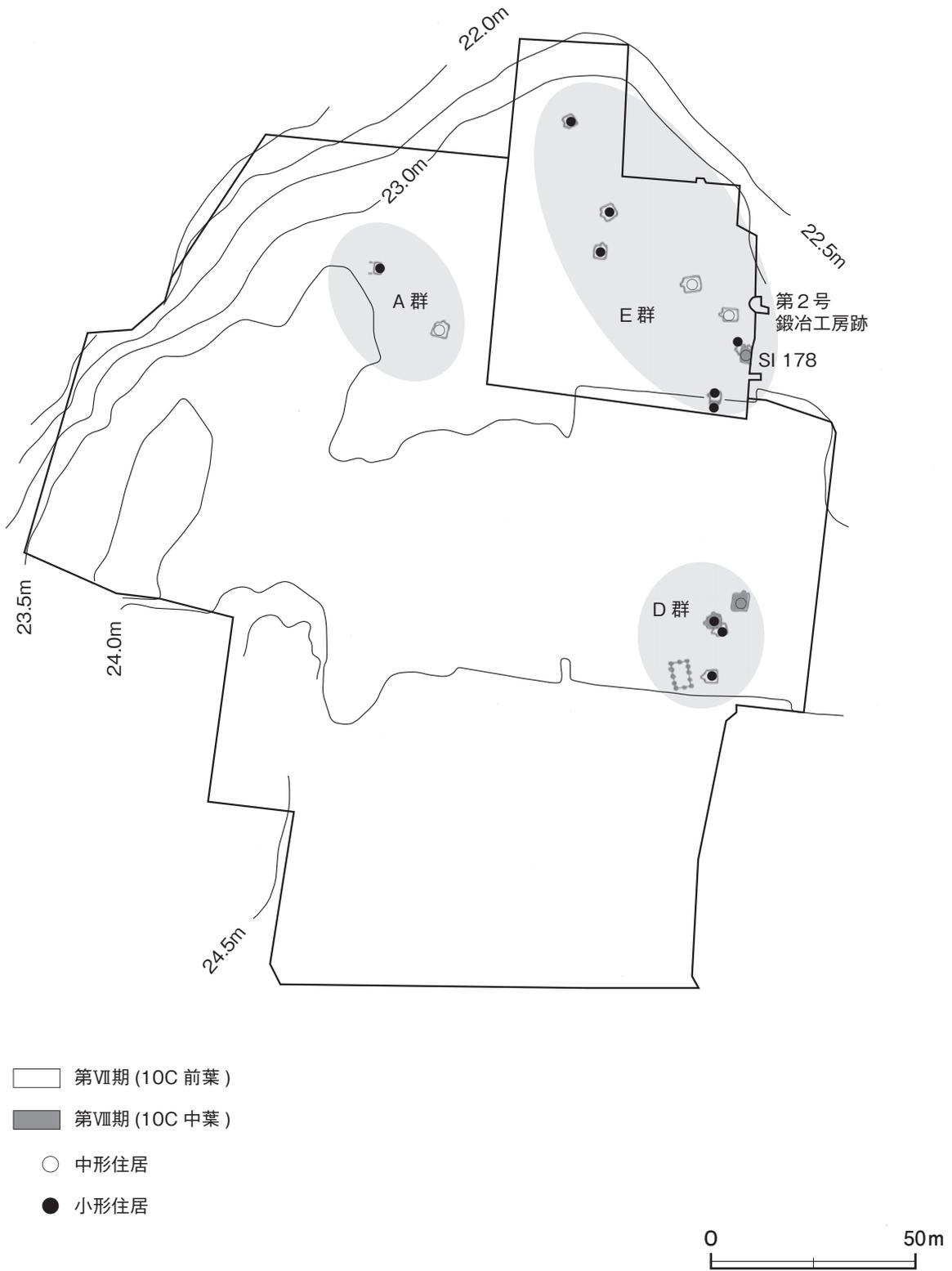
第VI期(9C 後葉)

○ 中形住居

● 小形住居

0 50m

第 232 図 下平塚燕木台遺跡遺構配置図 (7)



第 233 図 下平塚燕木台遺跡遺構配置図 (8)

とから居宅としての機能が想定される。主な出土遺物は砥石1点で、鉄器の保有率は1軒から1点で25.0%である。

D群では、建て替えが行われた一辺5.5mの第23号住居跡を中心に、その東に中形住居跡2軒、小形住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟が弧状に位置している。主軸はいずれも概ね北方向である。主な出土遺物は灰釉陶器長頸瓶、刀子各2点、砥石1点で、鉄器等の保有率は2軒から3点で33.3%と、前期と同じである。

E群では、2棟の掘立柱建物跡を中心に主軸を平行または直交する中形住居跡1軒と小形住居跡4軒で構成された南西部の小集団と主軸が北東方向である中形住居跡2軒、小形住居跡8軒で構成された北東部・南東部の小集団が見られ、前期を踏襲している。南西に位置する第51・53号掘立柱建物跡はいずれも大形の総柱建物跡で倉庫として機能していたものであり、当地が収蔵域へと変わっていく様相が見られる。主な出土遺物は灰釉陶器2点、墨書土器(判読不明)1点、刀子2点、鏃1点、釘3点で、小破片であるが灰釉陶器や墨書土器の出土が増え、当集団の中でも力をつけてきた有力者の存在がうかがえる。鉄器等の保有率は4軒から6点で26.7%と、前期とほぼ同じである。

当期は、前期に比べると住居跡等の建物が半減し、集落が縮小していく様相が見られる。集落の中心は前期に引き続きB群であり、A群・E群は南東へと広がり、各群とも全体的に南側へ移動していく様相がうかがえる。

第Ⅶ期 (第233図)

当期の建物は、A群で住居跡2軒、D群で住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟、E群で住居跡7軒と鍛冶工房跡1基で構成され、前期に比べ激減する。

A群では、中形住居跡・小形住居跡各1軒、D群では、小形住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟で構成されている。主な出土遺物はA群で灰釉陶器2点、鏃1点、D群で灰釉陶器・斧・砥石各1点と、両群とも鉄器等を保有しており、農耕を行っていたものと考えられる。

E群では、中形住居跡2軒と小形住居跡5軒で構成されており、その数は減少するもの他群に比べ大きな減少ではない。主軸は北西方向が主体である。南部に位置する第2号鍛冶工房跡から椀形鍛冶滓や粒状滓、鍛造剥片、羽口など多量の鍛冶関連遺物や鏃・釘各1点が出土している。また、灰釉陶器浄瓶の注口部も覆土中から出土しており、当群にも仏教思想が浸透していたことを物語る好資料となる。その他の主な出土遺物は刻書土器「夫」4点、灰釉陶器・支脚に転用された羽口・刀子各1点、釘5点で、鉄器等の保有率は3軒から4点で42.9%と前期に比べ高くなる。

当期は、B群・C群で建物の痕跡が確認されなくなり、調査区の東部から南部にかけて展開していくものと考えられる。E群で確認された鍛冶工房跡では、出土した鍛冶関連遺物から精錬・鍛造の両段階を行っており、この時期においても鉄製品づくりが盛んに行われていたことが明らかになった。

第Ⅷ期 (第233図)

当期をもってA群の建物跡は確認されなくなり、D群で住居跡2軒、E群で住居跡2軒を数えるだけとなる。各群とも主軸が北方向の小形住居跡と主軸が東方向の中形住居跡の2軒のまとまりで構成された集団となる。D群から支脚に転用された羽口・鏃各1点、E群から鉄製紡錘車1点が出土しており、農耕とともに繊維生産も行われていたことを示している。当期以降の建物の痕跡は確認されなくなることから、当期をもって当集落は終焉を迎える。

3 鍛冶関連遺物について

今回の調査区から、鍛冶関連遺物が多量に出土した奈良時代の第 251 号土坑と平安時代の第 2 号鍛冶工房跡を確認した。また、羽口を再利用して支脚に転用したり、鉄滓（椀形鍛冶滓）が廃棄されたりした住居跡等の遺構も多数確認した。ここでは、遺構の概要や出土した遺物について述べ、集落との関わりについて概観する。

(1) 第 251 号土坑

第 251 号土坑は、調査区北東部の標高 23 m の平坦な台地上に位置し、長径 3.54 m、短径 3.30 m、深さ 186cm で、粘土層まで掘り込んでいる大形円形土坑である。底面の中央部には長径 166cm、短径 156cm の円形で、深さ 32～43cm の穴が設けられている。また、底面の東・西部には棒状のようなものを這わしたと考えられる、平面が楕円形、断面が U 字形の痕跡 2 か所が確認できる。このような規模や形状から氷室状土坑と判断した。時期は、覆土中層から下層にかけて出土した須恵器の坏、蓋、鉢等の形状から 8 世紀前葉に比定できる。この土坑の覆土上層から中層にかけて、椀形鍛冶滓や羽口などの鍛冶関連遺物が多量に出土している。共に出土した土師器の高台付椀から判断すると 10 世紀代と考えられ、当土坑の埋没後の窪地、あるいは掘り返して廃棄されたものと考えられる。

出土した椀形鍛冶滓は、特大（完形で 1,000g 以上）から極小（完形で 125g 以下）までのものである。他に炉壁や多量の鍛造剥片、粒状滓などが出土している。また、出土した羽口は内径が 3.2cm（羽口の内径が 10cm 以上で製鉄の段階、5 cm 位で鍛冶の段階とのこと）である（第 234 図参照）。これらの鍛冶関連遺物の種類や規模、形状から精錬鍛冶と鍛錬鍛冶の両段階に関わる遺物であることが言える。ほぼ同時期である第 2 号鍛冶工房跡は当土坑から南西へ 72 m と離れたところに位置しており、周辺に鍛冶炉が確認されていないことから、鍛冶工房跡は調査区域外に存在していたものと考えられる。Y 1 は、鍛冶炉の炉壁としては極めて希な胎土で、製鉄炉の炉壁に似ており、鍛冶工人の出自か製鉄工人が居住していた可能性も考えられる。多量の鍛冶滓や椀形鍛冶滓、製鉄段階で見られる流動滓も出土していることや原料である砂鉄も近くの蓮沼川から容易に採取できることから、調査区域外である蓮沼川に面した台地縁辺の斜面部に製鉄炉が存在していた可能性も考えられる。

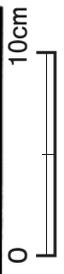
表 14 第 251 号土坑出土鍛冶関連遺物点数・重量計測表

鍛冶関連遺物	点数	重さ (g)
炉壁材	9	
羽口	7	
椀形鍛冶滓 (特大)	4	1,248.0
椀形鍛冶滓 (大)	21	6,272.0
椀形鍛冶滓 (中)	63	4,771.5
椀形鍛冶滓 (小)	89	5,214.2
椀形鍛冶滓 (極小)	575	5,214.7
椀形鍛冶滓 合計	752	22,720.4
鍛冶滓	1383	9,374.0
流動滓	1	27.0
鉄塊系遺物	13	125.0
粘土質溶解物	3	26.4
粒状滓		304.8
鍛造剥片		2,612.2

(2) 第 2 号鍛冶工房跡

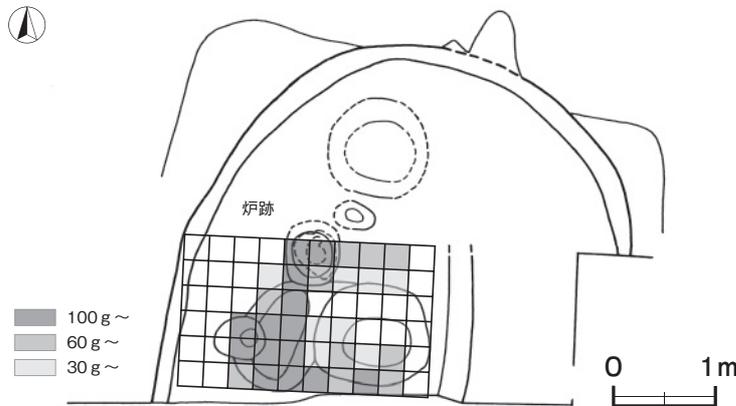
第 2 号鍛冶工房跡は、調査区南西部の標高 23 m の平坦な台地上に位置している。南部が調査区域際で、溝に掘り込まれているため、南北径は 3.74 m しか確認できなかった。東西径は 4.42 m で、平面形は楕円形と推定できる。この掘り込みの中央部に長軸 60cm、短軸 50cm で、深さ 19cm の隅丸長方形の炉跡を確認した。鍛冶炉としては大きい方であり、底面の赤変硬化が強い。特に西部の赤変が強いことから羽口は西側に装着されていたものと想定される。また、鍛造剥片や粒状滓の出土分布状況（第 236 図参照）から鍛冶炉の南側に位置する長軸 110cm、短軸 98cm、深さ 43cm の隅丸長方形のピットが、火色を見たり鍛

第251号土坑									
炉壁(鍛冶炉)	橢形鍛冶滓 (特大, 厚床土付)	H(O)	橢形鍛冶滓 (中, 香飯, 重層, 厚床土付)	橢形鍛冶滓 (小, 香飯, 粘土質附雜物付)	橢形鍛冶滓 (中, 香飯, 重層, 厚床土付)	橢形鍛冶滓 (中, 香飯, 厚床土付)	橢形鍛冶滓 (特大, 香飯, 厚床土付)	橢形鍛冶滓 (特大, 香飯, 厚床土付)	鐵塊系遺物 (香飯)
①(Y1)	⑤(M40)	⑧(M43)	⑫(M47)	⑮(M50)	⑱(M54)	⑲(M58)	⑳(M61)	H(O)	
②(Y2)	橢形鍛冶滓 (特大, 香飯, 厚床土付)	橢形鍛冶滓 (中, 香飯)	橢形鍛冶滓 (中, 香飯)	橢形鍛冶滓 (極小)	橢形鍛冶滓 (極小, 香飯, 粘土質附雜物付)	橢形鍛冶滓 (香飯)	⑳(M62)		
羽口(鍛冶, 先端~基部)	H(O)	M(◎)	M(◎)		H(O)	H(O)			
③(DP10)	橢形鍛冶滓 (大, 香飯)	橢形鍛冶滓 (中, 厚床土付)	⑬(M48)	⑯(M51)	⑳(M55)	㉑(M59)	㉒(M63)	粘土質溶解物	
橢形鍛冶滓 (大)	橢形鍛冶滓 (大, 香飯)	⑩(M45)	橢形鍛冶滓 (小, 羽口(破損)先端部付)	橢形鍛冶滓 (極小, 香飯)	橢形鍛冶滓 (極小, 香飯, 工具痕付)	橢形鍛冶滓 (香飯, 鐵塊附片付)			
④(M39)	⑦(M42)	⑪(M46)	⑭(M49)	⑰(M52)	㉓(M56)	H(O)	㉔(M64)		
分析							㉕(M60)		㉖(M65)



第 234 图 第 251 号土坑出土鍛冶関連遺物構成図

打を行ったりした作業用の足入れ穴であったものと考えられる。時期は出土した土師器の坏や高台付碗から10世紀前半と判断した。



第236図 第2号鍛冶工房跡出土鍛造剥片・粒状滓分布図

表15 第2号鍛冶工房跡出土鍛冶関連遺物点数・重量計測表

鍛冶関連遺物	点数	重さ (g)
鑿	1	56.0
炉壁材	1	
羽口	54	
椀形鍛冶滓 (特大)	18	13,031.0
椀形鍛冶滓 (大)	47	13,287.4
椀形鍛冶滓 (中)	141	12,666.9
椀形鍛冶滓 (小)	281	7,733.2
椀形鍛冶滓 (極小)	1468	5,282.4
椀形鍛冶滓 合計	1955	52,000.9
鍛冶滓	171	732.5
鉄塊系遺物	8	100.9
粒状滓		226.0
鍛造剥片		11,695.1

出土した椀形鍛冶滓は、特大から極小までのもの（第235図参照）までである。点数で見ると極小のものが圧倒的に多く出土しているが、重量で見ると特大・大・中のもものがほぼ同量である。これら椀形鍛冶滓と鍛冶滓を含めると2千点を超え、その重量は約53kgにも及んでいる。このことから当鍛冶工房では、鍛冶の中でも製鉄炉で作られた鉄塊から純度の高い鉄塊を作る精錬段階を行っていたことが言える。また、鍛造剥片も10kgを超える量が出土している。その規模は0.1cm以下～0.9cmのもので、0.1cm以下のものは、全体の59.8%になる。表面の色を観察すると、黒褐色のものや青光りしているものが見られる。規模が小さくなるにつれ青光りしているものの割合は大きくなる傾向で、0.1cm以下のものは100%青光りしている。このことから鍛造段階でも鉄製品に加工する最終段階まで行っていたことが分かる。さらに、出土した羽口はいずれも破片であるが、内径は5cm以下のものとみられる。M83・M85・M86・M93は重層または重層気味の椀形鍛冶滓である。これは一回の操業が終わった後に炉底の滓を取り残して次の操業に入ったためにできた滓である。このような椀形鍛冶滓は官営の工房で見られないことから、一般集落にある工房跡であると判断した。また、これらの鍛冶関連遺物の種類や規模、形状から、当鍛冶工房跡では精錬段階から鍛錬段階までの鍛冶を行っていたことが分かり、この時代では鉄製品ができるまでの一連の工程を一つの工房で行うということを証明できる資料となった。当集落では住居跡が減少し集落が衰退する時期においても、鉄製品づくりを行っていたことが明らかになった。

(3) 建物跡

今回の調査区の住居跡や掘立柱建物跡などの建物跡から出土した鍛冶関連遺物は、住居跡31軒と掘立柱建物跡1棟（第237図参照）からで、約半数の建物から確認できた。

奈良時代では、12軒の住居跡から30点（655.9g）の椀形鍛冶滓と羽口片12点が出土している。第132号住居跡から出土した羽口は、支脚に転用されている。第28号住居跡（『第326集』）からも同様に支脚に転用された羽口が出土している。いずれも8世紀後葉に比定できる住居跡であることから、当時代の鍛冶工房跡は確認されていないが、8世紀の半ば頃には集落内で鍛冶関連の作業が行われていたものと考えられる。

平安時代では、9世紀代に13軒の住居跡から34点(800.3g)の椀形鍛冶滓と羽口片1点、金床石2点が出土している。『第326集』でも6軒の住居跡から椀形鍛冶滓5点、羽口片3点の出土が報告されている。9世紀中葉に比定できる第83号住居跡から出土した羽口は支脚に転用されている。同時期に第1号鍛冶工房跡も確認されていることから、集落内で継続して行われていたことがうかがえる。10世紀に入ると、第2号鍛冶工房跡が確認され、周辺の住居跡6軒から14点(770.8g)の椀形鍛冶滓や支脚に転用された羽口1点が出土している。当調査区では10世紀前葉をもって、鍛冶関連遺物の出土は認められなくなる。

表16 時期別鍛冶関連遺物点数・重量計測表

鍛冶関連遺物 時 期	椀形鍛冶滓		その他 (点数)
	点数	重さ (g)	
8世紀前葉	8	89.5	
8世紀中葉	14	400.0	羽口(3)
8世紀後葉	8	166.4	羽口(9)
9世紀前葉	7	525.0	金床石(1)
9世紀中葉	9	102.5	
9世紀後葉	18	172.8	羽口(1)金床石(1)
10世紀前葉	14	770.8	羽口(1)
10世紀中葉	0	0	



第237図 下平塚蕪木台遺跡東部出土椀形鍛冶滓分布図

4 おわりに

これまで当遺跡の集落の様相について述べてきた。ここでは、『第326集』の成果に加え、今回の調査成果によって明らかになったことについて述べ「おわりに」としたい。

当集落は、住居跡や掘立柱建物跡などの在り方から五つの転換期を見出すことができる。第1期は、小規模ではあるが、人々の生活の痕跡が認められる縄文時代早期である。住居跡1軒、陥し穴・土坑各2基が今回の調査区で確認された。早期になると、まとまった数軒の住居からなる集落が出現する³⁾と指摘されていることから、今回の調査区域外にも集落が展開していたものと考えられる。奈良・平安時代の住居跡の覆土中から搔器や石鏃など9点が出土している。また、陥し穴も確認されていることから当地域のこの時期は、集落の外周部であり狩猟場でもあった可能性がある。その後、古墳時代後期になるまで、人々

の営みの痕跡は確認されなくなる。

第2期は、断続的ではあるが小規模な集落が営まれた古墳時代後期である。『第326集』では、住居跡5軒が確認されており、住居が1軒ないし2軒の小集団が台地上に点在している程度であると報告されている。当遺跡の東側を流れる蓮沼川の下流と東谷田川との合流付近には、県内屈指の大集落である島名熊の山遺跡⁴⁾が位置している。4世紀を起源とする島名熊の山遺跡は、当遺跡と同時期である6世紀後葉から7世紀にかけての住居跡数が500軒を超える大集落となっており、有力な地元富豪層によって早くから開発の手が入り、その後、発展していくことが明らかになっている。一方、当遺跡と同じ蓮沼川流域に位置する荊間六十目遺跡⁵⁾では、古墳時代初頭に人々の生活が開始され住居跡12軒を数える。しかし古墳時代中期には集落が一旦途絶える。また、荊間神田遺跡⁶⁾では、古墳時代初頭から集落が形成され古墳時代後期までに住居跡23軒を数える。しかし時間的な継続性は認められず、断続的に数軒の住居が小さな集団として点在しているだけである。さらに、当遺跡の北部で蓮沼川の上流に位置する西平塚梨ノ木遺跡⁷⁾では、この時期の遺構は確認されていない。以上のことから、この時期の蓮沼川流域は、小規模な集落が断続的に点在している程度で、本格的な開発の手が入っていなかったことがうかがえる。

第3期は、本格的な集落が営まれるようになった8世紀前葉である。奈良時代になると律令制の成立とともに住居跡16軒、掘立柱建物跡16棟が確認され、当地域にも人々が移り住んできたことが明らかになった。この時期は住居跡数の大きな変動もなく安定した集落であったものと考えられる。当遺跡の東部では、大形住居跡とともに掘立柱建物群が主軸を同じにして規則的に建ち並び、L字状に配置された様子や庇をもつ掘立柱建物の存在は地方豪族居宅⁸⁾を思わせる。居宅は居住・家政関係施設の空間と収納施設の空間とで構成されるのが一般的で、両者が一体的に配置される例が多い。倉庫群は主屋から見て北側や西側に設けられる遺跡例が8割ほどを占めていると指摘されている。このことからすると、当遺跡の東部に位置する大形住居跡とその北側及び西側に配置された掘立柱建物跡群の景観は正に地方豪族の居宅と見て取れる。今回の調査によって調査区の東部は、蓮沼川流域の開発にあたった中心地であり、倉庫群は末端官衙としての収蔵施設、あるいは居宅であったものと想定される。遺物では、鎌や鋤先などの農具類や刀子や鑿などの工具類の鉄器が多数確認できる。当遺跡の所在する台地は東側に蓮沼川流域の低地部が面しており農耕に適していたと考えられ、低地開発に関わりの深い集団で、官人の元で生産活動に従事していた人々が構成した集落であると考えられる。

第4期は、集落が最も繁栄する9世紀中葉である。住居跡47軒、掘立柱建物跡14棟に加え、鍛冶工房跡や水室状土坑、井戸跡等の施設も備える。当遺跡の中央部では庇付掘立柱建物を中心に住居や掘立柱建物群、その東側に距離を置いて鍛冶工房や井戸が配置されるようになる。この時期になると集落の中心が東部から中央部に移り、住居などの遺構が台地上を覆い尽くすようになる。出土遺物は、農具類や工具類などの鉄器のほか、灰釉陶器や墨書土器の出土が多くなり、力を付けてきた有力者の存在を示す。また、版築技法を知っていた人々も加わり、集落が拡大・繁栄していったものと考えられる。

第5期は住居跡等の建物が減少し、集落が衰退する10世紀中葉である。9世紀後葉から住居跡が減少するようになり、10世紀に入ると一気にその数は減少していく。10世紀中葉には、東部で鍛冶工房跡が確認されており、衰退期においても鉄製品づくりを盛んに行っていたことが明らかになった。また、9世紀後葉から10世紀中葉にかけて集落が南側へ移動していく様相がうかがえる。このことから集落は終焉を迎えたのではなく、当遺跡の南側（未調査区）に移っていった可能性も考えられる。ただ当遺跡と同じ蓮沼川流域の荊間神田遺跡や荊間六十目遺跡では、10世紀前葉をもって集落の終焉を迎えていることから、こ

の時期に何らかの社会的な大きな変化があったものと想定される。

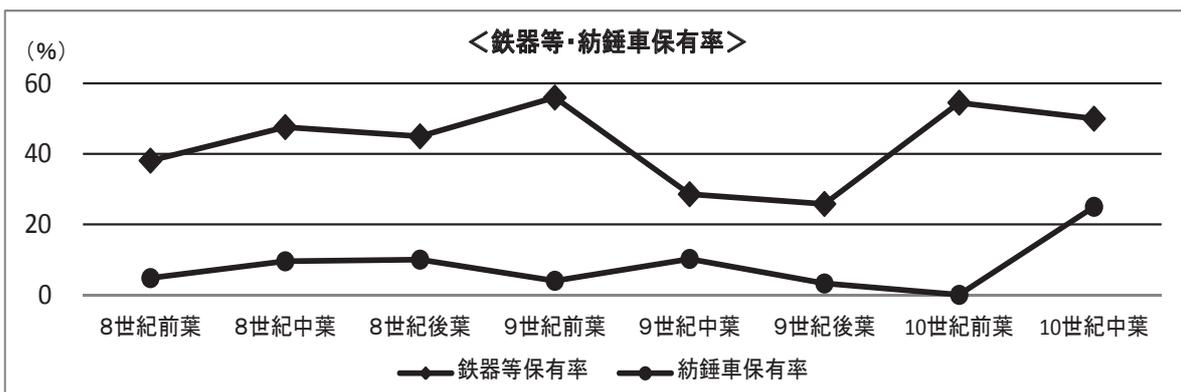
出土遺物は土師器や須恵器の日常雑器のほか、鉄器・石器などの道具類や繊維生産具、灰釉陶器、文字資料である墨書土器などが出土している。

鉄器や石器など道具類の出土は、本格的な集落が始まった8世紀前葉から確認されるようになり、鎌や鋤先、斧、刀子、砥石など161点を数える。保有率で見ると8世紀代では30%から60%と時期を経る毎に増加傾向を示し、集落に普及していく様子が見て取れる。9世紀代後半では30%を下回るが、10世紀代には50%前後と高い保有率を示している。出土点数で見ると、8世紀中葉から9世紀中葉にかけて多く出土している。鉄製農具の普及は、畑作農業の盛行を物語るとともに経済力の充実を示すものと受け止められている。つまり、当遺跡では、律令体制のもと水田経営とともに畑作も行われていたものと考えられ、各時期にわたって空白地であった台地中央部に畑地が広がっていたものと想定される。

紡錘車の出土は、鉄器同様8世紀前葉からで15点を数え、10世紀前葉を除く各時期で確認できる。保有率は10%前後で推移し、集落の終焉を迎える10世紀中葉まで農耕の傍ら繊維生産を行っていたことがうかがえる。

表 17 時期別道具類出土数

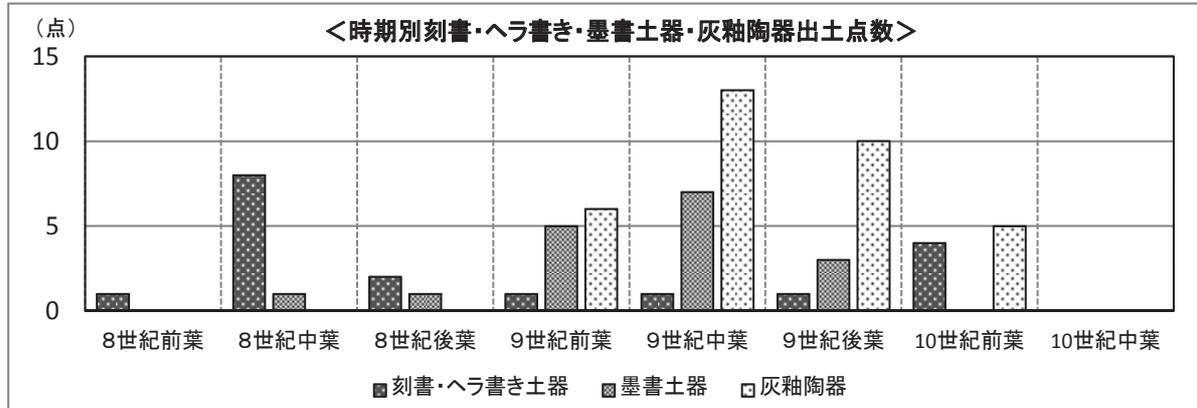
	農具類			工具類				武器	その他			繊維生産			石器	計
	鋤先	鎌	穂摘	斧	刀子	鑿	釘	鏃	製品	不明	土製紡錘車	石製紡錘車	鉄製紡錘車	砥石		
8世紀前葉					1	1	4	1	2	1		1		6	17	
8世紀中葉	1	5			14		17	5		1		2		3	48	
8世紀後葉		1			6		3	1				1	1	4	17	
9世紀前葉		3		1	5	1	7	1		1	1			5	25	
9世紀中葉		7	1		8		3	3	1	1	4	4		10	42	
9世紀後葉					3		4	1				1		3	12	
10世紀前葉				1	1		5	1						2	10	
10世紀中葉								3					1		4	
計	1	16	1	2	38	2	43	16	3	4	5	9	2	33	175	



文字資料では、刻書・ヘラ書き土器18点、墨書土器17点が出土している。刻書・ヘラ書き土器は8世紀前葉から確認できるようになる。中葉には8点を数え、各時期にわたって数点ずつ確認できる。これらは「+」や「×」、「↑」のような記号が多く、坏などに目印として付けられたものと考えられている。特定の人だけが使う各自の食器である属人器という朝鮮半島や日本に見られる食文化の浸透をうかがわせる資料である。墨書土器ではその多くが破片で判読不明なものもあり、集落の性格を探るまで至らなかった。8世紀中葉に1点が初出となるが、数多く出土するようになるのは9世紀以降である。

灰釉陶器では34点を数え、9世紀前葉から確認され、中葉・後葉で最多となり、10世紀に入るとその数

は激減し、中葉には確認できなくなる。墨書土器と同様に出土数の推移は集落の繁栄と大きな関わりがあるとみられる。灰釉陶器は、当遺跡と同じ蓮沼川流域にある苅間六十目遺跡では3点、苅間神田遺跡では皆無であることから、当集落は2遺跡に比べ優位に立っていたと考えられる。



以上、下平塚蕪木台遺跡の性格を少しでも明確にできるよう、『第326集』の報告も踏まえて推測を重ねながら遺構・遺物について考察を試みてきた。今回の調査により、当遺跡は律令体制のもとで新たに蓮沼川流域の開発にあたった集落で、律令体制の崩壊とともに終焉を迎えていること、蓮沼川流域の開発にあたった集落の中でも優位に立った開発拠点集落であったことを再確認できる成果を得た。特に今回調査した遺跡東部が、地方官衙を補佐するような末端組織を想定させる集落であり、官人との関わりの中で開発が始まったことを示唆する遺構の配置や8世紀の中頃から鉄製品づくりが始まったことを裏付ける遺物の出土など大きな成果を上げることができた。ただ、集落の終焉である10世紀中葉においても鉄製品が作られていることや集落が全体的に南側へ移っていく様相がうかがえることから、集落は終焉を迎えたのではなく南部（未調査）へ展開していった可能性も考えられる。これらの課題は、今後の下平塚蕪木台遺跡南部の調査によって明らかにされることであろう。

註

- 1) 白田正子・飯田浩彦・本橋弘巳・齋藤和浩・川井正一・江原美奈子「下平塚蕪木台遺跡 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第326集 2009年3月
- 2) 井上高明「コップ形須恵器の考察－奈良時代の計量器について－」『考古学雑誌』第79巻第4号 1994年6月
- 3) 鈴木克彦・鈴木保彦編『集落の変遷と地域性』株式会社雄山閣 2009年10月
- 4) 齋藤真弥・酒井雄一・渡邊浩実・松本直人・齋藤貴史・清水哲「島名熊の山遺跡 島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第291集 2008年3月
- 5) 小澤重雄「葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－六十目遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第160集 2000年3月
- 6) a 成島一也「(仮称)葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第121集 1997年3月
b 長岡正雄「(仮称)葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第134集 1998年3月
c 飯島一生「神田遺跡3 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第183集 2002年3月
- 7) 高野節夫「西平塚梨ノ木遺跡 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第196集 2002年3月
- 8) 奈良文化財研究所『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺構編』2004年3月

参考文献

- ・赤井博之「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究(1)～奈良・平安時代の須恵器編年を中心に～」『婆良岐考古』第20号 婆良岐考古同人会 1998年5月
- ・谷田部の歴史編さん委員会「谷田部の歴史」谷田部町教育委員会 1975年9月

写 真 図 版

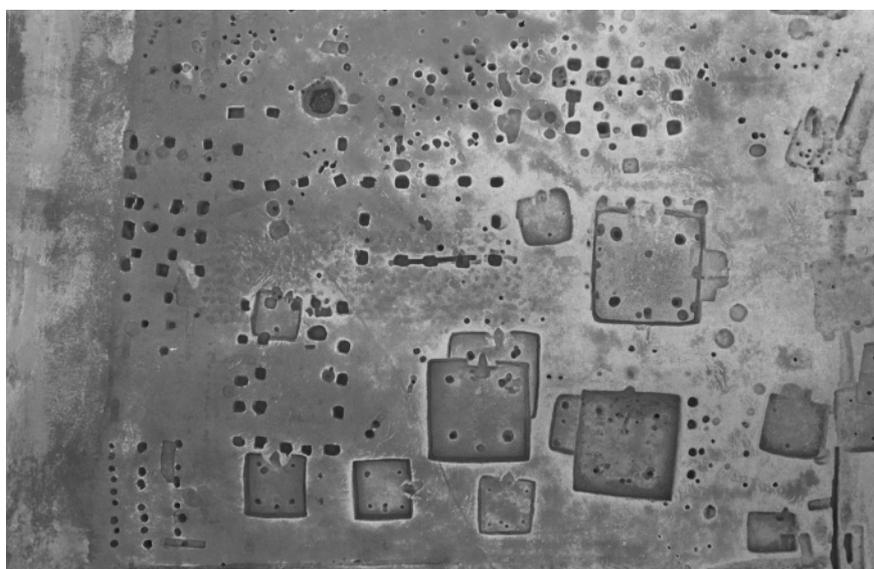


調査区遠景（西から）

調査区全景



調査区中央部



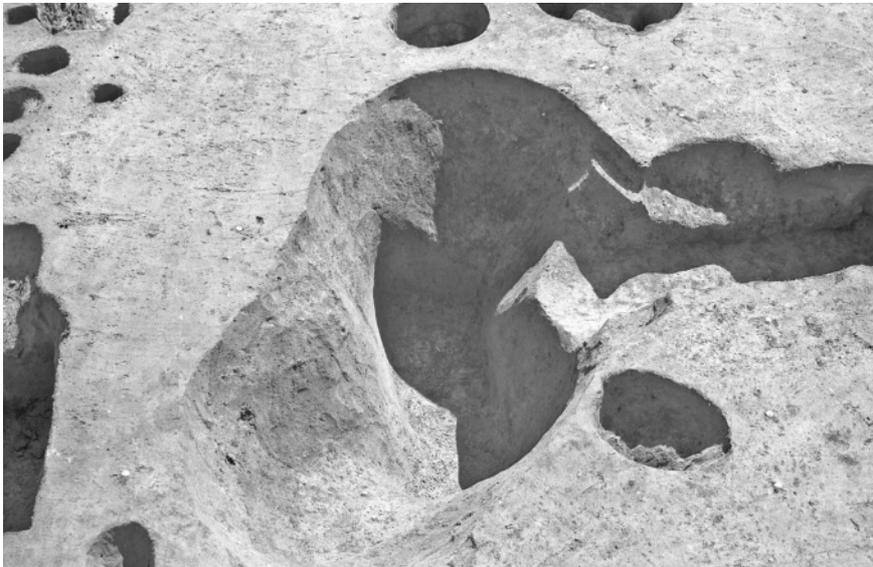
調査区南西部



PL2



第168号住居跡
完掘状況



第1号陥し穴
完掘状況



第297号土坑
完掘状況

第132号住居跡
竈遺物出土状況



第132号住居跡
完掘状況



第132号住居跡
竈完掘状況



PL4



第140号住居跡
完掘状況



第143号住居跡
遺物出土状況



第143号住居跡
完掘状況

第145号住居跡
遺物出土状況



第145号住居跡
竈遺物出土状況



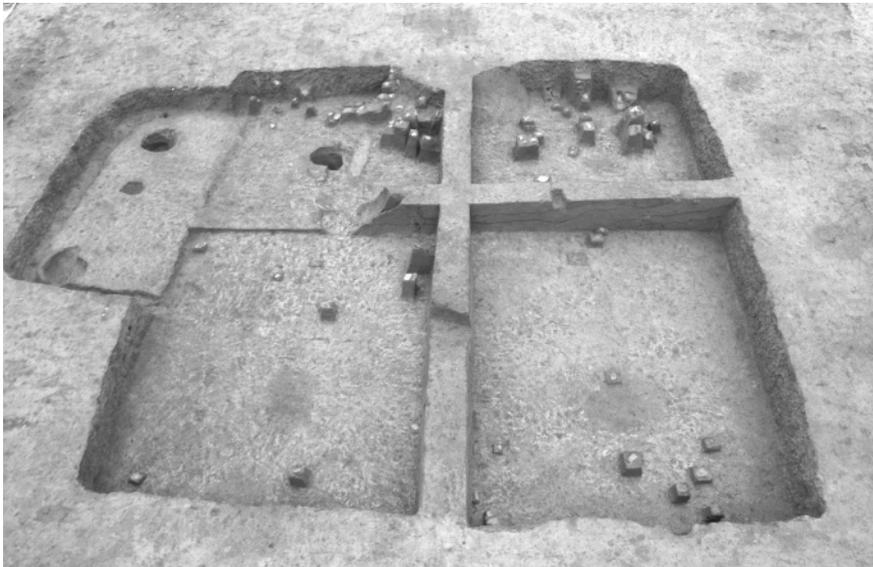
第145号住居跡
完掘状況



PL6



第150号住居跡
完掘状況



第153号住居跡
遺物出土状況



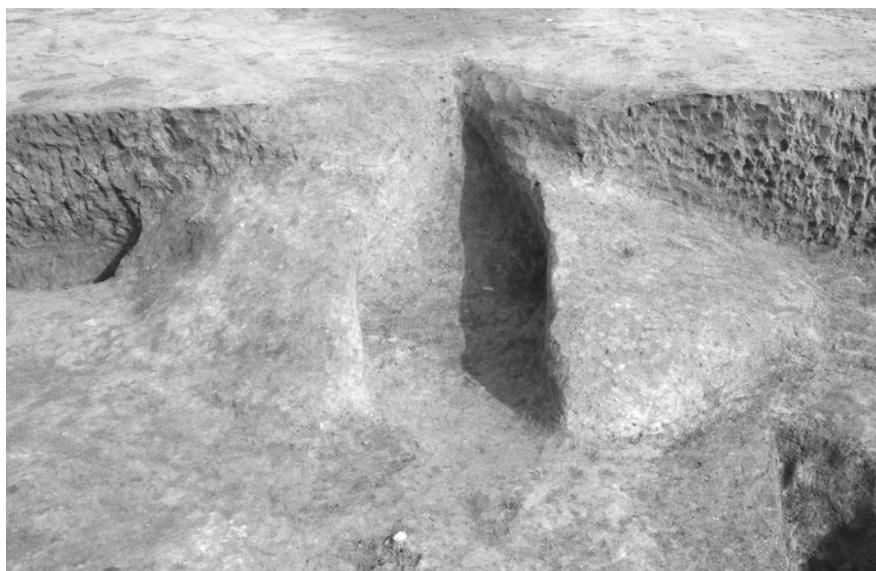
第153号住居跡
遺物出土状況



第153号住居跡
遺物出土狀況



第153号住居跡
完掘狀況



第153号住居跡
竈完掘狀況

PL8



第167号住居跡
完掘状況



第167号住居跡
竈完掘状況



第171号住居跡
遺物出土状況

第171号住居跡
遺物出土狀況



第171号住居跡
遺物出土狀況



第171号住居跡
完掘狀況



PL10



第180号住居跡
完掘状況



第180号住居跡
竈完掘状況



第185号住居跡
遺物出土状況



第185号住居跡
遺物出土状況



第185号住居跡
完掘状況



第185号住居跡
竈完掘状況

PL12



第187号住居跡
遺物出土状況



第187号住居跡
遺物出土状況



第187号住居跡
遺物出土状況

第187号住居跡
完掘狀況



第187号住居跡
竈完掘狀況



第48号掘立柱建物跡
完掘狀況



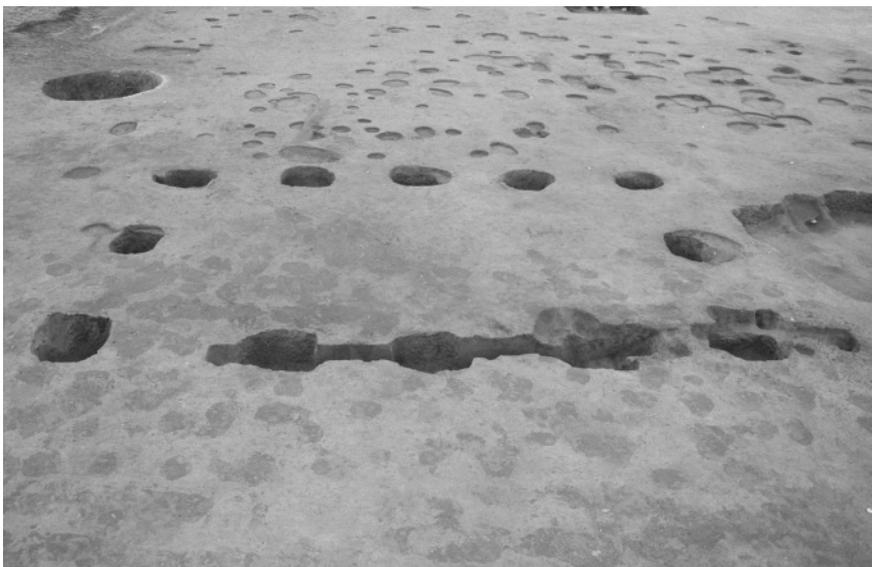
PL14



第50号掘立柱建物跡
完 掘 状 況



第52号掘立柱建物跡
遺 物 出 土 状 況



第52号掘立柱建物跡
完 掘 状 況



第54号掘立柱建物跡
完掘状況



第55号掘立柱建物跡
完掘状況



第56号掘立柱建物跡
完掘状況

PL16



第 29 号 溝 跡
完 掘 状 況



第 251 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

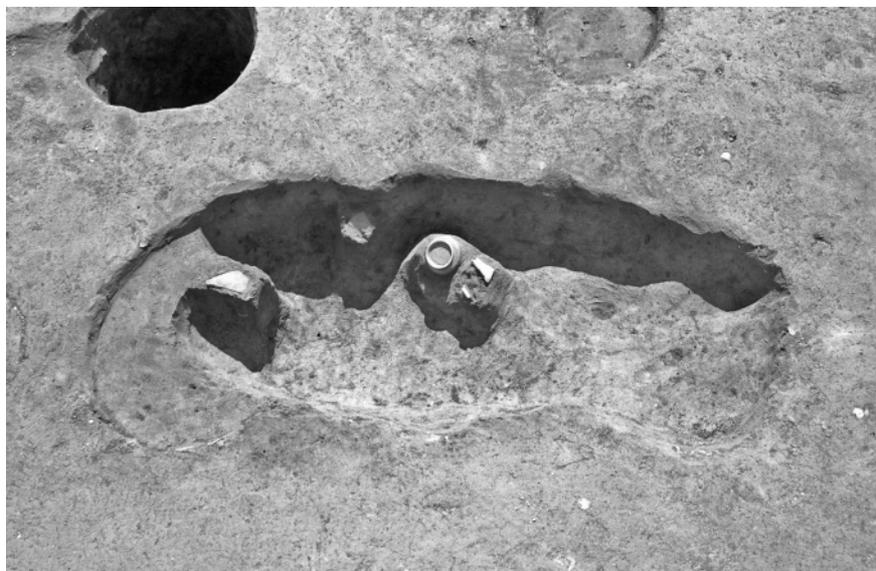


第 251 号 土 坑
完 掘 状 況

第 309 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 335 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 335 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



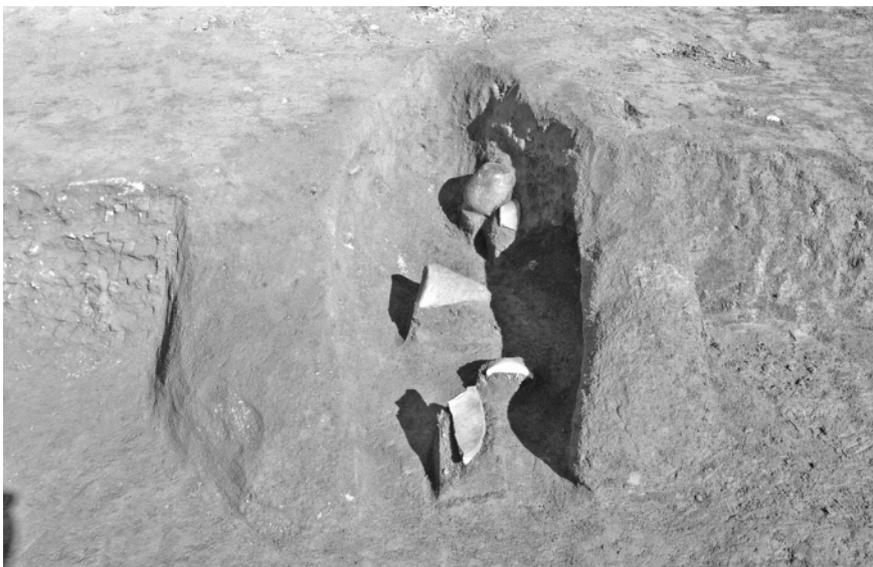
PL18



第127号住居跡
竈遺物出土状況



第127号住居跡
完掘状況

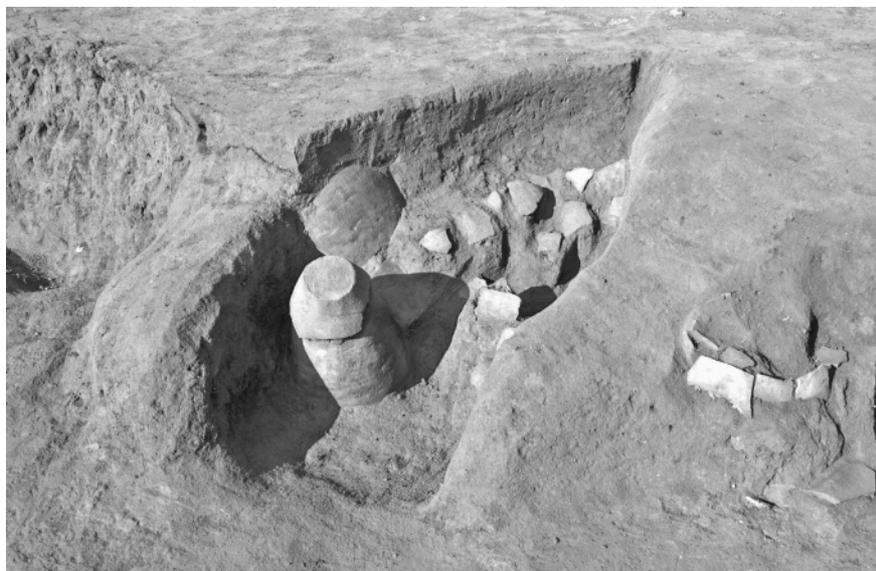


第133号住居跡
竈遺物出土状況

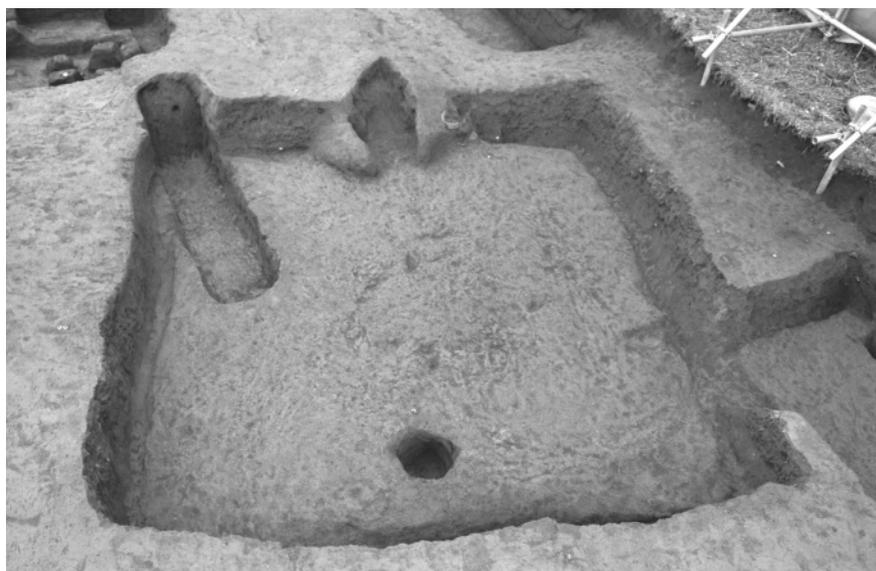
第133号住居跡
完掘狀況



第135号住居跡
竈遺物出土狀況



第135号住居跡
完掘狀況





第130号住居跡
遺物出土状況

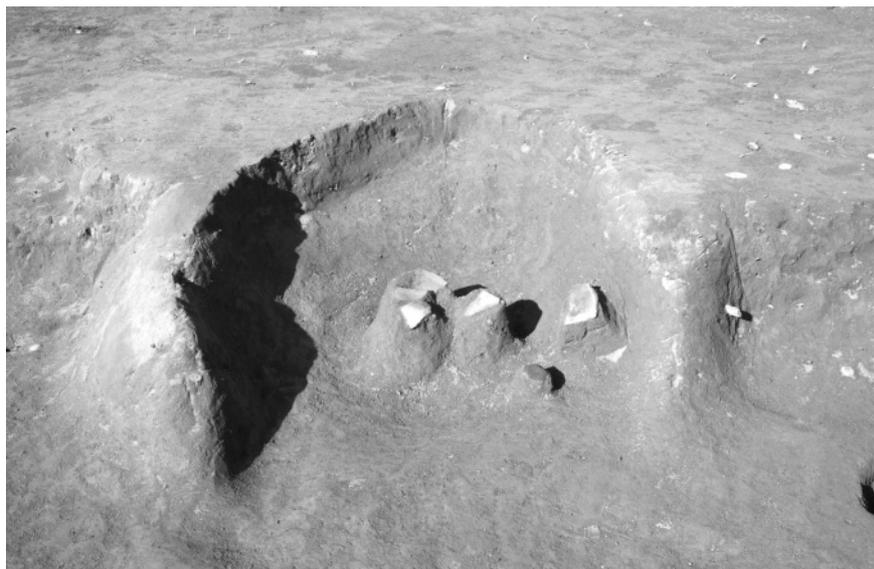


第130号住居跡
遺物出土状況



第130号住居跡
遺物出土状況

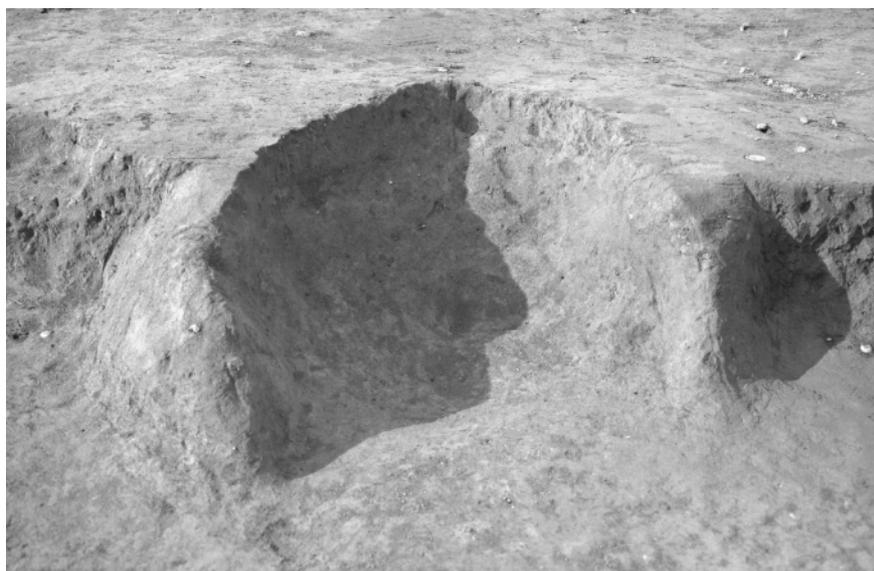
第130号住居跡
竈遺物出土狀況



第130号住居跡
完掘狀況



第130号住居跡
竈完掘狀況



PL22



第141号住居跡
竈遺物出土状況



第141号住居跡
完掘状況



第142号住居跡
竈遺物出土状況

第142号住居跡
完掘狀況



第147号住居跡
竈遺物出土狀況



第147号住居跡
完掘狀況



PL24



第146号住居跡
遺物出土状況



第146号住居跡
遺物出土状況



第146号住居跡
遺物出土状況

第146号住居跡
竈遺物出土狀況



第146号住居跡
完掘狀況

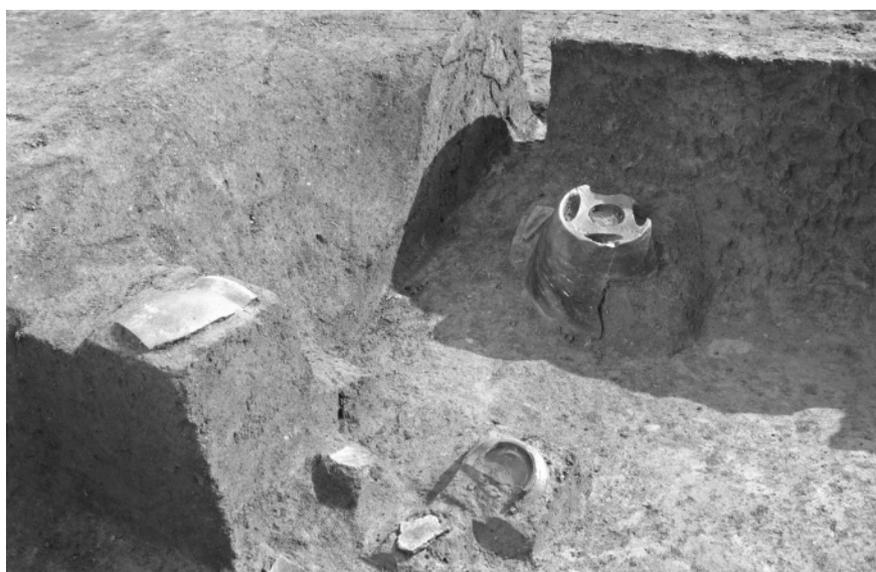


第146号住居跡
竈完掘狀況





第157号住居跡
完掘状況



第161号住居跡
遺物出土状況

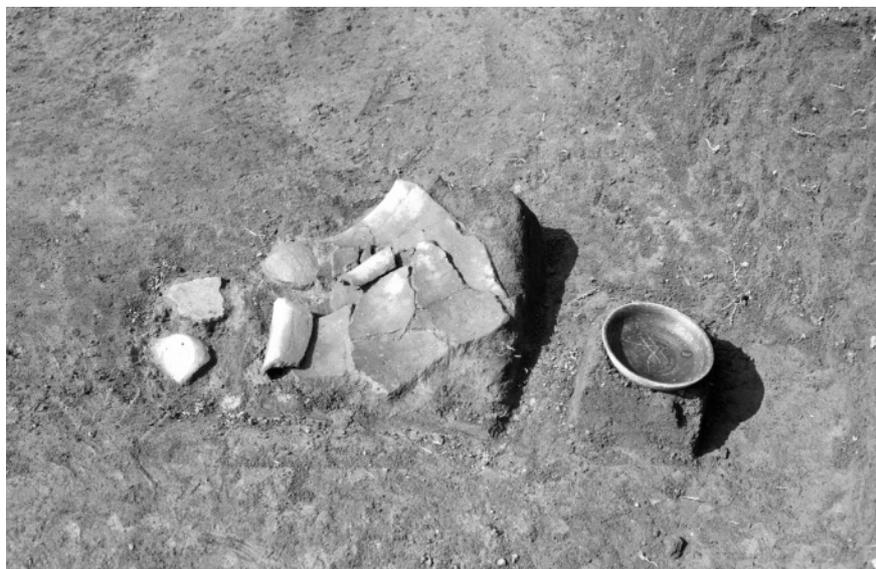


第161号住居跡
完掘状況

第165号住居跡
竈遺物出土狀況



第169号住居跡
遺物出土狀況



第169号住居跡
遺物出土狀況



PL28



第173号住居跡
遺物出土状況



第173号住居跡
竈遺物出土状況

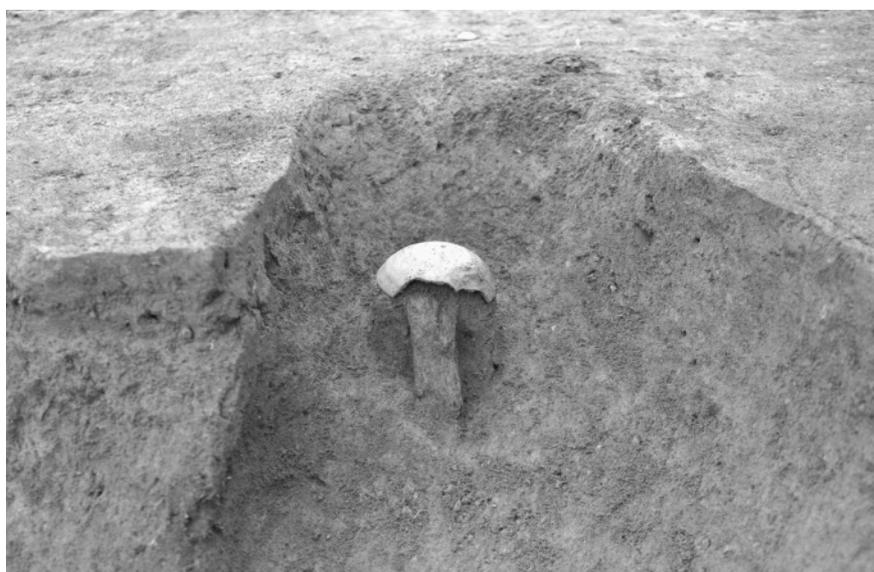


第173号住居跡
完掘状況

第174号住居跡
竈完掘状況



第178号住居跡
竈完掘状況



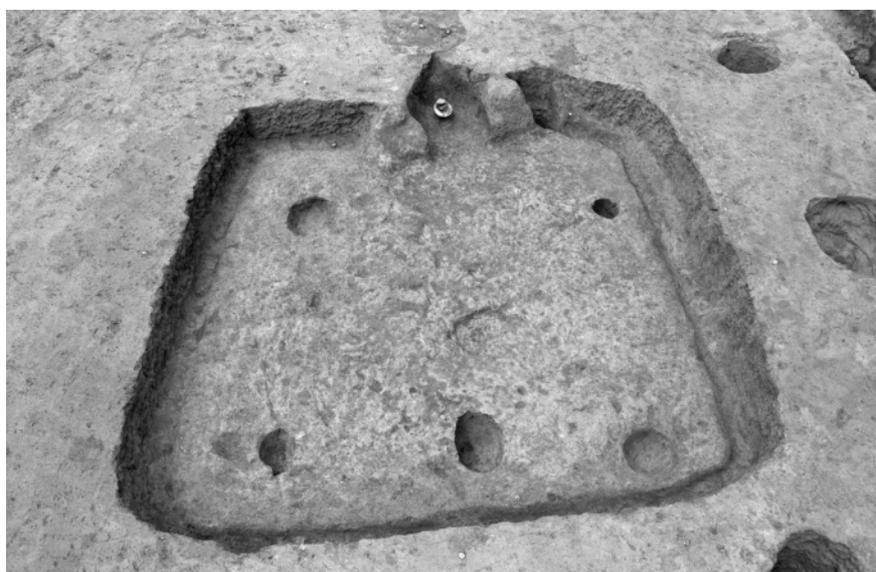
第189号住居跡
完掘状況



PL30



第183号住居跡
竈遺物出土状況



第183号住居跡
完掘状況

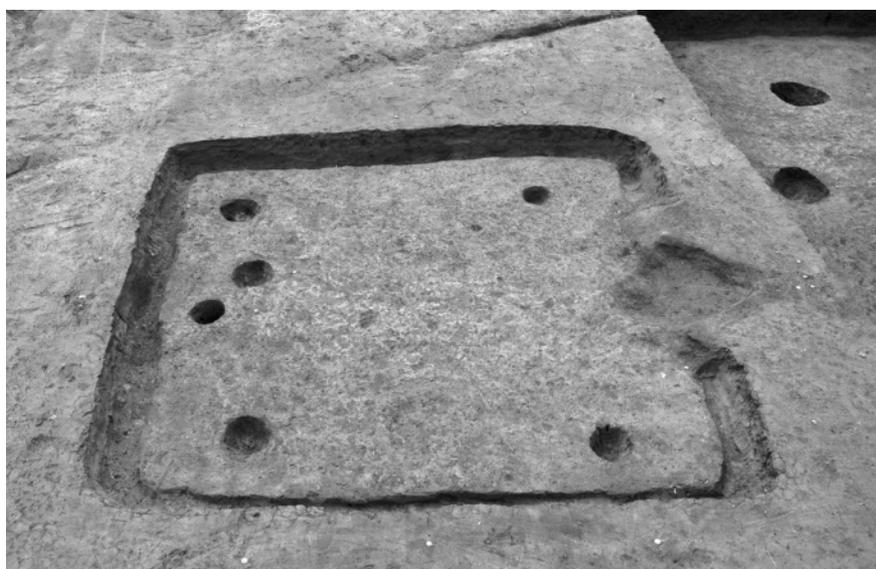


第183号住居跡
竈完掘状況

第186号住居跡
竈遺物出土狀況



第186号住居跡
完掘狀況



第191号住居跡
竈完掘狀況





第2号鍛冶工房跡
遺物出土状況



第2号鍛冶工房跡
炉土層断面

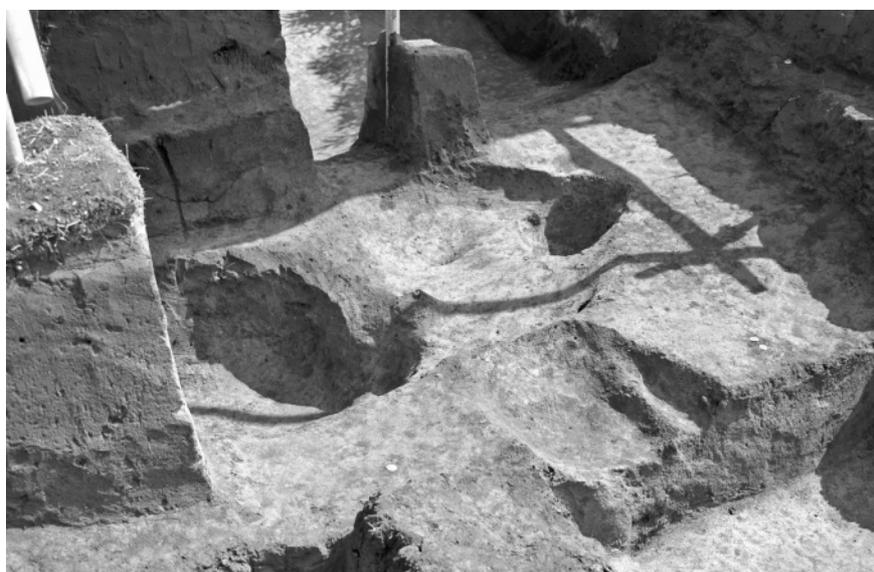


第2号鍛冶工房跡
炉遺物出土状況

第2号鍛冶工房跡
遺物出土状況



第2号鍛冶工房跡
完掘状況



第2号鍛冶工房跡
炉完掘状況



PL34



第46号掘立柱建物跡
完 掘 状 況



第51号掘立柱建物跡
完 掘 状 況



第53号掘立柱建物跡
完 掘 状 況



第27・28号溝跡
完掘状況



第9号井戸跡
完掘状況



第64号掘立柱建物跡
完掘状況





第153·166·170·172号住居跡，第340号土坑出土土器

PL38



第171・179・185号住居跡出土土器



第102・127・185・187号住居跡，第50・52・54号掘立柱建物跡，第257号土坑出土土器

PL40



第129・130・134・135号住居跡出土土器

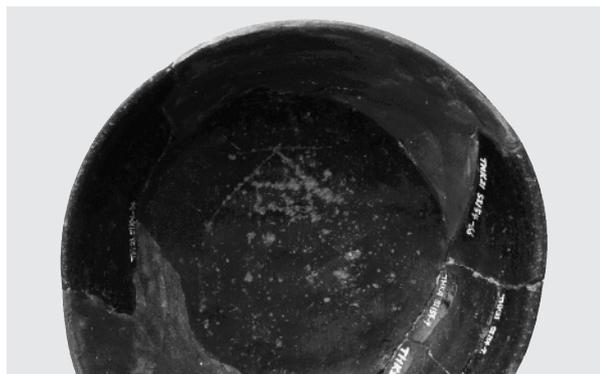


第133・137・141・142号住居跡出土土器

PL42



第146号住居跡出土土器

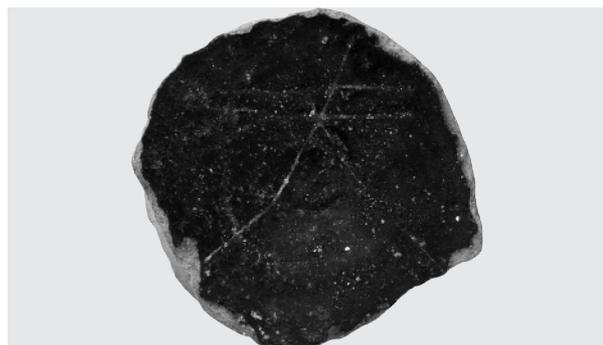


第149・154・157・158・159・161号住居跡出土土器

PL44



第164・165・173・177号住居跡出土土器

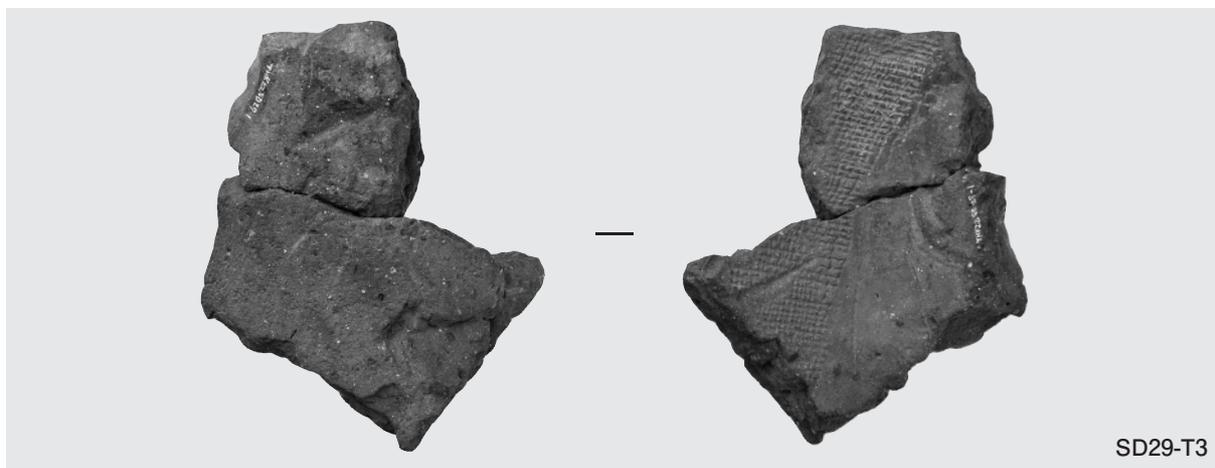
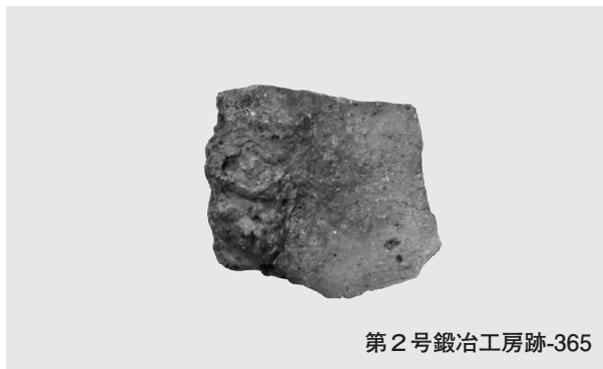
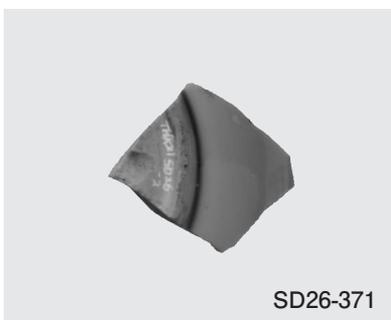


第169号住居跡出土土器

PL46

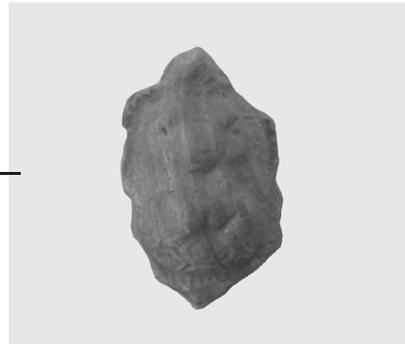


第178・181・183・184・186号住居跡出土土器

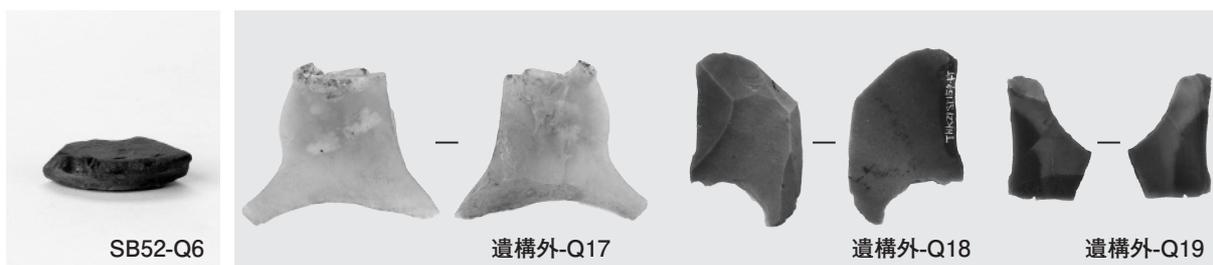


第189・191号住居跡，第2号鍛冶工房跡，第26・29号溝跡，遺構外出土土器，出土瓦

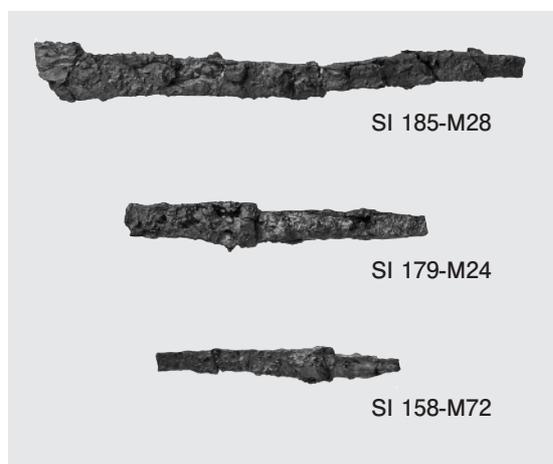
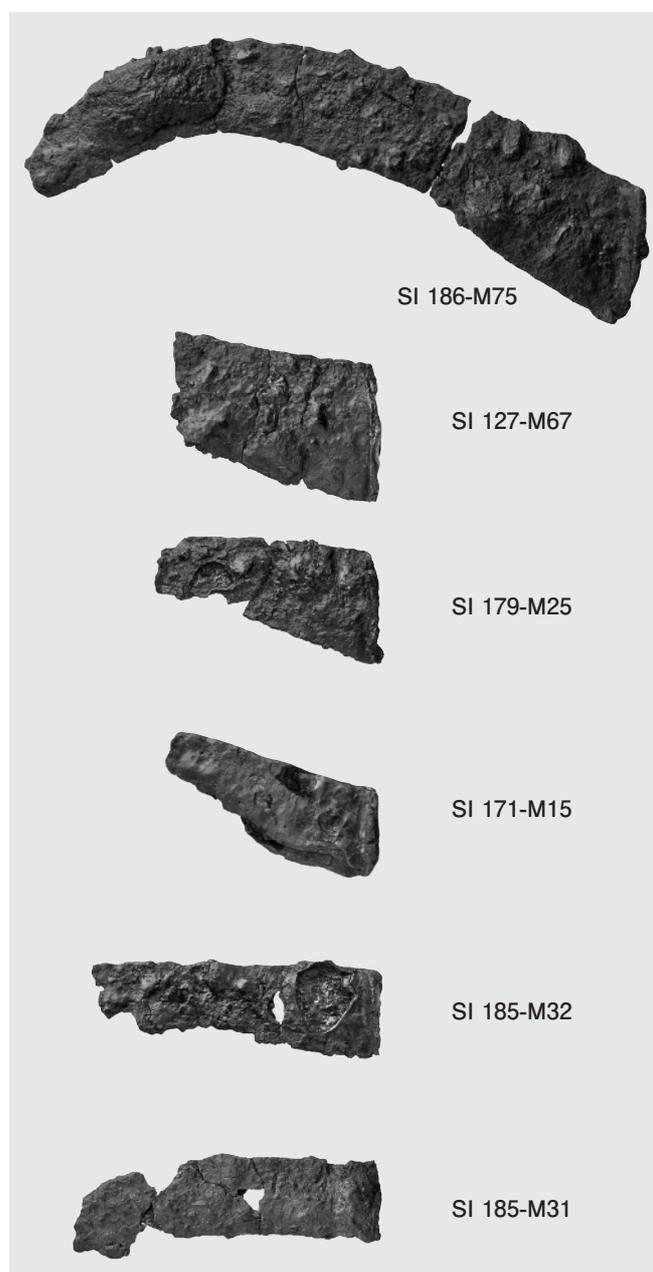
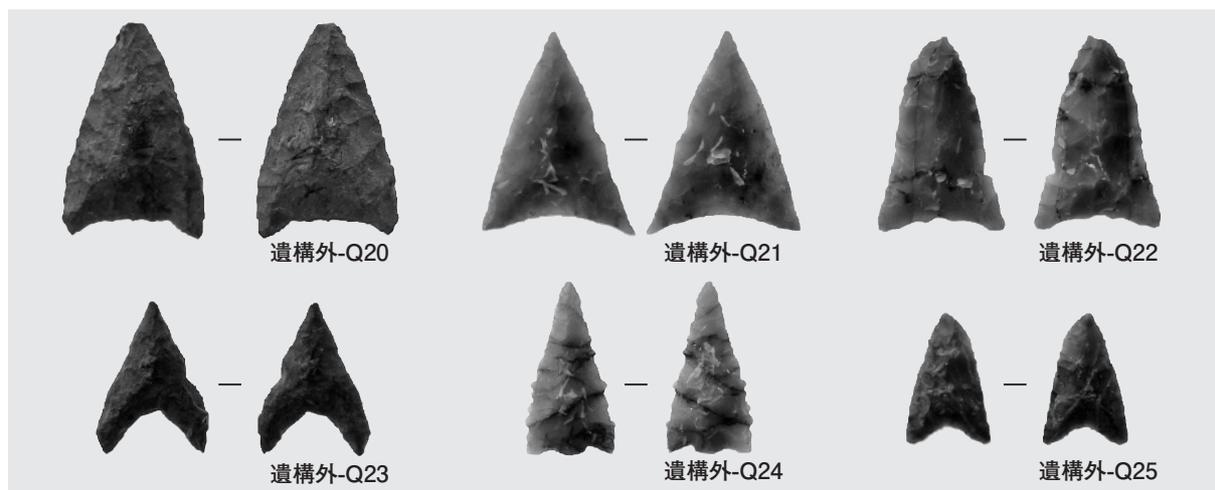
PL48



第132・140・150・171・184・185号住居跡，第251号土坑，遺構外出土土製品



第132・148・155・161・164・169・170・173・179・185号住居跡，第52号掘立柱建物跡，遺構外出土石器



第127・158・171・179・185・186号住居跡，遺構外出土石器，出土鉄製品



第134・140・145・153・154・171・178・185・190号住居跡，第2号鍛冶工房跡，第26号溝跡，遺構外出土鉄製品，出土銅製品



第2号鍛冶工房跡，第251号土坑出土遺物

抄 録

ふりがな	しもひらつかかぶきだいいせき								
書名	下平塚蕪木台遺跡 2								
副書名	葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 363 集								
著者名	齋藤貴史 小林和彦								
編集機関	財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒 310 - 0911 茨城県水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2 TEL 029 - 225 - 6587								
発行日	2012 (平成 24) 年 3 月 16 日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
下平塚蕪木台遺跡	茨城県つくば市 大字下平塚字蕪木 886 番地の 2 ほか	08220 434	36 度 5 分 32 秒	140 度 5 分 35 秒	23 ~ 24 m	20091101 ~ 20100630	3,831 m ²	葛城一体型特定土地区画整理事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
下平塚蕪木台遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡	1 軒	縄文土器, 石器 (搔器・鏃)		第 2 号鍛冶工房跡から多量の椀形鍛冶滓や粒状滓, 鍛造剥片が出土している。それらの規模や形状から精錬から鍛錬段階までの鍛冶が行われていたことが明らかになった。		
		奈良	竪穴住居跡	21 軒	土師器, 須恵器, 土製品 (土玉・支脚), 石器・石製品 (砥石・紡錘車), 金属製品 (刀子・鎌・鋤先・紡錘車・釘)				
		平安	竪穴住居跡	46 軒	土師器, 須恵器, 灰釉陶器 (椀・長頸瓶・浄瓶), 土製品 (支脚), 石器 (砥石), 金属製品 (刀子・鎌・鑿・紡錘車・釘), 鍛冶関連遺物 (鑿・椀形鍛冶滓・粒状滓・鍛造剥片・土製羽口)				
	中世	溝跡	2 条	陶器 (碗・搦鉢), 磁器 (碗)					
その他	時期不明	掘立柱建物跡	8 棟	陶器 (碗), 磁器 (碗), 金属製品 (煙管)					
要約	奈良時代から平安時代にかけての拠点集落として形成された集落跡である。奈良時代においては, 一辺が 7 m ほどの大形住居跡とともに桁行方向が平行あるいは直交するように配置された掘立柱建物跡が見つかり, 「大形住居 + 掘立柱建物」という集落形態の一端を確認した。また, 平安時代においては, 大鍛冶及び小鍛冶をしていた鍛冶工房跡 1 か所を確認した。								

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium 32 (64) ビット 正規版
	編集	Adobe Indesign CS4
	図版作成	Adobe Illustrator CS4
	写真調整	Adobe Photoshop CS4
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 EPSON ES-10000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第363集

下平塚蕪木台遺跡2

葛城一体型特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成24 (2012) 年 3月14日 印刷

平成24 (2012) 年 3月16日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 いばらき印刷株式会社

〒319-1112 那珂郡東海村村松3115-3

TEL 029-282-0370